BIBLIOTHECA
JAPONICA
ŒCONOMIÆ POLITICÆ

VOL. XVII

TŌKIŌ
NIHON KEIZAI SŌSHO
KANKŌKWAI

1915.

CONTENTS
of the seventeeth volume

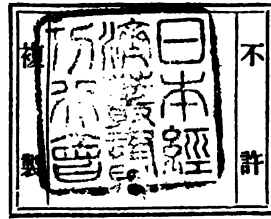
大正四年十月九日印刷
大正四年十月十二日發行

日本經濟叢書 卷十七

非賣品

編者　瀧本誠一

發行者　佐藤卯兵衛
東京市神田區駿河臺鈴木町拾六番地

印刷者　中田鍋三郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　株式會社秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發行所
東京神田區駿河臺鈴木町拾六番地
日本經濟叢書刊行會
電話本局三一八五番
振替口座東京二六八一〇番

理事　高木範之丞
佐藤卯兵衛

宮崎幸麿

小西武治

校

を聊書集候、されば月日に闕守居ざれば夜明れば日暮るとは知ながら、長き日にくれ遲きを待兼、今日の今の日又逢ふ事はならぬとは知りつゝ、一日を惜むこゝろなくして徒に送り、又御主君樣へ忠義を勵候得ば、天の冥感に預り我行末とても宜とは心得ながら、左のみ忠節の聞へも是なく、又父母へは孝行をいたすべきものとは覺へながら、御兩親の仰に順はずして秀たる孝順も盡さず、又日々天地萬物の御撫育を蒙り居候とは心附ながら、一日に一度も廣大之御恩なるやと存じ出す事もすくなく、又家業は己が命を養ふ因と存じながら御買物に御出被レ下候御恩をも思はず、又おのれが分限を辨へ身に應ぜざる望を省べきとは覺悟いたしながら人の上を恨み、やゝもすれば衣食等迄も奢りをきはむる意もおこり、亦陰德を施す時はかならず陽報の來るとは承りながら善心を保つ志も薄く、天の照覽を知らずして惡念を兆し、我身に報いの來る事を恐れず、また生れしものは稚も若きも死ぬるものとは聞ながら、短命なるを見ては驚けども後の世の事心に掛ず、法の道尋ぬる志も疎きは、皆知れたる事を知らざるに異ならんか、既にある人の仰に聞て思はざるは聞ざるがごとく、思ふても行はざるは思はざるが如しと承りしも、今我身の上に思ひ出られ候、畢竟は知れたる事を知らぬ體にて過行こそ、恥かしき事かと被レ存候

獨愼俗話　終

が見向もせずして走りぬ、右之様子を見たる人其後彼人に問けるは、あのごとく打擲に逢ひながら腹もたてず、莞爾として迯給ふはいかなる譯ぞと尋ければ、さればとよ打るゝうちは腹も立ども打れ仕舞ば立腹もなし、元來腹を立るゆへに打れもすれ、立腹やめば打事も止ものなりと答られけるよし、是等は眞の愚にかへられたるとや申べきか、ある歌に

愚さを知らんとてこそ學なれ　賢かれとはたが敎へけん

此歌の意を考ふれば學文は愚かに返らんがために心掛候ものと存られ候、勿論學文と申せばとて四書五經等を學ぶにも限らず、我一體を明らむるを學徳の至るとや申べきと承り候

一　不束に勤仕のいとまくゝ書つゞくりし卷々、既に本末究竟と連續いたすといへども、無學文盲の俗物ゆへ物の奥義をも認る事あたはず、只世渡る中のありふれし事のみ書記し置、偖これを閱するに皆人の知れる事ばかりゆへ、無益の隙を費せし事と併める意よりして我ながら嘲りの志も發候得共、疾々立歸りて思ふに、都て人は知れたる事とまでは口にては言ならぶれども、又行ふ人も稀なるかと我不行跡に引競へ斯は存られ候得ば、責ては其中にも知れたる事を行はんと思ふ心の附れ候便りにもならんかと聞取、法門の端々そこはかとなく書顯し候、勿論鹽辛物を多く食する時は大かたは咽かわき、或は興に乘じ夜深く酒など過すときは、果して翌日氣分快からずと申事は皆知れたる事に候へども、折には右の患を招き候人もあるまじきとも申されず候ゆへ、人の誹謗をもいとはず其知れたる事

捨置、我身を遁れ川候を考見候へば、强に人身の大切なる儀を存ぜざるにても是なく、併ながら其際ばかりにて平日其心掛とてはなく候へば、何卒稀に請難き人身を得たる事を存じ、我身程大切なるものは、是なきと思ひ定候においては、聊も無體に惡行の報來る事は仕出し申さず、人に後指などさゝれ候儀は致さゞる筈と存候、勿論我身大切と存候時は、則人の身迚も違ふ所なく候ゆへ、譬へ家來下人に至る迄も萬事に身を麁末にいたさゞるやうに氣配り致遣し、心を勞せざる樣にいたわり遣はし候こそ、人身の大切なる儀をぞんじたるとや可ㇾ申、然れ共一己〳〵に具はりたる得分と申もの有ㇾ之、無智愚純なるもあり、又は利根發明なるもの是あるゆへ、自から依怙の沙汰も出來申ものに候間、是等の用心肝要と存じ候、又は貧福とても同事にて、律儀正直なる人迚も因緣によりて天よりの備り薄く候へば、貧舗相成間敷とも申されず候ゆへ、敢て是を侮り譏る事是有まじく、既に今川家の制訓にも、正路にして衰ふるを輕んずべからずとの禁是有、惣て他の人を譏るもの是ありとも我は執成いたし、或は憎もの有ㇾ之候共言解き遣し候こそ、人身の大切なる儀を心得たるとも申べけれ、此理を辨へずしては、無理非道の取計ひも出來申まじきとも存じられず、畢竟は父母の御恩を以て不思議に此人身を受得たる事を難ㇾ有思ひ、我體は父母より預り奉りし大切なる靈物と存じ、日夜朝暮忘却いたさゞるやうに心掛たき事と存候

一　過行し跡を振かへり見るに誠に夢のごとく、今に於てとゞまるものとては一ツもなく候得ども、

分限に應ぜざる不足抔申出す意も起り候へ共、形を離れ見候時は外に執着いたすべきものも是なく、畢竟は方寸の家を出ずして我體におぼれ居り候身贔屓ゆへの事と存じ候、然に此體を心の內へ入置とはいかやうなる心持と存候處、本我本心と申ものは天地と同體なる故に始もなく終りもなくして天地之間にてはこれを一理と號、人身にありては性といひ、靈明なる物にして水にも溺れず火にも燒ず刄物にても切れず、しかも一切の善本德本たるによつて、古人も性は善なりと被レ仰たり、最伸廣がる時は大千世界にも滿る、ゆへに聖人は其心を虛にすとも宜ひし、されば本無形無色なるものゆへに明了する事あたはずして、假りに顯れたる此依體に執着し本心を取失ひ候間、此理をあきらめて惡を退け善に歸し、己を忘れたるを則性に率ふとは申よし、是を天の道と稱へ候、ゆへに道は須臾も離れまじく、はなるべきは道にあらずとの御教にて、是則心の內へ體を埋め置の道理と承り候、斯のごとき趣を外典には古への明德を明らかにするとも仰られ、內典には心の外に別の法なしとも導き是あるよしに候へば、能々會得いたすべき事と存じ候

一つくづくと人身の大切なる事を感得いたす暇もなく候ゆへ、日々夜々の行狀おのづから不身持にて、飮食を恣にして色欲に溺れ名利に沉み財寶に意を苦しめ、暫時も身を養ひ心を安ずる處の行ひもしらず、猛き河の流るゝごとくに空しく命の縮まるをも存ぜざるは、我ながらも愚なるかと存候得ども、たゞ今にも火災水難等に逢ひ命危く候時は、假令金銀財寶衣服の類眼の前に充滿これある迚も振

存じ候ゆへ、思ひの外足をも穢し申事もこれあるものにて候、其外眞中のみ歩行んと存じ候時は、御大名方の御供先をも破、或は車など引掛來り候事有之ゆへ、いかやうの過を受間舗とも申されず、是皆此方の愼み是なきより出來候、既に世の人の意を推量いたすに、溜水のごとく濁りたる意の人も是あり、是に近寄ときは墨に交れば黒くなるの理りゆへ、我意までも濁る間舗とも申されず、又御大名方の御供備のごとく、律儀正統にて見識高き人も有、或は車を引出すごとく理不盡に無法なる儀をも申出す人もこれあり候間、此理を以て能々勘辨いたされべく候、何れに氣隨我儘の取計ひいたし候事は、中庸の理に叶ひがたく意の片寄居候失と存られ候ゆへ、天之災をも招き申べき事の様に存じ候へば、何事によらず心の愼み肝要と存候

一　人は五尺の境界を以て體となし形の内へ此體を入置れ候ゆへ、則心を廣くして此身に愛執し玉ふ事も無之よし承りおよび候、譬へて申さば今日の住家のごとく我身を家に住と、又我身へ家を入置との違ひにて、先家を我體に入置時は、いかやうの不自由なる住居にても、起て半疊寐て一疊と足事を知り、寒風暑濕を凌ぎ雨露に濡れざるために、天よりして我々へ御授の住家なりと御恩を存知候時は、いかにも心廣體胖かに候へ共、家に我體を入置時は手狹なるにまかせても色々の不足發り、不勝手なるにつけても他の家を羨むも同前にて、惣じて此體に泥み居候時は種々の惡念萠し、あるひは命銀貪る意も發り、或は衣服を餝る意もおこり、或は美酒厚味を好む心も發り、或は女犯の意も發り、其外

も、餓死したるといふ人も稀なり、或は近きまで絹布にまとひ大勢に冊かれたる人も、頓て貧しき姿となり變り、此比迄賤しき匹夫と見へし人も、忽高祿に登りて人の頭をふまへたるも是有は、皆天命とも申べきや、併ながらかやうの盛衰是あるにつけ、彌我身の愼肝要と存じ候、其譯は士農工商に至るまで己に具たる勤を疎にせず、萬事正直を本として慈悲の心を專らにいたし、身の奢りを省き足る事を知り、日々天地の御育を蒙り居り候儀をありがたく存じ、今日を大切に心得暮し行候時は天の道に叶ひ候間、自然と家も齊身も脩り申べきやと存じ候、然るに我意を恣にして今日の務を怠り家業に實も入れず、意邪にて萬事に驕を究、我身の分限を知らず、美食に倦事なくしていつも不足の思ひに住し、天地の御恵みを忘却いたし候時は、家も治らずして身にも苦患等おほかるべき事と存候、是等は皆天命を知らざる所より發り候邪疑と申ものに候、都て天命を知らざる人は天命を恐れざるゆへ、天命に背き候働いたし候に付、身を亡し家をも滅却いたさせ候間、能々思慮いたさるべく候、死生命有富貴天に有と申事も、此内を出ざる儀と覺え候

一　中庸と申は隻(かたく)よらず片よらぬとの事にて、心の愼かたを眞直にいたし候を申由、然れども只一筋に眞中を行はんと存じ候も、最早片寄の心持ゆへ臨機應變に從ひ、己が方を愼候を中庸とも大道とも申由承り候、譬て申さば往還の眞中を歩まんと存じ、少しも片寄らぬやうに參候處、折節溜水など是ある時は、是非片寄て道の宜方を廻り候を中庸と申かし、されば我慢偏執の人は溜り水も厭はず飛越んと

なども望がごとくなれば、所詮契ふべき儀とも存られず、畢竟は天命を恐ざるの働と覺候、然れば今日の勤方迚も足事を知り、衣食住の三ッを御恵み被ㇾ下候事を難ㇾ有存じ、餘念をとゞめ日々を大切に送り候におゐては、心を穩にして君子は其位に素して行ふといふ道理にも叶ひ、願はずして天の幸をも蒙り可ㇾ申事存候

一 人としては天命と申事を知るべきよし、古人も仰置れ候へば、いかにも心掛べき儀と存じ候、勿論天命の事は筆紙にも書顯しがたく、古人も言葉の下に科有とも御戒有ㇾ之候へば、一己〳〵に於て融得いたすべきよし承りおよび候、然ども其大略を相認候間此意味を以て疾と勘辨いたされ、聊も人欲の私を以て取計ひ致されまじく、先天地わかれしより已來春夏秋冬と移り變りゆくありさま是天命なれば、假令博學多才の人たりとも夏を寒く轉じ、冬を暖に變へ候事は出來いたすまじく候、しかれば其内に孕れたる月々日々の千變萬化は皆天命の成業にして、折にふれ時に隨ひては悦も來り悲も來り、或は不慮の災難にも逢ひ思ひ寄らざる福をも儲け、或は計られずも病患をも受、九死一生と覺悟せしも全快にも趣、或は兼て企て置て十が九ッまで手に入たると思ひしも破談におよび、又は此事成就いたしては我勝手宜しからずと存たる儀も叶ひ、其外今日の行業は皆天命にして私の力にあらず、去るに依て智惠才能是ある迚も富貴の身ともならず、假令愚鈍なりといへども貧賤にも暮さず、假令金銀藏に充滿たりとも、盡る期有ㇾ之時は滅却せずといふ事もなく、又一錢の手當もなく一衣の貯へ是なき迚

と覺候、勿論足事を知れと申教は古より傳り是あるといへども、其意味を存ぜず候ゆへ自己が身贔屓に引れて、折には不足の意も發り亦は人を恨みなどいたし候へば、美しく其理を辨へて惡念を退け候樣にいたし度候、偖足る事を知るとはいかやうの六ヶ舗事かと存候處、只今日の御恩を存じ疾と思ひ取候までと承り候、尤四恩を始衣食住の理り前篇にも豫認置候得共、今日の勤方とは事替り候樣に存られ候人も是あるべきや、總じて今日の行狀は天地と一體に候得共、人欲の私に引れ不足の思ひに住し、天地と我と懸隔の間をなし、今日の御恩の廣大なる事をも存出さず候ゆへ、足事を知る道理をも忘却致候、されば天地の御恵かたを申さば、山川海陸の萬物は事繁きゆへ省略いたし候得共、まづ野さい等の品にて纔に其あらましを認るに、春の陽氣兆時は薺の薹・芹・土筆・獨活・蕨の類を始として生出次第に暖氣重り候へば、三月大根・美津葉・芹・菠薐草・蓮の若根など出候內に夏の陽氣恵み來り笋・茄子・胡瓜・淺瓜の類生出て、忽暑も盛んに成、小角豆・茗荷の子・眞桑瓜など出候かと存候處、旣に秋の陰氣催し西瓜・冬瓜・隱元豆・芋莖(ずいき)の類も出、漸々冷氣に至る頃初茸・松茸・椎茸・松露など生出て、彌冬の陰氣强くなり候へば莖菜・蕪菜・大根・葱の類ひ生出候を考見候に、四時之運行少しも御油斷無之事と存られ候、さすれば此御恩の程を思惟いたし候時は、是にて事足り申べき儀と承り候、然るに貧乏の身を富貴とならん事を願ふか、乃至不相應の望みを叶へんと思ふかの類ひ、時節の至らざるを辨ずして足事を知らざるがいたす所故、譬ば秋の旬に菫・蒲公・苣・杉菜等を好み、春の旬に桃・林檎・柹・葡萄

れず、御衣を始供御に至る迄も麁末なるを厭はせ玉はず、只々萬民を撫恤せたまふ、雖ヽ有も下の貧しきを叡覧ましヽて三年の貢を御ゆるしあらせられしゆへ、民百姓は喜悦の眉を披らき御代も豊に國も治りければ、天も感應ありて里に生ずる處の五穀を始萬物豊作して原野に充滿し、海より揚る所の魚肉は岡陸に山をなして、誠に八島の外までも立波もなく、大君の御恩を尊敬し奉らざるはこれなきよし承り傳へ候、是全人は一箇の小天地なれば人歡べば天も歡び、人愁れば天も愁るのためしにて、世の吉凶は人の上にあるべき事に存られ候、則天に口なし人をもつて言わしむるとの儀、豈違ふ所あるまじくや、然ば家を治る道とてもいさゝか是に替る事なく、己を約にして我より以下の人に萬事苦患の出來申さぬやうに世話いたし遣し、下の悦びを我が樂といたし候志深く候時は、自ら家も修り申べきや、斯のごとく身修り家齊ひ候時は天の冥慮に相叶ひ、自然と家業も繁榮いたし相續恙なかるべき事に候、是則萬物豊熟して萬民太平を壽ぐも同前たるべきかと存候、然時は後輩の人は身を勞し心を苦しめ候儀もなく、今日を滯なく相務候事前輩の人の取計ひ宜ゆへと、其恩を存じ敬ひの心を發し疎略之儀夢々是あるまじく、上下安託（おしなべ）て今日の御恩を存るゆへに我身も修る事と覺候間、是等の處に會得違ひ是なきやうにいたし度物に候

一　萬の事に不足など申出す時は際限のなきものにて候、いまだ時節の至らざるを待ずして己が勝手あしきより發るか、或は身分に應ぜざる望を達せんと思ふ邪欲より起すか、いづれ足事を知らざるゆへ

人に競れば氣根も衰へ才智も至て劣り候かと被ㇾ存候、勿論當代とても上根上智の人も稀にはこれあるべく候へども、往昔の人は智恵も秀、根氣も勝れたる證據には、年來古鹿老猿の住馴し深山を踏み平げ、舊松古杉を伐ひらき靈物靈社を造立し、或は放逸邪見の田夫野人を教導き、今におゐて古跡舊地を殘し玉ふ、考ふれば豈おとりたりと申べきや、其外書籍を始小道具器物類とても、古代を慕ひ旅事見聞する處なれば、いづれ古來より傳はる事は捨がたく候、さるに依て醫藥の法なども作意を加へず、灸點等も古人よりいたし來るを用ひ候時は、過これなきよし承り及び候、然れば御先代より御定在ㇾ之所の御掟等、淺才の分際を以て差綺ふべき筋にあらず、されば御家法之儀は御建方を亂さず、萬事先規よりの仕來りを相守り、聊我意の新法をまじへざるにおゐては、家も修り長久の榮いたすべき事と存候

一國を治家を修るも其理は一にして、更に隔はこれなきよし、古人も御教有ㇾ之といへども其行ふ事殆易からず、然れども身を修るを本とするよし承り及び候へば、聊も人に指構ふ筋是あるまじく、都て人を賴にいたし候ゆへ我意を募り、或は怒りあるひは恨候得ども、只々己を愼み居候時は恨むべき人もなく怒るべき目當も是なき筈に候、されば我々ごときの下民たりとも一家の司となり候時は、己より以下の人をば一子のごとく憐み、萬事不足の思ひに任せざるやうに勞り遣し、心に悦を懷候やうに仕向候時は、仁德に伏せずといふ事是あるまじく、さすれば自然と家も修り可ㇾ申よしに候、既に往昔仁德天皇と申奉る聖王は、一天の御主ながらも皇居は零落して雨漏といへども叡慮にもかけさせら

るは、陰陽二柱の御神の末にして、我々を守護し玉ふゆへに、商内神は商賣繁昌を守らしめ玉ふ、此御影に依て家内大勢相續いたし候に付、則冥加を存ずる爲に惠美須講と號けて御神酒供物を備へ、或は一家親屬知緣を招き迎ひて饗應いたし候も、其恩德を謝す事に候へば、いかにも心の愼を肝要といたし、人身の大切なる儀を忘れず、飮食等も程を存じ、家內禮を亂さずして機嫌克祝ひ申べき事かと存候、然る時は神も納受ましまして、彌家內安全の基たるべきと承り候

一　鷄を飼ふは曉を知らんがため、犬を飼ふは門戶を守らせ盜賊の患を除かんが爲なり、されば人の子としては孝行を勤、人の臣としては忠義を勵むを以て人體を受たる所の役目とす、然るに人として忠孝の道も知らずしては、鷄の曉を告ず犬の門戶を守らざらんよりもおとれるかと存られ候、勿論人は萬物の長たるゆへに教を用ひ候間、君臣父子兄弟の道ある事を辨へ、我等ことの愚昧も漸々實情を盡す志も發り、身も修り家も齊ふ事に候へば、人は唯道を知れる人に進より候て、其教のごとく學び候を專要に存じ候、然れども意の僻める人は善人をば窮屈と思ひむつかしきとて嫌ひ、又浮世の雜談或ひは遊興の噺などいたす、惡き人をば己が氣に叶ひたるに任せ聖賢のごとくに存じ馴親しみ、終に我身までも亡す事も有之ものに候ゆへ、假令己を導引人是あるとても其教の善惡邪正を勘辨いたし、我身の始末よろしき方に基き、意を誠にいたし人たる道に叶ひ候樣に心掛度事と存候

一　人每に我愚なると存ずることはなく、己ほど利根發明なるものは是なきやうに存居候處、上代の

理を分別被ㇾ致候て、大學の敎のごとく意誠有時は其志正しく、其こゝろ正しき時は其身修り、その身修る時は其家齊ふこと疑ひ有間舖候へば、只々實心を以被ㇾ相務ㇾ候事肝要と存じ候

一　商家に於て商內神と尊敬し惠美須を祭る事、其譯も心得候て神の御心にも叶ひ候やうにいたさば速に感應も有ㇾ之、商內も繁昌いたし家も富榮可ㇾ申由承及候、勿論蛭子の神と申とは異にして、惠美須の神と唱へ申は岩に打乘り釣竿を垂れ、終日魚のかゝるを樂しみ飽玉ふ事なきゆへに、商ひ神と祝ひ候よし、其ごとくまづ商人の見世には則岩の上に等しく、諸代呂物は釣竿に譬へ、日每に御買人のかかるを相待、己々が商賣に飽事なく餘念をとゞめ、一向家業に打入り候を商ひとは申候、然るを商人の家に住ながら商內の道に疎きゆへ、自然と精も入らず、或は御買人の御出之節とても尻輕にもなく、餘事に意を奪れ先樣への御挨拶も身に染ず、假令賣逃し候て商內高減じたりとも、左のみ驚く氣色もなくして、只朝夕神前に向ひ商內繁昌を祈たり迚も、いかなる神か守り玉ふべきや、去るに依て「心だに誠の道に叶ひなば、祈らずとても神や守らん」との御神詠も候へば、此理りを感じ日々釣を垂候心持を忘れず、商賣に打入り居候時は、神慮にも相叶ひ榮久の相續いたすべき事に候、偖又惠美須講と申儀もこの神を祭り祝ふとのやうに存知、旣に其の日にも至りぬれば意を放蕩に持候ても、祝ひ日なれば苦しからざる樣に心得たる族も有間舖とも存じられず、是おほきなる僻事かと存候、先惠美須講に限らず、總じて神を祭り祝ふことは知恩報德のためと承り候、其詞は都て天地の間に顯れ出玉ふ神と奉

愚人として及ぶべきとも存じられず候へども、狂人の眞似とて髪を亂し大道を走り歩行時は、則狂人也、出家の眞似とて剃髪染衣する時は、是又出家ならん、されば聖賢の道とても其眞似いたす時至らば、則大人としも申べきかと存じ候

一 世に因果と申事は、我身に惡鋪事の出來り候を因果とのみ心得居候へども、世の中の有様因果にはづれ候事一ッとして是なく、先因といふはたねの儀、果といふはこのみと申事にて、譬て申さば菜大根の種など土に蒔候を因と號け、程なく二葉を出し候は其緣に引るゝ處ゆへ、是因果と申、夫より葉となり大根と生じ候を果の開と申て因果連續の所に候、依レ之日輪の東天より出たまふは因にして、西天に入玉ふを果と申、又春毎に花の咲は因にして、頓て散るは果なり、我々迚も生るゝといふ因によつて遲速異なれ共、終に死するといふ果あり、尤無常迅速の使は時を待ず老少を撰ばざれば、若年の人たりとも死せずといふ事なく、亦百歳の形體を保つ人も稀也、然ば何をいつとも期しがたき儀は我々が命ゆへ、善因これなく候はゞ後世に至り善果の開と申事もはかり難く候へども、惡を懲し善に進みて慈悲の心を本といたし可レ申事と存候、勿論今日のうへ迚も御奉公に精も入らず、或は不法の勤方いたし候因是ある時は無レ據御暇被二仰付一候ゆへ、其身も難澁いたし候惡果開き候、然るを御奉公に出精いたし候因是有時は、其因緣を以て年々御惠み下し置れ、年數の功に隨ひて別宅等結構に仰付られ候ゆへ、其善果ひらけ候と申儀には有レ之間鋪哉、さすれば善因には善果開き、惡因には惡果來り候道

を飲といへども、甘き辛きの差別もなく、呑仕舞候へば眠氣來れば寐、眼覺れば起、或は琴三味線笛太鼓などの音を聞ても、始て音の聞へ候までにて面白きといふ念もなく、唯腹ふくれ居候へば機嫌よくして外に餘念は無之所、段々朔月相立成長いたすに隨ひ種々の念發りて、美を好み麁を嫌らひ、善を撰惡を捨るとは申ながら、日々夜々に思ふ事爲す事貪欲の意より考へ候業ゆへ、爲事惡にあらずといふことなく候へども、年々の劫に濁りこゝろ暗くなり居り、我惡舖と申事は見へ兼候ゆへ、邂逅に他の人より我惡敷よし被申候得ば、いはれなき事にても申ごとく思ひて怒腹立、我越度なきよしを申開いたし候は、全我身に愛着いたし居り、我のみ善ものと心得居候ゆへの事なれば、是を我慢の人と號け候、去るに依て我身に差たる善事も是なきに、他の人より能と譽られ候へば心嬉しく歡び候は、我惡の見へざるしるしに候、元來褒らるは貶るゝの基ひにて、過たるは及ざるの道理ゆへ、古人も仁を譽るは言葉の下に科有と被申候、斯のごとく人欲の私にひかれ我を募居候に付、天の命なる事をも存じ出さず候ゆへ、大人は赤子の心を失はずとこそ被仰候得ば、生れ子に念と申ものこれなき間、念のなき處には我といふものはなく候、我なき時は此體天が下の靈に候ゆへ、一切天命なる事を明らめ、商人は商內に打入り、奉公人は御奉公に精を出し、餘へ心を散らさずして我身に執着の念なく候はゞ、是を赤子の心とも、又は君子の行狀とも申べきや、然れとも心明らか成とは聖賢の[illegible]我等ごときの[illegible]

一孟子離婁章句の下に大人は其赤子の心を失はざる者なりと申事の候は、先大人とは形體の大ひなる人をさして申儀には無ㇾ之、貴人高位の御方にも限らず、假令匹夫下賤の人たりとも、心の明らかなる仁を大人とも君子とも申、又意の暗らきとは如何様の事かと申せば、第一我體は我物と心得、物の理に明らかならずして式法を守らず、强欲に耽りて身に備はらざる財寶を望み、分限に應ぜざる衣食をこのみ、非道を以人を苦しめ情をしらず、適々善心かと思へば頓て惡心と變りてうらみをなし候事抔、みなこれ意の暗らきより發り申事に候、又心の明らかなるとは如何成譯ぞと存候得ば、我體は父母の赤白の淫より出生いたすとのみ存じ候處、人は天が下の靈物と申て、天より命ぜられて母の胎内に授りたる身なれば、此體は我ものにして我物にあらざる事を明らめ、萬事天命に任せ五常の道を守り、富貴を羨まず貧賤を恐れず、古人の言葉のごとく麁食を喰らひ、水を飲、肘を屈て枕とし、樂其中に有といふ心を以て足る事を知りて今日を送り、邪見放逸の志なく一切の諸人を兄弟のごとくに思ひて、過たるは及ばざるの理を辨へ、何事によらず中庸を用ひ候こそ、誠に心の明らかなる所より出候行狀にて、君子は必其獨を愼と申べく候、扨又赤子のこゝろと申は生れ子の心と申事に候、然るに我々母の胎内より出生いたし候砌、見事なる衣服等御着せ被ㇾ下候得共、美しきとて悦び候念もなく、亦襤褸に帖まれ候ても汙穢と思ふ念もなく、炎暑の節も暑とも存ぜず、嚴寒の折からも寒とも思はず、母の懐に抱かれ居ながらも、我母ゆへ覺知るべきといふ念も發らず、假令火の中水の中へ投込れ候迚も命を惜

人もすくなからず候へば、平日の養生に超べき儀有之まじきや、勿論少々の外邪抔は沐浴いたさず、魚肉を禁、冷なる物を食せず、粥等暖きものか、又は悪寒ある時は衣服多く着し、食事あたゝかにして發表いだし候へば、是以少々の邪氣は拂ひ申べきものか、尤服薬いたし候とも的中の薬は早速に驗これあるものに候間、相應不相應を自分と考く一兩日も服薬いたし、其功無之候はゞ申達し轉薬いたさるべく候、薬は病ひにあたりて病根を治し候ゆへ薬と號け候、然るに病症に不應して敵對候時は、毒と變じて生涯身の内に於て災をなし、病ひ增長して却て持病となり候、勿論服薬には好嫌在之ものにて、薬好なる人は未病の發らざる用心の爲とて服薬いたす抔と申人も儘有之候へども、必病ひの氣無之節龜相に服薬すべき物にては無之、相煩候砌は良醫を撰んで服薬頂戴すべき事に候、偖又針鍼は急難を救ふものに候へ共、日數を打候時は内に冷を催し、又は氣を減し候ものゆへ、針治請候節は其考あるべき事に候、將又灸治は内に陽をまし候ものゆへ、折々いたし候時は風寒暑濕を退け候間、四季に懈怠いたされまじく候、然れ共熱等有之か、氣分勝れざる節は忌べきよしに候、是迄數多見聞いたし候處醫案の違ひ是あるや、亦は薬力の及ざるや、天なるかな命なるや、命を縮めし人も頗有之、誠に定まれる壽齡とは申ながら甚に残り多、畢竟は我身の大切なるに任せ斯のごとくの愚案をも認候へども、讀人の意にまかせらるべき事に候

へ、酒は百藥の長と申て氣血をめぐらし暑寒を防候事諸藥に勝れ候得共、數盃に及ひ候時は意狂ひ亂れ命の縮まる事をも厭はず、我身の大切成事をも思ひ出す事なく、本心を煩し仁義も取失ひ恥辱をも存ぜざる物に候ゆへ、古よりも若年の人は其分量を辨へず候ゆへ、是を禁しめ置れ候、元來酒は陽火を主どる物ゆへ、過酒いたし致酩酊候ときは土の潤ひを燒、一體土乾候ゆへ顏色青ざめ又は瘦候人も有之、尤無病の人は却て土に相應してこやしとなり、肥滿致され候人も有之候得共、是以平日より用心なき時は、老後に至り病難を請候事、十に八九は見聞いたし居候、乍併我々共迚も醫療之道は存ぜず候ゆへ、定て相違之儀ども是あるべき哉に候へども、何れ銘々請がたき人身を請、生れがたき男子と生れ候儀を難有存じ、我身大切なる事を感得いたし候におゐては、此體土成事を明らめ飮食の溫熱寒冷を考へ、土のこやしに過不及なきやうに常々身養生いたし候時は、神佛の加護をまたずして延命息災ならん事疑ひあるまじく候、且は自然と忠孝の道理にも叶ひ申べきやと存じ候

一 銘々大切なる人身に候得ば、病氣之節は醫療を加へられ服藥頂戴いたし候事に候、然るに藥と申ものは、往昔神農と申聖人出給ひ、百種の草を嚙分られしより始り、次第に相承して後世に至りて數百品の藥種出來いたし、病に應じて是を與ふるといへども、元來木の皮草の根を製法したる物ゆへ、平日是を食とする事なく候、尤醫の道は大切なる人の病苦を救ふ事ゆへ至て仁術にして、古への聖賢は人の五臟六腑を掌の上に見るがごとくにて候、病の症を見屆ヶ藥を施したまふ、當時の良醫方迚も是

にして、殊に御當地は恐多くも國君之御居城にましませば難ㇾ有も繁花の土地ゆへ、日本國中の名産を始として美酒佳肴等の運送夥敷、随てかやうの御店に相勤候故、折にふれ時に依て珍味珍膳等御戴せ被ㇾ下候に付、全體土に應じ候てはこやし過候を其分量なく飽迄飲食いたし候時は、身弱き人又は幼年にて五臟整はざる人は、脾胃虚して即時に病ひを生じ、或は溜飲となつて身を痛め、或は肥まんすべき人も却て痩候て酒毒食毒に疾瘡を生じ、又は身強き人も老年におよんで中風水腫等の病を生じ候事も粗有ㇾ之ものゆへ、是等の患を除かんといたし候には平生の用心にこれ有べき儀と存候、既に邊鄙邊土にては朝夕麁食を以命を養ひ耕作等に身を平懐(こなし)候ゆへ、自然と無病にして長壽の人々多く候、然に御當地は武藏野の廣き御惠の御深厚に候ゆへ、難ㇾ有も明暮白米を食事に戴き魚物を菜となし、或は酒を呑其上身を平懐(こなす)事すくなき間、自ら病ひを生じ身にも苦痛出來候、是全土のこやし過候ゆへ土の性氣強くして、却て萬物を生育する事能はず、草木枝葉ともに枯損するの道理に候ゆへ、自分と天命をも縮め候て短命を祈る理りに相聞へ候、別して春の旬に生ずる物を冬の内にもやしと申て無理に芽を出させ、秋の季に生るものを夏の内に作り出し候を、初物と號して賞翫いたし[illegible]時候にあらざる品、或は天の性氣を請ずして出た[illegible]毒在ㇾ之身の害となるよし[illegible]間、其旬に[illegible]能はざる物は食すまじきとの事に候、將又酒と申物は、米の正味をしぼり[illegible]人も戒め[illegible]氣強き物に[illegible]

腎之水減候ゆへ自ら火高ぶり候、火勢盛なる時は土乾き潤ひ是なきゆへ、金も生ぜずして木も枯れ候道理に候、尤男女交合の道は天地開闢の氣を主どる所にして、子孫相續の榮ん爲なり、さるによつて七去の女の法にも、子なき女は離縁すべきよし戒しめ有レ之候、然るを我愛念にひかれ猥りに邪淫を犯し候事天地の道にはづれ居候間、平日心掛有たきは五行相生相尅の理を辨へ身の養生肝要と存じ候、相生とは木より火を生じ、火より土を生じ、土より金を生じ、金より水を生じ、水より木を生じ申事に候、然れば水土の二ツ衰候ては虚實循環しがたきゆへ、此儀分別いたし度ものに候、偖又此體は五行の集り物に候へども、一體は土を主り候ゆへ、則此皮肉は皆土なり、夫ゆへ命終之砌燒ば灰となり埋ば土と歸り候、然るに土と申物は動靜に依て可否の違ひ有レ之候、其譯は往還之土はうごかす事無レ之候ゆへ、米穀野菜等植付候共實のる事不レ能、又田畠の土は數日鋤鍬を以穿起し、其上こやし等いたし候ゆへ、萬物生長して能豐實(みのり)候、此身迚も其ごとく動働いたさず候ては、第一食しもたれ氣を塞ぎ胸つかへ、又は睡眠を出し病を生じ候、既に貝原先生も食後三百足宛歩き候こそ、養生の第一と記し置れ候、まめやかに立働いたし、假令食後睡眠等出候共轉寐などいたさず候時は、自然と氣血循環いたし此身も健に病を生ぜざるよしに候、されば日輪の朝には東の空より出させられ、夕には西の雲に爲レ入たまひて、日毎に休期のなきは人身の立働いたし候鏡にして、陰陽循環の印に候、勿論人は一箇の小天地なれば天地と同根の行狀に是なくては、其身に病難も來り長壽も保がたきよしに候、且又土にこやし致さ

もすくなきや、凡病は四百四病と申せども多分内七情外六淫より發り候、先六淫と申は風寒暑濕燥火とて、春夏秋冬の四季の時候によつて病ひを生じ候得共、身中實情なる人は邪氣の受かた淺候ゆへ、左のみ煩はしき事もなく取臥候程の儀も是有間敷や、亦身弱く虚損ある人は邪氣深入いたし候ゆへ、時疫傷寒其外色々と變病して、終には醫藥の詮もなく大切の命を失ひ候事も出來いたし候、是全外六淫にうたれ居候故と存候、偖内七情と申は喜怒哀樂悲恐驚なり、喜は歡事、怒はいかる事、哀はあはれなる事、樂はたのしみの事、悲はかなしむ事、恐はおそるゝ事、驚はおどろく事なり、尤喜怒憂思と申時は、憂はうれふる、思はおもふなり、此七情は心・肝・肺・脾・腎の五臟に備り候ものゆへ、中々止め候事迚は相成がたく、殊に世の中のありさま是に離れ候ては、五常の道に外れ候ゆへ、人の悦を見ては倶に悦び、人の悲しみを見ては倶にかなしむこそ今日の道に候へば、片時も行はずしては人倫の交り出來がたく候、然ば此七情に深く執着いたし候ゆへ、愚痴の心發り、色欲に耽り、或は嗔恚をもやし、人身の大切なる事をも存出さず、五臟の[illegible]をも打忘れ候事に候、尤肝の臟といふは春を主どりて木なり、心の臟は夏を主どりて火なり、脾の臟といふは四季の土用を司どりて土なり、肺の臟といふは秋を主どりて金なり、腎の臟といふは冬を主どりて水なり、此五行を内七情に傷らるゝによりて、過不及出來して病[illegible]症となり候、これによつて我身大切と存候はゞ、第一慎べきは色道なり、則喜怒哀樂の心發り候も、元來色欲に愛着するゆへなり、勿論壯年の比元氣盛なるに任せ無益の陰房を犯し候時は、虚弱の人は

我壹人が爲に日用を辨じ自由を足させ被レ下候御恩之程を存候へば、燈心一筋附木壹枚にても麁抹に可レ致筈は無レ之、都て衆生の御恩と申て一切のもの事一ッとして洩る事なく候へば、假令卑賤の手業或は厠屋の掃除人たり共、天より命ぜらるゝ所の御役人にて候ゆへ、あだには存じられず候、夫は如何ぞなれば兩便の掃除等自身と取始末いたし、二三里の程も我と持運び捨參るべき事に候はゞ、嘸々迷惑成儀と存候處、自分すら忌嫌ひ候糞土を、先方より金銀を出し態々と掃除いたし呉られ候を、折惡舗抔とて惡口等申儀放逸無慙の振舞とも申べきや、右四恩の趣擧て算へがたく、秋の一葉の露ばかりを認候へ共、何れ天地日月の御恩澤にあらずして、何一品にても出生不レ致といふ事無レ之候得ば、たとへ鼻紙壹枚莨菪一服たりとも御恩の程を存じ出し大切にいたし度事に候

一　人體を請て此世界に出生いたし候事は至て稀なる事にして、三千年に壹度花咲優曇華にも譬在レ之、殊に其上男子に生を感じ候事、古人は三樂の中の一ッと欽ばれて、一入大切に被二心掛一候よしに候得共、我々共此人身を請し事左程に大切と存候儀是なきは恐恥べき事に候、然に生得無病にして身强人あり、又は柔弱にて病人なる人ありといへども、都て人體は同じ事と心得、身弱き人など其生質虚性なる事をしらずして、人の食する程のものを食し、人の飲程の物は呑が能と思ひ、身の强弱を辨へざる人在レ之ゆへ、古への人は友とするに可否ある事を記し置れ候、中に猛く勇める人、病なき身强き人、酒を好む人など友とすまじきよし制せられ候へば、能々分別可レ致事とぞんじ候、尤いづれ病の氣なき人

掛又六を掛、其上小判壹兩に付何本何歩替と申刋莚にて割候て代銀を定仕切金相渡し、夫より川並の人抔かゝりて林小屋に積上置、我人の望に任せ賣捌異られ、或は人の肩に載又は車に積運送致し、おのれ〳〵の方へ引取候所、地所無之者には富貴なる人大金を出し地面を調へ置、間口奥行とも好み隨ひて貸異られ候間、物數奇に任せて普請いたし候へども、自身と家建いたし候事叶はさる者には借家を建置れ候ゆへ、身分相應之住居をかり請、風雨霜雪を厭ひ候事、畢竟は番匠之大かたならぬ工を以て造り立、壁塗の骨折より屋根の柿葺(こけら)・置石迄の辛勞、幷に戸障子等の建具搭舖壁の刺方に至る迄、我我壹人が[illegible]人の粉骨碎身[illegible]何程[illegible]しがたく候、衣食住

大略[illegible]并日用の金銀家財雜物をはじめ、一切萬物夫々の出所をかんがへれば、其種々の[illegible]らへども諸商人の業体夫々より其役々を蒙り、艱難辛苦して其品々に成就なし、

前ともづうとも申て身打透徹り候様になれば、又外の籠に拾ひ分棚へ上げ候て、一日程は二便夥舗いたし候、夫よりまぶしを懸くると申て桑の枝・豆の殻・麥藁のるいを立置候と、其間々へとり繭を作り其蟲はまゆの中に納り候、併ながら天氣能ときは進候へども時候不順之節は進兼候ゆへ、中には蛹蛆となるも在レ之間是を不作と申候、尤繭をかきとり日輪の光耀にて干固め置絲に取候節は、夫を鍋に入焚候て箸にてかき廻し候得ば、糸口出候を四五本程宛立候て壹筋といたし枠に移し候所、上繭は性合あしく蒸絲(しけ)となり中よりして生絲出候を不レ殘繰立、篗の儘にて干乾し壹管宛入絲して把となし、其所の市日に持出賣買いたし候へば、爲レ登絲師買取荷造りして箇になし、驛路の道程を繼馬を以て京都に爲レ登、絲問屋の方へ送りぬれば絲屋町中買の許へ人を走て荷捌いたし、夫より西陣織屋の人に賣渡候處、絲の太細を見分小篗に繰返し、小節を拔取口を合せ機に卷て生絹に織立、仕入店に持參して賣代なし候へば、夫より練り屋へ遣し練上來り候を、又染屋に渡して染立地節を取疊付、賣物には花を餝るなれば化粧絲など付候て櫃に詰、飛脚屋に賴遣し候へば莚包にして、宰領人附添百有餘里の道も遠きとせず、山坂の勞を厭はずして御當地へ到着之上、吳服店に贈り屆け候へば、我々一人が凉暖を凌候衣服を貯へ置れ、其外禮儀正しき御裝束まで分限に應じ候望を達被レ下候、御恩之程申限りも無レ之候、將又雨霜をいとひ候其源は、松杉槻等始諸材木とも天地の御惠みによつて深山に生出、數百年を經て大木と成候を、杣山賤の人々朝には霧を拂ひ夕には星を戴き、夜は猪狼の聲に肝を冷し、風雨暑寒を凌ぎ枝

は秋飼ひ候よし、先春蠶は桑の芽吹候比、右之種を紙の儘にて清き澁紙の類に包上、圍爐裏近き天井へ五尺餘りも高く釣し置、二三日も溫め候へばはきたてとて色靑く變り卵生(みよけ)て出候ゆへ、鳥の羽根にて掃寄奇麗なる盆やうのものに新敷紙をしき移し候て、桑の新葉を摘、至極細に刻ふりかけ候へば、是を餌食として少々宛育候に隨ひ、桑を少しづゝあらく刻さし候所、蠶(まゆ)になり候迄に四度宛の休と申事在ㇾ之、大體二日程宛蠶の口腫頭を押立候を、寐るとも稱へて桑を與へ不ㇾ申候、翌日頃は頓て口の皮むけとれ候時頭を下げ、常のごとくになり候を起ると申候て桑をつけ候、先初休をしゝといひ、二度休をたけといひ、三度休をふなと云、四度休をにはと申て其間十日程宛にて、しゝよりして桑も毎日三度宛付、其上多少の分量を考へ與へ候て、追々育候を大小を撰分大なる方をば外の籠に移し、後には桑も葉の儘枝とも付候へ共、莖は殘し葉のみ食し候、勿論西風南風を忌候ゆへ、若や西南の風烈敷時は戶障子をさし置屛風などにて圍ひ、風の吹込ざるやうにいたし、或は忌服不淨を忌候ゆへ婦人經行の節は、別莊に移り別火を以て愼み居候、其外藥の匂ひ肴などの香を嫌ひ候に付家内の心遣ひ大方ならず、亦蛇を嫌ひ候ゆへ長蟲などゝ申斷もいたさゞるやうに氣を付、縱令落候事在ㇾ之共死と申事を忌、或は轉ぶ亦は流るゝ杯唱へ、萬一忌所の事ども在ㇾ之時は蠶の色變じ、或は瘦又は尻腐轉び候も出來候へば、是非なく川へ流し捨候、別して夜分は鼠の付候儀恐れ、棚を釣置用心いたし猫など多飼養ひ候、偖桑に附け候を何駄となく調置、日々の餌食となし、には起より五六日過候と最早上り前と成候を、巢

身を隱す所の衣類にも、絹布綿服の品是有といへども、先木綿の其始は、初夏の頃畑を鋤にて打鋤にてうない、塊を碎き土をならし畝を作り足を引、しもごへを引込干付置候て種を撰分、五月に至り綿種とこやしと灰とまぜ合候て、蒔村のなき様に土をかけ置候へば、頓て二葉を生ひ出し候ゆへに小草を取、夫より二寸程も延候時はさくを切ると申て鍬にて根を切り、又こやしを入しばし日を經て一番くるみとて土にて根をくるみ、其間〱には草を取、程なくくるみ返しとて根をくるみ替候へば、五六寸にもなり候節枝を打せん爲に芽をかき置、六月の頃は段々生長して花咲、早秋に至り實も入ゑみて桃吹候を、一番ひろいと申て本なりを取りて翌年の種に圍ひ、日毎に取入れて皮を剝莚簀等にならべ、日輪の光耀を受日數をほして塵などひろひわけ、其上絞車にて挽候と綿と種とわかり候を、打綿となして篠巻にして紡車を以て絲にとり、それより機を巻立候を釜にて焚候て、紺屋之方へ遣はし候へば島の好みを應じ、夫々に染色を分け染上げ候を、糊の加減能程にして日輪の光耀に干置、乾候頃織取に隨ひて筬を通し、櫛にて筋を立ながら苧巻といふ木に巻、機臺にかけ織上げ候て壹反宛疊付、其上荷造りいたし廻船問屋の元へ出しぬれば、遙の海路を波濤の患もなく、御江戸表に着船して、夫夫の市店に渡して交易いたし被し呉候も、我々壹人の肌身を隱さんが爲に候、又絹布の其本は蠶種と申にも、春蠶夏蠶秋蠶或は大繭絹蠶などゝて色々在し之、何れも色赤く鮫の皮のごとく厚紙に悉く種付居候を、寒中に四五日も水にひて圍ひ置候、尤夏蠶は眞綿になり候ゆへ蠶も大きく夏に至り飼ひ、秋蠶

米と殻と糠と分り候故、藁にて縄を綯、菰をあみ俵となし、村役人立會升取いたし米を計り入、口掛り俵作りして牛馬の脊に負せ、山を越川を渉りて海邊に運び、大船に積入候得ば船頭水主の人々請取、晴天を見定順風に帆を揚げ、渺々たる灘を乗出すといへども、沖の岩鼻にて船を砕れ悪風に帆をとられ、其身も海底の藻苦となり、中には危きを遁れ辛き命を助り、爰彼所と漂泊して湊にたどり付て、其所の村役人などを頼み難船の様子を改貰、濡荷物等干乾し船の破船を修復いたし、漸々風並の宜に随ひ出船して品川沖に着ぬれば、小船にはしかけて米問屋の藏に納候得ば大金を以て仕切置、夫より中買の人に渡し升目の不足を改、賣捌呉られ候ゆへ、我々が方へ調請て、米搗の人を頼てしらげさせ候得ば、大道に臼を居へ厲風に吹さらされながらも身より汗を流し、早天より昏におよぶまで拜搗にして精(しらげ)呉られ候を、何度ともなく水にて流し磨上げ、ゆきも欺く程にして日毎に飯に焚候は、我々一人が食事といたし飢を凌ぎ命を全ふせんが為也、八木一色すら斯のごとし、況や其外の五穀を始味噌・醤・鹽油・酒・[illegible]・乾物・魚[illegible]其出所を考ふれば幾許の人の[illegible]苦行して、大切の命をも賭と其品々を作り出し、其人を御養被下候御恩之程思ひ量り[illegible]しがたく候、猶又寒暑を凌ぎ肌

母師長兄弟親族、其外大千世界の人々を以一切衆生と名付、此御恩に預り居候事廣大に候、先御主君樣之御恩は前編に認候通舉てかぞへがたく候得共、第一大切之命を御養被レ下候に付、御蔭を以年々星霜を贈り、其上暑寒を凌ぐ衣服を御惠み被レ下、殊にかやうの御家造に相住候ゆへ、雨露にうたれ候事も是なきは、是に過たる御恩は御座有間舖と存候、其譯は我人ともに此衣食住の三ッを貯へん爲に、一生涯身を勞し心を苦しめ、定れる命をも縮候處、御主君樣の御惠によつて其辛勞を遁れ、何べんともなく暮し候こと、此上もなき難レ有儀には在レ之まじきや、去るによつて元祿の頃大石内藏之助殿と申義士の仰にも、平人は主君を持は天下をしらずとの名言感じいるの所に候、偖大切の命を連繼する根本と申は八木にて候、此米の出生をあらまし承り候處、春の頃田を返すとて人馬を以て馬把(まぐわ)とて土を起し能墾し、其上こやしを入土をねかし置、夫より八十八夜過候へば種浸しとて籾を俵に入、河水池水等にふせ置、其程を考へ引揚て水を絞り暫く日天子之光耀に干、一夜菰莚の類を掛蒸置候へば芽を出し候、又苗代の土をすき平均水を張置、種蒔とて未明に出てむらのなきやうに田に蒔てより、日毎に夜は水を干朝は水をかけ候丹誠によつて始て二葉を生じ、段々日を經て五月の比には五六寸も生立候を、田植とて大勢の男女打交り早苗を植付候處、田蛭の足に取附血を吸ふにも搆はず植仕舞、夫より田へ水をかけ候へ共、旱魃の年は水乾候ゆへ夜も寐らず候ゆへ河水を汲込、晝は大暑の堪がたきにもいとわず、田の草とるとて一株宛根を分小草をとり、壹番草より三番草迄取仕舞候内に、はや

明より露霜にうたれ、晩景には雨雪に小濡て商内物を販、農家の父は炎天に身を焦し、寒風に身を曝して田畑を耕し、其外諸家迚も漂濤の危を凌ぎ遠境の疲を忍び、嚴寒の指を落すにも、大暑の金鐵を鎔すにも厭はず往來なし候も、皆是妻子を養はんが爲の千辛萬苦なり、殊に我子の一寸育候には、母の生肉を一寸宛片と申譬も有レ之、夏の短夜も寢玉はずして乳味をあたへ、冬の寒夜も我は凝寒ても暖に臥せ、病煩ひの節は夜中も厭はず人を馳て藥を求め御介抱に預り、段々成人いたすに付父は行儀作法を御教、其上人の中へ出候ても耻をも請ざる樣にと筆學諸藝とも御習はせ被レ下候所、頑是なき心よりして直々稽古いたさず候へば御折檻を加られ候も、畢竟は我子の爲を思召御慈悲より發候事に候、母は打れ候を不便と思し召、若哉怪我にてもいたさゞるやと御いたわり、此上精出し候やうにと和らぎ仰被レ下候も、同じ御慈悲にして御恩德之廣大成事筆紙に認め盡しがたし、誠に父の御恩は天に勝り、母の御恩は地に越候とも申限りも無レ之候得ば、父母の命は露ばかり背かず、一言たりとも言葉を返さずして大切にいたし[illegible]自然と我身は我物に是なき道理も感得致候に付、益御奉公も疎略に相成まじき事と存候、第四には衆生の御恩と申て、都て衆生といふは、御主君樣を始奉り父

は汚たる顔容手足を清め、其外穢たるを洗晒候て、井より涌候ものと心得、麁抹に汲流し候へ共、其根本は月輪の御智恵より顕れ候水性に候、是等は悉く天地の御恩徳に候へば、第一に此御恩の程を崇敬し奉るべき事に候、第二に國王の御恩と申は、四海静謐に御治世ましませば、五日の鳳風枝をならさず、十日の霖雨穏かに候ゆへ、貳三歩の戸板の内八九歩の壁中に、優々と夜具着して枕をいたし、緩々と足を延して臥り候ても、猥に家尻を切て剝取ものも是なく候、又は白中に商賣物抔理不盡に手込にいたし持逃候者も無レ之ば、御政道正しき故に候、萬一邂逅に不法之者有レ之においては、夫々の御役人方御附置せられ、御威光を以早速に召捕られ、罪科の輕重に隨ひ誅罰に行はれ候、殊に御法令の第一は御制札之最初に、親子兄弟夫婦を始め諸親類にしたしく、下人に至る迄これを憐むべし、主人有輩は各々奉公に精を出すべきよし被レ仰出レ候に付、主君に忠節を勵候者父母に孝養を盡し候者は、召出され御褒美被レ下置レ、誠に御聖代の御仁徳の程有がたきとも可レ奉レ申樣これなく候、然に主親に忠孝なくして或は金錢代呂物を掠取、又は手むかひをなし刄傷におよぶ族是ある時は、重き刑罰に行はれ候ゆへ、誠に天罰を蒙る咎難レ遁ゆへに候、扨又飢饉の患これなき爲に圍籾等の御手當下し置れ、其上出火盜賊等にて世間惚劇之節は、御定役の外に御增役仰付させられ、御政務嚴重にして、只々萬民安穩に家業いたし候樣に御憐愍下し置れ候儀、誠に君子は民の父母たる事、炳然冥加の程有難しとも中々申量りも無レ之、其外國王の御深恩擧て算ふるに暇あらず候、第三に父母の御恩とは、此人身を請得奉

世界の人に自由をいたさせ、其外貴よりして賤敷船乗馬追車引、乃至非人革剝のるいまでも天地の際に生れ出たる人に於て天の命を請ざる人迚は是なく何れも今日の役目を蒙り居候得ば、是をいやしめ彼を憎むといふ事は有まじきや、別して人は萬物の司たるゆへに、一切萬物森羅萬象に至るまで、我我が爲に性を果して今日の養を施し候、先山に生ずる木茅石竹は、舍屋となりて風雨を厭はせ、家財器物と成りて自由を足させ、炭薪と成ては煮焼或は寒氣を凌がせ、偖又野山に住所の獸の革は、武具馬具に遣れ、或は皷太皷三味線等に張られては諸人の心を慰め、あるひは革羽織頭巾などになりては火事の防かたの助力となり、毛は筆刷毛其外となり角は諸色となり、又牛馬には重荷を附て人物の用を足し、偖又鳥類とても羽は鑓の鞘などに遣はれ、あるひは矢に矧れ羽箒其外となり、肉は人の食となりて皮肉を肥させ、又里に生ずる所の五穀を始め野菜には大切の命を連繼所の食物と成、或は木の皮草の根は病を治する所の藥種となり、其外麻華木綿は肌身を隱し暑寒を凌ぐ衣服となり、或は菜種胡麻の類は油を絞りて世界の暗を照し、或は楮は紙に漉れて萬の事に用ひられ、又海川に生ずる魚類は大なるは鯨鮫の類ひより、小なるは鯷雑喉の類に至るまで、網にかゝり針に釣れて、油ある魚は是を絞て灯に挑られ、肉は人物の食事となりて祝ひ事に遣はれ、或は田畑等の糞ともなり、此外一切の萬物禽獸魚虫草木の花實、或は衣食器財等迄も共用ひらるゝの德擧て算へがたく候へ共、皆人身を養育せんがための役人なれば、何れを抛、何を麁抹にいたすべきや、都詰所は天地よりして我一人を御撫

奢有之ときは茶の湯生花盆石書其外の慰杯を好み、貴人に交りて己が家業を疎にいたす類ひもあるべきや、又足に奢是あるときは蹴鞠に全盛をなし、或は履もの抔に物好して足事を知らざる類ひも有べきや、此外種々の驕り多くといへども繁きゆへに省略いたし候、尤家財等の用ひらるゝを用立ず、古きを新に仕替麁抹の所にて濟べき物も上品なるを求などいたし候、皆奢より出たる事かと存じ候、惣じて形の顯れたる物其品の滅せざる内は用に立ざると申儀は無之ゆへ、家内の紙屑迄も買取るゝ人もあり、家の外の塵あくた迄も用ひらるゝ所ありて人の助となる道理なれば、萬事に心を付儉約を用ひ申さず候はでは、冥加にも違ひ我身に天罰を報い申べき事に候へば、假令紙一枚にても無益に遣ひ捨ず、縄切壹すじにても其役に立ずして打弃まじき事と存候、右に述る所の奢りを退け費を省き、我身の分限相應の執行ひいたし、上を敬ひ下を憐み候時は自ら上下和順いたし候ゆへ、己を約やかにいたす理に契ひ、身も修り家も整ひ申べき儀と存候得ば、能々感得いたすべき事に候

一 凡士農工商を始として其外の人たり共、上下尊卑の別れ是あるとはいへども、人は天が下の靈なるゆへに、依之倶經倶助けにして一人にても無益の人と申は是あるまじく、既に士は萬民のために政務を執行せられ、農は諸人の爲に五穀野菜等作り[illegible]

れば、膳部の綺羅と釣合ざるは却つて客をあなどるに當り誠に不禮とや可ㇾ申、偖又富家成人の幸不幸の節緣家之歷々を相招、吝嗇の取計ひを以て麁飯麁菜の會釋いたし候、是以分限に應ぜざる振舞なれば禮義を失ふとや申べき、かやうの過不及これなきを儉約を守るともいふべきか、勿論己を約やかにいたすの第一は、奢を省き事を專らに心掛申さず候はでは相勤り難く、先心に驕り在ㇾ之時は御主君樣を蔑しろにいたし候ゆへ、忠節の志も發らず亦父母を疎略に存じ候ゆへ、孝順の心も是なく、兄弟をなきものと心得候ゆへ、睦敷いたし候心もなく、朋友を眼下に向降し候故、實義を盡す心もなく、眼上の人を無智と侮り候ゆへ、敬の心も是なく、眼下の人を匹夫下僕のごとく思ひ愚昧の者と嘲し、邪見の取扱いたしたる迚も苦しからずなど存じ候ゆへ、憐の心も是なきは、畢竟我をたかぶり居候ゆへの儀なれば、御法令にも背き仁義の道にも闕申べきや、又身奢是有時は生得の肌身も摩磨候はゞ美しくならんと思ひ、髮頭にも匂ひなど入たる油を付、小道具其外鼻紙等に至るまで麁抹成を嫌ひ、或は衣服等に綺羅を餝らん事を願ひ、家居造作などゝ物數奇を好み、後には身上破滅する類ひゝ有べきや、亦眼に奢り是有時は女色を始として物見遊山の節とても、他に劣たるを無念に思ひ人に勝れん事を願ひ、無益の財寶を弃捨する類もあるべきや、耳に奢是有時は謠囃子をはじめ小歌淨瑠璃琴三味線其他の音曲などに心奪れ、仇に月日を費す類もあるべきや、亦鼻に奢り有ㇾ之時は伽羅沈香、其外都て匂ひに意ときめき、あたら金錢を水の泡の如く失ふたぐひも有べきや、又舌に奢有時は貧苦も麁菜を呑ず、美酒珍味魚肉に飽事なく好

も咲しなれど、或は嵐のために散されたるもあり、又は風雨の憂もなく實と成たるもあれど、終には其年も暮ぬ、尤是を引寄て手近くとる時は、今日の一日も是に等しく皆籠り申べく候、然どもいつも替らぬものと思ふ心よりして足事を知らず、飽迄强欲に耽りて生涯安堵の思ひに任せざるゆへ、君父の御厚恩の程〻存じ出さず唯〻徒に今日を贈り候こそ淺間しく候へば、只日〻を無事に相勤、御恩の廣大なる事を風察いたし候樣に心掛たきものに候、既に古人は苟に日〻に新なり、日〻に新にして又日日に新なりと、湯の盤の銘に書記し置せられて、日暮湯を遣ひたまふ每に是を見て忘れたまはざるやうに守らせられけると申すも此理りと存候、左なくては人欲の私に引れ色〻の惡念發り、我が命を賴にして明日を期する意これあるは、御恩を忘却いたし種〻に意の變候道理ゆへ、是全く天地の際に風雨霙雪の變易在レ之ごとくに候へば、前後を打すてゝ今日を大切に存じ候心掛、常住不變にまもりたきものに候

一　儉約と申事はおのれを約やかにいたすのみに候處、吝嗇と紛しくなりて儉約の用ひ方間違是あるやうに相成、仁義禮智の五常にも闕申べきかのよし承りおよび候、其故は禮の大法と申時は父母逝去の砌葬式の執行ひ方、或は年回追福の經營、又は子孫之祝賀等之節、己れ〳〵が分限相應にして、過不及是なきを禮といたす旨承り候處、驕の兆在レ之人は右等之節山海の珍味を取集め、家具器物に至る迄善盡し美盡し饗應いたし候こそ、亡親への孝養と心得たる所、呼迎る一家親屬の人品は分に應ぜざる麁服な

れければ、頭は數ヶ所の剪疵ゆへ親父も仰天して、偖々誤入候とて後悔いたし、何卒此上は御慈悲を以出家道を立候樣に御說諫を加へられ被₂下度₁と願ひけるよしに候得ば、此小僧三ヶ條の道理を分別致、邪正を糺すべき事と存候

一　世の中の有樣常住不變なるものと心得候は僻事かと存候、いつもとこしなへと存居候時は時代の風俗の移り行を知らず、或は契約を堅しと思ひ、或は年月を待、あるひは我命を賴みにいたし候得共、家業の道を始として其外何一ッにても、己が方に取究候事の變改せずといふ事もあらず候は、本天地の際の事變易これある驗にて候、其謂は立春は年の始とて壽を祝し候內に、はや日脚もたち頓て水もぬむ程に暖に成、無₂程初夏の衣がへにも至りぬると存じたるに、水邊も好ましき炎暑におもむき汗を絞りたる月の夜も、忽露のきらめく秋と替り、手洗ふ水も冷たく覺ゆる間もなく、冬の軒端に置る霜も朝日に解行、汲流せる水もたちどちに氷となり、此頃若水汲て祝ひけると覺へしに、豆蒔男の水垢離なと取やうにもなりて、終には年の名殘となるぞ哀とや申べき、其內には雨の降りつゞく日もこれあると思へば快晴にもなり、或は旱魃にて池水の乾などする事もあり、又は大風も吹立雷鳴地震もいたし、雪霙霰も降りて暫時も常住なる儀これなきありさま、誠に有爲轉變の有さまとやいふべき、されば我々とても母の胎內より出生いたしたるは死の始なれば、月累り日を積容貌の替りゆく事、四季の移り變るが如くにて、生れ出たるは年の始にて、命終るは歲の名殘なり、されども其內には種々の花

を含み此小腕にて何として大人の如く味噌のすれべきやうなし、さて〳〵無理なる事を言るゝ和尚にてはあると、其外には不埒も是なきやと問ければ、小僧申けるは月代の剃やうの惡敷とて呵られ候、此外は何も是なきよし申せば、親父彌立腹して今迄は大徳と思ひしに餘りとや想像もなき和尚かな、稚き小躮が腕先なれば剃刀の取扱も出來がたき筈なるに、夫を彼是申さるゝ儀は言語同斷の事なれば某參りて對決せんとて寺へ罷越和尚に面談いたし、倅小躮を御返し被ㇾ成たる譯合、味噌する方月代の剃樣惡敷に付てのよし以て外の儀と存じ候、纔十二三歲の小僧の身分なれば未熟の儀は勿論に候、別して雪隱を御差留なさるゝ事餘り御無理なる儀に候得ば、向後は師弟の緣を御切被ㇾ下度旨を申處、和尚の仰には一往聞れては左こそ可ㇾ有事なれ共、先雪隱を差留たる譯は客殿に在ㇾ之所の厠にて、內は高麗緣の疊を敷置、御大名方之御出之節入れ申積りの用意に拵置候へば、我等を始め同宿たり共一切這入申さゞる所、渠は每日右之雪隱へ參るゆへ是を止め候へども、兎角用ひず候、又味噌を擂事は三人の小僧へ隔番に致させ、擂木にてすり候樣に申付置候に、外兩人は其通りいたせども渠は決して用ひず、杓子にて押潰し候ゆへ度々杓子を折候とて取寄見せられけるに、折杓子五六本を持參いたしける、扨又月代剃事は所化の役として死人の首を剃候ゆへ、手練の爲に小僧の內より月代を剃習はせしに、渠は剃刀は器用にて同宿どもの月代は至極奇麗に剃けるゆへ、我等が天窓を剃らせ候へば、月代度每に疵を付候ゆゑ氣を付べきやうに申付候へども、一向恐る色もなくいつ迄も此通りに剪候とて頭巾を取りて見せら

るべき事ゆへ、九思一言の金言不斷にこゝろにかけたきものに候
一　木の曲りたるは曲尺を以て試し、人の邪なるは正路を以て試すべきの處、平日我意にかなひたる人と、又は己が機に入らざる人との差別是あり、自ら依怙贔屓の取計も出來いたす事も在レ之ものゆへ、人の理非邪正を糺すべきと存じ候時は、小僧三ヶ條と申儀を心底に貯へて采配いたすべき事に候、此三ヶ條は恐多くも東照權現宮樣天が下の御政務ノ御規矩御定被二仰出一候上に、此三ヶ條を以萬事執行可レ申旨諸御役人中樣方へ被二仰渡一候由傳へ承り、誠に難レ有御金言に候へば認置候、假令下萬民に至るまで此三ヶ條の趣を相守取計ひいたし候におゐては、贔屓偏頗の筋聊在レ之間敷候と存候、偖其譯は在寺に大德の和尚住寺いたされけるに、近在より小躮壹人召れ和尚の弟子にいたし度旨願ひければ、早速領掌ありて則剃髮いたさせ小僧に召仕はれけるに、此者怪らざる氣隨徒ものにて和尚の申付を用ひざるゆへ、不便に思はれ或は叱り或は方便僞奇され色々と異見の加へられ候へども露計も聞入ずして、唯己が致すべきと存じ附たる事は止ざるゆへ、和尚も手にあまし止事得ずして宿許へ返されける所、親父小僧に向ていふやう、いかなる不調法有てか歸りたる哉と尋ければ、小僧申には、雪隱へまいるが不埒と申され下宿いたしけるよしを申せば、親父甚だ憤り夫は不束なる和尚にてましますまず哉、如何に小僧の身分なればとて大便致さずには居られまじ、併ながら夫計にも有まじ外に不調法なる事もあるべしと亦尋ければ、小僧の答には味噌の研樣が宜しからぬよし申されけるといへば、親父又怒り

因果の理りをなきものといたしたる振舞愚なる儀と存候、是よつて君子は必其獨を愼しと仰られ候所、君子と申は聖賢の御身の上とのみ心得、いつ迚も我は田夫野人の身と卑下いたし、一生涯盲闇にて朽果んも口惜かるべき事と存候、諸君子と申時は我々ごときの匹夫たり共其列に加わるべく候へば、向ふへのみ預け置ず我方へ引請候て、己壹人を愼み申べき事專一と覺候、別て君子は怒りを人に移さず過を二度せずと申事も有レ之候へば、是等を能々愼たき物に候、先我心よりして一旦惡きと存じたる事は再びいたさゞるものに候へども、我心には差てあしきとも覺えざるに、他の人より過いたしたる趣申聞られ候時は、過にては無レ之由申譯などいたし候は、重ねてもいたすべきやうに相聞へ苦々敷存候、誤て改るに憚る事なかれと申て、一度人よりして惡舗儀と被レ申候事は、假令我意にはいか程の善事と存じ居候とも、再び其事いたさゞるは過を二度せずとも申べきや、偖又怒りを人に移さずと申せばとて不法の者など御店の掟を破壞いたし、或は申付かた等違背いたす族有レ之時は、是非相談の遂べき事は勿論にて申に不レ及申レ候、唯己が意趣遺恨に依て憤りを發し、人に咄合致さず候ては胸もひらかざる樣に思ひ、朋友をかたらひ荷擔人を拵候など申か、或は我意に立腹致候儀是ある砌、其譯も知らざる者へ非道の挨拶などいたし、却て其人にも腹立いたさせ候事皆人に怒りを移すの道理に候へば、兎角口は禍の門と心得候儀專一と存候、都て門と申は内外より出入いたし候を門と號け、是に用心を加へずしては盜賊の災もこれあるごとく、人の口とても右に等しく言說を出すごとくに用ひ、是なき時は禍も多か

をおし恐れて渡る人なり、心の曇りなきとも申べきや、玉の性は同じけれども琢くと磨かざるとに異なるをも候へば、絶ず心に懸られ候時は、自然と我心も磨かれ善惡の想も移り可ㇾ申事と覺候

一　口は禍の門、舌はわざわひの根と申せども、左のみ禍の在ㇾ之ものゝ樣には存ぜず候處、纔一言の誤りによつて一生涯の祿にも離れ、或は大切の命をも亡し候事も出來いたし候、然れ共我等におゐては命を失ふ程の災は申出す事もなく候へ共、日每に言出せる言句禍にあらずといふ事もなきかと存候、其故は心口各異言念無實と申して、口と心とはいつも相違いたし居候ゆへ、我意に思ふごとく不斷口に言ひならへ候はゞ、定て今日迄も御奉公相勤候事も出來いたしまじく、別して商內などいたし候にも意に思ふごとく會釋いたし候、再び御買物にも御出被ㇾ下候御方迚も有間敷なれども、我も意に思ふ事は皆身勝手ゆへ惡しきと存居候に付、人に應對する每に我意の念は隱し置、時の宜に隨ひて挨拶いたし候へども、心口異なる時は實情無ㇾ之道理ゆへ僞りを申も同前之樣に相聞へ候、されば古人も僞りと知りつゝ人には申せ共心が問ば何と答へんとの名言、誠に釘も打るゝ如く胸にこたへ耻入計に候、何卒意に惡念なくして口に言出す事とも心と符合いたし候樣に心掛たきものに候、殊に災ひの仲立と申は人の上を蔭言申か、或は譏るか亦は嫉申など皆己々が方へ報いの來る禍にて、是非我もそしられ嫉まれ候事掌を返すよりも早く、假令遠國隔たりたる人迚も此方より憎み候へば、先方にても憎まるゝものにて、一業所感の道理は免かれ難く候、ましてや惡事などいたし相知れまじきと存じ居候は、

所にて申違ひは無レ之と、心に決し候事ならでは言出すまじきとの御禁に有レ之、去るに依て童子の教にも言葉多き人は品少し、老たる犬の友を吠るが如しとも仰置れたれば、人は何となく言葉ずくなにて無益の雑談、或は僻事抔申出さゞるこそ恥をしりたる共申つれ、偖又人より申聞置れし儀を相用ひずして、再應同じ事を申聞られ候など恥とは可レ申か、其譯は犬猫すら一度嚴敷申候事は二度と過いたさゞるものにて候、ましてや萬物の司たる人物として耳へも聢々とも入ざる儀は恥とや申間鋪や、其外他所より借受候品等返すべき念もなく、或ひは他の人の物を斷なく遣候ても、咎めざるうちは苦からず抔心得たる族は、天罰を恐ざるの働ゆへ今日の家業も亂妨いたし、果して生涯身の上立行ざる様に相成、人の嘲りをも厭ざるの類ひは、皆恥を知らざるの所より發り候、されば忝も天照皇太神宮の御詫宣にも、謀計は眼前の利潤たりといへども必神明の罰を蒙る、正直は一旦の依怙にあらずといへども、終には日月の憐を蒙るとの御神詫分明に候へば、豈偏執する人可レ有レ之哉、兎角人は心に奸曲なく[illegible]いたす候においては、今日の道に[illegible]自ら[illegible]來る[illegible]存候、其外は銘々日々之行ひの處にて勘辨可レ被レ致候、寔に大海へ[illegible]乗出したるごとくに世の中

身の及ばざる處をうらやみ、その外何事によらず足事を知らざるは、いかにも恥かはしき儀と存候、然れ共これらを是と心得居候ゆへ、鏡にも移らず見苦しき我心の姿とも存ぜず候、勿論鏡と申は銅にて鑄拵たるにては無之、もと銘々の本心は磨上たる鏡のごとく明らかなる物に候へども、年歷を積に隨ひ惡念の曇覆重り瓦礫のごとくになり候ゆへ、惡を作りても惡と知らざるは、鏡に影の移らざる道理にて、恥をはぢと知らざる所かと存候、譬ば碁象戯など好人の未熟なるは、盤面に向ひても愚智の眼くらみ德の付ざるを厭ひ候ゆへ、一二手先も見へずして却て己が方より禍を招き、終には負手を打自滅などいたすは、畢竟其術に闇きゆへの事にて候、是則我意の明らかならざる道理に叶ひ候、去ながら未熟の人たりとも他の人の盤面ひかへ居候を側にて見物いたし候時は、其咀手迄も見へ候故重て我業の德に用ひ候、一切之事も其如く初心の人は先他の善惡ともに我手本と致し、惡しき儀は闇き晋を撰み候事肝要と存候、既に其術に達したる人は盤面に向ひ候より始終を考へて勝負を決し申事は、其藝能に明らかなる驗にて、是則我心の明鏡曇りなき道理ゆへ、終に負手をうたざるごとく、あしきと心得たる方へは少しも心を傾ざるものに候、されば生れながらにして智ある人もすくなき物ゆへ、おほくは習ひ修して智德兼備いたし候へば、何事も不斷之心掛によらずしては成就いたすまじく事と覺へ候、所詮は心鏡之明らかなる所に至らずしては、恥も知れざるものに候へども、都て道を守らざるは皆恥にて可有候、尤恥と申事は數多にて、中々筆紙にも認盡しがたき儀どもゆへ巨細には記さず候

舞妓狂言咄し、又は野卑の流行言葉、浮世の雜談等を好者には、人來て無益の浮說雜談を噺し、或は邪智を以人を疑ひ物を六ヶ鋪取計ひ候者には、人きたりて物之入組むやうに致させ、或は學を好ものには人來りて書の道理を語り、あるひは道に志の有之ものには人來りて道の敎をなし、其外己が好む所によつて心と申物は變化いたし替り安きものゆへ、則白き絹を種々に染替候理に候得共、兎角あしき方に移り染らざるやうに日々夜々に油斷被致間鋪候、古人も心の駒に手綱ゆるすなとも、又は賢よりもかしこきにうつさば、などか移らざらめやとも仰られたるは、生質白きものゆへ此方の染次第にて、何色にも染らずといふ事これなき御敎誡と覺へ候、世に黠しき人は善惡不二ゆへ、皆本心の成業と心得候杯申かたも有之よしに候へども、聖賢の御敎には左やうの僻事はあるまじきかと存候、善惡不二と申事は、善も惡も形のなき處に至らずしては、不二とは申さゞる樣に承り覺へ候、唯々我意は怖しきものと心得候て、譬ば高き階子へ登るごとく、踏はづし申さば怪我いたすべきと思ひ、油斷すまじき事とぞんじ候

一　我々が意に時々刻々浮ぶ所の惡念鏡に移るべきものならば、定て移れる影形の見苦しかるべきならんと、古人も口ずさみ申され候へども、左程に我意の姿見にくきとも存じられず候は、全く恥を知らざるゆへと覺へ候、二六時中之間意に浮ぶる善惡の想を棄置ず考へ見る時は、善事は稀にして積惡のみ多く、第一金銀を貪る意深く、好色に眼くらみ美服を餝らん事を望み、魚肉厚味に飽く事なく我

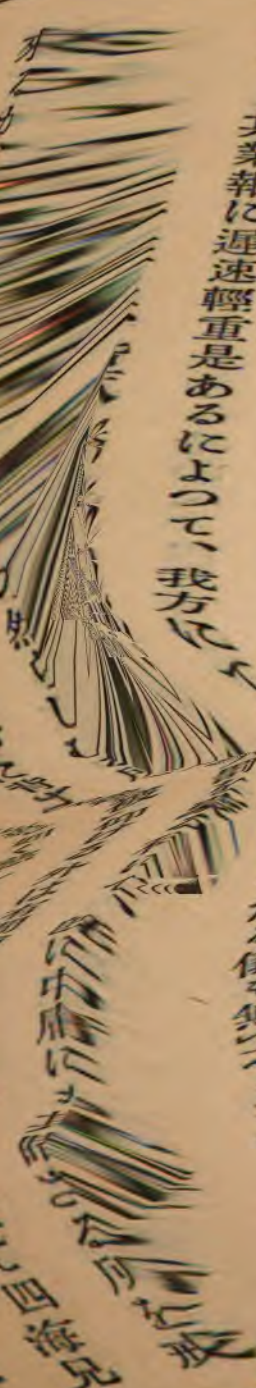
はなにゆへになれば、我意をたのみにいたし怖しきものと知ざるゆへの咎かとぞんじ候、全體我は善心なるものと思ふは愚なるかと覺候、勿論家々におゐては欲心是なきかと存候處、金銀衣食等の我身に付候邪欲はひたすら好候へ共、我心の寶となる處の道の教などを好候欲心は稀なる故、邂逅にも我身の爲に相成事抔承り候にも氣に進み是なきゆへ、十度の内に漸一言も我意に徹し候事もあるべきや、假令耳に聞覺へ口に云ならへたる迚も、心に感得いたさず候ては聢と聞得たるとも申間鋪哉、既に我心の惡性なる證據は、何之益にもならざる儀を承り候事は好候ゆへ、或は浮世の雜談又は世間にて盜なん劒難等に逢し噺など承り候へば、所は何方にて何商賣いたされ年齡は何歲位の人に有レ之やなど、根問葉問をいたし無益の隙を費し候得共、我身に德の附候方は聞遁しにいたし、兎角裏表の相違是あるやうに覺候、是全本善心すくなきゆへの驗かと存られ候、則古人も我等ごときの愚人は背正歸邪まさると被レ仰たれば、正しき事を嫌ひ邪なる儀を好むが凡俗の常にて、夫ゆへ禮義を窮屈と嫌ひ、惣じて氣の詰りたる事は尻込して、兎角自墮落に正しからざる儀を好が身勝手に候、是は何故ぞと申せば本惡性より發る儀なれば、彌我心は怖しきものと見限り候て、人欲の私を賴まざるが專要とぞんじ候、然ども性は善なりと申て元來本心におゐては善惡之差別是なきものにて、譬て申さば白絹のごとくなれども、我好所に隨て色々に染なし候其譯はいかんぞ成ば、同氣相求るの道理にて、色欲を好ものには人來りて色欲に溺るゝ事を勸め、あるひは名聞利害を好ものには人來て名利に沉ませ、或は無益の歌

主人へ不忠にして殺害なし、或は父母に孝ならずして刄傷に及びたる人抔、風聞承り其取沙汰のみいたし居候はいたづら事かと存じ候、是亦我身の方へ引請候はゞ自德を積とも可ㇾ申哉、其故は我々迚も左樣の御店に御召仕被ㇾ下候へばこそ、何不自由なく相勤居候ゆへ差たる不足を申出さず、御主君樣へ敵對候根性も是なく候得共、萬一無理邪まなる儀をも仰出され候はゞ、定て右の人に少しも志の替る儀はあるまじく所、御慈悲深き御店に相勤居候こそ、私の仕合と御厚恩之程難ㇾ有ぞんじ、我身へ立歸り候事此身の德にも可ㇾ相成、將又御主君樣へ忠節を勵み父母へ孝順を盡し候に付、天之冥威に預り、御公儀樣より御褒美等頂戴仕候樣子見聞いたし、右評判のみいたし居候事、賊に他家の財をかぞふるごとく無益之儀と存候、これ以て己が方へ引請候時は、偖々如何なる宿植多善の仁やらん、御公儀樣の御聞に達し御褒美迄頂戴被致候忠孝の仁さへ是ある中に、不忠不實之我等ごときの者を殘る所もなく御手當に置れ、御召仕被ㇾ下候事の難ㇾ有やと、御厚恩の程を存じ出し、實情を以相勤候時は是に過たる陰德は是あるまじくと存候、此外一切の得失擧て算へがたく、餘は是になぞらへて思慮いたさるべく候

一　世の中に普く人の意ほど怖しく、賴みすくなきものは有ㇾ之まじく、さるによつて昨日迄は味方となりて諫し人も、今日は敵と替りて譏し、今朝は愛して譽たる人も夕べには譏りて悁み、先迄は善心と見えて人をいたわりしも、後には惡心と變じて人を害し、終には我身までも亡す類ひまゝ多し、是

とく敬ひ、平生に我をへり下り候樣之愼み肝要と存候

一　萬之事見聞いたすにつけ損德の在ㇾ之儀と承り候へば、なに事によらず損を嫌ひ德を好む我々ゆへ、同じ事に候はゞ德の方を心掛申度事と存じ候、先諸木の花咲實となり候といたづらに眺る時は、花の可否を論じ實の善惡のみを沙汰いたし候へども、花の盛なるにつけ實の熟したるにつけても、我方へ引請候を德をつむとも申べきや、偖花といひ實といふも銘々日々の行狀に在ㇾ之、則我身の花と申は上下おしなべて平生の勤方之事にて、商內之差略其外萬事の取計ひ迚も、我を立人前のみ飾り候は見事に花の咲と申にて、既に誰々も賞翫いたし候、然れ共花のみにして實のとまらざるは無下に殘惜く、實と申は銘々の眞實の心の事にて、此實情是なきは花は咲候得共其際ばかりにて仇に散果候道理ゆへ、何卒實となり候樣にいたし度候、御主君樣へ召仕はるゝはいふに不ㇾ及、親子兄弟朋友の中迚も、花ばかりにては美しきまでにて實情是なきゆへ、折には喧嘩口論をなしいつとなく不和になり、果は義絕抔いたし候儀出來致候、亦日々の賣買にも我發明を以て追從のみ申か、或は賣拔買ばめ等いたし候は、花ばかりにて實の無ㇾ之ゆへに、終には天道の御惜しみを蒙り、商內衰微の基と可ㇾ相成ㇾ候へば此道理を考へ、先樣之御爲に相ならざる品等は其御斷申上置、重て不束に思召めさゞるやうに實儀を以て商內いたし、其外親子兄弟朋友の交りにも表裏輕薄を好まず、眞實心を以て會釋可ㇾ申事と存候、然る時は天の冥慮に相叶ひ、銘々安穩に相續致べき儀に候、右花實の理いさゝか書顯し候、偖亦世間に御

たる事を聢と底意に納置、自他の隔いたすまじく候、是は何故に兄弟ぞと申せば、人は天下の靈物と申て天地の性力を以出生いたしたる我々なれば、天地は則我父母なり、此所に至ては、天地同根の兄弟故、尊卑の差別是なき筈に候へども、請る所の宿因に隨つて高位高官の御方となり、或は匹夫下賤の身の上と生れ來り、此形體に見る所の今日の行狀は、是以て天命にして私に拵たるものにあらざれば、何事によらず我意を募候ては天命に背き申べく候、天命に隨はざる時は自然と凶事も來るものに候得ども、其業報に遲速輕重是あるによつて、我方にて[illegible]は思ひ合はせたる儀も無之といへども、身に難澁來る[illegible]候、其聞ざる處を恐懼と申事も、天命に[illegible]と存じ候、是に依て四海兄弟たる事を明らめ、我より已下の人をば天地[illegible]たる人をば地の天を尊むで

剰へ御督意方へ對しても右之心持出し候ゆへ、尊敬の體も薄く、或は眼上の仁などへも不禮等も粗有」是儀は、皆仰と申理に相聞へ候、全體我を高るは人を侮るの道理ゆへ、君子は必其獨を愼むとも仰られたれば、己が方を謙り候へば自ら人も敬ひ申べき筈に候、其儀いかんぞなれば銘々の本心は本鏡のごとくにして、曇霞なき明らかなる物ゆへ、白きものをかざせば白く移り、黒き物をかざせば黒く移るごとくにて、悦びをうつせば笑ひ、怒りを移せば腹立、敬ひをうつせば是非へり下り申さねば相ならず候ゆへ、何事によらず我方を愼み候事肝要と存候、併斯申時は役儀の規模も是なきやうに相聞へ、却て以下の人にも侮られ候やうにも存られ候へども、右之鏡の德在」之故中々以左樣なる儀は無」之候、ましてや其德の具はりたる人においては申に及ばざる儀、さるによつて理非邪正をも相糺さゞる取計いたし候時は、下たり共下知相用ひ申さゞる儀は、先方に鏡の德これあるゆへに候、然れば上に立候人は下に患の出來申さぬ樣に慈悲を專らに心掛申さずしては、上下和順にいたさず候ゆへ、家も修まらずして銘々の心の內も穩かならず辛勞のみ多ものゆへ、只慈悲の心を本といたすべき事に候、勿論非理法權天と申儀も在」之、時宜に應じては權威を以て取計ひ申さねば相濟まじき儀もあるべきや、其譯は先非と申事は他の人より非道の儀を申立られ候とも、理を以て咎、邪正を糺し候時は申披き出來いたし候、然ども理と申ものには身勝手是有物に候、譬て申さば親に孝行なる人水飴を見て年老たる親に進らせ候ても、齒にも障らずして腹內へ入たるとも御藥にもなるべきと孝心の思ひを増し、亦同じ水

の上を羨み亦は氣に叶はざる事是あるに付御暇をも願ふべきとも思ひ候は、皆是眞實の心なくして洞なる所より發り候不足なれば、何卒實氣を專らにいたし度事に候、然ども我身の上を顧る事出來がたきものゆへ、まづ人の實不實を見て我方へ引請申度候、それにつき三人行ふ時は必我師ありと申儀有レ之候、譬は朋友之内三人を見競候て、此人は實情深く何事によらず己を捨て正直を本として相勤られ候と思ひ、亦此人は實情も是有とは存られ候へど、折にふれては我を愛して勤方を疎かにし、御主君樣の御事は大切に存ぜられずと思ひ、又々此人は萬事を投やりにいたし商内向とても身に染ず、誠に實情薄きとは斯のごとき人や申べきと思ひ、此三人を己が行狀の鏡といたし其あしきをば取捨て毛頭も用ひず、其善をば我身の手本となし一向に習學致候時は、終には堪能の位に至らずといふ事なく、是則眞實の心に基づくの道たるべく候得ば、假令善惡の友に交る共此心がけを忘却致さゞる時は、己が心の鏡曇らざるゆへ、勸善懲惡の理にも叶ひ、亡跡とても忠義の名も殘り可レ申事と存候

一　五穀實のる時は則伏、小人滿る時は則仰と申事は、稻は實のるに隨ひてうつむき、人は實のいるに任せて仰ぐといふ事にて、誰々も存知居り候儀なれど己が身の上と存ぜざるゆへ謙る事は打忘れ、自然と我をたかぶるやうに相成候、先人に實の入と申は身上の富る事のみにてこれなく、銘々年功に隨ひて御役儀等結構に仰付られ候處、其德の至らざる内は朋友は勿論出入方の衆中ども未心易だて退ざるゆへ、自然と人も敬ひごゝろ薄きものに候處、己計役儀の權柄に誇り以下の人をば眼下に見降し、

束にて隙をねらひて枕を友となし、亦は大酒を好む人は酒に心を奪はれ萬事に不足のみ申など、何どして是等を忠義の仁と申べきや、畢竟は眞實の心薄より發り候事かと存候、然れども右體之儀は各方には御座有まじく候へ共、我々今日迄の行狀書顯すまでに候、乍レ去己すら不行跡にて他の教示無益の事など、嘲り申され候儀は有間じく、都て人を見る事おほきなる不足にて、すでに小人は人に見らる、君子は其獨りを愼と申てかやうの事を承り候ても、我方へ引受候儀肝要とぞんじ候、扨眞實の心と申儀を譬て申さば、明樽へ酒を一盃詰候時は實入在レ之故、一切音はいたさず動し候ても倒れ候事も無レ之、然に右の樽へ酒半分程も入置時は、實入不足ゆへ動し候得ば直樣音いたし候、又右之明樽の儘にて一滴も酒の實入是なき時は、洞故音いたさず候へども少し障りてもこけ廻り候、我々迚も其ごとく酒と申眞實の心にて、此實入厚くして一杯詰居候得ば、忠義一途に凝候ゆへ如何樣なる我意に叶はざる儀有レ之とも、御主君樣の大切なるを忘れやらず候儘、聊も不足がましき事など申出す心もなく、譬佞姦の人ありて彼是惡智恵等勸め候事在レ之とも、一寸も轉ぜずして心の牢籠(たぢろく)と申儀は是有間鋪、是全く眞實の心充滿いたし居候驗にて候、偖又半分入の樽は平日に實入薄きゆへ、萬事に付不足のみ申出し、其虛に乘じ邪成事共勸候者も有レ之時は、直に心を動し候ゆへ音の致候道理に候、次に一向實入これなき明樽と申は、分別もなき人をや申べく候、假令ば水に浮べる瓢のごとく何べんともなく今日を送り、日々御養育を蒙り居候事も身に徹し難レ有とも存ぜざるゆへ、いつも不足の思ひに住し、或時は人

は天地の御恵みによつての事に候、然ば天地の御恩之程を深く敬ひ奉るべき事と被ㇾ存候、偖日々舌に味ふ所の食物、身にまとふ所の衣服、雨霜を厭ふ所の家居、并に多葉粉一ぷく鼻紙一枚に至る迄、皆是天地の御恵みにあらずして出生いたす事無ㇾ之候、別て炎暑の節は自然に麻と申もの出生して、暑を凌がせ被ㇾ下候衣服となり、極寒の砌は自然綿と申物出生して、寒さをいとわせ被ㇾ下候衣ふくとなり候儀、能々勘辨いたし候程妙とも不思議とも申計に無ㇾ之儀に候、尤人力を以耕作いたし候事故、豊作凶作の差別を以て價の高下これあるといへども、食を斷候日もなく肌身隱ざる夜も是なく候は、偏に天地の御恵にして廣大深重の御恩に候、此理を辨へ候上は代呂物始として衣類食物諸道具并に紙一枚に至る迄、麁末にいたさず大切に取扱ひ被ㇾ申候時は、自ら儉約の道理にもあたり天の冥慮に叶ひ被ㇾ申候間、深く敬ひ奉られべき事に候

一　主君に仕へ候ては忠義盡し、父母に隨ひては孝行を勵候事は、三歳の童子迄も存知居候得ども、忠とは如何成意味や、孝とはいか樣の心持や我等において其味ひを存ぜず、今日迄もむなしく月日を贈り候事淺間舗次第、人と生れたる詮もなく偖々耻入の所に候、されば能々勘考いたし見候へば、忠と云孝と申も眞實の心より外には是あるまじくと存候、其ゆへは御主君樣は大切なるものとまでは存知候得共、眞實の心薄き時は左のみ大切の樣にも存知られず、夫故商内いたし候にも御調被ㇾ下候はヾ事と申、是迚も代呂物も御意に入らず御求下されず候ても差て殘念とも存ぜず、或は日々の勤方も不

て不忠之至に候間、誰にても等閑に被ㇾ致候儀有ㇾ之間舗事に候

一　人は世の盛衰と申儀を辨へず、是は奢りの心も省がたきものに候、盛衰とは一度盛ゆるものは一たび衰ふると申事に候、假令ば春の花の盛なるは春の風にちり、人生れて盛なるは死に臨んで散、家富て奢りに盛なるは終に滅び散る世のありさま、何れも眼にさへぎり耳に觸れ候所に候へば、萬事分限より一際引下げ候心もち肝要と被ㇾ存候、然る時は御店永久の榮疑ひあるまじく候、斯申せばとて我命數萬歳の齢ひを期しがたく候、人の命は風前の燈火のごとくと承り及候へば、久しくたもち申べき此身とも存ぜず候に、おのれに具はらざる財を願ひ、分に應ぜざる望を求め候も無益の事かと存じ候、畢竟は奢りの心より出たる願望に候へば、萬が一も叶ひ申まじき様にも存じられず、人は只心を正敷身を修め、富ても貧しきを忘れずして奢を退け、一己〻〻の家業を大切に守り、別て朝夕御先祖様の御靈前に跪き御店の繁榮を祈奉り候へば、現世も安穩にして當來迚も善所に至るべく候、此外に餘念有ㇾ之候はゞ銘〻出世の妨となり、行末も身貧しく終焉の後とても惡趣に墮獄すべき由に候へば、此段能〻思慮いたさるべき事に候

一　君父の御恩は前文のごとくに候得ば、筆紙に盡し難き程難ㇾ有存候事に候、然るに人は萬物の司にして萬物を遣ひ果し候へ共、如何成ゆへと申儀を不ㇾ存候、先萬物と申は世界の中にありとあらゆる程の有情非情を申候、此一切の萬物は我一人の爲に出生して、生涯のうち何不自由なく暮し候事、畢竟

は勤へずして、人の落度にならん事のみ企て、人の愁ひを悦び人の歡びを妬みの志であらば、人たるの道に叶ひがたく候故、是等の人は御店の仇敵とも申べく候、別て御店の備へを亂し候儀、御式目の趣を相守らざるの科有之候間、何れ了簡も可在之儀に候、併ながら立身の妨いたし候と申に付、心得違の筋も出來可申かと存候、其譯は銘々出精被致候勵も是なきに、年數の重り候のみを申立られ候ては、其理にあたりがたく候間、此段分別いたすべく候、將又私欲も求めず邪佞の志も無之人は、先善人の樣にも相聞へ候得ども、上を敬ふ心是なく下を憐む心も薄く、理非も糺さず禮義をも疎にして、強に私の身を勵み候志も無之之人は、前の私欲佞奸の人よりは勝たる樣に候へ共、御家風在之候へば頭分に居へき器とも存せず候、是迚も生れ質きに受得たる所に候はゞ致べき方も無之候へ共、磨候心持これあらば玉の光も出さると申儀は有間舗候、兎角は内證の備へ正しく、商内高賣倍いたし目録勘定見宜候へば、惣小一統出精の規模顕れ候事ゆへ、追々御恵の御沙汰有之べき儀に候間、末[illegible]存候て無之[illegible]さるへく候[illegible]役人[illegible]我々どもたちとも非道の取計ひ有之、内證亂にも及ぶべき事の樣にも被存候はゞ無遠慮申聞られ候樣にいたし度候、打捨置れ候ては

餘念なく奉公に打はまり、立身爲ㇾ致候やう引立遣し候を第一とす、又我意を募ると申事は御主君様の御恵みによつて立身いたし候儀を打わすれ、我年功の働きによりて立登り候と相心得、身勝手のみ申立、萬事を私に取計ひ、あるひは朝寢晝寢をいたし大酒を好み、別して御定日之外私にゆるして酒を呑、同じ肴迄も御定を用ひず、我好處に隨ひ下男の勞するをも厭はず手重き儀ども申附、いつとなく御定の如く申通じ定例を改替候儀、皆是氣隨氣儘の振舞にして、家備亂れ候基立と存られべく候、依ㇾ之勤功を積候人程仁義謙退の旨を心中に貯へ候を本とす、又私欲を搆へ候申儀は、當時の人の上においては聊も在ㇾ之儀とは存られず候へども、後世の心得にも相成候へば荒增認置候、勿論私欲に付ては身に貪り候欲と、口に貪ぼり候欲と、心に貪候よくと三ッ有ㇾ之候、巨細に申せば長文に相成候間千が一貳を書載候、まづ心の欲と申は今日の勤方を大儀に存じ、見世を明候て休息にのみ心によせ居候は、人の眼を掠候ゆへ心の貪にあたり候、殊に衣食につけ亦好色の道なども、我身の分限に及ざる所を悔み、不相應の望を達せんと存付、御主君様の代呂物を始金錢を掠取候て身にまとひ口に味ひ坏いたし候は、身と口にて貪候欲に有ㇾ之間舖哉、然に己壹人不實をなすのみならず、友をかたらひ實體成人迄も終に同類に進め入、大切成御恩を仇にて報ずるの輩、不忠不義の至言語に絕候儀に候へば、如ㇾ斯の族在ㇾ之においては惣中子供に至るまで、見及び聞および次第に早速申通じらるべく候、急度可ㇾ申付ㇾ事候、誠に內證の備亂れ候は、萬事私欲より發候間、萬一左様の非有ㇾ之時は、君父の御恩の深き事を

し[illegible]有餘ある時は文を學べとの教に候へは、銘々職分を稽候て其術に達候上にては、何事も心任せ
にて然るべきと存候、必しも一概に心得られ候事にも無之候、然共商人の道を失ひ申されぬ程に、萬
事心掛有度ものに候

一　御式目に内證の備亂れ候ては、商内等も薄く相成、夫に隨ひ勘定出來申さず候との御儀は、一統合點はいたし居られ候事に候へ共、不斷此趣心底に深く貯へ居申さず候ては、君父の御恩も忘却いたし、いつとなく家備混雜いたし候儀も出來申ものに在之候、先内證の備亂れしと申は、上を敬ふ心なく下を憐む心薄く、我意を募、私欲を構へ、佞奸の志是ある時は上下和熟いたさず候故、商内の道も身に染み申さず、自ら目錄尻を不勘定に相成事に候、然れば銘々の身の上も、天命に背き候科によりて御暇被差出候時は、其身も難澁に及び、剰父母にも辛勞相掛、不忠不孝の名を取、行末迚も安穩に渡世いたし候儀も覺束なき事と被存候へば、右之患を遁れ候やうに正路に相勤申され度候、偖正路の勤方はいたし候に付、上を敬ふと申は己より一人たりとも上なる人へは敬ひ禮義正しく挨拶等可致事に、假にも卑賤の時行言葉等を用ず、上[illegible]言葉かへし[illegible]心得違ひの者もいたさず、志も謙候を要とす、下を憐むと申儀は我[illegible]以下の人をは[illegible]在之候は内々異見を加へ、あしき道へ立入不申樣に心附致遣し[illegible]御主君樣の大切成儀を敬導き、

は算筆の嗜みこれなきときは其道疎きものに有レ之候、依レ之商人之儀は算術を專ら心掛らるべき事に候、算勘未熟に候へば商ひの道闇き道理に候ゆへ、行屆ざる所に思ひよらざる損失もこれあるものに候、殊に算筆不達者に候へば、先様の御前などにて算用違等在レ之時は、其人も恥辱の様に可レ被レ存候、又御店の御外聞にも拘り候事も出來申物候に候ゆへ、大様に心得られ候ては相違かと存られ候、人は恥と申事を存ぜず候ては木石に替る所なく候、恥辱を存じ候迄にて、萬物之司と申人と生れたる甲斐有レ之候、勿論順席など引下り候て後輩の人の下知を請候か、或は下輩の人に對し非道なる儀を申出し、却て理に伏し候抔申儀は恥辱の様に聞へ候へども、時宜に應じ候ては遁て恥と申程の儀とも存られず候得ども、唯商人の算筆未熟なるほど大なる恥はこれなきかと被レ存候、兎角眼に見へざる所の恥辱を詮議いたし候が尤の事に候、筆道迚も同じにて世上に名を弘るほどの儀は及びがたく候へ共、他人の一覽に相成候ても、恥かしからぬ程は習學致たき事に候、又宿元抔へ書面遣し候にも手跡見事に候へば、父母にも嘸滿足に思召べき所、いかにも筆法見苦しき文字の居所をも存ぜず、誤字等を認遣し候ときは、御心の内にて定て嘆はしく被ニ思召一べき事と存られ候、然ば手跡の嗜宜ときは則孝の道にもあたり、亦御店の御用に相立候得ば忠節の理にも契ひ、且は生涯其身に付候德に相成事に候へば、より〳〵心がけあるべき筈に候處、休夜の折節など無益の軍書幷繪草紙等に隙をついやし、圍碁双六等にあたら夜を更し候事は有レ之まじき儀と被レ存候、既に徒然草にも圍碁双六好みてあかし暮す

の五常に叶候間、家も治り可ㇾ申筈にて候、然るに此堪忍是なきゆへ喧嘩口論をなし疵を蒙り命を失ひ、或は家の掟を守らず上たる人の下知を背き、終には其身も離滋に及び候事、皆堪らへ忍び候心是なきゆへの事候、畢竟堪忍を守り候も仁の主どる所に候へば、五常の道闕候ては此身に災難も來るべき事にて候、且亦上たる人は下たる者と樂を同じくする事を心がけず候ては、下に恨み出來いたすもの に候、下に恨在ㇾ之時は自ら家亂れ候ものに候、偖下と樂を同くすると申に付て、衣類等は上下夫々の格式これ有候へば、破壞いたす事には是なく候、夜の具等上たる人のみ煖に着し下の寒苦をも思はざるか、食物等も上達候人計美食を好み下には麁食をあてがひ候など、上下の樂み同じからざるの類ひに候、餘は是になぞらへて分別可ㇾ被ㇾ致候、偖又三種の神器と申は我朝の神寶にして、神璽は神の印とて正直を以て神璽と申候、則正直の頭に神やどり候へば、祈らずとても神明の應護有ㇾ之候、寶劒は村雲の劒とて慈悲を以て寶劒と申候、則慈悲を施候得ば七難八苦の惡魔も悉く切拂ひ申候、內侍所は八咫の鏡にて智惠以て內侍所と申候、則智惠明達いたし候得ば向ふ所の人の心移り候ゆへ、自然と其志を破り申さず候、依ㇾ之日の本の大寶にして國家を治るも、此三種の神德にあらずんば穩ならず候、然ば仁は萬事の根元たる事明らかに候へば、何卒仁の道にたがひ申さず候樣いたし度事に候、此外は粗略いたし候

一　四民の上において心掛べきの作業といふは、士は武術の道、農は植刈の考、工は造立の企て、商

直を守り候事は横なる事は横といたし、竪なる事は竪と致候儀正しく直とは申候、少しにてもゆがみ候て人欲の私を加へ候ては、正直と申儀に難叶候、尤不正直とは跡より顯るゝも知らず、虚言偽を語り候のみには限り申さず、代呂物を始め諸道具等取扱候ても、なげやりにいたし跡の始末も致置ず候か、又は年功によつて夫々の役儀被仰付候處、諸所より音信等是有候を我役徳とのみ相心得、支配人にも披露に及ばざるか、又は裁おとし、切端等取集置候て自分之ものと心得候儀、皆是正しく直と申儀を取失ひいつの間にかゆがみ居候、かやうなる微少の所より改めず候ては、大なる不正直も相譯らざる物に候、偏に己が身に付候は同じ事に候へども、屆候と不沙汰にはいたし候との一念の上にて、正直不正直の差別これ有、亦義を守り候道理にも叶申べき事に候、既に古語にも「渇しても盜泉の水を呑ず」と在之候は、孔子はいかやうに咽のかわき候事あるとも、盜人の家の井戸の水をすら汲ては呑玉はずとの事に候へば、古今隔たりは是有とも銘々の本心において賢愚の違ひ無之候へども、かやうの道理を辨へ候て義理を重じ候事第一と存られ候、次に堪忍を保ち候と申事は、常に怠りなく心掛候が肝要と存られ候、先堪忍の二字はこらへこらゆると讀候て、刄の下に居り候ても動ぜぬ心持をこらゆると は申候、それは如何樣なる所と申せば、今日迄堪忍致候へ共、もはや堪忍ならぬと申所をこらゆる場所に候、其所を守らず候ては堪忍と申所詮是なく候、皆堪忍袋を破り候、假令十の內一二やぶれ候へば、千日に刈溜め候萱を一時に燒亡し候道理にて、身も修らず家も齊はず候、則堪忍を守る時は仁義禮智

候ては若[illegible]ものに候、何れ無[illegible]の人に是なきものに候へ共、上に近づく者と下に近づく者との差

別是有候得ば、其器量を考へ用ひ可ﾚ申事に候、既に楠正成千早城において泣男を抱へられ候も、其徳を考へられて一益に立られ候へば、取捨候者とては有ﾚ之間舗候、尤日々若者子供等召仕心持にも渉り申べく候、假ば拾貫目の石を持候人に、貮拾貫目の石を爲ﾚ持候ては、力に不ﾚ及候ゆへ無理と申ものに候、又は貮拾貫目の石を持候人に、拾貫目の石を爲ﾚ持候はゞ是亦其力量を考へざる事に候得ば、人々力丈けの事をあてがい度事に候、下たる人も此旨を辨へられて、我力量より少しなりとも重き品を持べきと心被ﾚ掛候得ば、終には其願成就いたすべき事に候、夫に付己より後輩の人役儀等蒙り候ても、決して遺恨に存じ候儀これあるまじき事に候、かやうの所に仁不仁の違有ﾚ之候事に候、又智恵明らかに達し候理にも叶申べき儀と存じ候へば、疾と工夫有度事に候、偖又禮敬を盡し候と申儀は、己より壹人たりとも上たる人をば親の如く兄のごとく敬ひ、用答問談之節とても、跪き候て言葉を改挨拶いたし、又己より下たる人をば弟のごとく子のごとく慈憐いたし、言葉を和らげ華なく教へ導き申べき事に候、仍て狭き所などにて上下行合候事有ﾚ之候共、實用にて急候はゞ下の者をも先へ通し候様心掛候こそ謙退の志とも申べく候、其外食事の節膳に[illegible]候か、又は風呂等へ入候砌も互に斟酌のこゝろざしを發し[illegible]候半申べく候、[illegible]三枝の禮と申儀是あり、親鳥には三枝謙候て禮をな[illegible]候ゆへ[illegible]親にむかひ候振舞無ﾚ之、[illegible]心得有ﾚ之[illegible]候、[illegible]正

違はず事を辨へしる所、則智なり、信は五常のくさびにて假令ば扇の要のごとくなり、要めはなれ候ては扇の仁たる風を出さゞるがごとくに候、しかしながら此信と申儀は容易に相知れがたき事に候間、知識に値遇被〻致授得あられべき事に候、偖右之道理に候時は、仁義禮智の四ッは別々の様に相聞へ候へども、畢竟は仁の一道にてもり候、勿論仁はいつくしむの所に候へ共慈愛のみ限り不〻申、忠節を勵候も、孝順を盡し候も、正直を守り候も、禮敬を行ひ候も、義理を重んじ候も、智惠明達いたし候か、堪忍を保候も皆是仁の主どる所に候、取譯上に立候人は、仁の道を專ら守り不〻申候ては下たる者之難儀出來候間、能々心掛可〻有事に候、假ば未役儀に至らざる人上たる人の執行ひの是非を考へ、其非なる所の批判をなし、平日おもふやうは我役儀を蒙り候はゞ、無理なく依怙の取計ひいたすまじくなどゝ申居候處、其役に至るや否や志忽ち替り、我役儀の權威におごり、下たる者の理をいひ掠め、人の志をそこなひ、御店の不爲をも不〻顧、前々我見聞しおきたる所の人の舊惡を申出し科に墮し候儀など、皆人欲の私にして不仁之至りとや申べく候、是等は慈愛の心これなきゆへに、これによつて萬事非道の取計ひ方致さず、邪正を正し仁德に服し候やう仕向候時は、惡心これあるものも志を改め、御店の冥加をぞんじ忠節を勵候事に候、扨又上たる人は下たる者の得手不得手を勘辨いたし、役儀を申付候事仁の道に候、たとへば柳の枝に梅の花を咲せ、松の木に櫻の花を咲せ候儀は出來不〻致候、人の用ひやうもそのごとく、人には生質請得たる所の德と申もの有〻之候へば梅は梅なり櫻は櫻なりの役儀を申付ず

論其外諸用に至迄夫々の承り役儀の工夫専にして、心をゆだね他へ氣を散らさず、怠なき時は其實妙相あらはれ不ㇾ申といふ事在間敷、然る時は世間賣物と先々樣にて御見競に相成候時は、店の代呂物格別下直に保等も能、島模樣迚も宜、德用と萬人之御目留り意に叶ひ候時は皆く御評判を請、則其妙德の印にて天性として、聲なふ日毎に御人足繁く御用向彌增、誠に掌をさすがごとくに候、是全商人の涵意とやいはん、然ば店繁榮の有無は家內惣中の和熟一心より外に目留る所あるまじく候、此趣分て頭役の銘銘得と勘考いたされ、萬事惡敷をはぶき實意に打入り被ㇾ申度事に候

但

前段の一條每以熟々承知之儀に候へ共、走る馬にも鞭を打とやいはんと書記所也

一　人は萬物の主なれば、禽獸魚蟲の類にすぐれたる儀無ㇾ之候ては、人と生れたる所詮なく候、されば大學の序に天より生民を降す時は、則旣にこれに與ふるに、仁義禮智の性を以てせずといふ事あらじとあり、然ば仁義禮智の五常は人體に備り居候得ども、其氣質の受たる事或は齊しき事不ㇾ能して、聖賢の君は生れながらにして五常の道を行ひ給ふ、又今時我等ごときの者は下根下智なるによつて、教に隨ひて五常の道備りたる事を知るといへども勤る事を知らず、然れども行ざる時は禽獸木石に異ならずして人たるの益なし、依ㇾ之承り得たる所の有增を書記し候、先仁とはいつくしみの心深く、義とは今日の人たる儀を忘れず、禮は上下其禮を失はず、萬事に渉りて貴賤の差別を明らめ、少しも其理に

時は、自から忠孝の道理に相叶ひ申べく候、假令兩親居ませぬ人たりとも草葉の蔭にても滿足に思召御歡に候得ば、何よりの追善と被ㇾ存候、必しも君々たらずとも臣々たらずば有べからずと心得られ候て、忠節を相勵まれ候儀肝要に存候

一　夫日夜行狀勤方工夫被ㇾ致候儀、役目とのみに被㆓心得㆒候人は在ㇾ之間舖候得ども、如㆓前書㆒銘々御厚恩蒙り居候事ゆへ爲㆓冥加㆒と存じ、古來より御主君樣より御建被ㇾ置候ごとく、諸品仕入元其國々產物出場所向を相考へ、相庭下直の時分島模樣風合遂㆓吟味㆒下直に調入、代呂物取扱第一に心掛專用之事、其上見世御買人樣方勿論、先々より御注文仰被ㇾ下候節、手早く御用向を相辨じ等閑に不ㇾ致、御誂もの染仕立等被㆓仰下㆒候はゞ念に念入、少しも相違無ㇾ之樣出來上り悉く相改、又は少分の商內を麁略に不ㇾ致諸事實を盡し、地性宜所見繕ひ下直に賣上る事を元と在度候事、左候時は自と賣高も相嵩代呂物の取扱麁抹にも難ㇾ成、損じ等も少く是商人の根元也、然るに厚き御恩をも不ㇾ存人は唯物事役目のごとく存じ、手足あるべかゝりに動し候へば宜ものと相心得、賣物の善惡にも差別なく、先々樣より御用向申參候ても左のみ心に留ず、浮世噺雜談或は自分身の廻りに心を奪れしゆへ、商內の妙と申事難ㇾ顯、既にいにしへ左甚五郞が彫候鷄は時を造り、後藤祐乘が作の蟹は水中にて動き、狩野古法眼が馬の畫は野に出、艸を喰ふなどゝ申事は、其職分の妙と申儀にては在ㇾ之間舖哉、此人迚も人體に替り無ㇾ之何事によらず如ㇾ斯の妙出候と申は、其職分に一向入り候より外有ㇾ之間舖なり、然ば商內は勿

相煩ひ候得ば醫療加へられ御介抱成下され、殊に〻様之御店に相勤候事ゆへ、銘〻宿元にて食し申さざる方も在レ之候、山海の珍味をも戴かせ被レ下、幷に他家に勝れ五節句に休息を致候やうに一日宛の御暇被レ下、別して年褒美等の御心附下し置れ、其上年數に隨ひ休息とり等迄被ニ仰付一、冥加之程難レ有奉レ存候得ば感涙肝に銘じ、心に浮ぶ所の九牛の一毛を筆に顯し候、此餘は銘〻身に引請られ候處にて、御恩之程感察いたさるべく候、因レ玆童子敎にも父の恩は高き山須彌山猶低し、母の恩は深き海滄溟海却て淺しと譬られ、纔十一二歲まで御撫育に預り御恩すら斯のごとし、況んや二十ヶ年三拾ヶ年來御厚恩の蒙り候事何に喩へ申べきや、去るによつて喪服の俗令にも、主君の忌服は、忠義によりては父母同じ事たるべしと在レ之候へば、何れ忠孝は偏廢しがたき事に候、旣に武家方は四民の頭に立せられる程の儀在レ之、御主君樣へ身命を差上られ候驗にや、戰場に臨んでは命をも惜ませられず、忠義によつては親をも不レ顧候、いかに身は士商の隔て是あるといへども、心においては忠節違は在レ之間鋪事と被レ存候へば、責ては命を捨候程の儀は仕らずとも、我身は御主君樣へ差上奉り候ものと心得、不忠なる儀仕らず、商賣之道に打入り御恩を厚く存じ候はゞ、我身の程も大切に相成不養生も[illegible]

奉公を大切に相勤候やう朝夕思召被」下、母の方にては風邪流行候に付ても相煩は致さゞるや、灸治等いたし候て暑寒にも侵れず候か、大酒不身持等いたし病身にも相ならず候やと、誠に月日の御光りを拜せざる日は在」之といへども、我子の事を思召ざる日は是なく候、如」斯認候時は父母の思召異なるやうに相聞へ候得共、落る處の御慈悲は同じ事に候、然るに十二三才より當御店へ罷出候處、御主君樣は京都に御座成せられ候へども、御名代として夫々の役人を御附御世話被」下候に付、作法物言等まで上下の差別を御敎被」下、夜るの寐臥の御世話迄御心附被」下、冬の寒夜は夜具蒲團を以御劬り被」下、夏の溫夜は蚊帳を以御凌がせ被」下、頭上の髮月代よりして身にまとふ所の四季の衣服凍患を除く脚下の足袋、晴雨の履ものに至迄、一ッとして、御主君樣の御恩にあらざる事是なく、別て日々三度宛戴候食物は、父母より受得たる所の命を御やしなひ被」下候根本に候、然るをこゝろなき人は奉公いたし候に付、年々定銀幷に衣服食物等を御あてがひ被」下候樣に存、己が勤候を却て御主君樣へ恩にかけ候氣味合是あるものに候間、一衣一飯を戴候ても冥加をも存ぜず、天道の御罰を蒙る事も恐ざる事に候、先奉公と申文字は公に奉ると讀候、是は何を公に奉るなれば、我身を公に奉り候、尤我身體髮膚は父母より預りものに候、其預りものを御主君樣へ捧奉り候事ゆへ、我物と申體は無」之候處、己がものと心得居候に付、得手勝手をいたし、或は不足を申、或は氣隨氣儘をいたし、或は身持放埓に相成、或は大酒大食を致候て身養生致さず、或引込居候程之病氣にも是なきに御奉公を闕、あるひは店用に

一、父母に孝順を盡し主君に忠節を勵み候事は、人たるの道にして、車の兩輪のごとく鳥の兩翅に譬て、一方闕候ては相濟ざる事に候、既に片輪車には通用不レ致、車の所詮無レ之候、人として忠孝の兩度を失ひ候時は鳥の翅なきがごとくにて、性を請たる甲斐是なく候、此道理は申さず迚も銘々合點の事に候へ共、知れたる道も不斷歩行いたさず候ては、草生茂りて道を失ひ候物に付、君父の御恩の程を露計書記し候、抑我身出生の根元は、父の白骨と母の赤肉と和合いたし、始て形顯れ母の胎内に宿り候、尤懷妊の内とても夫々の式在レ之、食物を始寐臥起居に至る迄大かたならぬ心遣ひにて、或は惱み或は苦しみ、漸々十月に及び出産有レ之候所、夜具襁褓等迄支度被ニ成置一候て、晝夜母の懐にいだかれ、二便を洩しても厭くも思召さず、手づから取始末被レ下飽迄乳味を戴き、其上病に犯れ候時は、父母ともに終夜寐玉はずして御看病被レ下、針灸藥の御手當に預り衣食の御養育によつて段々成長いたし候に付ても、人中へ出候ても恥しからぬ樣にと筆道を始、諸藝御學はせ下され、當御店へ之御緣[illegible]丈の御[illegible]被レ下候[illegible]月を[illegible]又は年功を積み立て[illegible]かね候ても、いつ迄も幼稚のごとく思召、父之方にては御店之御家法を背かず、身放埒に相ならず不埒なる儀も不レ仕、御

商人の第一は少分の商ひを大切にいたし候儀肝要と被㆑存候、其譯は前文の通り商家の儀は、何方よりゟ貢被㆑呉候と申儀無㆑之ゆへ、纔之小賣商ひにても家内大勢相續之助力に候、其根本と申せば、人は命程大切成ものは無㆑之、命終候てはいかなる望有㆑之とも益なく立身出世も何にかはせん、然ば我命を御養ひ被㆑下候基立に候間、其御恩の程を能々被㆑存候て、多少の差別いたすべき儀は無㆑之候、世俗之諺にも、微塵積で山となると申ごとく、日々小賣高を以て半季中積り上候時は廣太之賣高に相成候、左候へばおろそかに可㆑致筈は無㆑之候處、兎角人は差當り候所のみに目を付候ものゆへ、第一商内の少分なるを侮り、第二には御使の女中衆子供衆とのみ見下し候儀在㆑之物に付、思はずして會釋方も麁抹に相成候事も是あるべきやに候、萬事之儀我身に引請ず候ては相知れざるものに候、先銘々調物いたし候節、外方へ參り候ても餘分の買もの致候時は、鼻の程うごめかし候氣味合にて、かさだかにて無理成直切等もいたし候へ共、少分の調物いたし候節は自ら卑下致候心持にて、先方の仕向まかせに相成申物に候、然れどども會釋方挨拶の善惡は歸宅之上にて批判いたす事に候、其ごとく他所より御買物に御出被㆑下候御方迚も、御心持に何れ御替り是なきもの候へば、是非此方の取扱方とても、善惡につけ御風聽に預り申ものに候ゆへ、兎角世間之御評判宜やうに仕向差上度事に候、畢竟は惣中今日の露命を繋候因(たね)に候へば、聊の御買物に御出被㆑下候御方樣迚も、私の命を御養被㆑下候爲に御出被㆑下候と、御恩之程を內心に深く存じ候て、難㆑有御座候と御禮いたし御返し申候樣にいたし候へば、自然と

増より外は在ゝ之間敷儀に候　其増減によつて年々歳々陽氣陰[illegible]の取計ひ致候儀共知と存じ[illegible]

商高の過不及に拘らず累年之式を建置候事は、相續の基を失ひ候道理かと存候、畢竟は己の身贔屓よりして忠節の心もなく、去年今年の見競致し衣食心付方の劣たるを不足に存じ、勝たるをも御恩と存ぜず、冥加を知らざるの至り恐れ耻べき事に候、假令御恩を存ざる人に於ても、商内繁昌不ゝ致候ては例年の定規相違候事を辨へ、一向に商内に打入り候て心の奢をしりぞけ、今日雨霜に濡ず炎暑寒氣を厭ひ飢渇の愁を除き候より外、此上之儀あるまじきと存らるべく候、勿論ヶ様之儀は無ゝ之事に候得ば假令ば家曲み壁落候とても起臥いたす所在ゝ之候得ば能と心得、麁布綿服を着し候ても肌身を隠し候へば宜と存じ、麁飯麁菜を食し候共舌三寸のうちのみにて、腹中へ入候ては麁美の差別是なしと申心持にて、どこまでも不足を遠ざけ候やう致候時は、則足事を知るの道理にて、自然と天の御恵みにも相叶家内安泰の相續いたし、銘々の冥加も宜しかるべき事に候

一　商内之儀は多少を[illegible]る事に候得ども、餘分の商内は自然と[illegible]づしも無ゝ之ものに候へども、兎角少分之商内をば麁略にいたし[illegible]るものにて候得ば、

所男共より追從致食物等宿元へ差遣し候か、又は我々共より申出し候て、不時之食物等宿元へ運ばせ候か、代呂物を始紙類多葉粉其外帳面へ相記さず、斷なく宿元へ持參いたし候か、大酒を好み身持放埒に在レ之候か、費成金銀を遣ひ捨借越銀餘分いたし候か、女色にふけり夜泊り抔致候風聞在レ之候か、華美を好み衣服を餝り家法に物數寄致候か、不用之諸道具等求候か、前文之趣我々共身の行狀幷取計ひ方おいて相違之儀在レ之候か、右之外にも相心得がたき事ども有レ之候はゞ、誰にても心あらん人は異見相加へ吳られ候樣に賴入存候、愚盲の我々共故折にふれ時に隨ひ候ては、各方の氣にさからひ腹立いたし候儀もこれあるべきや、夫迚も一旦の事のみにて、野心に存じ恨み申所存毛頭無レ之候間、假令左樣之儀在レ之候共懲申されず候て、遠慮なく申談吳らるべく候、我々共儀も成べき丈は相愼候樣に可レ致候、若又面談にて申難く被レ存候はゞ、書面に認候て差越され候樣賴入存候、尤名前認候ては如何と被レ存候はゞ無名にて不レ苦候間、頭役中迄被二指出一候て夫より我々共へ御渡可レ被レ成候、乍レ去如レ斯相認候迚も我々共身持勤方のみ宜いたし、立身出世相願ひ候存念聊無レ之、只々上下和順いたし水魚の思ひに仕し候時は、自然と家整備亂れず候得ば、御店萬代不易之瑞相、商內繁昌の基ほんならん事疑ひ有間鋪候、一統に此趣能々味ひ被レ申候て、同心被レ致候樣に希候事に候

一　町家商人と申者は祿之無レ之者ゆへ、年貢知行等を何方よりも貢吳候方無レ之、唯日々の商內いたし候所より、おのづから寶德と申もの顯れ候て、其利潤を以て家內相續致候事に候、依レ之商內高倍增

替申渡し候か、又は己に諂ふ人を愛し、差たる功も無〻之者に順席を引上げ、得手不得手の差別をも不〻辨重役に居候か、忠義なき人亦實體にて御店の役に立べき人など聊の落度を申立、暇遣し候か、假令律義にても下知行屆かざる人物を支配役に居候か、己が身よりのもののみ立身致させ、他所より參り候人は其沙汰に不〻及しらぬ體にて差置候か、其外依估贔屓の沙汰を以て人の理を非に言掠、己が惡を善と僞り候か、何事によらず我のみ合點いたし候へば相濟候か、心得一存を以差略いたし示談に及ざるか、我々共の氣に叶ひたるもの左程の働と申立候儀もこれなきに、心附等いたし遣し、又は氣に叶ざる者格別の働きこれあり候ても存ぜざる風情にて、心附等之沙汰に及ばざるか、各方より申出され候儀是非も相糺さず、我意を以取用ひ申さゞるか、勤べき所の役目をおろそかにいたし今日を徒に送り候か、出入方の衆中へ依估の取扱致候か、御定を相守らず他所へ時貸等いたし遣し候か、我々共出勤之時刻日々遲滞いたし、夜分迚も歸宅急候か、日永之節毎日晝寢等致候か、折々虚病作病を構へ出勤不〻致候か、或は内用を以度々他出いたし店を明[illegible]の取扱ひいたし、我々宿元にては奢りを究め遊興がましき取沙汰これあるか、日々食事いたし候節[illegible]好ミいたし候か、[illegible]

獨愼俗話 一名白木屋管店書

一　我々共儀不思議御緣を以て、當御店へ幼年之節御目見得に能越、誠に東西も辨ざる愚者を御召仕被レ下候に付、累代の支配役衆中を始頭役衆中に至迄、唯々御奉公大切に相勤候樣被ニ仰下一たればこそ少々宛耳に止り、數年來の御厚恩蒙り奉り候得ども、己壹人の働を以て成人いたし候樣に存、亦は我賢して御役儀等も結構に被ニ仰付一被レ下候と而已相心得、天道之御罰を恐ざる働今更恥入奉るの所なり、實に其本源を忘却し己を捍擧(たかぶる)は、深恩を思ざるの失にして、禽獸に替る所なしと古人の戒今我身の上思ひ出られ候、然るに無智無才の我々共、年數之功により斯のごとく結構に被ニ仰付一、各々方筆頭に居りて當御店預り、商内の道を勵ませ候儀甚々恐入るの所也、其故は身不肖に候へば萬事行届かざる勝と存候、左すれば各方にも快からざる事而已儘これ有べしと察存候、然る時は自家内の備亂べき筈に候、家備混雜いたし候へば自然と商内の道も衰へ、不易の相續心えなく候に付、此度愚意相認候間何卒惣中子供に至迄一致和順して、我々共と同心においては大慶これに過べからず候、畢竟は各方粉骨碎身して相働被レ申候時は、御店繁榮いたし商高も加增いたし候時は、各方勤功の勵方によつて我我共儀も忠節相立、何れにも天の道に相叶被レ申候に附、當御店末代忠義の名も殘り候て、人の鏡にも

獨慎俗話

一名白木屋管店書

羨むべからず、工商の富るゝ貧するも其場所に有り、又只蓄たる商賈たり共、平日利欲に拘りて營ゆへ、亡るに及では睫する間もなく亡なり、農家は衰ふるに及でも五七年も保ち、其内には又與然として起る事ありて、家名を失ふ事なし、商賈家に生るゝ共、分辨ある輩は田所を求むるものある、富て金銀有りても一時に失ふは金銀也、田所は一時に失ふ事なく、年々利を生む故也、因て農家に生れたる輩の商賣を羨むべからず、農業を專にするなれば、家を失ふ事なし

近來諸貨貴しといふは、前書する如く金銀多く成し故、金銀賤しく成て諸貨貴く見ゆる、金錢賤ければ動散り人民の手に入易、奢侈するゆへ貨物も貴くなり、貨物貴ければ貨物の商賣は富べき道理なれども、譬ば絹を織るものは糸貴し、糸とるものは薪貴し、因て諸貨貴く、窮するも天下一統、賤ふして富るも天下一統なれども、其内に富めると窮するとは其人にあり、今天下皆花麗を好みし奢侈すれども、人の華美に不ㇾ拘、其身質素にして家職を要にするならば、富ずとも窮する事なし、又天下の人民皆如ㇾ此の人心になるならば、金錢賤ふして諸貨貴しといへども、諸貨捌け難ふして自ら安くなるなり、因て天下の人民飢寒を凌ぎ、命を養ふの外好事なき事は、天下に窮する人なしと云々

東都

藤井直次郎書之

世營錄 終

一ッを餘せば三年に一年の貯ひ出す、如ㇾ此して六年耕せば二年の貯有、九年耕せば三年の貯有、三十年積は十年の貯有、因て水旱風の災十年續迄民飢事なく、隋の文帝の時に長孫平といふもの地理の政法を司る官人にて、君に奏聞して在家に倉を建て、農家の貧富に隨ひ、年毎に籾麥一石以下を出さしめ、其村の長是を主り、蓄置て飢饉の時是を出し難義を救ふ、急難を凌たる故に義倉と號す、日本にては文武の代に此法を行ふ、愚按ずるに、先王の政は四分一を餘す法なれども、今天下一統窮したる時なれば、四分一を餘さば其年の用度足るまじ、然れども十分一を餘す事は、少の用度を節にすれば餘されずといふ事なし、因て士人は税の十分一を餘し、積貯置、凶年の難を凌ぎ、農家は其地理を支配する官人世話し、年々行德の十分一を出さしめ、官人封印して其村の身元善き長に預け蓄積、凶年に飢もの丶難義救ひ、豐作に返させ積置けば飢に及事なし

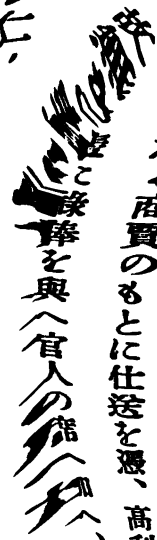
近來農家に居りながら工商の職を稼とするもの多して田所荒るなり、工商の職は其日〱利を得る所見へて營易く面白き故、我〱と工商に成れども、始に利を得るものは後に亡び、始に利を得ざるものは末に利得身終る、農業は春耕し夏耘て、秋に至りて利を得て遠き事なれども、米穀利を得る故に蓄に成ものなれば、凶年の時にても飢事少し、工商は日々金錢にて利を得故奢侈出て遣ひ捨る、蓄る事ならずして、凶年有て米穀貴き時は、先に飢るものは工商也、又町場といふものは在家有りて、在家より用度を辨ずるに善き場所〱に古より有て、在家より賑して繁花なる故に富たるものあり、其富

町の於ニ宰所ニ主の官紙と號し、白紙の裏に印を押して、其領知を支配する官人へ渡置、在家より東都へ奉公稼に出度ものは、其所の官人へ願ひ官紙を貰ひ、其官紙へ其村の長送り狀を認め持せ出し、又東都にては町々の町へ官紙の印鑑を渡置、在家より送狀持來らば、印鑑に引合可レ爲ニ世話ニ旨の命を下させられなば、在家より闕落して出る事ならず、又田畑を捨て可レ出旨を願ふ族をば、其村の長官紙を願ひても貰ひ吳れず、田所を多くもたぬ百姓の次男三男等にて、親兄得心にて東都へ出るものには田所の障にもならず、東都へ出て無宿莚冠にもならず、闕落して出るものには無宿莚冠になるもの多かるべし、如レ斯行れなば東都に惡もの少く、田所の人民多く減ずまじきなり

凶歲に飢饉なかり [illegible] 先王の行、禮記王制に國九年の蓄なきを不足といふ、六年の蓄なきを急といふ、三年の通 [illegible] 年耕 [illegible] 一年の食あり [illegible] 年の蓄なきを國非ニ其國ニといふ也 [illegible] を以たる時は、凶旱水溢有といへ共民菜色なく、是は一年の實を四ッ割、其三ッにて一年を賄ひ一

度辨じ、皆佚樂より興也、漢の代の武帝奢靡を好み、臣下是を學び貧窮し、富たる商賈に無心して用度を辨ぜしに付、漢書に此事を「封君低首仰給」すと書けり、さすれば古も今に似たる事も有、愚思ふに、國亂たる時は武學も自ら習へども、治世には日々に心がけねば急の間に合ず、因て武道文道に心慮を碎くならば、佚樂の暇なふして美服珍貨に金銀不ㇾ費、さすれば美服珍貨の工商衰微にして、農になるもの有て田家賑ひ荒れたる田所も立歸り、金銀工商の藏に落ずして、士農の藏に滿て窮する事道理なり

農家の人民奢侈するは、國々城下の外に二三里づゝの間に町場有、毎月六度十二度の市日あり、在家より賣買の貨物持運んで營の用度を辨ぜし處に、近來連々在家殊に商人出て、酒屋は勿論百貨を賣買するゆへ、居ながら自由足りて奢侈し、農業を怠り佚樂して衰微し、佚樂するより若年の輩骨折ることを嫌ひ、東都并繁花の町々へ出て、骨折ざる稼する輩多く、水呑たる百姓の子供たりとも、田家に奉公するものなき故、田所を持人抱へ耕せし農民、二十年以前迄は男給金は一兩二分位、女三分位なりし處に、近來男四兩女三兩位に成し、因て人を抱耕しては不ㇾ引合、人少にて耕す故田所の養ひ手入不ㇾ行屆、地所疲て登り薄く連々衰微し、古より田所多く持たる農民多く潰れ、田家の竈減じ田所は荒て山林となる、東都は在家より出るもの多き故に、連々人數增し小商人多くなり、百貨持ち步行賣者も賣手多き故、賣數少く利薄く、其上一體の人數多き故に、朝夕用る薪柴の類貴ふして倶に困窮す、

百六十五度四分度の一を歴て故に歸る、是天道の正直なる處也、人の道は天に本附たるものなれば、上天子より下庶人に至迄、平日の業を悉く天道に順てなすならば災受る事なし、因て天道を重んずる人は修身・齊家・治國・平天下也、是堯舜天下を治に天文を重んじ、朝廷の側に司天臺といふ高き臺を作りて、太史欽天の官人を日夜此臺に登らせ置、天文を視せ、若し變見る事を奏聞するならば愼で徳を修め給ふ、古の人主は天を畏るゝ事如レ斯、又虐レ民天道を輕んじ、天下亡し失レ身ものは夏の桀・殷の紂が如き是なり、人の奢侈する其本は士人より發る也、士人は國亂れたる時は軍旅行役に暇なく、治世には心慮を痛る事なく、佚樂して好食・美服・珍貨を弄び而已して、金銀工商の手に落て利潤有ゆへ、工商賑ひて奢侈し、農民は骨を折て利潤薄く、工商の骨不レ折して賑を羨んで、農民より工商に成るもの多く、農人の人數減じて、田所手に餘り荒て山林となり、貢納も減じ士人は貧窮す、是己より發りて己へ返る也、故に今諸侯の内には貧窮して家人に扶助する事不レ成やうに成行しもあり、富たる商賈のもとに仕送を濕、高利を出して金銀を借り用度を辨じ、工商を富し又珍膳を甞し、故[illegible]を與へ官人の[illegible]へ[illegible]へ、取り用ひて家事を行はず[illegible]是より小人なる故に知レ利不〻知レ仁、故に一家一領不服にして[illegible]動す、米俸給する士人は[illegible]宿へ低レ首武士の失レ威、金[illegible]を借り用

ゝ成故、不益の兩がへ賃を出し金に替て費立なり、また金と南鐐とを懐中するに、金をば惜み跡に残し、南鐐は錢同然に心得遣易、是不ㇾ貴所の人心也、又諸買物直を立る事、播州大坂諸國へ運送の津にて、古より富たる商賣のものあり、諸賣物大坂へ入津して其時々の形氣に隨ひ、直を立るに銀にて直を立て、夫より諸國へ運送す、貳朱判不ㇾ行已前金と銀との兩替貴き時六拾貳參匁、賤き時は七拾目餘にて兩替せし處に、今は天明六年ナリ四拾八匁より五拾五六匁に兩替す、是れは丁銀は不ㇾ增して、文金は貳朱判出たる丈け增して、金の方多、銀の方少く、金賤、銀は貴くなりし也、因て伊勢より東國金を遣ふ國々は、古も今も銀にて同じ直のものにて、金を出し買ふ時に元一兩にて買しものを、今は一兩一分餘にて買なり、是金と銀との相場計にて、百貨貳割餘貴ふして人民窮す、又金賤く成たる證しは、大判は慶長金の儘にて、慶長の小判にて七兩二分、文金には六割半貴きゆへ、十二兩一歩二朱の割なれども、賣買の兩替に、寳曆年中迄は拾二三兩の兩替なりしに、連々と大判貴くなり、今は二十二三兩餘に兩替す、是則文金賤くなりし證シルべなるべし、金錢多ければ賤く貨物貴く、金錢動散て小人の手に入て奢侈し、家業怠り人心天道に違ふゆへか、元字金銀十七年通用のうち、前に書するごとく數度の天災受て窮し、正德二より慶長の故金銀に復し、二十五年行るゝ內、天災は一度にして米穀充滿し、慶長の古に立歸り、食するに窮する事なし、元文元辰年より今の文金銀行れ、今年迄天明六年ナリ五十二年、前に書する如く數度の天災有て窮す、是金銀高き時には窮せず、賤時には窮

此金銀元祿八より正徳二迄十七ヶ年行るゝ内、前に書する如く五年に四度の大天災有、其外四五分の損毛なる天災は數度にして人民困窮し、金銀僞造の罪人絶ず、文昭院様此事を深く憂へさせられ、登極の初より金銀幣を故に復さん事を思惟せさせられ、正徳二辰より先乾金を行る、同四午年より慶長の故金銀に復し行れしより、貨物價賤くなり、金銀動かずして小人の手に落ち難うして奢侈ならず、金銀を貴く思ひ家業を樂とするやうになり、追々米穀も充、享保の末に及では慶長の古に立歸り、一兩に一石六七斗に賣買し、金銀小人の手に入ざれども、食するに易かりし由、此金銀正徳二より享保二十迄二十四年行るゝ内、關東の天災と云て諸國へ響きたるは享保十三申五月計、元文元辰より今の文金銀行る、此金一兩目方三匁六分、其内へ銀一匁一分七厘雜へて、慶長金に六割半位を下げ、一分金は目方九分也、銀も銅を雜て位同所に下げ、米穀・百貨とも慶長金より六割半價貴くなる、金の位にして動き強く、小人の手に多く入故、奢侈し遊樂して家業を怠るやうに成行し所に、安永元辰より南鐐の貳朱判行れしより錢の代りとなり、其上鑄錢多く、錢賤して小人窮す、又南鐐の費立事は、譬ば金計の時に一分錢を買へば一貫四五百文有故、行先にて百文二百文入用ありても殘多く、懷中に入るにまかせしゆへ、無據事ならねば遣はずして濟事あれ共、貳朱判にては半分なる故、嵩みなく調出にして用度辨じ、能錢を買て遣ひ殘り有故、又無益に遣ひ捨る事あり、遠方へは多持歩行事不

魃、安永五申八月大水、同九子八月大水、天明三卯七月信州淺間山燒て、上州吾妻川より利根川へ泥石を押出し、上牧・中牧・下牧三ヶ村泥に埋れ、人民多く死し、砂石數十里へ雨り、地理廢たる事勝て計ふべからず、此時に米價四斗にて、久しく九斗一石に賣買せし米價宜きに依て、田所多く持たる農民は前年より圍置たる米を賣、金銀多く取り悦びたるも有り、田所不持水呑の無貯小民は、飮食の便りなく袖乞に出、道路に餓死するもの多し、同年七月大水にして、今年の飢饉說初に書す、但今年ハ天明六年本朝にて古へは如何なる金幣なる事しらず、中古以來は沙金を用ひ、織田信長の時に板金を用ひたりと聞く、銀も何れの世より始るといふ事詳ならず、今の金銀幣は慶長年中佐渡の山より金多く出て、金を作らせられ海內に行る、此金大判金目方三十六匁、小判金四匁八分、一分金一匁二分にて、大判は小判の七兩二分なり、此金七十有餘年行るゝ內天災を尋るに、寬永三丙寅旱魃、同四卯年地震、八月洪水、同十酉相州小田原大地震、延寶三卯飢饉にて東都小民へ施行出させられたれども、さのみ飢餓する程の事なし、尤も關東計りの天災にて其外は不知、米穀は金一兩に一石二三斗より五六斗迄に賣買す、今の文金に割合せば八斗より一石迄也、都て世の風俗質素にして、貨物の價賤かりし也、元祿八亥年慶長の金銀を止められ、銀・銅・鉛・錫を雜へて新幣の金銀を造せられ、元字金銀と稱し海內に行はる、此金銀は正金銀にあらざる故、金は黃金の直色を失ひ、鍮石の如く、銀は錆を生じ鉛錫に異ならざるに依て僞安く造僞安く、罪人多く磔に行るゝもの絕ず、民間にも此金銀を賤んじ、惜まずして遣ひ捨る、

下谷・本所の人家水に浸り困めり、其時伊奈半左衛門に命られ、家根に上り居て飢るものに握り飯を與へ救ひ給ふ、また寶永四丁亥十月下旬富士山燒て砂石數十里へ雨り、地理埋もれて廢たる事、勝て計べからず、是に依て米價元字金一兩に七斗餘にして、小民困むといへども、元祿卯以來困窮に馴たる故飢死する程の事なし、其翌年より米穀稍々賤くなるべき處に、正德二壬辰年元字金銀通用止り、慶長の故金に復す迄との上意にて、先乾金を行る、此金一兩目方貮匁四分にして、慶長金の半分なる故に、米價四斗餘を以て商ひ、正德の末に及て小民飢餓するものあれども、元祿卯年に比すれば甚だ少し、同四午年に至り彌慶長の故金に復し、新金銀と唱へ海內に行る、夫より米穀・百貨・金銀の位に隨て賤くなり、初は金一兩に米穀九斗より一石にて、漸々に賤く成るべき處に、享保十三戊申五月關東大水にて、東都兩國橋落る程の水災にして、米穀登り薄く八斗內に商ひ、され共小民飢に及程の事なし、同十七壬子年西國に稻の虫附米穀登らず、畿內北國の米、西國の方へ引て、東都へ出でず、其時に高間傳兵衛といふ商人占買し舟に圍ひ置たるゆへ、翌丑の冬より價貴く、寅の夏に至り御張紙新金五十六兩にして、一兩には六斗二升五合（此五十六兩ハ今ノ文金ニ割合ハ九十二兩永四百文ナリ）にして、元祿已來の高き事なれ共、此時に東都に飢餓のものなく、享保の末に至り益々米價賤く、慶長の古に立歸、豐作續、金一兩に一石六七斗に賣買す、（今ノ文金ニ割合ハ一石ホドナリ）元文元丙辰より今の文金銀に代り、海內に行れしより、天災多きは何ぞや、關東計を尋るに、寛保二戌八月大水、寶曆七丑七月大水、明和三戌年八月大水、同七寅同八卯兩年續大旱

を助け給ふ、又聖武天皇の代、天平七年飢饉にして、先例に隨ひ又請て七十五艘を送る、其時始めて日本へ小兒疱瘡の病來りしと醫書疱瘡論に見へたり、又鎌倉右大將家の後、北條武藏守泰時、天下の權を執りし時、寬喜四年四月二日改元あつて貞永と號、其年關東いかなる氣運に當りしや、打續大雨・大風・大地震・洪水・旱魃・火難・疫癘等あらゆる天災あり、米穀・柴薪貴くして人民百姓等困窮し、親に離れ子を失ひても、朝夕の烟竈に絕、飮食の便なく、高貴の門に袖を乞、食を乞ても、終には行倒れ飢死するもの道路に充、武藏守此有樣を聞、痛ニ胸肝一爛かし、飢凍の民を救んと矢田六郎右衞門尉に命、米穀九千餘石を持て救ひ、濃州の貢納を停め、往返流浪の人等には粥を煮て與へ、緣者を尋ねて行歸るものには、行程の日數勘て旅の糧米を與へし也、米穀貴しといへども中古以來沙金を用ひ、唐の開元の錢多く渡り通用せし時なれば、今の金に割合競る事詳ならず、此度の飢饉此三度より薄かるべし、其外古へ飢饉ありといへども、左程の事なくやうす詳ならず、御當代にては元祿十二卯年八月十五夜、大風にて關東は米穀登らず、其冬御帳紙、元字金五十兩にして、東都在々におゐて飢餓するもの多く、道路に倒死するもの數しれず、本所の邊に小屋を建られ、粥を與へ救給ふ事百餘日に及べり、其翌年の春に至り飢民稍寡なり、其秋米穀も熟し米價賤く成べき處に、癸未十一月廿三日夜、東都大地震にて、關東諸國殃災に罹り、大小の諸侯は、東都御城の修理に人夫を出し困めり、其翌年寶永と改元有り、申七月三日關東水災にて米穀登らず、價貴事前同然たり、此時東都近在猿ヶ役といふ處切て、

世營録

藤井直次郎著

天明六丙午年不時の冷氣にして、諸國米穀登り薄く、半毛に至らず、關東は七月十七日より大水にして、在家は勿論、東都の下谷・本所・武家・商家、洪水に浸る事數日に及べり、農家の人民飢餓するもの多く、富たるものゝ門に食を乞ふといへ共、遂には道路に飢死するもの多く、常州信太郡の邊には、人家に畜たる犬雞を食したるも有、四月に至り麥作に取續き、農家は息を繼しかども、五月に至り俄に米價ひ貴く、金一兩に二斗内外に商ひしかば、東都の工商共飢餓して、米商するものゝ家を打破り騷動す、因之伊奈半左衛門に命ぜられ、上より御金貳拾五萬兩出させられ、在々より麥を買集、價半減にして町々へ與へられ救ひ給ふ、騷動して家を壞ちたるは、京都・大坂・其外諸國繁華の町々皆同時に同然たり、是人倫のする所にあらず、天のする所也、近來聞傳なき飢餓なるに依て、古を尋ぬるに、推古天皇の代に天災ありて米穀登らず、飢るもの多く、天皇宸襟を困め給ひ、朕不德ならば天吾をこそ困めん、萬民に何の過あらんやと恭んで天禱、三韓へ米穀を乞て、七十五艘を送りしに仍て飢民

世營錄序

夫れ人窮といふ事は天の咎也、咎受る事は驕怠人欲恣にして天理に違ふゆへ也、依て人君は六經を學び、經濟の術に達し、民に不レ爲レ敎國家治る事なし、鄕人修身には政法を守、天理に隨て不レ爲レ業修る事なし、故に慶長以來の風俗、天災の曆數を撰んで、世營錄と號す

東都

天明七丁未秋七月

藤井氏書之

世營錄

藤井直次郎著

治國譜及治國譜考證終

ヲ禮儀廉恥ノ綱モ殆ンド絶ヘントス、相公政ヲ執テ御支配ノ本ヲ强クシテ御永續ノ道ヲ興シ、御家中ノ御擬作ヲ增モ月渡ノ法ヲ立テ、暮シ方ノ規矩ヲ定メテ、人々入ヲ量リテ出スコトヲ爲シム、是各我家ヲ齊ノヘ四維ヲ張テ、國家ノ藩屏ヲ守ラシメンコトヲ欲シ玉フカ、禮義廉恥ノ由テ來ル所ヲ知ラシムルニハ學ニ因ルニ如クハナシ、然リト云ヘドモ仕ヘ優ナラザレバ、縱ヒ志アル人モ學ブニ暇アラズ、於レ是相公躬親ラ先ンジテ御政事屬官ノ面々ヲモ文明館ヘ誘引シテ、白鹿先生ニ就テ學ヲ受ケシム、勸學ノ意ハ序文ニ於テ先生盡レ之

管子曰、國有ニ四維一、一維絶則傾、二維絶則危、三維絶則覆、四維絶則滅、傾可レ正也、危可レ安也、覆可レ起也、滅不レ可ニ復錯一也

ハル、若シ木實方ノ蓄ヘ未滿ノ中ニ御緣談アレバ、其御積リノ足ザル所ヲバ、御勝手方ヨリ當手ヲ合セテ、而シテ後ニ木實方ヨリ償レ之コト、是亦先例ノ書記明白ナリ、偖又大樹公御上洛ノコトアルトキハ、御名代トシテ國々ノ舊例ニ任セテ上京ノ事アリ、此レ公役ナット云ヘドモ、勅任ノ義ハ人ノ欲スル所ナリ、我君侯ノ御上京モ御順期恐ラクハ遠カラジ、其時ノ御備ヘノ爲ニ常ニ課役ヲ除キテ民ヲ富マシム、百姓足ラバ孰レト與ニ足ザラン、御參內ノ事ハ上ノ御轉位ト云ヒ、其上ヘ御在世一度ノ御國役ナルユヘ、一國中ノ力ヲ以テ御費用ヲ勤ムベキコト當然ノ道理ナルヲ以テ、兼テ其心得ヲ沙汰シ玉ヘバ、是亦御心當ニモ成ベキ也、是迄ニテ格別ノ御入用ハ殘リナク弊ヒヌ、相公ノ曰ク、臨時ノ費用ニ府庫ノ財ヲ散ズル時ハ、忽チ利權ヲ失フテ匱乏ニ至ンコト必セリ、是ヲ以テ右ノ備ヘヲ立タルナリト、其意深哉

書說命曰、惟レ事、乃其有レ備、有レ備無レ患

論語有子曰、百姓足ラバ、君孰ト與ニ不レ足

勸學

當時天下封建ノ制ナレバ、士大夫世祿ニシテ生レナガラノ君子タリ、サレバ君子ノ位ニ在テ君子ノ道ヲ爲ザレバ、尸位素餐ノ誚リヲ免カルヽコト不レ能、御家ノ御支配累歲ノ御差支ヘニテ、御家中ノ御擬作モ年々引ケ方强ク、諸士一統困窮ニ及ンデ、豪民富商ニ乞貸シテ不足ヲ補フヨリ外ニ術ナシ、是ヲ以

内ノ橋モモト板橋ナルヲ、二三十年以前ヨリ土橋ニシテ、當分經費ノ少キヲ以テ得タリトス、御堀筋モ漸々ニ埋リテ小舟モ通リ難キ程ニナリテ、運漕ノ路塞ガリテ衆人之レヲ愁フト云ヘドモ、之レヲ修理スルニ暇アラズ、郭外ノ大橋天神橋モ大イニ弊テ、往來安カラザルニ至ル、相公ノ新政ニテ御支配ノ御元立モ備リテ、其餘リヲ以テ御手懸リノ御修復所モ順々ニ事ヲ起シテ補レ之、大橋天神橋ヲ新タニ懸直シ、郭内ノ土橋ヲ板橋ニシテ本ニ復シ、御堀ノ埋リタルヲ浚ヘテ、舟行自由ニシテ人力ノ費ヘヲ免カル、是又仁政ノ一事ナリ、孟子ニ子産ノ政ヲ議スルコト味アル哉

孟子曰、子産聽二鄭國之政一以二其乘輿一濟二人於溱洧一孟子曰、惠而不レ知レ爲レ政、歲十一月徒杠成、十二月輿梁成、民未レ病レ涉也、君子平二其政一行辟レ人可也、焉得二人人而濟レ之、故爲レ政者、每レ人而悅レ之、日亦不レ足矣

備二將來必用一

說命ニ曰、有レ備無レ患、相公恒誦レ之曰、凡經濟ニ與カラン者ハ、此語ヲ得テ拳々服膺シテ之レヲ失ハザルベシ、相公新政ノ初年、明和四亥ノ秋ヨリ去歲安永三午冬マデ凡八年ノ間、國事繁多ニシテ莫大ノ費用ナレドモ、民ニ少シノ課役ヲモ懸ケ玉ハズシテ事皆整ヘリ、其自序中ニ詳カナルユヘ略レ之、且年々ノ税ヲ餘シテ府庫ニ藏シテ、御支配永久ノ基ヲ立玉フ、尙亦將來ノ必用ヲ豫メ察シ玉ヒテ、幾百姬君御緣嫁ノ事ハ、五百姬君ノ例ニ任セテ木實方ヘ仰付ラレ、御手當ノ道モ備リテ年々生財ノ法行

明和四亥年冬十二月當侯御世ヲ嗣玉ヒテ、同六丑年秋九月西丸御普請御手傳ノ公役畢テ、同年冬十一月御休息ノ爲メトシテ以ニ上命一御國ヘ入ラセラル、翌年明和七寅ノ夏五月初テ御國ヲ巡リ玉フ、是ノ時朝相公御供ニテ、郡々ヲ巡見シテ民ノ疾苦ヲ問ヒ玉フニ、御支配數十年來ノ急迫ニヨリテ、聚斂ノ痛ミ民ノ骨髓ニ染ミ、上農夫モ無告ノ者ヲ恤ニ餘力ナク、新政ニ移リテモ間ナキ故、恩澤未貧民ニ不レ及、於レ是君侯ノ思シ召ヲ以テ府庫ヲ開キテ、銅錢三千貫文出レ之、鰥寡孤獨ノ窮民ヲ賑救シ玉フ、繼テ又同年秋八月ヨリ大河普請ヲ起シテ、一周年ニ三十萬人餘ノ夫役ヲ用ヒ、此人夫ヲ御國中ノ惣百姓ニ賦シテ出サシメ、定法ノ賃米ノ半分ヲ上ヨリ賜ハリ、其他ノ百姓ノ石高ニ割リテ之レヲ償ハシム、傭夫ノ賃錢ハ民間ノ相對ニ約レ之、一日一人百錢許リノ傭賃ニテ使ハル、安永二巳ノ秋マデ三年ノ春秋ヲ歷テ、傭夫ノ高百萬人ニ及ベリ、是ヲ以テ細民食ヲ得テ經營ヲ快クス、貧民菜色ノ憂ナク、還テ役使ノ人稀ニシテ奴婢僕隷ノ給米昔年ニ倍ス、都鄙ニ乞食ノ聲ヲ聞ズ、此恩澤下民ニ及ブノ證也、蓋文王ノ治レ國鰥寡孤獨ヨリ始ルト云フニ本ヅキ玉フ歟

孟子曰、老而無レ妻曰レ鰥、老而無レ夫曰レ寡、老而無レ子曰レ獨、幼而無レ父曰レ孤、此四者天下之窮民ニシテ而無レ告者、文王發レ政施レ仁、必先ニ斯四者一

浚レ塹治レ橋

御家ノ御支配數十年來御國用乏シクシテ、當手〱ノ費用ヲ償フノミニテ外事諸ク闕ケタリ、依レ之郭

是ヲ絞リ殺ス、此ノ匿名ノ書ツケヲ見附タル者ハ即時ニ燒棄ツベシ、此ノ文書ヲ見ツケ次第ニ燒棄ルコトナルヲ、左ハナクテ官府ヘ送ル時ハ、其科ニテ杖ニテ八十ウタルベシ、役人ガ取リ上ゲテ訴人セラレタル人ヲ僉議スル時ハ、其役人ヲ杖ニテ一百ウツナリ、訴人セラレタル者ハ罪セラレザルナリ、此レ明律ノ法ナリ、相公政ヲ執テ姓名ヲ隱シタル訴狀ニテモ、北譯アルベシト見ユルコトナレバ、是レヲ取リ上ゲテ、訴人セラレタル者ヲ僉議シ玉ヒテ、訴狀ニ申出ル通リノ科アレバ、相當ノ罪ニ行ハル、コトアリ、御國多年ノ困窮ニ依テ、下郡ニ御支配ヲ任ゼラレシ時、豪民ノ驕奢日々ニ盛ンニシテ、邪謀ノ者國政ヲ亂ルコト放逸至極ナリ、新政ノ始ニ、猛威ヲ以テ下ヲ御シ、民ノ奸邪ヲ禁ジ玉ヘバ、大邪ノ者ハ隱ル、ト云ヘドモ、數十年ノ弊政國風トナリテ微邪今ニ民間ニ行ハル、微邪ハ大邪ノ生ズル所ナリ、禁ゼズンバアルベカラズ、匿名ノ文書ヲ以テコレヲ糺シ、告言スルモノヲ僉議シ玉ハズ、是微邪ヲ禁ズルノ一術ナリ、蓋管子ニ因テ之レヲ行ヒ玉フ歟

管子曰、凡牧レ民者、欲ニ民之正一也、欲ニ民之正一、則微邪不レ可レ不レ禁也、微邪者大邪之所レ生也、微邪不レ禁、而求ニ大邪之無一レ傷レ國、不レ可レ得也

漢書、趙廣漢爲ニ潁川太守一、爲ニ缿筩一、吏民相告訐、廣漢得以爲ニ耳目一、盜賊以レ故不レ發、發又輙得、壹切治理、威名流聞

恤ニ貧民一

セントスレバ運漕ノ經費又多シ、利權ヲ取ントスレバ、蓄ヘナクシテ如何トモスベカラズ、是ヲ以テ糶ノ價ハ益々賤クシテ、其利盡ク商賈ニ皈ス、國用ノ足ラザル所以也、士農ノ貧窮スル所以ナリ、相公新政ノ始メニ、御支配ノ元ヲ强クシテ利權ヲ上ニ取リ、御國ニ餘レル米ヲ他國ヘ運漕シテ其跡ノ釣合ヲ善クシ、糶ノ價ヒヲ極メテ人ノ求メヲ待ツ、利權上ニ歸シテ國用愈々足リ、餘澤士農ニ及ンデ列士ハ義ヲ守リ、田夫ハ居安ンズ、御國ハ邊土ナリト云ヘドモ、海運ニ因ルコトハ遠シトシテ到ラザル所ナシ、爰ヲ以テ廻船數艘ヲ造リテ用レ之、運賃ヲ人ニ與フル費ヲ免カレ、交易自在ノ用ヲナシテ、米穀貨物ノ輕重ヲ視テ、其價ヒヲ低昂スルコト唯上ノ命ズル所ノマヽナリ、蓋治國ノ要ハ民ヲ富スニアリ、民ヲ富スハ利權ヲ上ニ取テ、米穀貨物ノ有無ヲ通ジテ價ヲ平カニスルニ在リ、廻船ハ有無ヲ通ズル媒ナル哉

管子曰、凡治國之道、必先富レ民、民富則易レ治也、民貧則難レ治也、爰以知ニ其然一也、民富則安レ鄕重レ家、安レ鄕重レ家、則敬レ上畏レ罪、敬レ上畏レ罪則易レ治也、民貧則危レ鄕輕レ家、危レ鄕輕レ家、則敢陵レ上犯レ禁、凌レ上犯レ禁、則難レ治也、故治國常富、而亂國常貧、是以善爲レ國者、必先富レ民、然後治レ之

戒ニ民微邪一

明律曰、凡投下隱ニ匿姓名一文書上、告ニ言人罪一者絞、見者即便燒毀、若將送ニ入官司一者杖八十、官司受而爲理者杖一百、被ニ告言一者不レ坐、トアレバ書ツケニ己レガ姓名ヲ隱シテ人ノ罪ヲ申シ出ル者顯レバ、

前政ニ動モスレバ鐵山ヲ廢スルコトアリ、相公政ヲ執テ簸野河ノ害ヲナス中島ヲ取リ除キテ水道ヲ立テ、鐵穴ノ流シ口二百箇所ニ及ベルヲ、六十箇所ニ減ジテ鐵師ノ員ヲ限リテ、仁多郡ニ五箇所ニ定メ、此外ニ增スコトヲ許サズ、家業ヲ勤ンコトヲ勵マシメ、產物ノ絕ザランコトヲ施ス、元來仁多郡ハ深山ニシテ草木茂リ、禽獸人ニ迫ルノ患アリ、其上無田ノ民、耕作ノミニテハ世ヲ渡ルニ足ラズ、是ヲ以テ耕民離散スルノ患アリ、依テ仁多郡ヲ治ムルコトハ、他郡ノ並ビ合ヒヲ見ル時ハ民其鄕ニ住ムコト不レ能、是故ニ新政ノ始ニ、年貢上納ヲ半バ米ニテ取リ、半バ銀ニテ取テ、米ノ直段ヲ平生ヨリモ賤クシテ取立テ玉ヘバ、百姓モ力ヲ得テ其土地ニ在リ著シキ鐵山ノカセギモ他國ノ人ヲ用ヒズシテ事足リ、鑪ニ立木ヲ伐リ用ヒテ、禽獸人ニ迫ノ煩ヒヲ除キ、產物長ニ生ジテ國ニ銀錢ノ入ルコト多ク、年貢ノ取立テモ滯ルコトナク、上ノ用度モツカヘズ、昔貧郡タリシモ今還テ富郡ト唱フ、蓋相公能ク地理ニ通ジテ、利シ難キモノヲ能ク利シ玉フト謂フベシ

湯問ニ伊尹九卿之行一、伊尹對曰、云云九卿者不レ失ニ四時一、通ニ於溝渠一、修ニ隄防一、樹ニ五穀一、通ニ於地理一者也、能通レ不レ能レ通、能利レ不レ能レ利、如レ是者擧以爲ニ九卿一 見ニ說苑一

造ニ廻船一

夫レ物ノ價ヒハ寡ケレバ貴ク、多ケレバ賤シ、是故ニ交易シテ均レ之天下通義也、御國ノ產物ニ最モ多キ物ハ米穀ナリ、其餘ルモノヲ以テ他國ヘ出サント思ニ、陸行セントスレバ路險ニシテ且遠シ、舟行

此ウヘハ引ケ米ナクシテ全ク賜ハルベキコトナルニ、公室ノ費用ハ年々ニ増シ、利權下モニ在テ糶ノ價ハ愈々賤ク、國用愈々乏シクシテ三ツ免ヲ全ク賜フコト不レ能、於レ是老侯御世ヲ當侯ニ讓リ玉フ時、朝相公召サレ、諸士ノ祿ハ御代々四ツ五分ノ免ナルヲ、國用乏シキノ故ヲ以テ、三ツ免ニ減ジテ諸臣ノ境内ヲ狹クスルコトハ、政ニ於テ耻ベキノ甚シキ也、先君ノ尊靈ニ對シテ之ヲ何トカ謂ン、仍テ御在世ノ中古ニ復シテ、先君ヨリ傳ヘ玉ヘル儘ニシテ嗣君ニ讓リ玉ハンコトヲ命ゼラル、相公君命ヲ蒙リ玉ヒテ、此ノ事至テ重シト云ヘドモ、老侯ノ思召深遠ナル故辭シ奉ルベキ所ナク、命ニ應ジテ速ニ其事ヲ行ヒ玉フ、相公曰、我侯神孫ナルヲ以テ貴キコト御三家ニ亞グ、列國比肩スル者其レ亦多シトセズ、諸臣ノ列國ノ士ニ於ルモ亦唯是ヲ以テ其家ノ列ヲナス、然ルニ士ノ境内ヲ縮メテ志ヲ屈セシムルコトハ、兵ヲ彊クスルノ道ニ非ズ、老侯ノ尊命誠ニ當レリ、祖先ニ奉ジテハ孝ヲ思ヒ、下臣ニ接シテハ恭ヲ思ヒ玉フト謂ベシト

書曰、伊尹曰、王懋二乃德一、視二乃厥祖一、無二時豫怠一、奉レ先思レ孝、接レ下思レ恭、視レ遠惟明、聽レ德惟聰、朕承二王之休一無レ斁

攻二鐵山一之制

御國ノ產物ニ鐵ヲ出スコト最モ上品也、鐵ヲ攻ムル事ハ山ノ砂ヲ切リ崩シテ、水ニ淘汰シテ其精ヲ取テ、火ニ和シテ之レヲ鑠シテ鐵ヲ得、此切崩シタル砂簸野河（土人此河ヲ大河ト稱ス）ニ入テ水行ノ害ヲナス、是ヲ以

年飢歳ニ貧民ニ給スベキ者ナシ、假シタル物ヲ取立テントスレドモ、年穀熟セザレバ償フベキモノ無シ、爰ヲ以其法絶ヘテ行ハレズ、相公政ヲ執テ再ビ義倉ノ法ヲ興シテ麥ノ年貢ヲ出サシメ、（畑高一石ニ三升、或ハ二升）在々所々ニ倉ヲ建テ是ヲ收メ置キ、年々新麥ニ詰替テ、又其年ノ取立ヲ合シテ、郷方吟味役ノ者ト郡足輕トヲ出シテ郡役人ニ立合セ、倉ニ納メ置テ相符ヲシテ其所ノ年老ニ護ラシメ、凶年飢饉ノ備ヘトシテ人ニ假スコトヲ禁ゼラル、蓋隋ノ長孫平ガ義倉ノ名ヲ假リテ行レ之、我日本ニモ文武天皇ノ世ニ朝廷ニ行ハル、ゴト有シト云、彼レハ人ニ貸シテ利息ヲ取ル、是亦民ヲ恤ムノ一助ナルベケレドモ、凶年ニ至リテハ貸シタル物取立難キニ依テ、飢饉ノ備ヘニナリ難シ、是ヲ以テ今相公ノ興シ玉フ義倉ハ、人ニ貸スコトヲ禁ゼラル、ナリ

通鑑、隋開皇五年、度支尚書長孫平奏、令民間毎秋家出粟麥一石以下、貧富爲差、儲之當社、委社司檢校以備凶年、名曰義倉、隋主從之

論選列士之祿復古

御國多年ノ困窮ニ依テ御支配甚ダサシ支ヘ、豊年ト云ヘドモ國用足ラズ、是故ニ諸士ノ祿モ年々引ケ米ヲ以テ邑入ヲ減ジ、一家中ノ困窮於斯極ル、此時老侯田大夫ニ命ゼラレテ、俸祿ノ實三分ノ一ヲ減ジテ、二分ヲ以テ定額トシテ、全ク給スルナラバ、群臣ノ覺悟モ定リテ、儉ヲ守ルノ基モ立ツベシトテ、四ツ五分ノ免ヲ三ツニ減ジ、其レニ准ジテ米俸・金俸・廩米ノ類モ其實ヲ減ジテ分限ヲ定メ玉フ、サレバ

於レ俗、成二大功一者、不レ謀二於衆一、是以聖人、苟可二以强一レ國、不レ法二其故一、苟可二以利一レ民、不レ循二其禮一　見二史記一

常平倉

御國ニ常平方ノ役所以前ヨリ有レ之ト云ヘドモ、其法ヲ行フコトナクシテ名有テ實ナシ、是御支配ノ急迫ニ依テ其役所ノ蓄ヘヲ闕テ、其元立ヲ失フガ故也、相公新政ノ始メニ、常平倉ヘ收リ物ヲ立テ、其役所ノ蓄ヲ厚クシ、平日入用之貨物相當ノ價ヨリ貴ケレバ蓄ヲ出シテ他國ヨリ買二求之一、官船ヲ以テ漕寄セテ價ヒヲ賤クシテ賣レ之、又薪ノ價貴ケレバ、民間ノ立木ヲ山ニ入テ買レ之、薪ニコシラヘテ價ヲ賤クシテ賣レ之、其外明シ油材木諸色ノ類モ同レ之、此法行ハレテヨリ商賈ノ非義ノ利ヲ貪ルコト止ヌ、蓋漢ノ耿壽昌ガ常平倉ノ名ヲ假リテ其法ヲ行フ、彼レハ平糴ヲ以テス、此レハ貨物ノ價ヒヲ平カニス、民ヲ恤ムニ於テハ一也

前漢食貨志曰、宣帝即レ位、用レ吏選二賢良一、百姓安レ土、歲數豐穰、穀至二石五錢一、農人少レ利、時大司農中丞耿壽昌、以二善爲一レ算、能商二功利一、得レ幸二於上一、壽昌終白、令二邊郡皆築一レ倉、以二穀賤時一增二其賈一、而糴以利レ農、穀貴時減而糶、名曰二常平倉一、民便レ之、上廼下レ詔、賜二壽昌爵關內侯一

再二興義倉法一

御國ニ先年義倉ノ法行ハレテ恤民ノ政起ルト云ヘドモ、其蓄ヘヲ出シテ百姓ニ假シ小恵ヲ施シテ、凶

ノ所ニ、幅三間ヅヽノ堰土手ヲ築キ、安永二巳ノ秋マデ三年ノ春秋ヲ以テ、百萬人ニ及ベル役夫ヲ用ヒテ其功業ヲ卒ヘ玉フ、仁多・飯石・神門・大原・出雲・楯縫六郡ヲ經タル大河ノ中島・及碇島ノ一郷ヲ取リ拂ヒ、一圓ノ河トナリテヨリ流水盡ク宍湖ニ入テ、意宇・島根・秋鹿三郡ノ水ヲ連ネテ大橋下ヘ出テ、馬潟ノ津ヲ過ギテ北海ニ注グマデ、水道ノ妨ナクシテ滿水ノ害ヲ免カレ、田稼ヲ全ク歛ルコトヲ得テ、御成稼モ年々增シ、上御支配ノ本モ立、下萬民ノ養ヒモ備リ、上下安泰ノ國トナル、是誠ニ仁政ノ國ニ行ハルヽト謂ツベシ、孔子曰、「剛毅朴訥近二於仁一」ト、相公恒ニ此語ヲ稱シテ云ク、誠ナル哉此言ヤ、治國ノ業ハ仁政ヲ國ニ行フヲ以テ專務トス、仁政ノ國ニ及ブコトハ數月ノ力ノ能スル所ニ非ズ、任重フシテ道遠ケレバ、剛ニシテ物ニ屈セズ惑ハサレズ、毅ニシテ能ク大事ヲ決斷シ、朴ニシテ物ノツヤ飾リヲナサズ、訥ニシテ言ヲ後ニシ行ヒヲ先ニスルニ非ザレバ、國家ニ長トシテ國ヲ治メ民ヲ安ンジ、倉廩ヲ實タシメ兵ヲ强クスルコハナラヌ也ト、蓋此擧ヤ國初以來ノ大業也、其視ル所ノ迂遠ナルガ爲メニ、先進君子モ爰ニ疑ヲ生ジ、百吏モ之ヲ是也トセズ、唯相公獨リ決斷シテ此事ヲ行ヒ玉フ、獨斷ノ功大イナル哉

武王問二太公一曰、得レ賢敬レ士、或不レ能三以爲二治者何、太公對曰、不レ能二獨斷一、以二人言一斷者殃也　見二說苑一

衞鞅曰、疑行無レ名、疑事無レ功、且夫有二高レ人之行一者、固見レ非二於世一、有二獨知之慮一者、必見レ敖二於民一、愚者闇二於成事一、智者見二於未萠一、民不レ可二與慮一レ始、而可二與樂一レ成、論二至德一者、不レ和二

貨物魚鳥茶菓ノ類マデ、用ノ度ニ乏シカラズシテ目出度キ御國ナリト云リ、水害アル所以ヲ尋ヌルニ、東ヨリ西ニ折ケテ伯備石ニ隣リテ無盡ノ高山ヲ負ヒ、北ニハ峩々タル險山ヲ抱キテ水ヲ注グニ道ナク、西北ノ間ニ小シキ水道アリテ、神門郡ノ水ヲ西海ヘ注グ、此地ハ常ニ西風烈シクシテ海中ノ泥沙ヲ吹キ上ゲテ甚シキ時ハ行客ヲ留ム、此積沙宛カモ山ノ如シ、土人呼デ高濱ト號ス、是ヲ以テ大水ヲ行ルニ便ナラズ、東ニ馬潟ノ渡口アリテ、僅ニ百間餘ノ澗ヲ通ジテ北海ニ注グ、一國中ノ水ヲ海ニ注グ所此二流ノミ也、依レ之霖雨ゴトニ河水湛シテ堤防ヲ害シ、或ハ人家ヲ毀チ、甚シキトキハ牛馬ヲ溺ラズヘ是故河中漸々ニ埋リテ泥沙ヲ積ムコト岡ノ如シ、御支配ノ急迫ニヨリテ、河中ノ島ヲ新田ニ開キテ其價ヲ出ス者アレバ、後ノ害ヲ慮ルニ暇アラズ、望ムニ任セテ許レ之、新田方ノ役所ヲ設ケテ、吏ヲ置テ是ヲ利スルコトヲ勤メズト、是故ニ水道愈々埋リテ、少シキ水ニモ田稼ヲ害ス、相公政ヲ執テ御國ノ地理ヲ察シ、水道ノ便利ヲ考ヘ玉フニ、河中ノ新田害ヲナシテ年々田稼ヲ傷ヒ、上下ノ損失勝テ計フベカラズ、先ヅ初メニ此害ヲ除クニ非レバ、農事ヲ勉メシムルト云ヘドモ、一日ノ雨ニモ數旬ノ功ヲ空ウシテ其年ノ立毛全タカラズ、先進君子モ之レヲ憂ヒ玉フト云ヘドモ、經費莫大ナルヲ以テコヽニ及ブニ遑アラズ、新政ノ始ニ河普請ノ事ヲ起シ玉フト云ヘドモ、西丸御普請ノ公役有テ外事皆廢ス、而シテ三年ヲ歷テ明和七寅ノ秋ヨリ事ヲ起シテ、大河ノ中島凡百餘所、大河下碇島ノ一郷、及大橋下モツ新田水行キニ障ル所ハ殘リナク取リ除キ、且ツ又神門郡石塚村ヨリ楯縫郡平田灘分村マデ凡ソ二里餘

レバ必國ノ害ヲナス、夫レ米ハ四民ノ食ナリ、國家ノ本トスル所以ナリ、孔子モ「足レ食足レ兵民信レ之」ト云リ、然ニ米ヲ商買ノ手ニ渡シテ、直段ヲ勝手次第ニ任ズル時ハ、己レヲ利スルコトノミヲ計リ、士農ニ害アルコトヲ巧ミテ國ヲ貧クスル者也、其窮ル所ハ、必商ハ己レニ利ズルノ餘リヲ以テ、田地ヲ求メテ子孫ニ讓リ、家督ニスルコトヲ計リ、農ハ終歳勤苦シテ其利少キ故、商ノ利益多キヲ羨ミテ、末作ヲ事トシテ本業ヲ疎略ニス、然ルトキハ田荒レテ粟ヲ生ズルコト少ク、國貧クナルコト必セリ、是故ニ利權ヲ上ニ執テ米直段ノ貴賤ヲ自由ニシ、上御支配ノ道ヲ立テ、下諸臣ノ暮シ方ヲ定メ國政ヲ正シクシテ、民ヲシテ各々其所ニ居ラシムルコトヲ致ル者也、爰ノ料簡ヲ取違ヘ、商買ノ論ニ惑ハサレ、毫釐ノ差ヒヲ生ズル時ハ、千里ノ謬リトナルベキナリ、商ニ志ヲ得セシムル事勿レトハ爰ヲ以テ也、前車ノ覆ルヲ見テ後車ノ戒メト爲ベキコト也、執政ノ大事於レ斯在リト、蓋古人平糴ノ道ヲ得玉フ歟

魏李悝平糴議曰、糴甚貴傷レ民、甚賤傷レ農、民傷則離散、農傷則國貧、故甚貴與二甚賤一、其傷一也、善爲レ國者、使二民毋一レ傷、而農益勸一

按、當今所レ議、當レ曰三甚賤傷二士農一

除二水害一

相公恒ニ言テ曰、御國ハ帝都ヨリ西北ノ隅ニ當リテ、神皇ノ代根ノ國底ノ國ト稱シテ素盞嗚尊ヲ謫シ玉ヒテ、天下ノ旱濕ノ地ナリト云ヘドモ、水害ヲ除ク時ハ全體肥壤ニシテ稻ヲ樹ルニ宜ク、其上ヘ諸ノ

ト難カルベシ、偖糴ノ直段ヲ立ルニ按量アリ、物ノ價ヒハ天下一統ナレバ、是ヲ定ムルコトハ至テ大儀ナリ、相公ノ新政以後ノ直段ヲ覗ルニ、七八年以前ヨリ三四年マデハ大坂ノ直段ニ暗ニ符合セリ、是大坂ノ直段天下一統ノ相當ノ價ヒナルニ依テナリ、二三年以來ハ大坂直段ヨリハ、四斗入壹俵ニツキ貳匁位モ御國直段貴シ、是レ大坂直段天下一統ノ價ヨリ賤キニ依テナリ、此ノ譯ケハ江戸大火以後、諸國ヨリ大坂ニテ金ヲ假リテ、其代リニ國中ノ米ヲ餘分ニ登セテ、全體ノ登リ高平年ヨリモ多キニ依テ、大坂町人ドモノ言合セヲ以テ直段ノ位ヲ一等引キ下ゲタル者ナリ、此ノ價ヒハ御國ノ直段ニ引キ合セ難キ故ヲ以テ、俵ニ付キ貳匁位モ引上ゲテ直段ヲ定メ玉ヘルナリ、又年ニヨリ御國中米高寡クシテ、御國民ノ養ヒ足ラザル時ハ、大坂ヨリ調ベ下シテ足スノ積リヲ以テ、運賃ヲ加ヘテ直段ヲ貴ク立ルコトモ有ルベシ、是レ又其年ノ考ヘニヨルコトナレバ、空理ヲ以テ紙上ニ著シ難シ、商賈ノ論ニ云ク、凡國ヲ治メ玉フコトハ士農工商皆上ノ民ナリ、上ハ民ノ父母ナリ、而ルニ今御國ノ米モ運賃ヲ添ヘテ他國ヘ出シ、賤キ直段ニ賣拂ヒ、御國中ノ米ヲ耗シテ其跡ノ直段ヲ貴ク立テ、上ノ米ヲシメ賣リニシテ工商ヲ困シメ玉フコトハ、工商ニ於テ何ノ咎カアル、御仁政士農ノミニ及ンデ、工商ニ及バザルコトハ何ゾ哉ト云、是不通ノ論ニ非ズ、一通リ尤ニ聞ユルナリ、然リト言ヘドモ工商ヲ悦バシムル時ハ士農ニ利アラズシテ、上ノ御支配モ是ヨリ崩ル、上ノ御支配不レ立トキハ、倉庫虚シクシテ忽チ匱乏ニ至ル、一タビ匱乏ニ至ル時ハ、仁義有リト云ヘドモ之ヲ行フコト不レ能、相公諭シテ之曰、商ニ志ヲ得セシム

直段壹貫文モ相應ノ價ナレバ、如何トモスベカラズト思ヒテ、事ヲ執ル人モ此ノ所ニ疑ヲ容レズ、是ヲ以商賈ノ思ヒノマヽニ利ヲ占ラレテ、士ト農トハ益々衰フ、於是上ノ御支配モ豐年ニハ御成稼ノ高増スト云ヘドモ、糴ノ價賤キニ依テ費用ノ高ヲ償フコト不能、又凶年ニハ糴ノ價貴シト云ヘドモ、御成稼ノ高減ジテ費用ノ備ヘ猶足ズ、諸士ノ暮シ方モ糴ノ價賤キ時ハ出入ノ制ヲ爲スコト不能、上下ノ困窮此時ヨリ甚シキハナシ、相公新政ノ始メニ、御支配ノ本ヲ厚シテ利權ヲ上ニ取リテ糴ノ價ヲ極メ、年ノ模樣ヲ考ヘ四斗入壹俵ニ付、文銀貳拾壹匁、或ハ貳拾貳匁、或ハ貳拾參匁トシテ、町家ノ廉潔ナル者ヲ選ビテ取捌カセ、口錢ヲ遣シテ外ニ利潤ヲ與ヘズ、御家中ノ糴モ買入乏シキ時ハ、口錢程ヲ引下ゲテコレヲ買ハシム、譬ヘバ上ノ直段貳拾壹匁ナルトキハ買米ハ貳拾貳匁ニ定ム、餘ハ倣之、斯ノ如ク利權ヲ取テ自在ニ低昂スルコトハ容易ノ力ニ非ズ、凡千貫程ノ銀子ヲ除ケ置キテ利權ヲ取ルノ備ヘニシテ、一國中ノ其年ノ出來米ノ都合ヲ記憶シテ年中ノ飯料ヲ積リ、其餘レルヲ目算シテ他國ヘ出シテ賣レ之、國內ノ米高ヲ耗シテ跡ノ釣リ合ヲ見テ利權ヲ取ルヲ本トス、其年ノ末ト翌春トノ二季渡リノ節、定府勤番ノ御渡シ米、並ニ御家中ノ賣米凡三四萬俵程モ有ルベシ、是ハ運送ノ時節ニ限リ有コトナレバ、直段ヲ賤クシテ買ンコトヲ計リテ商賈ノ巧ミヲナス、是ノ時ニ兼テ備ヘ置タル銀子ヲ出シテ、御買上ゲノ直段ヲ極メテ殘リナク買ヒ取ルコトヲ利權ヲ取ルノ始メトス、於是元ノ備ヘ足ラザレバ、商賈ニ見透カサレ、下ノ爲メニ計ラレテ、輕重ノ術行ハレズ、一タビ利權ヲ奪ハルヽ時ハ又取リ復スコ

フコトハ、役分ノ本意ニ非ラズ、猶又新田ヲ開クトキハ、河內ヲ埋メ水道ヲ塞ギ、土手ヲ傷ヒ本田ヲ妨ゲ、大ナル害トナル、是地方役人ノ思ヒヲ廻ラスベキコトナリ、今ヨリ改メテ常々出郷シテ地勢ヲ能ク察シ、惰民ヲ戒メ、手足ノ胼胝ヲ厭ハズ自ラ經界ヲ奔走シ、五土ノ利害ヲ考ヘ、地力ヲ盡スコトヲ勤ムベシト、丁寧反覆シテ教戒シ玉ヒテヨリ、地方役人一統力ヲ合セ、平日巡村シテ農ノ時ニ違ハザルコトヲ折檻ス、且又井溝堰用水堤ニ多分ノ人夫ヲ以テコレヲ修理シテ、用水懸リ惡水拔キ自在ナラシメ、大河普請ニ廣大ノ人力ヲ用ヒテ滿水ノ害ヲ除キ玉ヒテヨリ、年々御成稼增シテ出入ノ制ヲ立テ、御永續ノ道是ヨリ始ル、蓋古人地力ヲ盡スノ道ヲ得玉フ歟

周禮、大司徒之職、以土會之法、辨五地之物生、山林、川澤、丘陵、墳衍、原隰

漢書食貨志、李悝爲魏文侯、作盡地力之敎

平糴

糴貴キ時ハ士農ニ利アリ、工商ニ利アラズ、糴賤キ時ハ工商ニ利アリテ、士農ニ利アラズ、貴キモ工商ニ害アルニ至ラズ、賤キモ士農ニ害アルニ至ラザルヲ平糴トス、御國ハ邊土ニシテ他國ノ通路自由ナラズ、コレニ依テ利權下ニアル時ハ、商賈ニ利ヲ占ラレテ甚ダ士農ニ害アリ、多年ノ困窮ニヨリテ利權ヲ上ニ取ルコト不能、數十年ノ模樣ヲ考ルニ、米ノ價四斗入壹俵ニテ大坂ノ直段文銀十七八匁ナル時ハ、御國ハ銅錢壹貫文位ヒノ直段ニ過ズ、大坂ノ直段十七八匁ト積リテ運賃諸雜用ヲ引ク時ハ、御國ノ

而人業ニ其所一失

改ム二地方之法ヲ一

御國多年ノ困窮ニ依テ出入ノ制ヲ爲スコト不レ能、費用ノ足ラザルヲバ民ニ課シテ此レヲ補ヒ、或ハ市井ノ人ニ乞貸シテコレヲ給シ、或ハ新田ヲ開キテ賣レ之、其價ヲ取テ足ラザルヲ助ルコト、投反シソ常トナリテ其他ヲ顧ルニ暇アラズ、相公新政ノ始ニ、地方役人ヲ召テ一々其專務トスル所ヲ問フ、地方役人ノ曰、御國ノ政元來課役ヲ以テ年々ノ御不足ヲ補ヒ玉ヘバ、地方ノ有タケヲ取ルトキハ民不レ立、民立ザレバ却テ上ノ不利トナル、偖又苗代草手ヨリ悉ク見分スルトキハ、辻見ノ時節ニ至リテ種々ノ愁訴ヲ告來ルノ煩アルヲ以テ、本役ノ者ハ常ニ出郷スルコトヲ闕ダト云フ、此レ理ニ似テ大ニ非ナリ、然レドモ時世ノ變ナレバ如何ントモスベカラズ、相公地方役人ニ諭シテ曰、今マデ心得タル所ハ大ニ非ナリ、自今以後志ヲ改メテ精勤ヲ勵ムベシ、先ヅ民ノ立ツト不レ立トヲ量テ撫育スルコトハ上ノ政ニアリ、此レヲ達スルハ郡奉行ノ職分ナリ、地方役人ノ與カル所ニ非ズ、地方役人ハ眼力ヲ以テ立毛ヲ一盃ニ見テ取ルコト專務ナリ、一盃ニ見テ取ルコトハ其稻ノ素性此ノ土地ニ相應スルカ相應セザルカ、苗立草手ノ模樣ヲ見、培養ノ仕形ハ何ヲ用ヒテ宜キ乎、此村ノ百姓ハ深切ニ精ヲ入ル乎、用水ノ便利イカナルカ、且ハ天氣ノ趣ニヨリテ水損アリ、旱損アリ、風損アリ、蝗アリ、此數箇ノ考ヲ以テ辻見ノ眼力ヲ定ルニ非レバ、其正眞ヲ察スルコトハ難カルベシ、常ノ出郷ヲ怠リテ百姓ノ愁訴ヲ聞マジト云

御國多年ノ困窮ニシテ利權ヲ上ニ取ルコト不レ能、御成稼ノ出納モ民ヨリ支配スルホドノ時節ニナリテ、一言ヲ吐キ一事ヲ出スモ、皆利不利ヲ論辨スルノミニテ、仁義忠臣ノコトハ此時ノ急務ニ非ズト云ニ似タリ、夫レ民ハ國ノ本ナリ、農ハ民ノ本ナリ、商ハ民ノ末ナリ、農ハ力ヲ竭シテ耕作シテ、年穀熟スル時ハ食ヲ得、年穀熟セザル時ハ食ヲ得ズ、米穀貴キトキハ利ヲ得、米穀賤キトキハ利ヲ失フ、商賈ハ貨物ヲ交易シテ、賤キ時ハ買ヒ、貴キ時ハ賣リ、好デ智ヲ用ヒテ米穀貨物ヲ買ヒ求メテ、人ノ乏キヲ待テ是ヲ賣リ、急ニ乘ジテ價ヲ増シテ己ニ利スルコトヲ上策トス、商賈ノ利ニ於ル豐年ニモ亦得、凶年ニモ亦得、治ルニモ亦得、亂ル丶ニモ亦得、大智ノ人ト云ヘドモコレト利ヲ爭フトキハ、畢竟商賈ニ合セラル、是故ニ政ヲ以テ是ヲ制セザレバ、農ヲ去テ商ニ走ル、自然ノ勢ヒナリ、相公新政ノ始メ、農ヲ勸ンガ爲メニ課役ヲ省キテ、下ノ好マザル趣向ノ科ヲ悉ク止メ、商賈ヲ省ンガ爲メニ、利權ヲ上ニ取テ奸計ノ路ヲ塞ギ、諸物ノ價ヲ平カニシテ民ノ煩ヒヲ除キ、鄕中ノ市ニ京店物ヲ賣ルコトヲ禁ジテ、國都ニ遠キ都會ノ地三所（杵築 今市 安來）ヲ限リテコレヲ許ス、御城下ノ町ヘ甚遠ケレバ、民力ノ費アルヲ以テナリ、且又民間ノ酒店ヲ減ジ、往還筋ノ茶店ヲ毀ツ、蓋商賈ノ數ヲ省キテ之ヲ農ニ歸スノ道ヲ得玉フ歟

荀子曰、省二商賈之數一

賈誼曰、今毆レ民而歸二之農一、皆著二於本一、使三天下各食二其力一、末技游食之民、轉而緣二南畝一、則蓄積足、

札ヲ以テ交易ス、子錢家ノ利ヲ好ム者ハ、銀壹貫目ヲ賣ルトキハ銀札三貫目計リニナル、コレヲ人ニ貸ストキハ銀札一匁ヲ六十錢トシテ券書ヲ極、百八拾貫文ノ元ニナル、其レニ利息ヲ加ヘテ相倍徙シ相什佰千萬ス、是ヲ以テ兼併ノ家ハ日々月々ニ盛ンニシテ富彌〻足ル、己レノ蓄ヘナキモノハ課役ノ來ル每ニ、人ニ求メテ是ヲ償ヒ、看ス〳〵貴息ノ物ヲ假リテ儉ヲ守ルノ度ヲ失ヒ、愈〻產ヲ敗ルニ至ル、銀札廢リテ銅錢與ルトキ民ノ負金ヲ償ハヾ、國中十ノ八九ハ田畑山林ヲ失フテ、一時ニ無賴ノ民トナルベキニ、相公新政ノ始メニ、民間負金ノ償ヲ永ク闕年ニシテ、コレヲ返辨スルコトヲ堅ク禁ズベシト屹ト法令ヲ出シ玉ヘバ、何程固キ證文ヲ取置キタル者モ、是ヲ以債責スルコトヲ得ズ、愚民ノ中ニ誤テ闕年ノ債ヲ以テ訟ルモノアレバ、法令ヲ犯スノ狀ヲ以テコレヲ罰シ玉ヘバ、貸シタルモノモ責マジキ事ヲ知テ、假リタル者モ質ニ入タル田地ヲ人ニ渡スコトヲ免カレテ、始メテ土地ヲ拜領シタル心地ニテ、一國中ノ民新タナル國ニ入ガ如シ、蓋子產鄭國ヲ治メテ田疇ヲ伍ニシ、民ニ各其所ヲ得セシムルノ意ナル歟

春秋左氏傳ニ曰、子產使下都鄙有レ章、上下有レ服、田有二封洫一、廬井有上レ伍、從レ政一年、輿人誦レ之曰、取二我衣冠一而褚レ之、取二我田疇一而伍レ之、孰殺二子產一、吾其與レ之、及二三年一、又誦レ之曰、我有二子弟一、子產誨レ之、我有二田疇一、子產殖レ之、子產而死誰其嗣レ之

省二商買一

立ルコト常トナリテ、出ルニ追レテ入ルヲ量ルノ制ヲナスコト不能、依之諸有司ノ手ヲ以テ入出ヲ掌ルトキハ、却テ種々ノ行キ間ヘアルコトヲ慮リテ、郡役人ニ御支配ヲ任ゼラレ、御成稼ヲ一圓ニ郷中ヘ引受、惣百姓ヲ銀主ニ立テ、日々ノ御當用ニ隨ヒテ繰出シテ受負ヒ、郡役人按量ヲ以テ人別ノ身上ヲ見テ面割ヲ定メ、中百姓以下ハ持石ノ高ヲ以テ押シテ割合ヲ極メ、急ニ催促シテ責ルト云ヘ共、力足ラザル者ハ自己ノ働ニ叶ハズシテ、郡役人ニ頼ミテ外ヨリ假リテ償之、年々ケ様ニ課役アリテ、持高ノ田地モ皆借用ノ質地トナリテ、地利ヲ以テ家ヲ立ルコトモ一向ニ其圖ヲ失ヒ、脣然トシテ其日ヲ送ルノミ、萬民ノ塗炭於斯窮ル、相公新政ノ始メニ十郡ノ下郡ヲ殘リナク變改シテ、民ノ耳目ヲ新ニシ民間ノ風俗ヲ轉化シ玉フ、蓋政ノ正シカラザルヲ以テ、全體ヲ改メテ是ヨリ事ヲ起シ玉ウ歟

董仲舒對策、琴瑟不調、甚者必解而更張之、乃可鼓也、爲政而不行、甚者必變而更化之、乃可理也

禁民間負金之償

御國多年ノ困窮ニ就テ郷中ヘ御支配ヲ任ゼラルヽトキ、民各々過分ノ課役ヲ蒙リテ己レガ蓄ヘナキ者ハ、子錢家ヨリ假リテコレヲ償フ、民間コト〳〵ク貧苦ニ迫ト云ヘドモ、豪家ノ富ハ日々ニ殖、鉅萬ヲ重ヌルニ至ル、是ヲイカニト云フニ、御國通用ノ銀札札座ノ備ヘヲ猥スニ隨テ、次第ニ人望ヲ失フテ、公室ノ定價ハ一匁六十錢ナルニ、民間ノ取リ遣リハ、正銀壹匁ヲ百八十錢內外ノ直段ニシテ銀

大學曰、國不ニ以レ利爲テ利、以テ義爲レ利也

剝ニ百姓之御免地及格式ヲ一

御國ノ政ニ百姓ノ中ニ先祖ノ功ヲ以代々相續テ御免地ヲ賜リ、或ハ引ケ屋舖ヲ賜リ、或ハ先國主ヨリ重キ判物ヲ以土地ヲ充テ行ハル、コトアリ、又御當家ニ御用達ノ功ヲ以、百姓ニ格式ヲ與ヘテ代々小算用御目見格トシ、或ハ平小算用格トシ、或ハ帶刀ヲ免ルシ、或ハ君ノ御目通ヲ免シテ其家々ノ格トシ、出銀調達ノ多少ニヨリテ、其優劣ヲ立テ格式ヲ定ム、相公新政ノ始メニ御免地引屋舖ノ類、功ノ大小時ノ先後ヲ論ゼズ、殘リナク是ヲ取上ゲ、御目見ヘヲ免サレタル者モ老侯御入國ノ初ニ出タル者數人ヲ免シテ、其後御調達ノ功ニ依テ御目見ヲ免サレタル者ハ、殘リナクコレヲ取リ上ゲ、代々小算用ニ召抱ヘラレタル者ハ其擬作ヲ取上ゲ、一代切リノ格式ニシテ跡ヲ百姓ニ復シ玉フ、蓋民ヲ御スル事法ヲ審カニシ、貴賤ヲ分チ祿賞ヲ重ンジ、人主ヲ尊敬スルコトヲ本トシテ、治國ノ大經ヲ立ツベキコトナルニ、祿賞ヲ猥リニ民ニ與フルコトハ道ニ非ズ、餘澤ノ盡キタル者ニ相繼デ恩惠ノ下ルモ道ニ非ルヲ以テ、コレヲ剝取リ玉フ歟

管子曰、法者將レ用ニ民力ヲ一者也、將レ用ニ民力ヲ一者、則祿賞不レ可レ不レ重也、祿賞加ニ于無功ニ一、則民輕ンズ其祿賞ヲ一、則上無ニ以勸ムルコト一民ヲ、上無ニ以勸ムルコト一民則令不レ可レ行ハル矣

變ニ改郡役人ヲ一

御國ノ御支配必至ノ急迫ニ至リテ、當年ノ御成稼ハ前年ノ借用ニ引取レ、又其假反シヲ以テ御暮シ方ヲ

御國多年ノ困窮ニ依テ御勝手御取續キモ益々危ク、國用ノ不足ヲ補ハントシテ人ニ假ンコトヲ求ト言ヘ共、動モスレバ返辨ヲ滯リテ信義ヲ失フヲ以人是ヲウケガハズ、是ヲ以投返シノ術モ盡キタル時、公田一萬石ヲ裂テ豪民ニ賣リ與ヘテ、永ク税セザル事ヲ約シテ、其價ヲ取テ是ヲ別役所ニ藏メ、利息ヲ賤シテ貧民ニ貸事ヲ本トシ、且軍旅ノ變ニ備ヘ、饑饉ノ防ギニ供フルヲ以テ用トシテ、范文正公ノ名ヲ假リテ義田ト號ス、此役所ヲ呼デ義田方ト稱ス、又其後新田方ト云フ役所ヲ起シテ新田ヲ開テ、其土地ヲ裂テ豪民ニ賣與ヘ、是亦永ク税セザルコトヲ約シテ、其價ヲ取テ常手〳〵ノ費用ニ供ヘ、コノ賣田ヲ免許地ト號シテ、義田ノ法ニ倣フテ大同小異アリ、其始メハ貧民ヲ利スルヲ以テ稱スレドモ、御支配之急迫ニヨリテ追々ニ費用ノ償ヒニナリテ、前ノ貸シタル者ヲ債責シテ、却テ貧民ノ煩ヒトナル、土地ヲ買ヒ得タル者モ、素ヨリ悖テ入ルノ貨ヲ以テ求メタルモノナレバ、又悖テ出ル事ヲ免カレズ、相公新政ノ始メニ義田及免許地ヲ沒收シテ是ヲ公田ニ復シ、御國ノ有高ノ闕ゲタルヲ補ヒ玉ル、蓋田ハ先侯ヨリ傳ヘ玉フ所ナレバ、貴價ト云ヘドモ豪民ニ賣リ與ヘテ、永ク税セザルハ義ニ非ズ、貧民ニ貸シテ利ヲ征ルコトモ義ニ非ズ、費用ノ償ヒニ取闕ギテ、民ニ信ヲ用フコトモ義ニ非ズ、詐術ヲ遣シヲ人望ヲ失フコトモ義ニ非ルヲ以沒收シ玉ヲ歟

孟子稱、或人曰、世守也、非身之所能爲也

又曰、諸侯之實三、曰土地、曰人民、曰政事

虞之制ニ、而官事不レ攝、吾夫子所ニ以深責ニ管仲變ニ先王之法ニ也

戒ニ豪民驕一

御國至極ノ急迫ニ及ベル時、假金ノ方便モ絕ヘ、諸役人ノ術計モ盡キタルニ依テ、御國中ノ下郡役ノ者ヲ招キ御暮方ノ目錄ヲ渡サレ、厚ク御賴アリテ月々ノ御運送物、且ツ御家中ノ渡シ方金ノ入用盡ク下郡ヨリ手ヲ合セ、御成稼ノ裁配モ下郡ノ手ヲ歷ザレバ出入スルコト不レ能、是ヲ以追々ニ威ヲ振ヒ、役人ヲ侮リ上ミヲ畏レズ、己レヲ高ブリイットナク分限ヲ失フ、其手ニ屬スル豪民モ出銀ヲ肝煎スル役者ナルニ依テ、自然ト下郡ノ風俗ヲ見習ヒ、百姓ノ本意ヲ失ヒ、冠履倒置ノ國風トナレリ、相公新政ノ始メニ猛威ヲ以テ下ヲ御シ、下郡ノ役ヲ取上ゲテ平民ト爲シ、人別ノ分限ヲ計リテ迷惑スル程ノ出米ヲ課シテ取立ヲ稠クシ、若異議ニ及者アレバ田畠家財ヲ闕所シテ、沒收スベキ由ヲ以日限ヲ極メテ遲滯無カラシム、是其人ヲ惡ムニ非ズ、事ヲ改ムルニハ猛ニ非レバ服セザルニ依テナリ、夫ヨリシテ後豪民モ上ハ恐ロシキモノト云フコトヲ知テ、己ガ分限ヲ守リテ其業ヲ務ムル事ヲ事トス、蓋シ民ハ國ノ本ナリ、農ハ民ノ本ナリ、故ニ本業ヲ舍テ末作ニ走ル者ヲ戒メ玉ハンガ爲メニ、豪民ノ驕ヲ挫キテ一國中ノ觀ニ備ヘ玉フ歟

易恒象傳曰、剛上而柔下、註云、上剛可ニ以斷制一、下柔可ニ以施一レ令

沒ニ收義田及免許地一

新田方・年餘方ノ由テ起ル所以ナリ、相公新政ノ始メニ此數箇ノ役所ヲ毀チテ聚斂ノ道ヲ斷チ玉フ、蓋其本ヲ强クセンガ爲ニ末ヲ刈リ玉フ歟

論語曰、君子務レ本、本立道生

大學曰、其本亂、而末治者否矣

攝ニ官事一

治國ノ要ハ財ヲ足スヲ以本トス、財ヲ足ラスハ用ヲ節スルヲ以テ守リトス、用ヲ節スルハ省クヲ以務メトス、事ヲ省クノ源ハ官事ヲ攝ルニ在リ、官事ヲ攝ルハ執政ノ取捨ニ有リ、相公政ヲ執テ御番頭ヲ減ジテ御番士ノ支配ヲ兼掌ラシメ、御者頭ヲ減ジテ足輕ノ支配ヲ兼シメ、諸奉行ヲ減ジテ郡奉行ニ御勝手方奉行ヲ兼、御勘定奉行ニ御作事奉行ヲ兼、御破損方奉行ニ御小人方、屋舖方御堀方ヲ兼ネ、御修復方奉行ニ寺社修理方ヲ兼ネ、一役所三人ノ奉行ハ一人ニ減ジ、衆議判之事ニ害アルコトヲ察シテ一人ニ是ヲ掌ラシメ、各存分ノ務ヲ爲ンコトヲ欲ス、而後諸奉行ヲ招キテ、面々職トシテ勤ル所ヲ問ヒ、新政ノ心得ヲ吐露シテ人別ニ是ヲ教誡シ、小役人ノ勤メ向キヲモ邪路ヲ塞ギテ正道ニ趣カシム、蓋聖人ノ意ニ本ヅキテ、官事ヲ攝テ儉德ヲ愼ムコトヲ施シ玉フ歟

論語曰、或曰、管仲儉乎、孔子曰、管氏有ニ三歸一、官事不レ攝、焉得レ儉

群書考索曰、古者官不ニ必備一、惟其人而已、有ニ其人一則備、無ニ其人一則兼、是以周官之作、實倣ニ唐

ヘ、融通自由ナルヲ以テ、抜ラザル費ヘヲ生ジテ、彼モ我モ志ヲ敗ルニ至ル、其虚ニ乗ジテ商家ノ利權益々切ニシテ、上ノ御支配モ彌増ニ難澁ニシテ、止ムコトヲ得ズ空札ヲ出シテ國實ヲ增シ、國中ノ財ヲ浮キ立シメテ、其中ニ居テ人ノ有ヲ取テ我ガ無ヲ補ヒ、無涯ノ費用ニ供ヘントシテ商買ト利ヲ爭フトイヘドモ、商買ノ利ニ鋭キコト誠ニ神ノ如シ、是ヲ以テ札坐ノ元備ヘノ有無ヲ計リテ、銀札ニ私ノ價ヲ立テ、壹文目ヲ或時ハ五十錢トシ、或時ハ四十、或時ハ三十、或時ハ二十ト見テ貨物ヲ買賣ス、商買ノ利ニ走ルコト飛矢ヨリモ速カナリ、依之一國中ノ人忠信ノ志ヲ失フテ、驕泰ノ風俗ニ移リ、四民共ニ困窮ス、相公新政ノ始メニ札座ノ彼所ヲ躋テ、銀札ノ取遣リヲ禁ジ、銅錢ヲ以テ通用セシメ、不實ノ媒チヲ退ケ玉フ、蓋シ一國中ノ忠信ノ路ヲ啓キ玉フ歟

呂氏春秋曰、君者仁義以利之、愛利以安之、忠信以道之、務除其災、致其福、故人之於上也、若璽之於塗也、抑之以方則方、以圜則圜、若五種之地必應其類、而蕃息百倍此五帝三王之所以無敵也

躋新役所

御國之御支配數十年來之趣ヲ見ルニ、其年ノ御取稼ヲ以テ前年之假金ヲ償ヒ、又當年之不足ヲ他ヨリ假リテ月々歩ミ行クト云ヘドモ、入ルヲ量ラズシテ費用之來ルヲ待テ當手ヲ合セ、種々ノ計略ヲ以艱難ヲ渡ルニ就テ、其道ヲ助ル者ヲシテ聚斂ノ媒チトシ、新役所ヲ建テ之ヲ掌ラシム、是札座・義田方・

徒以下ノ御擬作ノ高次第ニ增シテ、御支配ノ基本モ是ヨリ崩ルヽニ至ル、相公政ヲ執テ、御徒以下ニシテ無用ノ人ヲ省キテ減人トナシ、一代ギリニ養料ヲ遣リテ其跡ヲ斷絕シ、鄕町ノ者ニ與フル所ノ給扶持ヲ取上ゲテ平民ニ反シ、始テ士農ノ尊卑定ル、唐人コレヲ見テ減人ノコトハ不仁也ト云フ、君子ノ國ヲ治メ民ヲ安ンジ、仁政ヲ施シテ各其所ヲ得セシメテ、飢寒ノ憂ヒ勿ラシムルヲ以テ仁ト稱スルコトヲ知ザルガ故ナリ、疾ヒ將ニ膏肓ニ入ントスル時ハ、瞑眩スルホドノ藥ヲ用ヒザレバ治シ難シ、國モ亦然リ、御支配ノ急迫ニヨリテ其痛ミ將ニ民ノ骨髓ニ入ントス、今弊政ヲ改メズシテ其儘ニナシオキ玉ハヾ、一國中亂レ一家中食ヲ失ヒテ、飢ニ及バントスルコトヲ日ヲ算ヘテ待ツベシ、是レ食ノ重キヲ取テ仁ノ輕キヲ捨テ玉フト見ヘタリ、蓋孟子禮ト食トノ輕重ヲ以テ屋廬子ニ對フル意ナラン歟

孟子曰、任人有レ問二屋廬子一、曰、禮與レ食孰重、曰、禮重、色與レ禮孰重、曰禮重、曰、以レ禮食則饑而死、不レ以レ禮食則得レ食、必以レ禮乎、屋廬子不レ能レ對、明日之レ鄒、以告二孟子一、孟子曰、於レ答レ是也何有、不レ揣二其本一而齊二其末一、方寸之木、可レ使レ高二於岑樓一

廢二銀札一

御國寶鈔ヲ製シテ銀札ト名ケ、一文目ヲ六十錢ノ定價ニシテ銅錢ノ代リニ用レ之、銅錢ノ適用ヲ禁ズ、是ヲ以テ一國中銀札ニアラザレバ、米穀貨物ヲ買フコト不レ能、銅錢ハ斤目甚ダ重クシテ運送自在ナラズ、銀札ハ斤目太ダ輕クシテ交易便利ナルユヘ、人々步行ノ易キヲ好ミテ、漸々ニ銅錢ヲ出シテ銀札ニ易

借毎年登セ米七萬俵ニ定メ、一俵貳拾錢目ヅヽ假直段ヲ立テ、此ノ銀高千四百貫目、年中ノ月割ヲ以テ毎月江戸ヘ運送セシメ、前月ニ江戸ヘ達シテ遲滯ナカラシメ、其出銀ノ月ヨリ利息ヲ加ヘ登セ、米ノ賣代ヲ以テ元利ノ差引ヲ立テ、若シ足ラザレバ正銀ヲ以テ償ヒ、一年切リニ皆濟ヲ遂グ、新政ニ利息ノ出ルモノハ是ノミナリ、是又登セ米ヲ止メ、正銀運送ニシ玉ハヾ、利息ノ費ヘハ有ラザルベケレドモ、御藏元ノ困ミヲ失フ時ハ、江戸表ノ臨時ノ變アル時ノ備ヘナクシテ、安カラザルノ憂ヒアランコトヲ慮リ、利子ノ費ヘヲ厭ハズシテ御藏元ノ親ミヲ結ビ玉フ、蓋小利ヲ見ル時ハ大事不ㇾ成ノ理ヲ以テ、遠年ノ計ヲナシ玉フ歟

論語曰、子夏問ㇾ政、孔子曰、毋ㇾ欲ㇾ速、毋ㇾ見二小利一、欲ㇾ速則不ㇾ達、見二小利一大事不ㇾ成

減ㇾ人

所謂故國ハ喬木有ルノ謂ヒヲ謂フニ非ズ、世臣有ルノ謂也ト孟子ノ云ル如ク、高眞廟御入國ノ時ハ、大坂陣ヨリ間モナク大臣上ミニ列シ、精兵下ニ众フシテ武備モ盛ンナリシニ、天下一統シテ太平年久シク續キテ、世界ノ風俗奢侈ニナリ、各々財ヲ敗リテ國用足ラズ、是ヲ以テ市井ノ人ニ乞貸シテ當手當手ノ不足ヲ補ヒ、入ルヲ量リテ出スコトノナスノ制モ行ハレズ、其虛ニ乘ジテ種々ノ智謀ノ者出テ、民家ノ財ヲ聚斂シテ己ガ功トシ、此レヲ以テ上ノ費用ヲ償フコトヲ善シトシテ、事ヲ執ル人モ專ラケヤウノ人ヲ用ヒ、出金ノ多寡ニヨリ其功ヲ賞シ、農ヨリ進ミテ俸ヲ賜ル者枚擧スベカラズ、是ヲ以テ御

江戸御屋敷ノ入用牒ヲ穿鑿シテ、無用ノ物ヲ省キテ元立ヲ減ジ、是迄ノ假金ヲ年賦ニシテ返辨ノ期ヲ約シ、諸役所ノ買掛リヲ償ヒテ以後ノ定法ヲ立テ、諸役人ヲ勵シテ官事ヲ兼シメ、當時ノ務メニ與ラザル者ハ御國勝手ニシテ、定府ノ人高ヲ減ジ、御交替ノ時節ヲ忘ラセ玉フヿ無レバ、權門方ヘ不時ノ贈物ヲ呈ズル事モナクシテ諸ノ費用ヲ除キ、月次ノ銀高ヲ定メテ、前月ニ江戸ヘ達セシメ、凡御買上ゲノ物ヲ當銀ニ調ヘテ其價ヲ賤クシ、月次ノ外ノ臨時ノ入用ハ、其時々ニ漕送シテ負金ノ費無ラシム、相公ノ曰、御支配ノ本ハ御國ナレドモ、其占リヲ定ムルヿハ東邸ヲ以源トシテ、其源濁ル時ハ流派如何トモスベカラズ、依之東邸ノ占リ合ハ脇坂公ヘ屬シ玉ヘリト、蓋相公ノ政ヲ執レル、省事養財ノ道ヲ主トシ玉フ歟

易象傳曰、澤上有水、節、君子以制數度議德行

史記禮書曰、孰知夫輕費用之所以養財也

會大坂藏元

相公執政ノ命ヲ蒙リ玉ヒテ、東邸ノ費用ヲ省キ諸物ノ規矩ヲ定メ、損益ノ巨細ヲ審ラカニシテ負金ノ根ヲ斷チ、諸役人ヲ戒メテ利息ノ出ル假借ヲ堅ク禁ジ、小シノ費ヘモ無キヤウニ約ヲナシテ、次ニ大坂ヘ登リテ彼地ノ入用ヲ點檢シ玉フニ、年々ノ負金ニ利子ヲ加ヘ、毎年會計ヲ見ルト云ヘル、其利息ヲ償フニ足ラザルハ、去年ヨリ今年ハ負金ノ高増加シテ、鼠ノ子ヲ生ズルガ如シ、是ヲ以相公諸銀主ニ會シテ既往ノ不實ヲ謝シ、後來ノ信ヲ約シ、負金ノ元ヲ年賦ニシテコレヲ償ヒ、利子ノ費ヘヲ免カル、

神祖ノ御掟ヲ守リ玉ヒテ、御朝覲御交替ノ時ヲ亂リ玉ハズ、一家中ノ風俗モ益々盛ンニシテ、一國中ノ民モ日月ノ光リヲ蔽ハル、コトナク、年穀モ能ク熟シ、極治ノ瑞於レ是在リ、夫難レ得ハ時ナリ、幸ヒナルカナ相公賢君ニ事ヘテ專ラ委任ヲ蒙リ、膏澤民ニ降ル、寔ニ元首明ナリ、股肱良ナリト云ベキ者歟

書ノ太甲ニ曰、愼ニ乃儉德一惟懷ニ永圖一

書ノ益稷ニ曰、元首明哉、股肱良哉、庶事康哉

大意

相公新政ノ始ニ子產ノ子太叔ニ語ル詞ヲ誦シテ云ク、凡國ヲ治ムルニ時勢ノ機ヲ考ヘ、寛猛ノ辨ヲ明ラメザレバ、縱ヒ大智ノ人タリトモ其功ヲ遂ゲルコトハ難カルベシト云リ、左ニ記ス所ノ條件一ツトシテ猛ニ非ルハナシ、是舊政ノ弊ヲ改メ玉ハンガ爲メニ、新政ノ始メニ猛行ヲナシテ、所謂三尺ノ岸ヲ築キ玉ヘバ雲州大ニ治マレリ、蓋子產ノ詞ニ本ヅキテ、其始メニ猛ヲ以テ事ヲ起シ玉フ歟

鄭子產有レ疾謂ニ子太叔一曰、我死子必爲レ政、唯有レ德者、能以レ寛服レ民、其次莫レ如レ猛、夫火烈望而畏レ之、故鮮レ死焉、水懦弱狎而翫レ之、則多レ死焉、故寛難、孔子聞レ之曰、善哉、政寛則民慢、慢則糾ニ於猛一猛則殘、殘則施レ之以レ寛、寛以濟レ猛、猛以濟レ寛、寛猛相濟、政是以和　見ニ左傳一

家語曰、三尺岸、空車不レ能レ踰 險故也、百仞之山、童子升而遊焉、陵遲 故也

定ニ東都邸規矩一

治國譜及治國譜考證

朝日丹波
森文四郎 著

發端

朝相公語テ曰、御國ノ御支配急迫ニ至リテ、明和四亥ノ夏老侯ノ命ヲ奉ジテ、朝相公田大夫ト東邸ニ至リテ、各治安ノ策ヲ獻ゼラル、此時老侯朝公ニ命ズラク、上初テ本藩ニ就キ玉フ時、積年ノ弊政ニ依テ、群臣內ニ困ミ百姓外ニ窮シテ朝不レ謀レ夕、臣等ノ知ル所也、是ヲ以臣民撫育ノ爲ト思召シ、暫ク御政事ヲ親ミ玉フト云ヘドモ、御疾病ノ故ヲ以テ御滯府マシマスコト數ニシテ思召ニ任ゼラレザルノ間、御世ヲ嗣君ニ讓リ玉フベキノ旨決斷シ玉フ、然ル上ハ御政事ヲ相公ニ任ゼラレ、嗣君ヲ輔佐シ奉リテ國家安泰ノ計ヲ廻ラスベキ旨仰出サレタリト、於レ是ニ相公政ヲ執テ御後見ノ任ヲモ蒙リ玉ヘバ、愈君ノ御仁德ヲ導キ、驕奢ノ道ヲ絕チ、儉德ヲ愼ミ守リ玉ヒテ、國家永久ノ圖ヲ思シ召ンコトヲ慮リ玉フ歟、老侯ノ時御納戶金トテ、年々定例トシテ上ゲ來レル奧向キノ御用金ヲ除キテ、御納戶金ト云フ名ヲ消シ玉フ、當侯御世ヲ嗣ギ玉ヒテ、朝政ヲ憚リ玉ハズ、寬仁ノ德具リ玉ヒテ、淫樂ノ御好ミモナク、

治國譜考證目次

相公恒ニ誦シテ云ク、孔子九夷ニ居ント欲ス、君子居ラバ何ノ陋キコトカ有ント、先大夫往昔神祖ノ麾下ニ屬シテ難波ノ大亂ヲ鎭メ、高眞廟ニ事ヘテ國初ノ功臣タルヲ以テ、代々卿相ノ家ナルガ故ニ、相公ニ至テモ治國ノ業ハ實ニ其任ト思ヒ玉フナラン、即今當職ニ就テ政ノ闕タルヲ補ヒ、風俗ノ頽敗スルヲ改メ、立派ト號シテ舊格古例ニ拘ハラズ王制ノ根元ヲ踏ヘ、人情ノ因ル所ニ本ヅキ、治要ノ樞機ヲ立テヨリ以來、國用聊カ事ヲ闕グコトナク、西丸大奥向御普請御手傳ヲ始メトシテ、姫君御婚禮、大夫人御殿造立、君夫人御入輿、連三郎君御出世、數々ノ費用莫大ナルヲ、民ニ少シノ課役モ無クシテ事盡ク整ヒヌ、猶又年々ノ稅ヲ餘シテ、府庫ニ藏シテ國家永續ノ基ヒヲ立テ、治道ノ大體ヲ持シテ、上ミ君ヲ匡輔シ、下モ臣民ヲ撫育シ、禮義上ミニ行ハレ、恩澤下ニ降テ、一家中靜謐、一國中無事、官法閒暇ナリ、其人存スレバ其政擧グト、豈虛語ナランヤ、惜ムラクハ時移リ世變リテ、相公ノ政跡傳ラザランコトヲ、是ヲ以テ其考證ヲ著シ、事實ノ梗槩ヲ述ルコト左ノ如シ

安永四年乙未春二月

郡奉行兼御勝手方

森文四郎元綏謹識

一 百姓之御免地幷御目見格を取上る事
一 郡々之酒屋を減じ往還端の茶店を止る事
一 米直段を定むる事
一 義倉方を起す事
一 鐵山之制度を立る事
一 御手船を造る事
一 貧民御恤之事
一 勸學之事
一 諸借用取遣を永く關年申付事
一 地方之法を改る事
一 常平方之法を行ふ事
一 御家中之免を老侯之命を以古に復す事
一 大河普請を以水難を除く事
一 訴狀を以民之邪を糺す事
一 御堀浚並橋普請之事
一 將來必用之御備を立置事

治國譜考證序

朝相公其始メ政ヲ執シ中塗ニシテ已メラル丶ト云ヘドモ、其職ヲ去テ自若タリ、今又政ヲ執テ其事ヲ遂ゲ其功ヲ成スト云ヘドモ、其職ニ在テ自若タリ、之レヲ用ユレバ則行ヒ、之レヲ舍レバ則藏ル、唯君ノ命ズル所ノマヽ也、國家ニ干城タルヲ以テ其家ノ分トス、當職ノ事ハモトヨリ與カラザル者ノ如シ、

を引替て、上より下を御する道に趣けり、是全く予が功にはあらず、上より其始を啓き給ひて、予をしてこれを輔けしむ、即今治に廻る時節なるにや、一家中一國中も能服して、予が寸志之勤も立ぬ、其行ふ所の目錄を左に擧て、子孫をして是を知らしむ、予が功業の成就せるは、此時坐列も諸大夫の上に居て、其齢ひも人に讓る事なく、志も國家興廢の境に至りて、老侯の御壯年の御身を以御世を讓り給ひ、專ら丹波が存寄に任せ取捌べき旨仰を蒙り奉りたる故也、唯恐らくば我子孫斯る譯をも辨へず、猥に功業を貪りて國家を誤らん事を、孟子不レ云乎、「雖レ有二智慧一、不レ如レ乘レ勢、雖レ有二鎡基一、不レ如レ待レ時」と、能々此意を味へかよし

目錄

れば御意の儘にするにしくはなかるべしと、小田切氏も予と同心なる故、其趣を以て答へ奉りぬ、老侯の命に曰、年來之困窮に付て、家中之祿四ッ五分之免を三ッにして、擬作の高を減ずといへども、曾て永續の筋も見えず、是に依て何卒御在世之中に、本免に返し可レ被レ遣旨被二仰出一たり、是至て難き事なれ共、我侯の御深切を感じ奉り、何分思召の相立様に可レ仕と御受して、同年八月五日江戸出立、同月十七日大坂へ着、彼地にて御藏元のメリ合を定め、登せ米の高を究め、江戸仕送の規矩を立、御藏元と約をなして、同九月十四日大坂を出、同月廿日國に歸り、俄に其手〳〵の役人に申付、諸士の給帳を改め、古免の四ッ五分に返し、御徒以下の給扶持も古來の通の高に直し、御家中一統へ被二仰出一有りて古免に返し被レ下之旨、老侯より御意の趣も事濟ぬ、扨此冬御世を御入替の御議定有て、兼て老侯よりの命を以、當侯の御後見に任ぜられたるに依て、彌以て御國政を予は存分に執行ふべきよしを改て被二仰出一、御後見の事なれば、御身分の事をも聊憚なく打はまり、兎にも角にも御國の堅固ならん事を本として一家中の困窮を救ひ、一國中の疾苦を免かれしめ、公儀へ忠勤の相立つ様に心を盡すべきのよしを被二仰渡一、予も仕懸りたる事なれば辭し奉るべき道なく、御受に及びたり、重き仰を蒙り奉りて、誠に安からず思へども、君の爲に能その身を致すは臣たる者の常なれば、我が智の至らざるは論なし、此場に臨みて家を忘れ身を忘れ、存分の治を爲ずんば有べからずと、心を定め取懸りたるに、幸にして天道に背ける事もなきにや、年穀も熟し、國その國に非るの危を免かれ、冠履倒置の風俗

て出府いたし、事由を達すべきのよしにて、其砌り同席一統段々諸論に及び、最早御取締の手段も盡きぬれば、何れなりとも存寄あらん面々は進出て勤られよかし、忠勤も此時ぞかしと丁寧反覆して議りしかども誰有て我勤んと云ふ人もなし、さらば何れも存寄なきよしを表同席よりも言上に被及、予も一所務を試むるに、此まゝにては術計も盡きたる趣達せんと決斷して、小田切氏と同じく同年五月廿八日雲州を發して東都に到り、御支配御難澁至極に及べるよしを言上して君命を待居たり、此時老侯遠き慮りを廻らし給ふに、所詮御在位にてましくては、公邊の御勤を闕き給ふ事も成らがたく、御國政の上にもむつかしき事有べしと云ふ事を御會得ましくて、御世を嘗侯に讓り給ん事を被仰出たり、予つらく此儀を案ずるに、老侯いまだ御壯年にましくて、御隱居の御身と成らせられん事、臣として[illegible]て絶したる事共也、されども御[illegible]勢と云ふばからなく、一國中の塗炭極る所なれは、何ほど惜しみ奉りても爲んかたなきに歸したり、

に上に獲られざれば、思ひを述る術もなく、道同じからざれば相爲に謀るべき人もなく、徒らに牙齒をくひしばりて年を過ぬ、時に明和三戊年六月廿六日、世子御歸城之上御後見役被二仰付一之旨、老侯より御直書を以被二仰下一、重任といへども世臣なるを以命ぜられたる事なれば、辭すべき所なく御受に及たり、此秋世子御入部まし〱て、當職の面々も御支配必至之急迫にて、御暮し方の工面而已に心を盡すといへども、投返しの手段も盡たるにや、追々言上に及び、君命を待居たる、此秋八月十八日、又老侯より御直書到來、世子御入部御規式相濟、四五日と過なば早速雲州發向いたし、江戸表へ可レ致二出府一之旨被二仰下一、予思ふに、御支配向は斯までに崩れ果、其上御政事は一向あさましき事に成行し事なれば、此儘にて治るべきにもあらず、若歸役の沙汰有りとも容易に受べき事にあらず、然ども君命なれば、召に應じて東邸に至る時、果して執政の職を被二仰付一、予老て氣力も衰へぬるに、まして頽敗に及べる御政事を、昔に挽回す事は能はざるよしの狀を述といへども强而命ぜられ、固辭するも忠誠之道にあらず、止事を得ず御受して國に歸る、時に十一月朔日なり、事を改んと欲れども年内餘日なく、艸々にして仕損ぜば御大事の端にもならんことを慮りて、是迄の法を不レ改、唯老侯之命を以、御家中年來及引方、且山門御普請御手傳被レ蒙レ仰候以來、諸士一統拜知差上御賄被二仰付一、引續作方不熟、彼是に付而引方御寛め可レ被レ下時節無レ之、于レ今御賄にて被二差置一、非二御本意一儀に付而、不レ被レ爲レ顧二前後一、丸知被二下置一候段被二仰渡一、格別之思召を以て三ツ免を丸知にして渡し置しか共、本法

于ㇾ時小田切備中と同役に被㆓仰付㆒、監物は於㆓東邸㆒病死す、翌卯年老侯御歸城なくして、土佐は隱居被㆓仰付㆒、權太夫予兩人をば其後御居間へ被ㇾ爲ㇾ召、暫く御役席を退くべし、拜領物有ㇾ之ては實之御免に相當候之間、不ㇾ被㆓下置㆒之旨御直書を以被ㇾ仰㆓渡之㆒、依而御自身に御政事を被㆓聞召㆒、御手傳として備中を被㆓仰付㆒、思召の御經濟を行はせられ、幾ばくもなく御自身之御捌を止させられて某氏に任ぜられたり、夫よりして御滯府年久敷して、御支配之基本も漸々に崩れ、上之信義も行はれず、御取續の爲として諸士の知行四ッ五歩の免を三ッ免に減じ、給扶持取の士列をも知行に應じて渡高を引下げ、雜人の俸をも右に准じて引方を立、種々の術を以當用を渡らんとすれども、元來其本を治めざれば國用彌足らず、於ㇾ是農民に位階を賣て時の用を足し、義田或は免許地と號して土地を裂き多くこれを與へ、公田の賦稅を民の私倉に收納せしめ、其價を取て無ㇾ涯の費用を償ひ、或は小役人の中に民家を欺き、邪謀を以金銀を出させ、公用に備んと云者有れば、器量の長短を量らず、出銀の多少によりて其功を論じて賞を施し、僥倖の俸は日々に增して、昔に比すれば十倍せり、武士の祿は年々に削られて尾大の愁をなすに至る、予退役之後二十年を歷て、年々の有樣を見るに、執政の職掌も年數をかさねず、諸役人の轉役も一年の滿るを待ず、其勤る所も金銀の才覺而已に打はまり、上下交々利を征る事を要務とし政道の事は心を留るに遑あらず、漸々に亡國の機を發せんとするに似たり、予干城たるべき祿に生て空しく年月を送り、まのあたり危難に至らんとするを見るに忍びがたけれども、進みで出る時

安永四乙未年春二月

惣論

朝日丹波卿保識

御家之御支配累年之御差支にて、時之當職代る〳〵政を執て心を盡すと云へども其功を遂ず、其故をいかにと案ずるに、多くは小利に拘りて大事を辨ずるに意なく、或ひは其量餘りて妄りに大業を存立、中途にして廢するに由れり、延享二丑年老侯御入部まし〳〵、時に予當職の列に具りて難默止同役村松伊賀・平賀筑後・大野舍人へ存寄たる儀を無覆藏申談じ、何れも其理に中れるの旨申に付而上言之書を相認、一統に罷出差上之、程なく伊賀は疾を以御役を辭、筑後舍人兩人は退役被仰付、予一人被差殘、有澤土佐・黑川監物・三谷權大夫同役に被仰付、翌寅年老侯御參覲被遊、御支配之筋御苦勞被思召、其夏予を東邸へ被爲召御尋有之、仍而手詰の愚策を捧候所、其通被試の旨奉蒙命能歸る、於是古を考へ今を制せんとするに數世を因循したる風俗なれば、容易に改がたし、然りといへども猶豫せば身を其職に納れざるの罪有、爰を以同役心を合せ、入るを量りて出る事を爲んとして、諸の費用を省き儉素の風に復さんとするに、懶惰の時節にして習ざることのみなれば甚人情に戻れり、

章在焉、源藏竊下、深蒙二相公之知遇一、無レ公無レ私、凡其有レ爲、未下嘗不上レ告二源藏一、故知二相公一、則不二敢讓一レ人也、因示二此書一、屬レ序且擇レ名、昔南朝傳氏、世爲二山陰一、並著二奇績一、家有二理縣譜一、子孫相傳、不二以示一レ人、今相公之治二大藩一何屑二山陰一令郎元明君、見爲二參政一、好レ學勞二心于政一、他日必有三繼レ之錄二畫一歌一、亦何屑二傳氏一、特取二其似者一、謹命レ之曰二治國譜一

桃　源　藏　拜　撰

治國譜自序

嘗て聞く、人の非を稱して己が是を陳ることは、訟者の道にして君子の爲ざる所也と、事を執て幸にして其驗を得るといへども、天命の然らしむることなれば、己が功と思へるは惑ひ也、善に伐る事なかれとは先賢の戒めなれば、愼しむべき事也、されども其事由を語ざれば其理分らず、爰を以予が政を執て行ふ所の大略を述べて、吾家に傳ふ、是人の非を稱するにもあらず、己が是を顯すにもあらず、善に伐るにもあらず、世上に公にせんとにも非ず、子孫の經濟に與らん者に知せんがために、事實を述る事しかり

治國譜序

老侯之請老也、貽今侯以朝日相公、國人望之、猶得大禹於九載洪水也、乃越辨上下、定民志、臨之以威、如雷如霆、疏川增防、大脩田疇、上下並富、併合要官、澄汰冗員、庶事無曠、廢交鈔以塞詐欺之源、剏海運而樹信義之臬、平糴價毎貴於浪華、賑窮恩動同于岐周、其餘善政不可勝數、未及七年、雲藩大治、八年夏四月、貴妹氏歸于淀藩、冬十二月、君夫人至自奥藩、費用並浩多、當是時也、秋毫不取諸民、民心乃安云、蓋相公之爲政也、不屑蹊迹、而暗契于古矣、契古而後、信聖人賢者之可法矣、信聖人賢者之可法、而後師經友史、雖諸子百家、收諸藥籠中、而不遺焉、遂與諸相公、率參政以下、凡職當要路者、月三詣泮宮、請源藏首說荀子、今方溯孟子、毎言及政體、輙顧下風、曰、爲仁之方、故當如是、治國之道、故當如是、蓋自徵也、相公自徵、而後人皆信其政矣、信其政、而後知學問之歸于治國矣、知學問之歸于治國、而後游泮宮者益多矣、方今國家殷富、誠使游泮宮者益多不已、則淳風美俗又何疑焉、大東之盛、藩翰三百、其大夫爲國勸學、如我相公者、無聞乎爾、則無有乎爾、相公嘗自記其所以更張紀綱、大致治安之梗概、以貽後嗣、森子章作之考證、其義明悉、所謂汙不至阿其所好者、子

治國譜及治國譜考證

朝日丹波
森文四郎 著

蕭何頓首シテ帝其人ヲ得玉ヘリ、臣死ストモ不レ恨ト申上タリ、其頃曹參ハ故アリテ蕭何ト不和也シニ、蕭何臨レ終曹參ヲ推擧スルコト如レ是ナルハ、曹參ハ私智ヲ不レ用、他智ヲ不レ容、蕭何ガ立置タル法ノ通ヲ少シモ不レ違施行、大器量アル故也、蕭何死後曹參代テ相國トナリシニ、果シテ諸事無レ所ニ變更一、コトヾヽク蕭何ガ政跡ニ循テ、四海平安也、萬民コレヲ悦デ、「蕭何爲レ法講如ニ畫一一、曹參代レ之守而勿レ失、載其淸淨民以寧壹也」ト歌ヒシトカヤ蕭何曹參不和也シトイヘドモ、蕭何ハ曹參ガ經濟ノ上ニ於テハ、己ト同心ナルコトヲ知テ、高祖ニ推擧シ、曹參モ蕭何ガ經濟ニ心服シ、私ノ怨ヲ以テ其政ヲ傷ラズ、況ヤ私ノ怨モ無ク、モトヨリ扇ノ樞ノ如ク、同心同力ニシテ政ヲ執ル者ヲヤ

右ハ後ノ執政當職私智ヲ不レ加、他ヲ不レ容、前ノ國治リタル法ヲ堅ク守ルヲ大器量タル證據ヲ示ス者也

朝日丹波鄉保

治國大本　終

周ノ世ニ齊ノ管仲・鄭ノ子產ト云シハ、イヅレモ其國ノ執政當職ニシテ、名高キ賢大夫也トカヤ、其所レ爲ヲ管子左傳國語等ニ考フルニ、第一ニ田畝ノ利害錢穀ノ出入ヲ熟知シ、是ヲ本トシテ諸政ヲ取捌ケル由見ヘタリ、禮義廉耻ヲ國ノ四維トシ、「倉廩實而知二榮辱一、衣食足而知二禮節一」ト云シハ、即管仲也、上下富タル上ハ、士農工商トモニ自榮辱禮節ニ心附ク樣ニ成ル、四民榮辱禮節ニ心附ケバ、俗美ナルノ國ト可レ謂也、其本ハ當職タル者ガ田圃ノ利害錢穀ノ出入ヲ熟知シテ、國ヲ富スヨリ起ルナリ

禮記ノ王制篇ニ、「冢宰制二國用一、必於二歲之杪一、五穀皆入、然後制二國用一、用二地小大一、視二年之豐耗一、以二三十年之通一制二國用一、量レ入以爲レ出」ト云ヘリ、冢宰ハ天子ノ執政當職也、天子ノ執政大臣スラ、親制二國用一如レ此、右ハ執政大臣ノ金銀米穀ノ出入ヲ量リ、國用ヲ制スル證據ヲアゲ示ス者也

荀子ニ「有二治人一無二治法一」ト云ヘルハ、國ヲ治ルニハ國ヲ治ル程ノ器量アル人ヲ得テ任用スレバ、下地ニ治法無クトモ、其人己ガ智ヲ以テ治法ヲ立テ、治ル也、是ヲ有二治人一ト云、假令下地ニ聖帝明王ノ立置玉ヘル治法アリトモ、其人ナキトキハ法ハ死物ニ成テ動カヌ故、國不レ治也、是ヲ無二治法一ト云、然レバ國ヲ治ルコトハ專ラ執政當職ノ器量ニ在ルコトナレドモ、年來國治リタル實迹ノ法ハ、後ノ當職私智ヲ加ヘズ、他智ヲ用ズ、其通リヲ堅ク守リテ國ヲ治ル、是亦大器量也、昔漢ノ蕭何ハ高祖ニ事テ、開國第一ノ功臣也、病危カリシ時、高祖其第ニ臨御アリテ、君即百歲ナラン後ハ、誰カ君ノ職ニ代ルベキト御問有リケレバ、臣ヲ知ルコトハ莫レ若レ主ト申シ上ル、因テ曹參ハイカヾト御問有ケレバ、

右ハ國ヲ治ルニハ、上下ノ分ヲ立テ定ムル證據ナリ

昔漢ノ文帝ハ賢君ニテ、明カニ國家ノ事ニ習玉ヘリ、有時右丞相周勃ニ、天下一歳ノ決獄ハ幾何ゾト御問アリケレバ、周勃不レ知ノ旨謝申シ上グル、天下ノ錢穀一歳ノ出入ハ幾何ゾト御問有ケレバ、又不レ知ノ旨謝申シ上グル、是時周勃對ルコト不レ能ヲ媿テ、汗出テ背ヲ洽タリ、文帝又左丞相陳平ニ同様ノ御問有リケレバ、陳平各有ニ主者一ト答フ、主者ハ爲レ誰ト御問アリケレバ、陛下即決獄ヲ問ヒ玉ハントナラバ、廷尉ヲ責メ玉ヘ、錢穀ヲ問ントナラバ、治粟內史ヲ責玉ヘト申シ上ル、諸事各有ニ主者一、丞相ノ所レ主ハ何事ゾト御問アリケレバ、「宰相上佐ニ天子一、理ニ陰陽一、順ニ四時一、下遂ニ萬物之宜一、外鎭ニ撫四夷諸侯一、內親ニ附百姓一、使ニ卿大夫各得三任ニ其職一也」ト申上タルニ付キ、陳平ハ御前ノ首尾善リシトカヤ、此等ノコトナド見聞シテ、執政當職ハ陳平ガ申ス通リニコソ可レ有也ト思フハ、大ナルコヽロ得違也、周勃ハ武人ニテ經濟ノ道ハ不案內ナル故ニ、決獄錢穀ノ數ヲ知ラザリキ、宰相ノ知ラデカナワヌ事ヲ知ラザリシヲ恥デテ、汗洽レ背タルハ實意ニシテ末頼母シキコト也、陳平ハ智ヲ好デ甚敏辯ナル人ユヘ、脫避ニ妙ニシテ己ガ過ヲ過ト見セズ、丞相ト云モノハ決獄錢穀ノコトヲバ、其主者々々ニ任セテ、其身ハ不レ知ガ本體ノ様ニ言ヒ廻シ、賢君ヲ欺キ直臣ヲ愧シムルニ至ル、實ニ惡ムベキ也、明ノ凌稚隆ガ評ニモ、「一歳治獄、可三以知ニ民俗厚薄一、一歳錢穀、可三以知ニ國計盈虛一、此眞宰相任也、而陳平責ニ之廷尉治粟一、烏得レ爲レ知ニ其任一哉」トイヘリ

者ハ千石ノ分ヲ守リ、百石ノ者ハ百石ノ分ヲ守リ、他ヲ不レ羨不レ學シテ其身ギリニ支配スルトキハ、窮スルト云コト無クシテ自然ニ富ヲ致ス也、然ルトキハ當職ハ國ノ分ヲ知テ、國君ノコレヲ守リ玉フヤウニスルヲ第一トスベキ也、此處立定レバ、仁モ義モ禮モ從テ生ズル也、貧ナルトキハ不手廻エシテ、諸事後ロ前ニナルモノユヘ、智者モ愚鈍ニ見ユル、俗ニ所謂貧スレバ鈍スルトハ是也、富ムトキハ諸事思フマヽニ調ヲ故、格別有レ智樣ニ見ユル、然レバ富メバ智モ生ズルト云テ可也、扨政事ノ品繁多ナルニ付テ、當職一人ニテハ行屆ヌ故、同役ヲ立置ルヽ也、同役是亦扇ノ樞ノ如シ、扇ノ樞ト云モノハ一本ニテハシマラヌ故、左ヨリ一本、右ヨリ一本、同ジ形ノ物ヲサシコミ、中ニテジツトシマリ合テ、數多ノ骨ヲ持堅ル也、同役モ如レ是ニ何人アリトモ、同心同力ニシテ國政ヲ執ニテ、治國ノ功業成就スル也、扨又江戸御屋敷ニモ當職カハル〳〵勤番セデカナワヌ也、江戸ト御國トハ諸事大ニ異ナル故、江戸ニツムル人ハ江戸ヲ主トシ、御國ニ居ル人ハ御國ヲ主トシ、自然ニ心一和セヌ樣ニ成也、是亦扇ノ樞ノ如ク東ヨリサシコムモ西ヨリサシコムモ、同樣ノ樞ニテ少シモ異ナルコトナク、同心同力東西ヨリシマリ合テ國ヲ治ルニテ、國永ク安富、君永尊榮ナリ

右ハ席上ノ空論紙面ノ虚文ニハ非ル也、實ニ奉レ蒙ニ嚴命ヲ、親試テ大ニ其效ヲ得タル爲方故ニ、記シ置者也

易ノ履ノ卦ノ象ニ、「上レ天下レ澤、履、君子以辨ニ上下ヲ、定ニ民志ヲ」トアリ

卑役儀ノ輕重ニヨリテ一樣ナラズ、當職ノ不忠ハ人君ノ御身ト國家ニ係ルコト故、大不忠也、夫治國ノ本ハ金銀米穀ヲ府庫倉廩ニ實シメテ、國用不足無樣ニスルコト也、其爲方ニ邪正ノ差別アリ、邪ナルハ詐謀ノ謀ヲ以テ、百姓町人ヲ虐取リ、他國ノ金銀ヲ借出スヲ主トシテ、出シ用ル所ヲ節スルコト不レ能、故上下共貧ク成テ國家ノ危難必至也、正キハ嚴ク上下ノ分ヲ立テ定テ、威權ヲ上ニ握リ、而後田圃ノ步數ヲ詳カニシ、正理ヲ以テ年稅ヲ取リ、收納ノ額ヲ何ホドト云コトヲ知リ、コレニ因テ出シ用ル所ヲ裁制シテ、一定ノ法ヲ立ル故、米穀金銀必餘羨有テ、倉廩府庫充實スルニ至ル、百姓町人モ虐取ルヽコト無故、衣食住ニ窮セズ、コヽニ至テ上下共ニ富ミ、不慮ノ大費用アリトモ凌ギ行ク也、禮記ノ王制篇ニ、「量レ入爲レ出」トイヘリ、是萬世治國ノ妙方也、孔子ノ「道ニ千乘之國ハ節レ用而愛レ人」トノ玉ヒシ語ニ、前後次第ノ義アルコトヲ知ルガ、經濟ノ肝要ナルヨシ聞及ベリ、節レ用トハ國ノ入用ニ限ヲ立テ、限ヨリ外ヘハ決シテ出サヌコト也、人君タトヒイカホド愛レ人ノ仁心有ラセラレテモ、御入用ニ限ヲ不レ立、妄ニ費シ玉フナラバ、何ホドノ金銀モ不足故、畢竟大ニ群臣ノ俸祿ヲ減ジ、百姓町人ヲ虐ゲ取リ、他國ノ銀主マデヲ顚スヨリ外無キナレバ、心ハ愛レ人玉フトモ、實ハ不仁ノ至極也、因テ聖人節用ヲ前ニ云テ、愛人ヲ後ニ云玉ヘリトカヤ、此處ヲ熟知シテ、總テノ入用ニ嚴ク限リヲ立ベキ也、是仁政ノ本也、論語ニ有子ノ本立而道生ト云ルノ本ハ、孝弟ヲ指スヨシナレドモ、經濟ノ上ニテハ富ヲ本ト意得ベキ也、其富ハ各分ヲ守ルヨリ起ル、國君ハ御領知ノ額ヲ分トシ守リ玉ヒ、其臣モ千石ノ

ニ不足セバ、銀主ニ信義ヲ失ハン、其時ハ百姓モ困窮スレバ、彼貸附タル金錢モ取返スベキ所無ラン、コヽニ至テ貸タル金銀モ不ㇾ歸、借リタル金銀モ返スコト不ㇾ能、國勢大ニ衰フ、國勢大ニ衰フレバ、必彌增ニ災難有ルモノナレバ、其後ノ形狀ハ如何ナル大事ニヤ成ン、實ニ可ㇾ畏也、荀子ニ前後慮ト云コトアリ、庸人ノ事ヲ興スハ、目前ノ利ヲ見レバ以後ノ害ヲ慮ラズ、智者ハ前ニ以後ノ害ヲ慮テ、其事ヲ興サヌ也、コレヲ前後慮ト云、然レバ前ノ貸スノ利ハ後ニ借リルノ害タルコトヲ前後慮シ、唯不ㇾ貸不ㇾ借シテ謹デ府庫ノ財ヲ守ルベキ也

右ハ以前御借用國家ノ大害ヲ成シタル大概ヲ記シテ、且當時府庫ノ財ヲ積ムヲ本トスルニ就テ、後來貸附ノ事與テ再ビ御借用ノ禍ヲ引キ出サンコトヲ恐レ、爲ニ其一條ヲ附記シテ、國害ヲ未然ニ制スル者ナリ

夫執政當職ハ、國家ノ安危存亡ノ係ル所、此上モ無キ重任也、タトヘバ扇ノ樞ノ如シ、樞ユルミ脫レバ、骨コト〴〵ク分レテ扇ノ用ナサズ、上ノ御選ヲ以テ執政被ニ仰付ニ、國ノ樞也ト被ニ思召ニ、其身ハ權威ヲ得タルヲ喜ブマデニテ、治國ノ政ハ如何樣ニスルモノト云考モナク、徒ニ緣組養子屋敷替ナドノ願ヲ聽クノミヲ、大臣ノ職分ト意得、金銀米穀ノ出入ヲバ、差引算用下品ナルコトトシテ、專ラ用人ニ任セ、用人ハ勝手方ニ任セ、勝手方ハ下役人ニ任セテ、一國ノ大本勘定人ノ掌ニ落チ、國家ノ大難到來ノ時ハ、當職ハ茫然トシテ如何トモスルコト不ㇾ能ハ、不忠ノ甚キ也、不忠ト云モノモ格式ノ尊

政ハイツホドナク崩レテ、以前ノ爲方再興センコトヲ憂ヘ恕ル、也、然ルニ借金ニテ潰レタル大名ハ無シト云人アリ、不忠不智ノ至極誠ニ言語ニモ筆紙ニモ陳盡シガタシ、「詩大雅曰、庶人之愚亦職維疾、哲人之愚亦維斯戾」ト言ハ、庶人ハ無祿無官ニシテ上ノ人ニ治ラレテ居ル身ナレバ、愚ナルハ持前生得ノ疾也トガムベカラズ、上ニ立ツ人ハ君ヨリ重キ官祿賜リテ、政事ニ與リ國ヲ治ル身ナレバ、元來知慧アル筈ノコト故哲人ト稱スルニ、其哲人ガ愚ニシテ國家ノ危難ハ何事ヨリ起ルト云コトヲモ不レ知、又危難ヲ救テ國家ヲ治ル爲方ヲモ不レ知ハ、戾リ背キタリト也、彼借金デ潰レタル大名ハ無シト云ハ、カヽル人ナルベシ

附記

府庫ニ金錢充實スルヤウニナレバ、徒ニ積ミ置ンヨリハ利息ヲ賤クシテ貸シ附ルガ、人民ヲ救フノ仁政ニシテ、上ニハ居ナガラ金錢ヲ殖ヤスノ大益アリ、是卽惠而不レ費ノ術ナリト思附ク役人必出來ルモノ也、其爲方理ノ當然ナレバ、執政モ速カニ聞納レテ貸付ノコト與ルナリ、貸付ノコト興レバ次第ニ取廣ガリテ、數年ノ間ニ府庫ノ金錢ハ過半人手ニ渡リ、上ニハ數千枚ノ證劵ヲ貯ユルノミナラン、然ン時ニ若シ公役ノ大費用出來ラバ、寸志用銀ヲ科附ル上ニ、貸附タル金錢ヲ俄ニ取リ立ントスルモ、得出スマジケレバ不レ得レ已他所ヨリ高利ノ金錢ヲ借リ出シテ、間ニ合スルヨリ外ニ術無ラン、是御借用ノ禍再ビ興ルノ始也、扨其御借用御返濟有ルベキノ期ニ至リ、若水旱蟊賊ノ災有テ、御成稼大

治國大本

朝日丹波著

太平ノ世ニ國家ノ危難ニ及ト云ハ、過半借用ヨリ起ル也、以前ハ通用手形ト云モノ有テ、ソレヲ元ニタテ、郷中ヨリ米附ケ來ルヲ飯料トシ、其餘ヲ賣テ諸用ノ手合ニ及ケルニ、何時カ役所ヨリ米無キ手形ヲ仕出シテ、國用ノ不足ヲ補ヒシ故ニ、代官ノ勘定大ニ滯リ、竟ニハ形癈リニ成タリ、又札座ヲ搆ヘテ本無キ銀札ヲ使ヒ出シ、國用ノ不足ヲ償フタル處、是亦無原ノ貨ナレバ、札座ノ勘定大ニ滯リ、竟ニハ銀札癈リニ成タリ、如レ是スル中ニモ、國用ハ年々增益スル故、種々ノ詐謀ヲ以テ金銀米錢ヲ借リ出シ、御借用ノ額莫大ニ至リヌ、總ジテ難澁ノ金銀ヲ借ルニハ、京大坂ハ勿論ノコト、御國中ニテモ士大夫タル者ノ有ルマジキ、町人百姓ニ頭ヲ下ゲテ阿リ諂ヒ、共ニ色ニ溺レ酒ニ浸リテ、交リ親クナリタルトキニ言ヒ懸ケテ、借用調コト也、此風推移テ酒色ニ耽ル者ヲバ、良役人器量者ナリトスルニ至ル、右程ニシテ手合ストイヘドモ、詐則必窮スルノ道理ニシテ、御返濟每時間違ケルユヘ、終ニ借用ノ術盡キ、御家ノ危難實ニ朝不レ謀レ夕ニ至ル、是更張ノ由テ起ル所以ニシテ、第一ニ借用ノ道ヲ截斷テ、詐僞ノ源ヲ塞シハ是ガ爲也、然レドモ人情ハ淫ヲ好テ正ヲ忌ミ、奢ヲ羨ンデ儉ヲ差ルモノナレバ、正儉ノ

治國大本

朝日丹波著

文政八年乙酉仲秋發行

江戸書林　通油町北側　鶴屋喜衞門

水戸書林　上町鐵炮町　舛屋治三郎

製本所

子のやしなひとなる、或は四足のある獸は翅なし、翅ある鳥類は皆足二ッあり、角あるものは牙なく、牙あれば角なし、（人は生類の長なれば、智ありて諸用をはかり、兩手ありて萬の用を調ゆる事自由なり）此天の施の委しき趣を鑑て、五こく皆人のために生ずる理を知るべし、右の內取分稻と麥とは、他の穀物の類をはなれたる重き物なるゆへ、聖人の春秋といふ書をあらはし給へるにも、稻や麥の損亡を擧げ給へり、此二種の損毛は人世の大なる災なれば也、農人たらん者よく此天道の理を仰ぎたふとび、愼で天意をうけ、殊更稻と麥を作るに其術をつくし力を用ふべし、是則農民天道をたふとぶ道にして、命を保ち福を受る術なり（と見えたり）（以上）

右黑羽鈴木武介氏所レ著農喩書、具論ニ民閒備豫急務一、欲レ使ニ人免ニ阻饑之患一、其濟物之志、可レ謂ニ至深切一矣、此間往々有ニ寫本一、而字句多レ謬、余近得ニ其鄕人長坂氏刻本一、因與ニ一二同志一謀、重刻以廣ニ其傳一云

文政乙酉仲秋　水戸秋山盛恭識

農喩終

しおく事たれば、此書を見もし、聞もせん者は、今までよりも精を出してつとめべく、又心得違をせし者は志を改て人たる本心にたちかへり、五穀のたふとき事をわきまへ、耕作をつとめべき道理を知りて、農業をこそはげむべけれ

第十　農業全書を讀べき事　此書は板行にて書林にあり

書物の義理をわきまへのなるほどの才覺あらん者、ねがはくば農業全書一部を求得てよみたき事なれ、其故は農人の爲にあらはせし書たれば也、これをよみ見れば、宮崎安貞翁が四十年來心を費し力を勞せし深切なる志を尚ぶべきを知り、および貝原翁が同意を以此書の末に附錄せし旨を見て、米と麥との作德たる、其證據ある事どもを知りて、不心得なる者へよみてきかせたき事なれ、如此人をさとし示す志あらば、善を行ふの至りといふべし

農業全書の卷末に載せし米麥の德の事

貝原翁曰、夫天の人を養ひ給ふために生ずるこく物樣々多しといへども、中に就て人間の生養の備と見ゆる物二種あり、稻と麥となり、稻は秋實のりて夏の初迄人を養ふ備也、米の盡る時分には麥又一樣にいでき、四月半より中秋まで人民の食となる、又夏秋の間にあは・きび・そば・ひえ・大小豆・さゝげなどのこくもつありて、稻麥のたらざるたすけとなる、又大豆とひえは牛馬のくひものとなるなり凡天道の人を養ひ給ふ備誠にありがたき事いはんやうなし、たとへば小兒生れて食する事ならねば、母の食物が乳となりてこれをやしなひ其子生長し、其母又子をはらめる時は、其乳とまりて次の

しく〳〵てなみ〳〵ならざる出立ゆゑに、其所の者死骸を見屆ければ、金百兩をくびにかけてありしと也、さあれば多くの金を持し人くひ物を求んとて旅に出しと見えたれども、うゑをしのぐべきわづかの一飯を得る事あたはずして、かく餓死せしと察せられたれば、殊に殘念なるもの也、百兩の金を身に添へし人だにがしをまぬかれざりし有樣かくのごとし、いはんや貧乏人のがしせしはなほすみやかならんとおもひやられしとなり

是は伊豫國松山の產にて正山といひし老僧が、其所にて直に見きゝしとありし物がたりをわが若き頃聞置し事なり

然るを今の世の人心たる、只金銀のみを重しとし、食物をかろしとし、米穀のたぐひは年每に生じて儲に貯のるものゝやうに心得て、まゝには凶年不作もある事をはからずして、大切なる農業をおろそかになしぬるものも多くあれば、其天罰を蒙りて、又もやきゝんの災難あるまじき事にあらずと心得、おそれつゝしみ此世の中にきゝんの大難ある事を忘ず、唯一向に農業のみをつとめて、天道天意にたがはざる樣に其職に心をゆだね、日々夜々に慮べき事肝要也、蓋五穀は人をやしなふために天より授け給ひし物なれば、天地の賜にて大恩たり、それを愚なる者は何とも思はずして、必つとめべき農業をうとみきらひておこたれる上に、奢の風俗にうつりゆくほどならば、其天罰としてつひには天變凶年又もやあらんと、來らん世をうれひおそれるの餘、人々の心得の爲にとて、今我かくのごとくに書き遺

ば、そくばくの日數うゑを凌ぎて、大きにたすけとなり、又人にもあたへしときこえしは、よき心がけと知るべし

此貯の心がけは里芋の葉にかぎらず、何にても心を用ふる事くはしくあらば、すたるべき物をすてずして置き、又草木の多き中には毒にならずして、長くたくはへになる物もあるべければ、つねにわすれず貯おくべし、遠き慮のなきときは必ず近き憂ありと聖人の教訓をおそれたふとむべければ也、然るをさはおもはで、過ぎし事にはかまはず、さきの事をもうれひとせず、ゆだんのみにて無益に月日をおくれる愚なる者は、人にして人にあらずといふべけれ、智恵なき鳥けだものだもくひ物を得て餘あれば、土にうづみ木にはさみおく事あるは、うゑし時のたくはひぞかし、是は人々も知りし事也、禽獸だにも用心をする事かくのごとし、然るを萬物の長たりといふ人に生れながら、きゝんの憂ある事を忘れ居て、食物を貯おくべき用心もせで、農業耕作におこたり、こくもつ夫食にとぼしく、あまつさへ奢がましくいたづらに月日をおくる者は、鳥にだもしかずといはん、よくよくこれをおもふべし

第九　金を持し者うゑ死せし事

前にもあげし享保十七年壬子西國すべて大きゝん、（うんか也、此事を年代記に西國いねむしつき、大きゝんと有）此時道にゆきたふれてうゑ死せし者おびたゞしく有けり、其中に一人の男ありしが、衣類を始身のまはり腰の物に至る迄、美英

ひしかば、かほどの大難たりしかども、がしせしといふべき程のものは一人もなかりけることそ幸なりけれ、然れば餓死人といふ名をまづは免れたれども、つぐる辰の年に至り、病を生じて死せしも多しときこえし、これ去年のきゝんの節食毒にあたりありしと察せられし、其ゆへはこく類乏しかりしかば、かてとして取くらひし木の葉草の根などの色々の中には、毒のあるかなきをもえらばずして、みだりに用ひつゝ月日をかさねしゆへとしられけり、さあればつねに用ひざりし毒ある物をもくひしかば、後に至り其食毒の病を發して、命を亡せし事も非業の死たれば、これもうゑ死の類也、是おそきと早きとのちがひあるまでにて、がしせしにおなじといふべし、人々こゝをよく察すべし、只がしにんまではなかりしといふ事のみをきゝつたへて、なほざりにおもへるものあらんかとてかくは示せり、いささかも油斷すべからず

第八　かてをたくはへし人の事

ある所に米穀は云におよばず、凡くひものになるべきほどの色品をたくはひ、何によらず心を用ふる事のくはしき人ありしが、毎年秋の末に至り里芋を刈取るせつ、莖をば皆ほしあげてたくはひ、又きりすてし芋の葉をも遺さず取集めおき、よき日よりには庭へひろげてほしあげ、扨家内中かゝりてもみこなし、其葉を紙袋におし入れ、しめりけ虫氣のつかざる樣に心を用ひ手入をして、年毎におほくたくはひおきけり、かくて此きゝんの時にいたり、此芋の葉の貯を出して雜穀にまじへつゝくひけれ

かくさわがしくありしかば、況や道端にては辻切追剝おほく出て、旅人を殺し衣類をはぎとり、金錢を奪ひしかば、往來の妨となれり、太平無事の世の中もかやうにみだりがはしくなり、無法非道の人情とかはり、言語にたえし事どもは何ゆへぞや、これきゝんの災のなす所也、さればこそ恒の產なき則は恒の心なしといひ、又小人窮すれば斯に濫すとは聖賢の至言にて、實ありがたき示しと知るべし」右の如くたれば、人々の生涯に此きゝんの難のあらん事を忘れべからず、每日食に向ふときは、穀を食する事のたふときをおもふべし、此誠の心有るときは、自然と天道の意にかなひば、其冥加を被りて、たとへきゝんのなんにあふとても、非業の餓死をまぬかれべし、もし大きゝんの至る時は、我身を始妻子眷屬すべて命を保ち得ざるほどの一大事たり、それをも恐れずして、つねつね忘れし如くの者は、幸にして一生涯きゝんの苦患にあはずとも貪きうをまぬかれじ、其困窮に迫れば是非なく惡心を生じて、ぬすみ惡黨などの非道をもなすに至れば、其天罰をうけてつひには非業の死をもとげべき也、かへすがへすも恐れ恐れて穀食の事を心にかけ、つねにおもひてわすれべからず

右卯のきゝんにこんきうし、うゑに及びし者多くありしかども、御當領分の事は上より御救として米こくを出し給はり、又はかねてより貯ひたりし瀦稗をあたへさせ、或は村々里々にては名主頭だちし者どもが才覺を以て食物を配り、殊更こくもつの貯ひまゝありしものどもより配分をさせしめ給ひければ、下にては友救ひの惠もあり、かやうに上よりは仁心、下にもそれぞれの慈悲情ありて急をすく

所へは、はる〴〵と志して家内皆つれだちてこじきに出しが多くありしときこえけり、其中にわきてとぼしきは金銭もなければ、途中にても食餌にとぼざかり、日をかさねしにつれて身のおとろひはてし上、遠路のつかれにたえがたく、山路などにゆきかゝりてたふれ死せし者おびたゞしくありけり、かくていづこのたれと云名もしれず、たづねとふべき人もなければ、つひには鳥けだものゝゑじきになれり、いとあはれなる事なりし、又家を去らずしてありし者の中には、うゑにたえかねてみづからくびをくゝりて死し、あるひは井戸や川へ身をなげて、親に別れ子をすてゝ死せし者いくばくといふ數かぎりもなかりし、殊にいとけなき子のうゑしは乳房をくはひれども、母も食に遠ざかりし身たれば乳もたえて出ず、さあれば子はうゑにせまりてちぶさをくひきり、又は父のもゝなどにくひつきてやみ犬のごとくなるゆへ、せんかたなくひつ長持の類におし入れおき、死するをまちて取捨しも有しと也、かゝるあはれにひきかへて、此時にあたりつよくさかりなる者どものうゑにせまりしは、つねの心を變じ徒黨をなし、村々にてこく物のたくはひありし家々へは、大勢にておし入り〴〵おしがりをし、又は亂妨狼藉をはたらき、或は諸色をみだりにうばひとれり、はなはだしきは領主の城下や、地頭の居所の町々まで多勢にておし來り、大聲をあげてあばれ入り、こく屋〳〵を始として、物持の家くらとうを打破れり、此時の有様何方も同くて、はやり事のやうたりしかば、晝夜騒動たえずして喧かりし事共也、其とゝうの中には時を得て盜賊もまじりし事たれば、心うかりし世の様也、里々町々だに

同　　同　　つき麥九升八合

同　　同　　から麥壹斗四升

同　　同　　小麥壹斗四升

同　　同　　大豆壹斗貳升五合

同　　同　　小豆八升四合

代錢百文に付　　生麩（小麥のかす也）貳升八合

同八百文に付　　ひえ糠壹俵

同十六文以上　　大こん壹本

同五十文以上　　同ひば壹連

此外わらびのこ・くずのこ・しだみのこ（ならのみをいへり）惣て木の實草の實、および野菜のるひ、およそ食物になるほどのものはうりかひありしかども略せり

石の中にて　金壹分に米貳升八合がへの所にては、壹升に付代銀五匁三分五リン余に當り、又黑羽あたり七升五合がへの所にては、壹升に付代錢百七十文にあたれり、（但し後に貳百文餘までにいたれり）此時錢相場金壹兩に五貫貳百文がへ也

第七　乞食に出し者倒死の事

奥州の中にてもきゝんの甚き村々の者ども、くふべき術のなきはてくもつ少しもありときゝおよべる

に應じ升數を書きつけて切手に認め、それを證據として買取べしとの御下知也、されば其切手をこくや共見屆し上にて、こく物をうりあたへる作法となれり、それも買者ども一人分に付錢高三百文を限とすべしとの御定なりしかば、金錢をおほく持しものたりとも、此節のこくもつを多分に手取る事はならざりけり、かくありしかば買人ども村役人の切手を以て、こくや／＼に群集して、毎日／＼市のごとし、其中には家内の年より子ども、又は病人などの難儀を告げ、樣々のかなしみをいひたてし共有樣のいたはしさ、あはれに堪へざりしと聞えし

第六　米穀高直の事

此ときこく物の直段、自國他國等聞及びし分をあらましに左に記せり

金壹分に付	奧州、三春・仙臺・南部・津輕	米貳升八合
同	同　會津・出羽國、米澤	同四升八合
同	水戸御領馬頭あたり、是は野州那須郡の内武茂の郷也	同四升五合
同	奧州、白川	同六升
同	越後國	同七升
同	野州那須郡黑羽領、同郡大田原領同斷	同七升五合
同	同所及近邊	あはひえ六升五合より七升

へに借す人なし、金銭とても殊に不通用たれば、假借の道たえて一粒一錢も不自由の世間となり、人の命實にあやうく見えたりけり、此時に當り諸國の御領主御地頭方、各領分の民をうやさとらむが為に、穀止といへる作法をきびしく設て、他領へとては こく物を出させられず、それは奥の白川・三春・仙臺・南部・津輕・會津・米澤・及び越後國等也、扨は此下野・常陸すべて關東八ヶ國に至て、一同のこくどめとなりて、只同じ領分限のみの賣買になりしかば、何ほど金銭を持し者とても、他領よりしてはこく物を買取る事少しもならず、たとへば隣村に親類縁者ありといへども、他の領分なればこく物の取やりは少しもならず、其不通用のほど察すべし、扨當御領主にては、町方のこく屋共がたくはへたりしこく物の有高をかねて御しらべ有りしに、日をおひて減少すれば、多くの人の命を危く思召[illegible]と申達ありて、買人共多分のこく物を一度にかひとる事を禁じ、又米買人として[illegible]く屋共も有る者に紛れ者のなき爲にとて、その村々の名主役人より其買人の家内の人高[illegible]

てはたえてなかりし事也と聞えし、實に古今未曾有の地變とこそ云べけれ

第五　長濕不作の事

あさまやけの前より雨ふり出しけるが、つゞきて長しけとなれり、さりながらたまさかには雲ぎれもありて、日影のあらはれし事ありといへども、晴天といふは一日もなくて毎日〳〵しけぬれば、陰氣がちにてありしゆへ、諸作毛成長する事あたはず、一切の野菜の類もくされかじけ、木の實草の實にもおよぶまでも熟せざりし、此有樣にては秋の收納はいかゞあらんと、皆人うれひて日をおくりしほどに、二百十日になりしかば艮の風大きにおこり、二夜三日吹きとほせり、其後も雨ふりやまず、抑此しけは六月の始より九月の末まで四ヶ月におよびけるこそうたてけれ、こゝに至りて諸作物の色益かはりて實入らず、まづ稻の穗はそらだちしてたれこゞみしはなく、所によりてはまれ〳〵に少しの實入しがあれども、久しく長しけにあひたれば、其寒風にいたみしと見え、米となしても其性ぬけたればくだけやすく、飯に炊ても酢味あるひは甘味ありて、つねの米の風味はあらず、其外の雜こくとてもこれに似たり、又根や葉を用ふる野菜のたぐひも不熟たりし事は相同じかりければ、つひには秋の作毛すべて皆無同然となりはてければ、上も下も穀食に乏く、倉廩空くして人々多くうゑに及びしかば、きゝんの大難此時に至りとかなしめる事のみにて、其なげきの甚さ言語にたえし世となれり、凡民は貧くして貯なきが多き者たれば、忽にうゑに臨めり、せめてはうゑを凌がんとて、蕨の根葛の根、又

しかば、火の石泥土をおし流せし事夥し、其勢の恐しさたとへていはん様もなく、言語にたえし事非也、其上焼石さんらんして二三里がほどに充満り、其石砂をふらせしは二十里にこえけり、中にも高さ三間程に長さ十三間の大石まろび出たり、かほどの大石たるをだに、さばかりの洪水たれば、一夜の中におしながせし其道のりは十三里にてとゞまりぬ、これもとより焼石たれば其流の水も大熱湯と沸かえり、水の中よりしてしば〳〵けぶり立のぼれり、されば此石の上にながれかゝりし物は、草も木も忽に燃あがり、悉火となりしを見し人奇異のおもひをなせり、恐しなどもおろか也、かほどの大石たるをだにおしながせし事たれば、五間や三間の石などは数限もあらばこそ、押出し〳〵流かゝりし勢ゆへ、其水すぢの村々里々其数都て五十三箇村、一時がほどに押流せり、其家数は千七百八十三軒、人は三千七十八人を溺し殺せり、其外牛馬の類は数を知らず、取りわきて矢倉村・岩木村・横尾村・松尾村・河原村等五ヶ村の水損といふは、其地幅十八町に竪は一里半がほどほりうがたれ、水の深さ三丈二尺餘を湛へてあらたに沼となれり、これらの家数人馬の死亡はいまだしれざるよし申出しと聞えけり、其外杢の御番所をもおしながしければ、其水すぢたる十八ヶ村も水難にて、溺死の人馬は是も数を知らざると也、抑此出水の色といふは赤き事血のごとく、且其泥水たる水とはいへども大熱湯たる故に、それにふれしものは忽ちに煮殺されて、こと〳〵く亡失にけり、されば死を免かれべきやうと

まづ菜種の花などさきそろひ、又は笋を生じ、陽氣春に似て三月頃のごとし、且時ならざる雷雨度々あり、殊に大坂にては御城の門に雷おちて焼しと聞えし、極月にかくある事は前代未聞の天災たりとて人々おそれをのゝけり、扨其年も暮れて明れば卯の年となりぬ、此春はなほさら暖ならんとおもひしに、冬とは引きかはりて寒氣甚しくありけり、其上雨のふる日おほくして、晴天はまれなりし、されども夏に及びしに、麥作はいつもとさまでのちがひもなくとりけり、かくて五月になりぬれば暑氣の節たれども、さはなくて田植の時にいたれども餘寒なほさらず、人皆綿入を着て火にあたるほどなれば、此さむさにては作物不熟たらんと察せられしかば、穀物の直段諸國一同大きにあがれり、此時にあたりまれには米穀を餘分に持し者ありしかども、たくはへおくべき思案なく、唯目の前に過分の金錢手に入るをのみ悦びて賣拂しかば、多くは倉を空くせり、かくて日を送行しほどに、七月に成りしかば雨にまじりて砂をふらし、あるひは風につれて白き毛のごときもの、此あたりまで飛來れり、又大地のふるふ音して夜も晝も聞えけり、これはいかなる事やらん、不思議なりとて人々打寄いひあへり、是は信濃國淺間山の焼出せしにて、其火勢のとゞろく音遠くも響き渡りて聞えしにぞありける、かくて山の上の煙は空をおほひ、電光夥しく雷きびしく鳴りはためき、其あたり二三里がほどは闇となりて晝夜をわかたずありしかば、灯火を用ひつゞけて常に明しを消す事あたはず、夫よりしては泥土をふらし、或は火の石を飛しつゝ、其震動雷電次第〳〵にいやまさりしかば、皆人肝を消し魂飛

やかしこと經めぐりあるきしが、ある山路へかゝりしに踏まよひて行べきかたを失ひ、難儀のあまり高き峯によぢのぼりて、山のふもとを見渡しければ、山間に人家の屋根のかすかにあるを見つけしかば、心悦びて草木を押分けつゝ、やう〱としてふもとに下りしに、其村里に人とてはひとりもなし、こはいかなる事にやと見まはせば、田畑の跡は茫々たるくさむらとなり、家々は皆たふれかたぶき、軒端には葎などはひまとはれり、あやしと思ひながら空家に入りて見れば、篠竹など椽をつらぬき出たり、其間々に人の骨白々と亂れありしを見て目も當られず、大におどろきいと物凄おぼえければ、身の毛よだちて恐れをなし、とく〱そこを走出、人住む里へと志し路を尋けれども、あれはてたれば其あたりには路がたちたえしゆへ大に苦みしが、路らしきにたづねあたり、とやかくとして人里に馳着、始て人心地となりけり、かくあれば奥の方のきゝんたりし餓死の様子は、關東へ聞えしよりも、直に其所を見ては殊更におどろかれ、恐しき事共なりとの物語なりし

是は相違なき事と我聞うけしなり、さあれば大きゝんの恐しさ、うゑて死に盡せし有様、此一ヶ條をもつて其外をも察すべき事也

第四　天災地變の事

卯年凶作にてきゝんたりし事、天よりは災を降し、地にも變ありしよりおこれり、其故は前年の寅の冬より氣候いつもとは大きにたがへり、夫冬はさむかるべきに、さはなく其十二月甚あたゝかにて、

右にあげし卯年のきゝんたりしをつく〴〵と思ひ見れば、近頃の様に覺えしに、年月は早くも過行て已に二十三年になりぬ、廿三年になりぬとは、此書をかきし文化二丑年までをいへり、今文政八酉年迄四十三年也實に光陰は矢のごとしといへり、さあれば此きゝんの難はいつ來べきもはかりがたければ、今にも來りて又もやうき事を目の前に見るならば、いかほどの苦患ともいふばかりなき事なれば、恐れられひてかりにもわすれべからず、但卯のきゝんも此近國關東のうちはいまだ大きゝんとはいふにいたらず、其故は秋作の實のりも少づゝはありてとりもし、又御領主方より御救の米穀、および友救の雜穀等もありし故、食餌のたえてうゑ死にせしといふほどのものは一人もなかりければ也、扨又奧州等の他國にてはうゑ死にせしが多くありけり、わけて大きゝんの所にては、食物の類とては一色もなかりければ、牛や馬の肉はいふに及ばず、犬猫までも喰ひ盡しけれども、つひに命をたもち得ずしてうゑ死にけり、其甚所にては家數の二三十もありし村々、或は竈の四五十もありし里々にて人皆死に盡し、ひとりとして命をたもちしはなきもありけり、其なき跡を弔ふ者なければ、命の終りし日も知れず、死骸は埋ざれば鳥けだものゝ餌食となれり、庭も門もくさむらと荒て、一村一里すべて亡所となりしもあり、かく成果て見ろ時は、これに過し悲はなし、然を其由を知らぬ人などは、何ほどのきゝんたりといふとも、さまでの事はあるまじきと思ふもあらんが、其疑ひをはらさせんために、我慥に聞き届けしを示す事左のごとし

右卯年のきゝんの後、上州新田郡の人に高山彦九郎と云ひしあり、奧州一見の爲め彼國に至り、こゝ

つゞり、世に傳へ農民を喩さん事を旨として此書をあらはせり、されば心あらん人々は、我志をわきまへしりて、食物を貯へる事を隨分と心がけ、さて其意を妻子を始家頼迄へもさとし聞かせ、猶又他の人までを喩しなば、其人は乃ち大善事を行にて、われにおきてはよろこびのいたり也

第二　きゝん度々の年數之事

遠きむかしよりきゝんの度々ありし事、世々の書に記し載たれば、其年代はつたはりたれども、樣子はつまびらかならず、太平以來偕に書きもつたはり、近く耳にもとゞまりしを擧げて左に示せり

寬永十九年壬午きゝん、さて三十三年を經て○延寶三年乙卯きゝん、これより五十七年を過ぎ○享保十七年壬子きゝん、このゝち五十一年ありて○天明三年癸卯きゝん、これにあひし人は今も多し

此の凶年ききんの難度々ありし事かくのごとし、扨その年數を計りしに、近ければ三四十年の間にあり、遠くとも五六十年の内には來るとおもふべし、然れば其間は百年ともなき事と心得、今にも來まじき事にあらずとおもひ、深く恐れ此事を常にわすれず、農業を一途に勵み、勉めて穀物を餘し貯へる樣に心がけ、少しも怠るべからず、このきゝんは人間世界の大變也、此時にあたり人の死すると活るとは、唯手あてのなきと在るによるのみ、此手あての貯なきときは、家にあやうき事たりと思ひ、生涯の一大事はこれにとゞまれりと知るべし

第三　餓死人の事

約にと心づき、扨農業もまへよりは出精の様に見えもし聞えもせしが、其後年月の過ぎ去るにしたがひ、天地の災もなく、打つゞきて豊なるめでたき御世にあひぬれば、彼のきゝんの困窮を忽にわすれしがごとくにて、元のやうに農業におこたり、食類の貯をもさまで心にかけざる者も多くなりぬ、其故は彼きゝんの難にあひし人々は、年月の移にしたがひて死にさりしが多く、其後に生れし者は、ききんの時のかんなんなりしむかしがたりを、折にふれてはたま／＼に聞事ありても、よそ／＼しく思ひなして、さほど心にかけず、されば近年に至りては卯年のきゝんの苦患をいひ出す人もなければ、今時の年若き者や女わらべは夢にもしらず、如此にて過ぎ行世の中に、彼の凶年きゝんの備にとて穀物を貯へ置くべき事を喩し教へ、農業をすゝめおこたりを禁める人少ければ、年月の過ぎ行にしたがひゆだんにのみなれり、此あり様にては又もや近年に凶年きゝんたらむ時には、なにとして命をつなぎ、いかにして親兄弟を餓さず、妻子をもはごくむべきや、食物なくて外に命をたもつ術なければ、かねてより此喰物を貯て、凶年に備べき事用心の第一と知るべし、このきゝんのうれひある事を、よく／＼おもひはかりて、かくあいがたき太平無事なる世の中にも、人にはかゝる危事ありとしかと心得、農業を専とし、心を用ふべき事肝要也、抑此用心といふは、米穀の類はいふに及ばず、其外食物に成べきものは何によらず、かね／＼貯置心がけをする事也、喰物の餘ると不足とは世の中の一大事たるを、皆人へさとしたき我念願故、卯年のきゝんにて極々難義の趣見もし聞もせしあらましを書き

農喩

下野國那須郡黑羽家士　爲蝶軒　鈴木武助正長著

第一　饑饉の憂の事

夫人たるもの一生の間に愛とすべき事多しといへども、その中に饑饉を第一とせり、これに越し大難はなし、むかしより度々ありし事たれば、書物にかきもつたはり、又は年よりの物語にもする事なれば、此用心をしてきゝんに備べき食物の貯を、かねてより設置べき事也、されども世の中には心なき人の多きものなれば、此のきゝんの一大事をうはのそらにおもひて、むかしはありし事なるべけれども、今はあるまじき事のやうに心得違、其の用心を忘れて農業におこたり、うか〳〵と年月を過しけるに、はからずも天明三年癸卯に至り、天の災地の變ありて凶年たりしかば、諸作物實のらずして、關東より陸奥出羽の國々迄きゝんとなり、人多く死しにけり、その有樣を見もし聞もしけれども、先はよそ事の樣に思ひ居し程に、やがて我身の上に及ぼし、家內の者も餓に臨む時に至りて、目を覺せしごとく俄におどろきし人も多かりし、此節にあたりかねての油斷を後悔し先非を改め、物事すべて儉

第四　天災地變の事
第五　長しけ不作の事
第六　こく物高直の事
第七　乞食に出し者たふれ死の事
第八　かてをたくはへし人の事
第九　金を持し人うゑ死せし事
第十　農業全書をよむべき事

不毛之那須原、何其不レ思之甚也、先生深感レ之、審記二享保天明荒饑之事一、至三其信州淺間之崩、諸邦米穀之値、及釋二正山・高山彥九之譚一、則讀者悄然沮喪焉、人身之肝、誰不レ銘者乎、先生以敎二諭庶民一、勸レ農課レ業、以勸二儲蓄一、不二亦仁之術一乎、同藩人長坂生、欲レ授二之剞劂一、請二余作一レ序、先生歿、六二年于今一、常思レ慕二其爲一レ人、義不レ可レ辭也、乃作二之序一、如レ此、此書本志在レ諭二庶民一、故其言鄙而俚、要在レ易レ讀而已、見者無レ以二辭之不文、意之不奇一、輕レ視之上、則善矣

文化八年辛未八月念五　鈴木之德澤民撰

農喩（きゝんの用心）

目録

諭農序

禮曰、國無九年之蓄曰不足、無六年之蓄曰急、無三年之蓄、曰國非其國、蓋道儲蓄之急務也、然當今之國、鮮克有兼年之蓄者矣、萬之其一、遭蝗旱風霖之凶、其何以濟之耶、夫蝗旱風霖天也、濟之與不濟人也、天譴之災、雖不可逭、而人力所及、豈其可不勉哉、所謂人力所及則非他也、儲蓄之謂也、此有鈴木武助者、諱正長、武助其俗稱也、學問勤實用、武伎究奧旨、傍善畫圖、門人稱爲蘭庭先生、下野黒羽之執政、而夙有循吏之譽、嘗以享保壬子、生其藩中、此歲黎民阻饑、是以自襁褓中、而得聞荒歉之阨矣、故其從政、以勸農儲蓄爲旨、後又遭天明癸卯之凶、明年甲辰、穀賈沸騰、至資財之力、無能得食、於是有瘦者・菜色者・饑而不能興者・質田宅若子女者・流亡離散不知所之者・道殣野殍、爲狐狸蠅蚋之食者、慘怛何勝、延及乙巳丙午荐饑、至是草賊・强盜・剽掠・刼奪・殘虐之暴、使人恟恟、皆凍餒不獲已之所爲也、先生乃苦其心志、竭其智力、瞻賙以爲己之任、糴糶之計、賑救之謀、緩急處置、皆得其宜矣、夫然、故黒羽封內、雖曰蕞爾、數萬生靈、悉得蘇息者、可謂能盡人力所及矣、爾後未數年、民之蚩々、徒知稼穡之艱難、而不慮饑饉之窮阨、專利煙草・紅花・楮皮之業、而迂稻麻・菽麥之利、遂將以蓄殖之畝田、附與

農

鈴木正長著

国郡管轄考 終

似たり、未レ審、此地菅氏の領地にて、菅氏を滅してこれを私田とせし者にや、然らずんば、これを諏訪に寄附せられし事甚難レ解、頼朝も平家を滅して、其地を我が有とせし者にや（平家の莊園は皆有功の士に領ちしなり）東鑑に、藤澤黒河内は諏訪神領なれば、莊園の名なきよし見ゆ、然らば神田幷に寺田は莊園に非るに似たり如何（莊園の名有て寺社の領たりしは、東鑑所々に見ゆ）

新田氏は新田莊の莊司にて、後には地頭を兼たるにや（書面之通なり）

六月　　中村奝頓首拜

明曉出立に付甚紛間草筆御免、尚又御不審も候はゞ東都にて可レ承候　　常富

題國郡管轄考後

予近年欲渉獵四史、以明古今之事蹟、固陋寡聞、無一得其要、偶星葛山先生、在我天山之社、實稱白眉、殊以史學爲任、予於是乎、就而正其疑、得益者不少、爰壬申之五月、復有不安者而問之、即著此書、以見示焉、乃與其所著田制考、足互發明之也、先生名常富、字伯有、高遠内藤侯之臣也、六月從麾于覇府、十二月四日、遂以疾歿于覇邸、享年四十、予聞其訃流涕溢而、噫此書之著、實頼予之問、則毎讀之、得無慼乎、因題其後以此言

文化壬申十二月念二日

後學中村奇謹書

謹問

文治以後上番に出たる武士は、地頭或は御家人にや、健兒の稱は鎌倉時代にはこれなきに似たり

頼朝の臺所入と定めたるは何れの地にや、武家評林に、治承中武田一條が菅冠者を討たる時に、宮所龍市（今の辰野にや）平出等を以て諏訪神領に寄附すといふ、當時王土を以て私に寄附せられしこと其理なきに

いふ時は浪人の様に聞ゆれども、延喜式に見へたる浮浪人は、今の世の帳外來り物抔といふが如き戸籍定らぬ者をいふ也、野武士は其里の戸籍に入て出て仕る事なき者也、野は野鄙の義と見へたり

鎌倉の時の武家の職名、大概左之通り、順は不同

執權北條氏の嫡流代々任レ之外三族の内一人を撰て連署さす、是を加判と云　評定衆　引付頭人　侍所別當　小侍所別當　政所執事　奉行　守護地頭　御家人　探題　檢斷　問註所執事

室町の世には

三管領始執事と云　四職侍所也　奏者伊勢氏代代の職　一族　大名　守護　外様　評定衆　供衆　申次　番方　國人　奉行　末男

此一冊は中邨生の許より守護地頭の事を問はるゝ事あるを以て、假初に答の趣を註し遣したる也、事々皆諳記と憶斷にて、引用の書を捜るべき暇なかりし間、遺漏の多かるべきはいふに及ばず、憶に出る儘筆つけし草稿なれば、いふべき事の前後したる抔は尤多し、只其髣髴を示す計也、尙暇日潤色註すべき也

文化九年五月於蓧光園

平　常　富　漫　筆

與へても家來と稱するが如し

若黨は老黨に對する名也と徠翁が說に見へたり、黨は鄕黨の事にて、今の組合といふが如し、郡縣の代には和漢共に天子の外に君臣の稱號なければ、君を主、臣を從者と唱ふ、故に己に從ふ組合の者といふ心にて、黨の名ありしなるべし、郎黨の郎は男子の通稱なり、亦古書に黨も高家も押なべ抔といふ事あり、此黨は寄合組といふ事也、私黨・兒玉黨・紀淸兩黨といへる類是也 亦一揆ともいふ、花一揆・桔梗一揆などゝいへる類也 郎黨の事にあらず、高家は上にある大名にて筋目ある人をいふ、黨は小名也

本領といふ事あり、數ヶ所莊園を持たる人にも、必家につきたる舊領の地、又は己が住居する所を指て本領といふ、亦懸命の地抔と唱ふ、其の餘の莊園を代官を遣て治めさする也

本國生國といふ事あり、生國は誰も知りたる己が出生の國也、本國は名字の出たる國を指て云也、地に因て名付し氏にあらぬは、其家のはじめて出たる國を指すなるべし 工藤武藤大内杯の類の如きを云

足輕の兵といふは步兵の事也、古へは戰士皆騎馬也、故に源平亂の比は旗指皆馬に乘しなり、步兵は至て稀なると見へたり 盛衰記に、梶原生田の追にて足輕の兵に、逆茂木を引かけさせし抔と出たる類也

中間も步兵の事を指と見へたり、足輕中間共に今とは異也 天文の頃より長柄と云槍織田家にて制せられ、これを持る兵を中間と云、足輕より一等下なる者なれば、足輕小者の中間と云心にて名付る抔と軍法者は云にや、太平記にある和川が中間細川顯美を突倒す、畠時能が中間惣八郎抔見へしと、室町殿の御中間と呼し者などは、正しく今の代の足輕の事と聞ゆ

野武士 野伏と書は宜しからず といふは、地下人の内にては筋目もあり、武藝をも習ひたるが食祿あらぬ者を云、斯

す、三浦別當義澄・長井齋藤別當實盛の類是也、徠翁が說に、武藏國にのみ牧の長を別當といふよ令に出、秩父庄司別當・永井齋藤別當は此職なるべしと可成談にあれど、三浦は相模の人吉田別當と申、武行は下野の人也、千慮の一失と覺ゆ

被管は支配下の事也、家人の事に非ず、一國の地頭御家人は守護の被官也、一莊一鄕の中の御家人は地頭の被管也、其外職務ある人その職につきたる下吏は皆其職長の被管也古き詞に誰は何某の被官、今は家人たりとは、是をさす也

給人は土地を給ふの義也、領主の郎黨に土地を割與へたるなり

無足は藏米給にて、土地をたまはらざるをいふ也

堪忍分と云あり、本領ある人未だ本領に還補せざる間、小祿を賜り奉公するをいふ也

大名小名といふは名主の地を指て唱ふ、譬へば新田足利抔といふは郡名にして、後大莊と成たる地なれば、是れを持し字名の人は大名也、曾我土肥抔と云が如き一村、亦今云支村の如き名字の地を持たる人は小名也、何れも鎌倉より以前に稱呼し來り、後には分限の大小計にて、名字に拘はらず稱呼したると見へたり、左なくば北條の一族にも佐介名越の如き鎌倉の地名を稱呼したるには、大小の名目付がたかるべし徠翁は名田の多少により稱呼せしよし申する故、班田の政行はれし時、名田は今の名田と異なれば、その說如何あるべきや

家子の事前にも見へたり、一族と家子の差別は、小地にても讓り受て、總領に隨ひ進退を請れども、其名世上にも通り、事により總領に離れ別揆にも公廨を勤る者は一族なり、總領に扶持せられ別揆を立る事叶はぬ者は家子なり、今の世に小知にても分地すれば公儀を勤む、己が家に置く時は何程大祿を

豐後の大友が家の譜代の職となりしとも其家にては申すにや未ゝ詳、探題の名義は執事といふが如し管領は自專におさむるの種なり、義朝東海道を管領し、持明院殿長講堂領を御管領抔といふ類は、本主より預りて其地を支配し、己が家人を分ちて其所税を掌らしめしなれば、莊司の頭といふべきもの也、北條が家の事を掌りし老を內管領といひし事あれば、今の家老の事と聞ゆれど、是は長崎盛綱始北條の莊司を奉行し、後家事まで掌りし故、家事を執行する者を指して管領ともいひしにや、義滿の時執事を改め管領とせられしは、全く北條が內管領によられ、今の大老職の事也、（義良が山陰山陽十六州の管領を免されて其氏が東八ケ國に管領たりし迄は、土地を管り領するの姿殘りし也）

代官は名代の義也、土地を檢校し貢物を進納する吏に限りたる事に非ず、（義經が八嶋にて鎌倉殿の御代官と稱したる類なり）守護代・國司代・目代・莊司の類はいふに及ばず、陣代抔と唱ふる者迄皆通じて代官といふなり、（建武の制法に所領數ケ所相傳事、懸命の所は自可ニ勤仕一、自餘所と者可ゝ進ニ代官一とあり、名代の事也）後に訛りて土地の役人の事となりし也

莊司は前に見へし如く莊園の代官の事也、其下につく吏を公文といふ、今の書役といふに同じ、但し莊司といふは職名にも非ず、自稱にもあらず、人より稱呼する名目也、國守を國司、郡領を郡司と稱呼するが如し、尤中には人より稱呼せらるゝ儘、己も稱したる輩ありて、官名の格になれるなるべし」

莊園の外に御厨といふあり、禁裏・仙洞又は太神宮の領に割れし時、莊園の名を立られず、何の御厨と稱す、（信濃國安曇郡に仁科の御厨ある類なり）厨は庖厨の義にて、今云臺所入と云ふが如し、御厨の租税を掌る人を別當と稱

御家人といふは、前に出たる家人家頼の事也、頼朝總追捕使と成しより以來、外の家に倚頼して武士の身を立る事成らざる樣になれる故、諸國の健兒の中にて筋目もあり人をも持しは、夫々守護地頭となり、取目も左迄になく人も持ぬは、皆御家人と稱し諸國の公私田に散在し、守護地頭の被官たり、此輩源平亂以前は舊により、上番して京師に宿衞したり、（世に大番と稱したる也）其徒の中を撰れ、瀧口帶刀又北面の侍武者所になされたる歟、頼朝以來東州の武士は鎌倉に伺候し、其餘の國々より百日代りに上番す、第八十六代四條帝仁治元年、將軍頼經京都鎌倉に篝を燒、辻々を警固せしむ、是より上番の武士皆其所に屯したる也、太平記に見へたる四十八ヶ所の篝は是なり、一篝を一國にて持しなり、二箇國三箇國にて寄合持にしたるもあり、兵數不同なれども、大概一篝五百人程宛にて、四十八ヶ所にて凡二萬四千人と申す也、此輩兩六波羅の下知をうけて京師を警固す、（兩六波羅は京都守護職にて六波羅の館の留守、今の所司代なり、平族亡びて義經堀川に在て京を守護し、義經走て北條時政是に代り、夫より段々交代して守護す、承久の後は北條の一族餘人を交へず兩人宛在京す、尤一人の事もありし也、六波羅の館は嘉禎三年將軍頼經造られ、上洛の時の宿所にせらる、是より以前は京師守護の人宿所定らず、是より後は六波羅に居所を定む）北條氏亡びて朝家の政行はれし時は、武者所を再興にし諸國の武士を六番に宿衞せしむ、足利氏に至りて上番の事は絕果たり

探題職と云は九十一代伏見帝永仁元年、北條貞時が計ひにて筑紫の探題を筑前太宰府に置て、九州の成敗を掌らしむ、長門の探題を長府に置て中國の成敗を掌らしむ、何れも北條の一族を撰みて一人宛遣し置し也、長門探題は北條氏亡びし後絕ぬ、筑紫の探題は將軍義滿の代迄も交代して置り、其後に絕たり、

帥の如く見ゆる者は皆地頭の士也、元來莊園の地は大小甚不同にて、今の代の法にていふ時は一庄僅千石にもたらぬ處も、亦萬石に及ぶも有と見へたれば、莊の大小により地頭も分限不同なるべし、尤一莊の地の地頭たるに限らざれば、七八ヶ所に十ヶ所も莊園を兼持し地頭も有しなるべし總地頭といふ名目あり、譬へば天下につきていふ時は、六十餘州の總地頭は鎌倉殿なり、一莊の地にていふ時は、上野の新田の莊は、元新田郡新田に郷の地なるを女院の料所になされ、上東門院の御料と申にや莊園の地となりたるを、後に義家の三男加賀介義國莊司と成て、下野足利郡より移り住み、嫡男義重より代々相傳して新田と稱す、是新田の莊の總地頭なり、後に支度段々分れ、脇屋村の地頭職を分たれしは脇屋次郎と稱し、木崎村の地頭職を讓り得たるは、木崎某抔と號し總地頭の下につく也、亦名主職といふものあり、新田の嫡流にて新田と稱し、新田の莊を持ときは是名主也、二男三男の家別氏を名のらず、同じ新田を稱すれども、名字の地を持ぬ者は名主にあらず

總領職といふあり、總地頭と同じ樣にて其實は大に異也、地頭は其地の民を支配する迄にて、其地の主にはあらず、領主は其地の主也、前にある新田の莊領主新田殿なれば、脇屋木崎の類は支度にて、莊内の村々を配分せらるゝ其村の領主にて、惣領は新田殿にてあるなり、將軍家の下文之新田殿に賜りある也、因にいふ、下文とは今云領地の御朱印と同じく、其地を下し賜ふ由書載せらるゝ文也、又充文といふもあり、是は何方に於て領地を賜ふべきよし約束の印に給ふ文也、人に領地を賜はるに先充文を給はゞ、後實に地を賜はるに及て、下文と引替になるなり、足利の代には御教書御内書奉公といふあり、偏く文の知る處なれば其謬を釋せず

は全く停任し、守護のみ國事を專にす、先代の國司料に充し、田地は守護の領にもなり、亦有功のものにも割與へしなり、先代に比すれば守護の領地も多し、威權十分したれども、守護する國中を全有したるにはあらず、國郡に割據する土豪を羈縻せしのみ也、俗に旗下幕下抔といふ是なり、亦土人の中にて守護に屬せず、一揆を立る者もあり、尋貫の領地抔は猶更守護の下知には應ぜず、守護不レ入の地抔と今もいひ傳へしこれなり應仁亂以後は有力の守護も郡郷を蠶食し、終に一國を全有し、隣國をも併呑せしも有、武田晴信・今川義元の如き類是なり寡力の守護は守護代に奪はれ、四國の細川が三好に奪はれ、美濃の土岐の齋藤に逐れし類是なり土豪に逐れ、兩上杉が北條に逐れ、土佐の一條が長曾我部に逐れし類是なり子に放れ武田信虎が子の晴信に逐出され、河野通宜が子の通政に放れし類なり臣に掠められ、山名豐國が其臣武田某に掠められ、斯波義純が織田家に取はれし類也國を失ひ家を破り身を殺せし者枚擧に暇あらず、織田豐臣の天下を得たる頃にも、其始めは猶國人を以て守護に屬せられし事も聞へたれど、國人の有勢なる者は守護の爲に斃され、佐竹義宣が南方三十三館と稱せし國人を誅し、常陸を一統し、黑田長政が城井鎭房を亡し、豐後六郡を全領せし類也其最小なるものはいつとなく臣となりたり、諸家に此類夥し、毛利の益田・福原・國司・吉鍋島の後藤・陣廻・多久などこれなり人の所謂封建者勢也といふは、本朝にて思ひ當りぬ

地頭は貫主の義也、其地の主は本所也、本所の代官として其地の所務を進退する者は莊司也、寺社の領地、公家の莊園抔は、强暴の百姓莊司を侮り命令行れ難き故、地頭の兵士を置て貢物を催促し、非常を禁斷せしむ、國には國司守護を並べ置き、莊園には莊司地頭と立並びし也、地頭の得分は本主への貢物の中を分ち取し也、別に民より出さしめしや未レ詳、莊司地頭と並べ置法なれども、後には地頭に莊司を兼させたるも多しと見へたり、熊野の八莊司抔と云たるは此類と見ゆ鎌倉時代より太平記の頃迄の高き武士の將

中　國守二町　掾一町一段　目一町
下　國守一町六段　掾・目中國に同じ

是を職田又は公廨田抔とも唱ふ、國司以下在國すれば右の田地を賜ひし事也、延喜式に、「凡遙授國司、不レ給ニ公廨田幷事刀ニ」（事刀とは今世に云夫の事也、役用に召置てつかふ事なり）と出づ、遙授とは、先づは權官を指とみゆれど、權官に非ずとも其身在國せぬ人は同樣なるべし、文治以後は國司はいふに及ばず、介・掾の類も國府に在りし事は見へず、目代抔と唱ふる輩のみ國には在りしとみえたれば、所謂公廨田なる者は盡く守護の料と成りしなるべし、さて守護を始て置し時は、譜代の職分にあらざれば、本領を持たる人は妻子をば本領にも殘し、亦は鎌倉にも殘して守護する國に赴きしなり、三五年を過れば餘人と得替し歸る也、始めは其土人を用ひ、其國の守護としたるは希にて、皆關東伺候の人を配して監察せしめたるみえたり、守護の領分其國にある處は僅にて、其餘は本國亦は諸國に散在してもてる也、其後いつとなく譜代の職になりし故、在京在鎌倉する輩は國に代官を遣し置、是を守護代といふ、守護代は己が一族親戚、又は其國人を用ひたるなり、鎌倉の代の守護は、武家の中にては重職の樣なれども、評定衆抔と唱へしよりは輕くして、官位あるは希也、尤執權評定衆にて守護をかねたるあれば、守護代國事を專にす、誰某の分國抔と唱ふ守護は、只守護領の貢税を所得としたる也、北條氏亡びて朝家克復有し時も、其制を改めらるゝに及ばず、（尊氏に武藏・下野・常陸・義貞に上野・播磨・正成に攝津・河内を給ひし抔いふは、其守護領を給ひしなり、國一圓にはあらず）足利氏に至ては國司

て京師を出奔す、播州より和泉に至り跡を韜す、捜り求れども不ㇾ得、同月頼朝北條時政を上洛せしめ、平族を捜るを名とし諸國の總追捕使たらしむ事を奏請して免許を蒙り、終に國に守護を置き、莊に地頭を置く、是より制度大に變じ、朝家日々に衰へ、武家時々に盛に成て今日に至れり、頼朝の此舉倉卒に出づるにあらず、初め平治二年豆州に流されし時従五位下右兵衛佐たり、治承四年八月配所にして兵を擧げ、目代山木判官平兼隆を襲ひ、後軍敗れて安房に走り、上總下總を經て武藏に至り東八州を略し、十月相州鎌倉に居を定む、此時既に東國を掌握し、朝家を拒ぎ參らする機見へたり、平族を駿州に破り、叔父義廣を逐ひ、佐竹秀義を殺し、常陸を併せ、範頼義經を遣し木曾義仲を斃し、平族を一谷に破らしむ、此年元暦元年正四位下に叙す、十月問註所を造り、大江廣元・三善善信をして關東の政を出しむ、是其勢既に成て不ㇾ易ㇾ止也、義經西走の後に、平族の餘類義經行家を追捕する爲に、總追捕使と成るべきを望て志を遂げたるなり、朝家も宜しき事とは思召さるべき様はなけれども、其形既に成て只其名をこへる迄なれば、今はたせん方もおはしまさで、右安のために其望に隨れ、後の慮がおはさゞりしなるべし　八十四代順德帝久承三年平義時陪臣を以て三帝を遠國に遷しまいらせ後鳥羽帝を隱岐に、土御門帝を土佐、順德帝を佐渡へ武權益つのり、北條氏亡びて足利氏と成ては、朝家は只虚器を擁せられ、世の主たるのみなれば、守護地頭の名はありてその實は異なり、今傳聞を輯述し問目に對する事左の如し

守護一國の追捕を掌り盜賊濫唱を糺彈し、地頭御家人を進退す、源平亂より以前は希には國司在國の事も有しかど、文治以後は皆在京在鎌し、國には代官を遣し置き、正税公廨の租調庸の物を京進する事を掌らしむ、凡國司は位田職田といふもの有、まづ位田は位によりて賜ふをいふ、一位より五位迄は位田あり、六位以下に位田なし　職田は今の役料なり、國守以下の職田左之通り也

大國　守二町六段　介二町二段
　　　掾一町六段　目一町二段

上國　守二町二段　介二町
　　　掾・目大國に同じ

はる、下りて保元平治の亂官符未廢せず、兵輦轂の下に聚り、處分兵部に係らず、唯其倚賴する人に應ず、然も其兵士を指揮する人多くは朝官衞府の人にして、閭巷の匹夫に非ず、治承・養和の際に至ては、一位一官の稱すべきなき士豪兵を八洲の内に弄し、國には正税官物を抑留し、莊には年貢所當を辨へず、公を假て私を營み、力を賴て官を屬とせず、所謂國守・郡領・毅校・隊正の稱ある徒、何れの處をか防禦し、節度使六衞の官軍何れの敵をか征せん、各國藩籬の固めなく、官門禦侮の人なし、天子西海に蒙塵し、神器龍都の有となる、爭亂既に平らぎ海内無爲に屬するに及び、屈强の武夫兵を放して革面し、盡く本籍に復し、子弟婢奴を携へ力を農桑に併せば、猶維新の化を施すに足るべし、騎虎の勢再び下るべからず、絆を絕し馬如何ぞ自羈縻に就く事を甘んずべきや、況や健兒勁兵多年戰鬪の中にして、朝士黔驢の態を窺ひ盡し、其孱弱にして廉耻なき事を侮り欺くをや、賴朝卿天下の向ふ所を知て、其勢を藉て朝家を脅かして參らせ、私欲を遂られしなり

守護地頭職之事

第八十二代後鳥羽帝文治元年二月、左衞門尉源義經東國の兵を帥ひ四國に渡り、讃州八嶋の行宮を襲ひ申せしかば、平族先帝安德帝を奉じ西海に遁る、東兵踵を踏で三月二十四日長州赤間ヶ關に及び、平族を鏖にし、前内大臣宗盛父子を虜にして、先帝海底に崩御あり、四月賴朝從二位此より先、正四位下八月義經伊豫守兄賴朝と不和、十月賴朝土佐坊昌俊に命じて義經を襲はしむ、不↓克して殺さる、十一月義經難を避

し、古へは地廣く人稀なりし程に、子弟親戚を分配し、山野を開墾し、家を富し身を肥し、豪農終に素封の勢をなす、第六十七代後一條帝の長元年中、前上總介平忠常安房守惟忠を私に殺戮せしを、平直方に命ぜられ伐しかども、王師屢挫け成功無りし程に、源賴信を代て將軍として其亂を討平げ、六十九代後冷泉帝天喜年中、東夷安倍賴時陸奥守登任を逐しを、賴信の子賴義を將軍として伐しめらる、賴時戰死して其子貞任猶も王師に抗し、漸九年にして夷滅しぬ、斯時東州の健兒勤王に出陣せし輩、九年の久しき賴義が指揮に隨ひし間、互に主從の思ひをなしぬ、七十三代堀河帝寛治年中、賴義が子義家陸奥守として、封疆を踰へて出羽の山北・淸原武衡・家衡を私に討亡す、此合戰の砌も東州より竊に援來る輩少からず、官符なくして兵士を發し、私鬪の爲に良民を殘ひ、府庫を耗盡し、國郡を凋弊す、若王綱密なる代にあらば、細鮮も脱るべからず、況んや其巨魁なる物をや、（此頃世に聞へたる秩父新太郎武綱・三浦平太郎爲繼・鎌倉權五郎景政抔、健士の有勢なる者なるべし）其頃よりして健士分番して京師に宿衞する徒、各緣に因て武將の家に倚賴して上番せしにより、家人・家賴・家來等の俗稱も起りしなるべし、（家の子と稱する者は、もと親戚の卑者の郎黨と共に執役するを指、郎黨は從者也、家の子は漸く貴く、郎黨とは異なり、然れども家の子筋の者下りて、郎黨になれるもあり、古嘗には元は家の子、今は郎黨と名のりたる類也、郎黨は如何に出身しても、家の子となれるにあらず）一度武將の家に、倚賴したるは、永く其家門に伺候し指揮に應ずる風習となれり、武將の家日々生殺の權を縱にせしとぞみへたれ、朝家には姑息の政のみ行はれ、八逆の罪猶放流に止りて、不殺を仁とし、損レ威損レ福たまへる故、民小惠に擾ぎ難く、嚴刑に畏れ易ければ、武家の畏服する事一朝一夕の非にあらず、其所由來遠しと思

任を請へる類、古書に見へたり邂逅當途の人の外任受領あるは、皆兼任にして在京し、介に國務を委す、介も亦京官を望みて任に赴くを快とせず、終には國務を掾に任ずるあり、目に授くるあり、間己が子弟を國府に遣し、吏人を總領せしめしもあり、譬へば源平亂の時、豐後の國司は刑部卿三位賴資の兼任たり、其身國に赴かず、己の子賴經を國司代として豐後に遣し置る事源平盛衰記に出づ、爭亂守禦の際猶府に主なし、況や平世をや、時勢を見つべし國府に安在する守介は、大略其土地の人也、況や郡領以下の上官は其人を撰む迄もなく、世官の樣になりし程に、國司希有に在國する輩も、僅に四ヶ年を任限すれば、土地の美惡、四民の苦樂を觀察する事能はず、下情上に通ぜず、上欲下を化し易く、威惠二ッながら行はれ難く、士民皆士官に親み、統官を輕んずるに至る、故に百姓を撫養し、農桑を勸課する事をせず、租調耗減し、戸口隱匿すれども、搜索勾稽する事能はず、其の弊の極莊園を設て其の料に充らるゝに至る、莊園は租稅多く、公田は租稅少きによれる也、詳に田制沿革考に見へたり所謂莊園は熟田の外に墾發するにあらず、亦荒廢の田を再耕するにもあらず、古所謂食封の戸或は不輸租田の中神田・寺田・布薩戒田・放生田・勅旨田・公廨田・御巫田・學校田・諸衞田抔といふ類を以て莊園と唱へしに始まると見へたり、莊園の地子を檢校し、本主に運上する頭目を莊司と稱す、莊園を耕作する民は私家の奴隷たれば、公田を授り調庸を勤むる所の良民と齒する事を得ず、其の良民と稱する者も、朝家盛にましませし頃戸口を較量し、六年を限て班田ありし故、侵掠兼併の弊なく、自ら貧富均かりしかど、莊園の地は班田の法なく、本主は年貢の所當多からん事を欲し、耕輸の者は占地の歩數多からん事を欲せし程に、子弟親戚多き者は、地子を增進して良地を占

にして、空名を擁し政務に預らず、府にある官人は皆京より下る也、漢に所謂流官也、後世土人を用ひられし事も有し也國守以下郡領主帳に至る迄、下民を撫綏するを掌る、所謂文官也、其武官には國々に軍團あり、大毅一人・少毅二人・主帳一人・校尉五人・旅師十人・隊正二十人を置く、兵士を檢校し、陣列弓馬を調練する事を掌る、兵士凡一千人、其千に不レ滿、乃至五六百人なるは、分に隨て官吏を減ぜらる、兵士は丁男多き戸を撰み、三丁ある者其一を取て兵に配せらる、其受る所の口分田二段の租稅を徭役を免され、事なき時は時々軍團に至り、弓馬を習ひ陣法を學ぶ、分番して京にあるを衞士と云、邊防にあるを防人と云、征行ある時は出役する事也、軍團の數國により同じからず、一處なるもあり、數ケ所置れしも有しとみへたり、兵士或は健兒とも稱せし也、延喜式、主稅不輸租田の中に健兒田あり、民部式に、凡諸國健兒皆免二徭役一抔とあり、兵士の事也毎年孟冬國司簡閱して其不整を戒めらる、四十四代元正帝養老六年、諸國に按察使を置て、國守以下の能否、居民の利害を監察せしめらる、其の後或は置、或は廢す、後世只奧羽にのみ按察使あり、今に其職名は殘れども、大略納言以上の兼官と成て虛銜となれり、五十一代平城帝大同元年畿內七道に觀察使各一人を置く、職掌按察使に同じ、五十二代嵯峨帝弘仁元年觀察使を廢して參議とす、是郡縣の時國郡管轄の大較なり、猶委しき事は國史令格式等に因て尋べし

朝家弊衰して威權武家に移る、其の萌し久しき事

第五十七代陽成帝權臣の爲めに廢せられ、光孝帝親王を以て繼統ありしより、皇家の權盡く執政に奪はる、太政大臣基經の計ひにて廢立ありし也、猶夫より以前文德帝外戚の威に迫り、長子惟喬親王を置、幼稚の淸和帝を太子に立らる、崩御の際淸和帝の外祖太政大臣藤原良房攝政して威權を縱にせしより朝家衰へしを、白石源公讀史餘論に詳也群臣苟倖を事とし、制度大いに弛む、京官の事は爰に關るにあらねば置て論ぜず、士大夫皆外官を厭ひ、其國々に赴く人は不過斥外に非ざれば、貪人貪吏苞苴を以て家を富さん事を欲する徒也、家貧にして外

事を得たり、まづ戸籍の法を嚴にせられ、伍鄰相保し、一人を長とし、五十戸を一里とす、里に亦長あり、令に、里鄕の名混雜して見へ、和名抄に、鄕名ありて、里の名見へず、竊に案ずるに、里といひ、鄕といふ、統名異なるに似たれど、和訓同じく佐渡なれば、古へは鄕里ともに通用したるとみへたり、譬へば郡と書すべき處に、縣の字を用ひたるが如くにぞあるべき、されば和名抄に載する鄕名を數へば、中古の戸口多からざる事を大略辨ずるに足りぬべし長は其里の耆老の謹愿なる者を用ふ、里を統るを郡とす、郡は大小均しからず、二十里以下十六里以上あるを大郡とし管戸は九百ヅヽありしなり、六十代醍醐帝の頃には、戸口漸く繁殖せしと見へ、大郡は千戸と云事延喜式に見へたり大領少領各一人、或は郡用とも申せしにや主帳主政各三人を置て衆民を撫養し、田農を勸課する事を掌る、十二里以上を上郡とし、管戸六百余なり大領少領各一人、主政主帳各二人、八里以上を中郡とし、管戸四百余なり大領・少領・主政・主帳各一人、四里以上を下郡とし、管戸二百余なり大領・少領・主帳各一人、主政をば置れず、二里以上を小郡とし、管戸百余なり領及主帳各一人を置る、是等の吏人多くは其の土地の人を用ひらる、漢に所謂上官也、其職或は替り、或は譜代にしたるも有しと見へたり、譜代とは、世々其職に在るをいふ、今云代々、後漢ニ所謂世官の事也郡を統るを國とす、國も亦大小あり、或は小國にして數郡あるあり、或は上國にして郡少なるもあり、郡に大小あるによるとみへし、大概大國といへども、萬戸を過るは少に、最小の國は千戸にたらざるも有しと見へたり大國には守介各一人、守從五位上介正六位下大掾・少掾・大目・少目もあり、是れも同じ、大掾正七位下、少掾從七位下、大目從八位上、少目從八位下史生三人、此外博士醫師あり、大國中國官位令中國無レ介、淸和帝貞觀中置、後世據レ之は守・介・掾・目各一人、上國の守從五位下、介從六位上、掾從七位上、目從八位下、中國の守正六位下、介從七位下、掾正八位下、目大初位下下國は守・掾・目各一人、守從六位下、掾從八位下、目少初位下介をば省て置れず、史生・博士・醫師ある事は、上國以下も大國に同じ、是等の官人國府に在て布政施養する事を掌る、亦兼任權官の名あり、大概京官の人の遙授にして、任所に趣くは稀なり、權官其國に趣く者多くは編配左遷

國郡管轄考

中古國郡管轄之事

神代より人の代となれる始め迄、國郡定かならず、其頃國と稱せしもの、後ゝ治て國となれるもあり、革て郡と成しもあり、鄕と成しもありとぞ見えたり（常國・常世國・日高見國・衣手の濱し國抔と唱へしは、今の常陸國にて、新張國・筑波國 茨城國・仲國・久自國・馬國抔といひしは、今は下りて常陸の縣郡となりしの類也、縣はあかつにてわかつの儀により、郡はこほりにて小く割わかつの義によれりと、古人も云傳へたること也）其國といふも大小甚不同ありし事にて、其の始人類の生出る山野の形勢により多少均しからねば、自然に部をなし落をなしたるによりて、分割を改め制せらるゝに及ばれざりしとぞ見へたり、國を統る司を國造と稱せし事、神武帝の頃既に其名見へたれど、國々に偏く設け置れしとも見へず、第十代崇神帝の時四道の將軍抔いふとありしかど、皇化に服從せざる國郡を伐平げし事にて、永く設け置れしにはあらず、第十三代成務帝四年に至りて、始て諸國に國造を定め置かれし也（神武帝位に大和國橿原宮に即給ひしより、帝王十三代年數七百九十四年を經て國造を定め置れ、又二年を過て國郡を分割ありし事故あるべし、只上代の事史册なく、不詳のみにはあらざるべし）同六年に國郡を分、封疆を定めらる、縣主・村主等の稱ありしも此の頃よりの事なるべし、（後世に至り縣主・村主、の職廢し、其職たりし人の子孫皆己が姓氏となせしなり、漢に所謂因官而爲氏の類なるべし）其後三十六代皇極帝の朝に、國造を改め國司と號せられ、第四十二代文武帝大寶中大に制作を改められ、萬世の規矩を定められしより以後、文獻の徵今に辨ずる

田制沿革考 終

養ひ、四百八十歩の田穀盡く主人に納む、太閤の租を制するこれと同じ農民三時に粉骨して田に餘糧なく、妻子飢寒にたゆること能はず、工商の二民は僅に賦を出して世に云運上坐食佚飽す、工商猶可也、醫イシヤ・巫カンナギ・卜ウラナイ・祝カンヌシ・樵キコリ・漁レフシ・獵カリウド・優ヤクシヤ・及僧尼・道士ヤマブシ戸口の徭役なうして、鼓腹の化を共にす、善政といふべからず、茲に國初に及び、勝國の苛刻を厭ひ、租稅三分の一を弛め、民の懸倒の急を解き、仰て父母に事るに足り、俯して妻子を養ふに足らしめらる、聖政と稱すべし、竊に惟ふ、昇平二百餘年人畜蕃殖し、立錐の地も墾闢せざる事なきに至るべきに、農夫耗減し、遊民倍殖し、田野舊によれども熟穀漸寡きは、地氣の然らしむる歟、將に調庸の制復せらるゝ事なく、租賦特り農夫に取の故にはあらざる歟、善哉白石翁の田を論ずる、豊臣氏天下を丈量するに、古法に變じて三百歩を以てする事は、一歩を以て一夫一日の食分にあつといふ、然るに斯つゞめられしに古法に、六尺を歩とす、豊臣の時は六尺五寸を歩とす又當代六尺の繩を用ひられしかば古への一段の内にして六十歩を失へり、民いかで窮せざらんといふ、亦惟ふ農民田宅に安住し、官地なるを知らず、私地の思ひをなし、租稅をつくのへば己が役充りと思ひ、有司も公私の別あるを知らず、兼併を禁ぜず、懈怠を戒めず、其田にして其租をいれて事畢るとす、田租の外徵に物なし、故に魚鹽桑楮麻枲の所出盡く米高を蒙らしむ魚多き海は、廣狹に應じ高をつけ、鹽濱は竈に應じ、桑楮麻枲の類皆石盛の法あり、有司の苛制によれり、いにしへはなき事なり民に賦するに餘力を殘さず、怠農を驅て遊民に變ぜしむるは時勢にして然り

一元に歸するといへども、北朝の天子徒𢊍器を擁せられ、世の共主たるのみ、宮外咫尺も皇家の地なく、武命を重んじて、官は何物たるを知らず、此朝の主擁せられし時、頑愚の士の諺に、持明院ほど大果報人はおはせじ、何の武功もなくて、將軍より天子の位を賜はらせ給ひしといひし言と、土岐頼遠が太上天皇の御幸に參り合ひて、院といふか狗といふか、狗ならば追物射せんと罵り、狼藉に及びし抔にて時勢を見つべし足利氏の國郡を制する、他の政令なく、國郡鄕莊盡く割て士に與へ、租稅は其主の指揮に任せ、別に五十分一の課を充て自らの奉とす、譬へば租米五十石を出すべき地は、別に一石を出さしめて京に運送し、將軍の厨料に充られしや、武は增て二十分一に至りし年も有し也守護地頭自ら其出る用を量りて入る事を制す、故に兩稅なり、一收あり穀錢布帛徵こと其欲に從ふ、元莊園の遺法によるゆゑ調庸の設なし、調庸なしといへども、段錢・棟別・倉役・時を撰まずしてはたらる、段錢とは、田地にかけて錢を出さしむ、今の高掛り、といふが如し、棟別とは、軒別にわり附て錢を出さしむる也、今いふ鍵役などゝ同じ、倉役とは、富民富商へばかり割附る也、今いふ分限割といふに同じ、倉役、義滿公の代には四季にあてられ、義教公の代には一箇年十二度に及び、義政公には十一月九度、十二月八度に至りし故、百姓田宅を棄てゝ逃散し、商旅戶を閉て財を交へざりし事應仁記に出、不仁不義窮りぬといふべし是皆軍國の用に充るにもあらず、功臣の勤を勞ふにもあらず、甘レ酒嗜レ音、峻レ宇彫レ墻の爲に抛て足らず、足らざれば亦虐ぐ、黎民の肝腦盡く地に塗るといふべし、應仁亂後に及び侯伯國々を割據し、租稅京運せず、五十分一の租をいふ府庫竭盡して庖厨も辨ずる事なし、外は明國に哀告して恥を海外に曝し、義政公國用乏しき事を明帝に歎き、錢を丐し事三度に及びし事善隣國寶記に出ヅ內は得政を創成して嘲を後世に傳ふ、借貸を破りて更始するを得政といふ、義政公の代に始り、十三度迄行はれし也財貨通ぜずして四民堵を安んずる事なし、織田氏の柄を執られし事僅に十年、聲敎の迨ぶ所二十餘州、其田制少しく變革ありしかど貫高の石高と成しをいふ準直とするに足らず、豐臣氏に至て田畝の制大に古と違ひ、租も亦甚苛斂也、然も猶古へ私田の制を倣はれし也私田二段奴に耕さしむるに、三分の一二百四十歩を奴の口分とし、其妻子を

によらず、民奉る所を知らず、一郷一莊の地、官に奉じ、平族に奉じ、源氏に奉ず、間亦奸黠の徒の爲に糧食をはたられ、無告の民塗炭惟谷る、終に源公の權行はれ、國に守護を置、莊に地頭を設く、國司依然として存すれば、民に兩君を戴かずといふべし、國司は國務をとれども常に在國せず、只下屬の目代の如き類、在國して文書を守るのみ、守護は在國して兵馬の權を管る、莊司は邑入をはたり其主に運送するのみ、地頭は生殺を專にす、凡人主の天下を治るの基は、唯賞罰の二ツのみ、中主自ら威福を棄て執政に與へらる、執政京官を沙汰するのみ、兵馬の事に至ては輕賤して、將帥に任じて問はず、天下の兵皆源平に私服して官に服せず、是源平の亂の基也、昔賞を侯に出さしめ、罰は自ら專らにするは、田氏の齊國を奪ふの術也、是は夫には異にして自ら驕奢して事を事とせざるの過によれり、嗚呼生殺威柄一度人に藉して、何ぞ再び躬ら執ことを得べけん、南風の不競は其崩ずこと萌し、是を時勢といふは我は信ぜず正税公廨出納自ら定例あり、守護地頭の祿別に羨餘より出るにあらず、重く民に賦して給せざる事を得ず、大寶の令延喜の式、茲に至りて地を拂ふといふべし、租税の法意に任せ用に辨じ、國郡制を異にするもあるべし、簿籍傳はらず、文獻の徵とすべきを見ず、莊園末制といへども、猶朝廷の命地にして、私家の創立にあらず、何ぞ自ら專に與奪すべき、然るを永業の地を抛て、寺社に供して冥福を求め、封土を估附して、富人に奉じて財物を貪る、曾て官に請はずして轉替す、況や宅を壞て祠を奉じ、田を徹して寺を造るの類枚擧に暇あらず、一歩の荒猶一夫一日の食を闕べし、滔々たる天下祠廟寺觀の爲に費す事幾何ぞや、其弊延て今日に及べり、北條氏亡びて皇家克復に至り、莊園の弊、戸籍の濫、將に遽に古制に復さるべきの急務なるに、如何ぞ其弊を踵で倍に重賦を以てし、恩倖の公卿より有勳の士大夫、賞功國を兼莊を併す、牝雞叫て蒼蠅黨り、惟城自ら隳、忠臣世避ゝ世、士怨民倍、足利氏の奸其術を施す事を得、遂に皇統南北に分立し、四海地氣に順て北より南に及び、治

むかし皇朝の盛におはしませし代には、班田の政も行はれ、人を量りて田を授け（正丁次丁の差により授る所の田地を、應受田又口分田と云、家につくを永業田といふ）田により租を徴されしかば、怠農も其業を勤めざるを得ず、貧民も其田宅を賣、永業に離るゝ事なく、富者も特り善地を占る事能はず、家に調あり、口に庸あり、遊民苟偸して身を容るゝに所なし、自ら曠土なく遊民なく、國饒に家富、四民おの〳〵其所を得たりき、漸衰ふる頃に群臣外任を厭ひて京官を希ひ、執政姑息を事とし、私恩を敷れし程に、國司在京して國務の大綱を俾聞し、（職原抄の頭註に、「後代置ㇾ權、々大略遙授也、正者居ニ其國一執ニ政務一、權者其身居ニ京都一、以爲ニ兼官一謂ニ之遙授一也」とみへたり、後には國司國に赴く事なく、只目代を遣し置事になりぬ）國務を介に屬す、介も亦自ら高大の細事を聞事なく、是を掾に屬す、掾の細事判決するは猶其職也、目に至ては舊刀筆の任にして、籌を錄し算を執り、會計中る事を勤とす、後世に及で介掾高拱して成を目に仰ぐに至る（目は大國も漸從八位、小國は少初位を相當とする也、位有といふ迄にして、今の代官手代などゝいふにひとしき賤職なり）嘻呼如ㇾ此にして猶烹鮮の職、分憂の任と稱して可ならんや、法必上より敝りて下隨て敝る、正税減じて調庸の布帛百官に給するに足らず、茲において盛に莊園を設けて群臣に躬ら租賦を召さしめ、正税は唯大藏に歸し、公事に供するのみ、大藏既に乏しく、切下文（今云切手）數すれども國用猶足らず、終に内給の厨料を置、諸寮各領あり、誠に一國の地圖を披けば、内給・院厨・公卿・宦女の莊園・神社佛閣の料田櫛比して、正税公廨徴べきに地なし、公廨積なき時は吏俸いづれより出べき、池竭・溝埋・陂傾・川溢・修治の料なく、歲饑民餓すれども救急の設なく、正税京運せず、主税籌を運らす所なく、調物庫に充たず、主計度支の方なし、下りて源平の亂に至り、徴發國衙

米二斗四升の價と、畑高一石の租米四㐧の價と相同じ、是を田畑六分違の法と云、平均米一石九斗一金にあつると見えたり、或は此法然るべからず、下田の位に六を乗じて中畑の位とし、中田の位に六を乗じて上畑の位とす、下畑の位は上畑中畑の位の違へるに准じてつくべしといふ、譬へば上田一石二斗、中田一石、下田八斗の村里は下田八斗也、六を乗ずれば六八四十八となる、夫を中畑の位とし四斗八升とす、上田一石へ六を乗じ一六六となる、夫を上畑の位とし六斗とす、上畑六斗、中畑四斗八升なれば、上中の位違ふこと一斗二升也、故に下畑の位も中畑に一斗二升を減じ、三斗六升となるなり亦田畑は一等を減じて位を立、上畑中田に准ずると云前說に同じ、上田一石二斗、中田一石、下田八斗の村里は、上畑一石、中畑八斗、下畑六斗とするをいふ上畑の熟穀兩收しても、猶中田の熟粟に及ぶべからず、故に租稅の輕重を用ゆ、譬へば田高一石の租は七ツ八ツの物成にもし、畑高一石は二ッ三ツの物成にもするをいふ齊しく是高也、甚輕重の租を徵すべからざれば、虛價を設けて平均すと云上の米二石五斗一金に換る說も同じ耳を蔽ふて鈴を盜むの諺と同じく、民の耳目を掛にするのみにて、定制といひ難し、定制とし難きが故に、一村一郷の內經界の廣狹、地高の高下、租稅の輕重、雲泥の差ある事多し、總て檢田の法區々にして、予が陋聞のきゝし處も小冊に盡し難し、玆に其概略をしるすのみ

田制沿革總論の事

夏禹洪水を平げ、敷土隨山、刊木奠高山大川、六府孔修、庶土交正、財賦の出る處皆三壤を則とし、上下の科を定められしかば、黎民其所を得、其業を樂しみき、殷の助周の徹名は異なりといへども、土地を正し租稅を徵す、各其時の宜きによるとぞ見へし、秦井田を廢し、阡陌力田の法行れしよりの後、志ある人主は藉田の禮を躬し、天下の農民を勸むるあれば、其治三代に及ばざる事の遠きこと、田制の正しからぬによれるなるべし、我邦唐山を去る事海路三百里にして、遙に風土殊に人氣異なるに似たれど、田制沿革して終に古制に復し難きこと、猶井田を廢して復し難きと同じに侍りき、

に粟五合をうれば、前法のごとくして租米二斗四升にして、高に乘じて十の二にあたるを二ッ物成と云、如レ斯年々の豐凶を見て、租税をきはむるを年免と云、豐凶を平均して定租をきめ置くを定免と云、田に石高をつくるを、石盛又は高を結ぶ抔と唱へ、田に上中下の科ある、位又は色と云、前文に記せし五年又は九年の豐凶を平均て石高をおはすれば、平年はいづれも四ッ物成にして、過不足の差なき筈なれど、檢出の吏意に任せて、石高をきめおく事多きゆへ、苛刻の吏の定めたる田地は、高のみ多くして租税は少く、一ッ二ッの物成にあたりて、民困究する地も有、寛裕の吏の定めたる田地は、石高は少くして租税は多く、八ッ九ッの物成にあたり、民安佚する地もある也、民の公に奉るは租税のみゆゑ、租税さへ少くば民困む事有まじき筈なれど、當代は調庸の役なく、萬の事皆石高に係る故、租税を少くても石高多ければ民困しむなり石盛の高下は粟の多少より起れば、一反三百歩の田高一斗より以上三四石に及ぶ處も有と聞ゆ、高一斗は一歩の地の粟九勺餘、高四石は一歩の地の粟三升三四合に及ぶなり或は新墾して土地馴熟せず、石盛きはめ難き歟、又は惡地にて水旱風霜の爲に傷られ、年々熟不定なき田地歟、山溪の間を墾し人家遠く耕養に勞し、僅に植僅に耘るの間猪鹿に損傷せられ、穫收に至り僅に翌年穫す計の粟を得るの如き田地は高役を除き、其年の豐凶に應じ租税ばかりを取るを見取場抔と稱す、以上水田の制也、田は字書に「植レ穀謂レ田」とありて、陸田水田の別ありとは見へず、周制の井田我邦の令に載る處皆然り、近代は水陸の田租を異にすれば末に辨ず、俗に用る處の畑畠の字義詳にし難し、好奇の者は圃の字を用るにや、圃は菜園にして陸田にはあらず、然るべからず、元來此書通俗を要すれば、止む事を得ず俗に倣ひ畑の字を用ゆ　畑は一年に兩收の利あり、麥を夏收とし、菽黍荏稷の類を秋收とし、是を米價に平均し、石盛亦は租税を定むる也、尤鹵莽及び惡地一作すべく再收なり難き處は、一收の利のみを較量し、石盛租税ともに減ずる也、收穀の多少、米價の高下、年々の平均容易に成難き故、田畑六分劣りの法を用る共いふ、其法に云、中田の位と上畑の位と同じきは定法也、故に中田一石の地は上畑も亦一石也、中田一石の租米四斗を出す、上畑一石の租も是に同じ、畑は稻なき故銀を出して米に代しむ、米價の高下に拘らず、米二石五斗金一兩に代るの價を常例とす、租米四斗の價銀九匁六分也、米二石五斗一金に換るは虚價にして、實價に平均すれば、田高六斗の租

當代にては古法と勝國の制を兼用ひられ、歩は古への六尺を用ひ、（但し黒地には間竿と云を用ひ、長一丈二尺の外に二分を加へ、砂入と唱ふ、一歩の實は六尺一分なり）反は勝國の百歩を用ひらる（勝國の制に倣ふに似たれど、勝國は六尺五寸を歩とし、當代は六尺を歩とせらるゝ故、一反の田地勝國に減ずる事二十五歩なり）外に畝といふ名目を立て、三十歩を一畝とす、三千歩は一町也、但し國初いづれの時此制を設けられしや未レ詳、總じて量地は諸國公私領、共に寛永年中より慶長の初年に多くは有レ之事と聞ゆ、公領の量地の制度は元祿年間に粗備り、享保に及で完整せり、私領の量地も是に准じてする事なれど、其主の意に任せ量地したるも多く、或は一歩六尺五寸を用ひ、又一反三百六十歩を用る處も有と聞ゆ、租税は勝國の苛斂を弛め、是に反せらる、其法一歩六尺四方の稲を刈て、其穗を摘て毫を除、粃を簸て粟となし、較量するに一升に充れば、一升に一反三百歩を乘じ、三百倍して粟三石となる、熟粟なる故、風に中り日に乾けば、縮にして減ずる故、平均十分の二を減じ二石四斗とし、粟を米にする時は、半減して一石二斗となるを高とす、是を石盛十二の田といふ、其十の四を租とす、米四斗八升也、（四公六民とて、田にある處の米十が四を租とし、十が六を民食とす、その實は熟粟乾減しても、十分が二を減ずるに至らず、粟を米にしても半減に至らざる故、三分が一を租とし三分が二を民食としたる制にして、勝國の法に反せられしなり）田地の經界を正し、石盛を定め租税を究るは、豐凶五年又は九年を平均せざれば不同ありて、重き時は民困窮し、輕き時は民佚奢するゆへ、尤容易に定め難き事也、譬へば一石二斗の田は一歩粟一升を獲べき闘なれど、年熟して粟二升を獲る時は、反に乘じて十分の四を租とすれば米九斗六升になり、田地の高一石二斗に乘ずれば、十の八にあたるを八ツ物成といふ、（物成取箇及び租米を高に乘ずるを厘と云類の俗語人の知る所故註せず）又凶年にて粟一升穫べき田地、僅

臣家の時におこれりと申傳ゆるにや、慥に織田家功臣に割與へられし封土に石高見へたれば、足利家西走して織田家權をとられし時の畿制にて、天正の初年に萌しけれど、織田に服せざる割據の國々は古制によれりしかど、豐臣家の掌握に歸せし後に、天下盡く貫高を廢し石高となりし也

近代田制租賦の事

織田家貫高を廢し、石高を以て土地を量られしかど、所管の地二十有餘州の經界を正し、租税を定められしとも聞へず、我國紛結の中なれば、大概のみにして精しきに至らざるならん、豐臣家一統の後、文祿三年に至り、定制ありし處は天下の租税三分の二は地頭取て、三分の一は百姓の得分たるべしとなり、經界不同なるを以て是を均正するの志おはして、五奉行の內長束大藏大輔正家（近江國水口城主五萬石を領す）に命ぜられ、是乘坊と云算學者と會議し、盡く古法を變じ新制を定めらる、六尺五寸を一步とし、百步を小步とし、二百步を大步とし、三百步を一反とす（古への三百廿五步にあたる反の字、田畝の名に用る事いはれなし、東涯伊藤長胤は段の字艸書して訛誤し反となれるなるべしといへり）其制を刪熟し、慶長の始より檢地し、畿內を終り近江を經越前に至りしに、豐臣家薨逝につき此役を罷らる、今も猶其制殘りし處ありて、世に太閤檢地といへり

の領地にて、四千疋宛の定納なりしを、朝倉の一族東郷といふ者、年々七千疋宛を納むべきよし一條家に申請て預りし事みへ、同書に土貢何百貫雖申請之といふ事處々に見へたり、是等によりて憶ふに、御給莊園の類其始は家司靑侍抔其地へ遣し、租稅收納し京師へ運送せしめ、小莊は其經費のみ多く得分少き故、隣莊と合して兼司らしめ、又は莊内の百姓を撰み、其事を司らしめしに起り、（莊園を預る人を莊司と云、今云郷代官の類也、世には郡領と莊司を同じ樣に覺へし人もありしにや、郡領賤しといへども、國司の隸屬にて其郡内の事を管る、今いふ大莊屋の重きもの也、莊司は陪臣にして、國司の屬下にはあらず）後には其の近邊の富有なるもの、此莊の租稅何百石、年の豐凶、穀價の高下を平均すれば、錢何十貫の定輸にあたれり、我は夫に增こと若干貫文にして、都合何十貫の錢を豐凶に拘はらで進ずべきの間、我に預け玉へと申請を、莊園の主は一合の米一錢の錢にても增事を歡び、たやすく前莊官を黜け請ふ人に與ふ、世澆に人黠こく成し頃は、次第に土地にも應ぜぬ貢物を約し、強て申預り下民を虐げとりて其數に充、餘分にて己が身を肥し、京家の人は田間に疎く下情に疎き故、我もちたる莊園は是程の得地とは憶はで、只今迄僅の土貢を納め家貧しく莊司の私藏のみ富せし事口惜けれ、誰なかりせば我をして何十貫の錢を、年々泥土へ投棄すべし抔と新莊司を褒揚して疑はず、莊司たる人は恩は己に歸し、恨は主へ歸する樣にのみ取計ひし故、百姓に忌ひ付れ、自然と其地の主の樣に成し也、（是地頭のはじめか）然らば貫高は今いふ見取年貢の類にして、土地により甚不同なりしなるべし、今はおしなべて上方は百貫千石にあたり、奧筋は百貫五百石にあたるともいひ、又は二十貫百石にあたる事常法ともいふにや、いづれも算勘者の强解にして、

處を、前稱を改めずして唱へしとみへたり、亦太上天皇の御料に莊號あるは、封戶と勅旨田の外に沒官の莊園を押て院內へとられし處にて、定制の外なる故、御厨とは唱へざるなるべし、領は寺社の領田、亦は諸寮の料所也、內給及諸寮の料は國々より收る正稅にて用を辨じ、外に料所といふ事はなきことなりしが、莊園多く成しにつれ、此等の類まで料所きはまり、正稅といふはなき樣に成行たり、國々にて收納する租稅を國府にて集め、京へ運送するを正稅と云、國へとゞめて國守・介・掾・目、抔の俸祿、官舍修理の料、池溝の料、衞士の料、救急の料、俘囚の料、其外萬事の經費に遣ふを公廨といふ、正稅公廨ともに國々定限ある事延喜式に詳也、正稅大藏に納り、夫々の費用に充、是亦式に出、禁裡の用度、諸寮の料用、國々に定田出來て、國衙によらず、別に有司を充て租稅を納るゝ時は、國務に用なく正稅はなき事になり、公廨の費用のみ公田を仰ぐに至れり、國司權を喪ひ守護威福をなし、天下武家に屬して再當の幸となれるは、內にして執政により、外にしては莊園によれる職、法之不レ行、自レ上破レ之とは、此の謂にあらずや

町錢石の差別の事

古へは土地の廣狹を量るに町を以てし、中頃は錢を以てし、近代は米を以てす、地には町を用るは周制井田に起り、五等の諸侯の料百里・七十里・五十里皆田制によれり、秦井田を廢し新法を用ひ、後世從て革むることなしといへども、頃畝の名今に依然たり、我邦唐制を模され、只其名目を改められ、町段を稱とす、度量自ら正しく、有司も愚民を欺く事克はず、愚民も己が應受田の廣狹をしり易し、中葉の錢を以て量りしは虛價也、近代の米を以て量るも亦虛穀也、まづ錢を以て地を量る事、何れの代に始まりし事や未詳、諸書を案るに、北條氏陪臣にして國命を執し頃に始りしに非ずや、但し制作を改め、古の田何町錢何貫に準ずといふ定法有りしとも聞へず、桃花蕤葉に、越前國須田見は一條家

世移り制弛、法弊へ令革、新に莊園の名起れり、古へは功田の外は永領の地なかりしかど、制度弛り姑息を生じ、封戸・位田・職田の類は、薨卒の後一年勿レ收とて、其身死しても其年の租税を其家に賜り、翌年に至り公に收めらるゝ筈なるを、姑息して收められず、永領の如く成し類（按るに、封戸・位田・職田共に租税を國衙に收め、國衙より京師に運送したる上、賜ふ所の群臣に頒たるゝ時は、此弊を生ずべからず、中葉に迨んで國司皆遙郷を厭ひ在京を貪ひ、國には介及目のみ遣し、其身は京師に安佚し、國務の大綱を郷傳に聞て判決し、介及目の類は官祿共に賤きゆゑ、郡領の類の土官にはまかるゝ故、四年の任限無事ならんとのみ思ひ、佗に暇あらず、租税輕減して京運用に充難き故、封戸・職田・位田は各賜ふ所の人に歸して、租税を直徴せしめしに起る歟、臆斷にして必としがたし）又は無功無勲の人、恩倖により田を賜へるの類に起りて公田漸減じ、私田日々に多く成し故、莊園の號定制となれり、世には何國何郡何莊何村と一途に覺えし人も多きにや、左にはあらず、郷里の地莊園に割頒たれしが、其儘莊園にて武家の有となりし地も有べし、或は一度莊園に下りし地を沒官せられ、再び郷名に復せし地もあるべし、又一度も莊園にならず、郷名のまゝ武家の有と成し地も有べし、莊は一領一圓の稱號なれば、一郷を割て四五莊と成し所も有、一莊に三四郷を兼併したるも有、一郷の内半は莊となり、半ば郷のまゝなるもあるべし、一莊にして郡を跨り、他郡に及ぶも有し事にて、且割き且併せ、定制にあらず、今の代よりして國郡の經界疑はしきと、郷名有て其地のしれ難きは、莊園の濫りなりしによらざるべけんや、（譬へば信濃國伊那郡伴野郷の地、上西門院の御領に附られ、伴野莊となり、其餘る處を大河原鹿鹽と云郷儀遣山莊といへるの類と知るべし）莊の外に御厨と稱する地とみへたり、御厨は内給（禁裏の御臺所入になる地也）太上天皇の御料也、（太上天皇は封戸二千戸、勅旨田千町宛の定也、院内にて政をとり給ひし代より制限なし）又は太神宮の御領も御厨と稱す、此外の寺社領に御厨の稱あるは、内給太上天皇の御料の地の内より寄附有し

公田となるも有る也、位田と云は、爵位により賜ふ所の田地也、正一位の位田は八十町、夫より以下階ごとに減少して、從五位は位田六町、六位より以下には位田なし、惣じて位田は其身死して、後一年は收公を免され、翌年に至り官に收めらるゝ定め也、職田は官職によりて賜ふ所の田地なり、太政大臣の職田四十町、夫より以下官ごとに減少し、史生の職田六段に至る、神社佛閣に寄らるゝ處の料所は、今の代に異なりとも聞へず、一概にいはゞ、功田は今の私領、位田職田は今の代の役料知行に同じき物と知るべし

良家奴婢の差ありし事

古へは惟地に公私の別ありしのみにあらず、民にも良家奴婢の差あり、所謂良家の民は正丁一人、二段の田地をうけ取て耕作し、租調庸の役を勤る事前に出し所の如し、私田を耕す民を奴婢といふ、是亦田二段を受て、其三分の一二百四十歩を口分田とて己が作り採にし、其餘四百八十歩の田に生る所の穀物盡く其地の主へ納め、調庸の二ッは勤めるざる也、按ずるに、位田職田を耕す所の民盡く奴婢にして、調庸を免かるゝ時は、封戸の制と矛盾して不同に似たり、惣じて我邦の制度今の代にして窺ひ難きことのみ多し、若くは奴婢は功田免租田を作る者のみにして、位田職田は良民耕し國荷にをさめ、國荷の運送して京着の上、其租を頒たれし事なるべき歟、良家減じて私奴多くなりしは、莊園のみだりなりしによれるなるべし、猶下條を案ずべし

鄕里莊園の事

封畿の外を七道に分たれ、道下に國あり、國下に郡有、郡下に鄕あり、鄕下に里あるは古への制也、

び雜物に至るまで、其國の宜により自ら定式ありて、一物づゝを納る也、調の品不足すれば、庸役をつとめて其數に充し也、詳に下に出づ、庸といふは、人別役の事也、人生れて三歳を黄（ワウ）と云、十六歳以下を小（セウ）と云、二十歳以下を中といふ、廿一歳より六十歳までを丁（チヤウ）と云、六十歳より六十五歳までを老（ラウ）と云、六十六歳以上を耆（キ）と云、其内二十一歳より六十歳迄四十年の間、本役を勤る者をさして正丁といふ、中と老とは半役を勤めしめ、是を次丁と云、黄・小・耆の三ッには諸役なし、正丁といへども譯有て役を蠲除かるゝ事も多、病又は癈疾の人は次丁に准じ半役を除かれ、或は休復を賜事も有也、（休復とは諸役ともに免除せらるゝ事也、庸のみにし限らず、調租の二ッ共に是に准じて知るべし）令に云「正丁歳役㆓十日㆒、若須㆑取㆑庸者、布貮丈六尺、一日二尺六寸、須㆓留使㆒者、滿㆓三十日㆒、租調倶免、役日少者、計㆓見役日㆒折免、通㆓正役㆒並不㆑得㆑過㆓四十日㆒」（文義を按るに、正丁一人一年の庸役十日と定め、夫役につかはざれば、其代りとして布を出さしむるを庸布といふ、一人前一日二尺六寸と定め、十日には二丈六尺一端とる也、正役の外臨時の加役三十日勤むれば、作る處の田租、居る處の戸調共に免さるゝ也、一人前の租調を三十日に割、其一分を一日に充、日數の多少に應じ差別を折免と云、四十日に充れば三役共に終る、故不㆑得㆑過㆓四十日㆒と定められし也）

公田私田の差ありし事

古へは地に公私の差（タガヒ）ありて、近代と同じからず、所謂公田と云は、今の代の御領所と同じく、國衙（コクガ）（府ノヤクシヨ）の正税を納る處なり、私田は尤科多し、大概にいふ時は、功田・位田・職田・神社・佛閣の料田の類是也、先功田と云は、勳功有し人に賜ひし田地にて、大功は世々不㆑絶とて、子孫其地を傳領し、其次は功の輕重に應じ、或は三四代に傳るもあり、亦は其身一代に留り、其身の死後は直ちに國衙に上返し、

す所の貢也、調の和訓都幾 軒別といへども、家内の人數の多寡老幼によりて差あり、令云、「凡調絹絁絲綿、並隨ニ郷之所ヲ出、正丁一人、絹絁八尺五寸、六丁成レ疋、長五丈一尺、廣二尺二寸 絁は和名抄、絁カトリ縑似レ布也、阿之岐沼アシキヌとあり、此あしきぬといふ物今に有や未レ詳、六丁成レ疋とは、正丁一人八尺五寸ヅヽ、出しあひ、六人にて疋とする也、下皆倣レ之 美濃絹六尺五寸、八丁成レ疋、廣同ニ絹絁一絲八兩、綿一斤、布二丈六尺、並二丁成ニ絢屯端一 絲十六兩を絢とす、重六十四錢也、綿二斤を屯といふ、此國の一斤は十六兩を一斤とすれば、一屯の綿の重百二十八錢に當る、正丁二人合して絢屯となして納るをいふ 端長五丈二尺、廣二尺四寸、其望陀布四丁成レ端、長五丈二尺、廣二尺八寸、」和名抄に、「望陀者上總國郡名也、其體與ニ佗國調布一頗異、故以ニ所レ出郡名一爲レ名」とあり、「四丁成レ端」とあれば、正丁一人一丈三尺宛を出せしなり、 此外に雜物とて、銕・鹽・鰒・堅魚カツヲ・紫菜・海藻の類を納めて、調布の代りにせし處も有し也、又調の副物とて、紫・茜木綿・藥種抔國々の產物を調に添て納る事恒例也、拾芥抄に、「一家謂ニ一戸一、々々一烟事、正丁四人一疋、正丁四人二石二斗、中男一人租穀四斛、烟數一戸、卅束爲レ限」とみゆ、 文の義詳に解し難けれども、封戸の收納の事と見へたり、封戸といふは、位田職田の外に三位以上の公卿に給りし也、所謂位田職田は(詳に下に見ゆ)土地を給ふ事にて、封戸は戸調と口庸を給ふ事とみゆ、譬へば一戸に正丁四人あれば、調布一疋と庸役四十日也、公卿は在京する故庸役用る所なし、故に庸の代りに米貳石貳斗とみれば、一端の布米五斗五升の價も同しきと見へたり、米價賤しければ、百姓害ることなく、國常に充實す、輕和の益大なり、中男一人租穀四斛といふは、菽麥の類、精米にあらざるをいふと見へたり、中男は次丁なれば、正丁の半役を勤るきはめなる故、布半段を出して庸役五日の代りとし、調の絹又四尺二寸五分也、布半段と絹四尺二寸五分の代りに、菽麥の類四斛にては太重きに似たり、外に子細有る事にや、一烟事又は烟數といふ事未レ詳、若くは今いふ一竈といふ事歟、卅束の事も詳ならぬに似たり、稻の事とすれば、卅束は米壹石五斗也、前人に正丁四人二石二斗と出、後ニ一戸卅束爲レ限とあれば、首尾矛盾していづれとも思ひよりがたし、識者に尋べし 同書に民部式を引て、「凡諸家封戸者爲ニ三分一、一分者充ニ輪絹之國一、二分者充ニ輪布之國一」とあり、 輪の字未レ詳、若くは相似たるにより、輸の字の訛字にして、輸絹輸布の事にはあらずや、封戸は太上天皇は二千里(里は戸に作るべし)一品親王は六百戸、太政大臣は千五百戸、正一位は二百廿五戸より次第に減じ、無品親王は百五十戸、參議は六十戸、從三位は七十五戸、夫より以下は封戸なし 令の文謬り讀時は、正丁一人ごとに、絹絁絲綿を盡く出す樣に疑ふべけれども、左にはあらず、絹絁絲綿及

稲米にすれば五升にあたる、令義解に「租黍中者、容二一千二百一爲レ斛、十斛爲レ合」と載す、全く唐令の文と同じ、此頃の升は唐制を用ひられしと見えたり、徂徠物子の度量考には、唐量一升今の肆合壹勺捌撮餘にあたるとみへ、中村惕齋の三器全書には、今の三合七勺八撮餘りにあたるといふ、兩說不同なれども、我邦古代の升は今の四合程にあたるべき、然る時は一段三百六十歩の田の獲る處の稲五十束、米にして貳石五斗は、今の一石餘にあたれば、田の善惡の中分といふべし五十束の稲米にすれば、貳石五斗の内稲貳束貳把、米にして一斗一升を租とす、田賦を租といふ、今の年貢也、二石五斗の内一斗一升を租とすれば、二十分の一より輕し、外に調庸の役あれ共、民皆末を厭ひ本をはげむべき善政なり續日本紀には、「文武天皇慶雲三年九月丙辰、遣二使七道一、始定二田租法一、町十五束乃點役」と見ゆ、令を撰れしは同帝大寶年中の事なるに、僅に五六年を經て田租の三分の一を免され、一段の租七升五合を取て、益農民を休せられしとみゆ、但紀の文に「始定二田租一」とあるは、疑しき事にや、令の書大寶年中に成たれば、五六年を過て始て田租を定めらるべき様なし、始の字もし改の字の訛字にて、「改定二田租一」といふには非ずや、又拾芥抄の註には、「段租貳束貳把、慶雲三年九月廿日勅書云々、宜二段別充一二租稲一束五把一于」今所二皆法一、々至也とあり、此文によれば、二束貳把の租の上に、段別に一束五把を充て、都合三束七把をとりしとも聞ゆ、彼是此事は甚不審也、三束七把は米一斗八升五合にあたり、十四分の一程の收租なり五十二代嵯峨天皇の頃は租稅漸重く、田に上下の科を班たれしと見へ、弘仁式に、「上田一段地子十束、中田一段八束、下田一段六束、下々田一段三束」と云事見えたり、今いふ田地の色分と同く、上田は米五斗を出し、夫より中下と一斗劣りにして、下々田は下田より半減し、一斗五升を納めしとみへたり、慶雲より弘仁に至り、帝王十一代歷百十餘年を過て、下々田の租稅も慶雲の時に比すれば一倍せり、世奢る故に用度乏し、用度乏しき時は、下を損じ上に益むと欲せざる事を得ず、損益盈虛時と推移るを知るに足れり

上古租庸調の差ありし事

有レ田則有レ租、有レ戸則有レ調、有レ口則有レ庸」は古への制也、田租の事は上に見えたり、調は軒別に出

此時に方五尺を以て一歩とし、三百六十歩を一段とし、三千六百歩を一町とせらる、則唐朝の制度をうつされ、町は唐の頃に准じ、段は唐を畝に准じて大小あり、（唐制は六典に出し、方五尺を歩とし、二百四十歩を畝とし、百畝を頃とすとあるによられしなり）五尺を歩とする事、今の制と異なるに似たれど、この頃は尺に大小有て、量地は大尺を用ひる、小尺の一尺二寸を一尺とせる故、五尺はすなはち今の六尺と同じ、（是亦唐朝の至尺大尺の二種ありしによられしなり、大尺は今の布帛、（俗名鯨尺といふ）小尺は今の曲尺も同じかりき）其後大尺にて地を校量する事を廢し、小尺にて校量せしと見へ、拾芥抄には、「凡田以二方六尺一爲二一歩一、三十六歩爲二一段一」とあり、古の五尺に一尺を加へて量とせしにはあらず、尺の大小異なる故と知るべし、亦同書の頭の註に、「積二七十二歩一爲二十代一、百四十歩爲二二十代一、二百六十歩（當按當レ作二二百十六歩一）爲二三十代一、二百八十歩爲二四十代一、五十代爲二一段一（乃三百六十歩）式云、代頭也」と註せり、代頭の事令に見へず、如何なりといふ事、今の代にて臆斷しがたけれど、古へ班田せられし時の遺法と見へたり、古へは廣十二歩長三十歩を段とす、拾芥抄には、三十六歩を一段とすと云、廣十歩長三十六歩の事とみゆ、古への班レ田一戸田二段を常とす、廣十歩長七十二歩にあたる、代頭といふは是よりおこれる歟、都て制度の事をしるせしは、令・式の外徵とすべきなく、律格の二書殘闕し人間に少うして、吾黨の寒陋寓目すべき事難し、長息すべき事也

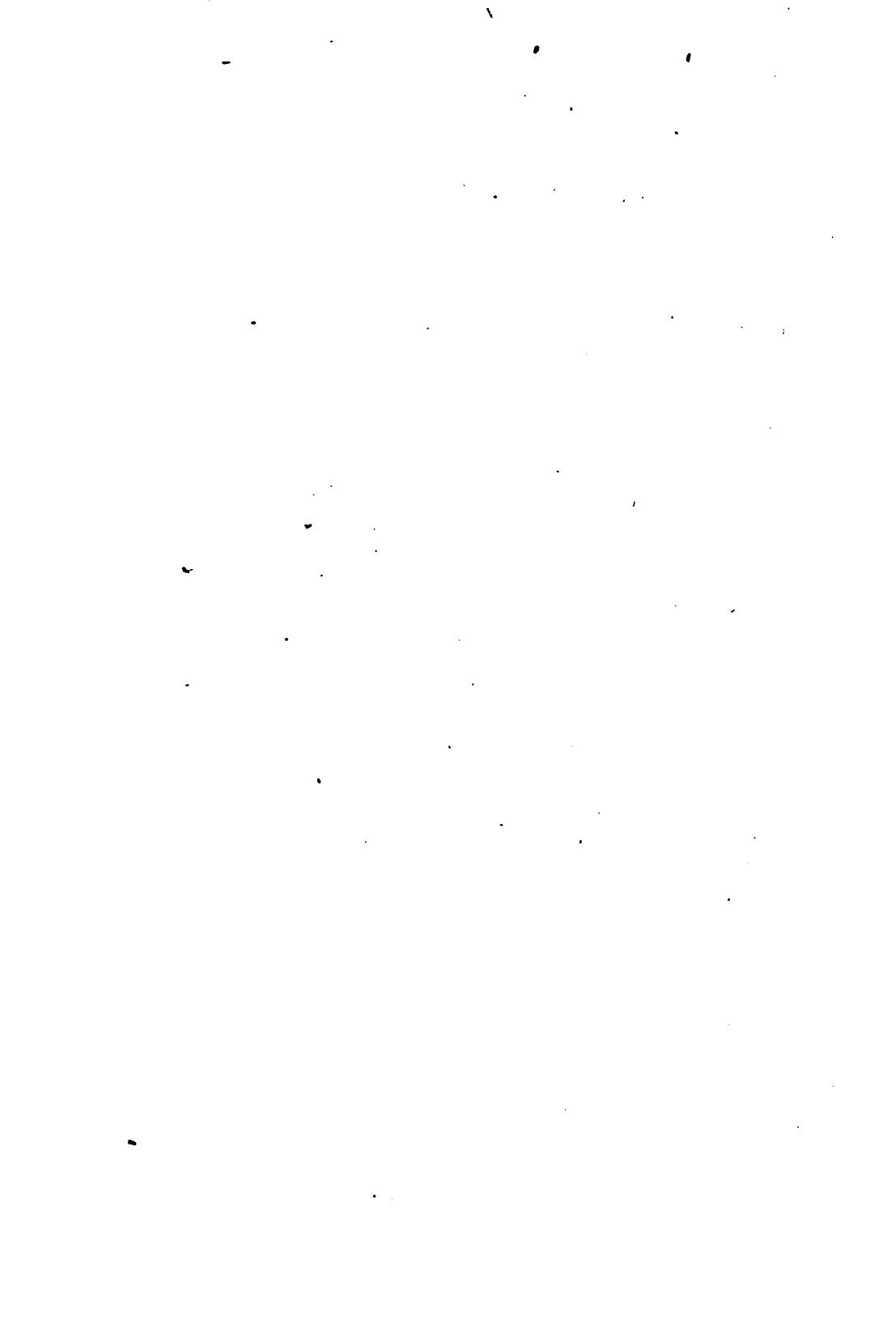
上古田租の事

令及び義解を兼按ずるに、一段三百六十歩の田土の美惡、年の豐凶を平均して稻五十束を獲、一束の

田制沿革考　及國郡管轄考

葛山　星野常富著

上古田制之事

尙書に「民惟邦本、本固邦寧」と見え、古先明王天下を治め、兆民を撫綏し玉ふに、勸農をはじめとせざるはなし、說文に男の字を釋して、男丈夫也、字从二田力一、言三男力二於田一也と見えたり、職に四民の差あれども、農を本業と稱し、工商を末業とし、士といへども祿は代耕にたるによる、農を勸むるの本は、經界を正しくするに起る、故に孟子に、「仁政必自二經界一始、經界不レ正、井地不レ均、穀祿不レ平、故暴君汚吏必慢二經界一々々既正分レ田制レ祿可二坐而定一也」と見えたり、田地の經界を精密にし、財賦は土壤の美惡により、上下の科ありし事を禹貢に出せり、我國の上古も農を重じ、田制を密にせられし事、彼國のごとくにぞ有べき、されども易簡の代なれば、其制の概略今に傳はらざるは惜むべき事也、國史に記されし處は、「三十七代孝德天皇三年、班レ田既訖、凡田長三十歩、廣十二歩爲レ段、十段爲レ町」とあるをや始とすべき、世には四十五代聖武天皇僧行基に命ぜられて、諸國の經界を正さしめ玉ふ、町段步の制玆に起ると申す歟、孝德帝より帝王八代年歷八十餘年の後なれば、始制には非るべし

田制沿革考

及國郡管轄考

星野常富著

ミ、怠ル者ハ貧キ故ニ、自然ト農事ヲ勵ミ、民心正シク爲テ孝貞忠信ノ道ヲ可レ守歟、然レ共地方ニ習熟セザル者ハ、手重キコトト思フベシ、是ハ其道ヲ不レ知故也、此法ヲ行フニハ、譬ヘバソノ村々ニテ少シハ氣才有モノヲ一人宛モ撰出シ、一度ニ廿人モ稽古爲レ致レバ、五六日ニシテ先習得ベシ、又其習得タル者ヨリ、一人ニテ廿人宛ヘ稽古イタサスレバ、十日ニシテ四百廿人ト爲、亦此四百廿人ノ者、一人ニテ廿人宛敎ユレバ、十五日ニシテ八千四百人ト爲ル、亦此八千四百人ノ者、一人ニテ廿人ニ敎ユレバ、廿日ニシテ一億六萬八千人トナル、然ル時ハ二人一ケ村ヘ懸リ造ル所、八萬四千村ノ逐田繪圖五ケ月ニシテ可レ成、如レ此爲ス時ハ、日本國中ノ田畑一枚毎繪圖面ニ造テ、且一枚毎ニ其畝歩ヲ改メ記ト云共、三ケ年ニハ不レ可レ過、如レ此ナル時ハ田畑ハ勿論、金銀・珠玉・竹木・奇石ノ出所迄モ、明白ニ席上ニ於テ分リ可レ申事也、尤右ノ手當入用等ハ、其村々ニテ夫錢掛リニナルコト故、御料私領社寺領ニ至ル迄、別段入費ノ愁モ無レ之、容易ニ成就有ベシ、亦町家モ是ニ等シ

經國本義 終

爲レ致置度コト也、其餘小百姓農事ノ稼ノ者ニテ、武藝等習モノ有時ハ、其處村役人共ヨリ、嚴敷禁止爲レ致度コト也

今關東ノ内、上總・下總・常陸・下野・武藏等、在々古ヨリ人家過半減ジ手餘シ地多キ所有リ、亦往來筋大川通舟車牛馬ノ通行多キ所ハ、檢地高ノ外ニ新田切添場多ク、荒地多ノ處ハ檢地ノ節ヨリ貢多ク減タリ、又隱田多ノ處ハ、夏秋ノ入金譬ヘバ金千兩余モ有ベキ處ニテ、貢米金ニテ漸ク金高ニ三十兩計納ル所アリ、右ニ準ジ私欲ノ所多シ、此レニ由テ是ヲ考ルニ、地方ノ大道ヲ辨別セザル者多シ、譬辨タル者有テモ、賄賂ニ眼ヲ昧シテ調方モ無ク、只畏言ヲ申テ金銀ヲ貪ルノミ、仍テ等閑ニイタシ置クコト多シ、右ヤウ成ル隱田場有テモ、誰カ正路ニ其罪ヲ糺スモノナキ故ニ、正直ニ貢納ル者ハ働無キ倥(ウツケ)者ノゴトク思ハル也、仍テ正路ノ者モ往々ハ不正直ニ成ユキ、富ル者ニ倣テ、正直モ後ニハ不正路ニナル者多シ、此故ニ孟軻モ國政ハ必ラズ從ニ經界一始ルト云ヘリ、是等ニ仍テ熟々(ツラツラ)地方經濟ノ事ヲ稽ヘ見ルニ、請ヒ願クバ大國小國トモニ徑(コミチ)・畷(ナハテ)・畹(エン)(ウマイリ)・溝(ミゾ)・洫(ヨコホリミゾ)・遂・畎(キテビ)ノ規則ヲ立テ、少シモ定ノ外ニハ贔屓偏頗ノ差略ナク、正シク繩入ヲ爲シテ石盛ヲ宥シ、段別ヲ明白ニ爲シテ取箇ヲ等シク爲シ、其國郡村毎ニ田畑・屋敷・山林・芝地・沼淵等迄モ、席上ニテモ明白ニ見分ルヤウニ分間繪圖、逐田繪圖ヲ作テ、御料所村方ハ勿論、領主地頭所迄モ被ニ渡置一度コトナリ、然ル時ハ經界正シクシテ、民ニ地境論・水論等ノ訴訟事ナクシテ、能ク和熟ニシテ治リ、能耕者ハ富

作亦ノ石拖ノ下男女共ニ任セ置、其身ハ農家ニ不相應ナル詩歌・連俳・武藝・茶ノ湯・碁・將棋・書畫・茶湯・活花・其他婬樂・三味線・淨瑠璃等ニ泥ミ耽リテ、田畑耕シ方ハ勿論、ソノ地處ヨリ取入ノ穀數、就テハ貢夫役ノ出方モ不レ知シテ賄男ニ任セ置、身ヲ亢（タカブ）リ、質朴ニシテ能ク農事ヲ勤ル良民ヲ誹謗シ、人ニ五孝アレバ五業ノ道有ルコトヲモ不レ辨、書ヲ讀、詩ヲ作リ、文ヲ綴リ、歌ヲ讀、又武藝抔モ學ベバ、己モ君子ト心得、在位ノ君子、道德ノ君子、其階級ノ差別モ不レ知、書ヲ讀又人ニ敎テモ、却テ人心ヲ迷ハシテ農民ヲ亂ス者多シ、是等ハ敎方ノ不ニ行屆一歟、近頃武家ノ浪人國々農家ヘ入込、武藝ノ稽古致モノ多シ、宜コトナレド有祿無祿ニ不レ限、博奕及ビ女術、勾引ノ徒迄モ、金銀サヘ出セバ其人ヲ不レ撰シテ指南ス、仍テ於ニ在々一近年不法ヲ働者多シ、右等ノ取締リ方ノ爲メ、近頃ハ農家ノ武藝ヲ禁ズルコト繁多也、是ハ善キ事ナレド、其ノ一ヲ知テ其ノ二ヲ不レ知事多シ、故ニ村役人並有德ノ者ニテモ、惣テ同ヤウニ制スルハ不ニ行屆一コト也、在方ニテモ村役人ハ、其身分相應ノ武藝モ不レ習シテハ不レ叶事ニテ、若於ニ其所一不法ノ者有時ハ、番非人計ノ働ニテハ難レ制、其時ニ臨ミテハ村役人無ニ武藝一時ハ、惡徒ヲ制シ誡ルコト不レ能、故ニ身元相當ニシテ御役ニモ可レ立者ハ、常々武藝モ

貢モ右ニ准ジテ減ゼリ、其中ニモ貧乏モ甚シキニ至テハ、妻ヲ迎ルニモ其價ナクシテ、生涯寡ニシテ暮スモアリ、其子細ヲ尋ルニ、困窮者ノ男女私通シテ夫婦トナルハ、親兄弟モ制シ兼ル也、左モ無ク媒妁ヲ頼ミ、結納ヲ入テ女ヲ求ル者ハ、男ノ方ヨリ其女ノ身代金六七兩モ、女ノ家元ヘ無ニ束修(レイモツ)一テハ承諾セズト也、斯悲歎ノコト抔ハ、江戸住居ノ武家方ハ未聞ノコトナルベシ、中ニハ右場所知行持ノ衆ハ、傳聞モ可レ有レ之コトナレド、右等ノ所哀憐心配ノ儀ハ無シテ、只貢取立而已ヲ專要ト爲ルコト多シ、依テ年々以來ニ衰微募ノミ、是等ハ皆其地頭領主モ、地方ノ道ヲ不レ辨故ニ、只貢計ノコトヲ嚴重ニ爲シテ、農民ヲ撫育スルノ政事ヲ不レ行ノ失也、然ル中ニモ亦江海川河ノ岸津湊、又ハ神社・佛閣其佗流行場抔ハ、其土地田畑反別ヨリモ、人家共ニ過當ニ多キ所數多有レド、是等ハ皆往來旅人參詣者等路資ノ澤ヲ以宜シク營ミ暮シ、家宅諸道具、衣類等迄モ都下ニ不レ劣形勢也、右ニ准ジ多ク金銀ヲ貯持タル者モ多シ、然レドモ元來高不足ノ所ニ住居スル故ニ、其領主地頭ヘ年貢諸夫役金等ハ些少ノコト也、亦漁獵場ハ其所業多分ノ金銀ヲ得テ、衣食住ノ驕ヲ極ル者モ多シ、如レ此不用ノ者アレド、是ヲ彼ヘ移シテ、手餘シ地ヲ耕シ荒地ヲ起シ、本ニ復スルコトヲ不レ爲ハ不忠ノ甚シキ也、今右等ノ所等閑ニナリテ、農モ商ヲ專業トシテ、農事ハ名ノミナリ、請願クハ有道ノ人有テ、正名ノ道ヲ行ヒ、農工商ノ業ヲ正シク爲シテ、法ヲ嚴ニシテ規則ヲ立、高反別ヨリ人家不相應ニ多キ所ハ、三法ヲ以テ撰出シ、其親族共ハ勿論、他村ニテモ金銀貯持タル者ヘ、夫々割合出金爲レ致、困窮者ニハ家作・農

スハ、地方ノ要法也、其三法トハ、一ニハ子孫多者ヲ撰ミ、二ニハ田畑少ニシテ、日傭稼而已ヲ業ト爲ル者ヲ撰ミ、三ニハ其土地ニテ營ミ兼ル者ヲ撰ミ出シテ、此三ツノモノヲ以テ開發地ニ移シ、家作農具ハ勿論、衣食迄モ一ヶ年分ヲ與ヘテ農人ト爲シ、其内少シハ才覺有テ貞實ナルヲ撰デ、取締モ可レ爲レ致コト也、右手當米金等ハ、何程モ入用次第ニ、少モ差支無レ之コトハ、天地ノ正理也、都テ古ヨリ今ニ至ル迄、人ハ利ニ走テ、難ヲ去テ易ニ屬者故ニ、數代住馴タル地ニテモ、其所ヨリ營方安ク世渡ノ能キ所アレバ、舊地ヲ放レテ新地ニ移ル也、仍テ舊里ハ自然ト衰ヘ、人家共ニ滅ジ、古田ハ手餘シ荒地ト成テ、貢モ悉ク滅ズル也、此故ニ其所ヲ領知スル領主地頭モ公私ノ用差コトハ、皆地方ヲ司ル人動キノ不行屆ニシテ、政事ノ等閑故也、右等ノ處ハ陽氣衰ヘ陰氣盛ニ成テ、何時トナク風俗モ移リ變リ、人ノ勢力モ衰ヘ、農事モ倦ミ勞レテ、耕業未熟ニシテ作毛熟方モ惡ク、取入ノ諸穀少ク、家貧キニ隨ヒ、子孫撫育ノ情愛モ薄ク成テ、産メル赤子ヲ座蓐ノ内ニテ壓殺爲ルコト常トナリヌ、之ヲ其所ニテハ俗言ニ間引ト云モ、産子ヲ菜蘆ヲ抜テ根ヲ絶タル心得也、如レ此薄情ハ可レ歎可レ忌ノ甚コト也、元龜天正ノ頃亂世ノ内ニテ、髮ヲ亂シ綴レタル敝衣ヲ纏ヒ、以苫屋ニ臥、柴ヲ枕ニシテ、軍役ニ被レ驅タル時サヘ、子孫撫育シテ、人家モ月々年々增益タルニ、今ハ行者道ヲ讓リ、耕ス者畔ヲ讓リ、夜モ戶ヲ鎖サヌ靜謐ノ御世ニ產テ、不レ飢不レ寒、天然ノ命ヲ持ツ難レ有中ニ、兩總・二毛・常陸ハ勿論、江戶近在迄モ、右ヤウ成ル人外ノ者間々有、故ニ右等ノ村方ハ、古田畑ノ荒地多、人家モ過半ヲ滅ジ、

今諸國一統、田畑平均ノ村方ハ、高千石ニ八百人位、亦皆田ノ村ハ六百人位、亦皆畑村ハ千二三百人、亦山添村ハ皆田ニテモ千二三百人、皆畑ハ二千人、山中ハ二三千人、海岸モ右ニ准ズベシ、尤津湊等ハ五六千人ヨリ一萬人ニモ及所有ルベク、故ニ夫役ノ法ハ、高割人割戸割ノ三法ニ不レ依バ、過不足可レ有コト也、厚地ハ人多、薄地ハ人少シ、强弱・剛柔・智愚・眞僞・虚實・興廢ハ皆土地ニ因ル也、故ニ地理ニ不レ達バ人情ニ通ルコト不レ能、亦教諭シテ豐饒ヲ令レ爲コト不レ能、國人ノ聚散・興廢・盛衰・多少・貧福ハ教導ニ因ルベシ

移民勸農之法

水土宜キ地ハ國人生育多シ、然レ共驕ル時ハ土地衰微シテ、人家自ラ退轉シ滅ズル故ニ、土地ノ盛衰、國人ノ聚散ハ國政ニ因ル也、亦地狹クシテ人餘ル時ハ、是モ亦過タルハ不レ及ガ如ニシテ却テ衰フ、今甲信越ノ如キハ人多シテ餘ル、其アマル者ハ餘業ヲ爲也、餘業ヲ爲モノハ財利ニ富、勤テ農事ヲ守ル者ハ財利ニ乏シ、故ニ勸農モ終ニハ怠農ト爲テ、商業ニ走ル者多シ、因テ人多シテ過タルモ、亦不足ナルニ同ジ、農事未熟ニシテ、夏秋兩毛ノ取入少シニ成テ、貢モ自ラ滅ズル也、加之其商家ハ衣食住ニ富、美麗ニシテ、農家ハ乏ク、此三ツノ者見苦敷、其勤モ苦シ、都テ人ハ難ヲ去リテ易ニ附キ、貧ヲ悄テ富ヲ羨ミ、衣食住ノ惡キヲ耻ルハ、世俗ノ通情也、故ニ水土宜シケレバ人家殖、地狹ケレバ人民餘ル、仍テ三法ヲ立テ別地ニ移シ墾田ヲ爲シメ、稅法ヲ正シテ妄僞ヲ制シ、民心ヲ質直ニ爲

錢目ニシテ、秳四斗重リ也、秤二ノ緒目野(クワイ)也、野ハ尺目ナリ故ニ科ニモ用ユ是ハ一人持軍卒役ノ法也、今傳馬宿ニテ五貫目一人持ノ法ハ、弓力ヲ試ノ法ニシテ、弓ノ長サ七尺五寸厚六分一人張也、當時ノ弓ハ三寸ノ弰(ホコ)詰(ツマ)リナリ、六分ノ弓ニ弦ヲ懸テ、弝(ニギリ)ヲ高キ所ニ結付、其弦ニ五貫目ノ重ヲ下テ、二尺五寸十束(ツカ)ノ矢、尺下ルヲ一人張ト云フ也、故ニ七分ハ二人張ニシテ十貫目懸リ、八分ハ三人張ニシテ十五貫目懸リ、九分ハ四人張ニシテ二十貫目懸リ、一寸ハ五人張ニシテ二十五貫目懸ル、是ハ渠(ユミヂカラ)ヲ試ノ法ナリ、今ノ弓ハ三寸ノ弰(ホコ)詰リニテ長七尺二寸、故ニ六分ニテモ一人半張ニモ適ルベシ、七貫五百目モ懸ルベシ、慶長ノ度迄ハ亂世ニシテ、諸士皆一人毎ニ五貫目宛ハ持タル故ニ、直ニ陣中ノ法ヲ以驛卒持ノ法ト爲タルモ、仁政ノ至レル也、人卒一人ハ拾一貫四百目ヲ持テ一里ヲ行ク、此賃銅錢四文八分、輕尻馬ハ附乘テ七文二分、中馬ハ米四斗入二俵、此正味三十貫七百二十目、俵二ツ繩共ニテ二貫三百目モ有ベシ、合テ三十四貫目九文六分、本馬ハ四斗入三俵、此重サ五十貫目ヨリ五十一貫目迄ニテ、十四文四分也、故ニ中馬ハ十里ニテ百文、百里ニテ一貫文、則金一分也、因テ一分ヲ百匹ト云モノ、馬ノ百里ノ賃錢ノ義也、因テ本馬一貫五百文ニシテ金一分二朱ナリ、乘輕尻雜役馬ハ銅錢七百四十八文也、亦格別遠國ニテ軍役難レ勤處ハ、金納ニテ取立ル時ハ、右割合ヲ以テ一日一舍、但シ三十六丁ヲ以爲二一里一ノ法ニシテ、五里一日路ノ積ヲ以テ取也、町家ハ前々述ル如ク、五商ノ割合ヲ以テ、近キ所ハ人夫、遠キ處ハ金納也、尤鰥寡・孤獨・病身者・亦ハ貧窮ニシテ一日暮ノ者ヲ除也、故ニ富ム者ハ課役ヲ當ル也

場ニ有テ旅人通行繁多故ニ、賣利ノ多キヲ以ナリ、其外林役・藪役・船役・車役・牛馬役等ハ其持主ヨリ取ナリ、大軍ハ高百石ニ付一人、大國ハ二人、次國ハ二人半、小國ハ三人、郡ハ三人半、縣ハ四人以下同斷、其元法ハ天子六軍ニシテ七萬五千人、大國ハ三軍四萬六千八百七十五人ニシテ、實ハ三軍三師三族三卒三輛之法ナリ、次國ハ二軍二師二族二卒一輛ニシテ、三萬千二百二十五人、小國ハ一軍二師四族一輛ニシテ一萬九千五百二十五人、郡ハ一軍ニシテ一萬二千五百人也、故ニ郡音軍、亦音群、亦音君、一郡ノ領主之ヲ稱シテ君ト云、故ニ郡ノ制字ハ君邑ニ从フ、縣ハ一師二旅四卒二輛三伍二夫ヲ出スナリ、是ハ皆神儒佛三道一致ノ制也、然ルニ天子六軍ヨリ以下、大國三軍、次國二軍、小國一軍ト云ヘルハ、其大數ヲ擧ル也、井法ヲ不ㇾ辨者ハ難ㇾ悟所也、此例儒書ニ多シ、國ハ三十三里小半里ヲ、詩ニ三十里ト云、以亦原思ガ采祿九百ト云、以亦詩三百十一篇ヲ詩三百ト云ヘル類也、隊伍ノ法一組五人ヲ伍ト云、以㆓五伍二十五人㆒輛ト云・以㆓四輛百人㆒卒ト云、以㆓五卒五百人㆒族ト云、以㆓五族二千五百人㆒師ト云、以㆓五師一萬二千五百人㆒軍ト云フ、縣ヨリ以下、服ヨリ里迄ノ五等モ、皆縣法ニ同ジ、此法天子ハ一ツ、大國ハ一ツ五分、次國ハ二ツ、小國ハ二ツ五分、郡ハ三ツ、縣ハ三ツ五分、都ハ天子ノ連枝ノ國ナル故ニ、大國ト同法ニシテ二ツ也、亦林役・藪役・船車役・馬役等ハ、其持主ヨリ右之割法ヲ以テ取也、亦遠國ニテ人夫・牛馬・舟車共ニ難ㇾ勤處ハ、金納米納等ナリ、其法金一兩ニ錢四貫文ノ割ヲ以テ、一人一日ニ五里持運、貫目十一貫四百目也、此法穀一升ノ重サ二百八十五

伏見・其外諸國城下等ニ之無シ、漢梵共ニ城下無地子ノ國ト云者ナシ、然ルニ明智光秀主人信長ヲ弑シタル惡名ヲ避ン爲ニ、初テ京・大津等ノ地子ヲ免ジテ、亦豊臣家モ之ニ倣シヨリ、今ニ一統其例行ハレテ、城下地子無キ所多シ、其無地子ノ所ニ在テ、諸國ノ產物運送、請ズシテ來リ、招ズシテ得ル、自由自在ナル所ニ居テ坐ナガラ高利ヲ貪リ、衣食住ニ富ルコト怖ルベク愼ムベキノ事也、是等ノ所少モ心附タル者アラバ、京・大坂・奈良・伏見・堺・其餘諸城下ニ住居ノ者モ、右ニ等シキコト何成共仕法ヲナシ、子孫永續祈禱ノタメ納度事也

諸夫役割合之法

軍役ニ三法アリ、高割軒割人割ナリ、諸夫役モ之ニ同ジ、是ハ高多ク持テ貧者アリ、亦高少ニテ財ニ富ム者アリ、亦高少ニテ人多キ所アリ、亦高多シテ人家少キ所有故也、一國ノ內ニテモ高家數人別相當モアリ、亦不相當モアリ、亦過當モアリ、相當トハ高千石ニ家數百軒人別六百人、不相當トハ是ヨリ少キヲ云、亦過當トハ是ヨリ過タルヲ云、國中ハ此振合ニ當レド、山添・山中・海岸・津湊・宿町場等人家トモニ此三倍四倍ニモ當リテ人家共ニ多シ、如レ此處ハ人別割ヲ以テ取ナリ、川除普請、浚渫等ハ高割ヲ以テ取リ、人別ニ不レ拘、往來道普請等ハ、戶割亦人別割ニテモ取ル也、傳馬役ハ高懸ナリ、然ドモ山添・津湊等ハ人別多シ、如レ此所ハ人別懸ニテモ可レ取也、當時ハ元宿五分持、是ハ其宿

一ハ持運、一ハ納トス、此納三十束ヲ其山元平均直段ニテ拂、譬バ一束永三文ナレバ、三十束ハ九十文也、是ヲ束永納ト云也、亦是ヲ石盛ニ定ルニハ、其所十ケ年ノ內穀相場平均ヲ以、譬バ金一兩ニ一石一斗ニ當レバ、永九十文ハ九升九合トシテ取也、尤栩畑ハ毎年下枝刈取、五ケ年ニシテ本木ヲ取ユヘニ、右ニ准ジテ平均ナリ、亦桑畑楮畑ハ毎年刈取ユヘ、是モ亦其所桑楮直段ノ割合ヲ以テ取也、是等ハ三分一ノ納也、一段ニ何束刈、一束ニ永何十文ト定也、亦束永ヲ石盛ト爲テ戶役ヲ定ル法ハ、金百兩ヲ以テ一戶ニ宛テ五百兩ヲ五戶ニ結、其五戶ハ上農夫ニ准タル夫役ノ勤ル也、四百兩ハ四戶上次農夫、三百兩ハ三戶中農夫、二百兩ハ二戶中次農夫、百兩ハ一戶下農夫ニ准ズ、仍テ金千兩ハ十戶ニ當ル豪商也、此法ハ金一兩ニ付米一石八斗替ノ法ニシテ、今三斗六升入五俵ナリ、拾兩ニ米五十俵、百兩ニ米五百俵、故ニ金千兩、此利足一割ニシテ金百兩也、因テ金千兩ハ士祿ニ比スレバ五百俵ニ當ル、萬乘ノ下輿其封戶四十戶ニシテ、此稅法五ツ三斗五升入五百四十俵餘也、亦千乘モ下輿ニ當ルユヘ、商家ニテモ戶役ヲ勤ルコトハ農家ニ同ジ、上商ハ五戶ノ役ヲ勤メ、大商ハ十戶ノ役ヲ勤ム、故ニ千兩ハ十戶、萬兩ハ百戶、十萬兩ハ千戶、百萬兩ハ萬戶ノ役ヲ勤ベキハ、三道一致ノ制度也、然ルニ今四海泰平安宅ノ御世ニ生レテ御恩澤ヲ蒙リ、夜戶ヲ鎖ザ、ズ、衣食住ノ三ツヲ保チ、妻子臣妾ニ至ル迄、起居安樂ヲ爲シテ、地子不納ノ地ニ在ルコト餘リニ難レ有御惠ミ、過當ナル御慈悲也、仍テ近年寬政ノ度、江戶町方ニハ七分金上納ト云ヘルコト有テ、少ハ御國恩ノ御奉公ニモ相當、天道ノ御惠ニテ、町

其境界ヲ正シクスル法ハ、逐田繪圖ヲ行フニアリ、仍テ諸國村々一ヶ村毎ニ、逐田繪圖ヲ造リアルトキハ、些少ノ切添埋地ニテモ明白ニ分ルユヘ、上ヲ僞リ下ヲ掠テ、取箇ヲ自己ノ氣儘ニ上ゲ下ゲスルコト能ハズ、税法ハ取ベキヲ取ラザレハ、却テ民驕ニ長ジ農事ヲ怠也、譬バ田一段耕テ米一石餘レバ、二段耕テ二石有テ食足リ、三段耕テ衣足リ、四段耕テ住足ルベシ、人衣食住ノ三ツ足ル時ハ、自然ト怠ルモノ下民ノ常病也、又一段耕テ米五斗餘レバ、四段耕テ食足リ、六段耕テ衣足リ、八段耕テ住足リ、一丁耕テ衣食住祭祀ノ具足ルベシ、此一丁ノ田甫ヲ一戸ノ田ト云モノ三道ノ制法也、都テ一夫ニテ一丁耕ス時ハ、三餘ノ外間隙無ルベシ、（所謂三餘ハ、冬ハ歳ノ余リ、夜ハ日ノ余リ、陰雨ハ晴ノ余、）小人間隙アレバ、怠テ不善ヲ爲コト多シ、故ニ百姓ハ活サズ殺サズト宜フモ、其義税法ヲ緩シ夫役ヲ薄クスレバ民間隙有テ怠ル、其怠ル時ハ不善ヲ爲シ驕ル、又税法ヲ嚴ニシテ夫役ヲ厚クスレバ、民勞テ仆レ離散ス、故ニ税賦トモニ節ニ爲ヲ以テ政道ト云也

葭畑椚畑萩畑等幷古代束永之事

葭畑・茅畑・萩畑・椚（クヌギ）畑等石盛ハ束銭永ト號シテ取ナリ、此永トハ永銭以後ノ稱也、古ハ束ナリ、一歩ニ此刈何握、十歩ニ何束、百歩ニ何十束、一段ニ何百束ト定、其束數ニ隨代銭永ヲ附ルナリ、亦其永ニ依テ石盛ヲ定ル也、譬バ一歩ノ刈三十握アレバ、十握ヲ一把トシテ三把ナリ、十把ヲ一拱トシテ、五尺尋（ヒロ）縄ニテ一束ナリ、仍テ三把ヲ今三百歩ニ乘ジテ九十束トナル、此九十束ヲ三ニ除キ、一ハ刈、

弓馬・鎗劍・書畫等ノ諸藝ヲ學ビ、日ヲ費シ年ヲ積デ、少シク其道ニ至レバ、自ラ君子抔ト交リ誇リヲ、能耕シ能織リ能商ヒ能工デ、各其産業ヲ守ル、良農良工商ノ者ヲ見テハ、卑夫野人抔ト欺キ謗ル族間々之アリ、罰スベキノ甚キ也、如レ此治世ノ御恩澤ヲ蒙リ奉テ、悲キコトヲ知ラズ、父母妻子安堵ニ撫育シ、子孫繁榮、人家相增シ、右ニ准ジ毎年田畑開發モ多シテ、古代ヨリハ貢租モ增ベキ所、却テ百四五十年以前ヨリハ、御收納高二三分通モ減ジタルヤウニ見ヘタリ、如レ此貢ハ少シ減ジタレド、御仁政ニモ相成ラズ、僞ル者ハ益僞リ、奢ル者ハ益驕リ、貪ル者ハ彌貪リテ富、正シキ者ハ貪ラズシテ貧シ、稅法ハ徹ルベキヲ取ラザレバ、民驕ニ長ジテ農事ヲ怠ルナリ、工商モ亦是ニ同ジ、諸品價ヲ高シテ多ク利ヲ貪リ、富メルト雖モ終ニハ神明ノ咎ヲ受、罰ヲ蒙テ火・盜・疾ノ害ニ懸リ、或ハ子孫ニ不孝不義ノ惡徒出テ、身ヲ亡シ家ヲ破ルノミニ非ズ、親類出店迄モ究迫ニ及ブ類多シ、故ニ當時ノ風俗ヲ見ルニ、小祿ノ知行所取箇ハ、格別往古ニ變ルコト無レド、諸侯モ慶長以來、永續ノ場所替無キ所ハ往古ニ等シ、數度國替ノ領ハ、ソノ時ニ地方役人ヘ賄賂ヲ以テ、納高ヲ書替後主ヘ渡サルユヘニヤ、其時々納高減ジタル所多シ、亦關八州ハ代官一在役、凡五ケ年ヲ規則トナシタルコトニテ、右手代ノ了簡ニテ賄賂ヲ取、格外ノ減高ヲ爲シテ、古來ノ半減タル所多シ、仍テ村役人モ右ニ倣ヒ、又私欲横領多シ、故ニ諸國ニ夫錢並ニ御取箇過米取立ノ出入訴事多シ、古ヘモ國政ハ必經界ヨリ始ルト云ヘリ、境界正シキトキハ贓吏行ハレズ、賦吏行ハレザルトキハ訟事少シ、是ニ仍テ之ヲ考ルニ、

見案内帳ニ、譬バ枡入一歩ニ秸一升八九合モ有ベキ所ヲ、五合毛、亦ハ四合毛ナドト、合毛少々毛揃帳ヲ僞リ作出コトナリ、是等ハ全ク上ヲ誣欺ノ邪計ニシテ、罰スベキノ甚シキナリ、慶長寛文度ノ檢見合毛帳ヲ見ルニ、一升毛、亦ハ一升三四合抔ト調記セリ、其心正直ニシテ、ソノ事明白也、故ニ其時代ハ收納米多シテ、御國用不足ナク、民質朴ニシテ、能農事ヲ勤メ怠ラズ、亦父母ノ葬禮、佛事供養等ニハ、其祿相當ニ力ヲ盡シタリト見ヘテ、時代ノ墳墓ヲ見ルニ、當時ノヤウニ輕薄ノコトニ非ズ、其祖ヲ祭ルコトノ厚キ故ニ、諸宗共何國ニテモ、宮寺ノ形勢其土地ニ應ジテ、相應ノ經營ナリ、然ルヲ當時ニ至テハ、農商共ノ私宅ニハ驕ヲ極メ、瓦屋根白堊ノ藏長屋ヲ立、或ハ冠木門、兩扉等ニテ軒ヲ高クシ、棟ヲ聳テ、其園ニハ渥ヲ穿チ、或ハ堤ヲ築廻シテ、堡塀ニ等シキコト、甚シキ驕奢ト謂ベシ、又商徒ハ身分ヲ辨ヘズ、別莊ヲ搆ヘ、或ハ數寄屋ヲ作リ、庭巒ヲ築キ、諸侯ニ等シキ奢ヲ爲セドモ、其祖先ヲ祭ルコトハ薄シ、故ニ宮寺ハ何處モ破壞シテ、修復造營モ行屆ズ、立朽同ヤウニ成所多シ、之ニ因テ天神地祇ノ御心ニモ叶ハザルニヤ、寒暑不順、風雨多シテ、年穀熟ラズ、漁獵等モ薄ク、山海迄モ德惠ノ少キヿ歎ズベキナリ、聖賢ノ教ニモ、民ハ愚タルベシ、以テ智ナラシムベカラズト、古ハ民ハ甿ト云フテ、其田亡ニ从プモノ、其亡ハ芒（スヽキ）ニシテ、民ノ頭ハ藁ヲ以テ髮ヲ束結タルモノユヘ、脫（ホグル）ル時ハ其象芒ノ如シ、然ルニ御治世二百餘年、太平ノ御恩澤ヲ蒙リ奉リ、國ニ干戈ノ聲ナク、家ニ犯シ掠ルノ賊無ク、四民鼓腹シテ、席ヲ安ジ枕ヲ高クシテ、心ヲ寧シ樂ヲ極ルユヘニ、農商共其身分ニ似ヤハザル碁・將棊・琴・笛・詩・歌・茶・花・蹴鞠・

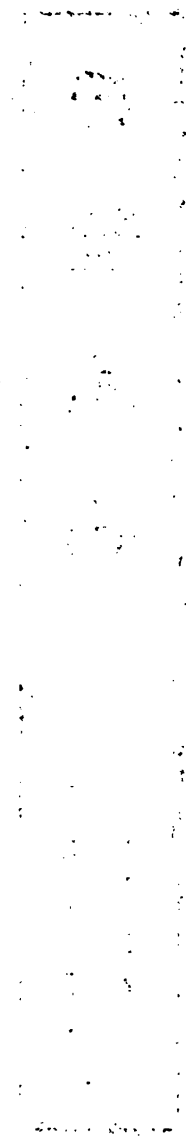
亦ハ用水不足シテ熟セザル歟、又最寄樹木生茂リテ木蔭懸リ歟、又水旱風ニテ割附ホドニ納メ兼ル所ハ取米ヲ下ゲ、亦新田ニテモ水懸能、土性立直リ、熟方能、本途ヨリモ勝ル所有、譬バ高一石ニ取米三斗ノ所モ、五斗ニモ取増ナリ、是等ヲ取増ト云、如レ此平均スレバ、田毎ニ得不得ナク、民ニ利不利ナク、能耕者ハ利多ク、怠リ不農ノ者ハ利少クシテ貧シ、此免振ノ法ハ、自然ノ悪シキニ免振シテ、怠農ニテ悪ニハ免振セズ、今諸國一統ニ此法ヲ用ヒズ、偶用ル所モ私有テ、貢米毎田ニ過不足アルユヘ、農利等シカラズ、其利多ノ地ヲ徳田ト唱ヘ、又安成ト云、利少キ地ヲ高免ト唱ヘ、又高成ト云、其高免高成ト唱ル地ハ、上田ニテモ勤メ耕コト能ハズ、荒地ト成也、財多者ハ安成地ヲ持、財乏キ者ハ高免地ト云所ヲ持也、故ニ安成ト云所ヲ持モノハ、農事ヲ勤ズシテ下作ニ預置、其利潤ヲ得テ富賑、財乏キ者ハ高免地ヲ持ユヘニ、勸農夫モ乏シ、是等ハ皆免振法無キ故ノコト也、如レ此所ハ、民農ニ怠リ商ニ走ルモノ多シ、因テ田ハ益荒地ト成、貢ハ古ヨリハ格別減タレド、窮民多シテ村柄宜カラズ、故ニ心有モノ、能ク免振ノ法ヲ用バ、年々貢モ増シ、村柄モ立直リ、農ニ怠リ商ニ走リテ、家出他嫁退散ノ者無ルベシ、此法ヲ用ヒザル故ニ、高免ト唱ル地ハ、勤耕テモ作徳少シ、貢夫役ヲ勤テ、其田ノ殘徳ニテ、耕手間代、糞代、收納ノ引當少キ故ニ、地所ハ村方ヘ差出テ、其身ハ退散爲ル者多シ、是等ノ地所ヲ都テ高免地トノミ心得タルハ、地方ニ拙キ故也、右ヤウナル村々ニハ必隱田有テ、又背負高モアリ、地所不平均ニシテ、贓吏ノ族、貪欲奸曲ノ徒ニ致タルコトニヤ、検見・合毛揃・内

モ亦同法ニシテ、方三十六間、高七丈二尺、上壇ノ方十二間ノ築山ナリ、其山名比文ニシテ知ル人ナシト見ヘタリ、古ハ王公此壇ニ登テ、縣邑ノ耕田、禾熟ノ善惡、民屋ノ形勢ヲ眺望ナシ玉フモ、則今世檢見遠見ノ類也、民屋四壁ノ竹木繁疎ヲ見テハ貧福ヲ知リ、家宅ノ荒タルヲ見テ乏ヲ知リ、衣ヲ飾ラザルヲ見テハ、質朴ニシテ能農事ヲ勤ルヲ知リ、美麗ヲ好ヲ見テハ、怠リ驕ヲ知テ、其里ノ貧福盛衰寂賑ヲ知テ徹ルナリ、故ニ定免ハ止事ヲ得ザル時ノ略法也、亦年々豐凶ニモ仍ラズ、前十箇年ヲ平均シテ民ノ農不農ヲ知テ、賞罰ヲ行フハ良法ニ非ズ、豐年ニハ民飽キ、凶年ニハ民苦ム、故ニ平均ノ良法ニ非ズ、亦檢見ニモ色取トテ、坪刈ヤウモ大略ニシテ、前年ノ振合ニ隨ヒ、取箇ヲ定ルコトアリ、此等ノ法行ハレテヨリ、檢見法麁末ニナリ、遠見ニテモ濟ムベキヤウニ心得ルナリ、亦切出シト云フテ、其耕地ノ内ニテ最上ノ出來宜キ所ヲ見立、坪刈爲ルヲ嚮レノヤウニ心得ルモ有ナリ、是皆地方ニ拙キナリ、禾ニ養作アリ素作アリ、惡水懸有、素水懸アリ、田ニモ水口有、水末アリ、水口ハ作毛能、流末ハ惡シ、平均ノ法ハ中央ニ因ルコトナリ、故ニ耕地毎ニ叮嚀ニ見廻リ、坪刈合毛、平均過不足ナキヤウニ税法ヲ定、其土地ノ風俗ヲ見テ農不農ヲ知リ、法度ヲ嚴明ニシテ農人ノ倦怠ヲ誡シメ、驕奢ヲ制シ、勸農ヲ賞シ、懈農ヲ罸シテ、民ヲ善道ニ教化スルヲ檢見ノ大要トス、故ニ上ニテハ其耕地ヲ平均シテ取ヲ定メ、下ニテハ其税法ニ隨ヒ、其耕地毎ニ其ノ田ノ出來不出來ヲ巨細ニ見、平均シテ取ヲ附ルナリ、是ヲ免振ト云フ、其法譬バ本途ノ取箇、高一石ニ付五斗ニ當ル所モ、其田ノ土性變リテ惡ク成、

經國本義

三木廣隆 述
山田勝理 筆記

檢見法之事

田畑夏秋ノ立毛ヲ見テ坪刈舂法シ、其合毛ヲ試テ年ノ豐凶ヲ知リ、稅法ヲ定テ民ノ農不農ヲ知リ、賞罸ヲ正シク爲スヲ檢見ノ要法トス、徒ニ立毛ノ多少過不足ヲ知ルノミニ非ズ、則巡狩ノ法ニ同ジ、故ニ皇國神武ノ御法、大和ニ三封疆アリ、其一ニ天畝傍山（アマノウネビ）、其二天耳無山（アマノミミナシ）、其三天嗅山（アマノカグ）、此三山ハ皆畝方三十六間、高七丈二尺、上壇ノ方十二間宛ノ築山ナリ、其義畝（ウネ）ノ傍ニアレバ、（畝ハ方十間、此歩百歩、畝ハ方六間、此歩三十六歩、）先方視ヘズ、耳無キ時ハ聞ヘズ、香ヲ嗅グ時ハ口ヲ塞ギ、鼻ヲ呼吸ス、因テ言ハズ、則是三猿ナリ、亦寧樂（ナラ）ノ都ニモ此三山有リ、天ノ神垣山・天ノ袖振山・天ノ手向山、是モ亦垣ノ内ニテハ外視ヘズ、袖ヲ振テ諸ハザルノ義ニシテ聞ヘズ、亦神ニ供物ヲ捧ル時ハ、覆面閉口シテ言ハズ、是レモ亦前ト同義ニシテ、禮ニ所謂「前後邃（フカクス）レ延（チ）、前有二垂旒一、示レ不二邪視一也、傍有二紘纊（キイロキワタ）一、示レ不レ聞レ讒也、前低後伏示レ恭也」之モ其延ハ音、猿ニシテ三猿ノ義也、亦武總二國ノ境、菫田川（スミレ）ノ上ニ眞乳山ト云封疆アリ、之レ

經國本義

三木廣隆述
山田勝理筆記

井田附言終

故ニ其法傳ハラザルヲ以テ狐疑ヲ生ズル者多カラン、若シ予ガ述ル所ヲ以テ疑心有バ、附言ニ述ル所孟子潤澤之法ヲ以テ圖スル所之法ニ從ヒ、和州ニ往テ天皇之埋メ玉フ井畫ヲ逐田圖ニ造リ、以テ是ニ合觀シテ其少差ナキ事ヲ知ルベシ、其傳タルヤ三代聖王之秘法、本朝天皇之神秘成ヲ以テ故ニ附言ニ載セズ、「孔子曰、我非﹅生而知﹂之者﹅、好﹂古敏以來﹂之者也

文政五壬午年春三月

三木量平謹述

ヨリ以還維ヲ研究スルニ、廣ク諸州ノ遺法ヲ温ネ、其正ヲ取元トシ、勘考シテ辛巳ノ年秋八月門人之求ニ應ジ初テ地方春秋ヲ述、然共地方ハ國家之大要、故ニ他ニ不レ出、同十月南總ニ遊ブ、亦門人書ヲ送テ曰、今絕タル井田之圖說、勘考シテ其基ヲ開カバ國家之大寶ナラン、嗚呼二千餘年和漢井法ヲ說人ナキハ地方ヲ知ラザル故也、性敏博覧タリ共事實ヲ知ラザレバ、温古之術ヲ以推明圖解ヲ爲ン事難シ、夫地方ハ國家之大要タルヲ知ラザル故ニ、年々歳々事實ハ失テ紙上糟粕ノ論ノミ殘リ、其原ヲ知ルモノナシ、强メ考正有ン事ヲ請フ、幸田舍之閑靜ニ因テ、今年壬午之春經年温ル處ヲ以テ還元ノ術ニ從ヒ、前ニ造ル處和州逐田之圖ニ校考スル事晝夜七十日余ニシテ、孟子說ク所之井法ヲ以テ先生之言ニ隨ヒ、徵ヲ詩書ト亦日本紀ト春秋左氏傳トニ取リ、圖ヲ神武天皇之理ル處之井畫ニ效テ其正法ヲ得タリ、熟實圖ト其數トヲ稽ルニ、自然之成數也、因テ聖賢之說ク所附言ニ述ル處ノ法ヲ以テ、之ヲ井法ニ比テ研究スルニ、悉ク其正ヲ得ザル事ナシ、然共其道ノ洪大成ニ至テハ、今爰ニ盡ク明ム事難シ、故ニ其得ル所ヲ以テ之ヲ錄ス、未其得ザル處ハ後日校正シ之ヲ述ン、然共孟子ヨリ以還二千餘年、後人モ之ヲ知ル事不能、本朝正史ニ其道ヲ載ルトイヘドモ、秘言ニシテ其文意ヲ知ル事難シ、

予少ナリシ時白華先生ニ從ヒ論孟詩書ヲ學ブ、是レヲ讀事五六十ニシテ漸ク覺ヘ、其月ヲ過ルニ逮デ先ニ學ブ處ヲ失ス、先生ノ曰、爾ガ性理ニ敏シテ學ニ鈍シ、夫先王ノ道ハ詩書ニ存ス、故ニ孔孟之道ヲ說ク事詩書ヲ以テ徵トス、然共是ヲ讀事溫クシテ、其誦スルニ非レバ其意ヲ知ル事不能、因テ古人詩ヲ誦スト云リ、以テ數百ニシテ誦スル事ヲ得ベシト、予性果ヲ好ム、其强シテ讀事ヲ欲セズ、產業素ヨリ治水墾田ノ任タルニヨリ好デ禹貢ヲ讀ム、長ズルニ及デ家ニ秘スル處ノ道ヲ學バン事ヲ請フ、父ノ曰、其漫ナラン事ヲ畏ル故ニ許サズト、享和二壬戌年秋八月家法ヲ傳フ、其目一曰地方之三寶、二曰九上之定位、三曰東貫石之三法、四曰稅賦庸調之法、五曰五衞術（其一曰還元術、其二曰正名術、其三曰觀察術、其四曰跬步術、其五曰掌握術）六曰五繪圖（其一曰鄕村耕地、其二曰逐田宅地、其三曰山岳叢林、其四曰邦國制賦、其五曰跬步軍陣）七曰推步切判術、其余之支術ヲ學ブ、維ヲ以テ甲斐州ニ存スル所之地方ニ琢磨スル事數年ニシテ、眞正ヲ得ル事多シ、文化九壬申之年春正月東京ニ來リ某知音之宅ヲ主トス、癸酉年兩總ニ遊ビ、村老ノ用ル處疆理・石斗・徹毛・戶帳等ヲ觀テ、北條家地方之扈漏且ツ國人耕耨之法疎成ヲ知ル、甲戌之年某家ノ食邑大和葛下郡大田村ニ役シテ逐田圖ヲ造ル、其村タルヤ文祿四乙未年豐臣家之治理也、然共今其田圃無位無段別ニシテ、更ニ主トスル所ナシ、皆村長ト奸族トノ爲ス所也、故ニ傳ル所之法ヲ以テ之ヲ推步シテ、悉ク其古ニ復シテ豐臣家之制法ヲ知ル、亦其圖タルヲ觀察スルニ、吾聞ク所之井畫也、因テ奇トシテ其國存スル所ノ遺跡ヲ里老ニ溫テ、其名ノ徵トスベキ者ヲ得ル事七八、同年十月東京ニ歸スルノ時、某家之食邑三州八幡之在蓬牛村ニ往テ、其

代井法ノ圖解ヲ詳ニス、然共井法ハ孔子モ其位ニ在ザルヲ以テ説カズ、孟子・梁惠・滕文之君ニ說トイヘ共、其辭ヲ盡サヾルハ其法ヲ秘スル也、亦本朝之正史ニ深秘シタルヲ鑑ルニ、妄ニ說ベキ道ニ非ル也、今關東苗代之古法ヲ知ラズ、之ヲ甲信ノ法ニ比ルニ畊ニ七升余ヲ費ス、之ヲ平均シ見ルニ、年ニ種穀ヲ費ス事二十萬石ニ充ツベシ、亦磁基ニ乏シ、因テ無益ノ人力ヲ勞ス、亦諸作養方拙シ、故ニ田ヲ墾キ稼稷ヲ播種シ、維ヲ耕シ維ヲ耘シ、維ヲ培シ維ヲ銍シ、維ヲ收テ以テ維ヲ納メ、庸調ヲ勤メ、入テハ以テ其父兄ニ事リ以テ其妻奴ヲ愛シ、出テハ以テ其父老ヲ敬ヒ以其親族ヲ睦ス、其孝悌之道ハ以テ國人ニ說ベク、囿ニ射シ泮ニ游シテ、以テ其身ヲ脩其防疆ニ據リ、進デハ以テ敵ヲ討ベク、退テハ以テ守リ衞ベク、上ハ以テ其君父ニ事リ、下ハ以テ其百姓ヲ惠ベク、其宗廟祭祀ノ如キハ以テ士大夫ニ說ベク、井法ヲ以テ經界ヲ正シ、士ハ守ッ、農ハ耕シ、工ハ造リ、商ハ賈シ、各正名ヲ以テ其國ヲ富シ、是ニ加ルニ仁政ヲ以シ、武衞ヲ張テ以テ封疆ヲ固シ、其社稷祭祀之如キハ諸侯ニ說ベシ、其余ハ王者之道ニシテ秘スベキ事也、夫三代之隆ナリシハ井法ノ行ハレシヲ以テ也、其井法ヲ行フ時ハ隆ニ、其井法ヲ廢スル時ハ衰フ、周之季ニ及デ井法行レズ、故ニ英雄割據シ、諸侯迭ニ其封疆ヲ侵シ、攻伐止時ナシ、上ニ君臣ノ義ナク、下ニ父子ノ禮ナシ、故ニ孔子之聖トイヘ共世ニ容レズ、是其井法ノ廢タル故也、是ヲ以テ之ヲ觀ル時ハ、維ヲ如何カスベキ、唯此道ノ絕セム事ヲ畏ル、因テ密ニ是ヲ錄シヲ以テ需ニ天命ニ矣

列スルナリ

維本朝其法ヲ秘スル事文意皆斯之如シ、是ヲ以テ世ニ所謂ル國學ヲ唱ルモノ、其古ヲ知ラザル故ニ今ヲ知ル事ナシ、其國名ヲ說キ其事實ヲ說ガ如キハ、己附會之說ヲ爲テ人之耳目ヲ迷ハシ、其餘殃千歲之後ニ逮ス、賀茂之眞淵、伊勢之宣長ガ類是也、易ニ曰、「各正ニ性命一、保ニ合大和一」ト、夫大和之名タルヤ理無ニ舛逆一、事無ニ乖戾一、乃天下達道、故曰、大和、由レ是觀レ之、則大和之國名、以レ易爲レ原也、故名ニ其臣一曰レ命矣、亦其流ヲ汲モノ其支ニ遊デ其本ヲ知ラザル故ニ、古言ヲ覓テ徒ニ文ヲ綴リ歌ヲ詠ズルヲ以テ指トシ、其心ヲ正シ其身ヲ修メ邇クハ是ヲ家ニ及シ、遠クハ之ヲ天下ニ及ボスルノ道、神武天皇之教有事ヲ知ラザル也、孟子ハ井法之絕ン事ヲ悲ミ、梁惠・滕文之君ニ說ニ井法ヲ以ス、然共士大夫ノ爲ニ說カズ、維レ孟子モ亦法ヲ秘スル也、故ニ孟子以後井法ヲ說ク者ナシ、杜預ガ左傳ノ註ノ如キモ、其辭ヲ說ガ如キハ可ニシテ、其制度事實ヲ說ガ如キハ失有、然ニ文儒其井法ヲ不レ知ヲ愧ト思ヒ、却テ井法ヲ誣ル者多シ、亦市儒妄ニ奇ヲ好デ聖門ノ正法ヲ破ル、其仁義ヲ講ズルガ如キハ、實ニ矛ヲ借テ主人ヲ討也、孟子若シ井法ヲ說カザル時ハ、後世三代ノ制度ヲ知ルモノナカラン、今三代之制度之遺リタルハ實ニ孟子之賜也、然共孔門傳授之五術傳ハラザル故ニ、孟子以來二千年余井法ヲ說ク者ナシ、古法ノ漢土ニ亡シテ本朝ニ存スルモノ多シ、今井法並ニ五術之傳リタルハ實ニ神武天皇之洪德也、予不才ニシテ文辭ヲ好マズ、唯家ニ傳ル所ノ地方還元之術ヲ以テ、本朝之古法ニ隨ヒ三

代ニシテ一識ス、故ニ更也、粹也、亦苗田是ヲ苗代ト云事、代ハ苗代ナリ

三嶋溝橛耳神之女　三ハ陰陽和合ノ數也、詩大雅噫嘻之章曰、「駿發ニ私田一、終ニ三十里一、亦服ニ爾耕一、十千維耦、」周禮曰、「凡治ニ田野一、夫間有レ遂、遂上有レ徑、十夫有レ溝、溝上有レ畛、百夫有レ洫、洫上有レ涂、千夫有レ澮、澮上有レ道、萬夫有レ川、川上有レ路、計此萬夫之地方三十三里小半里也、耜廣五寸、二耜爲レ耦、一川之間萬夫、故有ニ萬耦一耕」ト、耜廣五寸ハ當レ爲ニ六寸一、書寫之誤ナラン、又周禮之說モ王制ト同ク附會多シ、然共是ヲ辨ズル時ハ、其說長キガ故ニ爰ニ載セズ、耕ハ圖ニ明カ也、嶋ハ島之俗字、海中之國ヲ島ト云フ、亦三島ハ三萬夫ニ譬タル也、一島ハ方三十三里、小半里ハ今之六町也、川河四方ヲ繞フ、故ニ島ニ比スル也、和州ニ三島有、故ニ三封疆有、其一曰ニ畝傍山一、其二曰ニ耳無山一、其三曰ニ香久山一是也、何レモ方六十間、是ヲ三山ト云フ、香久ハ嗅ニ通ルベシ、曰嗅ハ言ハザル也、人嗅スル時ハ閉ロス、是象義ヲ以テ比スル也、溝ハ田溝也、畍ニ通ズルモノヲ遂ト云フ、遂ニ通ズルモノヲ溝ト云フ、橛ハ杙也、溝洫ヲ補理スルノ具也、耳ハ柔ニ從フモノ水ヲ治ル事ハ柔ニスルニ有、剛成時ハ其性ニ逆フ、故ニ激ス

玉櫛媛　玉ハ陽精之純也、其美成ヲ言フ、櫛ハ髮ヲ梳束スルノ器也、詩大雅良耜之章ニ曰、「其比如レ櫛、以開ニ百室一」ト有、亦鐵齒ハ田ヲ磨著スルノ器也、其象櫛ニ似レルヲ以テ是ニ比ス、媛ハ枝相連引也、即チ孕レ子ノ原也、稼之釆ヲ孕穀ヲ熟スルノ義ニ執テ譬トス

媛蹈鞴五十鈴媛　蹈鞴ハ棄觜之類、韋囊ニシテ火ヲ吹、鐵ヲ煉ルノ器也、其蹈鞴ニ兩意有、其一曰、蹈鞴ハ鐵ヲ煉リ、鎡基ヲ作リ、水ヲ治メ、田畝ヲ開ク也、其二曰、又蹈藉躬親ラ耕ヲ以テ稱トス、又藉ハ借也、民力ヲ借テ田ヲ開クヲ云フ、是義以テ譬トスル也、五十ハ井一畦、廣一町長二町也、內ニ五十畝ヲ納ム、孟子ノ所謂夏后氏ハ五十ニシテ貢ス是也、鈴ハ鐸ニ似テ小サク、形圓ク半裂ニシテ聲ヲ出ス、銅珠ヲ內ニ錮シテ以テ是ヲ鳴ス、郵卒ノ帶ル所、即チ驛路之鈴是也、所謂償郵也

國色之秀者　國ハ畿外之郡名、畿外前後左右五百里ヲ邦ト言、亦邦外五百里ヲ國ト言、亦國外五百里ヲ郡ト言フ也、內ニ含ムモノヲ氣ト云、外ニ發スル物ヲ色ト云フ、國色ハ美色也、則チ土色、亦禾熟之色、是ヲ國色ト云、秀ハ美也、禾吐レ華曰レ秀

命　命ハ易ノ乾象、「各正ニ性名一、保ニ合大和一、乃利レ貞也」ト有、士ハ貞ヲ以テ主トス、貞ヲ失スルハ士ニ非ズ、故ニ士ニハ命ヲ以テ名トス、亦貞ハ正也、士ハ貞正ナルハ賢也

九月壬午朔己巳納ニ媛蹈鞴五十鈴媛命一以爲ニ正妃一　納ハ容也、禹貢ニ曰、「百里賦納總」ト有、九月禾熟ス、刈テ以テ納ルナリ

尊ニ正妃一爲ニ皇后一　尊ハ宗也、夏商皆妃ト稱ス、周始立レ后、以ニ正妃一爲ニ皇后一ハ、上中下之九位ヲ定ル也、此所兩義有、一ハ井界ヲ定ルニ執リ、一ハ皇后ヲ立ツルニトル

神八井命神渟名川耳尊　井ハ八夫之耕ス所、亦汲井也、渟ハ水止也、是ヲ先天之氣ニ譬フ、陽精止テ女孕ム、水ハ陽精之純成モノ、故ニ易ニ天一ト有、一ハ水ナリ

紀曰、天皇二年春二月甲辰朔乙巳、頭八咫烏、亦入ニ賞例一　頭ハ首也、古黎ヲ呼テ黎首ト云フ、黎ハ黑木之名、民首ノ黑キヲ以テ黎首ト云フ也、烏純黑成故烏ヲ以テ稱トス、一井八家有、亦八寸ヲ咫ト云フ、字八口尺ニ从フ、數象ヲ以テ之ニ比スル也、烏亦陽烏也、故ニ易乾爲ニ烏人一ハ陽精之長也、因テ義ヲ以テ烏ニ比ス、烏亦反哺之養有ヲ以テ人之孝養ニ執也、亦渇烏ハ引水之器其形方ニシテ左右ニ引水口有、前ニ二ツノ吐水筒有、內ニ二ツノ蹈鞴有、左右更ル昂低シ、更ル水ヲ吸、更ル水ヲ吐ク、養田之要器也、田ハ遂ヲ以テ求本トス、故ニ渇烏ヲ以テ之ニ比ス、入ハ出ルノ對、納ル也、亦加ル也、亦賞ハ有功ニ賜フ也、墾田ノ功有ヲ以テ賞ヲ賜フ也、例ハ類ナリ、各其類ヲ以テ

ガ如シ、忠ハ其心中心ニシテ外**苟有レ利レ民**苟ハ誠也、里仁ニ「子曰、苟志ニ於仁一矣無レ惡也」ト有リ苟ハ草ノ句也、草土中ヨリ出ル時
心無ナリ、故ニ義有ル者ハ思有ハ句也、故ニ苟芒ヲ以テ苟神トス、利ハ宜也、井法ヲ以テ正ス時ハ、務テ得ルモノ是ヲ利
ト云フ、鋤田シテ藝熟稼ス、其熟スル時銍ヲ以テ禾ヲ刈ル、故ニ字**恭臨ニ寶位一**恭ハ敬也、商書ニ允恭克讓ルト身心共ニスル事也、故
禾ニ从ヒリニ从フ、民ハ人之總名、士・農・工・商是ヲ四民ト云フニ諡法ニ執事堅固成ヲ恭ト云フ、放心ハ恭ニ非ズ、臨
ハ上ヨリシテ下ヲ臨也、詩邶風ニ「日居月諸、照ニ臨下土二」ト有、君臣之人品ヲ觀ル也、寶ハ符璽也、故ニ詩大雅「崧高曰、錫ニ爾介圭一以
作ニ爾寶二」ト有、从レ王从レ貝从レ缶从レ宀ハ内ニ納ムベキ之義也、位ハ易ノ繫辭曰、「聖人之大寶曰レ位、」位ハ正也、衆人ノ上ニ立者也、是
ヲ位ト云フ、故ニ列也、其立ベキ所有テ立也、故ニ**以鎭ニ元元一**鎭ハ安也、元ハ原也、諡法「始建ニ國都二曰レ元、」亦井法ヲ以テ是ヲ正
舜典曰、「玄德升聞、乃命以レ位」ト有、寶位ハ帝位也ニス時ハ、天ニ在テハ元ト云、地ニ在テハ亢ト云ヒ、男女ニ在テハ夫
ト云、人ニ在テハ仁ト云、是ニ因テ觀ル時ハ、以鎭ニ元元一トハ地ヲ治メ民ヲ安ンズル也、堯典曰、「放勳欽明、文思安安」ト
有、安國ガ曰、「安ニ天下之當レ安者二」ト云リ、亦三元ヲ定ルヲ言フ、亦曰、「欽ニ若昊天一曆象日月星辰、敬授ニ人時二」トアリ**乾靈**乾
天ナリ易ニ「乾爲レ天」ト有、靈ハ神也、陽氣**德**德ハ諡法「綏ニ柔士民一曰レ德、執レ義揚レ善曰レ德、」亦井法ヲ以テ是ヲ正ス時ハ、不レ求シテ自
昔ヲ精ト云、陰氣ヲ靈ト云フ、所謂神祇也、然ニ至ルモノ是ヲ德ト云フ、十目矩ヲ以テ視ル、正成時ハ直也、故ニ字从レ十、从レ目从
乚、从レ心、从レ行、心行正直成ハ德也、心行正直ハ天之道也、心行天道ニ合スル時ハ、**正**正ハ君也、又政ト同ジ、諡法ニ「内外
嗣不レ求シテ至ル、是ヲ國人ニ布ク時ハ、令セズシテ行ハル、故ニ是ヲ德ト云リ賓服曰レ正、」所謂法ニ偏黨ナキナリ**掩ニ八紘一**
而爲レ宇掩ハ蓋也、「亦日下乘ニ其不レ備而覆上之、」曰掩ト有、八紘、紘ハ綱紐也、淮南子曰、「九州之外**畝傍山**畝ハ田畝也、方六尺ヲ步
乃有ニ八貪、八貪之外乃有ニ八紘二」貪亦維也、宇ハ天地四方ヲ謂フ、亦屋ノ四垂ヲ宇ト云トシ、步百ヲ畝トシ、十
畝ヲ畮トシ、三畮ヲ畹トシ、五畮ヲ畦トシ、二畦ヲ順トシ、九**橿原**橿々ハ多士强盛ナル也、亦橿ハ鋤ノ柄也、亦木之名、萬年木也、
順ヲ井トシ、十井ヲ通トシ、十通ヲ成トス、傍ハ近也、倚ナリ萬年之義ヲ執テ地名トス、亦疆ハ封疆也、方三十三里小半里ニ
シテ封疆有、疆ハ防之名、封ハ丘壟也、封疆之廣十間、壟ハ方六間、封ハ方六十間、后稷ヲ祭ル冢也、一疆ニ一封有、亦野疆
ト同ジ、周禮「以ニ大都之田一任ニ疆地二」ト有、原ハ土地寬博ニシテ平正成ヲ言フ、即今之曠野也、亦元也、日ニハ其元ト云フ義也**墺區**
乎墺ハ地之水涯ニ近キ所ニシテ、四方士居ルベキ也、又夏書「四隩**命ニ有司一**命ハ口令也、**庚申年**庚申ハ天皇開井之年也、農家祭、
既宅、墺與レ隩同ジ、區ハ丘城也、亦阜也、亦田丘爲ニ田區一也令ハ使令也庚申祭文ニ曰、「播兮播兮、庚申
講、播兮播兮、庚申講」ト云リ、播ハ即チ禾稷ヲ播也、亦本朝庚申ヲ祭ルニ三猿有、國言申ヲ左留ト言ヒ、又猿ヲ左留ト言ヒ、又不ヲ
左留ト詢ル、是比以デ象トシ、義以テ譬トスル也、其一曰、視ザル、其二曰、聽ザル、其三曰、言ハザル、是即チ比以テ象トスル
也、亦冕前ニ垂旒有、邪視セザルヲ示ス也、旁ニ黈纊有、讒ヲ聞ザルヲ示也、前垂後俯ハ恭ヲ主ル也、恭ハ肅敬也、多言ナルハ恭
ニ非ズ、故ニ「孔子曰、君子不レ重則不レ威」ト、是恭ヲ示ス也、則言ハザル也、是義以テ譬トスル也、亦禮玉藻曰、天子十二旒、前
後延ヲ遂フス、延ハ冕上之覆也、表玄ニシテ裏纁也、亦猿貌玄クシテ臀纁シ、是色ヲ以テ類ニ比スル也、纁ハ天地之**正妃**正ハ定
正色也、赤黃是ヲ纁ト云フ、亦猿之性解緩也、易坤曰至靜ニシテ德方也、緩ハ寬也、亦猿ト延ト同音故ニ祭成ベシ也、妃
ハ配也繼**華冑**冑ハ胤也、裔也**事代主神**事ハ世務也、大成ヲ政ト云、小成ヲ事ト云、紀綱法度ヲ政ト云ヒ、動作云爲ヲ事
世ノ具也華冑ハ美種ナリト云フ、亦營也、治也、代ハ氣也、亦七十二之數ヲ代ト云フ、一代ハ一氣也、五

政ニ[ト]、聖言禁誡之深キ事斯ノ如シ、亦本朝日本紀ヲ見ルニ、義ヲ以テ之ニ比シ、象ヲ以テ之ニ比シ、類ヲ以テ之ニ比シ、假ヲ以テ之ニ比シ、音ヲ以テ之ニ比シ、信ヲ以テ之ニ比シ、後世讀者ヲシテ安ク其義ヲ諭ラザラシム、是其法ヲ秘スル事顯明也、此ヲ以テ今日本紀ヲ解スル者希也、故ニ其經文ヲ錄シテ其傍ニ抽キ解ヲ加テ、并法之深秘ヲ述ル也

日本紀卷三　神日本磐余彦天皇稱ニ神武天皇一

紀曰、民之朴素、巣棲穴住、習俗惟常、夫大人立レ制、義必隨レ時、苟有レ利レ民、何妨ニ聖造一、且當下披ニ拂山林一、經ニ營宮室一、而恭臨ニ寶位一、而鎭中元元上、上則答ニ乾靈授レ國之徳一、下則弘ニ皇孫養レ正之心一、然後兼ニ六合一以開レ都、掩ニ八紘一而爲レ宇、亦不レ可乎、觀ニ彼畝傍山東南橿原地者一、蓋國之墺區乎、可レ治レ之、是月即命ニ有司一、經ニ始帝宅一、庚申年秋八月癸丑朔戊辰、天皇當レ立ニ正妃一、改廣求ニ華冑一、時有レ人奏曰事代主神共ニ三島溝樴耳神之女玉櫛媛一所レ生兒、號曰ニ媛蹈韛五十鈴媛命一、是國色之秀者、天皇悅レ之、九月壬午朔乙巳、納ニ媛蹈韛五十鈴媛命一以爲ニ正妃一、辛酉年春正月庚辰朔、天皇即ニ帝位於橿原宮一、是歲爲ニ天皇元年一、尊ニ正妃一爲ニ皇后一、生ニ皇子神八井命・神渟名川耳尊一、故古語稱レ之曰、於ニ畝傍之橿原一也

神日本ナリ 神ハ明 磐余 磐ハ大石也、荀子曰安ニ磐石一、義ヲ安ニ執ル也、余ハ語之舒也、又我也 彦天皇 彦ハ美士也、尚書旁ク俊彦ヲ求ムト有 立制 立ハ建也、置也、制ハ正也、法禁也、初ト同意、裁衣也、衣ヲ裁チ是ヲ縫ヒ服トスル也、

故ニ在テ是ヲ數ル[illegible]也 義必隨レ時 義ハ宜也、其心ヲ曲ザル也、故ニ忠也、羊ハ群ヲ好デ、一羊之向ノ方ニ向ヒ衆羊方ヲ異ニセズ、人モ其心ヲ曲ズ外心無時ハ人是ヲ信ズ、信ズル時ハ群ル、故ニ義之有所ハ人是ニ歸スル事羊之群ヲ爲

レ原也、泳游方舟之法、以二泮法一爲レ原也、塔櫓垣墉之法、以二埒法一爲レ原也、軍旅隊伍之法、以二廩法一爲レ原也、攻伐防禦之法、以二夫法一爲レ原也矣、此其大略也、總國家有用之要法、悉以二井法一爲レ原也、」故ニ「孟子曰、夫仁政必自二經界一始、經界不レ正、井地不レ均、穀祿不レ平、是故暴君汙吏必慢二經界一、經界既正、分田制祿、可二坐而定一也」ト、之ヲ以天下ニ行フ時ハ、人心正クシテ孝悌忠信ヲ知ル、之ヲ邦國ニ行フ時ハ、國ヲ富シ兵ヲ强シ、武衞ヲ張ルノ要法也、故ニ孟子ノ曰、「地方百里、而可二以王一」ト、地方百里ハ今之十六里二十四町也、然共地ヲ理ル事井法ニ因ル時ハ、水旱之愁ナク地性立直リ、薄地モ厚地ト成、故一彊理方三十三里小半里ハ今之方五里二十町ニシテ二萬夫ヲ養フ、其一夫之耕田今之段別ニ比スレバ一町六畔六畝二十歩ニ當ル、故ニ今之農戶ニ比スル時ハ一夫ハ三戶ニ充ツベシ、然ル時ハ農家六萬戶ニ充ツベシ、今五畿內之高田畑上中下平均シテ、今之一段今之一石五斗ニ當ル、此高ハ本高故ニ貢米一石五斗ヲ納ル、關東ニ比スレバ五斗取ノ三石ニ中ル、本朝弘仁中四段歩ヲ以テ一戶トシ、其高十石今ノ四段八畝也、式ニ因ル時ハ六十二戶半ニ當ル、甲・信・駿ハ四十六戶八分七厘五毛ニ中ル、兩總ハ三十一戶二分五厘ニ當ル、故ニ五畿內六萬九千四百四十四戶四分四厘四毛ニ中ル、此國家之大要也、故ニ「孟子曰、夫天未レ欲レ平二治天下一也、如欲レ平二治天下一、當二今之世一、舍レ我其誰、吾何爲ニ不豫一哉、」是ニ由テ之ヲ觀ルニ、孟子之時ニ當テ天下井法ヲ知ル者ナシ、井法ヲ知レルハ孟子一人成事明也、士民ニ知ラスベキ法ニ非ズ、是ヲ以テ孔子ハ不レ說、故ニ「孔子曰、不レ在二其位一、不レ謀二其

耦ハ耒ニ从禺ニ从ブ、耒ハ耜也、禺ハ田ニ从、内ニ从、内ハ獸足蹂地也、合テ禺トス、禺ハ遇、偶ト同意、「不ㇾ期而倶至也、」亦易ニ陽卦ヲ奇トシ、陰卦ヲ耦トス、耦ハ比也、耦耕ハ則チ並耕也、是ニ由テ之ヲ觀ル時ハ、十千耦ハ其夫二萬夫成事明也、然ニ是ヲ萬夫ト云ハ、一萬夫ハ其防疆ヲ守リ、一萬夫ハ其軍役ヲ勤ル故也、其出役一萬夫成ヲ以テ此ヲ萬夫ト云也、夫井法ハ天地自然之成數ニ因テ先王是ヲ爲ル、故ニ治水開田之法ノミニ非ズ、天地之間有用之法悉ク井法ヨリ出ヅ、因テ二代トイヘ共度量衡ヲ革ルノミニシテ、畫井ヲ革ルニ非ズ、其徵トスルハ神武天皇之理メ玉フ井畫ニ因テ知ルベシ、田ハ地理勢脈ニ隨テ墾クモノ故、平地ハ悉ク井法ニ從ヒ作レ共、山際林間亦ハ山側水涯ニテモ、其地高下有所ハ、法ヲ井法ヲ取テ其形容方正ノミニ拘ラズ、或ハ方、或ハ斜、或ハ長、或ハ短、或ハ圓、或ハ歪、然共阡陌・溝洫・澮・洛・道路・疆理ハ其方正ヲ主トス、若其地ニ臨デ悉ク式ニ當ラザル所ハ、彼ヲ以テ是ニ代ルノ法有、故ニ「孟子曰、若夫潤二澤之一則、在二君與一子矣」ト言リ、精クハ天皇井畫之地ニ因テ觀ルベシ

夫規矩準繩者、天地自然之正器也、井田之法、以二規矩準繩一爲ㇾ原也、治水開田之法、以二井法一爲ㇾ原也、仁義禮智之道、以二夫法一爲ㇾ原也、君臣父子之道、以二井法一爲ㇾ原、貢稅庸調之法、以二井法一爲ㇾ原也、賞善罸惡之法、以二井法一爲ㇾ原也、堠堡城廓之法、以二塹法一爲ㇾ原也、隍減溝池之法、以二汙法一爲ㇾ原也、社稷祭祀之法、以二壟法一爲ㇾ原也、置郵傳命之法、以二涂法一爲ㇾ原也、射御之道、以二圃法一爲

ハ今之六寸ヲ以テ一尺トシ、三尺六寸ヲ以テ歩トス、故ニ唐之百畝ハ今之方六十間也、外ニ町ニ五間ヲ加テ阡陌溝洫之部トス、因テ地ヲ畫スルニハ三尺九寸ノ間ヲ用ユ、此平積一萬歩也、百歩ヲ畝トシ、千歩ヲ段トシ、萬歩ヲ町トス、畝ハ本朝之三十六歩、段ハ三百六十歩、段ハ畘也、町ハ顚ニ當ル、本朝弘仁中李唐ニ效テ三十六歩ヲ以テ畝トシ、三百六十歩ヲ段トシ、三千六百歩ヲ町トス、周禮段氏爲ニ鎛器一、鎛ハ迫地去レ草者、即チ田器也、畘段音同、故ニ段ヲ以テ畘トス、李唐之井畫ハ今之三町ニシテ、町ハ今之六十五間也、方三町ヘ十五間ヲ加テ阡陌溝洫トス、精ハ傳ト圖解トニ明也

孟子之所謂夏后氏之五十畝ハ、一畦之內畹・畘・遂・畎之部ヲ除キ、廣五十間長百間、此耕田五千歩也、亦殷人之七十畝、周人之百畝モ右ニ同ジ、別ニ殷周二代之尺ヲ以テ各別ニ井ヲ畫スルニ非ズ、然ヲ前條各平法ニ錄セシ事ハ、王制之誣說ト孟子之正說トヲ分ツガ爲也、亦夏后氏之五十畝、殷人之七十畝、周人之百畝、何レモ其廣五十間其長百間成時ハ、其地凡今ノ一町ニ二町也、然ル時ハ一井ハ方六町成故、九夫ニ非ズシテ十八夫也、方三十三里小半里ハ、萬夫ニ非ズシテ二萬夫也、其軍役ヲ出ス事萬夫、故ニ是ヲ萬夫ト云フ、夫ハ今之農ニ非ズ、則チ所謂農兵也、甲斐州元龜天正年間マデ地下衆ト云者有、其家子被官ヲ養フ、是井法之夫ニ效ル也、今萬夫ヲ以テ二萬夫也ト云フ時ハ、井法ヲ知ラザル者ハ附會之說ニ泥デ垢ヲ脫スル事不レ能シテ此說ヲ非ル者有ン、故ニ其徵ヲ載テ後ノ誹ヲ防グ、

詩大雅噫嘻之章曰、「十千維耦」ト有、十千ハ一萬夫也、耦ハ二夫也、論語微子曰、「長沮桀溺耦而耕」ト有、

五寸五分五厘四毛、阡陌溝洫之部ヲ加テ二百五十四間三尺三寸三分三厘、此町四町十四間三尺三寸三分三厘也、亦周尺ハ夏尺ヨリ短事二寸、尺九寸二厘八毛八絲五忽ニシテ今之七寸令七厘一毛一絲五忽、步ハ今之四尺二寸令四厘二毛六絲九忽ニシテ、町ハ今之四十二間令二寸五分二厘四毛一絲四忽ニシテ、百畝ハ今之七十間四尺二寸五分九厘ニシテ一夫之田也、一井ハ方二百十二間七寸七分七厘、此平積四萬五千步、外ニ四十二間二尺五寸五分五厘四毛、阡陌溝洫之部ヲ加テ二百五十四間三尺三寸三分三厘、此町四間町十四間三尺三寸三分三厘也、故ニ夏之二畝半ハ周之五畝也、孟子之說ニ因ル時ハ、夏后氏之五十畝、殷人之七十畝、周人之百畝、何モ同數ニシテ小差ナシ、孟子之說信ズベシ、孟子ハ周人也、道ヲ子思ノ門人ニ學ブト、故ニ孔門傳授之法正ク詳也、王制ハ東漢之作、漢人ハ周尺ヲ以テ殷尺之八寸三分一厘九毛四絲五忽七トス、故ニ夏尺之七寸令三厘一毛二絲五忽トス、孟子ハ夏尺之七寸令一絲五忽トス、漢人附會之說由ナシ

秦孝公制二百四十步爲ㇾ畆也、

維ヲ還元シ量リ觀ルニ、秦尺ハ夏尺之六寸四分五厘四毛九絲四忽ニシテ、步ハ今之三尺八寸七分二厘九毛六絲四忽也、漢尺ハ漢人之記スル所今之七寸五分ニ隨フ也、本朝ニテ銅鐵ヲ量ルニ漢尺ヲ以テ法トストニ云リ、今刀劍ノ定法二尺二寸五分トスルハ、劉氏三尺ノ劍ヲ以テ法トスル者也、漢尺七寸五分ヘ三ヲ乘ズル時ハ二尺二寸五分ト成也、其餘釘、鍼之類都テ七寸五分ヲ以テ一尺ト定ム、今唐之尺

ヲ亡スルニ因テ、其失有ン事ヲ畏レ以テ妄說ヲ惡ム也

孟子曰、夏后氏五十而貢、殷人七十而助、周人百畝而徹、其實皆什一也、徹者徹也、助者藉也、」孟子之說ニ因テ夏后氏ハ五十ニシテ貢スト言ルヲ量リ觀ルニ、尺ハ今之尺、步ハ今之步、唯古ト今ト異ル者ハ畝ノミ、古代本朝百步ヲ以テ畝トス、其徵神武天皇庚申年大和州ニ井田ヲ疆理スルニ夏尺ヲ以テス、然ニ弘仁中ニ至リテ李唐ノ制ニ效ヒ、三十六步ヲ以テ畝トス、李尺ハ夏尺之六寸ヲ以テ尺トス、故ニ步ハ今之三尺六寸也、百步ハ方十間ニシテ夏尺之三丈六尺也、間ニシテ今之方六間、此平積三十六步ニシテ李唐之百步也、故ニ三十六步ヲ以テ畝トス、李唐ニ僻シテ神武天皇之古法ヲ失ル事ハ弘仁中ニ有、亦今三十畝ヲ以テ畝トスルハ千歲拔群之法也、然共耕田之町ヲ以テ是ヲ町里ニ比スル時ハ合數セズ、亦李制ニ比テ論ズル時ハ、其勝レル事十倍セリ、李法ハ矩ヲ私ニス、是夷法也、夏之五十畝ハ今之方七十間四尺二寸五分九厘三毛ニシテ一夫之田也、一井ハ今之二百十二間七寸七分七厘、此平積四萬五千步、外ニ四十二間二尺五寸五分五厘四毛、阡陌溝洫之部ヲ加テ二百五十四間三尺三寸三分三厘、此町今之四町十四間三尺三寸三分三厘也、亦殷尺ハ夏尺ヨリ短事一寸五分四厘八毛四絲二忽七ニシテ、今之尺八寸四分五厘一毛五絲七忽三、步ハ今之五尺令七分令九毛五絲三忽八、町ハ今之五十間四尺二寸五分六厘六毛二八ニシテ、七十畝ハ方八十三間四尺、今之方七十間四尺二寸五分九厘三毛ニシテ一夫之田也、一井ハ今之二百十二間七寸七分七厘、此平積四萬五千步、外ニ四十二間二尺

ザルノ徒乎、爾ラザル時ハ、洪々トシテ端ナキ事ヲ知ズ、管ヲ以テ天ヲ覗キ、凋也トシテ古ヲ語ルノ意有、其文長故爰ニ略シ、錄セズ、夫井田之圖タルヤ、是ヲ縱ニ觀ル時ハ乾位之三通、之ヲ衡ニ見ル時ハ坤位之三達ス、是ヲ動運スル時ハ八卦方位ヲ正ウシ、之ヲ上下スル時ハ六十四卦ト成、亦其周ヲ觀ル時ハ二十八宿ヲ列シ、其數ヲ算フル時ハ三十六禽ヲ布ク、其大數ヲ算ル時ハ九州之封疆正ク、衰蒐之位備リ、是ヲ潤澤シテ十千耦ニ釐理スル時ハ河圖洛書ヲ出シ、其沿革之精ニ至テハ里・邑・丘・甸・服・郡・縣・國・州・大小次之邦式定リ、公卿大夫士十等之穀祿等ク、井法ハ諸道之原ニシテ其廣大成事斯之如シ、其精明成ニ至テハ筆端ニ盡スベキ事ニ非ズ、故ニ孟子ヨリ以還二千餘年和漢井法ヲ說ク者ナシ、何ゾ市儒之辨ズベキ處ニ有ンヤ、「子曰、君子於ニ其所一不レ知、蓋闕如也」ト、彼ガ如一儒生ニシテ君子タルニハ非レ共、博ク書ヲ讀事ヲ好ム時ハ、君子之道ヲ慕フニ似タリ、然時ハ何ゾ己ガ不レ知ヲ以テ、妄ニ無稽之說ヲナシテ其害ヲ千歲ニ逮スヤ、「子曰、不レ知爲レ不レ知、是知也」ト、聖之教有事ヲ知ラズ、是古人之糟粕ヲ喰ヒ、其甘苦ヲ辨ズル事能ハザルノ徒也、大和ト浪華トハ其路程僅ニ七八里也、其大和タルヤ神武天皇之書シ玉フ井法之今猶存スル事顯然タリ、其近クシテ眼前ニ觀ル所ダモ此ヲ知ル事不レ能シテ、焉ゾ靑史ニ記スル處山海萬里ヲ隔タル異國之制度ヲ知ル事ヲ得ン哉、況ヤ其傳之詳カナラザルモノヲヤ、故ニ予維ヲ誹リ維ヲ詰ルニハ非ズ、先ニ淸人王士禎ガ誣說有、今亦爰ニ彼ノ妄說有ヲ以テ後人其失ニ迷時ハ、三代聖王仁政之法

ハ正縄モ亦銘ナシ、故ニ「孔子曰、我非ニ生而知レ之者一、好レ古敏以求レ之者也」ト、「亦曰、夏之禮吾能言レ之、杞不レ足レ徴也、殷禮我能言レ之、宋不レ足レ徴也、文獻不レ足故也、是則吾能徴レ之矣」ト、是古之道ヲ温ルニハ、其國其裔ニ因テ温ネ徴トスルヲ以テ孔門之法トスル事明也、是ニ因テ之ヲ觀ルニ、禹之正法ヲ温ムト欲スル時ハ冀之安邑ニ有、湯之正法ヲ温ント欲スル時ハ豫之亳ニ有、士禎二尺ヲ覓テ奇トス、此人小恵有ン、身ヲ殺シテ以テ仁ヲ成ス事能ハジ、然共古ヲ好ム事切ニシテ經術ニ心ヲ煉リ、二尺ヲ覓シハ稱スベシ、其正僞ヲ辨ズル事能ハザルハ天性也、故ニ其人ハ惡ムベキニ非ス、其說ハ惡ムベシ、嗚呼士禎ガ十五尺考ノ辨說有ヲ以テ、後人其失ヲ傳フモノ多カラン

又浪華之文儒中井積善、其弟履軒ト言ル者有、積善說ヲ作リ、履軒尺歩ノ圖ヲ爲リ、以テ井田說ト題シ、其序ニ官生ニ答ト有、其錄スル所今之曲尺七寸二分ヲ以テ周尺トシテ、孟子之所謂夏・殷・周、三代之井積ヲ各平法ニ開キ其圖ヲ載ス、其尺タルヤ僻、其圖タルヤ更ニ由ル所ナシ、一笑ニ堪タリ、其歩尺ヲ譯スルニ及テハ、周以前二代皆同シト言フ、故ニ其圖ノ解タルモ阡・陌・徑・畷・畦・畦・畹・畘・通・達・畂・畛・遂・畷・溝・洽・洫・渠・潛・澮・洛・場・畜・道路・防禦・附陂・潤・澤・瀦・瀆・疆・理・塘・堤・川・河之名目ダモ記ス事不レ能、其余之名位且夫潤澤之如キハ曾テ知ル所ニ非ズシテ、唯井法之平積ノミヲ以テ自得シタル事ト思ヒ、其辨ニ曰、井田之說今少シ分明ナラズ、定說ハナキヤノ旨承ルナド、言リ、其錄スル所ヲ見ルニ、井法萬中ノ一モ知ル事ナシ、世ノ諺ニ謂ル盲蛇物ヲ怖レ

有ヲ後夫婦・父子・君臣之道有、君臣・父子・夫婦之道有ヲ後諸道百伎之藝有、然ヲ漢儒還元之法ヲ不レ知シテ妄説ヲ述ル也、然共正名之法ヲ知ラザル者ハ多岐迷ヒ易キ乎、故ニ爰ニ錄ス、傳曰、夫度ハ蠶糸ヲ以テ定ム、一糸ヲ忽トシ、十忽ヲ絲トシ、十絲ヲ毛トシ、十毛ヲ釐トシ、十厘ヲ分トシ、十分ヲ寸トシ、十寸ヲ尺トシ、十尺ヲ丈トス、士禎其正僞ヲ辨ズル事不レ能シテ無稽之説ヲ述ルハ、所謂一犬虛ヲ吠ル時ハ衆犬實ヲ吠之類也、然共其是非ヲ辨ズル事不レ能シテ、士禎ガ説ヲ奇トシ信ズル者多シ惜ムベシ、士禎孔門傳授之法有事ヲ知ラザルノ失也、故ニ「孔子曰、必也正レ名乎、亦曰、視ニ其所一レ以、觀ニ其所一レ由、察ニ其所一レ安、人焉廋哉、人焉廋哉、亦曰温レ故而知レ新、可ニ以爲一レ師矣、」其古ヲ温テ新ヲ知ルヲ還元ノ術ト云フ、士禎若シ聖法之五術有事ヲ知ラバ、周之都シタル邪鎬ニ往テ、周武之造ル井書ヲ正縄ヲ以テ正サバ、周尺之正法ヲ知ルベシ、然共是ヲ知ルニ法有、其法トハ所謂孟子之潤澤也、其潤澤之法ヲ知ラザル時ハ其尺ヲ知ル事不レ能、夫潤澤之法タルヤ、一井ニシテ五十有二尺五寸、百夫ニシテ一百有七十五尺、一萬夫ニシテ一千有七尺、百五十尺外ニ畷道ト溝畦トノ差四尺五寸ヲ加フ、故ニ一井ニシテ五十有二尺六寸二分五厘、是ヲ一井之法方六ニテ除キ、町ニシテ八尺七寸七分二厘五毛ノ減有、此余長五十八間三尺一[illegible]分七厘五毛也、此法ヲ不レ知時

餘ハ孟子ヨリ以後之文儒記スル附會之說ニ因テ辨ズル所、其言巧ニシテ克ク非ヲ飾ルニ足ル、長キ故爰ニ略ス、精ハ居易錄ニ因テ觀ルベシ、其錄スル所ノ尺ヲ以テ孟子之言ル三代之井法ヲ量リ觀ルニ悉ク齟齬セリ、然ル時ハ之ヲ言フ事ハ可ニ似テ、之ヲ行フ時ハ違ト言ル古言ニ等キ者乎、亦士禎ガ得ル所之漢銅尺、布帛尺、何ゾ克其眞正タル事ヲ極ンヤ、奸邪之徒世財ヲ掠ン爲ニ贋物ヲ造ル者多シ、士禎博ク書ヲ讀ム事ヲ好共、孔門傳授之法ヲ知ラザル故ニ、言ヲ飾ルノミニシテ正疑ヲ辨ズル事不レ能、二尺ヲ得テ實トス、「亦云、漢儒有ニ指黍二尺之辨一、此尺取レ指取レ黍、因不レ能レ定、今以ニ中指中節一量レ之、適當ニ一寸一、無ニ毫髮差一、及ニ累黍試一レ之、正足ニ一百何指一與、指與レ黍之偶符若レ此耶」ト云フ、何ゾ中指之中節ヲ以テ量リ、毫髮之差無事ヲ得ンヤ、中指之中節ヲ以テ量ラバ厘分ヲモ差フベシ、文儒多言ヲ好ミ、首尾ノ合ハザルヲモ愧ズ、「子曰、古者言之不レ出、耻ニ躬之不一レ逮」ト、夫古言曰、「布レ手知レ尺、舒レ肱知レ尋」ト、又曰、「側レ手爲レ膚、按レ指知レ寸、布レ手知レ尺」トハ此其譬ヲ取テ云也、度ヲ定ルノ法ニ非ズ、又「度量以レ粟生レ之、十粟爲レ分、十分爲レ寸、十寸爲レ尺」ト云フ、十粟ハ一粟ニ造ルベシ、禹貢ニ曰、「百里賦納、總二百里、納銍三百里、納秸服四百里、粟五百里、」米此其地之遠近ヲ以テ納レ之、法異ル也、秸ハ穀也、服トハ穀之皮也、穀之皮有事人之衣ヲ服シタルガ如シ、故ニ服ト云フ、粟トハ玄米ヲ謂フ、米トハ舂米ヲ云フ、一粟ハ一分ニ从ブベシ、然共疏漏之說也、又黍寸ハ樂人誣世之說也、史記律書黃鐘長八寸七分、註ニ漢書黃鐘長九寸ト云フハ九分之寸也ト有、「黃鐘

方六十三間一尺四寸七分ニシテ、今之七十間五尺一寸五分八厘二强、百畝ハ方百間ニシテ、今之方百十二間二寸四分二强、亦周之二百五十畝ハ百五十八間六寸九分强弱ニシテ、今ノ百十間四尺七寸五分八厘也、維モ亦伊川周尺ヲ不レ知シテ、宋尺ヘ附會シタル說也、此說ニ因時ハ却テ宋尺ヲモ誤ル也、宋尺ハ伊川之言ル今之一尺八分三厘ニ强シ、然ルヲ周尺ヲ不レ知シテ周尺ヲ說ク故ニ、其誤レル語ニ因ル時ハ、今之二尺一寸二分四毛ニ當レ共、其實ハ今之一尺八分三厘二强、唐之一尺ハ今之六寸、步ハ今之三尺六寸也、地ヲ畵スルニハ六尺五寸之尺ヲ以テ正ス、今之尺ニ比スレバ三尺九寸百步ニシテ五丈、維ヲ夏尺ニ比スル時ハ六十五步ト成、是ヲ六十二除ケバ、一步ハ夏尺之六尺五寸ト成、是ヲ六ヲ以テ除キ尺トスレバ、一尺八分三厘三毛三ト成、是即チ今本朝之京間也、「子張問、十世可レ知也、」子曰、「殷因ニ於夏禮一、所ニ損益一可レ知也、周因ニ於殷禮一、所ニ損益一可レ知也、其或繼レ周者、雖ニ百世一可レ知也、」卽所謂宋因ニ於唐禮一、其所ニ損益一又如レ此也、今京間ト云モノハ宋法ニ效テ古法ヲ失ヘル也、

近代淸人ニ王士禎ト云ル者有、乾隆年間周尺漢銅尺歷代十五尺之尺考ヲ錄ス、其指トスル所ヲ觀ルニ、「乾隆十一年丙寅丁卯間、從ニ故工部郞侍孫肥膽治下河在江都一、得ニ漢銅尺一、上有ニ文字一、曰ニ慮虎銅尺、建初八年八月十五日造一、後又得ニ一尺一、爲ニ司馬文正布帛尺一也」ト云リ、此二尺ヲ以テ徵トシテ、其

ハ今之二百三十六間三尺七寸二分五厘四毛、此平積五萬五千三百六十八歩九分三厘四毛、此段別今之十八町四段五畝十五歩也、外ニ五十六間一尺五寸阡陌溝洫之部ヲ加テ、今之方三百三十七間三尺ニ當ル、亦經文ニ周尺八尺ヲ歩トシ、今ハ周尺六尺四寸ヲ歩トスト云ルニ因ル時ハ、周尺ハ今之七寸今三ニ二五ニシテ、歩ハ今之四尺二寸一分八厘五毛、此説ニ因テ周人ハ百畝ニシテ徹スト云ルヲ量リ観ルニ、百畝ハ方百間、今之間ニ比スレバ七十間一尺八寸七分五厘、此段別今之一町六段四畝二十三歩八厘四毛七六ニシテ一夫之田也、町ハ今之四十二間一尺一寸二分五厘、一井ハ今之二百十間令五寸六分二厘五毛、此平積四萬五千四百九十四歩六分令二毛八四、此段別今之十四町八段三畝四歩六分令二毛八四也、外ニ四十二間一尺一寸二分五厘、阡陌溝洫之部ヲ加テ今之方二百五十三間七寸五分ニ當ル、亦右之説ニ因テ、夏后氏ハ五十畝ニシテ貢スト云ルヲ量リ観ルニ、五十畝ハ今之七十間四尺二寸五分九厘三毛、尺ハ今之尺歩ハ今之歩成故、此平積五千歩、此段別今之一町六畆六畝二十歩ニシテ一夫之田也、町ハ今之町、一井ハ今之二百十二間七寸七分七厘六毛、此平積四萬五千歩、此段別今之十五町歩也、外ニ四十二間二尺五寸五分五厘四毛、阡陌溝洫之部ヲ加テ今之方二百五十四間三尺三寸三厘三毛ニ當ル、王制ニ因ル時ハ、殷之一井ハ夏ヨリ過タル事一萬三百六十八歩九分三厘四毛ニ、亦周ハ夏ヨリ少事五百五歩三分九厘七毛也、是漢儒附會之説、紛々トシテ観ルニ由ナシ

寸三分四厘六毛五、亦又漢尺ハ今ノ一尺一寸三分二厘八毛二八ニシテ、歩ハ今之六尺七寸九分七厘五毛六、亦本朝ニ傳法スル所之漢尺ヲ以テ今之尺ニ比スレバ、夏尺ヨリ短キ事二寸五分ニシテ、今之七寸五分、歩ハ今之四尺五寸、百畝ハ今之間ニ比スレバ方七十五間、此平積五千六百二十五歩、是ヲ今之段ニ比スレバ一町八段七畝十五歩ニシテ、町ハ今之四十五間、是ヲ井ニ比スレバ今之二百二十五間、此平積十六町八畘七畝十五歩也、外ニ四十五間阡陌溝洫之部ヲ加ヘテ、今之方二百七十間ニ當ル

經文ニ古者周尺八尺ヲ以テ歩トストス云シハ殷尺也、本朝ニ傳法トスル漢尺ヲ以テ、經文ニ因リ漢人之說ニ從ヒ殷尺ヲ量リ觀ルニ、殷尺ハ今之九寸三分七厘五毛ニ當ル、經文ニ東田ト言シハ東漢之田ト謂ル事也、其證經文ニ古ハ周尺八尺ヲ歩トス、今ハ周尺六尺四寸ヲ歩トスト錄スル時ハ、周代之作ニ非ル事明也、亦古之百畝ハ今之東田百四十六畝三十歩ニ當ルトアルハ、禮記ハ東漢ニ作リシ事疑ナシ、然ル時ハ殷之歩ハ今之五尺六寸二分五厘、此說ニ因テ孟子之殷人ハ七十畝ニシテ助スト言ルヲ量觀ルニ、方八十三間四尺、今之間ニ比スレバ七十八間二尺六寸二分一厘、此平積六千百五十二歩一分令三八此段別今之二町五畝二歩二分ニシテ一夫之田也、町ハ今之五十六間一尺五寸、一井

井田附言

三木量平著

王制曰、古者周尺八尺爲ㇾ步、今者周尺六尺四寸爲ㇾ步、古者百畝當ニ今東田百四十六畝三十步ㇾ、古者百里者當ニ今百二十一里六十步四尺二寸二分ㇾ

此說ニ從テ本朝神武天皇ヨリ以還傳來之夏尺ヲ以テ、漢人之百四十六畝三十步ヲ還元シテ、是ヲ量リ觀ルニ、今ノ八寸二分七厘六毛ニシテ、步ハ今之四尺九寸六分五厘六毛ニ當ル、亦周尺六尺四寸ヲ以テ漢人之步トスル時ハ、周尺ハ今之七寸七分五厘八毛七五ニシテ、步ハ今之四尺六寸五分五釐二毛ニアタル、亦周尺八尺ヲ以テ殷尺トスル時ハ、殷尺ハ今之一尺零三分四厘五毛ニシテ、步ハ今之六尺二寸令七厘ニ當ル、維ヲ以テ孟子之所謂夏后氏ハ五十ニシテ貢シ、殷人ハ七十ニシテ助シ、周旦く、人畝ニシテ徹スト有、井法ニ因リ之ヲ量リ觀ルニ、漢之一夫ハ方百二十間四尺九寸八分六厘ニシテ今之方百間、此平積一萬步、亦殷之一夫ハ方八十三間四尺ニシテ今ノ方百三間二尺七寸、此平積一萬七百一步九分二毛、亦夏之一夫ハ方七十間四尺二寸五分九厘三毛ニシテ、此平積五千步、亦今

井田附言

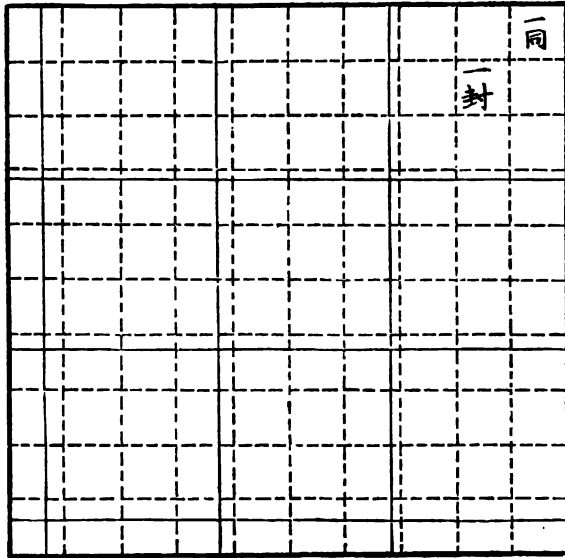
三木量平著

徹法考附圖 終

第三十三

十封方千里圖

一同

一封

百同

百萬井

九百萬夫

畿方千里百萬井戎馬四萬匹兵車萬乘故稱萬乘之主

第三十一 一封十同圖

一同

千成　十萬井　九十萬夫

第三十二 一封開方之圖

方三百一十六里有奇

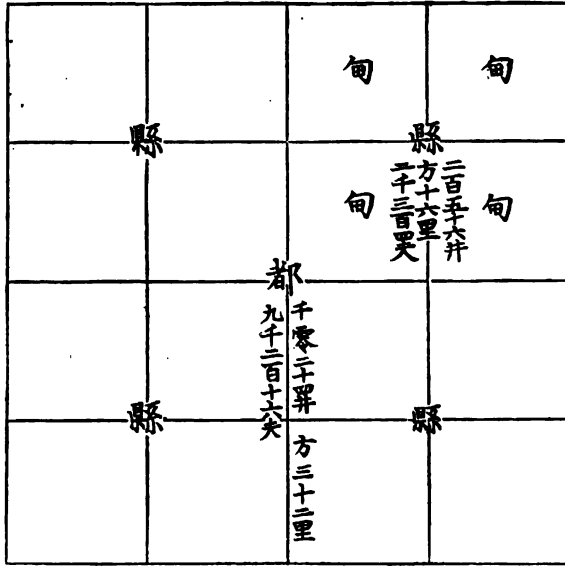
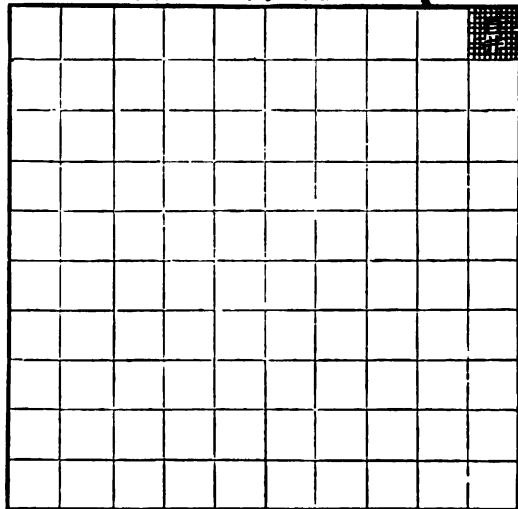
		一同

一封十萬井戎馬四千匹車千乘此諸侯之大者是謂千乘之國

第二十九

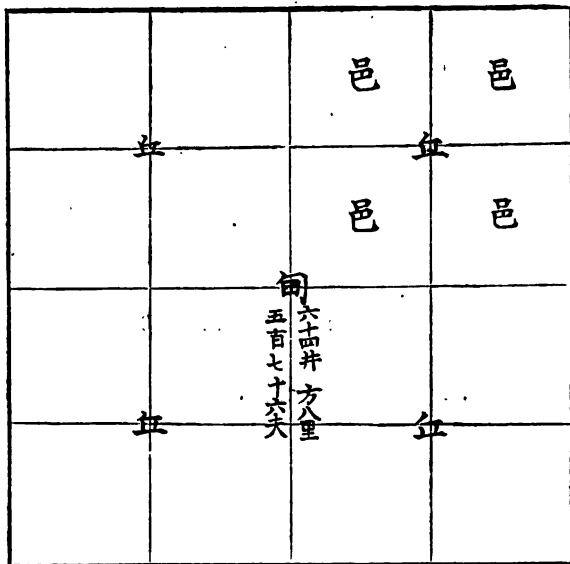
四甸爲縣四縣爲都圖

第三十

一同萬井圖

一同萬井戎馬四百匹車百乘此卿大夫采地之大者是謂百乘之家

百井即一成也每成容一甸出戎馬四匹車一乘一同凡一百甸乃出戎馬四百匹車百乘

第二十八

四丘爲甸圖

一成中容一甸

一甸所出

戎馬　四匹

兵車　一乘

牛　十二頭

甲士　三人

步卒　七十二人

則七家半强出一人也

去公田言之則爲七家

弱出一人

第二十五

子國方二百里圖

第二十六

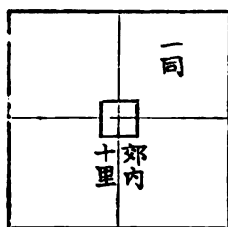
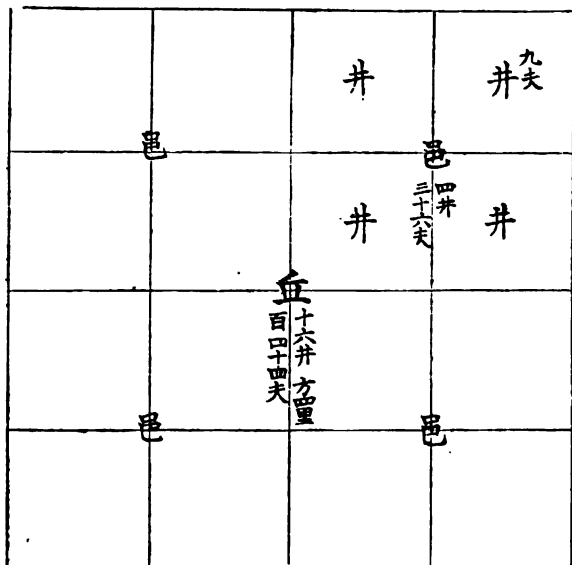
男國方百里圖

第二十七

四井爲邑四邑爲丘圖

一丘所出

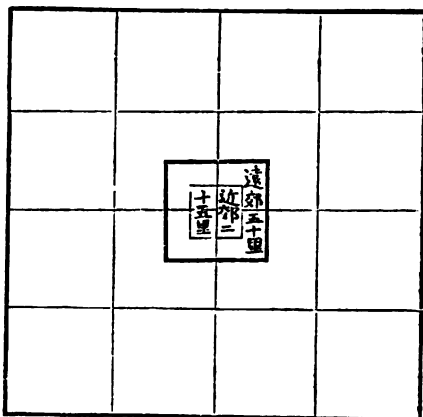
戎馬一匹 牛三頭

第二十三

侯國方四百里圖

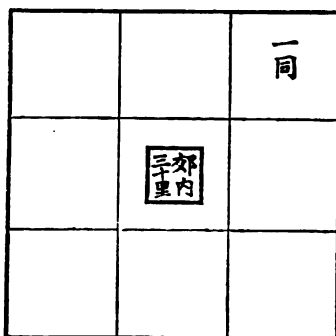
十六同　十六萬井　百四十四萬夫之地也

三鄕三遂

或云二鄕二遂郊内三十里

第二十四

伯國方三百里圖

九同　九萬井　八十一萬夫

二鄕二遂

○封國五等　在侯服以外蠻服以內之地

二十五同　二十五萬井　二百二十五萬夫之地也

第二十二

公國方五百里圖

郊內溝洫

三鄉三遂

鄉在郊內遂在郊外

並一家出一人

境內井收

一甸所出几百人

兵車　一乘

戎馬　四匹

牛　十二頭

甲士　三人

步卒　七十二人

餘甲士　一人

炊家子等二十五人

第二十一

山川地勢大概圖

姑就邊海之地圖之餘須準知

第十九 溝洫九万夫之三川繞外邊闕一面圖

闕一面

第二十 井田同外之川不繞四面圖

又圖

第十八

終十爲同圖

凡九萬夫三分去一三萬夫
餘六萬夫一家受二夫則
三萬家
去公田言之則爲二萬
六千六百六十七家弱

一同所出
革車　百乘
士　千人
徒　二千人

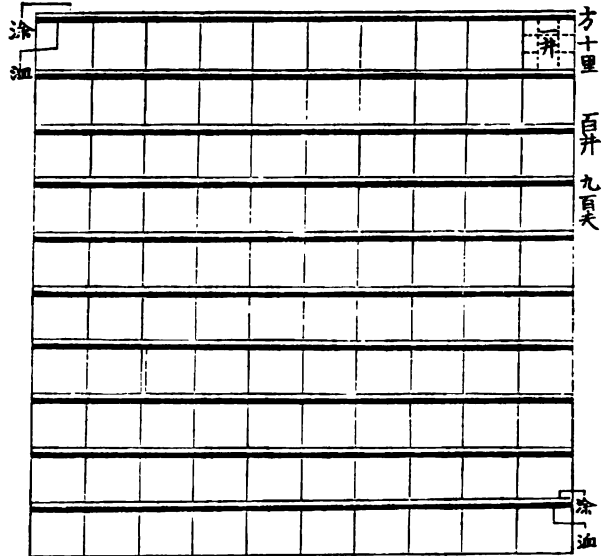
第十六

通十爲成圖

方十里　百井　九百夫

井

涂　洫

涂　洫

凡九百夫三分去一三百夫餘六百夫一家受二夫則三百家去公田言之則爲二百六十七家弱

一成所出

革車　一乘

士　十人

徒　二十人

第十七

成十爲終圖

成

千井　九千夫　長百里

廣十里

凡九千夫三分去一三千夫餘六千夫一家二夫則三千家去公田言之則爲二千六百六十七家弱

終所出

革車一乘、士百人、徒二百人

○都鄙井牧法 即助法也○九一○邦國郊外亦用之
畝百爲夫圖與鄉遂同

第十三
夫三爲屋圖

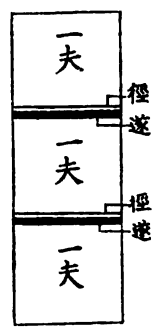
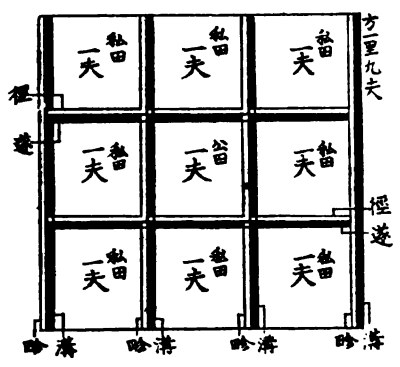
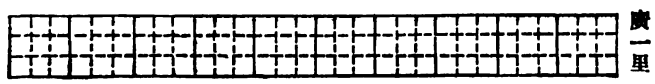
一夫
徑
遂
一夫
徑
遂
一夫

第十四
屋三爲井圖

方一里九夫
私田一夫　私田一夫　私田一夫
私田一夫　公田一夫　私田一夫
私田一夫　私田一夫　私田一夫
徑　遂　徑　遂
溝　畛　溝　畛　溝　畛　溝　畛

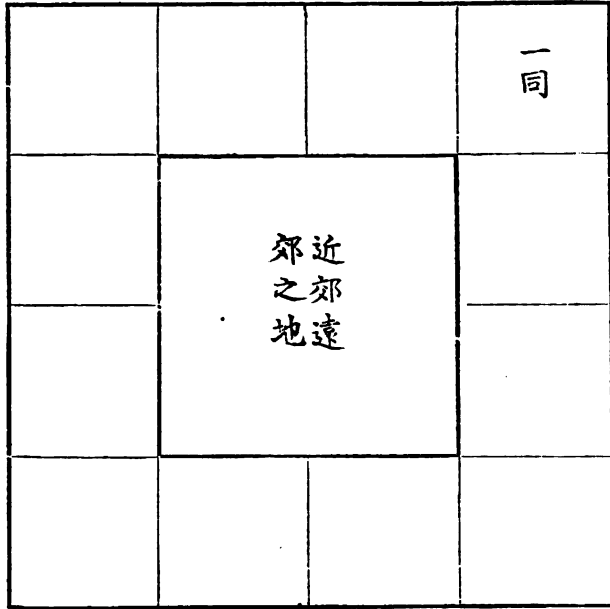
第十五
井十爲通圖

九十夫

長十里

凡九十夫三分去一 三十夫 餘六十夫通不易一易再易一家受二夫則三十家去公田言之則爲二十七家弱

一通所出 士一人、徒一人、馬一匹 則每十家出一人也去公田言之則爲八家半强出一人也

第十二

邦甸圖

六遂之民在此

凡十二同一百八萬夫三分去一萬夫三十六餘七十二萬夫八同六遂之民七萬五千家通不易一易再易六家受十三夫則十六萬二五千百夫一同八十成又五百夫其餘五十五萬七千五百夫六同十九成又四百夫爲公邑

第十一

近郊遠郊圖

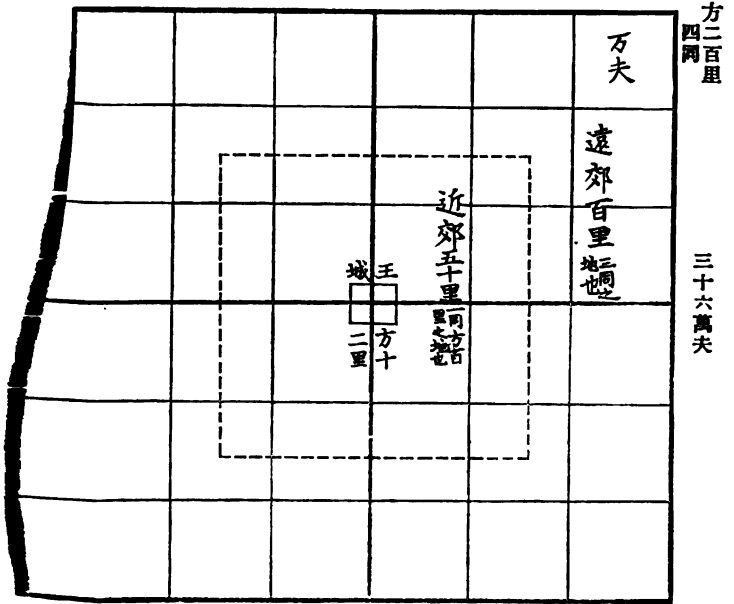
方二百里 四同

万夫

遠郊百里 三同之地也

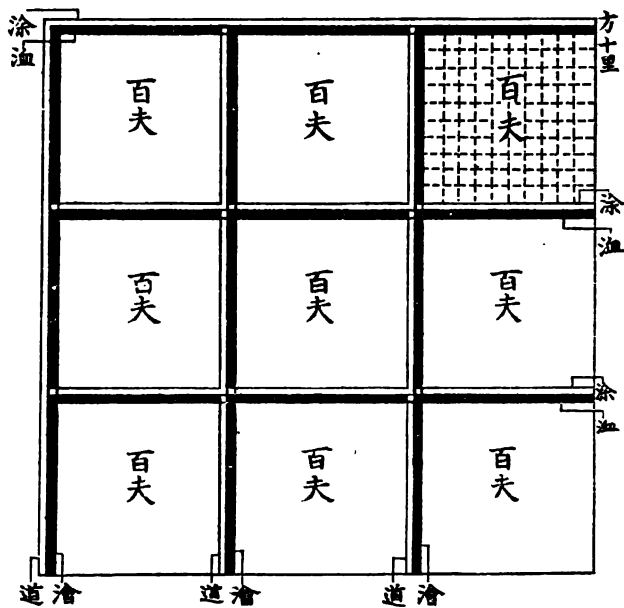
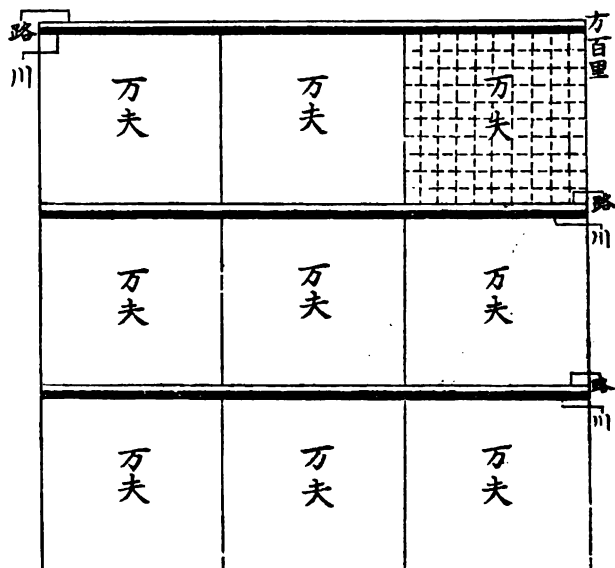
近郊五十里 一同方百里之地也

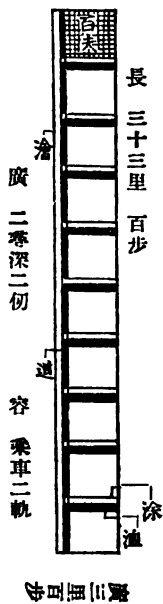
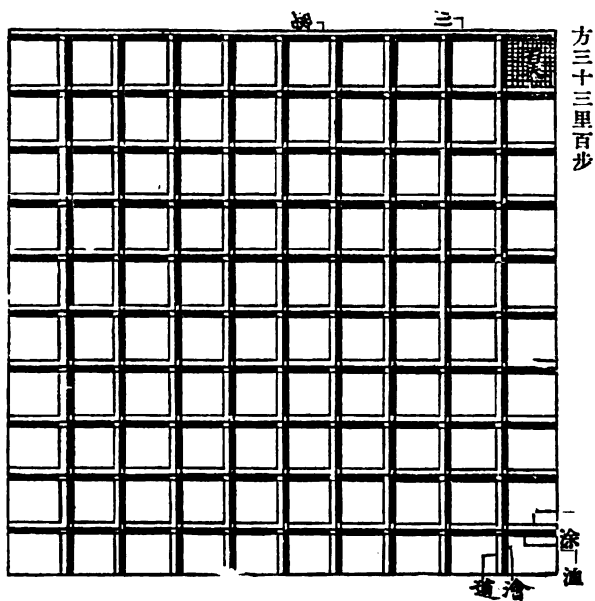
王城

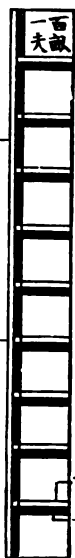
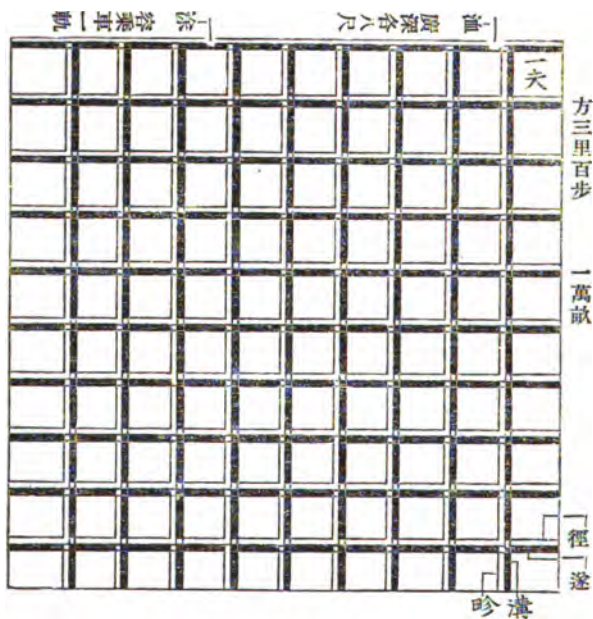
方十二里

三十六萬夫

六鄉之衆居于近郊遠郊之圖

凡四同三十六萬夫三分去一十二萬夫二十四萬夫二同六十六成又六百夫六鄉之民七萬五千家通不易一易再易家受二夫則十五萬夫一同六十六成又六百夫其餘九萬夫一同爲廛里場圃九等之田

第九 九百夫爲一成圖

第十 九萬夫爲一同圖

第七 千夫有澮々上有道圖

第八 萬夫有川川上有路圖

第五　十夫有溝溝上有畛圖

第六　百夫有洫洫上有涂圖

○鄕在郊溝在甸溝洫法即貢法也○十貢レ一○公邑及邦國郊內亦用之

第三 步百爲畝三伐三畝圖

長百步

伐一尺

畎一尺

濶一步

第四

畝百爲夫圖

夫間有遂遂上有徑

徑容牛馬

遂廣深各二尺

方百步

畝長百步濶一步

第二

王畿圖

或作圻又名甸

方千里
百同
百萬井
九百萬夫

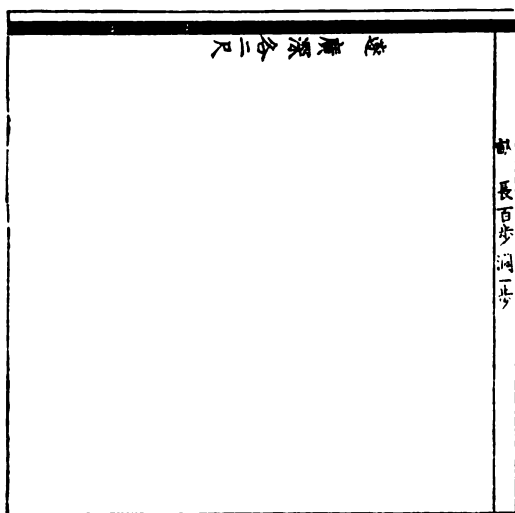
一圻
一同

邦都 五百里 三十六同 又謂之畺
邦縣 四百里 二十八同
邦削 三百里 二十同 又作稍
邦甸 二百里 十二同 又謂之州

方百里 近郊五十里遠郊□□里 郊地四同
二王城方十二里
田法溝洫 六鄉在此
田法溝洫

六遂七万五千家在此 其餘為公邑

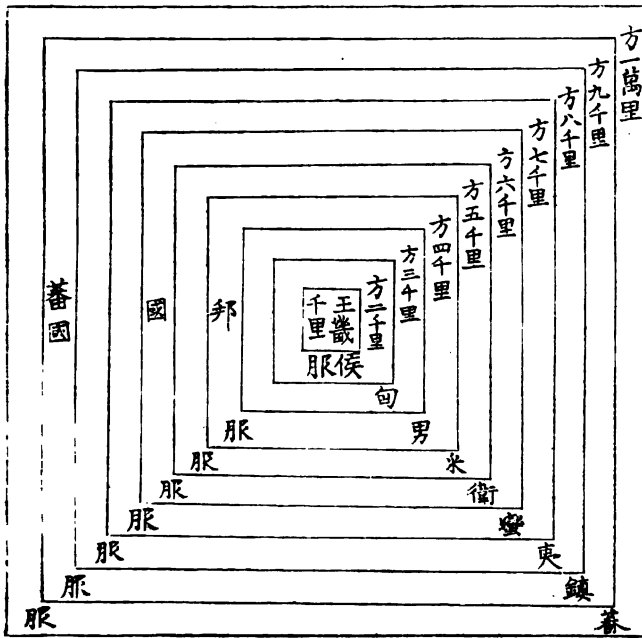
大國 公采地方百里謂之大都 九
次國 卿采地方五十里謂之小都 二十一
小國 大夫采地方二十五里謂之家邑 六十三

田法公邑溝洫采地井牧
除采地之外為公邑及祿士之地

郊內謂之國中
郊外謂之野
又城中及王畿
亦皆謂之國中
城外謂之野畿
外謂之四郊
家邑小都大
都皆謂之都
鄙

徹法考附圖

第一

九服圖

或稱謂九畿

王畿與九服共方萬里

餘七十二人、三ッニ分リテ前拒二十四人前ニアリ、左角廿四人左ニアリ、右角二十四人右ニアリ、各車ヲ離ル、事ナク、車ニツキテ進退シテ戰フ也（左傳桓ノ五年ニ先偏・後伍・伍承・彌縫トアルナドハ、車ヲ先ニシ歩卒ヲ後ニシテ、其車ノ隙ヲバ歩卒ヲ以テ補タル也）此法春秋ノ頃マデ殘レリシニ、戰國以後遂ニ廢レタリトイヘリ

萬乘之主千乘之國百乘之家

圖第三十 一同萬井ノ地戎馬四百匹車百乘ヲ出ス（一同ノ地ハ百成也、一成ゴトニ一甸ヲ入テ、馬四匹車一乘ヲ出スナレバ、百成ニテ馬四百匹車百乘トナル也）コレ卿大夫ノ采地ノ大ナルモノニテ、コレヲ百乘ノ家トイフ（コレ諸侯ノ臣ノ采地ヲイフ也）、「又同十爲レ封」第三十一トテ、此同ヲ十重ネテ長サ千里、廣サ百里、積十萬井（九十萬夫）ノ地ヲ第三十二封トイフ、コレヲ方ニスレバ方三百十六里餘ノ地トナル、是ヨリ戎馬四千匹、車千乘ヲ出ス、是諸侯ノ大國ニテコレヲ千乘ノ國トイフ、（諸侯ノ大國公爵ノ國ハ方五百里、侯爵ノ國ハ方四百里也、然レバ邦境一封ヲ限トスルニアラズ、コレハ一封ノ地ヲイルヽニ足ヲイフナルベシト先儒イヘリ、又一封ニ滿ル國ヲバ成國トイフ、公侯ノ國ハ成國也）又「封十爲レ畿」第三十三トテ此封ヲ十合セタルガ天子ノ畿方千里也、戎馬四萬匹、兵車萬乘ヲ出ス、故萬乘ノ主トイフ也（漢志司馬法）

文政十二己丑十月六日

藤陰 鮮川 同校

徹法考 終

人ノ糧食諸用官ヨリ給スルコトナク、皆ミヅカラ辨ズルナルベシト先儒イヘリ（義疏ニハ、道ニ在テハ遺人職道路ノ委積ヲイタシ、畿外ニ出テハ諸侯ノ國々其所ニオイテ資糧ヲ給スルナルベシトイヘリ）

車乘ノ法

戰車ノ用動キテハ敵ヲウチ、止リテハ營ヲナシテ將卒ヲシトミ、サテハ兵器衣裝ヲ運ブ、其利用大也トイヘリ、兵車ニ數種アリ、戎路（王ノ車卽革路也）廣車（橫陣ノ車）闕車（闕チフサグ車）苹車（部ム車）輕車（驅引ノ車）ナド云、（此五ツヲ五戎トイフ也）是皆苹車ニシテ戰ニ用ル車也、是ヲ戎車トモイヒ、轂長キ故長轂トモイフ、サテ一車（馬四匹ヲ以テヒクナリ）甲士三人、步卒七十二人合セテ七十五人也、一卒百人ナレバ一車ニ二十五人ヲ餘ス也、此ハ次ノ車ニツケテ次第ニオクリテ、車四乘ニ人三卒（三百人）トス、然レバ二十乘ニ三放、（千五百人）百乘ニ王師、（七千五百人）五百乘ニ三軍（三萬七千五百人）千乘ニ六軍（七萬五千人）ナリ、六軍千乘ハ古ノ定制也トイヘリ

一車ゴトニ重車一乘（牛十二頭）炊家子等二十五人アリ、コレハ今ノイハユル小荷駄也

○凡ソ車ハ九乘ヲ小偏トシ、十五乘ヲ大偏トシ、（左傳ニコレヲ廣トモイヘリ）二十五乘ヲモマタ大偏トス、此大偏ヲ五ツ合セテ百二十五乘ヲ伍トイフ、コレ車ノ卒伍也トイヘリ、車ノ卒伍トイフ事ハモト周禮司右ニ見エ、小偏大偏等ノ事ハ司馬法及左傳ニアリ、然レドモ本文車乘ノ法ト其數合ザル故姑ク論ゼズ

○一車七十五人ノウチ甲士三人車上ニアリ、左ハ弓ヲトリ、右ハ矛ヲトリ、（右ヲ車右トイフ、天子ニハ戎右ノ官アリ、）中ハ御ヲ主ル也（將帥ノ車ハ御者左ニアリ、將帥中ニアリ、右ハ替ルコトナシ、弓ヲトル者ハ乘ザル也）其

モ見エタルハ殷ノ制トイヘリ）

賦税ノ輕重

税ノ輕キハ賦重ク、賦ノ輕キハ税重シ、孟子ニ三代ノ税法ヲ論ジテ其實皆十一也トイヘルハ、三代田法各異也トイヘドモ、賦税ヲ合セテ計ル時ハ、皆十一ニ過ザルヲイヘル也ト先儒イヘリ

	正税	園廛	賦役	出軍	車馬甲兵
近郊	十一	十一	三劑	毎家一人	取ニ于官一
遠郊	十一	二十之三	三劑	毎家一人	取ニ于官一
邦國郊內	十一	○	○	毎家一人	取ニ于官一
六遂及四處公邑	十一	十二	下劑	毎家一人	取ニ于官一
邦國郊外三遂二遂一遂之地	九一	○	○	毎家一人	取ニ于官一
邦國境內	九一	○	○	八家一人	自出
畿內采地	九一	○	下劑	十家一人	自出

右圈子ハ分明ナラザルモノ也

軍士ノ糧食諸用官ヨリ給セズ

周禮ニ九賦九式ナドイヒテ、（冢宰大府等ニ見ユ）財用出入ノ事詳ナレドモ、スベテ軍旅ノ備ヲイハズ、サレバ軍

シカレドモ愚考當否ヲシラザレバ、コヽニ附記シテ參考ニ備フ

附庸閑田

附庸ハ五等諸侯ノ外ニテ小國也、方五十里ニ滿ズシテミヅカラ天子ニ通ズルコト能ハザルニヨリテ、大國ニ附テ達スル者也、閑田ハ諸侯封地ノ外イマダ附庸ヲ封ゼザル地也、（畿内ノ公邑ノ如シ）人ヲ封ズレバ則附庸也、イマダ封ゼザルハ閑田也ト心得ベシ（軍制皆邦國境內ノ如クナルベシ）●

邦國卿大夫ノ采地

公ノ孤ト侯伯ノ卿ハ方百里、公ノ卿ト侯伯ノ大夫トハ方五十里、公ノ大夫ト侯伯ノ下大夫トハ方二十五里、子男ノ臣ハ明文ナシトイヘリ（易ノ訟卦注ニ、小國之下大夫采地方一成、其稅三百家）

邦國郊內及境內ノ總計

畿外侯服ヨリ蠻服マデ六服ノ間ヲ諸侯ノ封國トス、王制鄭注ニヨルニ周ノ九州方七千里ニテ、方千里ノ者四十九也、其中ノ千里ヲ王畿トス、其餘四十八アリ、八州各方千里ノモノ六ツヾ也、一州ノ封國方五百里ノ者四ツ、方四百里ノ者六ツ、方三百里ノ者十一、方二百里ノ者二十五、方百里ノモノ百六十四、スベテ二百十國ニテ、方千里ノモノ五ツト方百里ノモノ五十九也、其餘方百里ノ者四十一ヲ附庸閑田ノ地トス、（王制本文ニ凡四海之內九州、州方千里、州建百里之國二十、七十里之國六十、五十里之國百有二十、凡二百一十國トイヒ、又八州々二百一十國トイヒ、マタ凡九州千七百七十三國ト

人ニテ六軍ノ數ニアヘリ、王畿ノウチ郷遂十二軍アリトイヘドモ、一時ニ征スルコトナケレバ、郊甸ノ兩地合セテタヾ六軍トイフベシ、然レバ此六軍ハ郊・甸合セテ十六同ノ賦ナルベキカ、十六同ノ地山陵林麓等三分一ヲ減ズレバ十同、六十六成餘也、モシ又漢志ニヨリテ一百分ノ三十六ヲ減ズレバ十同、二十五成也、此地ヲ以テ十同ニアタル軍ヲ出スコト相應ナルベシ、タヾシ此十同餘ノ地ニアル者互ニ替リテ出ルニハ非ズ、其人ハイツモ郷遂ノ衆ナルベケレドモ、其費ヲ助ル事ハ近郊・遠郊、及邦田ノ民預ラザル者ナカルベシ、(若又不易・一易・再易三等ノ田ヲ通ジテ、一家二夫ヲ受ルノ例ヲ以テイハヾ、二十同ノ地ニシテ後初テ十同ノ賦ヲアツベシ、今十同餘ニシテ地猶狹ケレバ、其不足ノモノハ邦甸・邦縣・邦都ノ公邑ヨリ助ルナルベキカ）サテ如レ此ナレバ六郷六遂及邦國ノ境皆此一甸七十五人ノ法トナレバ、諸侯郷遂ノ軍モ同事ナルベシ、然レドモ畿內采地ノ賦ニ限リテ其制異ナルベキワケナシ、只同一法ナルベキ也、八家一人ト云ヲ以テ天下ノ通法ト見ルベキカ(公田ヲ去テ云ハ七家一人也、先儒云、王畿百萬井ノウチ山陵林麓等三十六萬井ヲ減ズレバ六十四萬井トナル、一井八家ナレバ凡テ五百十二萬家也、萬乘ノ賦ハ七十五萬人ナル故、コレ七家ニテ一兵ヲ賦スル也、七家替リテ一兵ヲ出スナレバ、王畿ノ內凡ソ七タビ征シテ始メテ一遍スル也、孫子ニ「興レ師十萬、不レ得レ操レ事者、七十萬家」トイヘルモ、七家一人ヲ出ス證トスベシトイヘリ○又六軍七萬五千人ハ十同ノ賦ナル故、王畿一百同ノ地ヨリコレヲ出セバ十征シテ一遍スナドトイフ說モアリ）

ニ就テイフナリ、司馬法丘甸ヲ擧テ縣・都ヲイハザルハ、軍賦ノタメニハ縣、都ヲ用ルニ及ザルユヱ也、如レ此見ル時ハ井田ノ制、丘甸ノ法相妨ル所ナクシテ通曉ナルガゴトシ、サテ一邑ハ四井三十六夫也、一丘ハ十六井（方四里）百四十四夫也、此地ヨリ馬一匹、牛三頭ヲ出ス、一甸ハ（方八里）五百七十六夫也、此地ヨリ兵車一乘、牛十二頭、甲士三人、歩卒七十二人（合セテ七十五人）ヲ出ス、七家半强ヨリ一人ヲ出ス也、（若公田六十四夫ヲサレバ五百十二夫トナル、シカレバ七家弱ニシテ一人ヲ出ス也、モシ又一成ノ地民家不レ足時ハ、他ノ地ヨリ加ヘテ軍賦ノ數ヲ上ルナルベシ）コレヲ丘甸ノ法トイフ、諸侯邦國ノ境内皆此法ヲ以テ軍ヲ出ス也、其卒伍ハ皆鄕遂ノ法ト同ジ〇一甸ノ出軍甲士三人、歩卒七十二人ノ外、炊家子十人、固守衣裝五人、廐養五人、樵汲五人合セテ二十五人アリ、（此内ニモ甲士一人アルベシトイヘリ、）又重車（小荷駄車也）一乘アリ、然レバ一甸合セテ百人也、シカレドモ炊家子等二十五人ハ副貳ノ者ニテ、正數ニハイラズトイヘリ

〇竊ニ案ズルニ、鄕遂ノ軍ハ每家一人ヲ出ス事、經文ノ趣疑フベキ所ナキガ如ク、其餘力ナキヲ以テ車馬甲兵ハ官ヨリ給スル事モ、司兵（兵ヲ授ル文アリ）質人（馬ヲ授ル事アリ）ナドニ證アレバ、マタ異論アルベカラズトイヘドモ、其輕重多寡ノ甚シキ猶疑ナキコト能ハズ、司兵質人等ニ兵馬ヲ授ル文アレドモ、是モマタマヅ皆民ヨリ出シテ官ニ收メ、然シテ後官コレヲ給スルナルベキモ知ベカラズ、サレバ彼丘甸ノ法ヲ推テ考フルニ、十同、九十萬夫ノ賦ハ兵車千乘甲士三千人、歩卒七萬二千人、合セテ七萬五千

里、四都ナレバ方六十四里ナリ、然ルニ甸ノ四面ニ一里ヅヽヲ加ヘテ方十里トシ、ソレヲ四ツ合セテ一縣方二十里トシ、又四ツ合セテ一都方四十里トシタルモノ故、四都ハ方八十里トナリテ一同ノ地ニ入也）緣邊十里ハ澮ヲ治ムル故、除キタルトイヘルナド牽强殊ニ甚シク聞ユ、或ハ緣邊ノ一里ヲ除タルハ山陵林麓ヲ減ジタルナルベシトイフ説モアリ、又ソレヲイカヾトイフモアリ、又丘甸ハ溝・畛・洫・涂ノ類ヲ去タル者也トイフモアリ、スベテ決定セズ、案ズルニ、丘甸ノ法ハ稅賦ノタメニ設タルモノニテ、一同一成ノ法トハ意味違ヘリ、一同一成ハ山陵林麓ヲ除テモイフベク、コメテモイフベシ、丘甸ハ專ラ田地トナリタル上ニテ其稅賦ヲイフナレバ、コヽニテ山陵林麓ヲ去トテ、緣邊一里ヲ除クニハ及ザルベシ、又一成ノ地ハ百井也、タトヒ溝・畛・洫・涂ヲ去テモ井數ニ違ヒハ有ベカラズ、一甸ハ六十四井ナレバ溝・畛・洫・涂ヲ去タル者トイフ説モ信ジガタシ、サレバ緣邊一里ヲ除タル意ハイカナル故トモ知ベカラズ、强テ其説ヲナサバ皆牽合ニ落ベシ、然レドモ一甸ハ則一成ノ地ナルコトハ疑アルベカラズ、其ツモリヲ以テ一同ハ則百甸ニアツベキ也、其故ハ都鄙ノ條ニ載タル司馬法出軍ノ法ハ、一成ニ革車一乘トアリ、又一同ノ出賦戎馬四百匹、兵車百乘モ一成一乘ノツモリ也、然レバ一甸六十四井、兵車一乘トイフモノ、則一成ナル事疑ナク、一成ゴトニ一甸ヲ入ルレバ、一同ハ百甸ナルベキコトモマタ論ヲ不レ俟、是本軍賦田稅ノタメニ設タルニテ、田法ニ拘ルニ非ル故、丘・甸・縣・都スベテ一成一同ノ數ニ合コトナシ、又小司徒ニ丘・甸・縣・都ノ四ツヲ擧タルハ、田稅

四縣爲レ都、以任二地事一而令レ貢レ賦

司馬法出軍ノ制、四井爲レ邑、四邑爲レ丘、丘十六井也、有二戎馬一匹、牛三頭一、四丘爲レ甸、甸六十四井也、有二戎馬四匹、兵車一乘、牛十二頭、甲士三人歩卒七十二人一干戈備具、是謂二乘馬之法一

此丘甸ノ法ハ前ニ記セル井田ノ一成一同ニ付テ立タルモノニテ、一甸ハ一成ニアタリ、四都ハ一同ニ當ル、スベテ別事ニ非ズトイヘリ、然ルニコレハ四數、彼ハ十數ニテ全ク合コトナシ、一甸六十四井ノ田ヲ以テ一成一百井ノ内ニ入ルレバ、縁邊一里三十六井ヲ餘ス也、此事ニ付テ種々ノ説アリ、マヅ丘甸ハ實ニ税ヲ出スモノニ就テ立タル法ニテ、其縁邊ノ一里ハ洫ヲ治テ（井田ノ法前ニ擧ル趣ニテハ、一成ノ地十洫アリテ、左右ハ澮トナル也、舊説ハ一成ノウチニ洫アルコトナク、洫ヲ以テ一成ノ外ヲ繞ヒタル也、一同ノウチニモ澮ハナク、澮ヲ以テ同ヲ繞ヘリ）税ヲ出サヌ者ユヱ省キタル也トイヒ、サテ一甸ハ六十四井ニテ方八里、「四甸爲レ縣」トアレバ、縣ハ方十六里、「四縣爲レ都」トアレバ、都ハ方二十二里ナルヲ、カクテハ其數齊整ナラズシテ一同ノ田ニ合ザルニヨリテ、縣都ヲ計ル時却テ一甸ノ傍四面ニ一井ヲ加ヘテ（洫ヲ治ムル故除キタルト云、傍ノ一里ヲ今又加フル也）方十里トシテ、ソレヲ四ツ合セテ一縣方二十里トシテ數ヲ合セ、一同ノ地ニ四都ヲ入テ、（縣ハモト方十六里ナレバ、一都ハ方三十二

（三ツト王畿ニ見ユ）大都ノ地スベテ九同、田法井田也、其餘ヲ公邑祿士ノ地トス

邦國大小郊内郊外ノ制及郷遂出軍ノ法

畿外諸侯ノ邦國五等公・侯・伯・子・男ノ替リアリ、（圖第二十二）公爵ノ國ハ方五百里二十五同也、（コレヲ大國トス）近郊二十五里、遠郊五十里、（方百里一同ノ地也）郊内ハ田法溝洫ヲ用フ、三郷郊内ニアリ三軍ヲ出ス、三遂郊外ニアリ、是モ三軍ヲ出ス、（一説ニ諸侯ノ國ニハ遂ナシトモイヘリ）一家各一人ヲ出ス也、スベテ天子郷遂ノゴトシ、郊外ノ田法ハ井田也、（邦國田ヲ授ル法ハスベテ六遂ニ同ジ）境内ノ軍ハ丘甸ノ法アリ後ニ擧、（境内トハ郊外ノ地ヲイフ也）（圖第二十三）○侯爵ノ國ハ方四百里十六同也（コレモ大國トス）近郊二十五里・遠郊五十里、三郷三遂也、其餘スベテ公爵ノ國ニ準テ知ベシ（第二十四）○伯爵ノ國ハ方三百里九同也、（是ヲ次國トス）近郊十五里、遠郊三十里、二郷二遂也（第二十五）○子爵ノ國ハ方二百里四同也、（是ヲ小國トス）近郊五里、遠郊十里、一郷一遂也（圖第二十六）○男爵ノ國ハ方百里一同也、（是モ小國トス）近郊五里、遠郊十里、一郷一遂也（王制ニ公侯田方百里伯七十里、子男五十里ト見エタルハ夏ノ制トイヘリ、然ルニ周ノ初メモ夏ノ制ト同ジカリシ事ハ、武成ニ列爵惟五、分土惟三トアルニテシルベク、其後周公攝政ノ頃ニ至リテ九州ノ地ヲ廣クシテ、爵ニ從ヒ邦國ヲモ五等ニ分テルコト、大司徒ニイヘル如クナルベシト、是又先儒イヘリ、今本文大司徒ニヨレリ○殷ノ制ハ爵三等ニテ公・侯・伯也、其他ハ夏制ノゴトシ）

但一説ニ侯爵ノ國モ次國ト稱シテ、二軍ヲ出ストモイヘリ

○爵尊クシテ國小サク、爵卑クシテ國大ナルモノモアリ、一概ニ泥ムベカラズ

革車十乘　士百人　徒二百人

一同　三萬家

革車百乘　士千人　徒二千人

右士トイフハ甲士（甲士ハ在車士ト注セリ）徒トイフハ歩卒也、皆十家毎ニ一人ヲ出スツモリナリ（公田ヲサレバ八家半强一人ヲ出ス也）

邦削邦縣邦都總計

都鄙ノ事大カタ前ニイヘルガゴトシ、邦削ノ地ハ王城ノ四方二百十里ヨリ三百里ニイタル地也、凡二十同アリ、此地ニハ大夫ノ采邑方二十五里ノ小國六十三アリ、是ヲ家邑トイフ、王ノ子弟ノ疏遠ナル者大夫ト同ジク此内ニアリ、（大夫ノ田二十七、致仕セル大夫ノ田二十七、王ノ子弟ノ田九ツト王制ニ見エタリ、只大抵ヲイフト見ルベシ）家邑ノ地スベテ三同・九十三成・七十五井・田法井田也、其餘ハ公邑及祿士ノ地也、上ニ見エタリ○邦縣ノ地ハ王城ノ四方三百十里ヨリ四百里ニイタル地也、凡二十八同アリ、此地ニハ卿ノ采地方五十里ノ次國二十一アリ、コレヲ小都トイフ、王ノ子弟ノ常ナミナルモノ卿ト同ジク此ウチニアリ、（六卿ノ田六ツ、致仕ノ田六ツ、三孤ノ田三ツ、王ノ子弟ノ田六ツト王制ニ見エタリ）小都ノ地スベテ五同・二十五成・田法井田也、其餘ヲ公邑及祿士ノ地トス○邦都ノ地ハ王城ノ四方四百十里ヨリ五百里ニイタル地也、凡三十六同アリ、此地ニハ公ノ采地方百里ノ大國九ツアリ、コレヲ大都トイフ、王子母弟ノ親シキモノ公ト同ジク此ウチニアリ、（三公ノ田三ツ、致仕ノ田三ツ、王ノ子弟ノ田

漢志廬舍ノ説

漢書食貨志ニ廬舍ノ説アリ、ソレハ一井九夫ノウチ私田八百畝八夫ヲ八家トス、サテ公田百畝一夫ノ内二十畝ヲ廬舍トイヒテ廬ヲ結ブ所トス、是漢志ノ趣也、先儒コレヲ附演シテ、孟子ノ五畝ノ宅トイフ是也トテ、二十畝ヲ八家ニワクレバ一家二畝半ヅヽトス、猶二畝半ノ宅地城邑ノウチニアリ、コレヲ合セテ五畝ノ宅トイフ、春ニナレバ各其田中ノ廬ニ出テ農事ヲ勤メ、冬ハ皆邑中ニ入也トイヘリ、シカレドモ如レ此ナレバ公田ハ百畝ニアラズ八十畝也、又八家皆私ニ百畝ニトアレドモ、是ニテハ八家ノ者ハ百二畝半也、サレバ漢志ノ説ハ誤ナルベシト先儒イヘリ

都鄙出軍ノ法

小司徒鄭註ニ司馬法ヲ引テ都鄙出軍ノ法トイヘル者其故ヲシラザレドモ、今姑ク擧レ之左ノゴトシ

都鄙及邦國境內ノ軍ハ、車馬・甲兵ノ類皆民ヨリ出ス也、賦法輕キ故トイヘリ

一 通　　三十家（公田ヲ去バ二十六家半强也、成・終・同モ是ニ倣テ見ルベシ）

　馬一疋　　士一人　　徒二人

一 成　　三百家

　革車一乘　　士十人　　徒二十人

一 終　　三千家

都鄙田ヲ授ル事六郷ニ同ジク、上地ハ一家ニ百畝、中地ハ二百畝、下地ハ三百畝、上中下ヲ通ジテ一家二夫ノ地ヲ受ル也、一通ノ地山陵林麓等三分ノ一ヲ減ズレバ六十夫トナル、(山陵・林麓等三分ノ一ヲ去事總計ノ上ニテ去モアリ、又一同一成ノ上ニテ去モアリ、郷遂ノ地ハ總計ノ上ニテ去タルツモリ也、是ハイマダ去ザルモノヲ一通一成ノ上ニテ減ズルツモリヲイフ也)一家二夫ヲ受レバ三十家也、此内公田アルユヱ、實ハ二十七家弱也 一成ノ地三分一ヲ減ズレバ六百夫、一家二夫ヲウクレバ三百家也、公田ヲ除レバ、二百六十七家弱也 一終ノ地三分ノ一ヲ減ズレバ六千夫、一家二夫ヲ受レバ三千家也、公田ヲ除レバ二千六百六十七家弱也 一同ノ地三分一ヲ減ズレバ六萬夫、一家二夫ヲウクレバ三萬家也、公田ヲ除レバ二萬六千六百六十七家弱ナリ 毎家ノ人數ハ替ルコトアルベカラズ、賦役ノコト不詳

○一井九夫ノ內、一夫ハ公田ニテ私田ハ八夫也、然レドモ賦税ヲ計ルニハ、公田ヲモ加フルコト古法也トイヘリ

附云五經異義授田九等ノ差アリ、九等トイフハ、度・鳩・辨・表・數・規・町・牧・井也、是皆井ノ別名ト心得ベシ、一度一鳩ナドトイヘバ、則一井ノ事トナル也 度トイフハ、九井ヲ以テ一井ニ當ル地也、惡地也、鳩トイフハ、度ヨリハ少ヨロシキ地ニテ、八井ヲ以テ一井ニアツル也、辨ハ七井ヲ以テ一井ニアテ、表ハ六井、數ハ五井、規ハ四井、町ハ三井、牧ハ二井ヲ以テ一井ニ當ル也、本文ニ載ル三等ハ井・牧・町ノ三ツニアタレリ、規・數以上ノ惡地ハ稀ナル故、其ツモリヲ省ケルナルベシ

夫ノ地ニハ三澮、九洫八十一溝也、（直ニ通リタルヲ一ツトスレバ、三澮三洫二十七溝也）一同九萬夫ノ地ニハ九川八十一澮トナル、（直ニ通リタルヲ一ツトスレバ、三川三十澮也）匠人ハ成間ニ洫アリトアレバ、九百夫ニタヾ一洫也、同間ニ澮アリトイヘバ、九萬夫ニタヾ一澮也、是間字ヲ以テ間隙ノ義ト見タル也、然レバ遂人ト大ニ違ヒテ、遂人ニ畿ニ達ストイヘル事通ゼズ、サレバ鄭註畿ニ達ストイフヲ釋シテ、「中雖レ有ニ都鄙一、遂人盡主ニ其地一」トイヘリ、畿内ヲスベ主ル事ヲバ、「以達ニ于畿一」トノミイフベキ事モ如何也、サレバ間字ヲ中間ノ義ト見レバ穏ナルヤウ也、鄭樵ノ説ナド殊ニヨク聞ユ、但ソレハ遂人・匠人トモニ井田ノ法ト見タル説ヲタツベキ爲ニイヘルニテ、一井中ニ一溝トイヘルナドイカガアラン、今其説ヲ斟酌シテ擧ルコト本文ノゴトシ、然レバ一成九百夫ノ地ハ十洫百三溝也、（直ニ通リタルヲ一ツトスレバ、三十溝也）一同九萬夫ノ地ハ九澮ニテ川其外ニアリ、猶遂人ト差ヘルハ其法本ヨリ異ナレバ也、同外川アルニ至テハ終ニ一致ニ歸ス（圖第十九溝洫法九萬夫ノ地）（第二十ハ三川ナレドモ、是ヲ九萬夫ノ外ニ廻ラセバ、三面ヲ繞ヒテ猶一面ヲ殘ス也、井田同外ノ川モ必四面ヲ繞ルニ非ズ）コレヲ畿ニ達ストハイフ也、但此川トイフハ人造ノ川ニハアラズ、自然ノ川ナレバ只其大抵ヲイフト心得ベシ（圖第二十一）（山川地勢ノ大略ヲイハヾ、古ヨリ兩山ノ間ニハ必水アリ、兩水ノ間ニハ必山アリトイヘバ、マヅ一條ノ大川アリ、左右ヨリ多少ノ小川流レ入ニ、其間山林等交リテ大概一同ノ地ヲ容ベキヲ以テ、此ノ如ク定ムルナルベシ、其實ハ廣狹大ニ同ジカラザル者アルベキナリ）

都鄙授レ田幷賦役

此條司馬法及周禮匠人ノ趣ヲ取テ擧レ之、案ズルニ、遂人溝洫匠人井田ノ兩法決シテ合ベカラザルヨシ、朱子ノ說前ニ擧ルゴトク也、然ルニ近代ニ至テモ猶種々說アリテ、遂人・匠人一法也トイフモ少カラズ、義疏ナドモソレニ據リ、其說牽合ニ似タルモ多ク聞ユ、(或ハ遂人ハ積數、匠人ハ方法也トテ、井田ノ九數ト溝洫ノ十數トヲ同事ト見タルモアリ、或ハ匠人ハ溝畛洫涂ノ類ヲ除タルモノニテ、其地ハ遂人ト替リナシ、遂人ノ十夫モ其實ニ耕スモノハ九夫也トイフモアリ、猶諸說多端ナリ)其ウチ從フベキモノハ、匠人ノイハユル井間・成間等ノ間ノ字ヲ以テ中間ノ義トシタル說也、此間ノ字ヲ間際ノ義トスレバ、遂人・匠人・溝畛・洫涂ノ數大ニ違ヒテ、遂人ニ畿ニ達ストイヘルニ適ハズ、其遂人匠人ノ文ハ左ノゴトシ

遂　人

凡治レ野、夫間有レ遂、遂上有レ徑、十夫有レ溝、溝上有レ畛、百夫有レ洫、洫上有レ涂、千夫有レ澮、澮上有レ道、萬夫有レ川、川上有レ路、以達ニ于畿一

匠　人

九夫爲レ井、井間廣四尺、深四尺、謂ニ之溝一、方十里爲レ成、成間廣八尺、深八尺、謂ニ之洫一、方百里爲レ同、同間廣二尋、深二仭、謂ニ之澮一、專達ニ於川一、各載ニ其名一

遂人ノ趣ハ鄕遂溝洫ノ條ニイフゴトクニテ、百夫ニ一洫九溝、萬夫ニ一川九澮ナレバ、一成九百

ツトナル、コレヲ方ニシテ其中ノ七十畝ヲ公田トシ、其外ニ連ナル八ツノ田ヲ八家ニワケテ、家ゴトニ七十畝ヲ私田トス、其公田ハ八家力ヲ合セ耕シテ其稅ヲ奉リ、私田ハ各己ガ有トシテ其内ヨリ又貢スル事ナシ、コレ民ノ力ヲカリテ公田ヲ助ケ耕ストイフ心ヲ以テ助法トイヒ、又助ハ藉也トモイヘリ、其田ノ堺井ノ字ニ似タルユヱ、井田ノ法トモイフ也、周ニテハ一夫ゴトニ百畝ヲ受テ公田百畝ヲ耕ス也、其法ハ右ニ同ジ

○井田ノ法、歩百ヲ畝トシ、畝百ヲ夫トスル事溝洫ノ法ト同ジ、畎・伐・遂・徑モ皆同ジキ也、サテ「夫三爲ﾚ屋、屋三爲ﾚ井」（圖第十三第十四）トテ一夫ヲ三ツ重ネタルヲ屋トイヒ、屋三ツ合セタルヲ井トイフ、一井ノ田ハ方一里積九夫（九百畝）也、中ノ一夫（百畝）ヲ公田トシ、廻リノ八夫（八百畝）ヲ私田トス、サテ一屋ノ間々ニ溝畛アリ、遂徑ヲ横トスレバ、溝畛ハ縦也、一井ノ地ニハ左右ノ横ニ各一溝一畛アリ、中ニ二溝二畛アリ、合セテ四溝四畛也、井十爲ﾚ通（圖第十五）トテ此一井ヲ十ナラベタルヲ通トイフ、通ハ廣サ一里、長サ十里、積九十夫、（九千畝）ノ地也、又通十爲ﾚ成（圖第十六）トテ此通ノ地ヲ十重ネタルヲ成トイフ、成ハ方十里、積百井（九百夫）ノ地也、一通ノ間々ニ洫涂アリ、是ハ横也、又成十爲ﾚ終（圖第十七）トテ一成ノ地ヲ重ネタルヲ終トイフ、終ハ廣サ十里、長サ百里、積千井（九千夫）ノ地也、又終十爲ﾚ同（圖第十八）トテ此終ノ地ヲ十並ベタルヲ同トイフ、同ハ方百里、積一萬井（九萬夫）ノ地也、一終ノ間々ニ澮道アリ、コレハ又縦也、サテ此一同ノ外ニ川路アリテ同ヲ纒フ也、是都鄙ノ地ニ用ル所ニテ、コレヲ井牧ノ法トイフ、孟子ニ「野九一而助」トアルハ是也ト先儒イヘリ

公邑

甸・稍・縣・都ノ地ハ皆公邑アリ、（夏ノ世ニハ、是ヲモ閑田トイヘリ）甸ノ地ニテハ六遂ノ地ノ外ハ皆公邑也、稍・縣・都ノ地ハ三等采地ノ外皆公邑也、其内祿士ノ地アリ、是ハ天子ノ元士ノ知行所、又ハ公卿ノ子ノ父ノ死後爵ヲ續ズシテ、其祿ノミヲウクル者ノ知行所也、公田ハスベテ大夫ヲシテ治メシムル也、甸・稍ノ地ハ上大夫、（州長ノ類）縣・都ノ地ハ下大夫（縣正ノ類）奉行スベシト鄭玄ノ說也、サモアルベシト先儒イヘリ、田法賦役スベテ遂ニ同ジ

邦甸ノ地總計

（圖第十二）邦甸ノ地十二同ニテ一百八萬夫アリ、山陵・林麓等三分ノ一（三十六萬夫）ヲ去、其餘七十二萬夫（八同）アリ、六遂ノ民七萬五千家ノ田數不易・一易・再易ヲ通ジテ六家ゴトニ十三夫ヲ受レバ、六遂スベテ十六萬二千五百夫（一同ト七萬二千五百夫）ノ地ナリ、其餘五十五萬七千五百夫（六同ト一萬七千五百夫）ヲ以テ公邑トス

都鄙井牧法

邦・稍・邦縣・邦都ノ地ニアル公卿大夫ノ采邑ヲ都鄙トイフ、都鄙ノ地ハ井牧ノ法也、畿外邦國ノ郊外モ井牧ノ法ヲ用フ（井トイフモ、牧トイフモ同事也、左傳ニ井ハ衍・沃・牧・隰・皐トアリテ、牧ハ一等ワロキ田ニテイフ名也、下ニ詳也）

○井田ハ殷ノ助法也、殷ハ七十ニシテ助ストイヒテ、七九六百三十畝ヲ九ツニ割、七十畝ヅヽノ田九

鄙長　中士、每鄙一人　六遂凡七百五十人

里宰　下士、每里一人　六遂凡三千人

鄰長　五家一人　六遂凡一萬五千人

每遂其官里宰下士以上六百五十六人、六遂合セテ三千九百三十六人

此餘遂人師アリテ其政ヲ治ム、猶其上ニ大司徒アリ、爰ニ略ス

六遂以下ノ地圖廛

案ズルニ、周禮遂人ニ夫一廛トイフ事アリ、鄭注ニ、「廛城邑之居」孟子云、「五畝之宅、樹レ之以二桑麻一者也」トイヘリ、又載師廛里ノ注ニハ、「廛里者若二今之邑里居一矣、廛民居之區域也、里居也」ト見エタリ、注文ニテハ載師ノ廛里モ、遂人ノ廛モ大カタ同事ノ樣ニ見ユレドモ、廛里ハ鄭注半農人ニテ、一家一夫ノ地トイヘリ、孟子ニイヘルハ五畝ナレバ、同事トモ聞エズ、此二ツ先解分明ナル者ナシ、然ルニ圖廛ノフタツハ郊內ニ限ラズ、甸・稍・縣・都ニワタリテイヅクニモ有ベキヨシ、六鄉ノ所ニイフガ如クナレバ、廛里ノ廛モ、遂人ノ廛モ同事ナルベキカ、城邑ノ居ナレバ總樣ノウチニテ減去スル三分一ノ內ニアルベシ、鄭注廛里場圃ヲ以テ半農人トシテ計ヘタル意ハ解シガタシ、今姑ク愚見ヲ述テ參考ニ備フ（小雅信南山ノ詩ニ「中田有レ廬、疆場有レ瓜」ト見エタル、此廬ハ便利ノタメニ田中ニ設ケタルモノ也トイヘリ、此說從フベシ○漢書食貨志ニ廬舍ノ說アリ、此事ハ井田ノ處ニイフベシ）

一酇ハ二百十七夫弱、一鄙ハ千八十三夫強、一縣ハ五千四百十七夫弱、一遂ハ二萬七千八十三夫強、
六遂合セテ十六萬二千五百夫ノ地トス

一　遂	一萬二千五百家其田二萬七千八十三夫強	
五　縣	二十五鄙	百二十五酇
五百里	二千五百鄰	
六　遂	七萬五千家其田十六萬二千五百夫	
三十縣	百五十鄙	七百五十酇
三千里	一萬五千鄰	

右每家出兵一人六鄉ト同ジ

六遂ノ官員

六遂ノ官六鄉ニ準ズ、但爵秩スベテ一等下レリ（軍ニアルベキ時ニ臨ミテ爵秩アゲテ六鄉トヒトシクストイフ說アリ、イカヾ難レ信）

遂大夫	中大夫、每遂一人	六遂凡六人
縣　正	下大夫、每縣一人	六遂凡三十人
鄙　師	上士、每鄙一人	六遂凡百五十人

六遂毎家ノ人數六鄕ト替ルコトナシ、力役ノ者モ上地ハ一家三人、中地ハ二家ニ五人、下地ハ一家二人ノツモリナレドモ、六遂及四所ノ公邑ハ下劑致レ甿トテ、上中下三等ノウチニテ下等ニツキテ、スベテ上中下ノ差別ナク、一家二人ヲ力役ノ者トス、其內一人ヲ正卒トシ、一人ヲ羨卒トス、是野人ヲ優スル也トイヘリ、(コレニ因テ六鄕ノ賦役ヲバ、三劑致甿ノ法トイフ也)

○一家ノ田數人數大凡右ノゴトクナレドモ、成長ノ子弟多ク田數不足ナルニハ、又其人數ヲ計リテ其內ニテ夫婦アル者ニ田ヲ授ル也、コレヲ餘夫トイフ、此餘夫即羨卒也トモイヘリ(餘夫ノコト說多シ、今一說ニヨリテイフ)

六鄕ノ地ニ餘夫ノ文ナシ、近郊・遠郊ノウチハ、六鄕ノ衆及九等ノ田ニテ餘地ナキ故、其餘夫ハミナ邦甸ノ地ニ出テ耕ス也トイフ、コレ舊說ノ趣也、義疏ニハ輸將ヲ以テ公事ニ服スル者、皆近ク鄕ノ地ヨリ取ユヱ也トイヘリ、(輸將ヲ以テ公事ニ服スル者トハ、王夫ノ力役ノ者ヲイフニハアラズ、後世ノ傭功人ノ類ヲイフナルベシ)

六遂并六軍

六遂ハ邦甸ノ地ニアリ、遂人ニ鄰里ノ法アリ、專ラ大司徒ノ比法(比閭族黨ノ法是也)ト同ジ、タヾ其名ノ異ナルノミ也、五家ヲ鄰トシ、五鄰ヲ里(二十五家)トシ、四里ヲ酇(百家)トシ、五酇ヲ鄙(五百家)トシ、五鄙ヲ縣(二千五百家)トシ、五縣ヲ遂トス、一遂ハ一萬二千五百家ナリ、六遂スベテ七萬五千家也

コレヲ以テ田法ニ當ルニ、六遂ノ地六家十三夫ヲ受ル故、一鄰ハ十一夫弱也、一里ハ五十四夫強、

ラデナシトイヘリ、又唐山ハ殊ニ土地廣クシテ田地少ナク、耕種ノ地ハ十分ノ一ナラデナシトモイヘリ、コレヲ以テタヾ其大數ヲイフナルコトヲ知ベシ)

六遂授レ田

六遂ノ地田ヲ授ルコト六郷ト同ジ、タヾ上地ニ五十畝ノ餘分ヲ授クル、是六郷トノ違ナリ、王城遠ク不自由ナル故、遠方ヲ饒ニスル意也トイヘリ、其餘分ノ田ヲ萊トイフ

上地	一家	田百畝	萊五十畝
中地	一家	田百畝	萊百畝
下地	一家	田百畝	萊二百畝

右三家ニ六百五十畝ナルユエ、槩數ヲ以テイヘバ六家十三夫アタリトナル也、又此外ニ餘夫ノ田トイフアリ、是ハ正夫ノ四之一分二十五畝ヲ相當トシ、ソレニ正夫ノ割ヲ以ヲ萊ヲソヘテ授ル也、餘夫ノコトハ次條ニイフベシ

上地	一人	二十五	萊十二畝半
中地	一人	二十五畝	萊二十五畝
下地	一人	二十五畝	萊五十畝

六遂每家ノ人數幷賦役附餘夫

九品カナラズ皆一萬夫トイフニハ非ズ）不易・一易・再易ヲ通ジテ一家一夫トスレバ、九品合セテ九萬家也、然レドモコレ半農人ニテ、二家ヲ以テ正夫ノ一家ニアツル故、九萬家ハ四萬五千家ニアタル也、六郷七萬五千家ト合セテ十二萬家トス、コレ近郊・遠郊・四同三十六萬夫ノ大抵也

邦甸ノ地以下山陵林麓等十八分ノ五ヲ去トイフ説

邦甸ノ地以外ハ城郭宮室ノ類モ少ナク、道路モセマク成ナレバ、三分一ヲ減ジテハ過分也、十八分ノ五ヲ去ベシトイフコト鄭玄ノ説也、此説ノヨル所ヲ考ルニ、六郷ノ地ハ上中下田ヲ合セテ、三家ニ六夫、六家ニ十二夫ヲウク、六遂ノ地ハ上田ニ五十畝ノ萊アル故、三家ニ六夫半、六家ニ十三夫也、（萊ノ事次條ニイフ）六遂ヲ以テ六郷ニ比スルニ、六遂ノ田地六郷ノ十二分ノ一多クナル故、其田地ニアタル家數ハ六郷ヨリハ少ナシ、サル故ニ山陵・林麓等三分ノ一減ズル數ヲヘラシテ十八分之五ヲ減ズ、六郷ニテハ三分一減ズル故十八分トスレバ、三分一ハ六分ニアタル也、六遂ノ地ニテ其一分ヲヘラシテ、十八分ノ五ヲ減ズレバ田地ニ不足ナク、家數六郷ノ數ニ準ズルユエ此法ヲタテタル也、然レドモ上地ニ五十畝ノ萊アルハ遠方ヲ饒ニストイヘリ、山陵等ヲ減ズルハ地勢ニヨルコトニテ、本ヨリ別ノ事ナレバ其說當レリトハイヒ難シ、マシテヤ此法只其大略ヲイフナレバ、細數ニ拘ルベキニアラズ、漢志ニ一百分ノ三十六減ズル法モアリ、タヾ大略ヲ以テ三分一ヲ減ジテ事タルベシ、都鄙邦國トモニ同事也（天下ノ地勢ヲイヘバ山嶽多クシテ平地少シ、スベテノ土地ヲ四ツニ割テ、山ハ其三分、平地ハ其一分ナ

八家ノ者モコレニ屬セシ也、圭田モ同事ナルベシ、ソレ故ニ圭田征ナシトイヘル也トイヘリ、朱子モモト郷遂ノ田法溝洫トイフニ從ヘルナレドモ、此說ニヨレバ九等ノ地ハ井田トスル意ニヤ、タヾシ圭田ハ九等ノウチニアラズトスルニヤ）

溝洫井田兩法一致ニ歸ス

田法溝洫ト井田ハ別法也、溝洫ノ法ハナホ以テ數ヲ起シ、百夫萬夫トタテヽ、萬夫ニ川アリトイフヲ限ニテ、サテ畿ニ達ストイヘリ、井田ハ九ヲ以テ數ヲ起シ、九百夫ヲ一成トシ、九萬夫ヲ一同トシテ、同間廣サ二尋深サ二仭ナルヲ澮トストイヒテ、サテ川ニ達ストアリ、田數ノタテ樣違ヒ、マタ水道ノ多少モ差ヘルニ似タリ、然レドモ溝洫ノ法ノ百夫萬夫ヲ（圖第九第十）各九ツ合セバ即一成一同トナル、（一成ハ九百夫一同ハ九萬夫ナレバ也）水道ノ設樣モ大抵合ル趣アリ、其ヨシハ井田ノ下ニイフベシ、今此次ニ郊ノ地四同三十六萬夫ノ總計ヲ擧ルニツキテ、マヅ其一致ニ歸スル事ヲコヽニシルス

近郊遠郊ノ總計

右ニ段々載ル（圖第十一）ゴトクナル故、今六郷及九等ノ地近郊・遠郊ニアル田數ノ總計ヲイフ、郊ノ地四同三十六萬夫（一同ハ九萬夫ヅヽナリ）山陵・林麓・宮室・塗巷ノ類三分ノ一（十二萬夫）ヲ去、（王城十二里モ固ヨリ其内ニアリ）餘二十四萬夫（二同ト六萬夫）ナリ、六郷ノ民七萬五千家ノ受ル田數、不易・一易・再易ノ三等ヲ通ジテ一家二夫ヲウクレバ、十五萬夫（一同ト六萬夫）ノ地也、其餘九萬夫ヲ以テ廛里等九品ニアツレバ、九品各一萬夫也、（コレ唯大概ヲイフ也、

解不レ詳、但地官場人ニ國之場圃ト見エタレバ、國中ナルベシトイフ說アリ、是モ如何、義疏ニ附郭ノ地也トイヘリ、今コレニ從テ本文ヲ書ス）「以二宅田・士田・賈田一、任二近郊之地一、以二官田・牛田・賞田・牧田一、任二遠郊之地一」トアリ、鄭玄ナドヨリ以來種々說アリテ決シガタシ、今大カタ鄭注ニヨリテ載レ之、一說ノ捨ガタキモノハ分書シテ疑ヲ殘ス也、載師本文右ノ次ニ「凡任地國宅無レ征（國宅トハ官舍ノ類ナイフ）園廛二十而一、近郊十一、遠郊二十而三、甸・稍・縣・都・皆無レ過二十二一」トアリ、十一ノ稅ハ三代ノ通法ナルヲ、二十之三又ハ十二ナドトアルニ付テ先儒種々ノ說アリ、然ルニ軍禮通考ニ載ル方觀承ガ辨、諸說ニスグレテ聞ユ、其趣ハ此條上文ヲウケタレドモ、田稅ノコトニハアラズ、「園廛二十而一」トイフヨリ下、スベテ城中ヲハジメ近郊・遠郊・甸・稍・縣・都ニアル園廛ノ征ヲイフ也トイヘリ、コレ極メテ然ルベシ、園廛トイフハ卽上文ノ廛里・場圃也、廛里・場圃ヲハジメ九等ノ田ハ、國中及近郊遠郊ニアルノミニアラズ、畿內ノ地イヅクニモ皆アルベク、載師ノ文ハ王城四郊ヲ擧テ其例ヲ示スナルベキヨシ陳傅良モイヘリ、（載師ニ公邑之田ハ任二甸地一トアレドモ、公邑ハ甸地ノミニアラズ、稍・縣・都ノ三地ニモ皆アルト同ジ趣也、廛里ノコト猶六遂ノ所ニイフベシ）○右ノゴトクナレバ此九等ノ內廛里場圃ハ二十之一ヲ貢ス、士田ヲ圭田ト見レバ圭田ハ無征、□□其餘ノ六等稅法考ベカラズ、モシ稅アラバ皆十一ナルベキカ、賦役ノ事モ詳ナラズ、遠郊ノ內ニアルナレバ六鄉ト同ジカルベシトモイヘリ、（朱子圭田ノ說ニ、大抵イニシヘ田祿ハ皆助法ノ公田ヲ授ケテ、其一井

廛里以下九等ノ田

六鄕六軍ノ衆ハ近郊遠郊ノウチニアルコト前ニイフガゴトシ、此外郊ノ地ニ於テ廛里・場圃・宅田・士田・賈田・官田・牛田・賞田・牧田トイフアリ、廛里ハ王城ニ限ラズ、スベテウチニアル民家ノ空地也、場圃ハ城邑ノ側ニアル園ニテ、草木瓜瓠ノ類ヲ植テ其利ヲ貢スル地也、廛里・場圃ノフタツハ田地ニアラズ、其利少キ故其稅カロシ、（次ニ詳ナリ）サテ宅田トイフハ、致仕ノ者ノ家ニ受ル田也、（一說ニ、士ノ未レ仕シテ家ニ居ル者ノ耕ス田也トイヘリ）士田ハ官ニ仕フルモノ常祿ノ外ニ受ル田ニテ、孟子ニ見エタル圭田也、(祭祀ノ爲ニ賜ル田也○一說ニ、士田ハ士ノ子ノ耕ス田也トイヘリ) 賈田ハ城市ニ居ル賈人ノ其家ニ受ル田也、（一說ニ賈人ノ子ノ耕ス田也トイヘリ）官田ハ庶人ノ官ニメサレテ役人トナリタル者ノ其家ニ受ル田也、牛田・牧田ハ牛飼・馬飼ノ類ノ家ニ受ル田也、賞田ハ賞賜ノ料ニ設ケ置田也、此九ツノモノ郊ノ地ノウチニアリ、六鄕ノ地ヲ除テ其餘ヲ以テ是等ノ田トス、上中下地ヲナラシテ一家ゴトニ一夫ヲウクル故、コレヲ半農人トイフ、猶後ニイフヲ照シ見ルベシ

案ニ、此九等ノ田ノコト、モト地官載師ニ見エタリ、其文「以廛里任國中之地」(國中トハ城中ヲイフ、「任國中之地」トハ國中之地ニオクトイフ程ノコトナリ)、以場圃任園地(鄭注ニ「樊圃謂之園」トアリ、又天官大宰園圃ノ注ニ、樹果蓏曰、圃園トハ其樊ナリト見ユ、圃ハハタケ也、其廻リニ垣ヲシテ圍タル所是園也、サテ園地トアレバサス所アル詞也、然ルニ園地イヅクトイフコト先

旅帥　下大夫　毎旅一人　六郷凡百五十人

卒長　上士　毎卒一人　六郷凡七百五十人

兩司馬　中士　毎兩一人　六郷凡三千人

伍長　毎伍一人　六郷凡一萬五千人

毎軍其官三千百五十六人、六軍合セテ一萬八千九百三十六人

外

毎軍府二人、史六人、胥十人、徒百人

府ハ藏ヲ司ルモノ、史ハ物カキ、胥徒ハ輕キツカヒモノナリ

此餘猶大司馬・小司馬等コレヲ統司ル也、此ニ略ス

○右軍將ヨリ伍長マデノ官常ニ六官（天官・地官等ノ六官ヲサシテ云）及六郷ノ吏ノウチヨリ兼シメテ、別ニ此官ヲ設ルコトナシ、マタ六郷ノ比長ハ下士ナレバ、此伍長モ下士ナルベキヲ、下士トイフコト經ニ載ズ、ソレハカノ比長ハ常ニ五家ノ治メカタヲ司ル役ナル故、徳行才能ヲ撰ミテ下士ノ爵ヲ賜ヒテ比長トナルコトナリ、軍旅ニ在テハ專ラ勇壯ノ者ヲ撰ム故、比長ヲ以テ伍長トスルコト決定ニハ非ザレバ也（六郷ノ外五家ノ長タル者モ、モト士ニハ非ルナリ）

府史胥徒ノ四ツハ、軍旅ノ事アル時ニ臨ミテ任ズル也、常ニ此官アルニ非ズ

郷大夫　卿 每鄕一人　六鄕凡六人
州長　中大夫 每州一人　六鄕凡三十人
黨正　下大夫 每黨一人　六鄕凡百五十人
族師　上士 每族一人　六鄕凡七百五人
閭胥　中士 每閭一人　六鄕凡三千人
比長　下士 五家ニ一人　六鄕凡一萬五千人

每鄕鄕大夫以下其官三千百五十六人、六鄕合セテ一萬八千九百三十六人
此餘猶大司徒・小司徒・鄕師アリテ其政ヲ治ル也、此ニ略ス
○右ノウチ鄕老トイフハ三公ニテ、三公各二鄕ヅヽ請取ニテ其民ヲ敎諭シ、賢能ヲ興シ擧ルコトヲスベ司ル也、鄕大夫ハ則冢宰・大司徒等ノ六卿也トイヘリ、(又別ニ鄕大夫トイフ官アリテ、六卿ノ外コレモマタ卿也トイフ說モアリ、一決シガタシ)サテ又比長トイフハ則一比五家ノウチニテ其人ヲ撰ミテ用フ、閭胥以上ハ別ニ設ケタル官ニテ、比閭・族黨ノ民ニハアラザル也

六軍ノ官員

軍將　命卿 每軍一人　六鄕凡六人
師帥　中大夫 每師一人　六鄕凡三十人

五州　二十五黨　百二十五族
五百閭　二千五百比
一軍　一萬二千五百人
五師　二十五旅　百二十五卒
五百兩　二千五百伍
六鄉　七萬五千家其田十五萬夫
三十州　百五十黨　七百五十族
三千閭　一萬五千比
六軍　七萬五千人
三十師　百五十旅　七百五十卒
三千兩　一萬五千伍
六鄉六遂ノ軍ハ、車馬甲兵ノ類皆官ヨリ渡ス也、賦法重クシテ餘力ナキ故トイヘリ

六鄉及六軍ノ官員

六鄉ノ官員

鄉老　公二鄉ニ一人

賢者・及能アル者・天子ヘ奉公スル者・又ハ病人・此類ノ者ハ役ニ使フコトヲユルス也、又八十ハ「一子不㆑從㆑征」トテ八十ニナレバ其子一人役ニ使フコトヲユルシ、九十ハ「其家不㆑從㆑征」トテ一家ノ役ヲユルス也、其外父母ノ喪ニハ三年其者ノ役ヲユルシ、齊衰大功ノ喪ニハ三月ノ間ユルス也、家ヲ移シテ外ニ去ントスル者ハ三月使ハズ、又今外ヨリ來テ移リタル者ハ一年使ハズ、是皆周禮禮記ノ法也

六鄕幷六軍

六鄕ハ近郊遠郊ノ地ニアリ、大司徒ノ法五家ヲ比トシ、五比ヲ閭二十五家トシ、四閭ヲ族百家トシ、五族ヲ黨五百家トシ、五黨ヲ州二千五百家トシ、五州ヲ鄕トス、一鄕ハ一萬二千五百家也、六鄕スベテ七萬五千家」コレヲ以テ田法ニアツルニ、六鄕ノ地二夫ヲ一家トスル故、一比ハ十夫也、一閭ハ五十夫、一族ハ二百夫、一黨ハ千夫、一州ハ五千夫、一鄕ハ二萬五千夫也、六鄕合セテ十五萬夫ノ地トス

小司徒卒伍ノ法五人ヲ伍トシ、五伍ヲ兩二十五人トシ、四兩ヲ卒百人トシ、五卒ヲ旅五百人トシ、五旅ヲ師二千五百人トシ、五師ヲ軍トス、一軍スベテ一萬二千五百人也、六軍合セテ七萬五千人トス、天子六軍トイフ是也、(此外ニ六遂ニ又六軍アリ、六鄕ノ六軍ヲ正軍トシ、六遂ノ六軍ヲ副倅トス、合セテ十二軍アレドモ、一時ニ出ル事ハナク、六軍ヅヽヲ用ル定ユヱ、六軍トハイフ也) コレ六鄕七萬五千家ヨリ家ゴトニ一人ヲ出ス也、其總數ヲ擧レバ左ノ如シ

一鄕一萬二千五百家其田二萬五千夫

六鄕每家人數并賦役（皇國近世戰以來ノ兵賦此ニ本ヅケリ、別ニ詳ニ論レ之）

總ジテ上地ハ每家七人トス、其內一人ハ老人ト見テ除レ之、其餘六人ノ半分三人ヲバ、十五ヨリ六十五マデノ男夫ト見テ、一家ガ役ニ任ズル者三人トス、（但國中ニテハ二十ヨリ六十マデヲ力役ニ任ズ、國中ハ役夫ニ使フコト繁ク、其勞多キ故遲ク使ヒテ早クユルストイヘリ、此國中トハ城中ヲイフナルベシ）中地ハ每家六人トシ、右ノ割ヲ以力役ニ任ズル者二人半トス、（二家ニ五人也）下地ハ每家五人力役ノ者二人也、但每家七人六人五人トイフハ中分ヲ以テ云也、其實ハ夫婦二人住ノ者ヨリシテ十人マデスベテ九等トス、サテ上中下ヲナラシテ見レバ、力役ノ者二家ニ五人也（一家二人半）此內徒役ヲ起ス時每家一人ヲ限ニテ其餘ヲ羨卒トイフ、留守ノ耕作又ハ更代ノタメニ殘ス也、サテ是ヲ常ニハ城郭・塗巷・溝渠・宮廟等ノ普請ニ用フ、每年三日ヨリ多クハ使ハズ、其三日トイフモ豐年ノ例也、中年ニハ二日、無年ニハ一日ナラデハ使ハズ、モシ凶札ノ年ニアヘバスベテユルシテ使ハザル也、（此コト周禮均人ニ見エタリ、註ニ、豐年トハ人ゴトニ四鬴ヲ食フ年也、中年トハ三鬴ヲ食フ年也、無年トハ二鬴ヲ食ヒテ贏餘ナキ年也トイヘリ、是皆一月ノ飯米ヲイフ、一鬴ハ六斗四升也、周禮廩人ニ見ユ）然レドモ軍旅ノ時ハ此日限ニハ拘ラズ、其模樣ニ從ヒ使フ也、ソレモ一人ニ過ルコトナシ、田獵ノ時及盜賊ヲ追捕スルニハ、羨卒トモニ皆出ル也、是ハ田獵ハ軍事ヲ習フタメ、盜賊ノ追捕ハサバカリ遠ク鄕里ヲ去ニモアラザル故、此兩事ニハ皆ユク也、（一說ニ羨卒ハ則餘夫也トモイヘリ、餘夫ノ事ハ六遂ノ所ニイフベシ）サテ又十五以上六十五以下ニテモ、貴人・

ヲデナシトシルベシ、畿內邦國トモニ皆此心得也、(但六遂ノ地以下ニ至テハ十八分ノ五ヲ減ズトイフ說アリ、末ニイフ)

案ニ、漢書刑法志ニ載ル趣ニテハ、一百分ノ三十六ヲ減ズル也、許愼ノ五經異義モ然リトイヘリ、コレニヨレバ王畿九百萬夫ハ五百七十六萬夫トナリ、近郊遠郊三十六萬夫ノ地ハ、二十三萬四百夫トナル也

○井田ノ法ニテハ一同一成ノ上ニテ減ズルコトアリ、其所ニイフベシ

六鄉授レ田

一夫トイフハ百畝ニテ、則一家ノ授カル田也、然レドモ一家百畝ヲ受ルハ上地ノ事也、其實ヲイヘバ不易・一易・再易トイフ違アリ、不易トイフハ上地也、年々ニ耕シテモ地味カハラザル故、一夫百畝ノ外別ニ田ヲ授ラザルヲ云、一易トイフハ、一等次ナル田ニテ、年々耕ス時ハ地味變ジテアシキ故、定レル百畝ノ外ニ又百畝授リテ、百畝ヅヽ隔年ニ耕スヲイフ、再易ハ、又一等ワロキ地故、一人三夫ノ田ヲ授リテ、三年廻リニ耕スヲイフ、コレ六鄉及都鄙ノ法也、六遂ノ地又ハ畿外ノ邦國ニテハイササカ違アリ、末ニイフベシ、サテ右ノ如クナルユヱ、一人ノ授ル田地上地ナレバ一夫百畝也、中地ナレバ二夫、二百畝下地ハ三夫三百畝ナリ、押ナラシテ一人ニ二夫アタリトナル、然レバ百夫ノ地ハ五十家、萬夫ハ五千家ト心得ベシ

ズ、鄭氏ノ分チテ兩項トシタルガ却テ是也トイヘリ、今朱說ニ從テ兩樣ニワカテリ、詳ナル事ハ末ニシルス

○田法ニ南畝・東畝トイフ事アリ、是ハ其田ノ東方ノ畝南方ノ畝トイフ意ニハ非ズ、モト詩經小雅信南山ノ詞ニ「南二東其畝一」ト見エタルヨリイヘル也、一畝ノ田ハ廣サ一步長サ百步ニテ、其形長キモノ也、東西ニ長ク作リタルヲ東畝トイヒ、南北ニ長ク作リタルヲ南畝ト云、其地ノ形勢ニ隨テ南ニモ東ニモ便利ヨキ樣ニ作ル也、圖畫ノ上ニテイフ時ハ常ニマヅ上ヲ南トシ下ヲ北トシ、左ヲ東トシ右ヲ西トスル故、畝ノ圖ヲ設ルニ縱ニ長ク畫タルハ南畝横ニ長ク書タルハ東畝ナリ、然ルニ遂人ノ鄭註及賈疏ニ以二南畝一圖レ之、則遂縱溝横、洫縱澮横トイヘリ、畝ヲ南北ト縱ニ圖スレバ、遂ハ東西トナリテ横也、溝以下モ皆違ヘリ、此事欽定義疏ニ辨ジテ、注疏ハ遂・溝以下ヲイヒテ畎・畝ニ及バザリシ故誤レルナリトイヘリ、今此本文義疏ニ從ヘリ

山陵林麓等三分ノ一ヲ去

前ニ載ル王畿方千里トイフハ、其地ノ廣サヲ統ベイフ也、九服ハサラ也其千里ノ内ニハ或ハ山陵、或ハ林麓・川澤・溝瀆・城郭・宮室・塗巷ノ類皆コモレリ、是等ハ田地ニナラザルコト故、大概ノツモリヲ以テスベテノ地面ノウチニテ三分一滅ジテ見ルコト王制ノ法也、シカレバ王畿千里ハ九百萬夫ノ地ナレドモ、其實ニ耕スベキ田地ハ六百萬夫ニ不レ過、近郊遠郊ノ地ハ三十六萬夫ナレドモ、耕作ノ地二十四萬夫ナ

水道アリ、コレヲ溝トイフ、コレハ又縱ニ設ク、溝ニソヒテ又道アリ、ヤヽ大ニシテ大車ヲ容ベシ、コレヲ畛トイフ、是ニテ十夫千畝九遂一溝トナル、三百歩ヲ一里トスル故、此地ハ長サ三里百歩、廣サ百歩也、サテ百夫（圖第六）ニ有レ洫、洫上有レ涂トテ、此十夫ノ地ヲ十合スレバ方十夫積百夫一萬畝ニテ、方三里百歩ノ地也、コレニ又廣サ八尺深サ八尺ノ水道アリ、コレヲ洫トイフ、溝ヲ縱ト見レバ洫ハ横也、洫ニソヒテ設ル道ヲ涂トイフ、乘車一軌ヲイルヽホドノ道也、コレニテ九溝一洫トナル、サテ千夫（圖第七）ニ有レ澮、澮上有レ道トテ、此百夫ノ地ヲ十合セテ長サ三十三里百歩、廣サ千歩ノ地ニ廣サ二尋深サ二仭ノ水道アリ、コレヲ澮トイフ、尋ハ八尺、仭ハ七尺也、然レバ廣サ一丈六尺深サ一丈四尺ノ水道也、洫ヲ横トスレバ澮ハ縱ナリ、澮ニソヒテ設ル道ヲ道トイフ、コレハ乘車二軌ヲイルヽ幅也、コレニテ千夫十萬畝九洫一澮也、サテ萬夫（圖第八）有レ川、川上有レ路トテ、此千夫ノ地ヲ十合セテ方三十三里百歩積、萬夫百萬畝ノ地ニ川アリ、（自然ノ川ヲ云）川ニソヒテ道アリ、コレヲ路トイフ、廣サ車三軌ヲ容ルヲ限トス、以上郷遂ノ地ニ用ル所ニテコレヲ溝洫ノ法トイフ、孟子ニ「國中什一使ニ自賦ニ」ト見エタルハ是也ト先儒イヘリ

此條專ラ周禮遂人ニヨリテイフ、案ズルニ、周禮ノウチニ田法ヲ擧ルコト遂人・匠人ノ違ヒアリ、遂人ハ十ノ數ヲ以テイヒ、匠人ハ九ノ數ヲ以テイフ、鄭玄コレヲ以テ貢法助法ノ違也トイヘリ、其後諸儒ノ論區々ニテ一定ナルコトナシ、或ハ鄭説ニ從フモアリ、又ハ周ノ世井田ヲ用ルハ天下ノ通法也トテ、遂人・匠人同事ノ趣ニ説ヲナスモアリ、朱子ハコレヲ論ジテ二ツノモノ決シテ合ベカラ

其初メ立タル法ノワロキニハ非ズ、世ヲ經テ後ニカヽル弊ハ出來タルナルベシトイフ、是先解ノ趣也
圖第三○古ヘ用シ耜（スキ）耒頭ノ金ト注ス、耒（スキカラ）ノ類ニツキタル刄ノアル金也ハ周尺ニテ廣サ五寸アリ、二人立テ此スキヲ二ツ並ベテ田ヲ耕スヲ耦トイフ、ソノ幅一尺トナル、其上ヲ發シテ高クシタル所ヲ伐トイヒ、其溝ノ如クナリタル所ヲ甽畎ノ字ト同ジト云、サテ六尺ヲ歩トシ、歩百ヲ畝トストイヘバ、一畝ノ地ハ幅六尺ニ長サ百歩也、一伐一甽ノ幅ハ二尺ナレバ、三伐三甽ニテ幅六尺ヲ得ル也、然レバ一畝ノ地ハ幅六尺、三伐三甽ニテ其長サ百歩也、（前漢書食貨志ニ一畝三甽トアル是也、苗ハ其甽中ニ殖ル也、甽ハ字書ニ水小流トアリ、甽中クボクシタルハ水ヌキノ爲也、古ヘハ稻ヲ作ルニ田中ニ水ヲ湛ヘテ植ルノ法ナク、タヾヒタスラ水害ヲ恐レテ、田間ノ水ヲバ疏通シテ其患ヲ除クコトヲ旨トセシ也、此次ニ擧ル遂・溝・洫・澮ノ類モ皆田間ノ水ヲ流シ捨ルコトヲ專トス、古今ノサマヲ辨ヘザレバ思誤ルコトアル故、コレヲ辨ズ○又畎ハ畝ト畝ノ間ニアリトイフ說アリ、然レドモ周禮匠人ノ趣サヤウニハ見エズ、食貨志ノ一畝三畎トイフモノ、周禮トヨク合ル故、今コレニ從フ）圖第四此一畝ヲ百合セテ方百歩ノ地ヲ一夫トイフ、（一萬歩ノ地也、コレ一夫ノ受テ耕スベキ地ナルユエ、コレヲ一夫トイフナリ）畝百ヲ爲レ夫トイフ是也、サテ「夫間有レ遂、遂上有レ徑」トテ夫ト夫ト並ビタル間ニ、廣サ二尺深サ二尺ノ水道アリ、コレヲ遂トイフ、畎ヲ縱ト見レバ、遂ハ横也、遂ニソヒテ小道アリ、是ヲ徑トイフ、徑ハ車馬ヲ容トアリテ、車馬ノ往來シテ狹カラザル程ニ作ル也、サテ圖第五「十夫有レ溝、溝上有レ畛」トテ十夫重リタル所ニ、其ニソヒテ廣サ四尺深サ四尺ノ

王畿（或ハ圻ノ字ヲモ用フ、同意也）トス、或ハ國畿トモイヒ、又邦畿トモイフ、又コレヲ甸トモイフ、（甸トイフハ、五百里ハ甸服ニアルヨリイヘル也）猶此末ニ詳ニイフヲ見ルベシ、（漢志ニハ周ノ時洛邑ト宗周ト通ジテ封畿千里也トイヘリ、實地ハサモアルベシ、宗周トハ鎬京ノコトナリ）

鄕遂溝洫法（溝トイフモ洫トイフモ、田間ノ水道也、コレヲ以テ田法ノ名トスルコト經文ニ見エズ、タヾ井田ヲ作ラズシテ、溝洫ヲナストイフ意ニテイヘルナルベシ）

郊ノ地ト甸ノ地ハ田法殘ラズ此溝洫ノ法也、六鄕六遂コノ地ニアリテ各六軍ヲ出ス、ソレヲ主トシテ鄕遂ノ地トイフ、廛里・場圃九等ノ田、サテハ甸・稍・縣・都ノ四地ニ散在スル公邑、其外畿外諸侯ノ郊内モ皆此溝洫ノ法ヲ用フ

○溝洫トイフハ則夏ノ貢法也、タヾシ夏ノ法ト差ヘルハ、夏ハ五十ニシテ貢ストイヒテ、一夫ゴトニ田五十畝ヅヽヲ受テ耕作シ、其ウチヨリ十分ノ一五畝ノ米ヲ計テ上ニ貢スル也、コノ溝洫ノ法ハ一夫ゴトニ百畝ヲ受テ、十分一十畝ノ米ヲ貢ス、其耕ス所ノ十分一ヲ貢スルコトハ同事也、總ジテ貢法ハ助法ト違ヒテ、公田トイフヲ置コトナク、私田ノ内ニテ貢上スル數ヲ定テ、年々其數ノ如クニ出スナレバ、今ノイハユル定免也、其數ヲ定ルニ豐年ヲ以テ計レバ、凶歉ノ時ニ至テ民苦ミ、凶年ヲ以テ計レバ、上ノ用度足ザル憂アリ、此二ツハ共ニワロシ、タヾ數年ノ間ニ豐凶ノ中分ヲ考テ定ムル時ハ、上ニ足ザルコトモナク、下ニ怨ムベキ筋モナキハヅ也、夏ノ世ノ法モ必如レ此有シナルベキヲ、イカナレバ貢ヨリ不善ナルハナシトイヒ、終歲勤動シテ父母ヲダニモ養ヒ得ズナドイヘルトイフニ、コレハ

概ニ看ベカラズ）〇邦甸ノ地ハ遠郊ノ四面ヲ遶リテ十二同アリ王城ノ四方百里ノ外二百里ニイタル地ナリ、又是ヲ州トモ云、此甸ノ地モ田法溝洫ヲ用フ、六遂ノ軍此所ニアリ、六遂ノ地ノ外ハ公邑トテ天子ノ公領也〇邦削（又稍トモ書也、鄁ノ字ヲモ用フ）ノ地ハ甸ノ四面ヲ遶リ、王城ノ四方二百里ノ外三百里ニ至ル凡テ二十同ノ地ナリ、其内ニ大夫ノ采地アリ、方二十五里ヅヽノ小國六十三也、コレヲ家邑トイフ、王ノ子弟ノ疎遠ナル者、大夫ト同ジク小國ヲ受テコヽニアリ、家邑ノ地凡テ三同九十三成（一成ハ一百井也下ニ擧）七十五井アリ、此地田法井田也、其餘ヲ公邑及ビ祿士トテ天子ノ元士（上士也、附庸ニ視フトアル是ナリ）等ノ知行所トス、是ハ田法皆溝洫ヲ用フ〇邦縣ノ地ハ又稍ノ地ノ四面ヲ遶リテ二十八同アリ、王城ヨリハ三百里ノ外四百里ニイタル地也、此地ニ卿ノ采地アリ、方五十里ヅヽノ次國二十一也、コレヲ小都トイフ、又王ノ子弟ノ常並ナルモノ卿ト同ジク次國ヲウケテコヽニアリ、小都ノ地凡テ五同二十五井アリ、此地田法井田也、其餘ヲ公邑及祿士ノ地トス〇邦都ノ地（又畺トモイフ）ハ又邦縣ノ四面ヲ遶リテ三十六同アリ、王城ノ四方四百里ノ外五百里ニイタル地也、此地ニ公ノ采地アリ、方百里ヅヽノ大國九ツナリ、コレヲ大都トイフ、王子母弟ノ親シキモノハ公ト同ジク大國ヲ受テコヽニアリ、大都ノ地凡テ九同、是モ井田ノ法也、其餘ヲ公邑又ハ祿士ノ地トス、サテ家邑小都大都ノ三ツヲ皆都鄙トイフ也、（一説ニ稍・縣・都ノ地ヲスベテ都鄙トイフトモイヘリ）右ノ如クナル故都テコレヲイヘバ、王城ノ四方近郊遠郊ノ地ニテ一段、（百里）邦甸（二百里）邦削（三百里）邦縣（四百里）邦都（五百里）各一段合セテ五段ノ地、東西南北四面ヘ五百里、縱橫千里ノ間ヲ

考ベシ（禮記王制ニ、「九州州方千里」トアルハ、鄭註ニ殷ノ制トイヘリ、コレ要服以內ノ地ヲイヒテ方三千里也、又禹貢ニ見エタル五服ノ要服以內ハ方四千里也、代々ニ差ヘリ、詳ナルコトハ其書ニ就テ見ルベシ）

一說ニコノ九服ヲバ、毎服一面ニテ二百五十里ヅヽトシ、兩面ヲ合セテ五百里ト見テ、禹貢ノ五服ト同事ナリトイヘリ、今舊說ニ從フ

○夷服以外ノ地ノコトハ此書ニ用ナケレドモ、九服ノ全キヲ擧ルニ付テ合セテコレヲ記シヌ

王畿千里

（圖第二）王畿千里ノウチハ一百同（一同ハ方百里也下ニ詳也）ノ地也、井ニテイヘバ一百萬井、（一井ハ方一里也、コレモ下ニ擧）夫ニテイヘバ九百萬夫（一夫ハ方百歩也、コレモ下ニ擧）ナリ其眞中ニ王城アリ、方十二里也、サテ四方ヘ百里ヅヽ、方二百里（四同）ノ間ヲ郊トイフ、ソレヨリ又四方ヘ百里ヅヽ四段ニ分テ、邦甸・邦削・邦縣・邦都トイフ也、其郊ノ地ノウチ王城ヲ中ニシテ、四方ヘ五十里ノ間方百里ノ地ヲ近郊トイヒ、ソレヨリ外五十里ヲ遠郊トイフ、此郊ノ地ノ田法ヲ溝洫ノ法トイヒテ井田トハ違アリ、天子六郷ノ軍ハ此所ニアリ、其外廛里・場圃・宅田・士田ナドトイフ田九等ヲ置也、（此九等ノ田ハ郊內ノミニ限ラズ、王畿ノウチニイヅクニモアルベシトモイヘリ）サテ此遠郊ヨリ內ヲ國中トイヒ、遠郊ノ外甸ノ地以下ヲ野トイフ也、（或ハ王城ノ內ヲ國中トイヒ、城外ヲ野トイフ、又ハ王畿ノウチヲ國中トイヒ、畿外ヲ四郊トイフ、處ニ隨テ心得ベシ、一

徹法考

平榮實 著

王畿幷ニ九服

姫周ノ國土夏殷ノ制ニ倣テ、地ノ遠近ヲ以テ分チテ十等トス、(圖第一)天子ハ畿方千里トテ、王城ヲ中ニシテ四方ヘ五百里ヅヽ、合セテ方千里ノ間ヲ王畿トイフ、コレヨリ外ハ又五百里ヅヽ九重ニ分テ九服トイフ、(九服ノ事周禮職方氏及大行人ニ見エタリ、大司馬ニハコレヲ九畿トイヘリ、)其ウチ第一王畿ニ近キ服ヲバ侯服トイフ、其次ヲ甸服ト云、其ヨリ次第シテ男服・采服・衛服・蠻服(大行人ニハ是ヲ要服トイヘリ、)トイフ、此六服ハ公・侯・伯・子・男五等ノ諸侯ヲ封ズル地ニテ、コレヲ畿外邦國トイフ也、侯服ノ地ニアル者ハ毎歳朝覲シテ方物ヲ貢ス、甸服ナルハ二歳ニ一度、男服ハ三歳ニ一度、采服ハ四歳、衛服ハ五歳、蠻服ハ六歳ニ一度ヅヽ朝覲シテ各其方物ヲ貢ス、四方ノ國々各四ツニ分リテ四時ニ來朝スル也、此六服ノ外ニナホ三服アリ、夷服・鎭服・蕃服トイフ、此三服ハ九服ノウチニハ入タレドモ、王化ニ順ヒ年ヲ定メテ朝覲スル並ニハ非ズ、タヾ天子即位ノ時又ハ我國ノ代ノ替リタル時、一度來リテ見ユルノミ也、此三服ヲスベテ蕃國トイフ、サテ此王畿ト四方ニ環遶セル九服トヲ合セテ方一萬里ノ地トス、然レドモ是ハマヅ其大抵ヲイヒタルニテ、實地ハカホドニ非ルヨシ、其說アル事也、此九服ヲ初メトシテ次條ニ載ル趣ドモ、別卷ノ圖ト照シ合セテ

徹法考

徹法考一卷、錄周室田法兵賦之說、余曾考和漢兵制之次、略撮其要領、記之片紙以備遺忘、爾後數年、稍飽蠹魚之腹中、於是命侍臣輯錄、譯以俚言、又少補其所不足、而爲一小冊、別附圖一卷、淺見陋識、雖固不足采觀、鄙意竊比鷄肋、傳以示家童云

文政十一年二月小盡　　平榮貫子禾甫

目錄

徹法考

平榮實著

儀にはりこみ不ㇾ申、仕落さへなければ今幾年過れば御慰勞有ㇾ之などゝ其年數之來るを待うけ申人情に成行候事、當時之大弊に御座候、表御役相勤候輩御職人などは、隨分此風儀にても可ㇾ然候得共、御政事取計候御役筋之人は、其功績相立不ㇾ申候ては決て不ㇾ相濟ㇾ事に候、山林之空虚、田畑之荒蕪を見て、其國之政を知ると申儀古今の通論に御座候、只今全く其御時節と相見へ申候間、御經濟之大本、御精力之有たけ、一向に鄕村へ御押かゝり、大活眼を御ひらき、上下の間を御見通し被ㇾ成候はゞ、所謂社鼠城狐之類も可ㇾ有ㇾ之、鳳雛龍駒之類も可ㇾ有ㇾ之候、其除くべきを除き擧べきを擧不ㇾ申候得ば、上下壅蔽仕候て何時迄も先入爲ㇾ主、舊染之弊風を御あらため被ㇾ成候儀決て相屆不ㇾ申事と奉ㇾ存候、依て上下之間要務之所へ人才を御くばり、其職を深く御任じ被ㇾ成候樣仕度奉ㇾ存候、以上

寛政十二年申二月十五日　高野文助

籠田の水終

故には無レ之候間、よく／＼其病根を御さぐり、浮薄を去て儉素に歸し候事第一之御急務に可レ有レ之候、然る所江戸淫靡之風俗を以て、東海僻地之御城下に御移し、いよ／＼惰弱之人慾を盛にす、是即油を以薪にそゝぐの類にて、一端他國之民財を引入れ候とても、漸それに拘はり候遊民共のみ少々懐をあたゝめ、其他は御家中郷村之費に相成、億萬之風俗をそこなひ申候間、割合候得ばやはり御國内の損に罷成申候、凡飯盛女芝居などを悦び來候者共、多くは惰弱無賴之民にてたとひ他所より家を移し妻子を携へ、人別增過仕候ても、農をいとひ商を願ふ志に御座候間、ヶ樣之者共多く御引あつめ被レ成候ては、何之益にも立不レ申、近くは江戸の人情にて相知れ申事に御座候

一　或は賣女を以姦淫を防ぐと申人も可レ有レ之候得共、大抵姦淫と申は鰥寡之民多きと、教化之法行屆不レ申との二ツより相やぶれ候間、賣女盛なる都會にも間々右之沙汰及レ承申候、依て此弊風を防候には、周禮に相見へ申候媒官之樣成役を相立、男女婚姻之期におくれ不レ申事を專一に下知仕、共上には教化を施し申度候、是即民戸增過之基にも相成、御仁政之一術と奉レ存候

一　制度を御立被レ成候には、人才をよく／＼御撰被レ成候樣仕度候、只今にては萬機之事只御一人にて御世話被レ爲レ在、末々に至り候ては請取渡之風勢に相見へ申候、是いまだ其人を得給はずと申樣成儀にも可レ有ニ御座一候哉、凡是迄御慰勞之御次第、御役成以後其功之成不成を不レ論、年數さへ相立候得ば大抵は御慰勞被レ下候、是御仁惠之樣には可レ有レ之候得共、此所より諸向皆怠惰に相流れ、御役

も太平を御たのみ被」成候御風儀にては、かぎり有御國用を以かぎりなき人慾にしたがふの類にて、此上金山・銅山・水運之利いかほど御成就被」成候ても、籠田に水を入るゝが如く、上下の困窮は相直り申間敷候

一　町家商人共は四民の末列に居候て、諸士百姓之間にはさまれ、其餘澤をなめて經營仕ものに候間、諸士百姓さへ豊饒に成候得者、商人は其まゝ御構不」被」成候ても、自然と繁昌仕候事と相見へ申候、當今人情太平の化に浴して、遊惰にふけり奢侈に走り、農をいとひ商を羨申事、上下困窮之病根に御座候、此病根を療治仕候工夫は、商をいやしみ農を貴ぶしかけに不」仕候ては相成間敷候所、凡そ去年來之御仕置は、郷村を次にして町家を先にし、飯盛女・堺町芝居は不」及」申、土場楊弓藝妓等に至る迄諸方より走集り、奇巧末作を以他國之民財を引入れんとす、是全く財用にのみ御目を付られ、太平を御たのみ被」成候御風儀にて、眞之御徳政と申事には有」之間敷候、只今御國内之大病は、田畑は年年荒蕪し、山林は歳々空[illegible]民家は亡失し諸士は[illegible]事一朝一夕之

御苦辛少も早く奉二相安一度、多罪をかへり見ず憚る所なく申上候、凡是迄之御仕方、御勝手向は町人に御まかせ、金錢を御自由に御つかひ、御便利之樣には御座候得共、太平を御たのみ被レ成候て、亂世之御備御手薄き樣に相見へ申候、安危治亂一動一靜は天地古今之變態に御座候得ば、只今之御治世はいつ迄も如レ此ものとは相定兼可レ申候、萬一不平之事有レ之時節は諸國之往來斷絕し、只今無二と御賴被レ成候町人之手もきれ可レ申候、其砌は誰を御たのみ被レ成候て、一國を御たもち可レ被レ成哉、大抵是迄御行ひ被レ成候融通方、定て御帳面之上は立派に仕立、連年御仕方殘る所なき樣に御見渡し被レ成候御事と奉レ存候得共、上は御勝手向御取直し之沙汰も無レ之、下は困窮年々に指つまり申候、是皆大本を御捨、末利に計御拘り被レ成候故之儀と奉レ存候、依て此上は御國限り之財用を以出入を搯合せ、諸向之御入用には土地を以御引當、夫を以萬端を打切申度候、然る上は乍レ恐御奧向を始奉り、御連枝樣方は不レ及二申上一、他所へ御緣付被レ成候御姫樣方御物入に至る迄、大概壹ヶ年御暮方五千石計ヅヽ、土地方御引當御打切に被レ成候樣仕度候、是全く御差略之樣には御座候得共、既に仙洞御所御料五千石ヅッ之御手當に御座候由及レ承候得ば、御國母之御あしらひに相准じ申御事に候間、別て御批判にも相成申間敷哉、其外諸御役所料も大抵夫々に土地にて打切、玄米取諸士之族も相成たけ地方に御直し、そろ〱と土着之御修法御目論被レ成候樣仕度候、此法土地と人との割合より出候事故、和漢古今之例を相考候に、長久之制度無二此上一事に奉レ存候、乍レ去ヶ樣打切申事只今迄之御風儀、先例規格に相

一　御勝手向之儀に付、他國町人を御引入被ㇾ成候事商買融通之術にて、つまる所は御國之膏脂を町人に吸取られ申候間、夫だけは是非御國内之御よわりに罷成候、是即御武備之大本に相拘り、天晴御大切之御事と奉ㇾ存候、何程御仁恕之思召被ㇾ爲ㇾ在候ても、いはゆる出ぬ乳は呑せられぬと申諺の如く、御國之膏脂かはき候得ば、自然と御撫育も御屆被ㇾ成兼候事に成行候間、一國は一國ぎりの御手當にて、諸事御すまし被ㇾ成候様仕度物に御座候、乍ㇾ去只今迄之御風儀と違ひ、物ごと御不自由を被ㇾ成、民と艱苦を共にすと申程に、御堪忍不ㇾ被ㇾ爲ㇾ在候ては被ㇾ行不ㇾ申事に候、此御堪忍之一ッさへ、纔か數年之間御屆被ㇾ成候得ば、上下は安穩に罷成可ㇾ申候、凡ケ様之儀定て心付候人も可ㇾ有ㇾ之候得ども、君上へは何事も思召之まゝに被ㇾ遊候様にとこそ可ㇾ奉ㇾ申上ㇾ儀を、それとは引違申候間、心付候ても恐多く、決て言上仕間敷候、乍ㇾ去安民之思召深く、言路を開て衆心を率ゐたまひ、諫に從ふ事流るるがごとく、人を容るゝ事海之如く、是非々々御政道御屆被ㇾ成度實慮之程を奉ㇾ相伺ㇾ候上は、此後之

序

こたびはからずも牧民の職を蒙り、くさ〴〵の村里をめぐり見る折から、ある山田のこぞの稻莖さへ得かりをさめず、霜がれふしていとあれにあれたるを、案内顔なる翁に其よしを問侍れば、籠田とこそは答へ申ける、此籠田と申は、くれ竹の目籠の水の底たもちなき心地して、はつかに日照する時は、ますら男のちからいか計からうじて、種かし水まかせつるも、むなしく地にもり引て、終には實のるべきたよりなく、かくあれはつる事なりとぞ、いでや經濟をつとむるいさをしゐ、はたかのますら男がかひなきちからに、かゞみべき事なきにしもあらざれば、たゞちに籠田の水と題して、おほやけにたてまつる事とはなりぬ

籠田の水

高野昌碩著

レ有レ所レ仕、而自居、故名ニ居士一也、」また十誦律第六曰、「居士者、除ニ上王臣、及婆羅門一、種餘在レ家白衣、是名ニ居士一」と相見へ申候得ば維摩居士などの如き者もいまだ佛果に至らざる名に候故、菩薩如來等よりは至て卑き稱呼と相見へ申候、元來佛道にては成佛仕候より外に難レ有尊き事は無レ之儀を假初にも尊貴之御方に對し奉り隱居者等之號を用ひ、又は佛果にも至らざる居士あしらひに仕候事、言語同斷不敬至極と奉レ存候、其上又居士之上に大之字相加へ、大居士と申事彌以當り不レ申儀と奉レ存候、大姉號是又右等之儀と相見へ申候得ば、尊號に相用候事旁以如何敷御事に奉レ存候、猶又よく〳〵御吟味可レ被レ遊候

以上六篇參拾貳條

寬政十一年己未夏六月

臣誠恐誠惶頓首頓首再拜謹言

富强六略 終

れも二字ヅヽに相限り候事、正史之表明白に御座候、既に佛道にても坊主共之戒名阿難迦葉をはじめ、皆々二字號に御座候、然るに右之通り院殿と申儀を題し、其外にも戒名字數煩多に相成候事、全く室町家之頃より因循仕り來候樣に相見へ申候、是皆戰國之餘習にて制度無レ之、ヶ樣之儀すべて坊主まかせに成行候故、唐にも天竺にも吾朝にも無レ之一種之諡法を建立仕候、猶よく〳〵御吟味之上佛道を御用ひ被レ成候はゞ、釋迦流之戒名に御したがひ、儒道御用ひ被レ成候はゞ、聖人之諡法御取用ひ被レ遊候樣に仕度奉レ存候

一　只今民間之風俗は坊主共より戒名を賣物に仕り、尊卑階級をこしらへ、施物たくさん遣候得ば文字數を多く付、施物輕少に候得ば文字數少く付、其外院號料、居士號料等之名を付、通例施物之外に內分にて金子を掠め取申候、件之通坊主共慾心深く愚民を惑はし、戒名之尊卑をあらそはせ候故、此儀に付輕き者共公事に及び、上之御苦難に被レ成候事度々承及申候、別て院號之儀は誠に輕者共へは無益之僭號に候間、尤嚴敷御停止被レ遊、戒名は二字號と御定之儀佛家相應之事と奉レ存候

一　居士と申事處士と同樣にて、皆仕官せずして隱居する者之號と相見え申候得ば、高位之人の尊號に無レ之事勿論之儀に候、韓非子外儲說篇に、「齊有二居士田仲者一云々」又禮記玉藻に、「居士錦帶」と申事相見へ候、鄭玄注云、「居士、道藝處士也」又自ら雅號などに用候時は、隱士山人など同樣之儀に可レ有レ之候、釋迦流にても智論九十八曰、「雖レ是無二德財一、不レ求二仕官一、亦名二居士一」謂、士夫凡人之通稱、不

院之下に殿之字を付候事は實に吾朝之例にて、攝家華族等尊貴之御所をさして、逍遙院殿與樂院殿などゝ稱し奉り候事本式と相見へ、天竺にはいまだ無レ之事故佛果菩提之爲に相成候例は曾て無レ之儀と相見へ候、夫を尊貴之人といへども、御戒名之上に相加へ候事、釋迦流にては相當り申間敷候、況や院と計相稱し候儀は、元來天子官衙之名にして、其居所を僧に賜り候事を例にいたし、某院某寺と相呼申候由に候得共、實は僧之居所をば精舍と申候事本號と相見へ申候、然るを近世に至り候ては、士大夫は勿論町人百姓輕き者共に至る迄、僧より猥りに院號を相贈、夫を戒名と相心得候儀風俗に相成申候、乍レ恐上は天子を始奉り、下は末々輕き士卒迄一同院號に能成候事、誠に以言語同斷之儀と奉レ存候、凡謚法は往古以來至て大切之事に仕り、異國は不レ及レ申、吾朝にも天子御代々は勿論、淡海公を文忠と謚し、房前公を忠仁と謚し、又は將軍家にても經基公・滿仲公、又は清盛・重盛等之戒名いづ

符を以右書付取集、全く申わけ一筋之樣成事に罷成候、依て右教戒之志有ㇾ之者も無精に罷成自然と口を閉、先大方世間並に打過申候體に承及候、只今にても御入國之御時節の如く鼓舞仕、猶又前件申上候寺祿御借上の金子を以御救ひ存分に相屆、猶以志有ㇾ之者共教戒出精仕候はゞ、十年を經ずして惡風俗屹度相止可ㇾ申候、乍ㇾ去可ニ相成一御儀に御座候はゞ、別て恐多御事に御座候得共、右手代茂十最早年數も相立候事故何卒御召返し、却て彼者へ育子がゝり被ニ仰付一候はゞ、諸人之眠りをさまし、別て行屆可ㇾ申歟と奉ㇾ存候

愼終第六

一　喪祭之禮釋迦流にては相果候得ば、遺骸を見る事土芥の如く、三寶を供養する迄にて、祖先を祭ると申事は佛律に無ㇾ之事之由、是即西天夷狄之法にて天地之大道に相背き、中にも父母之遺體を火にて燒捨候儀、尤非禮之甚しき無ニ此上一事と奉ㇾ存候、元來人倫を捨切候坊主共へ喪祭を御任せ被ㇾ成候故、諸事混亂仕候て人道を取失ひ申候、願くは先御國中計も火葬を禁じ、孝子慈孫愼終之志を遂させ申度候

一　棺之制度士人は寢棺、庶人は座棺之御法に御座候所、座棺と申者聖人之書に相見へ不ㇾ申、依て相考候に、是は亂世之砌相用候早桶等之遺風にて、全く正禮には無ㇾ之儀歟と奉ㇾ存候、凡座棺之制町家賣買之品は至て狹小にて、人之大小により父母といへども手足など折屈め、甚しきは足をかけ踏折不

承及候、此儀御達も有之候得共相止兼候趣に御座候　嚴敷御停止に仕度候

育子第五

一　育子之儀は士民衣食之不足と、人情不和との弐ツより相崩れ申候様子に相見へ候間、専ら御救ひ行屆、殊更教化之法無油斷出精仕候様に仕度候、先年御入國之節、重き尊慮之程村々男女御召集御達之砌は誠に難有奉承知、萬一心得違之者は勿論、少之御疑心相蒙候ても、如何程の御咎御座候哉も難計心得居候故、村役人共下知も行屆申候由之所、太田御郡手代岡部茂十重き御咎之筋にて御追放被仰付候以來、其次第一々相辨不申者共、子育御糺に付、糺し人却て不調法に相成候と申觸し候、依之子育かゝり之役人共一同恐れをなし役儀にはり込ぬけ、此砌より諸向先寐入候様子に承及候、猶又近き頃は御山横目共へ御任せ、深く立入候者無之候に付、御下知之限と推量仕、御山横目よりも一ヶ月切に懐胎人仕出し取集申候所、是又宿次駄賃帳など相しるし候にひとしく、横目共より記

レ成候様に仕度候、世諺に人と器物は有次第と申習はし候、大勢は大勢、小勢は小勢之様に大方事缺ぎ不レ申物に候、是又人に任ずると任ぜざるとの差別に可レ有レ之候

一　手代之數御減之上は共御切符を打込、今少し勝手向穏やかに仕度物に御座候、纔か二人扶持五兩七兩位之御あてがひにては夫婦も漸相暮し、其上出生等多く、又は老人など厄介持候者は經營甚難儀仕候由、中にも郡手代は郷村を取扱候事故、廉直に無レ之候ては百姓より侮を受候故、御法も事によりては柘ゆるみ候様に成行、別て育子等之儀此頃專ら取扱候儀候間、衣食に苦しみ不レ申候程之御あてがひ被二下置一候様に仕度候、扨手代之數減少仕候はゞ、御用向相廻り兼候趣、定て申上候者も可レ有レ之候得共、右役所郷村住居被二仰付一候上は、別て相廻り兼候儀は有レ之間敷歟、既に公儀御代官所奥州棚倉近邊塙と申處に有レ之當支配寺西重次郎と申者、彼地之取扱承及候に、西は棚倉近邊より東は岩城小名濱を限り、十萬石計之場所を纔か手代五六人にて相をさめ、其上御年貢取立江戸運送迄持前に仕、事缺ぎ候儀共無レ之候由に御座候、是全く煩を去て簡にしたがひ、よく人に任じ候故之事と相見へ候、乍レ去此術は郡奉行土着仕候後ならでは取行不レ申事と奉レ存候、依て四郡共に郷村へ御押出し、往往は御年貢取立迄御任せ被レ成、とかく役人を御へらし不レ被レ成候内は、省役之儀被レ行不レ申事と奉レ存候

一　手代御取立之儀、民間庄屋山横目など老練精密成者御取擧御用被レ成候様に仕度候、只今迄は大

一　夫役之儀近年別て煩多に罷成、百姓之苦痛此事のみ歎息仕候、此根本を承及候に、上に御役人多く、何事も人に任する事なく、郷村庄屋組頭等之役替迄重き衆中より聲をかけ候樣に成行候間、其筋之役人は上と下との中にはさまれ、存分之取扱出來兼候かゝひ物に成、手代などは猶更風之吹なりに廻り候間、役儀にはり込不ㇾ申、念に念を入てむつかしき事は大方人にゆづり、萬一仕落出來候時は、己が拂を立候樣にと計相勤申候故、直切果斷と申事は近年すたりものに相成、諸事壅滯に及隙取候內、物ごと重複いたし、人を多く費し候樣に相見へ申候、凡古來よりの制度承傳候に、只今之郡奉行は異國之縣令、吾朝之郡司と申樣成役人に候間、郡下に住居仕候事不相應之儀と奉ㇾ存候、專ら郡縣之をさめをつかさどり候職故、やはり便宜よき村方に役所を搆へ、手代共も同居仕候得ば、郷村之利害、年穀之豐凶も居ながら察せられ、手代元〆等に至る迄、近村之往來には人馬を費候に不ㇾ及、其上滯留之日數も減少いたし候間、村さし錢かゝり少く、庄屋組頭共は御城下往來之物入を省き、猶又郷村之取しまり萬事行屆、役を省之一策に可ㇾ有ㇾ之候、既に小川運送奉行海老澤津役奉行等は各其土地に住居被ㇾ仰付ㇾ候、纔か運送津役等之小事をさへ、其土地に住居不ㇾ仕候ては行屆兼申候、況や日用御政務之大役所郷村を遠ざけ居候事如何敷奉ㇾ存候

一　御郡奉行所手代餘り大勢に過候樣に承及候、願はくば役所土着之上、可ㇾ相成ㇾ候事に候はゞ一郡七八人に減少仕度樣に奉ㇾ存候、若夫にて不手廻り之節は、郷士又は山横目等之者共御借り出し御使被

らず、金錢を取扱渡世仕候事故、過料さへ指出候得ば此上六ヶ敷事なしと推量り、猶又寺社人共晝夜閑暇に相暮候まゝ別て相好み、其上此方共は支配違故、搆無ㇾ之など申ふらし候由にも及ㇾ承候、中にも隱密役よりたまく其筋へ申立候ても、少分之過料等に相成候故、却て申立候者無調法之様に相成、自然と等閑に仕り、近き頃は長脇指帶候者共粗往來仕候故、愚昧之百姓共は大に心得違仕候者も有ㇾ之由に候、乍ㇾ去一旦被ㇾ仰出ㇾ候過料之儀此上被ㇾ仰付ㇾ候共、たとへば金參兩被ㇾ仰付ㇾ候はゞ、當人貳兩村中壹兩、寺社之族は檀家一兩當人二兩共御法被ㇾ仰出ㇾ候はゞ、不ㇾ見不ㇾ聞之者共より仲間吟味に相成申候事必定之儀と奉ㇾ存候、只今迄之過料にては中々以相止不ㇾ申風情に相見へ申候

一　右博奕打共禁獄等被ㇾ仰付ㇾ、又は御國拂等に相成候ても、他所へ出候へばやはり他國之害に罷成候、依て相考候に、此者共は罪人には候へ共、律之大辟之數にも無ㇾ之候間、往古之作法城且舂と申様成儀に習ひ大小屋を立、見付次第相捕、其中に籠め置、米を搗せ、籾を摺せ、或は繩むしろ・沓・草鞋之類それくの手職を申付、其日々飯料に仕り、又は御堀御普請・川よけ・石ひろひ等之大徭役へは別て此者共を御召仕ひ、此御法を以二年も三年も御試被ㇾ成候內、追々覺悟相直り候者、御吟味之上村歸し被ㇾ仰付ㇾ候様仕度候、元來當時人別減少之砌、御追放に可ㇾ相成ㇾ程之罪人をば、士民に相限り不ㇾ申右之小屋に籠置、御國內之人をへらし不ㇾ申萬一之御備に仕度候

省役第四

用立兼候もの醫者に相成候事はやり申候、假初ながら人命に拘り候儀、不學無術にては相濟申間敷候、是又延喜式などに有レ之候如く、猥りに不二相成一候樣屹度御法相定申度候

一　三昧堂檀林は御菩提所久昌寺とは別院にて、御先々代樣思召も被レ爲レ在御立被レ遊、他國之坊主共御招き御扶持被二下置一、最早二百年之間莫大之御物入御座候所、既に御國之遊民さへ夥敷御費に相成候砌、他所之遊民を御養被二指置一候儀如何敷奉レ存候、此者共數年御扶持等被レ下候ても、其年限相立申候者は各々其國々へ立歸り候間、御國之御用には更に相成不レ申、御費のみに相成、誠無用之者共に可レ有レ之候、異朝にも「廢レ寺爲レ學」と申事相見へ候間、同じくば此御物入を以學校に御改、右僧徒之御扶持を書生料に御直し、文武兼備之學問屋に取立、弓馬劍鎗は不レ及レ申、禮樂書數天文醫學等に至る迄こと〴〵く修行爲レ仕、人才を養育しよき人を澤山こしらへ、御國内之重寶に仕度奉レ存候、猶又學校制度之儀異國本朝無沿革も有レ之候樣に相見へ申候、尤有識之者へ御尋之上、是非々々御創建被レ遊候樣に仕度奉レ存候

一　博奕之儀近年過料被二仰出一、猶又村々には隱密役人相立、紙上には甚嚴重に御下知相屆候樣に御座候所、却て繁昌に罷成候、此者共は誠に遊民之中にも其心底を考候はゞ、禽獸とも虎狼とも可レ申大に良民を傷りそこなひ申候間、御仕置之儀別て屹度相立候樣に仕度奉レ存候、元來彼者共御仕置に過料と申候樣成儀乍レ恐相當申間敷歟、其餘は博奕仕候程之者大抵人情を取失ひ、己が貪慾に耽りて耻をし

は皆是士民之膏脂にて御座候、然るを先年より御制禁無レ之候事如何敷奉レ存候

一　禰宜山伏も又遊民に御座候、乍レ去此輩は妻孥有レ之五倫をたもち候故、坊主とは又格別なる者に御座候へ、然るに此者共平生覺悟を承候に、大方禰宜は吉田家之家臣と心得、山伏は聖護院又は三寶院之家臣と心得居候樣子に相見へ候、是御國役無レ之候故、仰ぐ所を相わきまへ不レ申、上之御恩をおろそかに存如レ此心得違仕候、右之心得に仕置候ては治平之節は格別、萬一之砌は各二心を懷可レ申事難レ計候、ケ樣之者共御國内に多く御養ひ被二指置一候儀御不用心と被レ存候、依て是等は兵民に仕立、其内にて才德ある者には學文を仕込み、其者に郷村之教化を仕らせ、才德なき者には武藝を仕込、其家之格式にしたがひ、見付番などのやうなる事に御仕ひ、やはり本職土着のまゝにて、交替輪番之樣に爲二相勤一申度奉レ存候、左候得ば所々之御番人減少、此御物入相省かれ可レ申候、此者共既に御除地等も被二下置一、常に帶刀迄御ゆるし被二指置一候間、是非々々御役儀爲二相勤一、君臣之差別屹と呑込せ置申度ものに御座候、但門徒寺は妻子有レ之候間、山伏之部類相組入可レ然奉レ存候

一　巫・惠比須・猿引等之類、又は鬼神を賣て人を惑し、良民之金穀を貪候間、是等は禰宜山伏等之附屬に仕り、彼家之家來同樣爲二召仕一、耕織之業に就せ候樣に仕度候、若其儀をいとひ候者は百姓に御返し被レ成、本職を御奪ひ被レ成可レ然奉レ存候、彼等が本職は禰宜山伏にて事濟可レ申候

一　醫者も遊民に御座候、近年郷村之間に夥敷相ふえ申候所、大抵惰夫頑民之類にて、農にも商にも

寺に付知行御借上金拾兩ならしには參り可ㇾ申歟、此金子一年つもりて五千兩之御益に相成、拾ヶ年には五萬兩之御手當は相生じ可ㇾ申候、扨右御益金を以て育子御手當は不ㇾ及ㇾ申、窮民御救ひ其外御國用を御賑はし被ㇾ成候はゞ、是程之御陰德にまさる儀は有ㇾ之間敷候、御家中幷に御百姓は乍ㇾ恐御一大事之御備に候所、此輩をば先年御借上又は御用金等被二仰付一、坊主のみ御手入無ㇾ之御事如何敷奉ㇾ存候、凡坊主は侍百姓とは相違、乞食頭陀之境界に候得ば、其身一ッ之經營に御座候、知行無ㇾ之候ても取續かれ可ㇾ申事本色之儀と奉ㇾ存候、依て御借上拾ヶ年之間は二三ヶ寺之住僧共を一ヶ寺に同居爲ㇾ仕候はゞ、彼者共も暮し方にも勝手宜敷可ㇾ有ㇾ之候、當今諸士百姓極窮に及、吾子の養育さへ行屆兼候砌、坊主のみ閑暇無事驕奢飽暖にすぎはひ仕候事相當申間敷候、既に宋の神宗熙寧二年免役法と申候事相始り、其內助役錢と申事相見へ申候、其文之略に、「女戶寺觀、品官之家、無二免役一而出ㇾ錢者、名二助役錢一」と、右は常々役をゆるされたる家より錢を出し國用を助け候に依り、助役と申候由御座候、是宋末衰世之風にて御座候得共、異國にも寺觀より錢を取て國用を助け申候證據明白に御座候

一　往古度牒之法に習ひ、猥に僧に成候事嚴敷御停止に仕度候、近年之坊主殊之外風儀惡敷、學文筋之分は甚疎略に仕り、大に民間之害に罷成候事共承及候

一　僧徒之衣服甚奢侈に相成、綾羅錦繡不斷身にまとひ申候、是戒律に相背き候事と相見申候、眞之法服は麻木綿之類に限り候由佛書之表明白に御座候、元より乞食頭陀之身之上に候得ば、衣食之奢侈

方多く上納仕候得ば、生涯之力を以農業相かせぎ候ても中々息をつぎ兼候間、皆々商人又は職人等を相兼經營仕候事に成行申候、右之通三折返し之田地なれば、不足ながらも取續かれ申候得共、右樣之田地も中々數少く候まゝ、是非貧民のみ多く罷成筈に候、依て農業をばいとひ商人に計相成申候、只今商を兼不ㇾ申、農計にてよく暮し候者は十が一二と相見へ申候、金銀珠玉は飢て食ふべからずと承候所、如ㇾ此商人共年々に增過仕候ては、彌以御田地手餘り、萬一凶年打續申候事有ㇾ之候はゞ、誠に恐るべき儀と奉ㇾ存候

一　士民之奢侈は大抵商人より導き申候、二十年以來別て鄉村之人情大變に相成、金さへ有れば侍にも成られ候と申所へ目を付、おの／＼僥倖之志たくましく、本を捨て末に走り、皆々農をいやしみ商を尊び申候、依て村々夥敷店共仰山に相はびこり先年に十倍仕候、依ㇾ之御城下之店々は不ㇾ及ㇾ申、所所の市場大概衰微仕、鄉村のみ次第に繁昌仕候、是等は不ㇾ殘御潰し農民に御かへし被ㇾ成候樣仕度候、中にも木綿店之儀下り木綿下り染等一切御停止、御國木綿計にて通用仕度候、左候得ば御國內紡績之者自然と多く相成女工相弘り、困窮取直しの道相ひらけ可ㇾ申候、乍ㇾ去此儀も定免之御法相立申候上ならでは、人情歸服仕間敷樣子に相見へ申候

一　僧は遊民之巨魁にて御座候、乍ㇾ去人情之維持する所にて急に御潰にも相成兼可ㇾ申歟、左候はゞ御領內寺々之知行を先拾ヶ年之間御借上被ㇾ成候樣に仕度候、大抵御國內寺數凡五百計と見すへ、一ヶ

に申上候

一　一件之遊民共増過仕候根本は、當今田徳三折返しなれば、結構之土地と人皆心得居候得共、此三折返と申は、上納三分一之つもりにて、九俵取之田地にて三俵を出し、六俵之作徳に成、三俵取之田地にて一俵を出し、二俵之作徳に罷成、是を三折返と申候、乍〻去上納籾一俵之分へは先ヅ半俵ヅ〻もすべての費用相かゝり候事故、其割にて九俵取よりは四俵半、三俵取よりは一俵半と出辻有〻之候間、實之作徳は當半に相成候、凡農人之家内夫婦両人之力を以相作り候分、通例二斗蒔と割付候物に候所、良田之割にて籾取入、一升蒔に付二俵取と見て、一斗蒔二拾俵、二斗蒔なれば四拾俵に候、夫を上納出辻指引當半に仕り、殘り作徳二拾俵と相成候、右二拾俵之内にて一家衣食住之物入は不〻及〻申、吉凶悉切之義理届、又は坊主山伏之為にしぼり取られ、すべて一年中之物入皆此内より出申候、其上夫婦両人のみならず子共多く持、又は老養之者、或は病身者[illegible]之作徳にては[illegible]、畑作より[illegible]

間に合不〻申、依て麥粟稗蕎麦大根等を糧につかひ、[illegible]け取[illegible]

申候得共、拾ヶ年平均之法と小檢見引方かけ合候はゞ、小檢見之費は大切之良田不作散田に相成、實に御取付之名目計にて、御收納辻更に無ㇾ之候間、定免之方屹と御益に罷成候事と相見へ候

一 享保天明兩度畑田御改にて、谷間天水場にても本免御取付之田地出來仕り候、是等之分は文面にては御益之樣に御座候得共、年々不作皆引に相成候故、却て御損毛に相成、百姓方にては誠に無益之高相過し、年々小檢見歩人足之費は勿論、諸懸り物等之わきまへ永久之內病に相成候、凡拾ヶ年平均之上屹と拾年宛之定免被ㇾ仰出ㇾ候はゞ、四ッ取にても三ッ八分にても村方にて高辻引わけ、其內には一ッ取にも三ッ取にもそれ〳〵に御取付割合候故、水屆兼候分は畑作仕付候共勝手次第、水屆候場所は勿論之儀、不作散田可ㇾ仕樣は無ㇾ之候、左候はゞ作方大に相增候間、御國內米麥之貯多く相成、檢見も無用に相成候故、上下不和爭奪之心を忘れ、百姓自然と農にすゝみ、人情和同之術誠に此一擧に可ㇾ有ㇾ之儀と奉ㇾ存候

一 右定免之御法相立候上は、先是にて大抵人情はおだやかに相成可ㇾ申候得共、其外窮民育子等之御手當、專ら御國用を相たすけ候儀無ㇾ之候ては、何れにも御不如意之砌相濟不ㇾ申御事と奉ㇾ存候、依て一ヶ年金子五千兩ヅヽ御益相生じ可ㇾ申工夫存付候間、禁遊之部へ委しく申上候

禁遊第三

一 遊民と申は商人などの類にて、耕さずして食ひ、織らずして着る者共之儀に御座候、是即國家之

を御やめ定免に御改被レ成候様に仕度候、彌定免に相成候はゞ、御國内の散田凡三年を待ず、不レ残相ひらけ可レ申候、右申上候通田方永久之御益は、定免被ニ仰出一候事結構至極之御事故、是迄願出相濟居候村方も有レ之候處、近年追々本免に立歸り、或は二三ヶ年之内より御益相過し申候事に相成候、是以山を焼き獸を得候類之儀にて、却て上之御損毛多く相成、其餘は凡小檢見引方拾ヶ年平均之法にて、豐凶にかゝはらず其内より御益指上定免に相成候事故、實は拾ヶ年平均とは申せども、八年半歟九ヶ年之平均に相當り可レ申候、拾ヶ年平均に候はゞ、拾ヶ年は全く年數之内に可レ有レ之所、二ヶ年三ヶ年、又は五ヶ年位に御高年限切、又は御益御取上被レ成候に付、拾ヶ年拾五ヶ年も相過候内には、やはり本免御取付同様に相成候故、右定免無ニ是非一百姓より御返し申上候、尤其二三ヶ年之内は御引方も少く御益に相成候得共、三四ヶ年目より不作散田等相過し、御損毛無レ限事と奉レ存候、畢竟平均して定免に相成候得ば、元取五ッ取にても、四ッ取歟三ッ八分取に相成候故、一旦は御損毛に相見へ

地を見立請作と申に仕り、夫にて取續申者數多有ㇾ之由承及候、依ㇾ之下人大勢召抱ひ右田地作り來候大百姓は、右之人返し以來奉公人大に拂底に及、持分御田地手餘りに相成、其上奉公人給金殊之外高直、先年之一倍に相成、何程に出精仕候ても、給金だけ御田地より作り出し候事は相叶不ㇾ申、或は酒を造り質を取、又は商賣を始、御田地之かゝりを償ひ申度存候ても、皆々奉公人之埋草にのみ相成間に合不ㇾ申、古來之大百姓共大半困窮に相成候

一　撿見入之場所に稻かつぎと申事御座候、是は右高免御田地之中にも散田に仕候程之儀にも無ㇾ之、大抵割合にも當り可ㇾ申場所は、隨分熟作仕候樣精を出し、取入申つもりいたし、其内水旱又は風難等之年は實のり不ㇾ宜、平年之通御年貢上ゲ候ては百姓損毛に當り申候、然る所嚴酷之檢見に出合候得ば用捨もなく引不ㇾ申、何れにも相凌がたく、依て其村方百姓共件之稻を荷ひ連れ、御城下へ强訴に罷出申候、是を稻かつぎと申習はし候、此儀先年より御制禁に候得共止事得ず候、依ㇾ之山横目庄屋抔途中へ出張、右稻かつぎ共を指留、大抵御城下先は出し不ㇾ申候樣にいたし、扨右村役人等入割を以其年之上納は妻子を賣せ、又は家財を拂はせ不足を償ひ、或は拜借金等之御救ひを以て、表向は罪人をこしらへ不ㇾ申候樣工面仕候得共、右拜借金と申者實は後日の苦痛に相成、誠に歎敷事共に御座候、以上之四弊は其最大なるものに御座候、ヶ樣に御田地を下に御あづけ被ㇾ指置ㇾ、人情之和不和乍ㇾ恐よくよく御憐察可ㇾ被ㇾ爲ㇾ在候、此外檢見之儀に付瑣細なる儀吟味仕候はゞ中々不ㇾ少事と奉ㇾ存候

一　又一種之姦民有レ之、先づ壹斗蒔之田地なれば、八九升蒔之分をばよく耕し、よく蒭し、苗をも早く植付、熟作仕候樣にいたし、扨早く苅取よき籾を取入、殘一二升蒔之場所わざと惡作に仕立、檢見立と號し苅殘し置、それを檢見に見せ候間、元より不作夥しのみに候まゝ皆引に相成候、依て右田地一枚之内、先に早く苅取候よき籾八九升蒔之分は、百姓方にて無年貢作り取之姦計を相設候由折々承及候

一　往古田畑上中下之位を定め候事は、成程動きなき鑑識之由にて、上田と申は、大概水旱之患に逢はず、膏腴之地にて熟作仕候場所に候間、其昔は農家珍寶之如く、實之上田と尊び大切に仕候由之所、寛永年中御繩入以來、大抵五割增にも相成候歟之由申傳候、依て件之上田所持之輩一向利德無レ之、民間之困窮に相成候故、他人に遣し度存候てもらひ人無レ之、無ニ是非一右之上田へ金子を添て讓り申事に成行候、乍レ去上田讓り受候程之百姓、是又極窮者に候間、後之苦痛を不レ顧、當分之金子見込みもらひ取候故、右申上候通無レ據散田に作りあらし、年々御年貢不納にのみ仕立申候

一　近年百姓方にて召使之下人身之代金御かし出し、其者居住の村へ御返し、持來之田地御作らせ被レ成候事相始り申候、是外向は結構成事の樣に候得共、實は不レ宜御仕置之樣に相見へ申候、元來奉公に出候程の貧民は大抵上田持之百姓にて、御田地之爲に困窮仕り身を賣申候得ば、何程其村へ御引返し、田地を御引付被レ成候ても、右不勝手之土地故、やはり己が持分は散田に作り、別に加減よき田

に見へ候ても、世諺に帳面よしの銭不足と申様成儀にて、御趣法之度ごと上之御不益に計相成候様に奉ㇾ存候、乍ㇾ去上にも御仁心不ㇾ浅、士民は救之御手當被ㇾ為ㇾ在候得共、思召様御届被ㇾ成兼候御時節に候得ば、是又御指支奉ㇾ恐察ㇾ候、依て急卒に奢侈御省被ㇾ成候事は、先御家中之面々土着之法御立被ㇾ成候様可ㇾ然奉ㇾ存候得共、古人之所謂祖宗之法を變ずるの類にて、御果斷相成兼可ㇾ申歟、存寄之儀申上候様御達に付、僭越不恭之罪を相忘れ、左之通言上仕候

開荒第二

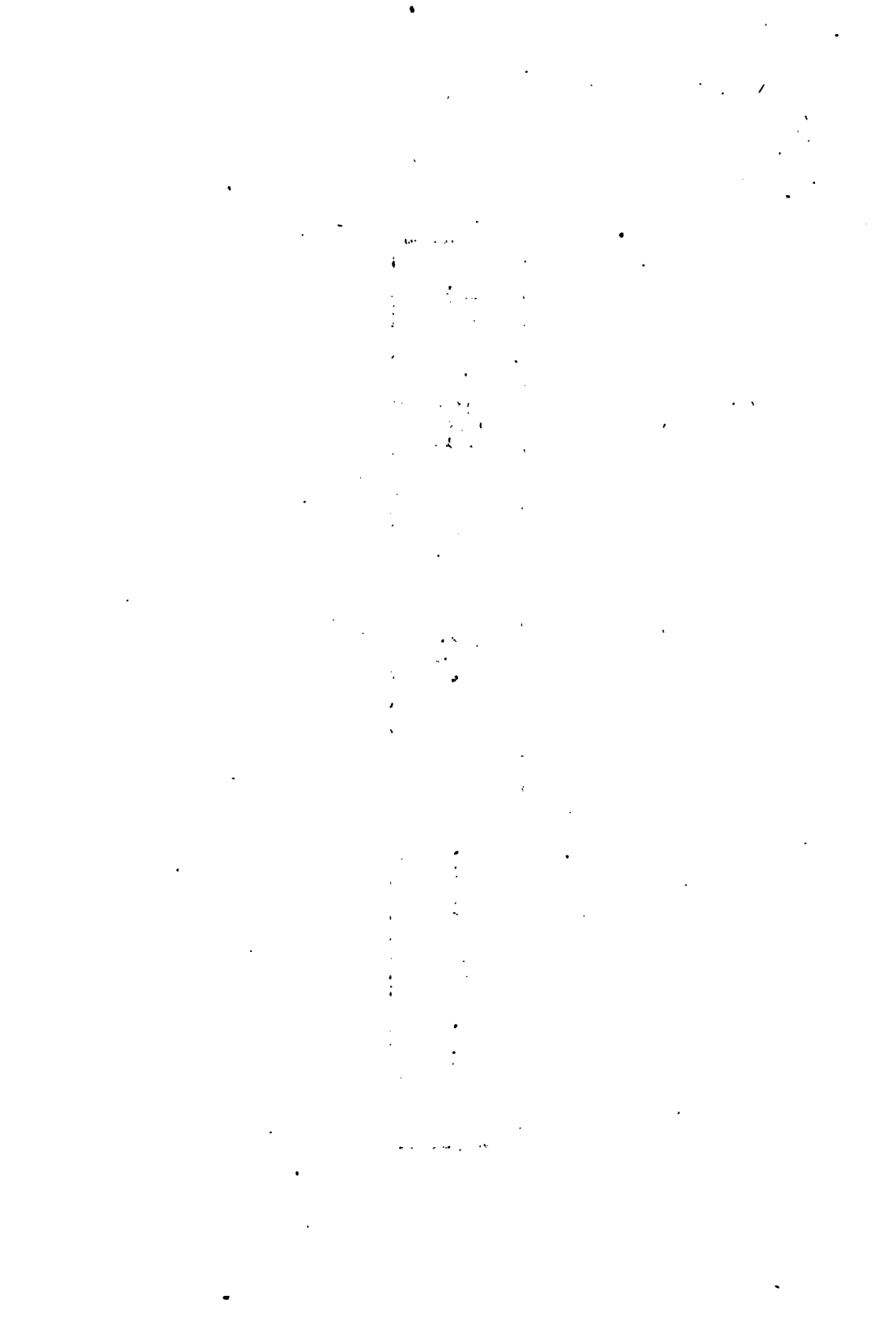
一 開荒と申は荒地をひらく術に御座候、臣が申上候荒地は、世に所謂荒地とは事替り、結構成御田地を散田と申に仕立、御年貢を上不ㇾ申、やはり永久之荒地同様に仕る事に御座候、此散田凡そ村々相ならし、御領内へ相かけ候はゞ、夥敷御損毛に被ㇾ存候、乍ㇾ去右散田と申儀御制禁に候間、いろいろに名をかへ、不作之由に申立候間、定て左程之儀とはしろしめされず候得共、御藏入は是非夫だけに減少仕候儀と相見へ申候、扨右散田何故結構成良田を作りあらし候哉と相尋候所、上田にて御取付高免御法之通相納候ては、百姓之利德無ㇾ之難儀に及候間、しるし迄に苗をはさみ、草も不ㇾ取菌もかけず、扨秋に成候得ば、場所により莚葦など生しげり居候、其田地を檢地に見せ候得ば、元より米らしき物更に無ㇾ之候間、御年貢は皆引に相成候、其跡を苅捨候へば隙費候まゝ其なりに指置、來年も又右之通りに仕立申候、其内に冬に至るを待、右之草むら枯果候時節、火を付燒捨候者も有ㇾ之よし、

事も江戸之風俗に移り、士大夫上にこれを好み、商人下にこれを誘ひ、滋蔓浸淫して御國內困窮之基と相成候樣に相見へ申候、すべての儀上より成し下すべし、下より成し上すべからずと承傳候得ば、下を御禁じ被レ成度思召に候はゞ、先御膝元より御調被レ成候樣にと奉レ存候、凡節儉質素之儀に相限不レ申、是迄種々之御觸事大概皆御家中より崩れ初、夫より鄕村に流れ下り申候樣にのみ相見へ候、扨其本根を正し候得ば、上下之人情にて可レ有レ之候、人情和同不レ仕候所へ御法度を被二仰出一候ては、外面は何分かしこまり候ても、內心は相服し不レ申、世に所謂三日法度と申物に相成候、抑人情を捨て御法を御賴被レ成候事は、たとへば流れを止めんと欲して堤を築くにひとしかるべく候、何程堤をかたくいたし候ても、其水上を塞ぎ不レ申候ては、或は横に溢れ、又は上に逆して、却て大害を生ずる物に候、いはゆる人情は水、法度は堤にて候、水を鑿らずして堤を御賴被レ成候ては、極て横溢上逆之罪人のみ多く出來、其果ては汎濫淼漫之患に相成可レ申哉も難レ計候、依てよく〳〵其病根を御探、人情より御調被レ成候事、當今第一之急務と奉レ存候、扨又人情和同之事、士民衣食之爲に困しみ候樣成儀にては、決して相行はれ申間敷候間、先國を富し候事を仕度候、管仲などは此術に早く目が付候故、齊は大國なれども人情よく和同いたし、九合一匡の大物入有レ之候ても下をくるしめ不レ申、其美談世々可二申傳一候、凡そ富國之術只今迄之御趣法、いろ〳〵御手を盡し被レ成候得共、下より見上候ては、何れも商人山師などのやうなる事のみにて、長久之本を捨て目前の小利に走り、一端御益之樣

富强六略

高野昌碩著

節儉第一

一　臣謹で古今歴代之盛衰を傳承候に、亂世之弊は戰爭之爲に其國を困ましめ、治世之弊は奢侈之爲に其國をくるしましむ、治亂世を異にし、戰奢事ことなりといへども、其困ましむる所以は一なり、當今御治世二百年之久しき、目に干戈を見ず、四民太平の化に浴して、まことに難ㇾ有御代に候得共、奢侈之弊日々に長じ、月々に盛に相成、國これが爲に虛衰する事、只今四海一同之大病と相見へ候、御國內も又右之病毒に染られ、百姓困窮に及候に付、是迄每度御世話も被ㇾ爲ㇾ在候得共、今以止事なく、近年別て增過仕候、就ㇾ夫下樣之儀奢侈を第一に相禁じ申度由申上候者も有ㇾ之候、臣畎畝之中に成長仕候故を以、奢侈御禁制之利害御尋御座候に付、退て愚按仕候に、當時之人情にては禁と不禁との間に可ㇾ有ㇾ之儀と奉ㇾ存候、凡そ奢侈之根本と申は、一朝一夕之事にあらず、乍ㇾ恐御先々代樣以來、何

富強六略

高野昌碩著

○人才教育ノ術ハ一日モ早ク建立シタキコト也、是ハ家中ノコトバカリニ非ズ、人君ノ御身ノ上ニモ入用ノコト也、今モ御歷々樣ニモ御學問ナサセラル、ト云沙汰モアレドモ、其筋ヲ聞ケバ詩賦ノコトノミナリ、最モ在內ノコトナレドモ、最第一ノコトニハ非レバ、先治國經濟ノ大本ヲ學ビ玉フ樣ニ有度者ナリ、五常ノ道ハ日月トトモニ萬古地ニ墜ザレドモ、日月ニ雲霧ノ障蔽アルガ如ク、此ニモ亦時トシテ湮晦ノ憂アリ、今ノ時ヲ以テ觀ルニ、治上ニ隆ナリトイヘドモ、下民ノ沿習コレガ隔蔽ヲナシテ、五倫ノ中朋友ノ一倫其淪晦尤甚シ、殆ド欠闕ニ近シ、學問ノ道サヘ闢タラバ倫理整フベシ

○咬ニ得菜根ヲ則百事可レ做ト汪信民ノ語面白シ、誠ニ是言ヲ味フベシ、一國ノ主トシテ躬布衣ノ行ヲ履玉ハヾ何事カ成就セザルコトヲ憂ンヤ

右丙子秋九月識

經濟隨筆 終

短ナリトモ中興ノ志アル人ハ、質朴ナル人ヲ擧用シ玉ハヾ宜ルベシ

○學術ニ志ヲ立テ其志ヲ持ト云コト有、志ヲ立ルハ樹ヲ栽ルガ如シ、持ト云コト添木ヲ結ガ如シ、コレナケレバ風雨ノ爲ニ覆サル、人君モ亦中興ヲ志シ玉フトモ、侍臣ノ風雨ヲ禦ノ助ナケレバ、朝ニ立テ夕ニ覆ラン

○古人云、兩陣相接ノ間心動者先敗ト、コノ言ヲ以テミレバ、一將ノ心即チ三軍ノ心ト見ヘタリ、然レバ今日中興ノ志ヲ興シ玉フニモ、一戰場ノ意ヲ以テセバ上一人ノ御志立バ、下一家中ノ志モ立ベシ、上一人怠リ玉ハヾ下一家中モ怠リスサマン

○今世ニテモ中興ヲ志シ玉フ君モアルベケレドモ、補佐ノ良臣ニ事闕玉フベシ、然レドモ御志次第ニテ下ハ憤發スベシ、善カラヌ引言ナレドモ、甲州ニテ晴信公ノ父信虎公ヲ追出シ玉フ事ヲ以テ言バ、最初晴信ノ心ニ出テ千計萬計盡サル、コトナラメ、終ニ追出ノコト成就シタルナリ、是一擧信虎人心ヲ失ヘルヨリ事起トハイヘドモ、甲州一國晴信ニ心ヲ合セタルニテモアルマジ、サテ追出ノ後一兩年ノ間ハ、晴信ノ心ヲ置レタル者モ有ツラン、此一擧ノ始末晴信ノ心盡シ思ヒ遣ラレタリ、勇猛ノミニテ心服ハサセ難カルベシ、飯富板垣ノ黨トイヘドモ、晴信厚ク賴ミ思ハレタルベシ、職ヲ守テ力ヲ盡ハ臣子ノ本分ナレドモ、希代ノ功ヲ立ルコハ常理ヲ以テ責ガタシ、君侯ヨリ情義ノ恩ヲ以シ玉ハヾ、忠臣霄夜ノ星ノ如ク出ベシ

ニ害アランコトハ可レ爲コトニ非ズ、禹ノ水ヲ治メ玉ヘル如クナラズンバ、異志アル人ノ事業トハ云難シ、畢竟新田開發ニ心付ク人ハ、其地ノ田ニ成カ成ヌカト云コトバカリ謀テ、他ノ害ニ心付クコト淺キ也、爰ニ欲スルコトアレバ、心片寄テ他ノコトハ見ヘ難シ、鹿ヲ逐フ獵師ハ山ヲ見ズトイヘル諺ノ如シ、故ニ新田開發ノコトハ輕擧スベカラザルモノ也

○古昔九年ノ大洪水ニテ、天地未曾有ノ大饑饉ナリシニ、禹・臯陶・益・稷四百餘州ヲ馳廻リ、艱難困苦ノ御世話ニテ、烝民粒食スル様ニ成タルト也、後世勸農ノ職タル人モコヽニ主意ヲ立玉ハヾ、禹稷ノ徒タルベシ

○經書ノコトハ何レノ書トテモ言モ更ナレドモ、就レ中尙書ハ經濟ヲマッスグニ書載タレバ、急ニ覽ルベキ書也

○近世ハ虛文日々ニ盛ニシテ、實德日々ニ衰フト云ツベキカ、片田舍マデモ華奢ニバカリナリユク也、風流華奢ニテ鉏鍬把ラルヽ者ニ非ズ、俳諧ナドヽ云モノハ惰農ノ魁ナリ、勸農ニ志アル人心ヲ用ユベキコトナリ

○百姓ノ中ニ小商ヒヲスル者近世村毎ニ多ク成タリ、善カラヌコト也、此風俗モ改メタキモノ也、百姓ニハ農業バカリサセタキナリ、政ヲ執ル人ノ心ヲ用ユベキコト也

○近習ハ君ノ耳目ナリ、善良ナル人ヲ用ユベキコト也、中興ヲ謀リ玉フ君ハ猶以テノコトナリ、才

高ハ三百石ニテモ五百石ニテモ、何程ノ免ニテ三ケ年定免ニアソバサルベキカ、御請スベキヤト申聞スベシ、夫ニテ其村ニ益アルコト目前ナレバ、其年ヨリハ近郷悉ク願フモノ也、兎角年限ハ短キガヨシ、二年三年ニスベシ、年季過テ又年季ヲ願ハヾ、免ノ高下ハ其郷村ノ民力ニ因ベシ、兎角勸農ノ政ニテ民心ノ居付ヌヤウニシテ、惰農ヲ變ジテ上農ト爲スベキ術肝要ナリ、親ノナキ孤ハドコヤラコセテ膏澤ナキ者也、親ノアル子ハドコヤラ貧テモ膏澤アル者ナリ、民ノ父母タル御方ハ御心得アルベキコトナリ

○新田開發ノ事ハ輕々シク成ベキコトニ非ズ、是モ民ヲ教育シ玉フ御心ヨリ成レタラバ過チ少カルベシ、何ントナレバ、田面ニスレバナル處ヲ、天地開闢以來セズニオクハ、ドコゾニ其子細アルベキコト也、天地開闢ノ後人物初生シテ、既ニ田作ルコトヲ知リタルトキ、マヅ其作リ能水掛リ等ノヨキ地ヨリ初タルベシ、其後次第ニ開發シテ如レ是世界ヲナセリ、然ルニ今マデ殘リタル地ナレバ其子細アルコト也、心ヲ公ニシテ天地ノ間ヲ論ズルニ、近世諸國ニ新田多ク出來タレドモ、何レモ其近郷ノ古田ノサヽハリニナラザルハナシ、新田開テ古田ニ水旱損ノ憂アルコト眼前也、天地ヲ一マイニミル眼カラハコノ新田ヨリ出ル米ト、古田アレテ用ニ立ヌ所ト差引シタラバ、サノミ利德アルマジ、然ルニ是古田ニアリツキタル民ノ歎イクバクゾヤ、仁者ノ心忍バザルベシ、モシ新田開發ノ事アラバ、先此憂ヲ先ニ議スベシ、小サキ了簡ニテハ見ユベカラズ、我領分バカリノコトニ非ズ、此ニ利アリトモ彼

○小役人ノ多ク鄕中ヘ出入スルコトハ、殊ノ外下ノ損アル者也、定免ナレバ是等ノコトニモ違アリ、總テ目ニ立ヌ事ニ使役セシメレテ農事ニ妨ル事、上ノ利ニモアラズシテ下ニ費ルコトアリ、此等ノコトハ勸農ニ意ヲ盡ス代官衆アラバ能知玉フベシ

○定免ナレバ人心正クナルト云ハ、如何トナレバ、今迄毛見免ノ上下ノ人情ヲ以テ知ベシ、大方ガ上ノ情ニテハ百姓ト云モノハ兎角横着ナル者ニテ、相應ニ出來タル歲ニテモ、不作々々ト云立テ隱ヲル不屆ナル者也ト、詞ニハ出サネドモ心ニハ民ヲ惡ム意アリ、夫ユヘ百姓メラニ欺カレシ共欺ヲ見出サント察知ヲ用ヒラルヽ也、成ホド夫ニ違モ無ク隱スモノ也、サテ又下ノ情ニハ上ト云モノハ兎角ヒスラコク、有次第絞リ取玉フ者ゾ、隱サレ次第ニ隱セト云樣ニ成ヲル也、是ヲ以テ觀レバ、上下利ヲ相營ムト云ツベシ、如何ゾ斯ル上下ノ情ニテ、百世ノ後一旦變事ナドアランニ、誰トトモニ國ヲ保玉ハンヤ、定免ナレバ下モ上ヲ欺ノ邪念消シ、上モ下ノ欺ヲ禦ノ患ナシ、上下利ヲ公ケニ取テ、人心正シカルベシ

○兎ニモ角ニモ一法ニテハ民情居付テ弊生ズル者トミユ、今迄毛見免ノ國郡ナラバ定免ヨカルベシ、亦國初ヨリ定免ノモリニテ、年ノ豐凶ニヨッテ用捨シ玉フ國郡モアリ、是等ハ又手段アルベシ、民情居付ヌヤウニ引廻スコト肝要ナリ

○定免ヲ行ノニハ年季ヲ限ルベシ、夫モ上ヨリ仰付ラレタルハ惡シ、先ヅ初メニハ一村カ二村カ、

物各其安ズル所ヲ得ルコトナレバ、イツノ時世ニテモ行ハレズト云コトナシ、不レ行ハ仁政ト云ニハ足ラズ、今時ノ儘ニテ取箇バカリヲ減ジテハ、上ノ用度不足ナル而已ニ非ズ、下民ノ爲ニモナルマジキ也、今迄ノ年貢取立ノ高ヲモ減少セズシテ、百姓ノ困究ヲ救フ仕方アルベシ、是上ニ費ル處ナクシテ下ニ救フ所アラバ、仁政ニ非シテ何ゾヤ

○郡奉行代官衆勸農教養ノ意サヘアラバ、定免ノ法コソ仁政ニテ、假ニ井田ノ遺意モアルベシ、如何トナレバ、上下トモニ各其利ヲ利トシテ事公ナレバナリ、事公ナレバ上下共ニ人心正クナリ、風俗モ厚クナルモノ也、人心正ク風俗厚クナラバ、是程能コトアルマジ、毛見ノ法ハ是ニ反セリ、然レドモ數十年來沿習シテ上下共ニ其弊ヲ知ラズ

○下民ハ愚ナル者故ニ、上ヨリ導キ玉ヒテ勢ニ乘玉ハズンバ働ナキモノ也、看ス〳〵損德アルコトニテモ、自分カラスルコトニハ心付兼ルモノナリ、定免ノ下ノ百姓ノ情ヲミルニ、今歲不作ニテハ年貢ヲ足サネバナラズ、豐作ナレバイクラナリトモ己ガ作リ出スホド德ナリト心得テ、春耕ニモ夏耘ニモ、精力ノ入ヤウ格別ナリ、植付ルニモ地ノ植ラレルダケハ植付ル物ナリ、毛見ノ地ノ情ハ是ホドノ勵ミハナシ、是ハ毛見ト定免ト年限アツテ、代ル〳〵行ハレタル土地ノ百姓ニトクト聞タルコト也、コノ百姓云ケルハ、ドチラヘシテモ精ヲ出スガ能キコトナレドモ、毛見ノ年ハ定免ホドニ思ヒ入ナキ者也ト云ヘリ

國食ヲ絶タル女アルノ類推シテ知ベシ

○郡奉行代官ハ勸農ノ職ニテ古ノ后稷ニ則ベシ、スレバ農民ヲ教養スルガ本分ニテ、年貢ノ取立ヲ掌ル役ナリ、然ニ今ハ代官トサヘイヘバ、年貢取立ノコトバカリヲ第一トセリ、但シ代官ハ年貢取立ノ役人ニテ、郡奉行ガ后稷ノ職ジヤト云ベキカ、然ラバ今ノ郡奉行ノ勸方踈ナルコト也、其職ノ分チハ兎モ角モ定メヤウ有ベシ、唯勸農教養ノ意ナキコトヲ憂ルノミ、今ノ代官衆コノ意アラバ、郷中農業ニ精ヲ出スコトニナリ、人ガラモ自ラヨクナルベシ

○井田ノ事古聖ノ法ナレバ、後世トイヘドモ教化徧キ後ハ行ハルヽコトモ有ベシ、然レドモ古ノ如キ田地ノ形ハナスベカラズ、聖人ハ時處位ノ至善アレバ、其時代ノ制作アルベシ、今日トイヘドモ古ニ則ツテ其意ヲ行ハヾ利益少ナカラジ

○農ハ國ノ本トイヘリ、誠ニ百姓困窮スレバ上亦取立ベキ物ナキ故、上ノ困窮ニナルナリ、近年打續キ收納少キコトハ年ノ豐凶ニモヨルベケレドモ、勸農教養ノ政ナキ故ニ、民罷レタルト、風儀亂レテ惰農多クナリタルト是二ツノ内ナルベシ、當職ノ人徒ラニ歳ヲ罪スルコトナク反省スベシ

○仁政トサヘイヘバ年貢ヲ減少ニトルコトトノミ思ヘリ、故ニ是ホドニ取立テサヘ、收納少クテ上ノ用度不足也、コレヨリ取箇ヲ減ジテハ猶々上ノ困リ也ト思ヘリ、夫故今ハ仁政ト云コトハ除モノニシテ置ナリ、是人情餘儀ナキコトナリ、畢竟仁政ト云コトヲ心得違タル故ナリ、愚按ルニ、仁政トハ萬

云、楠氏ハ眞ノ忠臣ナリ、我何ゾ恥ザランヤト、是ヨリ無二ニ云合セタリト也、此事虚實ハ暫ク閣キ、能楠公ノ私ナキコトヲ明スニ足リ、今ノ人楠公ノ意ニ則バ上下何ゾ一和セザランヤ

○河越侯ノ家臣河口三八ノ書レタル、政事說トヤランイヘル假名書ニテ二三枚アルモノヲ先年覽タリ、其大意ハ政ト事トヲ分テ論ジタルモノニテ、政ハ國家ノ經濟ナリ、事ハ君侯ノ身ニ奉ズルトコロ也、夫ヲ一ツニ心得、且治道ニ倦タル君ハ、家風自ラ政ハ輕クナリ、事ハ重クナルト云コトヲ論ジラレタリ、何レ是言ノ如ク表向ノ御仕置筋ヨリ、御身ノ廻リノ御用掛ヲ大切ニ取アツカフ人情ニナリタルヤウナリ

○或町人ノ云ク、人ノ身上ノ廻リメニ成タルトキニ、是ニテハ成又ト思ヒ、年々物事內端ニスルヤウニ仕タル分ニテハ再興成難シ、初ニ思切テ內端ニスベキナリ、是ヲ譬テイハヾ、階子ヲ下ニ今年一段下リ、又來年一段下ルヤウニテハ、又上リ詰ルコトハ成又モノ也、初メニヅカリト下ヘ下ルト、勢ヲ持ツ故又上ラレルナリト云ヘリ、是言俚言トイヘドモ大ニ益アル言ナリ、他ヨリ見テハ過タリト見ユル程ナラデハ、內ニ勢ヲ含ム程ノコトハ有マジキ也、今十萬石ノ家ニテハ、君侯ノ身ニ奉ジ玉フトコロハ五千石ノ御旗本ニモ准ジ玉フホドノコトニ非ンバ中興ノ業ハ成ベカラズ、表立タル御格式ハ闕レヌコトナレドモ、御一分ノコトハ如何樣ニ成玉フトモ不レ苦コトナルベシ、兎ニモ角ニモ上ニ化スル下ナレバ、君侯ノ御志次第ニテ下ハイカヤウニモ行ハルヽ者ト見ヘタリ、楚王細腰ノ女ヲ愛シテ、楚

リノコトニ非ズ、其制ハ如何ニモ無造作ニナスベシ、江戶邸ニテ與シ玉ハヾ、明キ長屋一軒ニテ事足レリ、文學モ上ヨリ法ヲ出シ玉ヒ、何々ノ書ヲ讀ベシト、其書ヲバ讀ネバナラヌ風俗トスベシ、書物多クハ入ヌ者ナリ、其書ハ五倫五常ノ道筋明ナル書、次ニ經濟ニ益アル書ナルベシ、其餘ハソノ人ノ好次第ナルベシ、算學・地方・水利・書札・禮法コレラノ類皆文學中ノ事ナルベシ、堂下ヲ武場トシテ弓馬鎗劍術ノ類ヲ學バシム、如レ此敎導ノ法ヲ立テ玉ヒ、年ニ兩三度ヅヽモ御聲ヲ掛ラレタラバ、一家中勇ミ勵ムベシ、其中ニテ才氣ノ殊ナルヲバ意ヲ加ヘテ御敎育アラバ、成功疑ナカルベシ、今ノ時一日モ早ク建立シタキハ、人才敎育ノ道ナリ

○人々其職ノ本分ヲ能覺悟スベシ、凡何ノ職ニテモ「天工人其代レ之」ト云ガ本分ナリ、我私スルコトナラヌコヲ知ベシ、然ルニ其職ノ勤方ハ人々資質ノ才ノ働ナレバ、俄ニ諸葛武侯ノヤウニ成度トテナラレモセマジキナリ、只何事モ本根ト枝葉トアルモノナレバ、先本根ヘ目ヲ付ベキ也、凡人臣タルモノ忠義ト云ガ本根タルコトハ誰モ知タルコトナレドモ、却テコヽニ油斷アリタガル也、心掛ヨキ人ハ平生自ラ勵ムベキコト也、コヽニ勵ム志サヘアラバ、才モ次第ニ長ジテ大功ヲモ立ベキナリ、志アル人ハ傍輩中ノ惡キナド云コトハアルマジキコト也、昔後醍醐帝八尾別當ヲ賴思召テ召レケルニ、八尾ガ勅答ニ、楠正成ハ累代ノ讐ナリ、コレヲ得テ甘心セバ勅ニ奉ゼント也、楠公コレヲ聞テ召レヨト云、八尾勅ニ應ジテ參內セシカバ、正成佩刀ヲ脫シテ八尾ニ配膳ヲナシタリ、八尾コレヲ見テ大ニ感ジテ

人才ヲ教育スル術ヲ始メ、成功ハ十年ノ後ヲ俟ベシ、庭前ノ花木サヘ其灌漑ヲナサヾレバ、他日濃香氣々タルコトハ望ムベカラズ、況ヤ人才ヲヤ、今ハ此教絶タレバ、宜ナリ人才ノ乏シキコト、七年ノ病ニ三年ノ艾モナホ止ニハ愈ルベシ、今日ヨリ教養ノ術ヲナサバ、コレ程手近ニ成功ヲ見ルコトハ又アルマジキ也、帝堯ノ舜ヲ庶人ヨリ擇ミ擧玉フモ、初ヨリ天位ヲ讓ント思召タルニテハ有マジ、今ノ時世ヲ以テモ孝悌忠信ノ心アルモノ卑賤ノ中ニ間アリ、是ラヲ取立テ召用バ、其中ニハ年ヲ經テ用ニ立ツモノアルベシ、ヨシヤ一役ニ幹タルニ足ラズトモ、贓罪ヲ犯スコトハ稀ナルベシ、今ノ卑賤ヲ見惡シトシテ棄ルハ惜キコトナリ、居ハ氣ヲ移シ、養ハ體ヲ移スト云ナレバ、人ノ居リ場ニテ才ノ働キモ違アルモノナリ

○學校トイヘバ書籍ノコトニハヤナルナリ、是モ今ノ風俗ナリ、正眞ノ學校ハ國家ノ元氣ヲ補助シテ、始ヲナシ終リヲ爲ス者也、コレ無テハ叶ハザルベシ、正眞ノ學ハ古ノ舜ノ契ニ命ジ玉ヘル五教ヲ敷ノ學ナリ、今ノ文雅風流ノ學ハ國家ノ元氣ニ補少シ、コノ故ニ武家ニ取用ルニ用ナシ、古昔契ノ司リ玉ヘル學ハ善キ武士ニナルコト也、今ノ世ノ風流ヲ以テ學トスルヲ見ルニ、少シク文字モ讀レバ武士ノ勤ヲ厭フ心アル者多シ、文章詩賦ヲ事トスルハ浪人儒者ノ所業ニテ、志アル武士ナドノ儒者メキタルハ入ザルモノカト覺エ、今ハ人才ヲ教育スルコト廢レタル故、學問ノ道浪人ノ口スギニ落タリ

○人才ヲ育スル學校ノ制ヲイハヾ、堂上ニ文ヲ講ジ堂下ニ武ヲ講ズベシ、文トイフハ文字ヲ讀バカ

ヲ下問ヲ恥テ問ヌニモアラネドモ、問タラバトテ其人ニ智識アルニモ非ズ、智識アル人ナラバ、如何ナル卑賤ノ人ニモ謙リテ問ベシト此樣ナル心位アルモノナリ、是大ナル惑ナリ、愚者ニモ千慮一得トイヘバ、九百九十九ハ埒モナキ事トミヘタリ、志アル人ハ九百九十九ノ埒モナキコトニハ目モ觸ズ、唯一ツノ善言ヲ取リ用ンコトニコソ、是何故ナレバ、治ノ道ニ心ヲ盡シ玉フ故ナリ、善ヲ嫌フ者ハ無レドモ、九百九十九ノ埒モナキコトヲジツト聞テ居ルコトガナルマジキナリ、然ラバトテ人々ニ逢テ機事ヲ泄スコトニテハアルマジ、治道ニ心ノ拔ヌコトヲ言タルコトナリ、コヽガ眼ノ着所ナリ、或代官支配下ノ扱ヲ仕損ヒ、百姓大勢詰カケ傲訴ニ及ベリ、如何樣ニ慰レドモ聞入ズ、今ハスベキヤウナク切腹セバヤト既ニ其用意セシガ、去ニテモ我日頃書籍ノ片端ヲモ見タルニ、今ノ業ニ益ナキコトコソ口惜ケレ、サラバ一遍尋テソノ上ニテ心靜ニ切腹ヲモセント思ヒ、先ヅ論語ヲ取出シテ學而ノ首章ヨリ目ラク探ニ見ケルニ、知ヲ爲レ知ト、不レ知ヲ爲レ不レ知ト云ニ至テ、不レ覺掌ヲ打テ歎賞シ、夫ヨリ表ニ立出テ、大勢ノ中ヨリ年老タル百姓ヲ四人招テ、今日ノ處置如何スベキト懇ニ問ケレバ、其實ニ感ジケン、此者共衆情ヲ言述、如レ此セヨト言歎ケル、其言ノ如クセシカバ、事故ナク靜リケルトナリ、カク手詰ナル場ニ至テハ不思議ナルコトモ有ルモノ也

○或人人才ノ乏コトヲ歎ク、一己ニ志アル上カラハ尤ナルコト也、然ドモ數十年來因循苟且ノ習氣ニナレテ、經濟ノ志ハ夢イサヽカナキコトナレバ、今更是非ニ及バヌ次第ナリ、志アル人々今日ヨリ

○近年ハ御歷々ノ御身トシテ、卑賤ノ町人へ御手自賜ナド給ハリ、御盃マデ下サル、ヤウノコト聞及ベリ、如何ニシテモ口惜キ次第、上下尊卑ノ辨別モ今ハナキニヤ、其勢カラシテ御家老御用人衆禮儀ノ厚キ推シテ知ベシ、富有ノ町人ハ今ノ風俗ニ習テ、我身ノ程ヲ忘レテ斯アル筈ノ者ト思ヒ、家老用人衆へ對シ持碁ニ打意氣アリ、四民ノ下ニ立ベキ身ヲ忘レタル淺猿シキ事也、何ゾ殿樣御用金ト唱ルカラハ、此詞相應ノ御アヒシラヒニ成ヤウニアリ度モノ也、中興ノ基業ヲ立玉ハゞ、風儀一新スベシ、上貧ク下富ミ、下富メハ財權下ニ移ルト古人モ論ジオケリ

○古昔ヲ聞ニ、郡縣ノ世ト封建ノ世ト云コトアリ、愚按ニ、今ハ此二ツヲ兼玉ヒテ草創シ玉フ事ニテモ有ンカ、諸侯モ此意ニ則トリ玉ハゞ益アルベシ、此意ヲ以テ視レバ、今日諸家ノ御暮シ方アマリ手重ナリ、勤番同樣ノ御心得ニテ、物事今少シ手輕ニアリタキモノカ、斯ル勢ニテハトテモ收納ニテハ不足スル事ニテ、年々困究彌益ナルベケレバ、志アル君侯士大夫省悟アルベキノ時ナリ

○世ヲ患ル忠誠ノ士ママ有レ之トイヘドモ、一木ノ力ヲ以テ大厦ノ顚ルヲ支へ難シ、是理ノ必然ナリ、然ルニコノ人學ヲ知ヤ不レ知ヤ、學ベル人ハ人情事變ニ通達スル故ニ能人ヲ感化ス、學ヲ不レ知人ハ己ガ私ナキニ任セテ一偏ニ押ヤラントス、學ベル人スラ王荊公ノ如キアリ、況ンヤ無學ノ王荊公ヲヤ、中興ノ業ニ志アル人能自ヲ反省スベシ、今時少シク志アル人コノ病アリ、其人ノ量ヲ視ニ足レリ

○下問ニ不レ恥ナド云コトモ常々云コトナレドモ、爰ニ一ツノ惑アリ、其惑トイフハ自ラ思ニ、敢

時、町人へ用金仰付ラレシニ、其町人ノ曰、急ニ御返シ有マジキナラバ御用立ベシト願ヘリ、尤ナルコトト御聞入アッテ、五年借居ニスベシト有ケレバ、其町人難レ有トテ差上ヌ、是ハ八九年以前ノコト也、コレハ何年過テモ御倒ナキコトヲ惜ニ呑込タル故ナリ、一時ノ手段ニテハトテモ百世ノ經濟ハ成難シ、千乘ノ國ノ盟ヲ信ゼズシテ一人ノ諾ヲ信用スルノ類、コノ公案ヲ看得スベシ

○今迄ノ借金ヲ忽ニ半減ニモ三分一ニモ減ズル仕方アリ、其仕方ハ利息ヲマケサスルコト也、利息ヲ減ジテ一割ノ者ヲ五分ニサスレバ、借金忽チニ半減ニナリタルト云モノ也、今ノ通財ノ利息ハ二割餘ニ當ルユヘ、五分ニサセタラバ四分一ニ減ジタルト云モノ也、此理ヲ推サバ如何樣ニモ仕方ノアルベキコト也、此減ジタル勢ヲ失ハズ興業ヲハカルベシ

○今ノ勢ニテハ年賦ト云フコト通財否塞ノ魁ナルベキカ、十年賦ナレバ一割ヅヽナリ、一割渡サルレバ年賦ヲ賴ムマデモ有マジ、スレバ始ヨリ僞ナリ、夫ヨリハ千金ノ所へ米二三十俵ナリトモ利息トシテ遣タラバ、元金ノ生々ヲ絕セザレバ、通財ノ道開ベキカ、是等ハ一槪ニハ論ジ難ケレドモ、人ヲ倒スコトヲ不レ嗜政ヲナスノ一術ナリ

○今ノ世ノ風說ヲ聞ニ、十萬石ノ諸侯ノ家ニハ二三十萬ノ借金アリト云リ、夥シキコト也、年々ノ收納ニテハ年々ノ賄ニ不足スルトミヘタリ、然ルニコノ後不足セヌ樣ニ賄ヒテ、此ノ借金ヲ殘ラズ濟スヤウニハ如何シテナルベキヤ、眞志アル人コノ公案ヲ看破セヨ

等ニ至ル迄、諸事手輕ナリシコト思ヒ遣ベシ、今ハ至テ下情ニ疎ク諸事手重ナルヲ大名ジヤ、サスガ御歴々ジヤナド、譽ルモノ多シ、カヽル愚頑ノ人ノミ左右ニ勤仕スルナレバ、下情ニ通ジ玉ハヌモ道理ナリ、或者大名ノ前ニテ云ケルハ、今ノ世ノ大名ニ生レザリシコトハ無上無外ノ大悦ナリト云ケル、其子細ハト御尋アリケレバ、彼者云ヤウ、十人並ニ勝レタル資質ニテモ寄テタカツテタワケニサレル也、人間ニ生テ一生涯タワケニテ果ナンコト口惜カルベシ、我ハ賤ク生タルユヘ、生レ付ノ才ハツタスナリ、ソレ程ノ悦ハナシト云ケルヨシ、其言滑稽ニ近シトイヘドモ、味ナキニシモ非ズ

○近年通財ノ道日々ニ否塞シテ上下ノ一難事也、コヽヲ以テ賢士ノ智力モ及ビ難シ、愚按ズルニ、財ハ天下公共ノ物ナリ、富モノ一人私セント欲ストモ得ベキニ非ズ、有レ富ト無レ富ト皆天命ノ然ラシムル所ナリ、「無レ貧ニ於有ニ、有レ足ニ於無ニ」コレ又天道ノ常理ナリ、常道ヲ踏テ常理ニ處セバ、何ノ難ズルコトカアラン、カク否塞スルハ無レ富モノ常道ヲ不レ踏、常理ニ處セザル故ナラン、有レ富者ノ罪ニハアラジ

○財ヲ通ズルノ大道ハ人ヲタオスコトヲ不レ嗜ノ一言也、今ノ世ニ在テハ人ヲタオスコトヲ嗜ザル者能困ヲ出シノミ、内外法律ヲ正シテ、入ヲ量テ出スコトヲナスハ、コレ人ヲ倒コトヲ不レ嗜ノ政ナリ、人ヲ倒コトヲ不レ嗜ノ心ヲ以テ、人ヲ倒コトヲ不レ嗜ノ政ヲ行ハヾ、天下ノ富人皆吾用ニ給センコトヲ欲セン、如レ此ナラバ誠ニ天下ノ通財ノ街道ニ立ガ如シ、或諸侯大公儀ヨリ御手傳ヲ仰蒙ラレシ

將ヲ選テハ兵權ヲ專ニセシム、中興ノ業モ小事ニアラズ、其成功ヲ庶幾セバ、事ヲ一人ニ任テ、在所江戸共ニ此人ノ取計ヒタルベシ、任ヲ受ル人モ成功ヲ志ニハ、一エン負任セザレバ功ハ成就シ難シ、賢明ノ君ハ其臣ニ委任シテ疑ザルベシ、既ニ臣ニ委任ストイヘドモ、是ヲ使フコトハ君ニ在リ、權ヲ貸ザレバ成功ナリガタシ、コレヲ貸ノ柄ハ君ノ手裡ニ在リ

○百年昇平ノ化ニ狃テ人氣隋弱ニナレリ、コノ沿習ヲ改メザレバ事行レ難シ、衆人ノ耳目ヲ一新スルコトハ、委任ヲ得ル人ノ術ニアルベシ、而後法ヲ立テ是ヲ守ラシム、今ノ人法ヲ守ルコトヲ知ズ、コノ習氣ニテハ事行ハルベカラズ、委任ノ臣一タビ法出シテハ、君侯ト云ドモ衆臣ト共ニ此法ヲ守テ失スベカラズ

○事ヲ發スルニハ害モ素ヨリアルベキナリ、一利一害陰陽ノ屈伸トテ、利バカリト云フコトハ無キ道理ナリ、中興ノ業小事ニ非レバ、ソノ事ノ上ニハ百千ノ害モ有ベシ、病人ニ鍼灸ヲ用ユル意也、終ニ平快如何ト眼ヲ付テ、今日ニ疑惑スルコト勿レ

○大業ニ志ヲ立玉フ賢明ノ君ハ、御身ニ奉ゼラル、物諸事手輕クナシ玉フベシ、最初ニ論ゼル如ク、國初先君ノ浴雨櫛風シ玉フ辛勞ヲ思召ヤラル、御心サヘアラバ、五年ヤ七年ガ間ハ如何樣ニモ儉約ノ法ハ御守ナルベキコト也、本朝仁德帝民ノ饑寒ヲ愍ミ玉ヒ、三年租稅ヲ許サレ、宮殿ノ作事修理モナカリシカバ、雨露御衣ヲ犯シタルト云コト人ノ能言傳ル所ナリ、是ヲ以テ見レバ、御平生ノ調度御衣

未ㇾ占有ㇾ手」トイヘリ、コノ心ノ切アジ鈍キハ大ナル恥ナラズヤ

○儉約ト簡略ト辨別アルコトヲ知ルベシ、世間ノ人儉約トイヘバ、何事モチビ〳〵スルコトナリト思ヘリ、夫ハ簡略ナリ、簡略ハ爲ベキコトヲモ可ナリニスルコトナリ、儉約ハ物ヲツヾマヤカニ捨タリ無キヤウニスルナリ

○儉約トイヘバ、臺所ヲ詰ルヿニ先取カヽル者多シ、是ハ第二ノ事也、儉約ノ最第一ハ玩好ノ物ヲ止ルコト也、然ニ人心ハ活物ユヘニ不ㇾ動コトヲ得ズ、サルモノナレバ何モセズニ居ルコトハ、貴モ賤モ成ヌモノナリ、故ニ善ニ動ザレバ惡ニ動ク、中興ノ御志サヘ立バ、治道ニノミ勵ミ玉フユヘ、玩好ノ御暇ハアルマジ、且御慰モ治道ニ益アル弓馬ノ藝ニノミ遊ビ玉ハヾ、一家中ノ士氣モ振フヤウニ成ベシ

○儉約ハ定法ヲ立テ守ルベシ、奥表トモニ御儉約中、何ケ年ガ間ハ如ㇾ此守ルベシト初ヨリ年限ヲ觸知ラスベシ、上下貴賤トモニ事ニハ際限ナケレバ、人情堪難キモノナリ、上ヨリ如ㇾ此アラバ家中ハ自ラ行ハルベシ、艱難ニハ誰モ堪兼ルモノナリ、就ㇾ中奥向ガ處シ難キ最第一ナルベシ、是ハ君侯ヨリ奥樣ヘヨク仰含ラレテ、君ノ中興ノ御志ヲ奥樣モ御志ト成レ、奥向ノ事ハ奥樣ノ御志ヲ老女ヘヨク仰含ラレ、奥樣ノ御志ニ總女中感服シ奉ルヤウニ無テハ、女中ハ制シ難カルベシ、若殿樣幷御連枝方ヘモ是ニ准ジテ能々仰含ラルヽコト專一ナリ、大事ニ臨テハ掣肘ノ政ニテハ功ヲ成難シ、故ニ行軍ニ

住シテ通財ノ飲食ヲ節ニシ、儉約ノ時服ヲ用ヒ、禁物ヨクシテ悔字ノ藥劑ヲ服用セバ、元氣日々ニ復シテ無病ノ人タランコト日ヲ算テ待ベシ

○困ヲ濟フニ、ソノ主劑ノ悔ノ字ニアルコトヲ知ラザレバ、苟安ト云惡症ヲ發シテ、鼻ノ先ノ手繰バカリニ目ヲ付テ、終ノ落着如何ニト慮ル心ナシ、先ヨシ〳〵ト惰氣ニ成テ、中興ノ憤發ハ聊モナキナリ、故ニ通財ノ食物ヲメッタニ貪リ、高利ノ鰒汁マデ食テ彌毒ニ中リ、儉約ノ衣服モ節制違テ人情ニ悖リ、外邪ニ侵サレテ病彌重ク、勸農ノ政ナキユヘ、滅他ニ年貢ヲシボリ取テ民疲レ、後ハ收納モ年年減ズベシ、コレ家宅修理ヲ加ヘザルガ如シ、故ニ風寒暑濕ニ感冒セラレテ、病日々ニ沈痼ス、儻是ヲ憂ル人アルモ、徒ニ其疾ヲウルサク厭フ心カラ、妙藥詮議ニカヽルモアリ、是等ノ人ハ元來中興ノ志ナキ人ナリ

○拔群特立ノ志アル人ニ非レバ、困ニ處シ得ルコト難ラン、困ヲ厭フベカラズ、厭フ心アレバ成功ヲ急ユヘニ、宋人ノ苗ヲ拔如ノ害アリ、シッパリト困ニ堪ルノ心肝要ナリ、君子ノ固ニ窮スト云フコトモ、コノシッパリナルベシ

○悔レバ改メント欲スル心生ズ、困ノ上六、動ケバ悔、有レ悔、征ケバ吉ト云テ、困ニ次ニ井ヲ以ス、井ハ本ニ復ルノ意ヲ取ト云リ、悔テ本ニ復ル、改ノ道生ズ、是故ニ井ニ次ニ革ヲ以ス、革ハ改革ナリ、革ハ決斷ニヨッテ行ハル、斷ハ心ノ切レナリ、心ノ切アシ鈍レバ革ルベカラズ、革ノ九五ニ「大人虎變、

テ下民其志誠ニ觀感シテ、上下響ノ如ク應ズ、ソノ源ハ國君中興ノ御志ヲ立玉フニ出ヅ、國君中興ノ御志アルニ、上下響ノ如ク應ゼザルハ、君ノ美善ヲ補益スルコト不レ能ニヨル、コレ大夫ノ罪トモ云ベシ、國君ト大夫ト一體ニ志ヲ合セ給ハズシテハ其功ナルベカラス

○醫者ノ疾ヲ治スルニハ、先其病因ヲ洞見スト云ヘリ、今世困究ノ病因ハ驕奢ナリ、治世ノ弊下々マデモ物毎ニ美麗華奢ヲ事トセリ、是ヲ病ニ譬ヘバ、上下專言レ利ハ譫語ニテ、ソノ病狀ハ顯ハレテ見易シト云ドモ、天下擧テ病メルノ日ニ至テハ、明醫ニアラザレバ無病ノ人ノ常語ハ、「唯有ニ仁義ニ而已矣」ト云コトヲシルアタハズ、良醫ハ病狀ニ泥ズシテ、洞ニ其病因ヲ見テ之ガ主劑ヲ下ス、苟クモ安ズト云モノ大惡症ナリ、玆ニ至テハ扁鵲倉公モ藥匕ヲ捨テ逃去ベシ、サテ是ヲ治スル主劑ハ悔ノ一字ニアリ、易困ノ上六ニ曰、有レ悔征ケバ吉ト、コレ困ヲ出ベキ所以ノ道ナリ、悔コト眞切ナレバ心既ニ其本ニ復リテ、虚文ヲ棄テ朴素ニ入ル、易ニ吉凶悔吝ヲ云リ、吝ハ凶ノ漸也、悔ハ吉ノ漸也、不レ可レ不レ愼、儉約ハ衣服ノ如シ、夏ハ葛ヲ著、冬ハ綿入ヲ着ルノ理ニテ、衣服節ナラザレバ外邪從テ入、儉約節制ナラザレバ、外誘ニ引サレテ日々ニ華美ニノミ入ル、通財ハ食物ノ如シ、多キハ飽滿シ、少ケレバ饑餒ス、徒ニ命ハ食ニ在ト思フベカラズ、勸農ハ家宅ノ如シ、家宅有ザレバ身ヲ寄ベキ所ナシ、僥倖ヲ庶幾スルコト勿レ、コレ大禁物ナリ、米直段デモヨキカ、又ハ臨時ノ運上デモ出ルコトアラバ、又ケ樣バカリニテモ有マジキト希ヒ居ルハ、鄙諺ニ所謂熊坂ガアテ飲也、是故ニ勸農ノ家宅ニ

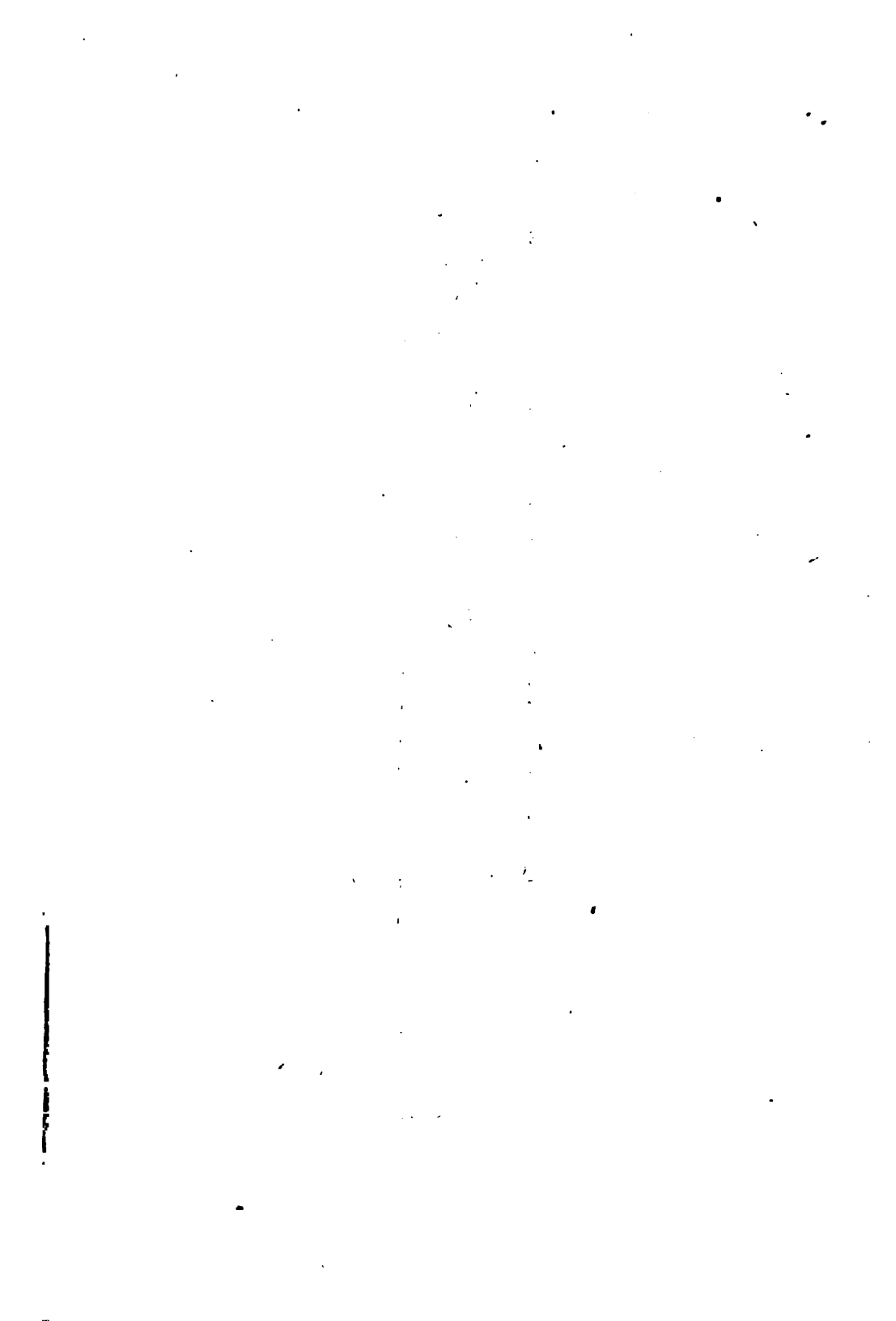
何故ゾヤ、予僭踰ノ罪ヲ犯シテ是ヲ論ズ、コレ他ナシ、畢竟御志ノ立ト不レ立トニ在ノミ、然レバ今ノ費弊ハ今ノ國君士大夫ノ大ナル御恥辱ニ非ズヤ、匹夫ヲモ志ヲバ不レ可レ奪ト孔夫子ノ宣シモ、恥ヲ知タル者ハ如何ヤウナル卑賤ノ者トイヘドモ、三軍ノ將帥ニモ勝ツタリト稱美シタル意ナリ、志トハ恥ヲ知タルコト也、玆ニアツテ御憤ヲ御興ナクンバアルベカラズ、玆ニ在テ憤發シ玉ハバ、百事何ゴトカ成ラザラン、玆ニ在テ志ヲ立玉ヒテ、國初汗馬ノ勞ヲ思召ヤラレテ、其十分ノ一ノ勞ヲ今日嘗メ玉ハヾ、功ハ古ニ倍セン、玆ニ在テ憤發シ玉フハ、武運長久ノ御祈禱コノ上モナキコトナルベシ、御冥加ノ程最目出度カルベシ

○近年諸家ノ困究、其兆一朝一夕ノコトニ非ズト見エタリ、其困究ヲ弛メントテ、願クハ土着ノ風アリタキモノト、首ニ熊澤氏、次ニ荻生氏、ソノ餘白石君等論議アリト聞ク、然レドモ是ハ天下ノ評議ニテ、諸侯ノ預リ望ム所ニアラズ、諸侯ノ御家ニテハ今ノ時制ヲ守テ、百世當行ノ經濟ノ術アルベシ

○今ノ勢ニテハ年々困究シテ、後ニハ家中扶助スベキヤウナシ、其極ハ一日ノ食物モ乏シキニ至ルベシ、今時ナマ志アル國君士大夫モアルベケレドモ、勢ト云モノヲ改革セザレバ、勞シテ功ナカルベシ、コノ勢ト云モノ容易ナルコトニハ革ラルベカラズ、國家中興ノ業ニ志アル人コレヲヨクスベシ、國君中興ノ御志サヘ立玉ハヾ、相弼ルノ士大夫自然ト憤發スベシ、コレ同氣相求メ同聲相應ノ常理ナリ、忠誠ノ士ハ國アルコトヲ知ヲ我家アルコトヲ忘ル、コヽヲ以テ能國ノ爲ニ心力ヲ盡ス、コヽヲ以

經濟隨筆

事ニ觸テ感發スルヿアルニ任セテ書ツク、他日就ニ有道之人ニ而正レ之バ、其言ノ是非ヲモ知テ、進修ノ一助トセント欲スルノミ

○今世ノ人思フニハ、戰國ノ時ハ專ラ武力ヲ以テ爭テ、勝レル者國郡ヲモ得シヤウニ思ヘドモ、左ニハアラジ、皆仁智ヲ兼給ヘル人々ナリト見ユ、如何トナレバ、仁ニ非ザレバ親シカラズ、親シマザレバ人心服セズ、智ニアラザレバ事タラズ、勇ニアラザレバ事行ハレズ、智仁勇三者兼玉ハザレバ、天命ニ叶テ御子孫迄モ民牧トハ成給フマジキ也、然レドモ戰國ノ事ユヘ、跡ノ見ユルハ勇ノミ、ソレユヘ武力ノミニテ、今ノ諸侯ノ位ニ立玉フ樣ニ思ヘドモ、ソレハ心得違ナリ、然ルニ近年諸家トモニ困究ノ世トナリ、百年刑措ノ治世ニ不相應ナル行跡アルニ至ル、是其人ノ器ニアラザル故トモ云モノアルベケレドモ、予ガ見ル處、否ラズ、凡天地ノ間ニ生レテ人ノ形アル者ハ、古モ今モ人才ノ生レツキニサノミ違アルベカラズ、拔群ノ才ハ古トテモ亦格段ノ生付也、然レバ今ノ國君モ、今ノ當路ノ士大夫モ、既ニ天命ヲ得テ國君士大夫ト生レ得玉フカラハ、國初ノ國君、士大夫ト均ク、智仁勇ヲ兼給タル御生レ付ナリ、然ルニ國初ニ在テハ、アノ如ク草創ノ功ヲ成シ玉フニ、今日ニ在テハカク費弊シ玉フハ

經濟隨筆

詢蒭邇言 終

知ㇾ生ㇾ聰明ㇾ也、故曰、致ㇾ知在ㇾ格ㇾ物、物格而后知至、知至而后意誠、又曰、自明誠謂ニ之敎一、不ㇾ明ニ
乎善一、不ㇾ誠ニ乎身一矣、蓋知虛則明、則欲可ㇾ克而意可ㇾ誠矣、戰國之君、率無ニ學術一、而其言行暗與ㇾ道
符者、固歷ニ世故一、達ニ事變一、深知ニ克己之得ㇾ衆、而縱欲之失ㇾ國也、昇平之君、欲敗ㇾ度、縱敗ㇾ禮、不
ㇾ知ㇾ恭儉之爲ニ何物一也、且其好惡大拂ニ乎衆一、然而衆猶阿諛取ㇾ容、不ㇾ敢陳ニ其非一、苟非ㇾ學以開ニ其聰明一、
何以治ニ國家一哉

右ノ一段ハ學問ノ身ヲ修メ人ヲ知ルノ本タル事ヲ明シ申候、國字ニ認候ヘバ冗長ニ相成リ候間漢文ヲ
用ヒ申候、以上ノ事皆古聖人ノ道ニ相考ヘ、其旨ヲ以テ錄上仕候、聊臆見ノ論ニテ無ニ御座一候、此ノ
書ノ旨能々御體認被ㇾ成、學術御勵ミ被ㇾ成候バ、誠ニ御家中御領內ノ弘福、朝廷ヘ第一ノ御奉公ト乍
ㇾ畏奉ㇾ存候

市井臣　古屋　鬲　謹撰

奉呈　岡　崎　侯　閣下

ノ德ナリ、勇ハ難ニ臨ンデ懼レヌ事ニテ、司馬ノ德ナリ、尙書ノ九德周禮ノ六德、皆官ニ因テ德ヲ立ツル事古ヘノ道ナリ、一人ニテ智仁勇ヲ兼備ヘル事ニ非ズ、穀梁傳ニ、「智者慮、義者行、仁者守」トイヘルモ三卿ノ德ヲ擧ルナリ、勇ヲ舍テ義ヲ擧ルモノハ、「孔子曰、君子有レ勇、而無レ義爲レ亂、小人有レ勇、而無レ義爲レ盜」、又曰、「勇而無レ禮則亂」、凡ソ人學バザレバ禮義ヲ知ラズ、禮義ヲシラザレバ勇者ハ上ヲ害シ、怯者ハ難ヲ逃ル、ソレ故周禮ニモ、義ヲ以テ司馬ノ德ト爲リ、無學ノ徒ニモ智ヲ好ム人アリ、仁ヲ好ム人アリ、勇ヲ好ム人アリ「孔子曰、好レ知不レ好レ學、其蔽也蕩、好レ仁不レ好レ學、其蔽也愚、好レ勇不レ好レ學、其蔽也亂」コノ三蔽ノ中勇ノ蔽最甚シ、故ニ勇ハ必ズ義ニ由テ然後ニ其德全シ、サレバ此ノ三德ハ詩書禮樂ニ熟シテ或ハ智・或ハ仁・或ハ勇・各其性ノ近キ所ヲ得テ國家ノ用ニ供スルナリ、德ヲ成シ材ヲ達スルノ道、學問ヲ捨テ他ニ求ムベカラズ候、閣下ニモ古聖人ノ道ヲ御學ビ被レ成候バ、精シキ理モ御分リ被レ成、御家中御領內マデ漸々風化ニ霑ヒ可レ申候、古今ニ涉リ和漢ニ求メ、サマ〴〵ニ思慮仕候ニ、學ヲ好ムニ優リ候好事ハ無ニ御座一候、是ニ因テ左方ニ一段ノ議論ヲ附記仕候、

治ニ國家一之道、知レ人爲レ先、知レ人之鑒、近在ニ乎己一、己不聰不明、則逆レ耳之言不レ察、而負レ俗之行見レ棄也、不レ察見レ棄、則賢智將ニ自逃一焉、故人君之德、聰明爲レ先、聰則逆耳之言納焉、明則負俗之行取焉、齊桓於ニ夷吾一、晉文於ニ勃鞮一、皆去ニ其私怨一、而公ニ遇之一者、蓋知ニ其遇之有レ利ニ於國一、而怨之無ニ益ニ於身一也、由レ此觀レ之、人君之德、莫レ大ニ於知一、知莫レ大ニ於學一、記曰、好レ學近レ知、學也者、所ニ以開ニ心

官衙ヲ設ケ、田獵ヲ習シ廐牧ヲ育シ、器械ヲ制シ爵祿ヲ詔ル役人ナリ、第三ニ司空卿ハ厚生ノ事ヲ司ドル役ニテ、我朝ノ宮內ニ當リ、一國ノ土田ヲ司ドリ、城池ヲ修メ廛宅ヲ授ケ、時令ヲ隨ミ山川ヲ征シ、草萊ヲ辟キ道路ヲ除シ、隄渠ヲ通ジ營造ヲ監シ、章程ヲ定メ貨賄ヲ算シ、錢債ヲ治ル役人ナリ、皆ソレ〳〵ニ頭・助・允・屬アリテ此ノ諸官ヲ領スルナリ、此ノ外ニモ禮儀ヲ掌ドリ、法令ヲ敷キ刑罰ヲ行フ官アルベシ、我朝ニテハ治部卿萬事ノ儀式ヲ掌ドル、古ヘノ宗伯ノ如シ、刑部卿刑法ヲ掌ドル、古ヘノ司寇ノ如シ、魯國ニテ夏父氏世々宗伯タリ、臧孫氏世々司寇タリ、唐虞ノ世ニハ納言ノ官アリテ法令ヲ掌ドル、周ニ至テ太宰ノ官國法國令ノ事ヲ總掌ドリ、內史御史大僕小臣ノ類是ヲ出納ス、武家ノ大目附ノ職ノ如シ、膳羞・醫藥・園池・圖書・畫繪・裁縫等ノ事ハ中官ヨリ領ス、武家ノ小納戸ノ屬隸ナリ、此ノ手分ケ無クテハ治メ方混雜シテ行屆キ難シ、當時何レノ家ニモ武官ニハ番頭・物頭・旗奉行・鎗奉行・使番・步士・足輕ナド云モノ有テ荒方ハ管轄アリ、文官ニハ用人・目附・勘定頭・郡奉行・町奉行・作事奉行・道奉行・其外山林川澤マデ夫レ〳〵ニ役人アリ、サレドモ不學無術ノ人ノ手ニ出タル制ナレバ、統轄ノ法宜シカラズ、其上風俗ヲ正シ人倫ヲ厚クスル役人ヲ一向設ケズ、一大闕事ト云フベシ、右ノ三卿ノ中ニテ司徒ノ官ハ、產業ヲ授ケ風化ヲ美ニスル最重キ職ナルニ、當世ニテ是ノ官ヲ立テズ、僅カニ儒者ナドニ託シテ孝弟仁義ノ空論ヲ說話セシムル事、古ノ道ニ暗キ故ナリ、聖人智仁勇ノ三德ヲ立オカレタルモ、智ハ心計ノ善キ事ニテ、司空ノ德ナリ、仁ハ人ヲ敎テ退屈セヌ事ニテ、司徒

是以聖王先成レ民、而後致二力於神一、於レ是乎民和而神降二之福一、」サレバ前ニ申候通リ、好惡恭儉ノ四字ハ神明ニ事ヘラレ候本務ニテ御座候

官職トハ人君天ニ代リテ民ヲ治メ候方法ニテ御座候、尙書ニ「無レ曠二庶官一、天工人其代レ之、」曠ハムナシクスルト訓ジテ、其任ニ當ラヌ人ヲ其官ニ置ク事ナリ、工ハ功ト同ジ事ナリト訓ズ、此ノ意ハ人君ノ爲ル所ミナ天職ナレバ、其器ニ非ル人ヲ用ヒテ民事ヲ治メシムベカラズトナリ、帝舜ノ「咨汝二十有二人、欽哉惟時亮二天功一」ト戒玉ヒシモ此意ナリ、歷代ノ聖王必ズ正德・利用・厚生ノ政ヲ以テ萬民ヲ安ンジ玉フ、故ニ亦必ズ正德・利用・厚生ノ官ヲ設ク、是ヲ三事ト云フ事詩書ニ見エタリ、正德トハ、民ノ風俗ヲ正シクスルナリ、利用トハ、器械ニ事缺ヌヤウニ拵ヘ出スナリ、厚生トハ、勝手ムキ不如意ナラヌヤウニ世話ヲスルナリ、帝嚳以前ハ六府ノ官ノミニテ、專ラ利用厚生ノ爲メ設ケラレタリ、堯舜ニ至リ始テ九官ヲ建テ、正德ノ敎興ル、夏商周ヲ歷テ少ク沿革アリ、サテ天子ニ六卿ナリ、我朝ノ八省ニアタル、諸侯ニ三卿アリ、三卿トハ、司徒・司馬・司空ナリ、此ノ三人ニテ國中ノ仕置ヲ三通リニ分テ是ヲ治ム、第一ニ司徒卿ハ正德ノ事ヲ司ドル役ニテ、我朝ノ民部ニ當リ、一國ノ戶籍ヲ司ドリ、職業ヲ授ケ徒役ヲ課シ、市肆ヲ明メ鄕黨ヲ睦ビ、老幼ヲ養ヒ庠序ヲ興シ、風俗ヲ正シ譜牒ヲ叙デ、喪祭ヲ修メ農桑ヲ勸メ、租稅ヲ斂ムル役人ナリ、第二ニ司馬卿ハ利用ノ事ヲ司ドル役ニテ、我朝ノ兵部ニアタリ、一國ノ武備ヲ司ドリ、兵賦ヲ治メ卒伍ヲ書シ、僕御ヲ率キ輿服ヲ書シ、儀仗ヲ正シ

少カラズ候、國政ヲ行ヒ候ニモ先代ノ仕置ヲ取リ興シ候得バ、人心モ能ク歸服仕候モノニ御座候社稷ト申候ハ、社ハ土神ヲ祭リ候ヤシロ、稷ハ五穀ノ神ヲ祭リ候ヤシロニテ御座候、五穀ハ萬民ノ命ヲツナギ候モノユヘ、是ヲ主ドリ候神ヲ祭リ申候、其五穀ノ生ジ候本ハ土地ニテ候ヘバ、始テ國ヲ賜リ諸侯トナリ候節、天子ヨリ大社ノ土ヲ割テ被レ下候ヲ、城內ニ於テ社壇ヲ設ケ、永代是ヲ祭リ候ヲ社ト申候、何レモ土壇ニテ屋ヲ不レ葺、風雨霜露ヲ受ケ申候、畢竟萬民ノタメニ立テ候社稷ニテ御座候、人君一國ノ中ニテ我ヨリ上ニ立チ候モノ無レ之候ユヘ、自然ニ驕泰ノ心生ジ、事ニ惰リ諫ニ怫リ申候、コノ所ヲ聖人熟々考ヘ玉ヒテ、宗廟社稷ト申モノヲ建立シテ、人君恭敬ノ心ヲ養ヒ、怠惰慢易ノ心ノ萌サヌヤウニ導キ玉ヒシハ、深キ意味アル事ト見エ申候、孝經ニ、諸侯ノ孝ヲ說テ曰、「能保二其社稷一、而和二其民人一、蓋諸侯之孝也、」禮記ニ「國君死二社稷一、又國有レ患君死二社稷一、謂二之義一、」孟子云、「諸侯危二社稷一、則變置、」是等ノ語ヲ推テ社稷ノ重キ事明白ナリ、我朝ニモ古ヘヨリ鎭守ト申スモノ國々ニ御座候ヘドモ、一通リノ神祠ニテ、土神ヲ祭リ候事不二承傳一候、神道家ノ說ニ、稻荷大明神ハ稷神ト申傳候、何レニモ社稷ノ二神ハ、五穀成就ノ德ニ報ズル爲メ、御城內ニ於テ御自身御祭リ被レ成可レ然奉レ存候、烈風・鴻水・螟螣ナド年々害ヲ成シ候モ、神明ノ怒リニ觸レ候テ擁護少キユヘト可レ被二思召一候、然シナガラ御家中御領內ノ人君德ニ歸服不レ仕候テハ、如何ホド神明ヲ被レ爲レ祭候テモ擁護ハ有レ之間敷候、尚書云、「至治馨香、感二于神明一、黍稷非レ馨、明德惟馨、」又左傳ニ、「季梁云、夫民神之主也、

マノ役人ヲ立テ、其下ニ農工商賈ヲ置テ事辨ジ候ヤウニ心得ラレ候ハ、大ナル相違ニテ御座候、然レドモ此ノ民ヲ安ンジ候ニハ、古聖人許多ノ方法ヲ立ラレ候ユヘ、學問不ㇾ仕候テハ其切リ組相知レ不ㇾ申候

宗廟ト申候ハ、先祖ノ靈屋ニテ御座候、是モ古聖人ノ制ニ、天子ハ七廟、諸侯ハ五廟、大夫ハ三廟、士ハ一廟ト限リ有ㇾ之候、七廟トハ、大祖ノ廟一ツ、是ハ大先祖ノ靈屋ナリ、其次ギニ有德有功ノ二祧アリ、有功トハ、始テ天下ヲ有チ候人ナリ、有德トハ、有功ノ先祖、又ハ子孫ノ中ニテ德ノ勝レテ高キ人ヲ云フ、此ノ三廟ハ幾代過ギ候テモ祭リヲ絕チ不ㇾ申候、其外ニ當代ヨリ數ヘテ高祖・曾祖・祖廟・禰廟ト四廟ヲ立テ候テ、毎月必ズ自カラ齋シテコレヲ祭リ申候、勿論粢盛ニ備ヘ候供米ハ、天子自カラ籍田ト申スモノヲ耕テ、祭服ハ王后手ヅカラ蠶ヲ養テ織ㇾ之候事禮ニ見エ申候、諸侯五廟トハ始テ國ヲ有チ候有功ノ人ヲ大祖トシ、其外ハ當代ヨリ四代上ミヲ高・曾・祖・禰ト四廟ヲ立テ候事天子ト同然ナリ、是モ粢盛ハ人君手ヅカラ籍田ヲ耕シテ作ㇾ之、祭服ヲバ夫人養蠶シテ是ヲ織ル、大夫以下皆然リ、サテ此ノ宗廟ヲ天ニ配シテ尊ビ候事、如何ナル故ニ候ナレバ、貴賤トモニ人ノ出デ候本ハ先祖ナリ、若シ此先祖ナクンバ天子トナリ諸侯トナリ、今日如ㇾ此富貴ヲ極メ榮耀ヲ受ケ候事決シテ成リ不ㇾ申候、然レバ先祖ヲ大切ニ仕リ候ハ、己ガ本ヲ忘レヌ心ニテ御座候、凡ソ人古ヘヲ忘レ本ヲ忘レ候ヨリ、侈リニ長ジ欲ヲ縱ニシ、終ニ國ヲ失ヒ家ヲ破リ、身ヲ亡シ先祖ヲ辱シメ候事古今其例

ニテ候ユヘ、尙又荒々左方ニ書キ記シ奉レ入ニ御覽一候

先ヅ天職ト申候ハ、天帝ヨリ被ニ仰付一候職分ト申ス事ニ候、天子ヨリ庶人ニ至ルマデ皆夫レ〴〵ノ職分定リ申候、天子ハ天下ノ民ヲ安ンジ候ヲ職分ト被レ遊候、諸侯ハ領内ノ民ヲ安ジ候事職分ニテ候、此ノ職分踈カニ御座候ヘバ、天罰ヲ受ケ候事顯然ノ道理ニ候、天罰ト申候ハ重キハ天下國家ヲ亡ボシ、輕キハ大風洪水大火蟲螟ナドノ災是ミナ天神地祇ノ怒リニ觸レ候ユヘニテ、一國ノ難儀ト成リ申候、サテ天ニ好生ノ德アリテ、人ハ申ニ不レ及、無用ノ鳥獸草木ニ至ルマデ、皆其惠ヲ得テ夫々ニ生ヒ立チ候ヲ好生ノ德ト申候、好生トハ物ヲ殺ス事ヲ嫌ヒ、何ニヨラズ育テルト云フ義ニテ、即仁德ナリ、大戴禮曰、「天作レ仁、地作レ富、人作レ治」人トハ人君ナリ、人君天意ヲ奉ジテ治理ヲ施シ玉フ故、大學ニ「爲ニ人君一止ニ於仁一」ト申候、然レバ人君ノ職ハ汎ク民ヲ安養スルニ止リ申候テ、職分人君一人ニテ行キ屆キ不レ申候ユヘ、家老用人以下サマ〴〵ノ役人ヲ立テ手傳ヒ申候、サレバ家老以下モ皆々人君ヲ相ケテ民ヲ安ンジ候事天職ニテ御座候、尙書ニ、「惟天惠レ民、惟辟奉レ天」此心ハ天帝民ヲ愛スル心アリトイヘドモ、自カラ民ヲ治ムル事不レ能、人君ニ命ジテ是ヲ治メシム、然レバ人君ハ天意ヲ奉ジテ民ヲ惠ミ候事職分ト相見エ候、又孟子云、「民爲レ貴、社稷次レ之、君爲レ輕、」コノ意ハ天子ヨリ萬國ノ民ノ爲メニ五穀成就ノ祈禱所ヲ建立シ、其祭祀ヲ主ドル役人ニ人君ヲ立候ヘバ、畢竟民ノ爲メノ社稷、社稷ノ爲メノ人君ト申ス心ニテカク申候、愚ナル君ハ己レ一人ノ身ニ奉ゼンタメニ、家老以下サマザ

其力一」又云、「匹夫匹婦、不レ獲二自盡一、民主罔三與成二厥功一」ト戒候、然レバ恭ノ字ハ人君ノ一大要務ト相見エ申候、サテ儉ヲ以テ是ニ配シ候譯ハ、人君一國一郡ヲ領セラレ候ヘバ、其國中ヨリ納マリ候租稅、及ビ山海ノ征莫大ノ倉入リニ候ユヘ、如何ホド華麗汰(マヽ)侈ナル奢リモ心ニ任セ申候、是ニ因テ宮室・衣服・飮食ノ三ツハ申スニ不レ及、其外後宮ノ佳麗、燕居ノ玩好マデ、年々ニ侈心增長シテ、終ニハ其莫大ノ倉入リニテモ賦リ足ラヌヤウニ成リ行キ、家中ノ祿ヲ削リ領內ニ運上ヲカケ、商人ニ用金ヲ仰グ、當時ニテ人君困窮スレバ、臣下ノ祿ヲ削リ、商人ノ借金ヲ斷リ、有功有勞ノ臣ニモ賞賜ヲ行ハズ、文學武術モ一切廢弛シテ是ヲ儉約ト號ス、大ナル僻事ナリ、儉約トハ、萬事ヲ質素ニシテ無用ノ奢ヲ止メ、自身ニ艱苦ヲ嘗ムル事ナリ、臣民ノ物ヲ奪略スル事ニ非ズ、畢竟人君身ヲ儉素ニスルハ、財貨ヲ貯ヘテ臣民ヲ救ン爲メナリ、故ニ儉ハ近レ仁ト云ヘリ、下ノ財ヲ奪テ上ノ用度ニ給スルハ、周易ニ在テ損ノ卦トス、「有若曰、百姓不レ足、君孰與足、有レ味哉」是皆人君一身ノ奢ヨリ生ズ、夫レ涯リ無キ慾ヲ以テ、涯リ有ル財ヲ用ユ、爭カ困窮ヲ招カザラン、然レバ人君ハ萬事儉素ヲ守セラレ候事肝要ト奉レ存候、尙書云、「位不レ期驕、祿不レ期侈、恭儉惟德」此ノ心ハ位貴ケレバ人ニ高ブル心ナケレドモ、自然ニ驕慢ノ心興リ、祿優ナレバ事ニ侈ル心ナケレドモ自カラ華奢ニ趣ムク、サレバ常々恭儉ノ二字ヲ以テ心ノ守リトスベシトナリ、孝經ニ、諸侯ノ孝ヲ說テ曰、「居レ上不レ驕、高而不レ危、制レ節謹レ度、盈而不レ溢」是モ亦恭儉ノ非ヲ云ヘリ、人君ノ御身持ハ先ヅ右ノ通リ、好惡ヲ愼ミ恭儉ヲ守ラセラレ候事一大用心ト可レ被二思召一候、其上ニテ古聖人ノ道ニ從ヒ、宗廟ニツカヘ社稷ヲ祭リ、官職ヲ分チ制度ヲ定メ、文學ヲ勸メ武術ヲ勵マシ、功アル人ヲ賞シ、罪アル人ヲ罰シ、士民トモニ廉恥ヲ養ヒ、貪欲ヲ去リ候ヤウニ御示シ可レ被レ成候、宗廟社稷官職ノ非ハ、人君ノ天職ヲ奉ゼラレ候本

身修、身修而后家齊、家齊而後國治、國治而后天下平」ト御座候得バ、好惡ノ正シク成リ候ハ物ヲ格スノ効シニテ御座候、物格ルト申候ハ、執行ヲ積テ學ビ候ワザ、イットナク我ガ有ト成候事ニテ、夫ヨリシテ己レガ見所モ易リ、志モイヨ〳〵固ク、好キキラヒノ境モ表裏ナク天性ノ如ク成リテ、善ヲ好ム事如レ好ニ好色一、惡ヲ惡ム事如レ惡ニ惡臭一ナルヲ「知至而後意誠」ト申候（漢ノ鄭氏、宋ノ朱氏大學ノ解此義ヲ失ス）然レバ學術サヘ御勤メ被レ成候得バ、御好キ惡ヒノ所ハ自然ト正ク相成可レ申候、サレバ人君ノ御心術ハ好惡ノ二字ニ止リ申候

サテ又御平生ノ御身持ハ、恭儉ト申ス事肝要ニテ御座候、恭ノ字ハウヤ〳〵シト訓シテ、下ノ人ニ高ブラヌ事ニ候、儉ノ字ハツヾマヤカト訓シテ、萬事ニ華美ヲ好マヌ事ニ候、孟子ニ、「是故賢君必恭儉、禮レ下取ニ於民一有レ制」ト申語御座候、禮レ下ハ恭ナリ「取ニ於民一有レ制」ハ儉ナリ、禮記ニ、「恭近レ禮、儉近レ仁、」又孟子ニ「恭者不レ侮レ人、儉者不レ奪レ人」人ヲ侮ラザルハ禮ナリ、人ヲ奪ハザルハ仁ナリ、「君子以レ仁存レ心、以レ禮存レ心」ト云モ、恭儉ノ期須モ心ニ忘レザル事ヲ云ヘリ、古聖人如何ナル故ニ此ノ恭儉ノ二ッヲ人君ノ德ト定メラレ候ナレバ、天子ハ申スニ不レ及、諸侯ニテ一國又ハ一郡ヲ領セラレ候御身分ハ、スグレテ貴キ位ニマシ〳〵候ヘバ、自然ト下ノ人ヲ輕シメ侮リタマフ御心生ジ候ユヘ、臣下モ心ヲ盡シ忠節ヲ勵ミ候者少ク候、マシテ賢才ノ人ハ左樣ノ驕慢ノ君ニ翫弄セラレ、己レガ智能ヲ盡サヌ事ヲ悔シキ事ニ存候、此事ヲ尙書ニ、「狎ニ侮君子一、罔ニ以盡ニ其心一、狎ニ侮小人一、罔ニ以盡ニ

矣、君好レ之則臣爲レ之、上行レ之則民從レ之、又君レ民者、章レ好以示ニ民俗一、愼レ惡以御ニ民之淫一、則民不レ惑矣」此心ハ上ノ好ミ候事ハ下モ好ミ候テ、一統ニ風俗トナリ、上ノ惡ミ候事ハ下ノ人是ヲ不ニ敢犯一シテ、惡事自然ト止ミ候トナリ、サレバ人君其躬道術ヲ不レ好、德行ニ怠リ、只管ニ號令ヲ以テ下ヲ趣トイヘドモ、下ノ人是ニ從ハザル事必然ナリ、古今文武忠孝ヲ以テ天下ニ令スレドモ、是ヲ勵ム人甚希ナリ、是號令ノ獨リ行レザル顯證ナリ、緇衣曰、「下之事レ上也、不レ從ニ其所ロ令、從ニ其所ロ好、」又大學ニ「其所レ令反ニ其所ロ好、而民不レ從、尙書ニ、「念レ茲在レ茲、釋レ茲在レ茲、名言レ茲在レ茲、允出レ茲在レ茲」トハ是ヲ謂フナリ、人君モシ誠ノ心ヲ以テ聖人ノ道ヲ好ミ、諸々ノ雜技ヲ不レ嗜、文武ノ術ニ精勤ノ輩ヲバ賞賜ヲ行フテ是ヲ勵マシ、雜技ノ人終身拔用セラレズンバ無益ノ末技ハ禁ゼズシテ自カラ止ムベシ、末技トハ、俳諧、茶讌、鞦韆、闘香、猿樂ノ類ヲ云、家中ニ是等ノ藝ニ堪能ノ人アルモ、貽厥ノ害トナルモノナリ、其故ハ後嗣ノ君モシ文學ヲ好マズ、汎ク當世ニ交リテ此等ノ末技ニ志ス事有ルトキ、家中ニ相手トナリテ是ヲ助ル人ナケレバ、其志淡薄ナリ、モシ堪能ノ人出テ己ガ技ヲ耀カシテ是ヲ導クトキハ、其志イヨ〳〵深ク、家中一統其藝ノミ行ハルル事ニ成リ行クハ、風敎ノ大ナル害ナリ、且末技ノ輩ニ國士ノ器量アルハ希ナリ、左樣ノ人時ニ乘ジテ寵ヲ得、賢路ヲ塞グ事有バ、國家衰亂ノ本ナリ、サレバ人君ハ萬機ニ心ヲ配リ、後嗣ノ爲メニ末技ヲ禁ズルモ孫謀ノ一端ナリ 此事ヲ孝經ニハ、「示レ之以ニ好惡一、而民知レ禁」ト云ヒ、大學ニハ、「有レ國者不レ可ニ以不一レ愼、辟則爲ニ天下僇一矣」ト戒メ申候、愼ムトハ、好惡ニ心ヲ用ヒテ輕々シクセヌ事ナリ、辟ムトハ、好惡ノ正シカラヌ事ナリ、夏桀殷紂萬乘ノ主ニシテ、民ノ好ム所ヲ嫌ヒテ、其惡ム所ヲ好ミシ故、終ニ湯武ノ放伐受テ天下ノ僇辱ヲ取レリ、誠ニ己ガ好ム所ヲ棄テ惡ム所ヲ行フハ、人情ノ至テ難キ事ニ候ヘドモ、大學ニ、「物格而後知至、知至而後意誠、意誠而後心正、心正而後

詢芻邇言

古屋昂著

今度君侯閣下學術ノ御志マシ〱、市井賤陋ノ臣ヲ被レ爲レ招候事、淺學寡聞ノ身ヲ顧ミ深ク奉ニ慚愧一候、然シナガラ積年ノ功ニ因リ、古聖人ノ道ニ於テ一斑ヲ窺ヒ候事モ御座候得バ、短智ノ及ビ候ダケハ隨分御教導申上候所存ニ御座候、先ヅ人君ノ御心入レハ一方ナラヌ御事ニ御座候ヘドモ、御家中御領内數千萬人ノ上ニ被レ爲レ立候事ユヘ、正シキ御身持ヲ以テ群下ヲ率キラレ候事何ヨリモ肝要ニ奉レ存候、論語ニ、「政者正也、子帥以レ正、孰敢不レ正」ト申語誠ニ金言ト奉レ存候、又「君子之德風也、小人之德草也、草尙ニ之風一必偃矣、」是ハ下ノ善惡ハ上ノ御身持次第、如何樣ニモ移リ易リ候譬ヘニテ御座候、先ヅ人君ハ好惡ト申ス事常々御心ヲ用ヒラレ候事第一ニテ候、好トハスキコノム事、惡トハキラヒニクム事ニテ御座候、縦令御心ニ好マセラレ候事ニテモ、下ニテ學ビ風俗ノ害ニナリ候事ハ御嫌ヒ可レ被レ成候、又御心ニ惡マセラレ候事ニテモ、下ニテ學ビ益ニ成リ候事ハ御スキ可レ被レ成候、是スナハチ克己ノ術ニ御座候、國語ニ、「好惡不レ易是謂レ君、」禮記ニ、「爲ニ人君一者、謹ミ其所ニ好惡一而已

詢芻邇言

古屋鬲著

千載一時、而中道投レ間、不レ及レ竟ニ匡濟之略一、況世之事ニ庸闇之君一者、其弁ニ髦之一、土ニ芥之一、不レ得ニ一日安ニ於朝廷一固也、此煜所下以讀ニ斯卷一、欣慕之餘、繼以中感嘆上也、既而先子膺ニ幕辟一、司ニ教鐸一、海內崇仰、又未レ幾、進レ秩加レ祿、寒門光榮、然職有ニ專掌一、不レ干ニ機務一、不レ能レ展ニ濟世之才一、故無ニ復章奏一、先子晚年、語及ニ泰國公知遇之日一、尤深愴、良有レ以也、即應辟之後、顧問所レ及、忠誠所レ激、間有ニ建白一、然體皆和文、故不ニ收載一、其論ニ濟商一文、擬下答ニ雜文一牒上二道、頗關ニ機密一、不レ可レ入ニ文集一、故附ニ于此一、軼涉偶語、則泰國公初政時所ニ結撰一、託ニ他人言一、以論ニ當今要務一、雖ニ僅々小冊一、自爲ニ一部書一、不レ可下與ニ章奏一混上、故別成ニ一卷一、從ニ上二卷、未レ足レ盡ニ先子之蘊一、然讀者能潛玩熟味、以推ニ及其他一、則於ニ先子之經濟一、亦思過レ半矣

文政辛巳維暮之春　不肖煜謹識

軼涉偶語　終

然相戒、不效向之爲懲一而警百、亦仁之術也

內官長本爲暬御頭領中爲今職、而暬御自置長、故其職似要而實散、今日之勢、殆迫廷老、此職也可以補闕失、可以壅下情、在得其人與否而已

內外損下而益上、須反之、乃可如屬隨諸司、即使內官長最劇職、亦不得不自約以率人、今會議之初、自爲其地、然後於他司、極其朘削、且節下儀衞痛損、先是未有也、而內老及長樸驕、及支給銀粮、皆仍舊額、豈足以服人心哉

先子自少小時、慨然有匡君濟時之志、深鄙世儒闊於事情、不可使從政、肥之先侯泰國公、不世之賢主也、知先子可大用、命學於上國、學就而歸、亟超擢參豫政議、時承積弊之後、有司束手無策、一夕公召先子而詢焉、先子具對所見、公稱善、不覺膝之前席、談論達旦、嗣後多所建明、公斷然信用、不牽於浮議、於是積年蠹害、次第釐革、闔國洒然改觀、無幾先子辭政署、專管學政、而公寵眷弗衰、命令苟有所見、直言無諱避、經濟文錄所載、皆當時所上也、原公所以致中興、實由德性之美、學術之醇、而先子羽翼獻替之功、亦烏可少哉、今讀其書疏、魚水感孚之誠、肝膽投合之情、藹然乎言外、君臣契合之美、猶可想見、夫以際遇之盛如此、意必更有所建議、知應有散佚、且也和文爲之者不錄、故僅々止于此、君臣相遇、蓋自古難之、若先子值泰國公、實

亦估レ之、是以經理、終無下沈レ船破二釜甑一之氣象上、是謂二其體一也、今使レ不レ通二乞假一、亦不レ爲レ得、其二、此儲蓄備二軍國緩急一、今或以導二人主之欲一、亦致二予貸無藝一、其三、內外胡越、借而不レ還、追呼星火、至レ有二章魚咀レ脚之誚一、其四、不レ去二內蠹一、而規二墾田新稅一、所謂放飯流歠、而無二齒決之問一也、賜予之濫、徒糜二財用一、薄レ遠而厚レ邇、適以示二規摸之陋一、恐非下明主惜二嚬笑一之意上

玩レ物喪レ志、古人所レ戒、而小人所二依附一也

遊畋招摘、不三必設二鹵簿一、今雖二稍減一未レ破二舊套一

田獵打圍、事甚張皇、糜レ用妨レ農、須レ有二以處一レ之

善爲レ治者、由レ上及レ下、先レ近後レ遠、故令行禁止、無レ不二風靡一、近歲擧措、率急レ下而緩レ上、詳レ遠而略レ近、是所三以有二搔靴之歎一也歟

左右暬御、乏二素樸勁直之風一、恐外人有三以窺二節下好惡一

監察寄二耳目之任一、而多二言レ利者一、乃爲三其小吏所二指畫一、小吏輩豈可レ望三其識二大體一乎、皆爲レ耳謀、而不レ憂レ國、乖繆瑣屑、斷二折治體一、而作二民瘼一者、比々而是

以レ言レ利進者、尤不レ當レ借二名器一

世祿之家鮮レ由二禮法一風俗陵夷、皆有二自起一、下大夫上士、尤甘二暴棄一、朝廷待レ之如二驕子一、欲三含レ之以綱二其下一、豈可三以望二其響應一也、埠頭蓄レ妓、無狀士夫、醉レ花眠レ柳、往日朝廷、震怒正二邦憲一、然後惕

累世諸公所置、器用玩好、倚疊如山、何所不有、而一切視爲不祥器、節下一有所需、有司不取諸府庫、而必求工商駔儈之手、竊聞、秋覲應備束帶儀服、北城尙衣、有未經御者、有司不敢以進、更命京師緞舖製之、其費甚大、夫宮室土地人民、孰非先公之遺、今獨於服御忌之、不知何說
庖厨妄費、節次減損、省其太半、然數尺鯔魚、止取四鬣一脡、鯗脯纔得三劑、燔炙之竹、必採諸山虞、享調之水、必求諸河源之類、（或云已革）格套未破、宿習依然、今有鹿洲舊法、與三城翁主膳法在、最酌施行、恐足以祛弊

北城遺賜一事、而數失具焉、遺臣受賜、至再至三、可以已而不已、其失一也、醫禱諸費、及大事所需、搶奪諸商家、而不之償、是臣子痛恨、以遺財充之、理之當然、特以內外間隔、痛痒不關、不一言及此、其失二也、北城輿儓、忽遇天地震塌、無祿可仰、昏惑彷徨、欲爲農而身難用、欲爲商而無貨本、散而入于籔社、終爲刁狡無賴之民、此雖微、亦先君遺隷、失所至此、繼富而不周急、其失三也、節下左右、亦頒餘惠、頗起物議、其失四也、至賜及嘒彼小星、則有司揣摩人主心術、以自固其情狀、可見已、峻絕痛懲、猶恐不悛、而一切施行、其失五也

東武商儈、以諸侯爲私窖、東覲之日、事有司如奴僕、或反、或推轂、不問其應用不應用、得飽其溪壑焉、其伎倆大抵類此、一應刀劍散樂、文房雜佩、玩好諸器皆然、（竊聞、秋覲常用調度、不得已之外一切不許收買、似已照此弊）

內帑之弊蓋多端、而人所能言有四焉、其一、國計頭燃之急、而內廷不之恤、陰恃此儲、而外廷

東武發程、本在二九月廿六日一、如廿九日一、以二廿三日一發、昉二於前回一云、在東一日之費爲二百金一、若以二廿九日一發、則可レ省二六百金一、以二廿三日一發、則入レ邸謁レ府、必在二十一月朔一、以二廿九日一、則在二望旣謁府之後一、則有下候二問權要一、燕二享賓客一之禮上、未謁之前、則寂然屏居、謁朔之比二謁望一、所レ差十五日、十五日間、候問燕享之費亦不貲、還鎭之命、在二二月十五日一、黑田侯則聞レ命而發、不レ出二三四日一、節下則以二三月首一發、亦所レ差十餘日、其費千數百金、而候問燕享之費不レ與焉、節下去レ邸之遲々、或云資斧未レ具、或云節下之志也、未レ知二其詳一、今之經二理國事一者、繭絲牛毛、無レ所レ不レ至、至二於關係如一レ此者一、則知而不二敢言一、言而不二敢爭一、獨何與二臣僚一、又以二此疑一節下之心一、未三必如二其所一レ令、依阿觀望、爲二應文容身之計一、佗多此類、國家之事、積年累月、少成レ效者蓋由レ此也、嗚乎臣僚何待二節下之淺一耶、何待二節下之淺一耶、伏見二節下一、發憤求レ治、宵衣旰食、苟益二社稷一、何事不レ從、豈以下樂二東武一之心上、而妨二國家大計一哉、願以順二衆望一、以省二大費一、以徹二群疑一、使三革レ弊去レ奢之誠意、感二孚於人心一、則中興盛業、可二放目而竢一已

節下萬事省約、獨尙衣用度、加二陪於先朝一、臨レ藩猶約、在レ東爲レ甚、澣濯罕レ御、皆供賜二予左右暬御一、袨服楚々、人以爲二節下好一レ華、鮮下不下崇二節儉一病中革弊之難上者上、未三嘗不二以爲一レ憾、是等事終爲二弊蒂一、亦勢之必然也

後庭用度雖レ省二於前一、恐有レ未レ慊二人情一、亦人所レ不二敢爭一、而節下之所レ宜レ先レ之、柄二示崇儉之意一者歟

軟莎偶語

臣舍距㆓與賀之祠㆒數十武、祠宜㆑夏、一夕散步、濯㆓清漪㆒而坐㆓礄砌㆒、塵靜暑消、凉颸生㆑樹、澹月含㆑閣、爽然使㆓人思纘㆒焉、有㆑人席㆑莎偶語、多及㆓政治得失㆒、鑿々可㆑聽、竊欽㆓其人㆒、而不㆔敢問㆓其名㆒、一二所㆑記、還㆑舍筆㆑之、嗚乎君門如㆓海之深㆒、孰測㆓其當否㆒、然諫鼓善旌、若繩以㆓文法㆒、責以㆓證左㆒、何異㆓乎擧㆑杖呼㆒㆑狗、是可㆑存矣

經濟之本、在㆓於立㆒㆑志、志未㆑立則事物搖奪、而事不㆑成矣、志者何、一實而已矣、好㆑善而惡㆑惡、進㆑賢而遠㆓不肖㆒、崇㆓節儉㆒去㆓奢華㆒、生㆓於心㆒發㆓於政㆒者、皆欲㆑無㆓一毫之不實㆒、所謂務決去、而必求㆑得㆑之、如㆓火之熱㆒、如㆓氷之寒㆒、而事不㆑終者、未㆓之有㆒也

人以㆓眇然之軀㆒、居㆓萬物之間㆒、心術之微、毫釐有㆑差、善惡顚倒、豈不㆑可㆑畏、人皆然、人主爲㆑甚、人主皆然、今日爲㆓尤甚㆒、何則人主者、威福所㆑在、而柔媚之風、盛㆓於今日㆒、窺測百端、唯逐㆓人主之好㆒、長㆑惡逢㆑惡、何所㆑不㆑至、涓涓之成㆓江河㆒、速在㆓轉眄㆒、苟非㆓好㆑善如㆑色、惡㆑惡如㆒㆑臭、而徒欲㆓智術防㆒㆑之、則逾勞、而逾墮㆓其圈中㆒矣、是聖賢之所㆓以競業㆒、必曰㆓德惟善政㆒也

汲黯申公之告㆓武帝㆒、得㆓其要㆒者也歟

皇立㆓其極㆒、民四面望而取㆑準焉、故一事之病、輒爲㆓百弊之因㆒、可㆑不㆑謹乎

今策耳、未可輙以必死之怨讐視之、則本職所見、有不可不以告焉者、兵凶器、爭逆德、至於用兵、則使無辜之民、肝腦塗地、非立國者所樂用也、然理勢至不得已、則雖殺人滿野、浮屍蔽海、在所不恤、本職竊歎、貴國以區々求互市之小利、將糜爛兩國之民、恐不得爲知輕重者、以若所爲、求若所欲、則徒深其怨耳、斷無可從請之理、猶之却行而求及前人、兩國言語雖異、習尙雖殊、人心所同、然則一也、主帥盍試代我思、如此而有可從之理否乎、其無斯理、不難見也、貴國之意、誠在互市而脩鄰好、不在糜爛兩國之民、則主帥盍思所以謝過自新、使我有以藉口不患、不可國於天地之間、有以處之、則本職當請諸本朝求權其輕重、變而通之、細故微物、或有所不較本朝、從違雖未可知、而本職所以爲兩國生靈謀、則得輸其涓埃矣、本職所以答來意者止此、主帥若曰我知求吾所欲而已矣、不復問其佗、則是以無道行之也、以無道行之、則我深讐也、即當以矢砲相待、不用多言、至來牒曰一年劇一年、或至滅國之謂、則吾聞命矣、國於天地之間、孰無禦侮之備、孰無進取之計、當惟力是視、不要恫喝相酬、吾聞、仗義者彊、盈實者殪、可不戒哉、須至牒者

經濟文錄　終

器械、米酒等物席卷去、訖至六月、送還所擒所由人幾名、到本職地方、齎到兩國字、及羅甸字牒各一通、此命舌人重譯、知從上作過緣由、以十餘年前、乞互市於我、三年前發使船、奉國書信物到長崎、皆爲我拒絕、以激國王之怒、特遣主帥行侵暴、若使今段猶不聽從、則當益施窘我之計、一年劇一年、或至滅國乃已、兼送還所由人、供陳主帥口授言語、咎長崎待來使之不恭等事目皆粗領略訖、凡國於天地之間、所以能自立者、何恃乎祖宗之法而已矣、我祖宗之法、惟唐蘭商舶許互市、他則禁絕、其或投他港而請者、使必到長崎諭還、其待外國人、防衛供賜、亦有定例、不得參差、凜々恪遵、以至今日、非獨施諸貴國、如前日也、是事理、向嘗曉告來人、謂應見聽悉、而有怪訝何邪、天下萬國、莫不守祖法以立國、若以此爲罪、則天下之不屬貴國者、皆有罪也、前年使船匝地球、而奉國書、可謂勤矣、然以礙法、不得已而謝絕矣、而今欲我怵於邊陬一小擾、迫於言語、一恐動而遽從請、豈謂如此而可以國於天地之間邪、且也此聲一播、向者外國之求市易、而被却者將紛然而至、亦必有效尤而擾邊者、豈謂如此而可以國於天地之間邪、有一於此、國不可爲、況一舉並至乎、侵暴大怨也、劫逼大耻也、是以闔國士民、扼擥切齒、奮迅踴躍、欲一死以報此怨雪此耻、不期而集、業已具兵艦詰戎器、欲一決戰無所顧慮者、然今所以須臾抑衆怒、以答來牒者、則有一說焉、審向之侵暴、銃子止用紙毳、不加殺害、所擒亦撫而還之、因通牒傳語、言互市及結隣好事、察其情實、似渴望互市、遭我拒絕、無以達意、遂出

所差吏、爲監船者皆到此、將押儞等及貨物、送於長崎、船已有監、則儞等進退、當一聽其命、不得自由、目有約束下項事件

一　船艙逼仄、載人猥多、各宜相戒、欽遜協睦、不得褻慢唐突、惹起忿鬩之端

一　監船該官差、專爲儞等防其疎虞、須百事稟畏不得違其指揮

一　自銚子浦至長崎水程、候風潮去處、其繫泊起離、及淹速之度、皆當由監船、不得妄出意見、擾撓成算

一　繫泊地方、無論城市村落島嶼、一切不許登陸、其事該非常須登岸者、當咨白監船、從其處分

右國家深仁、惻儞等漂到、嚴勅地方官吏、悉心周卹、今又具船押送長崎、儞等宜仰體恩意恪遵畫一、勿有干犯、其或不然、則須待到長崎報知奉行所議、罪決不汝恕、須至諭者

文化四年四月　日

擬答牒

日本國松前奉行、牒魯西亞幹薩化師廳、據唐太越涅符人報稱、去年十月、貴國舟兵至唐太、虜所由人等、搶奪船隻米豉魚鱐、放火焚廠房倉庫、今夏又至越涅符、發砲劫略、亦擒所由人等、皆中

寛政　年　月　日

諭二寧波難民劉然乙汪晴川等捌拾陸人一、爾等在レ洋、遭レ颶折二壞舵桅一、漂至二我遠江州外洋一、將船破壞顚沛是極、幸遇二國家仁惠一、百計救拔、加レ意撫邺、將下另發二洋船一、護中送長崎上、獨奈下遠江州至二長崎一、中間水路險惡上、常歳待二三月中旬以後一、乃可二開船一、凡海汛自有二時節一、非二人力所一レ及、是爾等所レ知也、況當該地方距レ都非レ近、節級呈報、比得二官裁一、動歴二數旬一、固其所也、今奉レ命送二回爾等舟檝一、資粮略已辦集、然以二風逆濤怒一、故展二其期一、這般事理、先レ是已相曉告、爾等所二聽悉一、我保二愛爾等一、可レ謂二週至一、爾等所レ宜二感戢、伏竢二指揮一、曩者柁工水手憤發辦不速、衆口嘵々、以致二爭鬪一、不レ畏二國威一、不レ念二恩庥一、此須二懲治一者、特憫二爾等逐レ利、絶海罹二玆大厄一、慨惋無聊、以至二於此一、故置而不レ問、今後須二務謹飭、不二敢放縱一、儻有下違二犯條欵一者上、當三因レ之以正二邦憲一、則船主亦當レ坐二其罪一、船主以下、各宜レ愼レ之、須二至諭一者

寛政　年　月　日

遠江州代官

諭二寧波船主王永安楊玉亭一、照得、爾等係レ通二商長崎一、開洋遇レ風、漂至二此地方一、向冒二鯨瀾一、殆葬二魚腹一、獲レ救登レ陸、亦曠二日子一、誠可二憫哀一、但因二船沈不一レ出、撈二取貨物一、應二計畫設施一、致レ經二三月一、目今官所レ發船、

一　臺諫或暗大體而察小故、掩人過失固善、茹柔吐剛則不可

一　中材以下、有此材必有此病、覂駕之馬、或勝重任、跅弛之士、亦可以有為、在善調馭焉爾、故以短掩長、則多棄材、縱其短而弗問焉、則紀綱紊

一　後庭婦功、千歲難有之盛事、推此以往、何事不可為

以上一十則

諭寧波難民劉然乙汪晴川等捌拾陸人、爾等在洋遭颶、折壞舵桅、漂至我遠江州外洋、將船破壞、地方官吏、百計救拔、授館就安、給其衣食、具狀乞指揮、國家仁惠、哀其顛沛、更命當該官司加意撫卹、仍另發洋船、護送長崎、搭吳船以還鄉土、據地方官吏報、頃者水主舵工憤發辦不速、鬧炒打罵、無復人理者、遠江距都遙遠、節級申報、以取官裁、動歷數旬、加以遠江至長崎、中間水路險惡、常歲必待春末乃可開船、凡海汛自有時節、非人力所能移易、爾等所知也、今起解爾等船隻、賫粮路已辦集、未即發者、正為此耳、我憫惻保護、為之區處、可謂週至、豈故意稽延、以重困汝哉、這般事理、先是已相曉告、爾等應記得、而不顧恩惠、不畏刑法、敢作無狀、此須懲治者、猶念爾等逐利、絕海罹茲奇厄、慨惋無聊、即當至此、故特置不問、今後須改悔、不敢過動、若悍然依舊者、登時捉拿、以正邦憲、船主亦當坐其罪、不復少恕、須至諭者

一　千籔社腠民膏、壞民風、驅之餓凍盜竊之域、貪小利而遺大害、目今之病、莫斯爲甚

一　今歲飢歉、封內不至有殣殍、最可慶幸、然穀價騰踊、細民艱食尤甚、往日徵沴作灾、蓋在樂歲飽健、不爲害者、而飢乏之餘、或一染不救、一夫就蓐、一家竈冷、恐千萬中、不能無一二、人死則曰非餓也疫也、是不知以梃與刃之無以異也、（此意尤忌發露、近來疫氣旣除、亦無所傳聞、）賴官府有給粟施藥之恵、年麥登場、米價少減、足略舒倒懸、然君子視民如傷、須因事命有司、常體損上益下之意、不使有一夫之不獲之意、（切不可無因而發、第如平常可也）

一　敎官與銓部、表裡一體、欲乞東覲臨期、仍委重當軸諸老、令益竭心敎事、扶植奬勵、則擔當愈重、足以及物矣

一　士夫雖稍向學、民人社稷、何必讀書之說、往々而有二三學者、欲共爭衡難矣、洛誦副墨、難遽責其成、材童習白粉、或瞠於世務、非薰蕕氷炭、與世不相容、則同流合汙、以隨俗矣、故學者未必適用、仕者未必顧義理、蓋兩分其罪可也、欲歸之一途、則須風勵之漸磨之、如文翁化蜀之爲、使衆心感孚情、頑陋習丕變、其庶幾與（今日士風被陶鎔、比往時則有間矣、但革面者不耐持久、譬如脅從羈縻之民、雖保歲寒、臨斯機會、所宜如寇、所以不憚煩瀆、而有此條）

一　選擧風勵之法未立、則事無根蔕、不能無進銳而退速、烏集而瓦解之憂、熊府良規、雖未能取法、須講所以處之

一　政理根柢、莫先於人材、風俗苟合、趨附之風易成、挺正剛直之氣難振、古今之通患

許告一、爲ニ讒邪一、爲ニ鬼蜮一、臺章飛語、所ニ以中傷一、難ニ更レ僕數一、非ニ獨不一レ利レ於レ臣、池魚之災、社鼠之熏、必及ニ黌庠一、必及ニ國事一、雖レ欲レ措レ手、不レ可レ得已、不レ及ニ今念ニ改悔之方一哉、然臣於レ職得レ論レ事、宰相不レ能レ言、則御史言レ之、御史不レ能レ言、則經筵言レ之、先賢格訓、若ニ懲レ羹吹一レ齏、學立仗レ馬、則臣弗レ敢焉、但當下就レ所レ論、稍加ニ裁酌一、去レ泰去中甚、如下上係ニ君德一、下關中民瘼上、千鎰之告、米價之厄、驕士殺子之類、當ニ仍レ前論列一、（亦須ニ有密使一入不一レ知ニ其出ニ經筵一）如下俗操微服、花街之爐、行酒之娃、苞苴哺啜、請謁之漸、髟䯿指ニ斥主名一之類上、不レ當ニ復妄發一、萬有ニ一聞一、事體重大、理亂安危之所レ由、草莽市井、猶欲下伏ニ闕下一撾ニ登聞鼓一、而一言上者、亦當レ不ニ畏レ誅而坐視一也、從上所レ陳人情所レ不レ容云々者、切不レ可レ發ニ之聲色一、號令之間、無レ風起レ浪、適足ニ以致ニ紛々一、而臣事僨矣、欲レ乞下第依ニ舊於敎事一加中台意上、不レ見ニ幾微於外一、淵默鑒炤、不レ動如ニ泰山一、則雖レ有ニ浮言一、不レ足レ卹矣、（此語嘗奉ニ台旨一）以上所レ論、中情已逼、言多激切、然待ニ罪敎職一、兼叨ニ言責一、人情事宜、學術降替之機、所レ係非レ輕、亦恃ニ非常之寵遇一、獻ニ非常之說一、仰望垂ニ非常之聽一、干ニ瀆尊嚴一、臣不レ堪ニ戰兢隕越屛營之至一、其他近事陋見、無ニ甚發明一、猥臆之談、未レ知ニ當否一、謹畫ニ一於左方一、惟閣下裁幸

一　方今官箴肅、而弊竇杜、民心悅豫、仁聞洋ニ溢遐邇一、臣雖レ所ニ忻舞一、但驪廣之積、著ニ於一旦一、或難レ可レ繼、則有ニ聲聞過情之恥一矣、不レ狥ニ名於外一、益務ニ實於內一、克儉ニ乎邦一、克勤ニ乎家一、擧レ綱張レ目、聖敬日躋、一此不レ懈、則雖ニ聖賢一同レ歸可也、何區々聲譽之足レ云

釜、已瞭於台鑑矣、不須分疏、今豈頓改柯易葉、以生僥倖之心乎、請嘗論之、凡物久則窮、窮則變、々則通、方其變也、必有非常之事、非常云者、可權行、而不可常由、可暫試、而不可久用者、往時邦政頽弛、上下窘急、不勝其弊、閣下拯之之道、在更弦而改轍、於是乎、不得已於執、而破陳格脫舊套、有非常之擧矣、正遇主於巷、納約自牖之時、而如臣輩進非常之說、竊非常之位、閣下勵精圖理、先勞無倦、窮者變而通矣、今昔時執改觀異宜、爲臣者當循常守分、不踰尺寸、庶可以无咎、然恭侍講筵仰觀君子虛受之德、感激奮發、輙生故態、及其退也、未嘗不惕然自咎其僭率也、初臣之自効免也、伏蒙恩諭諄切、以政教殊途爲念矣、繼而都堂傳許論事之特旨矣、賤跡已安、而荷眷愈渥、結草銜珠之意、猶謂實封論事、經幄敷言、足以效涓滴、殊不知外間人情、有難處者、往日忝竊官銜、雖不免睚眦、而倚聲執籍攔柄、可以有言、可以有爲、今也、居散地而談重事、掣政府之肘、熏憲司之心、街談巷說、雖非烏有、豈無吠虛、尤人所不容、論出敢言、實則坐犯者、虛則罪言者可也、至行路之言、則不可究詰、故是虛是實人心並不服、而言者亦不反坐、曖昧含糊、大害理體　或乃以璧沼之淸議、爲霜臺之白簡、是黨錮之禍之所由作、可爲寒心、賴明喆在上、得以無佗、而兢跪危懼、如坐針氈、殆甚於竊位之日、且也武人俗吏以屠龍彫蟲視學者、臣爲之口實、於是難台料之明也、原其端由、則臣年少氣銳、任事太眞、疾惡太深、不識時、不達執之所致、俯仰赧恧、容身無地、往者不可諫、來者猶可追、設使弗是之郵、悍然强聒、攘臂下車、觸發禍機、則攻者圖視而起、必目臣爲

狂直待臣者、是或出於奬誘求言之意、然在臣則不容不悉心奉對、即今政理雖脩擧、未遽盡善、臣畏罪緘口、閣下或以爲外間無復事可議、則壅蔽孰甚焉、是不亦害於事乎、何謂害於義、向倣百舌之饒舌、今學寒蟬之噤音、閣下或以爲偶因一挫、遂變素節、媕婀浮沈、取容於世、則有犯無隱之善、致不昭晰、是不亦害於義乎、昔日妄言、露出尾蹄、旋獲尊帖、復追論之、是不亦嫌於悔吝乎、出處辭受、已賜恩庇曲成矣、而稍涉叙述、是亦不嫌於競躁乎、即使害事與義者含糊不、自鄙意所不安、而嘗聞避嫌者、內不足也、臣雖駑下、自信頗厚、蒙知亦篤、於冒嫌疑乎何有、況有以明其不然乎、往日妄論、遂加密勅、雖非臣初意、而出不得已、外間戢飭、不爲無益、而側目切齒之患、則因台意在主張數事、即時斡旋、人莫敢動震來虩々後笑言啞啞、益信人主意嚮所在、□心景從、無善不可爲、於臣實爲再造之德、感銘心骨、今豈絲毫抱悔吝乎、人之制行非一端、而莫大於出處辭受、陳力就列、不能者止、周任明訓、事君致身、欲潔其身而亂大倫、孔聖攸戒、苟於義不安、則千駟萬鍾、[illegible]苟於義安、則甲兵錢穀有司之事、費冠而就之、是古今所共由、如[illegible]而[illegible]敢爲身計

之當散、以擬災後之賑濟也、臣爲斯言、非敢效五行纖緯之說也、蓋天者理也、理之所在、而民之所欲、乃天意是也、謂天茫茫爾藐藐爾則已、使天愛民而責君焉、奚得無此意、奚得不奉此意、是固賢侯所諳、豈待臣言哉、然又竊有慮焉、閣下即是臣言、下內廷議、議者必曰、是政府事也、度支責也、何于內廷事、彼此推委、以致索諸枯魚之肆、爲可惜已、伏望閣下毅然斷之、沛然行之、如時雨下、速使斯嗷嗷者、歡抃鼓舞於再生之恩、且使臣庶瞭然、知閣下外末內本、一視同仁之盛德、臣不堪至願、果蒙施行、則查審戶之上下、災之輕重、死者・傷者・飢者・當恤者・不必卹者、是在有司、今不及也、臣未悉朝廷有無措置、及被災戶應用銀兩的數、急於憂國、率爾妄論、仰冒威嚴、臣不堪竦惕屛營之至、

弘道舘教授臣古賀樸誠恐誠惶頓首百拜上疏、臣侍經幄、恭奉德音、若曰言路未豁、遇事謇諤、寔難其人、近覺汝樸少啓沃、須上自台躬擧措、下至閭閻利病、指陳無諱、以備采擇、反覆開譬、勿憖既往、以砭其後、遂致緘默、臣恐懼聞命、仰戴詢蕘無倦之盛美、人臣許國、苟言而利社稷、刀鋸鼎鑊在前、猶所不避、今導之令言、慰之令安、虛懷待之、若是之勤、孰不欲竭其瞽瞶、以補萬分之一、閣下取善無涯、下愚所識有限、比來傾廩倒囷、無復餘蘊、多蒙垂聽、縱欲冒味、今復何言、無已則有一二管蠡之見、初欲徐察時勢、遲至台駕東覲之期、而後上言、非敢隱匿也、蓋

日暴颶、臣省事以來、所未曾有、壞場房屋數千、小民波逆鼠竄、僅免壓死、稍定遷所、則屋宇以至器皿、摧毀粉齏、不可復目、廼張敗席、以蔽風日、衣絮濡、支體傷、燥濕所侵、疾又感焉、出望田疇、則如狠之藉、如戎蹂而櫛梳、終歲之勤、動殆爲雕脂、加之穀價騰貴、得食最艱、釆耜乞貸自給、哀鳴嗷々、如此度日、不轉爲溝中瘠、則濫爲穿窬而已、赤子之失所至此、賑恤之擧、宜急於極焚援溺、而數日來未聞有所施行、蓋颶之所殘、廟墓城堞、內外廨衙、倉廩之圮頽者、不知其幾、秋稼損傷、邦計之墜、亦不知其幾、有司者方愕眙相顧、拮据措辨、救目前而恐不贍、未遑及民瘼也、有司者以是自諉、猶之可也、仰悉閣下至仁、視民如傷、聞之必至、惻然憫念、起而彷徨、而不有以處之、則愛育之道、幾乎熄矣、臣愚竊以爲、今日之計莫若發內帑千餘金、以濟斯急、竊聞、盜胠左藏之篋、失五千金、尋而捕得、檢贓所失僅五六十金、夫黃白流行天下、交易兌折、不可認識、脫使盜越境尺寸、非復我國家有矣、幸天奪其鑒、耽淫累日、以就收縛也、

然則獲之偶然耳、今盡數與之、以固邦本、猶未爲過、況今所須、不四之一、又如所謂救急**銀者、逐年塡納、足以敷其數乎、**夫天之愛民雖切、陰陽之災沴、則迫於氣數、而不能無、於是責之人主、以通其變濟其厄焉、臣直補翼之從而振德之、旱潦災患、處之有方、使民得其

所八分矣、其生[illegible]既失而復得、不出十日而有此灾變、安知天意示財

視逢腋、不晉異類、常摘瑕疵、以相告警、不幸一敗、則并先王孔子而罪之、誰昔（マヽ）然矣、今賴明世之隆化、人稍知方、敎典之職亦不乏人、則臣等黜陟、宜若無毫毛加損於其間、然世人視倡導爲進退、其勢爾也、臣或蹉跌、則所謂千載之一時者、不無小蹶、是臣之所大懼也、夫致身事君者、雖刀鋸鼎鑊在前、有所不避、臣雖至懦、豈爲觀望自便之計哉、但所據簡陋、有自取顚覆之勢、恐彼此兩失、徒有害閣下之事、是臣之當辭政府五也、前三者係闕符之案、後二者臣欲請而未發者、此請也臣既奉密諭、又有觸大臣要譽之嫌、欲請而中止、低回數四、然下情終有不安者、此而含嘿、是自欺也、自欺也、豈事君無隱之義哉、是臣之所以冒昧瀆聞、不遑恤其他也、伏惟、臣本庸愚書生、仰承閣下之知、開國以來、儒臣遭遇、所未嘗有、蒙恩以還、中夜以興、念所報塞、而未之得、今也如此、愧懼無地、閣下復何所取於臣、然竊見閣下詢於芻蕘、以虛受人、今世所罕、詩云采葑采菲、無以下體、若未忍即加顯戮、姑從所乞、使臣專意學事、脩其不逮、時侍於經筵於乙夜、獻其千慮之一得、俯賜采擇、則臣猶得以圖微効、死且不朽、仰恃恩遇、披瀝心肝、無所隱諱、臣不堪戰兢隕越之至、

政府司議裡行臣古賀樸誠恐誠惶頓首再拜上書

弘道館敎授臣古賀樸頓首百拜上書、爲發內帑以恤民災事、日者恭候起居、侍臣傳諭、臣樸當今

仰悉至意矣、此案雖成於堂議、臣等同列實發之、其罪非輕、既不獲已、斷之如彼、則當併按議者以謝衆、向之薄譴、恐不足以壓服人心、無狀如臣等、宜任其罪、是臣之當去政府一也、臣繆蒙恩擢、職列諮議、不爲不重、閲旬五十、不爲不久、而寸籌莫展、大愆如此、有以損閣下知人之明、是臣之當去政府二也、同寅姓阪者、客歳黜出特旨、人皆以爲關符之故、姓富者久移疾不出、近聞亦辭職、勢或得請、人亦必以爲關符之故、則任此責、非臣而誰、且也同發此議者、二人去而臣獨留、義所不安、即使貪冒在職、世人必以臣爲擠二人以自解、雖其實有不然、安得家置一喙以辨之哉、是臣之當去政府三也、膠庠剏建、閣下好學以先之、發令以驅之、鼓舞而作興之、是以向之硬頑不化者、皆風靡雲集、唯恐在後、可謂千載之一時矣、臣以菲薄承乏彙董理教之事、日參政署、強其智之所不及、憂心如醉、退朝入學、形神俱疲、不足以綱紀學政、誘掖後進、今後宜專意學事、以圖副盛意也、是臣之宜去政府四也、方今弊害漸除、理道淸明、然康莊之途、豈無銜橛、以臣之狂疎、周旋其間、未至傾覆、亦幸也已、本邦武弁之

哉、殖史官文士之事、而節下遊焉、臣請節之、臣等無狀、不能早致豐豫、以弛台躬之勞、莫若省彼注茲頤養精神、以副臣庶之望、是區々之至願也、至乎論世儒猜忌之態、而謂臣無是、更加嘉奬、臣不敢當、特以見包含之德、世之立門戶、黨同伐異、固不可也、而含糊兩可以不爭爲高、亦豈爲得乎、孟子曰、能言距揚墨者、聖人之徒也、又欲息邪說、距詖行、以繼三聖之功、而後世稱其功、不在禹下、何邪、蓋洪水猛獸、害止人身、邪說之害、使人失其本心、本心一失、人形而禽獸、無父無君、禍亂莫大焉、故曰、以學術殺人、古人爲之懼、闢之力焉、豈好辯哉、不得已也、偃戈以後、學路漸開、有君子聞道、小人蒙澤之望、而關東之學、皷簧邪說、毒流海內、戶異說、人殊見、改頭換面、牽外身心以爲道、後生佷佷然、罔所適從、夫道者路也、天下古今由焉、文之所以有實亦是已、外是則冐荊棘墮坑塹、今之冐且墮者益多、故不自揣、時一救之、獨奈言不足以動人、疾呼狂赴、或以叹非笑、豈復有補哉、亦有待於有力者耳、上之所好、下必有甚者、順風而呼、聲不加大、伏願節下留意於斯、崇正黜邪、使道德政令、粹然一於正、以陶鎔士庶、則中興之業、亦於此立矣、即罷駑如臣、鞭之策之、庶依末光、以展微力、妄論蕪詞、干瀆威嚴、臣不堪戰兢屛營之至

八月念七日

政府司議裡行臣古賀樸恐惶頓首再拜上書

一家、亦非虛華無實而已也、如李王二氏、則剽竊纂組、競長藝林、議論淺俗、飾以老佛緒餘、雖曰無實之文、不誣也、明文名家十有餘、而濂溪正學、陽明拔乎其萃、本邦自物徂徠、臭味李王朱明之文、以二氏掩之、可謂屈己、然則韓柳至矣乎、曰、非也、昔者堀南湖、欲以洛閩之文、列於唐宋八家、鳩巢先生非之曰、文自文、學自學、豈可混乎、臣心竊疑、此後讀清人陸隴其集、及程朱韓歐之文、大意以爲、若岐文與道而二之、是道外有物也、使文與道一、則孔孟程朱之文、何以加此、臣服其論之確、時以告人、未嘗不以臣爲阿其所好、嗚呼是難與世人言、幸遇明主、可不一言哉、請就載道之語喩之、車以載粟、然無車邪、負載免折、足以致粟、車而無任、則牽之秣之、何補於饑、亦虛器耳、惟文亦然、有實而發、則左行屈盤、猶足以傳焉、況其文乎、不出於實、雖不悖乎仁義、猶爲空言、況其虛華乎、節下天縱文武、含英擷藻、固其餘事、而文思日進、非獨列侯貴介莫與儔、學固老生、將走且僵、可謂盛、而竊恐文苑馳騁、不免指痛、今節下求道脩德、振頽袪蠹、中興之業方且就緒、夫措而爲政事、渙而爲號令、史書之民誦之、可傳諸天下後世、與夫天地之文、同一轍者、將於[illegible]也、而節下勵精焉、臣請益勉之、涉紙筆拘體

經濟文錄　附軟莎偶語

精里　古賀樸　著

政府司議裡行臣古賀樸、恐惶頓首再拜上書、明侯節下、往者使侍臣賜臣台撰序文一篇、且諭徽報

章、臣感恩拜受訖、伏念臣質本庸迂、跡亦疎賤、節下厠之廟堂之顯列、又辱帷幄之寵賜、有一於此、

足爲殊遇、顧臣何人得而兼之、台文論道執之務、逐及文辭、夫人君位崇高、而富有邦國、聲色臭

味、便體之奉、投間抵隙、可以惑耳目、而蠱心志者、環四面矣、設有不溺於此、文辭是耽、

即使其所爲全與醫卜雜劇同科、猶且足稱、況如節下立志、富貴所不能淫、於其所好之文、

洞照世弊、必載道而遊焉、是在臣等、將奬順咏頌之不遑、尙容異議哉、雖然、明主樂謇諤、而

惡緘嘿、則臣所聞不敢不陳、惟節下裁焉、臣聞、文之爲物、必有實而發焉、日月星辰、照耀於

天、山河草樹、森列於地、氣之著也、其於人也、爲動作、爲威儀、措而爲政事、渙而爲號令、俎豆而

爲禮、金石而爲樂、秩然次序、煥然光采、德之施也、至於操觚、其尤戔戔者、亦必待其實而行焉、

四子六經、爲千載法程、能言之士瞿然閣筆、何也、和順積而英華發之、不可及己下、而諸子偏僻之文、

經濟文錄

附畝莎偶語

古賀樸著

極論時事封事 終

レ勝、適因三和親爲二之基一也、而豈易レ言哉、蓋臣所四以難三於言二和親一者、恐和親一成、天下因以爲レ安、惰忘委靡、日就二罷愞一、不レ可二復振一、則和之爲レ和、反不レ如二力戰決鬪一、猶爲レ足レ作二厲人一也、惟殿下赫然憑怒、務率二先天下一以脩二兵備一、力可二以當一レ敵、勢足二以制一レ勝、而後和之利害、方可二得而論一矣、未レ及レ此、而繞々然以二和親一爲レ言、無二乃大早計一乎、今天下論二和之是非一者、紛然不レ一、未三始有二定見一、臣恐三惶遽之際、或因以致二貸事一、故粗陳二其得失一、以寘二篇末一、欲レ使下殿下知中天下之先務、在レ彼而不上レ在レ此也耳

當時大臣慮不能及遠、遽絕而不許、吾計既失矣、前年果遣兵侵掠北陲、漸為國患、蓋我已陷彼術中、然成事不說、既往不咎、殿下若彼何哉、亦勉自激發、以為之防守而已、吾防備既嚴、吾守禦既固、則和可也、戰可也、守禦不能固、防備不能嚴、吾則和亦不足恃、戰亦不可為也、蓋天下成敗、在吾防守如何、未始在于和與不和也、若以今日之利害論之乎、和利而戰害、緩戰利而急戰害、何也、兵來之未練、舟楫之未具、以此守城、以此抗敵、正所謂以不教民戰者、雖有猛將虎臣、恐不能必勝于彼、然虜前年侵掠、既得罪于我、和親之議、切不可自我言之、適足以斷辱國體、而取笑於四夷、但彼改悔申請、則或可許耳、臣窃觀北虜深奸巨猾、智慮甚密、不肯猝暴致誤大事、或應有再請和親之事、事固有度勢處權者、有屈己以濟一時者、彼果再請和親、不如暫許之、和[illegible]交市有無、務順適其意、使彼不能生兵端、以其間脩繕武備、數十年之後、舟楫[illegible]兵衆既已整練、則惟吾所欲為、無不如[illegible]

國、使子重子反死於奔命、遂强覇天下、臣故亦云、今蠻夷則蠢然、與蟲獸同類之國也、然果能導之有道、勸之以術、十年之外、豈不可用以卽戎、卽闢自明和之變、鄂羅斯與蝦夷、深相仇怨、爾後屢遣敎主入夷地、欲以邪敎誘導夷人、夷人不從、反心內嚮、請夷于朝、蓋天所以賜殿下者、重以丙寅丁卯之寇鈔夷人、怨虜不可知也、臣又謂、蝦夷地廣人稀、敵至平行無敢支梧者、自今之後、罪未及死者、移住其地、漸實空虛、又一計也、然王莽開西羌地、以爲西海郡、增法五十條、犯者徙之西海、徙者以千萬數、民始怨、此則不可不知而鑑也

十日、論和親以定猶豫

和親之是非、未易言也、自古建和親之說者、未始不出于孱主姦臣之爲、往々以之誤國是、以之貽害社稷、六國與嬴秦爲敵、六國憚嬴秦之强、割其土地、厚其幣帛、以求媚於秦、惴恐事秦之不謹、媾和朝成、耐秦兵夕至、六國日就削弱、終爲呑併、女眞起于北方、威凌中土、宋君臣震懾畏怖、不敢攖其鋒、卑身體、損位號、以乞哀於彼、卒之二帝爲異域之鬼、而中原永無恢復之望矣、自是之後、苟稍有志氣者、莫不扼腕而議和親之非策、然此特泥己事之跡、而强爲之論、未達於變通之情也、夫六國與宋、誠以和親取敗、嬴秦女眞、不以和親勝乎、蓋六國也宋也、巽懦孱弱、畏敵如虎、苟得媾和以偸安一日、不復能有措置規畫以自强、秦與女眞則不然、淬吾鋒刄、勵吾士馬、惟敵是求、外假和親以愚敵國、見利則進、不可則退、此其勝敗興亡、所以懸殊、然

于彼一吏人將レ圖レ之、恐二賈人覺一相與託二打魚一之二海上一而謀、還共攻二賈人一、被レ殺者八十人、由レ是觀
レ之、彼果不レ可二教而用一耶、且彼兵器不レ過二木弧竹槍之屬一、以二顓蒙之夷一、操二木弧竹槍一、尙然、成二此大事一、
今誠授以二鳥銃劍戟一、訓督焉、練習焉、則其可レ用爲二如何一哉、自レ古戎虜之叛亂、未三始有二不レ由二守令
失一レ人者上、今欲レ教二訓戎人一、莫レ先二於擇一レ吏、勿レ用二貪饕之吏一、勿レ用二酷暴之吏一、勿レ用二瑣屑煩細之吏一、勿
レ用二姦巧慧黠之吏一、擇下其溫厚寬大、洞二曉事情一者上、住二居其土一、豐二其互市一、厚二其賜予一、務以二恩信一結二戎
人歡心一、待二其信心悅服一、授以二火器一、或用二之於獵狩一、或使二羣聚技肆一、惟命二酋帥一總二其大綱一、不二必朝夕督
責一、緩々而導レ之、徐々而教レ之、待二其稍習熟一、大會二酋帥一、統二率所部一、試二之于平原曠野之地一、其稍工者、
即加以二賞賜一、彼同有二人心一者、寧不二勃焉爭奮一、如レ此數年、雖レ爲二精兵銃卒一可也、善哉古人論二取國之
道一、[illegible]如二小兒之毀一レ齒、以二漸搖一[illegible]如[illegible]言、以レ漸、一扳而得レ齒、則兒[illegible]齒以
[illegible]見二以殺二蝦夷一之法上矣、蓋夷介在二蠻夷一、不レ得レ齒二于諸侯一、一旦狐臍教二之乘車戰陣一、猶[illegible]

有憂焉、昔晉帥乘和、而智者知其必有大功、唐李郭解怨、而中興之業、已在目前、南宋李顯忠邵宏淵不和、而苻離之敗、江南幾亾、今津輕南部、爲鄰比之國、而互相爲仇、南部以爲、津輕古爲我屬邑、今即昂然自大、不少卑屈、津輕則云、今日業並列爲諸侯、南部乃我儔伍、何下彼之有、兩相睥睨、怨疾轉深、疆圉當無事則已、有事則敗必由之、殿下何不師光武和解賈復寇恂故事、明諭二國云、方今多事之秋、非人臣私怨之日、冀二公爲我解仇定盟、以爲國家屏捍、導以至理、開以赤心、則彼同有人心者、寧能不感泣自悟、然後二國相與一心幷力、有無相濟、禍患相助、如手足子弟之於父母頭目、則敵雖至、蔑能爲也已

九曰、敎蝦夷以省戍守

臣聞、戎狄相攣、而吾坐承其敝者、策之上者也、疲弊齊民、以從事于無用之地者、策之下者也、故曰以蠻夷攻蠻夷者、中國之形也、夫蝦夷之地、寒氣酷烈、盛夏飛雪、水土疎鹵、不產五穀、中州之人往戍者、橫罹瘃家大瘇之疾、往々死而不反、去歲殿下命仙臺會津二侯、遣卒往戍蝦夷、兵不過千餘耳、在彼地財四閱月、而遭瘴死者且百人、今又命南部津輕兩國、歲發千人以戍蝦夷、夫南部津輕未得爲諸侯之最大者、而使之歲損百人、不出三十年、國已丘墟矣、是自蠹之道也、臣故曰、莫如敎訓蝦夷而用之、今戍守之兵、未可猝減罷、蝦夷之民、未可朝敎而夕用、然則所謂敎訓而用之者、亦但可供異日之用耳、未足應目前之急也、夫敎訓練習、不豫於平日、而

也、然脣亡齒寒、虢滅虞隨、古來殷鑑昭々、如ニ彼虜一果敢悍然、擧レ兵先襲據ニ蝦夷一、則禍必疾ニ中於我一、雖レ有ニ智者一不レ能レ善ニ其後一矣、是北陲之防禦、似レ緩而實急、人情之所レ易レ急、而事勢之所ニ最切一、庸詎得下委ニ之度外一而漫不上レ顧者哉、臣聞、蝦夷山岸徒絕、海波洶湧、而松前津輕之際爲ニ尤甚一、達レ肥數十里、潮急如レ箭、舟一失レ勢、下レ流百餘里、覆溺者無レ數、幸而得レ濟、比レ達ニ前岸一、擧船昏冥、不レ辨ニ人事一、嶮惡如レ此、賊設以ニ大艦數十一、襲ニ松前一而據レ之、雖レ有ニ貔貅百萬一、無レ所レ用レ之、然則防守之策可レ知也、必也使三蝦夷之內足三自固一、而復可ニ自守一、若望ニ其危難之際一、出レ兵相援、亦無レ及也已、殿下前歲益ニ封南部津輕兩侯一、因命三南部歲出ニ卒六百餘人、津輕歲四百人一、以守ニ蝦夷一、朝廷不三復勞ニ遣戍一、衆安ニ其土一、悉ニ其風俗一委任而責ニ成功一、計無ニ上レ此者一、臣猶以爲、若以ニ此計一爲レ得則可、將レ謂三如レ此而高枕安臥、不三復勞ニ設施一、恐未レ然也、臣聞、齊檀子守ニ南城一、而楚之人不ニ敢爲一レ寇、漢郅都守ニ南門一、匈奴懼引レ兵去、竟到レ死不レ近ニ雁門一、是知ニ守邊務在一レ得レ人、抑不レ知三南部・津輕之將、果有ニ檀子郅都之威名一乎、臣有三以知ニ其必不一レ能也、蝦夷地廣袤三白里、三ニ分我邦一而居レ二、而僅々以ニ千人一守レ之、不レ知三果能防備周至、無ニ遺漏一乎、臣有三以知ニ其必不一レ然也、古人有レ云、天下未三嘗無ニ賢者一、蓋有レ臣而無レ君者、臣故亦曰、獨患三殿下不ニ訪求一耳、以ニ殿下之明一、又且博詢ニ諸公卿大臣一、則擾々群臣之中、寧無ニ萬人之敵一乎、寧無下堪レ爲ニ萬里長城一者上乎、然後擇下其尤傑ニ出于衆一者上以繼レ之、即所レ擧失レ人、不レ妨ニ再三置易一、授レ爵以レ能、命レ位以レ德、略如ニ漢之刺史太守、唐之節度觀察使一、則庶ニ乎其可一也、抑猶

之、小不滿意、番子發怒、擲盤飱碎器皿、屋壁亮隔、靡不踢破、此雖瑣々之事、亦可見其一端、爲上買怨、莫大於此、殿下何不一下書禁抑、使務踏規矩、特在殿下之一言耳、何憚而不爲也、夫救民之道、不止一端、臣之言特拯今日目前之急、非敢曰愛民之道盡于此、況天下之大、諸侯之衆、土殊而俗不同、事各有宜、非愚臣所能一々通曉、臣故曰、欲愛民之道、莫如擇守土之吏而任之、向者岡田清助爲常陸州郡官、有政績、交代之際、治下百姓、詣閣老門請借留一年、朝廷因委任如故、且顯榮其爵邑、足以勸牧民之善、然臣竊謂、郡官凡五十餘人、豈別無一人可擢者乎、豈更無一人可黜者乎、賞之行僅一人、恐未盡也、臣請爾後郡官、皆命大臣保任其所知之賢者、所擧賢則有賞、所擧不肖則有譴、所擧平々常々、則無賞無罰、如此則才賢彙進、而無能不肖者、自然羞沮而退矣、又聞、郡官多受賄賂、其屬吏遑々大駔牙儈、罔利黷貨、民之蠧殘、玆焉莫甚、臣聞、趙宋之制、一犯贓罰、終身不齒、是以吏皆競砥礪名節、不營貨利、尤爲良法、臣請郡官自有罪、無待乎言、即屬吏犯贓、郡官不能知而罪者、亦當有責、則數年之後、官無不得人者、官無不得人者、則民無不獲所者、官無不得人、民無不獲所、則天下諸侯風靡而化、斯澄源淸流之術也

八日、封諸侯以守北陲

夫蝦夷爲我邦北陲之捍蔽、要害之地、以鄂羅斯之强大、不得漸蠶食我者、未必不由蝦夷間之

未レ有二百姓怨嗟、而國家奠安者一也、自レ古小民怨レ上、社稷因以禋絕者不レ可二勝數一、臣請言二其昭々者一、周厲王信二用姦回一、放二棄忠良一、百姓怨嗟、相率作レ亂、遂流二王于彘一、楚靈王貪而无レ厭、思レ呑二滅四海一、民不レ堪二王之欲一、從レ亂如レ歸、棄疾等因レ之、遂弑二王于乾谿一、秦胡亥作二阿房驪山一、役徒七十萬、作二督責之法一、以困二極黔首一、陳涉作レ亂、海內鼎沸、咸陽遂焦土矣、而論者或云、細民之愚莫二能爲一、不レ勞二過慮一、不レ思也耳、蓋天下之亂、皆出二於戎狄盜賊之爲一、而其源未下始有中不レ由二百姓怨一上者上也、臣聞、高田侯封邑、間二在奧羽之間一者、土地瘠薄、蓋田之下々者、往年北邊之警、羽書交馳、使驛紛紜、使者一夕過二此地一者五十騎、僱二傳遞馳二驛卒一、不レ給二一錢之直一、民疲二于驅使一、不レ得レ專二力于田一、田疇荒棄、茫爲二艸莽一者比々、蒼然滿目、使二人心惻一、民相謂曰、若二此數月一、吾儕寧逃二入山林一、不レ能二坐待二死亡一、遇二北邊弭レ警而止、又聞、陸奧州南部之地、土曠人少、加以二政無二綱維一、前年會津戍兵過二此驛一、吏往々召二二十里外人一以應レ命、往返數十里、纔酬二直三十文、或二十文一、又皆收二入吏手一、民不レ得二一錢著一レ身、怨嗟之聲載レ路、此皆幸當二治安之日一、故得二無レ事而止一、設不幸當二擾攘之際一、因レ之以二水旱一、因レ之以二飢饉一、彼不レ亡命入二山林一、則寧起爲二盜竊一、不レ待レ言而後知一也、殿下不下及二今日無事之時一、建中立一定之法上、嗣後苟有二邊警一、假令奉二公命一以經二歷郡國一者、不レ得二妄自恣肆一、凡暴使驛卒者、含而馳傳、而不レ酬レ直者皆罰、其或使事有レ急、不レ及レ予レ直者、所在吏姑爲出レ直、他日取二償於上一可也、臣又聞、都下官人、出二使四方一者、所在凌二暴土人一、土人疾レ之如レ讎、前日攝府番子歸而赴レ都、道宿二於板橋傳舍一、々人遇

祖先畜妻子臣請居官享數千石之祿者、身物故及告老、而子已居職則已、否則減其俸之半、其子其孫、又世減半、至於百石而止、則益上莫大、又足以大鼓作彼等怠弛之氣矣、若夫當時諸侯大極奢麗、則弊孔多端、而尤苦徒御供臆之莫大、諸侯之尤者、儀衞導從侈於王者、是以々巍々之諸侯、其國之入、僅足以供朝貢之費、諸侯以下亦皆以次踰侈相尙、即五六百石之吏、其僕從略如漢三公、宜其多貧而少富也、夫儀仗僕從、貴賤有等差、以諸侯之微、敢與王者抗、無論其難供給、即踰分僭上謂何、請嚴立之法、痛行減黜、財存其什一、則諸侯以下、擧皆感戴惟命、數年之內、富貴可蹻足而待也、倘謂徒御僕從、所以備不虞、令單弱無倚、危禍可慮、此大不然、夫今儀衞僕從、衆則衆矣、其實疲軟羸弱、十僅敵一、是以急難之際、捧頭鼠竄、苟謀全身、未始顧其主、今誠以警備爲意、則當擇勇敢忠烈、緩急足倚、一可以敵十者、以爲僕從、何慴之有、方今天下拘人情而務外觀、當爾時唱黜冗職減僕從、其說有不驚動人之耳目者乎、顧今蠹弊既深、非痛有剗革、莫以成功、非區區補苴罅漏所能振也、夫申不害之治韓、商鞅之治秦、一偏之術耳、原無足道、惟其確然自信不疑、是以終能有濟、殿下以正大光明之心、斷而行之、天下豈有不成之事哉

七曰、愛百姓以絕怨萠

夏書曰、民惟邦本、本固邦寧、孟子曰、得其民斯得天下矣、未有民心悅服、而禍亂萠作者也、

以懸慮所及、爲殿下陳之、所謂省冗員以贍國用者是也、臣覩西土三代以還、開國全盛之際、政簡事省、人稱其職、是以吏員寡而政擧、及其衰也、政煩綱密、加以尸位素餐之臣、滿朝皆是、是以置官日多、而百度日替、臣竊謂、朝廷今日稍坐斯弊、小普請支配組頭、實置自享保中、國初未嘗有也、今誠復舊制、擧小普請、隷之參政及御留守居、則小普請支配組頭等官、可以廢而無置、設使小普請之員、蓓蓰曩日、非參政御留守居所能督攝、則小普請支配及組頭、去半而留半、猶實乎已、又大御番往守京攝者、當行必倍其祿、蓋所以憫其勞而優之賞也、夫事君者必致其身、陷脰喪元、且所不辭、于役之勞、於我何有、而乃望莫大之賞耶、臣竊謂勿予、便前日下崇儉之令、因定制、大御番當行者、五百石以下、許仍舊陪祿、五百石以上則不許、盖亦合處事之宜、然區々以五百石上下立限制、不能斷然剗革、似猶未免墨守弊法、且也五百石與四百石以上、相去幾許、而賚賜之多寡頓殊、又非公平無偏之道也、其他不急之官、無用之祿、未易摟指、以漸沙汰之、有闕不復補、則十數年之內、不至驚駭天下之視聽、而利國無窮矣、孟子稱文王之王政曰、仕者世祿、蓋世祿者、聖王厚下之至也、然亦唯謂其祖有功德者、優其子孫、令得免飢寒而已、豈謂養弱子孱孫、以千萬鍾乎哉、今寄合祿有過九千石者、小普請有近三千石者、比之漢代丞相御史、不啻倍蓰、上之待之、可謂厚矣、乃彼皆自以爲、祿食既豐、可以玉食錦衣度一生、於是乎、晏然媮逸、不復有營爲、甘爲自棄自暴之人、是上之優也、適所以驕之也、夫人臣俸祿百石、足以奉

以能聚烏合之衆、以誅剪勍敵、驅婦人女子、使可赴水火者、豈區々之仁惠、繋着其心哉、蓋嚴立之法制、使其畏而不敢越規矩也、良將之設法、進死者有賞、退生者有爵、是以爲士者皆云、進亦死、退亦死、等死、脫死乎敵、猶勝於死刑、况進而力戰、未必不生、儻生則身被顯賞、不幸而死、猶不失美名榮世、慶及子孫、其果望敵而退者、方無生理、身蒙被惡名、殃及子孫、吾寧進死不可得也、前歲北陲之逃卒敗將、今已不可進罪、則臣之言、亦唯可施于將來也耳、臣請立三軍之法、曰臨陣不進者斬、背敵逃走者斬、期會而後至者斬、隊長死敵、而偸生苟活者斬、爲敵所乘、喪失旗鼓者斬、不得以私意撓公法、不得以愛惡亂心、但大官貴人、不可顯而誅者、止奪秩褫爵、使官人不與齒焉可也、若夫一國之主、恐未可以一敗之故、輕行黜陟、但當罪當事之臣、失律汨法、以致敗衂沮喪者、必其辱國隕威、害延社稷、則亦不可易置也、今當國家宴晏之秋、遽爲此嚴法苛令之言、天下必有視臣爲殘酷之徒者、殿下確守不失、力而行之、數年之後、自當赫然有顯効、民可以樂成、而不可與慮始、古人之言如此、殿下奚疑

六曰、省冗員以贍國用

方今度支之窮乏極矣、吏方且嵩靨頻、而憂國用之不給、仍之以北虜之警、防禦屯戍之衆、糗糧器械之設、費用不訾、有出而無入、有散而無積、無異於責駑駘以千里、幾何不至於顚踣也、然則富國之術、方爲今日至急之務、不可不察也、夫富國亦多術矣、如臣庸陋、豈能究知、請試

五曰、嚴軍法以作暮氣

臣聞、國容不入軍、々容不入國、自古有道之君論治、每貴德施而卑刑罸、良臣察相計事、必先惠而後法、主寬大優裕、而惡苛刻嚴急、蓋在晏然無事之日、而論政之經云爾、若夫蒞三軍對勍敵、自非峻法嚴令、何以一士志而成大功、此人之所聞知也、故兵法曰、畏我者不畏敵、畏敵者不畏我、今國家太平二百年、人氣懈惰、勇往直前之氣、澌滅無餘、殿下猶且承襲祖宗之德政、未嘗妄戮一人、未嘗輕刑一臣、足以覩盛德之巍々然、臣竊謂、此施于平日、固可也、將施之於干戈之際、適足以添暮氣而招挫衂耳、前年鄂羅斯寇北陲、守吏望風奔竄、虜以六十人蹂踐蝦夷、若入無人之地、以軍法論之、當時逃將退卒、死有餘罪、而朝廷特從寬貸、重者停秩褫職、輕者被譴謫而罷、夫人情莫不貪生而惡死、今也進則殞於鋒鏑、死於弓弩、退則身命可全、室家可保、幸者或且不失從前之榮貴、如此而求其能有進死無却生難矣、昔燕晉並起攻齊、々師敗績、田穰苴將兵禦之、與君嬖臣莊賈期、而賈後至、即斬徇三軍、三軍之士皆振慄、遂走燕却晉、盡復侵地、漢諸葛亮愛任馬謖以爲將、謖違亮節度、大敗于街亭、亮以不可以私愛枉公法、戮謖謝、衆爲之涕泣、其守法如此、所以能以蕞爾之蜀、與魏吳抗衡、而不少屈撓也、吳呂蒙入南郡、約令軍中、不得干歷人家有所求取、麾下士取民家一笠以覆官鎧、雖呂蒙猶以爲犯軍令、遂斬之、其所以能擒關羽挫北軍、爲江表名將者、以師律之嚴如此也、其他古之良將、所

[illegible]以威制海內乎、況臣非詳盡[illegible]造天下之舟船、其於今所習用者、固遵而弗改、特願別製大
[illegible]以供決戰之用耳、臣欲乞於浪華・新潟及自他在々港澁、大作船艦、其吏當擇良匠任之、不良
則殘蠹多、而費莫大、工當選巧而用之、不巧則規制疎、而敗壞隨之、若夫船艦之制、則有蘭船在、
請得取以爲法、猶有未詳晰、莫如利誘蘭人而問其法、彼戎狄惟利之視、誠能賂以財貨、務以
子女、其法可盡奪而有也、舟楫既繕完、當就試之于海上、勸督之任、請命各地守吏掌之、若夫都
下、則四方所聚觀而取法、不當漫然委之下吏、當命貴重臣、時々觀察、殿下亦當四時一往海
上臨視、所以使天下知殿下不頃刻忘戰備、而各自競勸也、又聞、北虜尤善用皮船、平日摺疊
船底、有事則出而用之、進退輕快、甚便于事、臣謂、彼有而我無、實爲欠闕、故皮船亦不可不造
也、前年壬戌在松前者、嘗試以海馬皮爲之、殊不減虜所用、請遍下其制于諸州、今多製造可
也、數已至、習已熟矣、臣猶謂十年之內、決不可水戰、十年之外、未可輕水戰、蓋邦人未嘗習
水戰、今忽乘大艦、駕長風、既已傲然有蔑視勍敵之心、殊不思鄂羅斯以舟爲家、進退如意、彼
此之勢、工拙懸殊、敗形固已在我、故臣願水戰、必出於不得已、或有萬全之策而後用之、則亦
可以就功矣、殿下必云、自非十年、難以可用、何計之疎且濶也、臣之云々豈得已乎、以今之人、
致以水戰、勸督訓勵、纔可用於十年之外、倘厭其迂濶而不爲、則永無制勝之時、其而敗辱以沒

六月、佃島習火故事、使萬國視効以爲法、如此則火術之精且熟、可蹻足而待也、夫吾邦兵刃之銛利、甲于萬國、獨火器破壞不脩、以至與北虜大相懸絕、殿下誠信用臣計、火術之精、可立而致、火術已精則彼有一長、我有二長、二以當一、何不可克之有

四曰、習水戰以補武備

夫漁父蜑人、視舟如車、視海如地、是以不畏百尺之淵、樵採之夫、騰林木類猿狙、凌崖嶮伴虎豹、是以不悼千仭之阻、皆隨其處、而防患之具、遠害之道存、所以能免於危殆也、今我邦環以鉅海、地形如帶、無適而非海、而船艦不大、人不熟於水、見海則惴慄恂懼、無備甚也、今亦自赤關及周防播磨之海、介居兩岸之間、特一衣帶之水耳、而舟行過此者、覆沒相繼、況鄂羅斯之船艦、高凌雲日、堅踰金石、四面以火礮自衞、糧食械器、充然完具、以我至大之舟、迫而攻之、高不及者一丈許、弩礮無所施、劍戟不可入、不淪沒則破摧、不待智者而後知也、孔子曰、工欲善其事、必先利其器、今也欲講習水戰、船艦不可不先更造也、寛永中、耶蘇賊起於天草、已平、猷廟因命逐受妖教者、且下令狹小舟船、使其不勝凌絕海、蓋慮其或伺間、而往西洋習邪教也、今之舟船、皆其遺制、今率然創更造之說、人將謂臣主張臆見、不顧先公之命、殊不知政貴隨時制宜、猷廟狹陋船制、所以絕邪教之萠、用慮至深遠也、今妖教剪薙無遺、而僅々執守成法、不亦拘乎、且猷廟而有知、臣不知其喜墨守成法、以取笑於外夷乎、將喜脩舟艦習水

馬、果何益于勝敗之數哉、惟以容儀脩飾、坐起可觀、務悅人目爲事、馬惟步武周正、頭頂端直、如竹馬之狀爲務、刀槍弓馬之用、豈端使然也、臣聞、鄂羅斯專用鳥銃、其工巧倍萬他國、大者能射數里之外、能一發殪數十百人、以今之刀槍弓馬、逆鄂羅斯之銃、不校明矣、火箭之屬、無一所欠闕、時其廢置弗脩、以致取侮于外夷、不亦惜哉、且吾邦之賤火器甚矣、上不以取士、不以進身、祿爵稍優者、即卑視而不肯爲、曰、此步吏下士之所職、吾不屑也、是其失非源於上而何也、然則爲之如何、曰莫如以火器擧士、夫今之刀槍弓馬、雖未必中三軍之用、士專以爲務、拋擲百事而勉々吃々乎此者何也、以上以此取士也、今誠創制以火器取士、或且使仕進之路、此捷于彼、則利之所在、孰肯不競趨而爭勸也、臣獨恐其或以虛譽冒取顯位、而不適於實用、殿下何不命閣老、月中再三、聚會群士、親試之、其卑職冷秩、不得自達于上者、各使其長試之、第其高下、定其優劣、然後從而賞之、上者超授顯職、次者增祿進級、下者賜金帛而罷、如有怠惰因循、都不以火器爲意者、輒痛譏責之、彼所勸在前、而所懲在後、求其不專力於此、不可得也、然此上可以勸都下之士、未足及天下、臣請遍下令諸侯、務練閱火器、其有脩明火術、繕完火器之國、特錫金寶以褒諭之、若諸侯之臣、及處士庶人、有洞曉火攻之術者、命所在以禮敦遣、待以不次之位、以供異日之用、則夫人有自奮之氣、爭以不如人爲恥矣、至如佛郎機震天雷之屬、未易妄發而輕試也、請命群臣、月習之于袖浦及洲崎、定期悉停入港之舟路、效每歲

平素調練之跡如レ此、尙何望二其緩急足一レ倚哉、尙何責下天下之人、都不中以二武事一爲上レ意哉、欲レ乞二殿下逐月、會二衆士于上溜及吹上一、凡刀槍弓馬、大小銃之屬、皆隨二其所一レ能而較レ之、其有二高下工拙一、從而陞二黜之一、賞罰貴レ得二其當一、不レ容二絲毫私意于其間一、如レ此則人々知二自勵一レ技、不レ期レ精而自精矣、又且閒二一月一、親統二率三軍一、習二戰于小金原一、命二閣老番頭一、分二掌隊伍一、識二別營陣一、旗幟精明、干戈森列、殿下援二金鼓一以節二進退一、魚麗雁翼、風雲鸛鵝之變、無二一所一レ遺、勿二視以爲一二講習之事一、儼如レ對二勍敵一、失レ伍者戮、犯二師律一者刑、至而後レ期者誅、如レ此則人々熟二於馳驟進退一、無二所一レ用而不可一矣、蓋方今太平之處、人皆沈二淪於財貨酒食之間一、古來猛鷙之氣、剝盡無レ餘、驟而責レ之、以對二嚴敵一、赴二塵戰一、猶下以二罷癃篤疾之人一、負中千鈞之重上、其不二敢顚覆敗績一者有レ幾、然則當今之計、孰二先於振一二起士氣一、士氣苟不レ振、則雖レ有二奇策名畫一、將何所レ施、然欲レ振二起士氣一、而不レ本二於躬行一、勢有レ所レ不レ行、惟殿下嘗膽席薪、痛自激勵、以率二先天下一、則夫勇鷙之氣、得二於天性一者、自當レ存二感奮發强之心一、其轉而復二古之俗一、無レ難矣、果復二古之俗一、將下威二懷萬國一、力二制四夷一而有上レ餘、奚鄂羅斯之足レ畏哉

三曰、脩二火器一以奪二虜長一

夫時有二古今一、勢有二先後一、聖人因レ時以制レ宜、智士不レ逆レ勢以縶、我邦古者只有二射騎擊刺四技一、以レ此迭相勝敗、蓋彼惟有二此四者一、我亦惟有二此四者一、是以器鈞勢敵、而高才多智、得レ制二勝于其間一、今四方萬國、務以二火器一爲レ事、則彼四者、業已爲二芻狗糟粕一、然且執而不レ知レ變、亦已固矣、且今之刀槍弓

二日、講武事以振士氣

夫我日域之爲邦、其俗尙威武、其人猛鷙虓勇、上古而來、以兵力雄王於海內、神后嘗以之克平三韓、豐臣王嘗合朝鮮城而挫明虜、如之何今日爲北狄所侵侮、惶遽忽忙、不能措手、瀕國之邑、鎭衞之地、恣其出入而不問、何古之勇、而今之怯、今之弱、而古之强也、無他、時沐太平至治之澤日久、頽廢萎薾而致然耳、今果欲振鼓弊俗而復于古、豈患無其術乎哉、孟子曰、仁言不若仁聲之入民深也、孔子曰、不能正其身、如正人何、方今北虜横行、實社稷之鉅恥、此正武夫投袂衝冠之秋、而怠慢之氣、頽然自若者、吾無訓督之術也、曩者、殿下遍命諸侯、淬礪鋒刃、訓練士衆、以繕海防、而沿海諸侯、兵備敗壞、滔々如故者、未有所觀感而興起也、殿下誠欲大鼓舞人心而作之氣、則盍反諸其躬而行、所謂反諸其躬而行者何、射獵之娛、離宮之游、不可不減、後庭之佳麗、不可不節也、殿下心曰、予宮閫未嘗踰閑、遊獵不至廢事、汝何瀆上之切也、臣竊有說、夫特循守成規、而無所踰軼、民亦以爲固也、未必誹謗、而亦未必信心悅服也、當今日之多事、殿下以爲民苟不誹謗而足耶、自非然者、恐不得不成規之外更有省損也、然臣非敢欲使殿下棄遠妃色、廢絕遊獵、寂々度日、惟願以晏安之餘、校技擊、遊獵之間、講戰陣耳、今殿下親臨、試群臣劍槍騎射、明有故事、然一歲中、僅々不過兩三日、何足爲有匹輕重、至於講戰、則終年未嘗一聞、夫都下之士、天下所取則者、苟及有事之秋、方將使之衞社稷鎭邊疆、而

幷羣材之長、集衆思之大、以廓中興之基、公卿百司而下、苟有籌策、內可以扞吾邦、外可以制强虜者、幸明白陳告、勿少顧忌、吾將揀擇而見于行、數年來忌諱過甚、實由久安之弊、尤非吾意、嘗洒然與海內更始、因班下斯書于郡國于邊國、則人皆軒眉拭目、知殿下有高世之志、而崇論讜議、紛然滿天下矣、然後擇而取之、可者用之、不可者否、未始少有損於我、而天下欣服、何苦而久亦不爲此也、程叔子曰、人主一日之間、接賢士之時多、接宦官宮妾之時少、則可以涵養氣質、而薰陶德性、殿下之明哲、臣固知其決不以便嬖妃妾自蔽、然深拱居中、自非般見昔廷對群臣、下情安得洞察、上澤何由遞布、殿下何不逐日燕見大臣、問閭閻之疾苦、察規制之是非、又且數數廷致儒臣、稱古今論經藉、軍政邊防之失得、一々窮究、未必無補於盛德之萬一也、向者丙寅丁卯之警、虜以數十人、横行海上、擧蝦夷之大、無一人敢攖其鋒者、倉廩焚、邑落殘、卒徒禽、米粟之積、先代之重器、皆爲彼所窃有、曾有以此一々告殿下者乎、自寛政中闢蝦夷之地、戍卒往々遭瘴而死、去歲仙臺會津兵、往戍其土、未及五月、死者且百人、父之哭子、妻之哭夫者、比比而在、曾有以此一々告殿下者乎、夫北陲之亂、苟得聞其詳、疲懦之夫、尙將腐心切齒、不能自抑止、今以殿下之剛明英斷、乃晏然偸安、了不能大有所爲、比跡古英雄之主、顧反與叔世中材之君、無大相遠者、惟其言路壅塞故也、然則開言路、實爲百事之本、故臣敢首以爲言、惟殿下少留意焉

書曰、稽二于衆一、捨レ己從レ人、帝堯也、詩曰、先民有レ言、詢二于芻蕘一、文王也、若レ是乎人言之有レ益二于國一也、故召康公有レ言、防二民之口一、甚二於防一レ川、々壅而潰、傷レ人必多、民亦如レ此、秦二世承二始皇虐政一、天下十室九怨、盗賊蝟毛而起、二世恬然自以爲、居二泰山之安一、群臣或言レ盗、或言レ反、輙行二誅黜一、言レ皆鼠竊狗盜、不レ足レ置二齒牙間一者、亦蒙二賞擢一、卒之望夷之禍、頭足異レ處、隋煬帝棄二遺賢臣一、親二昵邪佞一、正言必誅、直諫者必戮、四海鼎沸、豪傑相繼起、天下無二一寸乾淨土一、猶自矜二誇功業一、謂二必無一レ足レ憂、終釀二成江都之變一、社稷勦絕、是以聖王之法、史爲レ書、瞽爲レ詩、工誦レ箴、諫大夫規レ誨、士傳レ言、庶人謗、又且懸二招諫之鼓一、設二誹謗之木一、垂二戒愼之詔一、立二司過之士一、皆所二以自防一、其煬帝也二世之敵也、臣烏敢以二暴秦亂隋一爲レ比、但數十年來、忌諱之風太甚、光明正大之氣漸滅、都盡切二言開邊之非策一、而襯レ祿者有レ之、著二書論一夷狄爲二邊患一、而被レ囚者有レ之、以及二北陲之亂作一、斯弊殊甚、街談巷議、頗涉二邊事一、則捕下レ獄、因而得レ罪者、累々相踵、差除之失、措畫之謬、羣臣明知二其非一而不二敢言一、上下相蒙、苟圖レ便レ己、上有二災患一、下之人泛然若レ不レ聞、曰、非二吾所一レ與知一也、下有二殃苦一、上之人蔑焉若レ不レ知、曰、彼奚足レ恤哉、上下之勢、壅隔如レ此、一旦變起、渙然瓦解而已、紛然烏散而已、孰肯效レ死授レ命、以報二君上一者耶、蓋承平日久、其弊自然至レ此、殿下奚與知焉、特其挽回之責、則不レ在二他人一而在二殿下一耳、殿下何不レ下レ詔曰、鄂羅斯之難、不二獨吾宗社之鉅恥一、凡汝生二斯邦一、而食二斯土之毛一者、孰可レ不三視以爲二茹肘飲血之仇一、予假令不レ能レ聞二昌言一則拜、吐哺握髮、以下二白屋之賢一、尙思

爲國家、露忠赤展報効者、置宗社之孔恥國家之鉅變於度外而不問、賴殿下獨英武特出、懷大有爲之資、亦不能有所更張改正、以幸天下苟希晏安、以趨過目前、臣不知天下之禍、終何所應止也、臣嘗歷覽史籍、古來大亂之作、未始有不出於至盛大安之時者也、蓋承平日久、綱維紊亂、釁諸强健之人、生平閨房失度、脆美過饜、傷精戕脾、然後發爲瘰疽之屬、敗爛四潰、不可救藥、故梁武帝雄據江南、國家全盛五十年、卒招侯景之禍、唐明皇在位四十年、開元之治、比蹤貞觀、而終致安史之亂、建中宣和、亦爲趙宋郅隆之日、而女眞飲馬于汴河矣、今國家治平之久、踰宋越唐、而未始數梁、臣尤所以寒心惕惧也、北所謂安史女眞者、特邊鄙一將、寨外小夷、制之宜易々、尙猶如此、今鄂羅斯土地之廣莫、三十倍於我、人衆之夥多、三倍於我、此其備禦豈不戞々乎難哉、夫賈生事孝文之君、丁盛漢之隆、讀其所上治安策、有云、今天下之勢方病疿、又若灸盬、又云、措火於積薪之下、火未乃燃、因謂之安、天下之勢奚以異此、卒之、果有七國之亂、賈生之言、未爲過甚、智士慮事不當如此乎、今强虜陸梁、大邦爲釁、火已然矣、群下尸素、百姓離心、病已深矣、使賈生々于今之時、臣恐其不止於痛哭流涕長大息也、臣誠憤懣之至、內切于心、不自揆其疏賤、敢以策十事爲言、此皆書生常談、未必適于用、惟殿下不以人廢言、且有所去取於其間、而施于行事、則幸甚幸甚、臣不任激切屛營戰惶待罪之至

一曰、開言路以防壅蔽

極論時事封事

精里　古賀　樸　著

謹按、神祖而來、賢子肖孫、繼々承々、以迄殿下十有一世、黔黎乂安、夷蠻帖服、縣祀二百、而未嘗有風塵之虞、金甌之安、譬諸泰山、而四維之張、實振古之所未有、西土之所絕無、可謂盛矣、殿下承緖之重既如彼、守成之烈又如此、一夫不獲其所、尺地非其有、臣庶將爲殿下恥之、況甚焉者乎、乃者醜虜猖獗、因逞其蛇豕之心、丙寅之秋、入寇唐狄、焚絕積聚、鹵略成人、前二年夏、再破蝦夷諸島、守吏望風而遁、軍資器械、委棄如山、悉爲彼所竊有、去年秋、又以計掩襲崎陽、出我不意、不勞寸兵、不費一鏃、劫蠻邸質人、多抄略畜獸而歸、以至長崎鎭撫使以瀆事自殺、肥前侯以大國之君、杜門禁錮如俘囚、曾不能搴敵之一旗、馘敵之一卒以雪怨、祖宗之深恥、社稷之大訴、何以加茲、臣私心竊以爲、天下之事、既已至此、意朝廷之上、必應有請纓之士、封疆之臣、必應存喪元之志、如之何、外之諸侯鎭撫使、不能率勵士馬、以敵王所愾、內之公卿貴臣、不能有所建明措置、以廻天下之勢、下逮百司庶職之賤、皆存偸惰苟安、容身保家之計、無一人

極論時事封事

古賀樸著

而已哉、愚編二叢書一、於二經濟實用之義一、實有二本志一、故首錄二此篇一、不三止表二欽服一、亦藉以自明レ所レ志云

藤森大雅識

十事解終

下ニ徹セズ、今一ツ有米過ノ法ヲ立ントシテモ、面々ヨリ初トシテ様々ノ支所起リ來リテ其志ヲ立ズ、夫ニ應ジテ諸筋ヨリモ左支右吾シテ崩レ行ハ是非ナキコトドモ也、如レ此ニテ年ヲ送レバ、終ニハ公邊ノ不敬、或ハ民ノ愁苦ニヨリテ、眞ノ危亡ニ及ブベキコト明白也、夫ヲ只今危亡ニ臨ミタル心ニナリテ、君臣合體シテ仕來リヲ取ホソメテ國家ヲ中興センコト、明君良相ノ大英邁ノ志願ヲ發シテ思ヒ求ムベキコトナリ

右十條、明道先生十事ノ目ニヨルトイヘドモ、必シモ其意ヲ皆用ルニ非ズ、今ノ時處ニヨリテ當務ヲ急ニスル也、明道先生モ「徒知下泥レ古不上能レ施二之於今一、姑欲レ狥レ名、而遂廢二其實一、則陋儒之見、何足二以論一治道一哉」トイヘリ、然レバ鄙說如レ此トイヘドモ、先生ノ意ト背馳スルニハ至ラザラン

精里先生學宗二伊洛一、道具二經綸一、於二經世之術一、引レ經酌レ古、隨事折中、其著二於文章一者、炳炳烺烺、傳二誦士林一、殘膏剩馥、沾二丐海內一、非二一日一矣、若二大雅一末學淺識、豈敢妄事二表章一、以招二僭越之罪一哉、第此編先生嘗爲二蓮池侯一撰レ之、因二程子十事之目一、發二明當世之務一者、雖二以解レ名、不レ屑二屑於字句間一、直揭二其大旨一、示以二經濟之要一、平易簡切、雖二淺學一可二通曉一、有レ志レ圖レ治者、能取二法乎斯一、則豈徒南車津筏

思フハ愚ナルニ非ズヤ、然レバ一刻モ早ク量レ入爲レ出計ヲナスベキ也、去ナガラ此計ヲ定ルニハ、君大夫ト能々丈夫ノ志ヲスユベシ、中々懦弱ノコトニテハ屆カヌ也、諸侯ノ經費モ公邊ノ勤向キハスクナカラズ、其外家中ノ介抱、借錢ノナシ入用、居付郷普請ノ入方等差詰タル所何程ト定メ、サテ其殘ハ前日五分ノ一アラバ、五分一ニテ家ヲ立、前日十分ノ一アラバ、十分一ノ暮シヲスルハ地盤ヲ極ムベキ也、夫ニ應ジテ是マデ仕來リヲ止ムルモアリ、減ズルモアリテ、堪ガタキ所ヲ堪ベキ也、萬石ノ家ッ千石ニテ暮スハ甚難儀ナレドモ、百石ノ者ヨリ見レバ甚優ナリ、今日危亡ヲ待テ居ヨリハ、難儀ニテモ明リニ付クコトナレバ、不レ勉バアルベカラズ、然レバ公邊勤ノ分ハセン方ナシ、其外ハ皆内分ナレバ、イカ様ニモ取締ムベシ、公邊勤ト云テモ能吟味スレバ、幕下ニ不敬ニナラヌ様ニシテ、餘ハ省略ニツカヘヌ筋アルベキ也、有米過ノ出來ヌ間ハ家ノ漏ルヲコラヘ、二度ノ膳ヲ進ルコト不レ叶バ、一度バカリニテモコラヘ、帷子出來ズハ、夏モ單物ニテ凌グト云息ゴミニテ、身ヲ以テ是ヲナシテ羣下ヲ率キバ、行ヒ難キコトアルベシトモ覺ヘズ、譬バ守ラネバナラヌ城ニ楯籠テ、兵糧將レ盡時最早タマラヌト云テ逃去ルベキ様ナシ、主將ノ心一ツニテ人心ヲ持カタメ、死ニ至テ不レ去シムベシ、張巡・許遠ガ睢陽ニ籠リテ兵糧盡キタル時、紙ニ茶ヲマゼテ食ヒ、鎧ノ皮ノ所ヲ煮テ食ヒ、馬ヲ殺シ愛妾ヲ殺シテ食フニ至テモ降ラズ、人心離レヌハ何故ゾヤ、主將ノ心衆心ニ徹シタル故也、今ノ困窮ト云ハ金銀ニツカヘタルマデニテ、張許ノ行懸リトハ懸隔易キコトナルベキニ、君大夫ノ部理手ヌルキ故、眞實ノ心

自分ノコトニ取遣ハズ、其中ヨリ社倉ノ粟ナドニシテ置タラバ、イカバカリカ民ノ爲緩急ノ爲ニナルベキニ、其事ニ及バズ奢欲ノ爲ナドニ費スハ、大ナル誤リナリ

分數

分數ハ冠昏喪祭等ノ差格ニテ定レルヲ云、今時此分數ナク、面々勝手ニ事ヲナスハ上下ノカマチ無キコト也、夫故世ノ中ノ奢增長スレドモ、何ヲ目當ニ制スベキ樣モナシ、此品節ヲ立テ守ルベキコト也、近年諸色高直ニシテ諸侯ノ物入昔ニ倍ス、依レ之困窮尤甚シ、中々前方ノ心得ニテハ決シテ行ヌコト也、有米過ノ法ヲ屹ト立ベキコト也、有米スギトハ、卽量レ入而爲レ出也、經濟ノ大法此一言ヨリ外アルベカラズ、世ニ有米ニテハ決定アラズ、地ヨリ湧出ル物ニモ非ズ、有米ノ外ニ何ニテ足ス道アルヤ、是ハ眼前ノ凌ギ方ニ子金家ヲタノミトスルノミ、今年不足故ニ金ヲ借ル、明年モ又今年ノ如ク、不足ノ上ニ去年ノ金ヲ拂ハネバナラズ、縱令全分拂ハズトモ、利分マデモ返スベキ當ハナキ也、故ニ不足ニ不足重ナリ、本利倍增シテ借ルベキ道ナク、是ヲ橫ニナリ返サヌト云テモ、有米ニテスマネバ、又別ノ子金家ニ賴ネバナラズ、銀主モ橫ニナランコトヲ恐テ、何ゾ要害アル無レ已誓約ヲ定メ、質ヲ取テ高部ノ金ヲ借ス、如レ此ナレバ潰レ金餘多ク、困窮年ト共ニ甚シク、危亡ヲ待ノミニテ、經濟ノ直ル手段更ニ見ヘズ、サシカヽリタル入用ハ、當分借銀ニテモ塞ガネハナラヌコトナレドモ、是ニ付テモ夜ヲ日ニ繼デ永久ノ計ヲ思フベキニ、左ハ無テ虛言八百デ金ヲ借リ出シテ、眼前ヲスマスノ此外ナシト

クコトハ肝要ノコト也、諸役人モ佛ニ惑ハヌ者百ニ一二モナケレバ、浮屠ノ言必用ラル、堂塔ノ建立物ヲ寄附シ、祠堂銀ヲ付、祈禱ヲ賴ミ、佛事作善ヲスル類家產ヲ傾ケテ是ヲナシ、家國ヲ有ツ者是ニ惑ヘバ、浮屠ヲ奉ズル所ノ費行々ハ暴歛苛政ヲナシ、民ヲ疚シムルニ至ルヲモカマハズ、可レ憂コト也、今開國以來ノ例ニナリタルヿハ、力ニ不レ及コトナレドモ、中比ヨリ新規ノ寺社ノ心遣ヒナド初リタルハ、斟酌シテ省キタシ、彼等ノ財用民力ヲ費ス願ヒスヂナド、一切ニ裁割シテ是ヲ不レ聽バ、其益モ少ナカラザルヿトミヘタリ

山澤

山澤ハ天地ノ寶藏ナレバ、取レ之ニ品節ヲシテ伐リ荒サヌ樣ニ有タキ也、山ヲ開キ新地ヲ作リ、薪炭ノ所ヲ新ニ許ス類、其爲ニ妄ニ山ヲ禿ニスレバ、土砂下リテ川淺クナリ、山ニ水ヲ貯ヘザル故夕立ノ雨ナク、其害莫大也ト古人モ論ゼリ、世俗ノ吏遠キ慮ナク、眼前ノ功ヲ貪ル故、色々ノコトヲ御益ト稱シテ言タテ山澤ヲ開キ、山師ナドニ誑カサル丶類マ丶アリ、新田ナドハ得ルヿ不レ償レ失者ト見ヘタリ、如レ此ノコトニカ丶リテ後悔アルコト多シ、國家貧困ノ時其虛ニ乘ジテ利益ノコトヲ建言スル者必アリ、其所言ハ俗諺ニ濡手ニ粟ヲツカムト云如ク、人ノ飛カ丶ル程ノ利ヲ言ヒ立ル者也、如レ此ノ輩ニ不レ惑樣ニ爲政者尤心得有ベキコト也、サテ又山澤ノ稅多ハ懸硯銀トナル、是實藏ヲ私ニスルニテ道理ニ叶ズ、然レドモ今向々國家ノ儲蓄ト云者ナケレバ、是ヲ引分テ置モ可也、是ヲ國家ノ爲ト思ヒテ、

兵農分レテヨリ冗食甚ダ多クナリ、今ニテハ民ノ膏腴ヲ竭ス者ハ士也、能其職分ヲ思ヒ驕逸ナラズ、餘ノ三ヲ正ス様ニアルベキコト第一義也、下ノ風俗ノ善惡モ皆上ヨリ出デ、家中ノマネヲスル故、下ノ惡キハ皆上ノ惡キナレバ、餘所ノコトト思フベカラズ、農ハ本業ヲ專ニスベキコト勿論ナルニ、今ノ鄉村ニ百姓ト云者少ナク、何某殿ノ組何某殿ノ家來被官ト稱スルモ多シ、被官ナドハ主人ノ用ニモ立ズ、名ヲ假テ村里ニ臂ヲ張ノミ、百姓ノ賤キコトニ思ヒ、如シ此農業ヲ專ニスル者ヲ賞翫アリテ、如レ此ノ風ヲ改メ質樸ノ俗ニ返シタキ者也、工商モ人ノ好ミニツレテ智力ヲ用ユル者也、近世屋作器物等ノ奢ヲ好ム風ニナレバ、夫ニ應ジテ淫巧ヲ務メテ利ヲ得ントス、商人ノ貨物モ風俗ニツレテ行ハルレドモ、商人ヨリ奢ヲ誘フコトモアリ、是ラハ上ヨリ心ヲ付ラレタキコト也、近頃ハ都ノハヤリナド云テ、器物・衣服・椀・家具・模樣・織物・履物・女ノ櫛・笄ノ類ニ至ルマデ、無用ノ飾ヲナシテ取アツカフコトヲ禁ナキ故、人々是ヲ珍シガリ格別奢靡ニナリタリ、干菓子ナドマデモ近頃工緻ニナル、價モ夫ダケ貴シ、古ハ不レ鬻ニ熟食一ト云リ、本藩ノ人ヲバ諸國ヨリハクヒタハシト云、誠ニ町々驛々ニ煮賣・餅・酒・肴・饅頭ナド續キ渡リテアルハ、諸國ニ類ヒナキコトトゾ、是ヲ以テ饑ヲ凌グニテモナシ、慰ニ是ヲ食フ、其費幾バクト云コトヲ知ズ、如レ此ノ習俗改メタキコト也、是ハ四民ノ中ノ弊也、此外ニ大ナル遊民ハ出家也、其類山伏虛無僧ナド云樣々ノ者アリ、無賴ノ者多ク集レリ、皆民ヲ惑ハシ米錢ヲ取、今ハ佛法ヲ海內ノ政ニ取用ヒラレタル故、諸侯ノ力ニテハ禁絕センコト難ケレドモ、民ノ惑ヲ解

擧アリテ、其時ニ臨ミ是ヲ憂テモ、タトヒ金銀ハ有リナガラモ、隣國モ津留嚴シキ故、米穀ヲ得ベキ所ナシ、手ヲ拱テ死ルノミ、民ノ父母タル者至痛至切ノ憂トスベキコトアレドモ、翌年ヨリハ諸役人ノ心是ヲ忘タルガ如シ、此體ニテハ凶年緩急共ニ何ヲ以テカ是ニ應ゼンヤ、可レ歎コトドモ也、民食ヲ備ルノ道ハ、今ノ上下ノ妄費ヲ省キテ、籾ニテ少ヅヽナリトモ郷倉ニ積置、毎年積カヘ積カヘシテ置足シ、或ハ麥出來タル時、麥ニ積カヘテモ善カラン、籾ハ何年置テモ損ゼヌ者也、今一年送リニスリテミレバ、少々減ズルトテ役人ナド費ノコトトモ思ヘリ、去ナガラ耗ハ僅ノコト也、凶年ハ少々ノ穀ニテモ、草木ノ葉ナド加ヘテ食スレバ、多クノ人命ヲ助クベシ、凶年ナラズトモ、秋ニナリ倒百姓ヲ見繼ギ、其益大ナルコトナレバ、民ヲ憂フル心切ナラバ、少ヅヽノ儲出來ヌコト有ベカラズ、サテ朱子社倉ノ法ハ、今モ何トゾ行ヒタキコト也、此法モヨキ人ニ任ゼザレバ弊ヲ生ズ、志アル才アル者ニ命ジテ、試ニ一二村ニナリトモ、是ヲ手本ニシテ諸村ニ推行フベシ、是ハ萬世ノ良法ナレバ、志アル人ハ立置タキコト也、諸侯逐年困窮シテ、明年ノ作毛ヲ今年ヨリ指シテ金ヲ借リ遣フ位ナレバ、餘計トテハ無レドモ、是ハ格別ノコトナレバ、懸硯ヨリモ出シ、民ノ妄費ヨリツヾメテ是ヲ蓄ヘ、又ハ豪富ナドニ喩シテ本ヲ出サシメ、社倉法ノ如ク數年ノ後ハ其本ヲバ返スベシ、是ヲ外ノ用ニナドスル時ハ、忽此法廢スベシ、慥ナル仕方アルベキ也

四民

子孫ノ賢否ヲ不レ論シテ傳襲スル故、上ノ倉廩采邑有レ限バ、存分ニ人ヲ扶助スルコト不レ叶、然レバ新ニ増祿取立ノ者ニハ、是マデノ法ヨリ模樣ヲカヘタキ者也、是至テ大事ノ儀ナレバ、容易ニ下レ手ベカラズ、能人情時勢ヲ考フベシ、タトヒ此事ニハ及バズトモ、隊長ナド常ニ心ヲヨセテ、都合ヲ考ヘテ油斷セザル仕方アラバ、彼善ニ於此一トイフベキカ

兵役

宋時兵役トハ、今ノ使番手男ナドノ如キ諸役所ニ召仕フ者兵士ヲ用ヒタリ、是ニ利害アルコトナリキ、今モ兵農分レタレバ、給人ニ付テ論ズベシ、治世久ク武士驕惰ニナリテ、其職ヲ忘レ易ク、又生計ニ詰リテ、職事ニ及ビ難キ者アリ、自然ノ變アリテモ、今ノ武士饑渴寒暑ニ堪ズ、身脆弱ニシテ用ニ立者少カラン、列侯ノ下ニモ郷士ナドアル所農兵ニ近シ、今給人小身ニテ耕作商賣ナラヌ故、世ヲ渡ルベキ樣ナク、法ヲ犯スニ至ルモアリ、切米代地采邑ナド耕シテ、今ノ赤司一黨ノ如クナシタキ者也、然シ郷内ニ居ル給人ハ、必驕恣ニシテ村ノ妨ニナル者也、被官カケタル程ノ者ニテモ百姓ヲ淩グ風アリ、サレバ給人ノ耕作スルニハ、今ノ莊屋ノ如ニ勢輕クテハ手ニ餘ルベシ、屹ト其上ヲ抑ユル人ヲ置ベキ也、俄ニ如レ此スルコトハ難ケレドモ、歸農ノ意ハ有タキ者也

民食

古ハ民有ニ九年之食一ト云リ、今時ハ其年ノ饑ヲ免ザル體也、如レ此ノ備ナキコト故、近年ノ飢饉ニ流

ダシキコト也、死喪ノ時モ數日飲食ヲ貪リ、其外淫祠胡神ニ金穀ヲ抛チ、或ハ參宮彥山詣ナド我モ〳〵ト思ヒ立、錢ヲヌキテ僧巫ニ與フルコト、年貢ヨリモ嚴也、積重リテ家產ヲ破レドモ察セズ、遊惰淫肆ノ媒チトナルコト多シ、今日本ノ大法佛法ヲ用ヒテアレバ、諸侯ノ力ニテ此ヲ禁ズルコトハ難シトイヘドモ、如レ此ノ弊アルコトハ改メ樣アルベシ、郷黨ニ盜人ノ宿、博奕ノ座親ナドスル者ノ吟味强クバ、奸民容ル所ナカルベキニ、良民ハ弱ク奸民ハ强クシテ、良民却テ凌轢セラル、豈能惡ヲ制スルコトヲ得ンヤ、サテ又目明シナド云モノ郷村ニアレドモ、多クハ是モ奸民ニテ、上ノ權ヲ借リテ惡事ヲソヽナカシ、ユスリスル類マヽ有リ、是ニテ惡ヲ禁ズルハ、血ヲ以テ血ヲ洗フニ似タルコトアリ、是等良有司ノ心ヲ留ベキコト也

貢士

我邦武將ノ世トナリテヨリ、選擧ノ路塞リ、殊ニ吾藩ノ如キハ、世祿ノ弊アルヲ免レズ、有二祿位一者ハ怠リ、無二祿位一ハ不勤ニ、士氣不レ振、風俗衰ヘ易キハ多クハ此故也、近年列國學校ノ設アレドモ、貢士ノ法立ズ、隣藩ナドニハ少ハ其意ヲ行モアリト聞ユ、今如レ此ナリタル時弊ヲ遽ニ改ルコトハ、中中難キコトニテ、人情ノ大ニ驚ク所ナレドモ、古今ノ法ヲ斟酌シテ、今ヨリ勝ル仕方ハアルベキコト也、人ノ才否勤怠ヲ差別モナク、一槪ニ位牌知行ヲ與ヘテ、是ヲ摩勵スル處置ナキハ拙シト云ベシ、極不肖ナル者ニハ休息出米ヲ上サセテ、幕府ノ小普請金ノ樣ナル法アルベシ、一度賜リタル俸祿ハ、

一家皆非人乞食ニナリテ溝壑ニ轉ズルニ至ル、可レ哀コトナラズヤ、サテ其田地表向キハ佃戸ノ名前ニシテ、汙萊トナルコト多シ、是故何トゾ百姓ノ持ベキ田地ヲ定メテ、兼幷家ニ渡サヌ樣ニスルガ經界ノ法也、然ラバ此兼幷家ヲ打潰シ、佃戸ニ作料ヲ與ヘタラバ、其害ヲ免ルベキ樣ニ見ユレドモ、其通ニハ行ハレヌ也、ワケハ如レ右、窮シタル百姓共一人二人ニアラネバ、十分滿チ足ル樣ニハ、上ヨリノ合力モ手ニ及ズ、大概ニ作料ナド與ヘタリトモ、田地家財農具牛馬衣食皆持ヌ者ドモナレバ、自ラ立コト不レ叶、又々兼幷家ニ往テ、憐ヲ乞スガリテ世ヲ渡ル外ナシ、此弊ヲ急ニハ改難シ、鄕村ノ吏莊屋村役ナドニ其人ヲ得テ、此弊ヲ改ルノ主意ヲ深ク申含メ、弱ヲ扶ケ强ヲ抑ヘ、漸々ニ佃戸減少スル樣ニ心遣フナラバ、其効アルベキカ、年貢取立ノ時ハ其方バカリ火急ニシテ、自然遲滯スレバ、役人村役莊屋モ罪ヲ得ル故、眼前ノ責ヲ塞グバカリニ心ヲ取レ、潰ル、民ヲ顧ニ不レ暇、可レ歎コトナラズヤ、是余所ニ傳聞ヲ記スノミ、利害猶多カルベシ、有司ニ問ヒ給フベキコト也

鄕黨

鄕黨疾病死喪患難ノ時頼シク相扶ケ、善ヲ勸メ惡ヲ戒ムベシ、世教衰ヘテヨリ鄕伍ノ間ニ弊病多ク、風俗頽ル、租吉凶ノ品節ヲナシテ、此風ヲ引直スベキコト也、處ニヨリテ今民間婚嫁ナドノ時節、隣伍ヨリ酒肴ヲ送リ、嫁聞キナドスルニ、飲潰シ食潰シ、過分ノコト也、自然馳走セザルナド云トキハ、若キ者共ワヤクヲナシ、或ハ其所ニ居住モ成ヌニ至ル、其大費ヲ恐レテ怨女曠夫アル程ノ儀ニテ、甚

モ增ナリ、事益多ク費モ廣シ、互ニ事ヲ推歸スルノ害モアリ、「興ニ一利ニ不レ如レ除ニ一害ニ、增ニ一事ニ不レ如レ省ニ一事ニ」トカ云リ、役人ノ增添ハ好マシカラヌコト也、何故ニ以前ヨリ事多クナリタルト能考ヘ、不レ得レ已バ增タル分ニテモ置ベシ、不レ然バ無用ノ事ヲ省キテ、役人ノ多カラヌ樣ニスベキコト也、役人立テアル間ハ、無用ト云ベキコト無キ樣ナレドモ、能大體ヲ考ヘミレバ、除ベキモアル也、然レドモ增ハ易ク、減ハ難シ、或ハ從レ致者人情ナドニ拘リテ、冗員ヲ其儘ニ置モアリ、是ハ懦弱ノ至リ也、然レドモ無理ニ減ジタル事ノ害アルコトナリ、能ク事實ヲ考ベキコトナリ

經界

「仁政必自ニ經界ニ始」トアレバ、至要ナルコト也、古井田ノ法アリテ、百姓一家百畝ヅヽ受ルノ定アリ、其外限田ノ法モアリ、夫デサヘ經界崩レ易シ、今ハ構ナシナレバ、其害多キハヅノコト也、凡百姓ハ面々田地ヲ持、面々ニ竈ヲ立、丈夫ナルヲ善トス、然ルニ百姓困窮スレバ、年貢モ納ルコトナラズ、田ヲ作ルコト不レ能、故ニ米三斗ニ一斗ヅヽ利ノ付米ヲ借リ、益窮スレバ田地ヲ人ニ賣渡シ、倒レ百姓トナリ、豪富ノ者ニ打カヽリテ露命ヲツナグ、是ヲ佃戸ト云、豪富ノ者ハ村方ニテ錢穀ヲ借シ、重キ利ヲ得、田地ヲ買ヒ集メテ百姓五軒モ十軒モノ前ヲ持、是ヲ下地ニシテ右ノ倒レ百姓ヲ吾奴僕トシタリ、年々作德ヲ得テ益富ム、是ヲ兼并ノ家ト云、凶年ナドニ凍餒離散スル者多ハ佃戸ナリ、サテ上ヨリ救米介抱ナド有テモ、兼并ノ家ニ落テ、佃戸ニハ及ビ難シ、夫故ニ豐凶共ニ佃戸ハ困窮スル也、後ニハ

リ、人主ノ心持僅ノ善惡ニテ、下ノ爲ニナルコト不爲ニナルコト、莫大ナルコトハ言ニ及バズ、是ヲヨク開發誘進スル人無テハ、志ハ善テモ氣付ズシテ惡クナルコトアリ、大事ノコトナラズヤ、日本ハ別シテ諫爭ノ風ハヤラズ、言路常ニ塞リ、下情上通セズ、是學問ノ道明カナラヌ故也、年來ノ弊ヲ去リ、國家ヲ中興スル君ハ、第一ニ衆人ノ智ヲ集ズシテナラズ、然レバ言路ヲ開ヨリ急ナルハナシ、大夫以下ノ要職侍御ノ人ハ勿論、非ニ其人ニヲ用ユベカラズ、是ヲ用ユルカラニハ、皆々存分ヲ殘サズシテ君德ヲ輔ケ、壅蔽ナキ樣ニスベシ、上ニ實ニ善言ヲ好ムノ心有バ、善言自ラ至ルコト疑ナシ、受言ノ道獨其職ニアル者ニ限ラズ、老年又ハ事ニ功者ナル者ヲ閑暇ノ時ニ咄相手ニ召テ、大小ノ事ヲ訪問シ、其善ヲ取コト人主タル人ノ樂ミナルベシ、其言ヲ能考テ、其人ノ邪正才否モ猶又知ラレン、是自ヲ師ヲ得ノ道也、別シテ國相ヲ初侍臣ノ長、侍讀ノ者ナドマデ、遠慮ナク事ヲ論ズル樣ニ有タキコト也、其中ニモ自然奸佞ノ人有テ、邪說ヲ進ルノ憂アラバ、能其實ヲ考ヘ取舍ヲナスコト言ニ及バズ、黜斥モアルベシ、夫ヲ恐レテ言路ヲ塞ベカラズ

六　官

六官ハ周禮ニアル天地四時ノ官也、歷代官制各異ナレドモ皆六官ノ意也、今祖宗ノ制有テ、時處不同ハ必シモ周禮ノ通ニ備ルニ及バズ、政事モ時勢ニ因テ繁簡アリ、役人モ夫ニ隨ヒ增減セル也、トカク前方ヨリハ事多ク、役人モソレニ隨ヒ增スコト世ノ常勢也、上ニ職員ヲ增セバ、ソレダケ胥徒マデ

十事解

精里　古賀樸著

師傅

凡人師友ナクシテ能成立スル者ナシ、別テ人ノ上ニ立チ、治國安民ノ責アル人、其職重大ナレバ、一己ノ私智ニ任ジテハ、中々一事モ行フコトナルベカラズ、然ルニ近世敎學ノ道明ナラズ、下ハ士タル位ノ者ヨリシテ、手習學問ハ幼稚ノ仕事ト覺エ、前髮ヲ取ル頃ヨリハ、道ヲ問惑ヲ解ノ師友ナシ、國君卿大夫ハ猶更也、下賤ノ者ハ今日ノ勢ニ押レ、我儘ヲ云テハ人ノ合點セヌ故、愼ノ心自然ト少シハアレドモ、國君卿大夫ナド、上ハ上程頭ヲ抑ル者ナク、私意ヲハタラク故、國家ノ事ニ臨デ善狀鮮キハズノコト也、今ノ侍讀侍講ナド師傅ノ類ト見ユレドモ、儒學者大方卑賤ニシテ政事ニ預ラズ、進見モ稀ナレバ、タトヒ有德有志デモ實益アルコト難シ、況ヤ奔走卑屈講釋詩文ノ相手等ニ手數バカリニ勤ル者ヲヤ、大夫ハ國家ヲ荷フ職ナレドモ、多クハ日々受持ノ役ノ分サヘ申遂ルコト難キ樣ニ見ユ、然レバ敎訓ニ導キ德義ヲ附益スルコト愈難カルベシ、人主ノ肝要トスルコトハ能人ノ諫爭ヲ受ルニア

十事解

樸爲ニ蓮池侯一、講ニ近思錄一、要ニ程子論十事略一、及レ所ニ以施ニ之於今一、俾レ令下書ニ其說一、以備中觀省上、故有ニ是著一、譬ニ諸水一、然程子所レ論其委也、道學知行其原也、水發ニ於源一焉、然後灌注停蓄、滋ニ潤品物一、終古不レ竭、不レ然則兩集ニ溝澮一、涸可ニ立待一、世之論者、或舍レ原而求レ委、規ニ規於事一爲ニ之末一、不レ流ニ於權謀功利之陋一者幾希、可レ不レ戒哉

寬政紀元臘月　古賀樸識

十事解

古賀樸著

やがて謄て浄寫せしむ、輔も又封事を奉て乙覽に備へぬ、事の始末を書付て子孫に遺すと云

安政卯のとし皐月の八日

若林輔識

には火付切剝をも仕候様に相成行申候て、江戸にて御詮議の嚴敷御座候時分は、彼田舍の盜頭など申者の方へ逃行申候間、當分は盜賊無レ之様に相見得申候へども、又御詮議のゆるみ鳴りも靜り申候得ば、直に罷出惡事を仕候間、幾等火あぶり被二仰付一候ても火付絕不レ申候、幾等打首被二仰付一候ても盜賊絕不レ申候、此本を御正し被レ遊候には、人別帳と道切手とを急度御正し被レ成、世界の人に來歷を付、自由を働せ不レ申候様に被二仰付一候て其上にて十家牌と申物を御行ひ被レ遊候はゞ、盜賊は少く相成可レ申と奉レ存候、人別帳道切手只今に御座候得ども、只今の通りにては何の用にも相違不レ申候、此致方荻生惣右衛門と申者の政談と申書に書記し御坐候、大體惣右衛門申候通りにて宜敷可レ有二御座一と奉レ存候、倘又御評議之上にて可レ被二仰付一候、十家牌の事は、王陽明文集と申書に書記し御座候、御詮議被二仰付一候得ば相知れ申候間、此所に不二申上一候昔は吉野・熊野等の深山幽谷を盜賊の巣と申候が、近來は右人別帳道切手妄に相成申候故、江戸大坂幷所々御代官領が盜賊の巣に相成申候、何卒右の三法を御行へ被レ遊候はゞ、設令盜賊のひしと絕ゆると申事は無二御座一候とも、先御城下幷田舍にても平人に雜り住居仕候事相成不レ申様に罷成申候て、大形ならず天下の御爲、萬民のために相成可レ申と奉レ存候

抑此一部はある日御膳に侍べりし時、さきつ頃御覽を奉りし山本元七郎が獻策を見たまひしに、議論正大にして權貴の忌諱を恐れず、世間稀有の直諫ぞかし、そのかみ柴野彥輔が上書の類なりと仰有ける、精里古賀彌助の時事を論ぜし封事は家に藏侍れど、上書はいまだ見及侍らずと存奉れば君上御笑ありて、其封事はしらず、いざ交易して見んと仰有て、御傍近き御小性して上書をかし給はり、

民の難儀に相成申候事に御座候、勿論嚴敷御仕置被ㇾ仰付ㇾ候はゞ、是亦相著候以後御仕置被ㇾ仰付ㇾ候のみにて、初より盗賊無ㇾ御座ㇾ候様に御取扱之御政道は無ㇾ御座ㇾ候、惣じて何事も本を正し不ㇾ申候ては、末よりは直り不ㇾ申物にて御座候、只今盗賊の本と申候は、世界に紛者多く、人に來歴と申事無ㇾ御座ㇾ候故にて、只今は江戸にて人を殺し金銀を取、大坂へ共、京都へ共、長崎へ共、其外田舍へ共罷越、町人に相成候共、又は浪人を相立候共、五日十日逗留可ㇾ仕も、一年半年又は一生暮し可ㇾ申も勝手次第にて、何の證文切手も持不ㇾ申者にても、誰咎め申者も無ㇾ御座ㇾ候故、輕きもの丶愚なる了簡は、江戸にて仕くじり申候はゞ大坂へ參り可ㇾ申、大坂にて惡事著れ申候はゞ田舍へ缺落可ㇾ仕と相心得、貧苦につめられ、惡性にくらまされ、先一日の隱れ處御座候得ば、是にて一生濟と存、石川五右衛門

[illegible]一度は大事か、[illegible]落行と申如く、[illegible]

儀へ申出候得ば、殊の外物入御座候故、御上へも訴出不ㇾ申候、惣て百姓は前にも申上候通り、物事御公儀へ訴出申候得ば、過分の失却仕候間、身にかゝり合事にても、大體は堪忍仕居申候事多御座候、上州邊御旗本の知行處にて、百姓の家へ夜分盗賊一人踏込金子を無心申懸候所、折節近所の浪人共參り合せ居申候て直に引縛申候、御公儀へ奉ㇾ訴候得ば、過分物入も御座候故、少々金子を遣し追放し可ㇾ申候と申評議に仕候所、盗賊の事にて御坐候間、只追放し金子を遣し候には及申間敷旨に御坐候へども、重て其盗賊御公儀へ召取られ御詮議に相成候節、何某方にてとらへられ候得ども、內證にて追放され申候抔白狀仕候へは、其追放し候者は御詮議に相成、御科被㆓仰付㆒候間、其口をとめ可ㇾ申ため、却て盗人に金子を遣し、穩便を取申事にて御座候近所のもの最早聞付候て大勢かけ付候間、穩便に內證にて濟し申候事も相成不ㇾ申、是非なく申出候處、其入用七十兩餘り失却仕、夫にて其百姓身體をつぶし申候由、大抵左樣の事御座候ては、其盗人に金子の五六兩遣し申候て追放し申候得ば夫切にて相濟、御公儀へ訴出候よりは却て物入も無㆓御座㆒候故、少々の盗賊橫領に逢候ても、內證にて相濟し申事多御座候、まして身に懸り合ひ申事は可㆓申出㆒樣も無㆓御座㆒候、御代官抔は前々申上候通り、只年貢の取立計御役儀の樣覺居り申候間、是亦其處にて惡事を致し不ㇾ申候得ば、御吟味も無㆓御座㆒候故、右の盗賊頭とも絕不ㇾ申候、農業も商賣も不ㇾ仕、只人の金銀を掠取、一生無事安樂に送り、何御咎めも無㆓御座㆒候者處々に御座候よし承及申候、此者自親手を下し盗賊火付は不ㇾ仕候へども、其手下の者八方へ打散、人家の財寶をかすめ取、旅人を脅かし、火付を仕、萬民を惱し申候得ば、畢竟自親手を下し惡事を仕候よりは其惡逆百倍增に御座候、其上世上豐にて殘物も澤山御座候節は、又御上の御威光を

ば、様々には下の上を輕しめ申候端になり、大に天下御政道の邪魔に相成可レ申と奉レ存候、只今御威勢かくばかり御盛にても、五十萬石百萬石の大名どもちくとも御働き不レ被レ成候御事にても、少々小盗人御座候て、御政道の御邪魔可レ仕など申候は、近頃おかしき事の様に御座候得ども、古より天下の亂日を考へ見申候に、多くは强賊より事起り申候、夫故唐土にても、日本の古王代にても、强賊と申科は十惡の内に入候て、謀叛人と同罪に申付候事に御座候、先達て御仕置被レ仰付レ候日本左衛門抔之類申類の强盗、只今にても田舍には所々に御座候て、平生手下の者へ恩澤を施し、金銀を遣し置候故能實大勢有レ之、互に其内にて義理を立合、命を捨て合申候て、一頭には五百人も七百人も御座候由承及申候、ケ様の者は面向は一通り百姓町人の様に仕居申候、手下の者を能所へ働に遣し、其上米を取集にて渡世仕居申候、其所の者は其事を能存居申候へば、其一郡一村の内にては盗難を不仕、其上[illegible]

り候ても、名譽に疵の付たるは不㆑仕、如　仕、如何成御仕置に被㆓仰付㆒候ても、名譽の顯れ候事は搆ひ不㆑申、夫故軍中にても第一御法度の拔がけを仕[illegible]を仕、跡にて重き御仕置に被㆓仰付㆒候をも顧み不㆑申候、治世も軍國も御上へ御奉公仕、功業を天下に相立候不立候は同じ事にて御座候、天下を御治め被㆑遊候には、此人の名譽を惜み申候心を御そだて被㆑成候が第一の〳〵の事に奉㆑存候、人々名をだに惜み申候へば、上へ不忠は不㆑仕ものにて御座候、夫故唐土にては史館とと申ものを立置、大身の者の傳記をこしらへ、其者の一生の善惡邪正を記し置、後代へ傳へ申候て、名譽を以人を勵し申候間、人心引立候て人々名を惜み申候故、當分の利祿にひかれ不㆑申、天下に大功を立候人大勢御座候（日本にても王代は不㆓申及㆒、鎌倉時分も記錄所御座候、只今世上に御座候東鑑と申書鎌倉の日記にて御座候）何卒只今も御記錄所を御立被㆑遊候て、御老中・御若年寄・其外大身の御役人衆の傳記を書記し、或は何某と申御老中は是々の事を申上、殊の外天下の御爲に相成、何某と申御若年寄は、何の事を仕り萬代の爲に相成候、何某は律義に御役相勤、何某は私欲仕、上へ不忠の御座候抔一々に書記し、後代へ傳申候樣被㆓仰付㆒候はゞ、御役人衆も御先代の御役人衆の善き人の名譽の後代にあらはれ候を羨敷ぞんじ、惡き人の惡名の後代にあらはれ候をうとましく存、人々後代への聞得を憚り、殊の外引立候て御奉公大事に仕、私欲惡事不㆑仕候樣に相成可㆑申と奉㆑存候、「孔子作㆓春秋㆒、亂臣賊子畏」と申候も此事にて、孔子の春秋と申記錄を作りたまひ、亂臣賊子の惡事一々書きたまひしより以後は、亂臣賊子共惡事は後世にあり〳〵と相知れ申候事を耻敷ぞんじ、惡事を不㆑仕と申事にて御座候（其上是のみに無㆓御坐㆒御代々御明君樣方の御

此以後の御政務被ニ仰出一等も、一々相記し被ニ指置一候樣に被ニ仰付一候はゞ、此以後如何樣の事御座候ても、下へ御尋ね被レ成候にも及不レ申、下より上を欺き申事も相成不レ申、御代々の御先格其掌を指すが如く相知れ、御用も御差支御座有間敷と奉レ存候、扨又人を引上げ勵し申候は、名譽と申物が却て賞爵よりは人の心を勵し候ものにて御座候、武士の命を拋候て引けを取申間敷と切ッ刃を廻し爭ひ申候は、畢竟後代世間への聞得を憚り申候故にて御座候、然らば名譽と申物は一命を替へ可レ申程の大事に存込候人心に御座候、若林靖亭曰、人貴ニ名節一、不レ失ニ廉恥之心一、不レ失ニ廉恥之心一、所不レ陷ニ不義一、所謂君子疾ニ沒レ世而名不一レ稱矣、是也然處只今御上へ何程の御奉公を相勤め、天下に何程の功業を相立候ても、當日御褒美被レ下候のみにて御記錄無ニ御座一候故、後代へ美名顯し不レ申、何程の惡事卑怯を仕候ても、當分御仕置被ニ仰付一候のみにて御記錄無ニ御座一候故、後代へ惡名顯し不レ申、夫故少々氣先志御座候て、御上へ諂込御奉公仕、天下に功業手柄を相立、名を後代へ顯し可レ申と奉レ存候者も、先目前御首尾よく樂みくらし候得ばよきは、如何樣の功業相立候とて御記錄はなし、名の後代へ傳る事のなきを存じ、人心寐入不レ申樣に存候が肝要にて御座候、人心寐入申候得ば、何事も先當分どうなり共申て渡と申懦弱の心出來申候て、天下の事次第に崩れ行申候物に御座候、人の心を引立候には、平人は賞爵にて參り申候へ共、少しも志御座候者は、名譽と申物にて無ニ御座一候ては參り不レ申候、惣て罪を恐れて惡事を不レ仕、賞を悅びて善を仕候と申は平人の事にて、少しも志御座候者は、當分の御賞爵は何共不レ存、只後代への聞得を憚り申候間、當時如何成御褒美に預

一　御當代に御記錄所と申物無ニ御座一候故、一ッの御損御座候、先第一御政務の古格と申物知れかね申候、第二には御役人中名書を顧み不ㇾ申、御政務の古格相知れ不ㇾ申候故、何事を被ニ仰付一候も皆下へ古格を御尋被ㇾ成、下より申出次第被ニ仰付一候、是は下より御政務に御指圖を仕候も同じ事にて、御上へ御取捌に無ㇾ之と申樣なる物に奉ㇾ存候、其上下より申出候事は身勝手に取成、跡もなき事を古格に引立可ㇾ申も相知れ不ㇾ申候、左樣仕候ても上に慥に御記錄無ニ御座一候得ば、御詮議可ㇾ被ㇾ成樣も無ニ御座一候、先年台德院樣御遠忌の時分、寺社奉行より增上寺へ御規式委細書付可ニ差出一旨被ニ仰渡一候所、增上寺にて久敷御法事無ニ御座一候、出家の行者のと申候者は段々かはり、書記は無ニ御座一候、御規式も古格も覺存候ものも無ニ御座一候處、其行者と申候者は妻帶にて御座候者故、少は申傳書傳の物も御座候て、夫々本に仕色々虛僞を付添候て書出し、夫にて御用相調候と申事を、增上寺の內証をよくぞんじ候もの物語り仕候て笑ひ申候由、荻生惣右衞門政談と申書に書記し申候て御座候、ヶ樣の事は輕き事の樣に御座候得共、下の者上を見すかし申候端にて、甚天下の御大事に預り申候事に御座候、惣て上の事は何事も下よりは奥深く計られ不ㇾ申樣無ニ御座一候ては、天下治り不ㇾ申候、只今は人々只御役人衆の手つりをよく仕、古格をだによき加減に書繕ひ差出申候得ば、いつも其通りに被ニ仰付一候と相心得、上を手握りに仕居申候、何卒是を急度御記錄所を御立被ㇾ成、其懸り〳〵を別々に被ニ仰付一、或は御政務懸り、御規式掛り寺社係り抔申樣に夫々被ニ仰付一、權現樣以來の御先格をも御詮議被ニ仰付一、

老中の宅にて、一度も見も逢も不ㇾ仕もの五十人も百人も召集められ、只男振・立居・振舞・言語・應對の御見分御座候のみにて、外に何の御吟味も無二御座一候、惣て人の器量・才覺・人柄と申物、男振・立居・振舞にても相知れ不ㇾ申物に御座候、近く太閤の勢少さく、赤面にて猿眼に御座候、甲斐信玄の軍師山本勘助は、片目の上跛にて御座候、晉の鄧艾と申大將は吃にて御座候、唐の李克用と申者は片目にて御座候、皆大器量の大將にて御座候、天下著數大功業を立申候、若只今の御時節に生れ逢申候はゞ、御番入も得仕間敷候、何卒此以後御役人・御小性・御小納戸等の御吟味にも、一通り對客樣の御見分迄に無二御座一候て、兼てより其組々の頭分へも御尋被ㇾ成、其平生の人柄並藝術等篤と御吟味被ㇾ成、又前に申上候頭分の者より書出し申候ものを、尚又御老中御逢被ㇾ成、御見分の上にて被二仰付一候樣相成申候はゞ、御旗本の面々は立身の種は、御役向對客より手前〳〵の身持藝術を嗜申候が早きと合點仕候て、上より不ㇾ被二仰付一候ても、我がちに學文等も勵み、人柄相慎み可ㇾ申と奉ㇾ存候、右の如く御政道被二仰出一候て、其上にて格別人柄の衆に勝れて忠孝を存じ候者は、又格別御役をも格式をも被二仰付一、又矢張人柄不埒にて仲間頭等の異見をも用ひ不ㇾ申者は、急度御仕置をも被二仰出一候はゞ、御旗本の面々目をさまし急度心附、人物藝術相はげみ、風儀宜敷相成可ㇾ申と奉ㇾ存候、兼て政と申物は人に目を覺させ候樣に致候が肝要にて御座候、人に目を醒させ候は賞罰の二ッにて無二御座一候ては參り不ㇾ申、一人を賞して天下悦び、一人を罰して天下恐と申は、天下に目をさまさせ申候事に御座候

間も御極被ㇾ成、又は昌平坂聖堂又御番頭の宅等にて、四書・小學等の講釋被二仰付一、御城内勤の衆は
御城内の講釋を承り、御番衆・小普請等の者は頭の宅講釋承り、其外此中にもれ候者は昌平坂聖堂へ參
り、講釋承り申候樣に被二仰出一候はゞ、先一通り御旗本の面々忠孝の有増をも呑込可ㇾ申と奉ㇾ存候、
扨又只今頭分の者組子へ殊の外踈遠にて、只權高に顔に苦みをはしらかし候て、下より物の申出惡き
樣に仕かけ候計を御役の樣に覺へ居申候、惣じて頭役の者は上より其組子を御預け被ㇾ成、差置かれ候
者に御座候得ば、其組子のういもつらいも、善も惡も、よく御組子のそだち候て、上の御用に相立申
樣に取扱可ㇾ仕筈に御座候所、右の通りに御座候ては、上の御預け被ㇾ成候思召にも違ひ候と申物にて
御座候、此以後は頭分の者へも此わけ篤と被二仰付一、隨分組子へ親しく致し、折々は召集め、輕き料理
にても出し、忠孝の道又は武道の故實のと古き物語を咄し致し、咄させも致候て、常に其組子の人柄
をも呑込、誰々は親へ孝行、家内睦敷、家をよく治め候者、誰々は親へ不孝、博奕遊興を好み候者、
誰々は器量才覺も有ㇾ之者、誰々は律義實方の者、誰々は弓馬達者に仕候者などゝ、常々篤と存居候
て、勝れて器量才覺も御座候か、藝能達者に御座候などゝ申は上へは申出置、又人物不埒に御座候も
の、相番組頭等寄合異見も加へ、尚又改め不ㇾ申候はゞ、急度上へも申出候樣被二仰付一、右二事を推隱
し差置、外より相著候においては、其頭並組頭等平生不吟味と申、御科を蒙り候樣被二仰付一候はゞ、
頭分の者は、隨分組子を身に引かけそだて候はゞ風儀をも取直し可ㇾ申候、扨又只今御吟味と申候は御

らば只今講釋にても仕人を數へ可ㇾ申、ヶ樣成る器量の者は一人も見當り不ㇾ申、御評定所へ儒者の罷出候は、其昔林道春・春齋など博學にて、和漢の故實佛道神道までに通じ申候者故、公事訴訟御裁判の御相談の爲罷出候所、道春春齋樣の者常住は無二御座一候間、後には只目安讀の爲計に儒者ども罷出候樣に成行申候と相見得申候、目安如きのものは手代書役樣の者にても相濟申候、儒者を御出し被ㇾ成候には及申間敷と奉ㇾ存候、惣て人は使樣にてよくもあしくも相成申候物にて御座候、儒者に手代書役の仕候事を御勤させ被ㇾ成候ては學文埒明不ㇾ申候、勿論面々不嗜とは申ながら、上の御使被ㇾ遊候樣にもより候事に御座候、學文を以て上にも御奉公申上、人にも教へ可ㇾ申儒者さへ、右のごとく學文無精にて、染々御用御達候ものは無二御座一候へば、其外の者は不二申及一學文と申物は上には御嫌ひなり、必竟學文は長袖の役なり、是を致さずとても武士は相立候と心得、學文と申物すたれ果、仁義忠孝は地に落申候世の中に罷成申候、扨此風儀を引立取直し申候には、先右の儒者の内にても御吟味も被二仰付一候はゞ、二人に三人は相應によくこそ無二御座一候とも、講釋計にても仕候樣成もの可ㇾ有二御座一其上にて御旗本衆の内を御吟味被二仰付一候はゞ、是又五人も七人も書物を好み申候て、讀覺候者可ㇾ有二御座一候、扨右の十人も御座候者、兼く博學多才には、經學明白に無二御座一候とも大抵に一通り書物もよめ講釋もかなりに出來候者に御座候はゞ召出され、格別に格式も被二仰付一御城内にて一間も二

候ケ様被ニ仰付一候得ば、何を可レ申も謀レ計御座候間、御役人衆は殊の外嫌ひ可レ申事に御座候得共、天下の御爲には甚相成申候事に御座候

一　前に申上候通り、御旗本風儀惡敷御座候と申も、畢竟御教と申物は無ニ御座一候故にて御座候、只今は只惡事相著候以後に御仕置被ニ仰付一候のみにて、御教と申物は無ニ御座一候、古の人も「不レ教而殺、謂ニ之網一民」と申て、初に教へ不レ申候て、惡事を致候上にて仕置仕候が、民に網を打かけて取樣なる物なりと申て御座候、扨教と申は外の事にては無ニ御座一候、御上へ忠義を奉レ存、親へ孝行仕、妻子兄弟睦しく、中間合は親しく、身持律義に爲レ致候事に御座候、夫を爲レ致候は色々政道の致方に御座候得ども、先學文を致させ候よりよき事は無ニ御座一候、學文を爲レ致候とて、盡く書物を讀せ、詩文章を作り得させ候事には無ニ御座一候、只御旗本の面々に學文はよき物、聖人のゝたまへる事は背かれぬと思ひ込候樣に仕候事に御座候、扨其學文の通り道に引入候致方は、古へ邑の學校などを立候て、入學を致候樣も御座候得共、當時俄に本道の通りには參り申間敷候間、先御役人を初て御番衆・小普請樣の者迄も講釋を聞かせ候が、一番手短に可レ有ニ御座一と奉レ存候、講釋を聞せ候と申候ても、只今御城御月次の講釋、大學頭父子罷出相勤候樣にて、承候者も畢竟皆勤めの樣に相心得、一役一人ヅヽ、罷出列座爲レ致候までにて、講釋は何を申やら耳にも入らず、承りながら浮世の事考へ居申候樣にては、何の用にも達不レ申候、幸御儒者こそ大勢御座候得ば、是へ講釋を被ニ仰付一候樣にと申上度物に御座候得ども、只今申て御儒者の役には御評定所へ罷出、目安を讀候までにて、學文の御用には一日も不レ被ニ

の事目の先へぶらつき候ても、命がけ身體がけ無二御座一候ては、申上候事は相成不レ申候、私相考見申候に、只今此大勢の寄合・小普請・御番衆等の內には、器量才覺有レ之者も可レ有二御座一、又御役人衆の內にも、手前不得手の御役を一生不調法に相勤め、これ〱の御役を被二仰付一たらば、一角相勤可レ申者と存居申者も可レ有二御座一、又天下浪人もの世捨人の中には才德兼備り、一筋御用にも相達候賢者も智者も可レ有二御座一候所、ケ様に皆々に口をつぐませ被二指置一候は、誠に天下の御爲に口惜き事に奉レ存候、何卒此以後大名・旗本・御役人・寄合・小普請・御番衆・御家人・陪臣・浪人の差別なく、御政道の事にても、御上の御身持の事にても、文武にかゝはらずよしあし利害存付候事御座候て申上候者は、存念無レ殘可二申上一旨被二仰出一、御側衆の內にて一人取次と申御役等被二仰付一、存念無レ殘可二申上一と存候者は、皆書附を以て上書取次の人まで申出、上書取次御役人より直に上覽に備へ奉り候樣に被二仰付一、御政務の御隙に御奥儒者になり共、又は文才御座候御小性衆になりとも御讀せ被レ成、御聞被レ遊候はゞ、大勢の申上候內には、馬鹿〱敷何の御用にも相達不レ申、御笑ひ種と相成可レ申事も可レ有二御座一、又下の人情も一々上聞に達し可レ申候、申上候筋合にて、其內には御上の御益に相成申候事も多く可レ有二御座一、又申上候筋合、其人の得手・不得手・器量・才覺・善惡・邪正も相知れ可レ申、御上の御智惠をひらき、御德をみがき候事大方ならず、人君御學文の第一の御事に可レ有二御座一と奉レ存

許を申付候間、役人盡く働き者の天下の事に指扣へ無㆓御座㆒よく治り申候、人の得手を見出し候には、只ならべて座させ置候ては、百年置ても相知れ不㆑申、其者に物申させ候て見申候得ば、馬の得手は馬の事を申、弓の得手は弓の事を申、學文好は學文の咄を仕、面々得手〳〵の事是非口先に出申候物にて御座候、夫にて得手不得手を見分け候て役目を申付候事に御座候、書經に「敷奏以㆑言、明試以㆑功」と申候も此事にて、人に物を申させ見候て、申候事の理に當り候得ども、其申筋の役目に申付、其申候通りに參り申候哉、又參り不㆑申哉の處にて、人の器量を見立候事に御座候、後世にても言路を開くと申候て、下の者の上へものを申出候道筋を付置候て、下より何事によらずよしあしを申出させ候て聞たまひ、よきに隨ひ惡きを改め申候事を人君の一大事としたまひ候事に御座候、御當代程言路の塞り申候事は無㆓御座㆒候、只今寄合・小普請・御番衆等の者は如何なる大智御座候ても、一向御上へ物を申出候道筋無㆓御座㆒候、訴狀箱は御座候て申上候ても、畢竟是は町人百姓ども手前の難儀を奉㆑訴候爲の道具にて、急度致候侍を御取調被㆑成候道具には無㆓御座㆒候間、人物を嗜申者いかに申上度事御座候とも、訴狀箱へ入候事は恥辱に仕り申候間、是へは不㆓申上㆒候、扨又御役人衆も御役目に懸り合不㆑申候事は、申上候事相成不㆑申、若御役目の外の事を申上候得ば不調法に相成候、手前の職分にても無㆑之事を、御上を不㆑憚不作法に申上候抔御叱を蒙り、又浪人抔は猶以て上は遠く、別て申上候事相成不㆑申候故、器量才覺御座候て御上を大切に奉㆑存、餘り殘念に奉㆑存候者は、折々訴狀箱へも申

せて、夫を取り撰び政道に用ひ候事にて御座候、虞舜と申帝は大聖人にて御座候得ば、天下の事はしりたまはぬ事は有間敷候得ども、「好ㇾ問察二邇言一」とて、人に物を問ひたまふ事を好たまふて、手近き姥かか愚人の申事も氣を付たまひ、又「樂ㇾ取二于人一爲ㇾ善」とて、自親の智恵にてよき事をしたまふよりは、人の智恵をかりてよき事をしたまふを面白き事に思ひたまふと申事も、皆此事にて御座候、惣て歴々大名高家と申物は、結構にそだち申物にて、塵ざはり、立居振舞、挨拶向見事に御座候故、無骨なる卑賤の者に見くらべ申候得ば、誠に天地懸隔に違ひ才發と相見得申候へども、實智と申物は必しも歴々の勝れて發明にて、卑賤の者の馬鹿と申にても無二御座一候、其歴々の左様御尤の中にてそだち申候物は、多くは人情にうとく、萬に氣の付不ㇾ申物、卑賤の者は艱難にそだち、ういめにも數ヶ度合申候て、身をこなし心を砕き申物故に、古より卑賤の者に智者賢者は多き物に御座候、加之世話にも海の事は舟人に問、山の事は山人に問と申候如く、下の人情は下の者が能存居申候、歴々は随分人情に達し下の事に氣を付る人にても、一度も出會不ㇾ申候事故、先は人情下の事はうとき物に御座候、其上わき目八目と申候て、其當職の人よりよしあしは脇目より能見得候ものにて御座候間、唐にても日本の古へも上書と申事御座候て、官人にても浪人にても、下の事にても存付候事は、書付を以て上へ申出候事に御座候、且又人には得手不得手と申もの御座候て、不得手の事を致させ候ては、いつも埒明不ㇾ申、得手の事には殊の外智恵才覺働きの出候物にて御座候故、明君の人を使ひ申候事は、人々の得手の事

下沙汰に申觸し、誠に難ㇾ有御明君やと皆人感涙を流し申候所、去々年中內膳正表へ御出し、結構御役も被㆓仰付㆒候得ども、御側遠く相成候得ば、下沙汰には兎角上々様方は苦口は御嫌ひなり、內膳正表へ出るも其筈の事と申觸し候、是は輕き事に御座候得ども、甚上の御明德を損じ申候事にて御座候様奉ㇾ存候、內膳正事は親山城守仕込にて、殊の外正直者にて、御上を御大切に奉ㇾ存候、其上器量も有ㇾ之、御用にも相達可ㇾ申者にて御座候由承及申候、ヶ様の者は御側近く被㆓召使㆒殊の外御上の御爲に**も相成申候物にて御座候、勿論御側には隨分忠義を奉ㇾ存候もの幾人も可ㇾ有㆓御座㆒候、內膳正表へ御出し**被ㇾ成候も、神慮深き思召も有ㇾ之候御事に可ㇾ有㆓御座㆒候得ども、古聖君の人を役に付候には、問ㇾ衆とて下萬民に相談致し、大勢の尤と申人に申付候事に御座候、又衆のよしとする處是にしたがふと申候、只今皆人大勢內膳正は御側近く勤させ度と申合せ居申候間、何卒古の問ㇾ衆と申、從ㇾ衆と申本文にも御從ひ被ㇾ遊奥へ被㆓相返㆒御身近く召使はれ候様に被ㇾ遊候はゞ、下萬民も御明德を奉ㇾ仰、御上の御爲にも相成可ㇾ申と奉ㇾ存候、扨又人君の天職と申者は、人を御見立被ㇾ遊、御役儀を被㆓仰付㆒候が第一の事にて御座候、其人を御見立被ㇾ遊候にも、御上の上意等もかまひ不ㇾ申、あしきと存候事は存分申上候ものは忠義の者と思召、御上の御顏の色を見計らひ、左様御尤と申上候者は不忠の者と思召候はゞ、大抵違ひ無㆓御座㆒物に御座候、天下を治め申候には、如何成聖人も一人の智にては參り不ㇾ申物故、古より天下の智をかりて天下を治ると申事に御座候、天下の智を借り申候は、下の者に物をいは

べ、御耳に逆ひ申物にて御座候得ども、下の者は幼少より艱難にそだち、惨きも甘きも呑込居申候者故、五年も十年も先の事を見抜て申上候事に御座候得ば、當分は廻り遠き馬鹿らしく聞へ候得ども、行末御上の御爲天下の御爲に相成候事多きものに御座候、そこの所は明君にて無御座候ては、御聞入無之物に御座候間、古より從諫如流とて明君賢主の第一の德業に仕候、扨下の者上へ諫言を申程難きものは無御座候、世話にも諫言は一番鎗よりは仕惡しと申候、其譯は一番鎗は敵の中へ踏込、命がけの業にて御座候得ども、無事に仕おふせ申候得ば大に手柄に相成、知行高祿にも相成申候、諫言と申ものは、君主人の氣に違ひ申候得ば直に手打にも相成、仕おふせ候ても別て褒美に預り候と申事も無御座候、假令直に手打罪科に逢不申候ても、五度も十度も主人へ向ひ苦口を申候得ば、後々は主人にもいやがられ遠ざけられ候て、殊の外立身出世の爲に邪魔に相成候故、能々君を大切に存、身をわすれ候者にて無御座候ては得不申物にて御座候、假令上へ十分忠義を存し、一點も身の成行にかまひ不申候ものも、前にも申上候通り、卑賤の者の上へ物を申候には威光におされ、十が十ながら得不申物に御座候、夫故古の聖君賢主は皆諫言を仕候者へは、褒美を遣し候て諫めたて、又諫言を申者に對面致候には、態と顏色をやはらかに致し、下の者の物の申よき樣に取なし、隨分下より腹一盃物を申させる樣に致候、御上樣にも勝れて御明德にて、殊の外諫言を□□被遊、追蹤輕薄は甚だ御嫌ひ被遊、水野内膳正々直者にて御上の思召をも不顧、何事も存分に申上候によつて、殊に御意に入候由

透と御止に罷成、惇信院樣御奧儒者相勤候德力藤八郎をも表へ御出し被ㇾ遊候て、後は御奧儒者相勤候儀不ㇾ被㆓仰付㆒候故、下の者は上には御學文氣と申物は御嫌なりと相心得、御儒者共も殊の外に學文無精に罷成、今年にも朝鮮人來聘仕候ても、大學頭父子は格別、其外の者は諂切て相手に罷成、詩文の贈答筆談も應對をも可ㇾ仕と相見得申候ものは一人も無㆓御座㆒候、何卒御奧儒の御役をも又々被㆓仰付㆒、德力藤八郎事は隨分律義ものにて、學文もよく仕候ものにて御座候へば、折々御政務の御隙には貞觀政要（是は唐の太宗皇帝臣下との問答を記し候ものにて御座候、有德院樣にも室新助へ被㆓仰付㆒講釋を御聞被ㇾ遊候）大學衍義、（是は宋の眞德秀と申もの、編み候書にて、殊の外人君の御覽被ㇾ遊候て、御益に相成申候書物に御座候）大學衍義補（是は明の丘濬と申者の著申候書にて、衍義の不足の處を補申候書に御座候、此三卷の書は御上に御覽被ㇾ遊、甚御政道の御助に相成申候書にて御座候、私申上度と奉ㇾ存候事は、皆此書に書記し御座候）等の書籍を講釋被㆓仰付㆒候て御聞被ㇾ爲ㇾ遊、尙又追々本道の學文の筋をも能合點仕候者を御吟味被㆓仰付㆒候て、御側へも罷出候樣に被㆓仰付㆒候はゞ、御上の御德も益明に罷成、其上々を見習ふ下にて御座候得ば、下の者も思ひ立引立候て、又々文照院樣、有德院樣御代の如く學文流行申、賢人君子も多く出來仕、天下の風俗も律義に罷成、御代長久の基に罷成可ㇾ申と奉ㇾ存候

一、諫言を御取上被ㇾ遊候が人君の御學文の第一に奉ㇾ存候、如何成明君賢君にても、仕損じの過ちと申物は是非有ㇾ之物に御座候、其過ち仕損じの處、下より智恵の明なる忠義のもの不㆓申上㆒候ては、御氣の付不ㇾ申物に御座候、人君と申物は御幼少より例の事を被ㇾ仰候ても、左樣御尤と計御側よりはやし立候中にて御そだち被ㇾ成、何事も思召儘に相成申候物に御座候間、下より申上候事は皆愚痴に聞

法にて誰に承り候や、何方にて聞候やと、此事に付て御詮議嚴敷、肝心の處は脇に成申候、惣て上一人の被レ成候事は、下の者へは能知れ候ものにて、誰申候と申事も無二御座一候得共、世上よく存居申候ものにて御座候、誠左樣も御座候はゞ、御役人衆申上候通り、唐人の眞似を被レ遊候の、詩文章を御作り被レ遊候の、御自親御講釋を被レ遊候のと申樣の事は、隱居や樂人の慰に仕候風雅樣の上氣學文と申物にて、一天下をしろしめされし公方大將軍の被レ遊候御學文にて無二御座一候、何の御益にも相達不レ申、惡く仕損じ申候へば、却て御政道の御邪魔に相成申候物に御座候、必竟是は申上手の不器量にて御座候得ば、外に本道の學文筋をゝよく合點仕候者を吟味仕、御側へも指出し可レ申筈に御座候所、是に依て御學文御無用に申上候、乍レ憚又御役人衆の了簡違の樣に奉レ存候、本道の學文をだに被レ遊候得ば、一卷の書を御讀被レ遊候ても、一言の咄しを御聞被レ遊候ても、如何計天下の御爲に相成可レ申も難レ計事に御座候、人君の本道の御學文と申は、先づ有德院樣・水戶中納言源義公殿・保科肥前守・備前の松平新太郎光政の樣被レ遊候事にて、國天下を御治め申候事を御學び被レ遊候事にて御座候、天下に學者は大勢御座候得共、此筋をよく呑込候ものは餘り多くは無レ之物にて御座候、先は新井筑後守・室新助・熊澤次郎八（備前新太郎家來に御座候）中江與右衞門（近江の浪人にて居申候、熊澤次郎八は師匠にて御座候）山崎嘉右衞門（保科肥後守家來に御座候）伊藤源助・同源藏（兩人共に京都の浪人にて居申候）抔申樣の者に御座候、乍レ憚道人體の者は爰ノ所は未だ篤と得二合點一仕間敷と奉レ存候、依レ之申上方惡く御座候と相見得、御上樣にも學文無益のものと被二思召一候やらん、近來は御學文の御沙汰は

上向御浮氣にて御好み被レ爲レ遊候のみにて、本道の學文を不レ被レ爲レ遊、其上下に本道の學文筋を可ニ申上一器量に御當り候人無ニ御座一候故、左のみ御政道の御爲にも相成不レ申候、其後文照院様御好被レ爲レ遊、新井筑後守隨分器量も御座候者にて、本道の學文の筋をも申上、御政道も段々御心を御用ひ被レ爲レ遊候所、千萬御殘念に奉レ存候は、御代をしろしめされ候間無ニ御座一、夫切の思召に相成申候事に御座候、近頃有德院様天下の御政務に毎々御苦勞被レ爲レ遊、林大内記を被レ爲レ召、古の事とも御尋被レ爲レ遊、其外室新助に被ニ仰付一、貞觀政要と申書の講釋をも御聞被レ爲レ遊、又紀伊殿御内高瀨叔朴と申者へ四書の和解被ニ仰付一、柳澤甲斐守家來荻生惣右衞門と申者へ大明律と申者の和解を被ニ仰付一、皆上覽に備り申候處、室新助へ六諭衍義と申書の和解を被ニ仰付一皆御上覽、御上様御手習の御手本に相成申候とて、五倫名義と申假名書の物も被ニ仰付一、其外御政道の事を御側衆を以て御尋被レ爲レ遊候事共段々御座候、新助は其器量に當り候者にて、存念の趣無レ殘申上有德院様にも御用ひ被レ爲レ遊、御政道正しく御慈悲深く、末々迄御恩澤行屆候て、愚痴無智の土民百姓姥に至るまで、御仁德を不レ奉ニ感心一は無ニ御座一候、御上様にも初め西の丸に被レ爲レ入候時分、鳴嶋道人御側へ罷出御學文被レ爲レ遊候處、御幼少に被レ爲レ入候節、日々唐人の眞似を被レ爲レ遊候に付、御役人衆の御了簡には、左様の無益の事を御好み被レ爲レ遊候ては、後に天下をしろしめされ候節、却て御政道の御邪魔にも相成可レ申歟と奉レ存候て御留め申上候由、虛實の處は不レ奉レ存候得共、下沙汰にはヶ様申觸候、ヶ様の事を申上候へば、只今御

は、左樣の者を未だ起り不レ申內止め申候仕方に御座候間、武備は大切に御座候、其上眞田伊豆守家中の者は每年馬上組打、並川渡等の事を稽古仕、井伊掃部頭家にては三日に一度ツヽ着到をつけ、松平阿波守家中の者常々船軍の稽古を仕、其外陸奧・薩摩・長門等の家々に常住武備を忘不レ申、色々武備を勵み申候由承及申候、大名の家にさへ右の如く一日も武備を忘れ不レ申に、増して御公儀に於て只今の樣に御武備を御捨被レ遊候は、私體愚痴無智の者の了簡にさへ、乍レ恐御麁末の樣に奉レ存候

一、人の智惠開申候物は學問程結構なる者は無二御座一候、夫故古より忠臣は何とぞして君の智惠も開け、理非もよく別候て、政道に無理なく、天下も長久にあれかしと奉レ存候て、皆君へ學問を勸め申候、佞臣は君の智惠明かに御座候得ば、手前〳〵の奸邪讒佞を見ぬかれ、君をくらまし候事相成不レ申候故、皆君の學文の邪魔を仕候（唐の武宗皇帝の臣下に仇士良と申佞人、隱居の節其同類どもに申聞せしは、天子へは隨分常住奢を極めたまひて、御遊に御隙のなき樣に御奉公申べし、左樣致す時は我々いつ迄も御首尾よく權威を振ふぞ、必書籍を讀たまふ儒臣を近け給はぬ樣に致すべし、若前代帝王の善惡によりて、天下の亡たり起ざりし事を知りたまひたらば、天下は大事ぞおそろしきと思召御心出來て、我々は直に追出され申と敎へ申、其外佞人ども色々君の學文の邪魔を仕候事、每々書籍に相見得申候）和漢の聖君賢君は申上るに不レ及、御當代にても先づ權現樣・台德院樣を奉レ始、彼所のせり合數の合戰と御事多き御陣中にても、矢張林道春を被レ爲レ召、講釋を御聞被レ爲レ遊候事、段々御記錄に相見得申候、夫故御兩君樣共に御文德益々盛に被レ爲レ成、萬民彌難有がり、天下を御開基被レ爲レ遊、於レ今御代長久に御仁德を仰ぎ奉り候事に御座候、其後常憲院樣御學文御好み被レ爲レ遊候得共、乍レ憚只

仰付、其上御行列御備立等やはり本道の御陣立の通り被レ遊、餘り百姓どもの難儀とも相成不レ申、天下の御失墜も多く掛り不レ申樣手輕に被レ遊、一年に二三度程ヅヽも被二仰付一候はゞ、御鷹野を被レ遊候よりも格別御慰にも相成、御役人衆御番衆下は御同心黑鍬の類に至るまで、自然と御備に相立候場所をも呑込可レ申と奉レ存候、其上にて頭役を相勤候御番頭、又御旗御鐵炮等の類頭分の者は、騎射・鎗・太刀打の働のみに無二御座一、人數を引廻し候者に御座候間、折々は御書付を以或は川を前に當ては人數を如何立、沼を左にしては陣を何と張る、如何なる時節横鎗を入てよきぞ、何樣の掛り弓を用ゆるぞなどヽ御尋被レ遊、其道によく鍛錬仕御返答も明白に申上、御獵の時分も御下知のまヽに利口によく人數を引廻し候ものへは御褒美をも被二下置一候樣に被二仰付一候はゞ、是又兵學出精仕、一方の大將をも勤申べき程の器量のもの幾人も出來仕候はゞ可レ然と奉レ存候、右二箇條の事に御心を御用ひ被レ遊候はば、御旗本の面々小身者は弓馬・鎗・兵法等精を出し、大身の者は兵學・軍術に出精仕、我も〳〵と勇み立候て、其職分々々に心力を盡し、酒宴遊興仕居申候隙も無二御座一候樣に相成、自然と御旗本の風儀も直り、五六年の内には下々は弓馬・鎗・兵法の達人幾等も出來仕、上々は兵學・軍術の智者幾等も出來仕、半時の間には五萬や三萬の精兵相揃候樣に罷成、御威勢益盛に相成り、日本國中は申に不レ及、清朝々鮮の類迄も承及候はゞ、恐慄き可レ申と奉レ存候、只今天下太平の御時節にヶ樣の事申上候得ば、事を好み候樣なる事に御座候得共、前にも申上候通り、「天下雖レ安、忘レ戰必亡」と申、惣て

極め被レ遊、頭の宅にてなりとも、又外に場所を御立被レ成候て成とも、御役人衆立合にて鎗術・劍術・弓馬等夫々御吟味被ニ仰付一、彌其道に鍛錬仕候はゞ御番入をも被ニ仰付一、其上御番入仕候て以後も、一年に二度程ヅヽ、弓は遠矢に的札通し、馬は遠乘・川渡・騎射・笠がけ・犬追物等の物・劍術・鎗術・又其流儀流儀の達人どもへ仕合等の事を被ニ仰付一御上覽被レ遊、格別に達者に仕候者へは御褒美をも被ニ下置一、又不鍛錬にて藝術未熟に御座候ものは、急度御叱をも蒙り可レ申樣に被ニ仰付一候はゞ、御旗本の面々騎射計りにては御番相勤なり不レ申と心付、隨分武道の諸藝等出精可レ仕と奉レ存候、只今は備と申物の稽古不レ被ニ仰付一候間、御旗本の面々平生不心懸にて、さらば御陣立と申時分は、御番頭は何方に居申物やら、御番衆は何樣致居候物やら、御目付御使番は前に居申候物やら、後に居申物やら、御弓御旗は左に居申物やら、右に居申物やら不レ存候、勿論上には御陣立の御手配も隨分急度相窮り居申候得共、帳面に目錄立と紙の上に繪圖とにては不レ參物にて御座候、其上夫々の御役人面々相備へ候場所を以て、前々平生不レ存候ては俄の時分皆十方にくれ、御用に相立不レ申物にて御座候、假令一月や二月教申候ても、是又下の者は急には得呑込不レ申物にて御座候、是は俄に御陣立稽古被ニ仰付一候はゞ、天下の愚人どもも肝をつぶし、今にも軍初り可レ申哉と驚騷き可レ申も難レ計、外樣の大名も何とやらそこ氣味惡く可レ奉レ存候も相知れ不レ申候間、有德院樣被ニ仰付一候鶉勢固・狐狩・鹿狩樣の事を御慰に被ニ

基と相成可ㇾ申と奉ㇾ存候

一、御旗本遊興に耽り、風儀不埒に御座候と申候も、畢竟隙に無ニ御座一候樣に御政道被ニ仰出一候はゞ、自然と風儀も相直り可ㇾ申と奉ㇾ存候、文の敎の事は別條に可ニ申上一候、武の敎の事は御上にも御苦勞に被ㇾ爲ニ思召一候と相見得、段々騎射等も被ニ仰付一、又御旗本の二男三男御吟味も被ニ仰出一候段乍ㇾ恐奉ㇾ感候、思召には御旗本の面々も、此間は格別武藝相勵み申候樣に相成申候、然處騎射と申物は、勿論弓馬達者に無ニ御座一候ては相成不ㇾ申物に御座候得共、畢竟武士の慰にて、軍中にては餘り用に達不ㇾ申物に御座候、武備を御勵み可ㇾ被ㇾ遊思召に御座候はゞ、弓は弓、馬は馬、鎗術・劍術夫々被ニ仰付一候が宜敷可ㇾ有ニ御座一と奉ㇾ存候、其上第一の事は備立にて御座候、如何樣なる劍術・鎗術・弓馬の達者大勢御座候ても、備しどろに御座候ては、軍は直に破れ申候物に御座候、有德院樣には此所をよく御合點被ㇾ爲ㇾ遊候故、鵯勢固と申物を被ニ仰出一候事相見得候、此事に付二ヶ條私存付の事共可ニ申上一候

一、只今御番入被ニ仰付一候は、篤く武藝の御見分も無ニ御座一、一通りの預りにて、向きだに宜御座候得ば、藝術未熟の若輩者へも被ニ仰付一、御吟味と申候ても只一通り騎射を被ニ仰付一候までにて、外鎗術・劍術等の見分も無ニ御座一候故、御旗本の面々は騎射だに達者に仕候へば、武藝相濟候樣に心得、外の武藝は疎末に仕、鎗の振樣も不ㇾ存候て、御番相勤候者も御座候樣に承及申候、萬一の時分に御本陣の御馬廻りをかため、平生御城の御番は非常をいましめ申候爲の御番衆に御座候所、ヶ樣に御不吟味に

一　大名江戸地廻り供の者大勢召連候事は戰國の餘風にて、御膝元を歩き申候にも、鷲破(すはや)と申さば直に備へも相立、一軍可ㇾ仕と申樣なる風俗にて御座候、太平の御時節には無益の物と奉ㇾ存候、勿論是には少々譯も可ㇾ有ㇾ之事に御座候得共、先は供に召連候家來へは、衣類腰物等も見苦敷無二御座一樣に被ㇾ仕候程手當も仕遣し申候間、是に付餘程失却も御座候、是は減少被二仰付一候はゞ、殊の外大名勝手に相成可ㇾ申と奉ㇾ存候、減少被二仰付一候ても、無作と被二仰付一候ては安心仕間敷、高に應じて被二仰付一候はゞ宜敷可ㇾ有二御座一と奉ㇾ存候、只今にては十萬石の大名も、二十萬石の大名も、召連れ人數は大方同じ事に御座候故、小身者致來りの人數を減じ申候は外聞惡敷、又召連れ候家來は無二御座一、或は嫡子罷出候得ば、親は召連れ候人無二御座一、出勤不ㇾ仕など申樣なる大名も有ㇾ之とやら承及申候、是は高に應じて一萬石は何程、十萬石は何程幾人と、其身相應に召連られ、其上にて宿々は浮人有ㇾ之樣に相成申候程に被二仰付一候はゞ、大名身上のために罷成可ㇾ申と奉ㇾ存候

右五箇條の事相應に御政道被二仰付一、其上にて尚又大名酒色に耽り奢靡を極め、身上持損じ百姓を虐げ、家中の者を扶持はなし候樣なる事をも仕候はゞ、急度御叱りをも蒙り、或は官位等を削り被ㇾ成、又は惡地へ國替被二仰付一、又身持質素にて國をもよく治め、百姓を憐み家中の者へも潤澤に手當も遣し候ものへは、御褒美の上意を蒙り、又は家格の官位等も昇進仕、上國と所替など被二仰付一候はゞ、大名殊の外はげみ申候て、身上も持直し、武備をもみがき、將軍家の御藩屛に相成、御代萬々の御

となり、是は下々賄の行れ候と申事を上へ御知らせ可ㇾ申上ㇾとの事に御座候、返禮の仕方を上へ御預け申上候とは、賄を受候ては上の御法をまげ、其者を取立申との事に御座候、又是等の事にて伊豆守御上を御大切に奉ㇾ存、其上大猷院様御代君臣の御間親く、上下打とけて御むつましき事ども相知れ、只今咄仕候ても難ㇾ有御時節也と奉ㇾ存、感涙仕候事に御座候惣て賄の行はれ申候は名節のすたれ申候と、條目の立不ㇾ申との二ッ故にて御座候、名節と申は、侍片氣男氣の事にて、少々の金銀財寶にめで候て人に肩を持候はいさかしき事と存候心にて御座候、條目と申候は、是はケ様に御仕置可ㇾ有筈、彼は如ㇾ此可ㇾ被ㇾ仰付ㇾ筈と急度御掟御定有ㇾ之事に御座候、名節すたれ申候得ば人々貪欲に相成、世話に申候に、賂取ても勝候は德じやと申様なる心に相成、由もなき人より金銀を貰申事を耻とも何とも不ㇾ存候、御條目正しく無ㇾ御座ㇾ候得ば、御政道被ㇾ仰渡ㇾ等の上にて、左を右へくらまし候事に相成申候、潔白の人賄を請不ㇾ申者さへ、賄を致候人を惡しとは不ㇾ存候と申候に、ましで貪欲の人賄を受候ては、其人に贔屓に相成申筈の事に御座候、贔屓の心に無作といたし候御條目を左へ右へやり可ㇾ仕候得ば、如何様の事を可ㇾ仕勝手次第に御座候間、川堤を削り申候様なる事も仕かね不ㇾ申、賄を致候人が贔屓に相成申候得ば、自然と賄を不ㇾ致人は惡敷相成申候間、金柑一ッ七兩に買せ候様なる事も致かね不ㇾ申、何卒名節を以て下を御勵し被ㇾ遊、名節を以て下を御勵しなさるゝ致かたは、下の御記錄所の所に申上候通りに御座候御條目を正しく御吟味被ㇾ成候て、御老中に讃岐守・伊豆守などの者出來仕、下の御役人には干菓子を打まけ候様成るもの出來仕、御政道益公に罷成、御公儀は堤を削り申候様なる御損も無ㇾ御座ㇾ、大名は金柑一ッを七兩にて調候様なる失墜も無ㇾ御座ㇾ候て、天下太平長久の御基に相成可ㇾ申と奉ㇾ存候

入は、思ひやられ候得ば申上るに不ㇾ及候

御先々御代の事、或大名へ何川とか申川の普請御手傳蒙ㇾ仰、川堤二尺通築上可ㇾ申筈に御座候所、殊の外人夫物入多く御座候に付、御役人衆へ賄を仕候所、御役人衆の了簡にて、古堤の上二尺計りの芝を削落し、新規に築上候氣色に取成し、夫にて相濟申候なり 畢竟是等の事は、普請物入一萬兩掛り申候所は御役人衆へ千兩も遣物仕候得ば夫にて相濟申候故、大名も其算用づくにて仕候事に御座候、或は御手傳等被ニ仰付ニ勝手懸敷と存候時分は、御役人衆へ此度の御手傳はぬけ申候様に御取持被ㇾ下候はゞ、千兩遣物可ㇾ致候、二千兩贈り可ㇾ申など申候、兼てより直持賄を致者も有ㇾ之様承り申候

御先の御代の御事何某と申御役人 大岡越前守にて御座候由、申ものも御座候 或日菓子折を御評定所へ持參致候て申候は、拙者は去る方より折菓子をもらひ申候所、開きて見申候得ば上一通りは干菓子にて、底には金子一盃敷て御座候、扨々武士を蹈付候進物に御座候、其儘差戻し可ㇾ申と存候得共、若又世上にてはヶ様の進物被ㇾ受候人も御座候哉と存、何れもへ御相談のため是へ持參候迚、大勢の中にて振廻し申候得ば、滿座の人々一言も不ㇾ申、其中には顏打赤め申候人も御座候となり、是は同役の人を恥しめ可ㇾ申との事にて御座候、

松平伊豆守信綱或時大猷院様御前へ白き德利を持參仕申上候には、私昨日古今無類の名酒を貰申候、上覽に備へべくと奉ㇾ存候故、是へ持參仕候とて御疊の上へ打蒔申候得ば、悉く小粒金にて御座候、大猷院様御覽被ㇾ遊、扨々美敷事なり、結構の酒をもらひたるものかな、扨其返禮は何をするぞと上意御座候得ば、伊豆守申上候は、此返禮の仕方は御上へ御預け申上候より外無ニ御座ニ候と申上候得ば、上意におれはしらぬと御座候て御笑被ㇾ遊候へば、伊豆守も打笑ひ、左様に御座候得ば返し可ㇾ申とて、又拾集め持下り申候

申候、御序に承及申候御先代の咄を可二申上一候、何の御代の事に御座候哉、何の世[illegible]御老[illegible]相

勤候節、或大名へ重代重寶の印籠を所望致候所、其大名遣し可レ申と申候得共、家老ども申候は、是は御代々御傳來の御寶に御座候得ば御無用に奉レ存候、外に何にても被レ遣可レ然と申候へば、其大名申は、老中は廻り持の事なれば、我等老中被二仰付一候節は、又此方へ返るなれば不レ苦とて遣し候となり、（是を見候得ば昔は御老中にて權威に任せ、人の重代の重寶をも無體に所望致候人も御座候と相見得申候、外に、御老中は廻り持、金銀財寶廻り取と申樣に心得居申候風俗にて御座候と相見得申候、甚惡敷風俗に御座候）

酒井讚岐守忠勝御老中相勤候節、殊の外潔白にて賄を少しも取不レ申候所、何某と申御醫師何がな進物致度存候て樣々工夫仕、讚岐守平生鶉を好み候を存候に付、或時讚岐守へ申候は、私去年中鶉をゝらひ候所、扨常住鳴たてやかましくてこまり申候間、ねぢ殺し汁に仕喰可レ申と奉レ存候と咄し申候得ば、讚岐守承り夫は不風流なる事なり、左樣ならば雁を遣し候て其鶉と取替可レ致と申候得ば、醫師申候には、夫は私においても大に勝手にて御座候とて直に鶉を持せ遣し申候、其後其醫師兼て能く鳴く鶉を撰び、高直に相調遣し候と申事を讚岐守承り、殊の外後悔仕、扨々御役をも勤候者は物好のなきがよきなり、物好があれば夫より取入らるゝと申候て、其後一生鶉の音を承り不レ申候なり、（是にて見候得ば、御役人衆へは下より色々致二進物一と相見得申候、又讚岐守は勝れて忠義の者に御座候、其好の鶉も御奉公の爲に一生音をさへ不レ仕とは、誠に古の賢人にも勝れ申さるゝ賢者に御座候、御老中にケ樣の人多く御座有度ものに奉レ存候）

何の時代の事に御座候哉、何の守と申大名御老中御招請申候節、御公儀御料理人へ賄の仕樣少しに御座候處、御料理人殊の外立腹仕、御料理物見分之節一ッも役に立不レ申とて、皆御料理人の指圖にて買直し申候所、鮹の間に金柑

も相勤候者は格別辛勞も仕、其上外の失却も御座候間、是は江戸近所にて御役高一萬石も被レ下候とか、又は御藏前にて四五千石も被レ下候とか被二仰付一候はゞ、是も五年十年の内腰掛宜敷、國拜領仕候より却て勝手に相成可レ申と奉レ存候 荻生惣右衛門政談と申書に申候は、太閤秀吉の時より大名に處替させると云事起る、其時代戰國の初てしづまりたる砌りなれば、勢ひを弱むる手立にて、計策の一ッなるべけれども、當時闕持大名の所替は無レ之、御譜代大名計に闕替被二仰付一候事、是又片つりにて不レ宜事なり、所替の物入凡十年の痛となると昔より申傳なり、依レ之昔は所替に定りて御加増なり、中頃は金を被レ下、近年は其沙汰なき事は、上の御不勝手なる故なるべし、闕持大名をば痛めずして、御譜代大名を痛むる事何道理も辨へ難し、御老中になれば關八州の地へ所替とするも詮なき事なり、姫路・淀・郡山抔樞要の地なりとて幼少にて替ゆる事も古き方計を守りたる分にて詮なき事なり、幼少にても家老よくしまり武義を忘れずば所替せずともよかるべし、成人なればとて武義の心得薄きは、何の用にも立まじく候

一 只今は勿論御役人衆潔白にて、賄などを取候人は一人も有間敷と奉レ存候得共、賄と申もの程政道の邪魔に相成候ものは無二御座一候、是れは和漢共に其例多き事に御座候得ども、近く御當代の物語り可二申上一候、松平讃岐守用人を相勤候眞宮武右衛門と申もの、殊の外潔白の者にて賄を少も受不レ申候所、或時人に物語仕候が、拙者に賄を致し時々見舞媚諂ひ候ものは、奸佞なるもの哉と存候へ共、其者は惡きとは不レ存候、又上は忠義を存し身を正しく持候者にて、音信贈答も不レ致、努々と見舞も不レ致者は、扨々殊勝なる正しき男かなとは存候へども、其人がいとをしとは不レ存候、拙者は少しも賄を受不レ申候てさへ左樣に存候得ば、まして賄などを受候者は、上の御掟をまげて其者に贔屓を致候も理りにて候と申候由承及申候、此咄にて私申上候に及不レ申候、御政務の害に相成申候事は相知れ

を見込、其下直に直打仕候故、元調の直段五分一にも相成不レ申候、（假令ば簞笥一ツ調候直段二兩百里に相過し申候駄賃五兩、賣拂申候直段百疋、大抵ケ樣の事に御座候）夫より又先の國へ參り候ては急に入用に御座候を、町人ども見込候て又過分高直に賣付申候間、一通りの家具計も無拠失墜出入に何程と申計も無二御座一候、其上に又家内のもの引越も物入過分有レ之、又居馴不レ申土地へ參り候て、風雪寒暑の氣候に當られ、老人小兒などは或は病死仕候の、又は癈人に相成候のと申て其歎き悲しみ、國替の御座候跡先は目も當られぬ次第に御座候、又は主人々々は右の失却手當等も仕遣し申候得ば、假令一萬石の大名侍分の者二百騎も抱置候へば、其内身分の高下により次第可レ有二御座一候得ども、先づならし引越し料一人前二十兩ヅヽ遣し候ても、物入四五千兩にて御座候、其上に足輕中間手代樣の者は又外に手當も仕遣し、又上々は引越普請等にも六千兩も失却仕候得ば、只一度の引越一萬三千兩計目にも見得不レ申事に失却仕候、一萬石二年の物成打込候ても足り不レ申候、身體貧乏にて何の蓄も無二御座一候大名、臨時の物入一萬の餘りも無二御座一候ては、借金仕より外無二御座一候、ヶ樣の事十年の内一度も御座候ては、前度之借金未だ相濟不レ申上、又々借金も出來仕、借金の上の借金、貧乏の上の貧乏、次第に穴へ這入候樣成事に御座候、ヶ樣之事を御上の思召にて被二仰付一候事に御座候得ば、御自親に御家來の身上を御けづり被レ成、御武威を御けづり被レ成候樣なるものに御座候、又御役人衆の申上候事も御座候へば、寄合仲間を剝候て御上の御武威を削候樣なる物に奉レ存候、何卒大名家筋をも篤と御吟味被レ遊相應に城地を被二下置一重き不調法だに不レ仕

後は其御公儀の御徳用にも相成、武家の身上の爲にも、飢饉水旱の御手當にも相成可ㇾ申と奉ㇾ存候、乍ㇾ然夫に付樣々の害も出來申物にて御座候、又其害の出來不ㇾ申樣に仕方も御座候、是は一枚半枚の紙の上にて申上げ候て相濟不ㇾ申事に御座候、彌取行も可ㇾ被ㇾ遊思召に御座候はゞ、其致方並利害得失和漢の書に段々相記し御座候、御詮議被二仰付一候はゞ相知れ申候、殊の外古より天下の益に相成申候法に御座候、大名國替と申候物は、手柄功業相立候て大國を被ㇾ下候とか、又は重き御科御座候て、知行高御削り被ㇾ成、惡地へ被ㇾ遣候とか、又は姫路小田原等の番城御場所柄の處は、幼少にては持たれ不ㇾ申候とか、其品によりて可ㇾ被二仰付一筈に奉ㇾ存候處、近來は御役も相勤、御首尾も宜御座候得ば、國を被二下置一、御役も上り候と齊く、又直に外へ國替被二仰付一、よしもなきに五年十年の內彼方此方處替被二仰付一候故、大名殊の外難儀仕候、總じて人の身體と申物は、いつも同じ事がよき物に御座候、元一萬石の大名俄に二萬石の所被ㇾ下候得ば、當分はよき樣に御座候得共、直に惡地へ所替被二仰付一候得ば、元の一萬石に相成申候節、一度二萬石に暮し付候手癖直り不ㇾ申候、又元の一萬石の身體相應に暮し候樣には得取直し不ㇾ申物にて、夫より初て貧乏の端に相成申候、夫故當分は御慈悲の樣に御座候得共、却て善地へ被ㇾ遣候は、始終身上の爲には不ㇾ宜物に御座候、其上處替の節家中のもの共の難儀と申候は無二申計一事に御座候、先第一失却と申候は、家々なくて叶不ㇾ申簞笥・長持・鍋・釜の類も、手重き物は道中駄賃に過分失却候間、皆其所にて賣拂申候、又町人とも賣拂不ㇾ申候ては叶不ㇾ申物と申

座候ては、武家は申に不㆑及、天下の困窮に罷成申、又米相場の所は御上の御自由に相成不㆑申、然ば下の困窮を如何樣にも爲㆓思召㆒候ても、被㆑成方も無㆓御座㆒と申物に御座候、只今日本國中海を山に可㆑被㆑遊も御自由の御威勢にて、是式町人共風情の口先にて取り定り候程の事も、御自由に相成不㆑申とて、下の難儀を其儘にて被㆓捨置㆒候は、何とやら御政道において本なげに奉㆑存候、勿論御歷々御役人衆中手拔不評議心を碎き、御上にも御苦勞に被㆑爲㆑遊候と相見得、去々年中抔は大坂町人共へ御用金被㆓仰付㆒諸大名へ御預米被㆓仰付㆒候得共、米直段別て相違も無㆓御座㆒候所、幸加州不作に御座候由にて、**大坂より北國へ積送り申候、依㆑之少々米相場相直し、武家も息を繼申候樣に相成申候得ども、**兎角米相場御上の御自由に相成不㆑申候ては、上下不定にて又元の如く相成可㆑申候、只今の事と奉㆑存候、私體卑賤の者作㆑恐武家の御爲、萬民の爲に數年相考へ候て存し付候は、只今雜稅法、常平倉法と申二ッを御行ひ被㆑遊候はゞ、三年の內には天下の米相場高直なり共下直なりとも、上の思召まゝに相成可㆑申と奉㆑存候、先荒増雜稅法と申候は、百姓御年貢を金納米納計不㆑被㆓仰付㆒、其所に出來候絹・木綿・眞綿・生綿・麻苧・紙・茶・煙草・或は山林は炭薪等を御取立被㆑成候事に御座候、常平倉法と申候は、諸所御代官領に御藏を被㆓立置㆒、江戶へ御廻し被㆑成候御上米を被㆓入置㆒、又大坂其外湊々に御藏を被㆓立置㆒、米直段下直の時分は御買上被㆓仰付㆒、又高直の時分は御拂ひ被㆓成下㆒候事に御座候、此二事は初は仕なれ不㆑申候故、御役人衆も不㆑得心にて段々指支も出來、御物入も有㆑之樣なる事御座候得共、

是は大名計の爲に相成候のみには無二御座一候、天下の爲に相成可レ申と奉レ存候、其上此制度念度相立申候はゞ、殊の外貫嗣の爲に相成可レ申と奉レ存候　米直段下直に御座候事は、武家の困窮のみに無二御座一候、是又天下一統の困窮にて御座候、先は米直段下直に御座候得ば、諸色も下直に相成可レ申筈に御座候所、諸色の直段は前に少しも違不レ申候、米直段下直に相成候ても、諸色下り不レ申譯は、諸職人米直段高直の時分に金子の百疋も儲候得ば、漸一月の飯米代に相成申候所、只今にては金子百疋も儲申候得ば、一月半も二月も喰申候、米代に相成申候故、無智のものども先月前喰物御坐候得は、先の事は打忘れ、不自由を仕、業に怠り申候、前廉は一月に絹の十反も織出し候者も、只今にては五反ならでは織不レ申、前廉は一日に一駄ヅヽ、切出し申候薪も、只今は二日に一駄ヅヽ、切出し候樣に罷成、世上諸式代物炭薪等まで如レ是相成申候故、米高直の時分に少も違不レ申、品により却て高直に相成候物御坐候　米下直にて諸色高直に御座候得ば、武家農人米を賣候て用を足し申候者は日々に困窮仕候、武家農人困窮仕候得ば、商賣無二御座一候故、町人も困窮仕候、大工匠人其日過のものは能きかと申候へば、是も諸人困窮仕候へば、やとひ申候者無二御座一候間同く困窮仕候、左樣に御座候得ば、米直段の下直は天下の惣困窮と申者にて御座候、古は斗米三錢と申候て米一斗は錢三文仕候事に御坐候天下太平豐年潤澤の褒詞に書記し御座候て、只今は米下直は却て天下のいたみに相成、豐年と申せば人々眉をひそめ申候樣に相成申候、惣て米の相場と申ものは、只今の樣に米下直に御座候迚、天下に二三年も水旱續き申候共、天下中の人喰候程澤山米の有餘り候と申にても無二御座一候、又米商賣仕候町人共高利を取可レ申候とて、下直に相場相立候にも無二御座一候、世間の勢ひ景氣と申ものにて、夫奥州旱と申せば、やれと申て高く相成、北國豐年と申せば、やれと申て安く相成、時々はづみ景色にて上げ下げ仕候までにて、町人どもの手にて定り申候得共、町人共の自由にも相成不レ申、又大名の自由にも、御上の自由にも相成不レ申物に御座候、扨米直段下直に御

レ存候

一　御治世久敷續候得ば、天下一統安樂に餘り、人々懦弱に相成、只珍味を喰美服を着用仕、隙にて寐て居度との工夫計を仕候て、次第に奢長じ申候て、分相應に上の眞似を仕候間、昔は小給の者も相應に暮し申候所、近年は高知の者の分身上不足仕候樣に成行申候、（昔は大名も銅拵の大小を指し候所、近來は五十石百石計の小身者も、金拵宇彫などの腰の物を横たへ申候風俗に相成申候）有德院樣にも色々御苦勞被レ爲レ遊、惇信院樣御代段々被ニ仰出一も有レ之、御老中さんとめ上下にて相勤候樣まで致申候得共、半年も立不レ申内直に元の如く花麗に相成申候、必竟是は等差と申物が立不レ申故にて御座候、等差と申候は、格式の事にて御座候、只今にては金子だに御座候得ば、私體の者にても羽二重の小袖こはくの上下着用仕、金拵の腰物を横たへ、三汁十一菜の振舞を毎日可レ仕と勝手次第に御座候間、負まじと存候人心にては、一日に一事々々と上の眞似を仕候樣に成行申候、まして金銀自由に相成申候大名心にては、自然と衣類諸道具振舞饗應等まで花麗に相成、五萬石の大名十萬石の眞似を仕、十萬石の大名二十萬石の眞似を仕候樣に成行申候間、借金の淵にはまり申候、是等嚴敷格式を御立被レ遊、假令御老中はこはくの上下、御若年寄は茶苧の上下、御奏者番はさんとめの上下、五萬石の大名は是々、十萬石の大名は何々と申樣、婚禮・嫁取・法事・弔ひ・音信・贈答・振舞・饗應等まで、夫々の身體にて相調候樣に急度格式を御立被レ成候へば、人々是より上は相成不レ申物と相心得、夫々の分限相應にてたんのう仕、上の眞似を仕不レ申、自然と奢も相止可レ申と奉レ存候

と同じ事にて、人を切り不ㇾ申候とて刀を指不ㇾ申候ては、若急に入用に御座候節、誠に世話に盗を見て繩をなふと申候如く、間に合不ㇾ申物に御座候、其上日本國中にて御威光は伏し可ㇾ申候得共、大淸（只今の唐の事）朝鮮・琉球等の國の者は、如何なる巧を致居候とも相知れ不ㇾ申候（淸朝より琉球へ使の參り候毎に、日本の從へ様や有よと尋る由承及候）太閤秀吉の朝鮮を切從へ申候も、此方の數年稽古の積み申候軍兵にて、朝鮮の無用心の中へ踏込候故、只三十日の内に王都迄攻落し申候、世話にも用心に國亡びずと申候、又油斷大敵と申候、古の人は天下安しといへども、戰をわするれば必亡ぶと申候、若御油斷無㆓御座㆒御用心可ㇾ被ㇾ遊思召御座候はゞ、大名の心體と御旗本の風儀とは御心を付させられ、御取直し不ㇾ被ㇾ遊候ては叶ひ不ㇾ申儀に奉ㇾ存候、勿論御歴々御役人衆中も御油斷は御座有間敷候得ども、私儕愚痴無智者の存付候事も、萬が一御益にも相成可ㇾ申かと一々申上候

一　大名貧乏仕候事は有徳院様別て御苦勞に被ㇾ爲ㇾ遊候て、鎌倉時代の如く五年に一度も、五十日計の江戸逗留にて參勤仕様に可ㇾ被㆓仰付㆒哉など、室新助へも御尋被ㇾ遊候事ども相見得申候、（五年に一度ヅヽ參勤之事、熊澤次郎八と申者大學或問と申書に記し御座候）是は當分大名身體の爲とは相成可ㇾ申候得共、誠に新助申上候通り、始終天下の御爲に不ㇾ宜筋に御座候様奉ㇾ存候、扨大名貧乏を直し申候には五ヶ條御座候、先第一近年大名殊の外奢り申候事、第二米直段下直に御座候事、第三御國替被㆓仰付㆒候事、第四音信贈答の事、第五江戸地廻り供を大勢召連れ候事、此五ヶ條の事相應に御政道被㆓仰出㆒候はゞ、大名身上少々持直し可ㇾ申と奉

漸々一日々々と彼處に質を置、爰にては借金を仕、町人共の顔を守りて暮し候樣なる仕合にて渡世を仕申候、畢竟御譜代大名まさかの時御上の御用にも相違可﹂申候と、家中の者をよく扶持仕、人數も大勢召抱置候間、銘々主人へ忠義を存じ候てこそ、何事も上の御用も相違可﹂申事に御座候、右の如くに御座候ては、主人にては如何樣上へ忠義を奉﹂存候とも、召連召出候人も無﹂御座﹂少々殘る人も其主人々々を怨候樣に相成、皆ばら〱に相成候て、はか〱敷御用にも相違し申間敷と奉﹂存候、扨又近來御旗元の面々皆遊興に耽り、武藝不﹂嗜の衆中段々相見得申候、末々小普請御番衆御徒士抔の類に至り候ては、殊の外風儀惡敷罷成、或は親を追出し、一類の中を追ひ、酒色に耽り博奕を好み、家財を盡く打込み候て、妻子共寒中單物の一ッにて薦の上に暮し、甚敷者は夜分町家へ押領に押込候か、又は人遠き野原にて追落を仕候のと申樣なる風俗に罷成、武藝名節は棚へ上げ、筆も付不﹂申族多く相見得申候、世話に旗本八萬騎と申候が、只今の樣成懦弱不埒の風儀にては、萬一の事御座候ても、一角御用に相達可﹂申と相見得申候人は、近頃私體愚痴無智の者の過言に御座候得ども、乍﹂恐一萬騎とは御座有間敷と奉﹂存候、大名は貧乏仕候て、家中の者を扶持仕候事罷成不﹂申、御旗本は遊興に耽り、懦弱にて御用に相達不﹂申、若萬に一ッも天下御靜謐にて、萬民上の御威光を奉﹂恐候時分、私體の無智の輕きものゝ樣の事を無作法に申上候得ば、御歷々の衆中の了簡には、氣違ひの、阿房の、或は口に出放題を申上げ御上を恐し奉るのと可﹂申候得共、前にも申上候通り、武備と申物は、武士の刀を指

申、兎角匹夫匹婦の土民ども安樂に暮し候得ば、天下はいつも豊にて、御上に御自由足不ㇾ申と申事は無ㇾ御座ㇾ候、萬民の上を難ㇾ有奉ㇾ存候も、天道佛神の御加護厚く、御代長久天下太平の基是より上は御座有間敷と、愚痴無智の了簡に奉ㇾ存候、何卒太平の御恩澤を蒙り申御報恩にと、御歴々の御役人衆の中、推參千萬ながらふつゝかの事ども申上恐入奉ㇾ存候

一　御代々御當家の天下を御治め被ㇾ遊候は、御文德よりは御武威をおもと被ㇾ遊候事に御座候所、近來下の者御威光を奉ㇾ恐候事は、昔よりは日增に甚敷罷成申候得共、御威光の正味は乍ㇾ恐日々に虛に相成申候様に奉ㇾ存候、御威光の正味と申候は、外の事にては無ㇾ御座ㇾ候、御譜代大名と御旗本の面々とにて御座候、萬々一天下に何事か出來候節は、勿論誰人御下知に違背仕候ものは有ㇾ御座ㇾ間敷候得ば、第一と身命を拋候て忠義を盡し候は、御譜代大名と御旗本の面々ほど御用に相達し候者は有ㇾ之間敷と奉ㇾ存候、然處近來御譜代大名年々貧乏仕、家中の者へ扶持知行遣し候事も相成不ㇾ申、或は重代の家來に暇を遣し、又は家來の者欠落仕候ても其儘に指置候様なる仕合故、家中の人數も次第に減じ申様に成行申候、假令人數も前廉の通りに持候大名も、或は知行半減仕候の、又は當分の扶持計りを遣し置くのと[illegible]仕合故、家中の者共も貧窮につめられ、馬もの具も相應に所持仕候事も得不ㇾ申、

と奉レ存候

右の條々只土民百姓の潤候樣にと計申上候得ば、一通りの者は唯今迄の御政道にて、百姓共も相應に相營候事に御座候を、何の角のと手前の職分にも無レ之事を馬鹿理屈申上、御上の御身體の御爲に不二相成一など可二申上一候得共、惣じて天下の身體と申物は、平人とは違ひ、天下中の者が富饒無二御座一候ては參り不レ申候、天下中の者を富饒爲レ致方は、萬民の農を樂み申樣に致候が第一に御座候、農人と申物は殊の外せつなき物にて、人のいやがり申候物にて御座候故、上より隨分緩く御あしらひ被レ成、農人安樂に御座候樣御政道無二御座一候ては、萬民農を樂み不レ申、只今の通りにては、百姓ども次第にくらし惡く相成申候間、農人年々商人に相成申候、漸々の事故當分は目に立不レ申候得共、老人共の物語り承り候得ば、二三十年以前よりは商人殊の外多く相成申候由にて御座候、農人の商人に相成候事は、殊の外天下の衰微に相成候事にて、了簡も御座候人は甚だきらひ申事にて御座候、其上前にも申上候通り、日本國中天道より御預りの人民難儀を御させ被レ成候ては、天道の御心にも叶申間敷奉レ存候、加之萬民の天とも地とも奉レ仰は、又將軍家より外に無二御座一候なれば、御上の御憐み不レ被レ成候ては、誰か憐み可レ申哉、爰の所を能々思召解させられ、御慈悲の御心を以て下萬民を御めぐみ被レ遊候は、無益の坊主神主共へ過分の布施初穗を被レ下、經を讀み祓をさせるよりは却て天道神佛の冥慮にも御叶被レ遊、御代長久御子孫御繁昌の御祈禱に相成可レ申と奉レ存候、

候様に被二仰付一候はゞ、殊之外百姓どもの潤に相成可レ申と奉レ存候、古田の荒地も右の如くの頓沙入水付不二相成一、五穀一粒も出來不レ申候ても、やはり御帳面にのり居候間、荒地年貢と申候て一村一郡へ割付に相成申候、是等もとくと御吟味を被レ加、御帳面削り候様被二仰付一候はゞ、萬民如何計上を難レ有がり可レ申、御仁政の大なる事に奉レ存候只今御年貢の取立は見取と申物にて御座候間、百姓殊の外不精に相成、五穀も不出來に御座候、是を定免と申物に被二仰付一候はゞ、百姓共出精仕、五穀も能出來可レ申と奉レ存候、見取と申候は、年々の出來色を御役人衆御見分被レ成候て、年切〱に此田地は何石何斗、此田地は何程と御極被レ成候事に御座候、夫故愚痴無智の土民の了簡には、出精仕候て能作り申候ても、出來色宜御座候得ば、御上へも澤山御取被レ成候事なれば、畢竟汗水を流し出精仕候得ば、骨折損に相心得、日増無精に罷成候故、出來色も年々悪敷成行申候、御役人衆は去年より御藏入高減じ申候ては、御上の御首尾不レ宜候間、假令少々不出來に御座候ても、少も御用捨は無二御座一候故、自然と百姓共困窮仕、引追未進も多く、科人も出來仕候、是を定免と申物に被二仰付一候はゞ、可レ然奉レ存候、定免と申は、田地一反に付何程と常住定り居申事に御座候、左様御座候得ば、御年貢を相納め申候餘りは、皆百姓共の徳分に相成申候故、一粒にても澤山出來申候様にと心掛、隨分出精可レ仕候間、御年貢も未進引負不レ仕、下々潤澤に相成相暮し候て、御代官を相勤め候者も、無法に百姓共を虐たげ、下を難儀致させ候事も無二御座一候、萬民の潤に相成可レ申

候と申譯は、只今少々小才覺の山師ども、金子の千兩も手に入申候得ば、其内にて五十兩も百兩も德用に相成候故、古川古沼等の荒地を見立、假令ば千石の場所に御座候得ば、只今二千兩被二下置一候はば、永々相納申候樣に開發可レ仕など御願申上候得ば、御代官其外の御役人衆、何がな相働功に立可レ申と奉レ存候間、早速取持仕、御吟味の上にて被二仰付一候へ共、御吟味詰不レ申候故、當分は宜敷御座候得共、直に砂入水付に相成申候間、如レ元荒地に相成申候、假令砂入水村に相成不レ申候ても、新田と申者は五年や三年は五穀そだち不レ申物にて、十年餘りも耕しこなし申候て、漸々少々作物も有付候ものにて御座候間、百姓共も新田をいやがりて作り不レ申故、大抵の處も直に元の如く荒地に相成申候、扨荒地に相成候ても、最早御公儀の御帳面に乘候て以後は、御役人衆御藏入の石の減じ申候をいやに奉レ存候間、其荒地の御年貢皆一村一郡へ割付候て取立申候故、一萬石の御場所に千石の新田荒地御座候得ば、十石に一石ヅヽも百姓どもの御年貢掛申候、御藏入の石高は御帳面に相違無二御座一候間、御上にはやはり新田も荒不レ申と計被二思召一候得ば、初無作と不吟味にて申上候山師共も、左のみ御詮議も無二御座一、折々不埒相著候て御詮議に逢とも、西へ東へと申ぬけ、御仕置にも逢不レ申候故、又しても邪智を相巧み、御上の御金をかたり出し、百姓共の難儀に罷成申候事を仕出し申候、此以後新田開發をも奉レ願候もの御座候はゞ、土地の善惡水付砂入等の地形の利害に相達し候人に被二仰付一、篤と御吟味を被レ遊、宜敷地方に御座候はゞ開發被二仰付一、五年の植付見申候て、地形の惡く田地に相成不レ申事に御

は四石五斗にも相成申候、御代官は先づ目前御藏入の一石も石高上り候ては、御見出しに逢可ㇾ申とのみ奉ㇾ存、風儀の善惡も、盜賊の詮議も疎に成候故、御代官領は盜賊博奕折々集に相成、盜者と申せば悉く入込申候故、自然と風儀も惡く罷成、自體律義の百姓共も博奕宿盜賊宿仕候樣に成行申候、土地より生れ候ものは年々限り御座候なり、御年貢は年々増し申候なり、村里の風儀も次第に惡敷罷成候なり、後々には律義の百姓共も、難儀の餘りには强盜山入可ㇾ仕候半も難ㇾ計奉ㇾ存候、必竟ヶ樣に成行候も御代官の心得違と、新田荒地御詮議のつみ不ㇾ申と、御物成定免にて無二御座一候との三ツにて御座候

一　御代官の御心得違と申は、右に申上候事に御座候、何卒此以後御代官被二仰付一候節は、上に申上候通り三千石以上の大身の者へ被二仰付一、右の譯をとくと被二仰聞一、村里の風儀律義に盜賊博奕打無二御座一、百姓の難儀不ㇾ仕などゝ申類の事、一々ヶ條書にて被二仰渡一、其上にて一年に一度程ツヽも、御番衆の内にても、御使番の内にても、人物を御撰被ㇾ遊御代官領巡見に被ㇾ遣、若其支配の内盜賊多く風儀惡く、百姓共難儀仕候事も御座候はゞ、其御代官急度御呵をも蒙り、御役をも被二召上一候樣被二仰付一候はゞ、殊の外百姓の潤にも相成、天下御基彌丈夫に相成可ㇾ申と奉ㇾ存候　御巡見被二仰遣一候事も、被ㇾ遣候樣惡く御座候へば、却て民の難儀に相成申候、是は其時分に御詮議あられ候て、利害を御考へ被ㇾ遊候樣に仕度奉ㇾ存候

一　新田開發の事田地も多く罷成、甚だ下の潤に相成可ㇾ申筈に御座候所、却て甚だ下の難儀に罷成申

次は千石も五百石もと段々增に增申候へば、御代官の十人も替り候內には、十萬石の御場所より十四五萬石も納め申候樣相成申候、ヶ樣に御藏入の米高年々滋申候へば、天下の御身體の爲には能樣に御座候得共、始終は御上の御爲に相成不ㇾ申事に御座候、先づ百姓の身體を可ㇾ申上ㇾ候、百姓の身體と申ものは、隨分地ふく宜田地五反も所持仕候て（五反と申は三十間に長サ五十間の所を云）夏は暑に脊をさらし、冬は霜雪に肌を破り候事をもかまひ不ㇾ申、一身の油をしぼり出精仕、水旱の難に逢不ㇾ申候得ば、一年に米七石計、麥も七石計出來申ものに御座候、扨其米を先づ半分は御年貢に取納め、殘の三石餘賣拂一年中雜用に仕候、只今の直段に仕見申候得ば、漸金子三兩餘りに相成申候、其內にて村入用と申物を、田地の一反に付錢三百文程出申候、漸三兩計ならでは殘不ㇾ申、夫にて衣類の、農具の、世帶道具のと申物を拵、法事弔ひ、よめ取、聟入の祝儀共相調申候、扨一年中の飯米は麥を喰申候、麥と申物は、早く腹のすく物にて、其上百姓は骨折の業を仕候間、一日には一人前一升も喰不ㇾ申候ては働相成一、內の七人も有ㇾ之ものは、七石計の麥にては不足仕候間、或は芋頭の、大根のと申物を喰申候處ゝ御座候、又はさんか粥と申候て、粟もみに（もみと申候は米の皮に御座候）十分一も米を加へにてかため被ㇾ下候所も御座候、右の如く艱難の身上にて、又其上飢饉水旱に逢候か、臨時の物入に御座候得ば、一年に錢の百錢も餘慶出し申候は、誠に骨髓の油をしぼられ候よりは悲しき物にて御座候、左樣の百姓の身體を取立、十萬石の御場所にて五萬石も增し候へは、三石の御年貢

事訴訟其外盜賊樣の輕き事は、皆其所にて裁判仕、毎年十二月に添役の者一兩人江戸へ差出し一々申上候、右又大事にて伺不ㇾ奉候ては相濟申さぬ事は、臨時に添役可二指出一奉ㇾ伺候樣被二仰付一候はゞ、御代官を相勤め候者も常住其所に居馴申候て、萬民の爲不爲を平生能呑込居申、又百姓共の人柄も能始終存居申候て、公事訴訟等の節も理非善惡早くわかり申候て、下の者に欺かれ候事無二御座一候、其上一國の人民を打渡し預け置申候て、隨分自親踏込相勤、萬事心を碎き、上下の爲に相成可ㇾ申百姓の豪强の者、御役人常住に居申候はゞ、橫領非道をも得仕間敷、律義の者は御訴訟御願申上候も、江戸三界遠方罷越候失却も無二御座一、如何計萬民の爲と相成、天下長久の基に相成可ㇾ申と奉ㇾ存候（大身御代官被二仰付一候得ば、本文に申上候に限り不ㇾ申、盜賊の爲にも萬相成可ㇾ申と奉ㇾ存候、盜賊の事は別條に可二申上一候）

一　只今上の御爲に萬民を治め申候は御代官にて御座候、御代官と申物は、隨分支配の村里風儀も律義に、盜賊盜者少く、萬民上を不ㇾ奉ㇾ怨樣に仕候御役目の第一にて御座候所、只今の御代官は只御年貢を取納申候計を御役目の樣に覺居申候、其譯は御年貢を一粒も餘慶取立候得ば、働に相成候御役目の樣にて、御役替等も被二仰付一、其外の風儀盜賊抔の事は一向御上にも御構無二御座一候故にて御座候、夫故御役を相勤候者は、御年貢を一粒も澤山に取立、勤の功に仕候て一日も早く立身可ㇾ仕と奉ㇾ存、前役の御代官千萬石の御藏入の所にて、三四千石も餘慶に取立申、夫が功立申候て御見出に逢ひ、立身も仕候得ば、次の御代官は又其上に一二千石も餘慶取立不ㇾ申候ては、働の手際相見得不ㇾ申、又其

次は千石も五百石もと段々增に增申候へば、御代官の十人も替り候内には、十萬石の御場所より十四五萬石も納め申候樣相成申候、ヶ樣に御藏入の米高年々溢申候へば、天下の御身體の爲には能樣に御座候得共、始終は御上の御爲に相成不ㇾ申事に御座候、先づ百姓の身體を可ㇾ申上ㇾ候、百姓の身體と申ものは、隨分地ふく宜田地五反も所持仕候て（五反と申は三十間に長サ五十間の所を云）夏は暑に脊をさらし、冬は霜雪に肌を破り候事をもかまひ不ㇾ申、一身の油をしぼり出精仕、水旱の難に逢不ㇾ申候得ば、一年に米七石計、麥も七石計出來申ものに御座候、扨其米を先づ半分は御年貢に取納め、殘の三石餘賣拂一年中雜用に仕候、只今の直段に仕見申候得ば、漸金子三兩餘りに相成申候、其内にて村入用と申物を、田地の一反に付錢三百文程出申候、漸三兩計ならでは殘不ㇾ申、夫にて衣類の、農具の、世帶道具のと申物を拵、法事弔ひ、よめ取、聟入の祝儀共相調申候、扨一年中の飯米は麥を喰申候、麥と申物は、早く腹のすく物にて、其上百姓は骨折の業を仕候間、一日には一人前一升も喰不ㇾ申候ては働相成不ㇾ申に付、家内の七人も有ㇾ之ものは、七石計の麥にては不足仕候間、或は芋頭の、大根のと申物を鹽にて焚き候て喰申候處も御座候、又はさんか粥と申候て、粟もみに（もみと申候は米の皮に御坐候）十分一も米を加へ粉と仕、夫を湯にてかため被ㇾ下候所も御座候、右の如く艱難の身上にて、又其上飢饉水旱に逢候か、又は病煩は、臨時の物入に御座候得ば、一年に錢の百錢も餘慶出し申候は、誠に骨髓の油をしぼられ候よりは悲しき物にて御座候、左樣の百姓の身體を取立、十萬石の御場所にて五萬石も增し候へは、三石の御年貢

事訴訟其外盜賊樣の輕き事は、皆其所にて裁判仕、毎年十二月に添役の者一兩人江戸へ差出し一々申上候、右又大事にて伺不㆑奉候ては相濟申さぬ事は、臨時に添役可㆓指出㆒奉㆑伺候樣被㆓仰付㆒候はゞ、御代官を相勤め候者も常住其所に居馴申候て、萬民の爲不爲を平生能呑込居申、又百姓共の人柄も能始終存居申候て、公事訴訟等の節も理非善惡早くわかり申候て、下の者に欺かれ候事無㆓御座㆒候、其上一國の人民を打渡し預け置申候て、隨分自親踏込相勤、萬事心を碎き、上下の爲に相成可㆑申百姓の豪强の者、御役人常住に居申候はゞ、橫領非道をも得仕間敷、律義の者は御訴訟御願申上候も、江戸三界遠方罷越候失却も無㆓御座㆒、如何計萬民の爲と相成、天下長久の基に相成可㆑申と奉㆑存候（大身御代官被㆓仰付㆒候得ば、本文に申上候に限り不㆑申、盜賊の爲にも甚相成可㆑申と奉㆑存候、盜賊の事は別條に可㆓申上㆒候）

一　只今上の御爲に萬民を治め申候は御代官にて御座候、御代官と申物は、隨分支配の村里風儀も律義に、盜賊盜者少く、萬民上を不㆑奉㆑怨樣に仕候御役目の第一にて御座候所、只今の御代官は只御年貢を取納申候計を御役目の樣に覺居申候、其譯は御年貢を一粒も餘慶取立候得ば、働に相成候御役目の樣にて、御役替等も被㆓仰付㆒、其外の風儀盜賊杯の事は一向御上にも御構無㆓御座㆒候故にて御座候、夫故御役を相勤候者は、御年貢を一粒も澤山に取立、勤の功に仕候て一日も早く立身可㆑仕と奉㆑存、前役の御代官千萬石の御藏入の所にて、三四千石も餘慶に取立申、夫が功立申候て御見出に逢ひ、立身も仕候得ば、次の御代官は又其上に一二千石も餘慶取立不㆑申候ては、働の手際相見得不㆑申、又其

らかに立遣し可ㇾ申役に御座候間、随分下の者の申出能樣に可ㇾ致筈に御座候處、近來威高楗高にして少の事も事六ヶ敷取成、長く隙どらせ、下よりは命がけ身體がけにて無ニ御座一候ては、物の申出されぬ樣と仕かけ申候、御役人衆の風儀に相成居申候、畢竟左樣に御座候儀、御役人衆其節々に不鍛鍊にて公事訴訟も多御座候て事繁く手前共々仕落も出來可ㇾ申かと、面々身構を仕り御奉公へ踏込み不ㇾ申故にて御座候、御役人衆の風儀左樣成行き申候も、本は御上の御役割り不ㇾ宜故にて御座候樣、私體愚痴無智の推參千萬ながら奉ㇾ存候、先第一只今御代官と申もの、殊の外輕きものに御座候て、十萬石十七萬石の所を、漸五百俵三百俵の御旗本へ被ㇾ成ニ御預一被ニ指置一候て、只御年貢の取納計御役目に相成、公事訴訟樣の事は自親裁判仕候事相成不ㇾ申候故、少々の事も皆江戶へ罷出、御勘定奉行御町奉行へ訴出申候、御勘定奉行御町奉行抔は生れ立より江戶にてそだち、田舍へは足踏も不ㇾ仕候者故、遠方田舍の事は平生委敷呑込居不ㇾ申、其上彼處の願愛の訴訟と、方々より持懸られ、殊之外取込申候上に、彼の仕落のなき樣、御申譯の立樣に被ㇾ存候卑怯心にて、名主・五人組・親類・緣者抔證人大勢相集、一往にて埒明候吟味も、五度も三度も掛り、詮議に隙取裁斷も埒明不ㇾ申者の如く、民の難儀に相成申候、加之御役人衆も只自分の言譯立候樣にと計存居候得ば、證人の口だに合申候得ば御申譯立候間、大抵にて事濟、詮議の行屆不ㇾ申事も可ㇾ有ニ御座一と奉ㇾ存候、何卒此以後御代官はせめて三千石以上の御旗本へ被ニ仰付一、其添役に唯今の御代官位の者を三四人ヅヽも被ニ仰付一、其國へ引越居申候て、公

出不レ申候故、金主又々江戸へ罷出、右之譯を御奉行所へ申出候所、御奉行所にてあつかひに仕相濟可レ申段被二仰渡一候由、其金主は備中より江戸へ二百里餘り四度迄往來仕候、入用二百兩計失却仕、身上を潰し申候、其上にて扱に仕候へと被二仰渡一候は、餘り御情なき御捌きなりと申候て、欝憤の餘涕を流し申候由承り及申候、ヶ様の事は輕き事の様に御座候得共、畢竟日本國中の萬民天道より將軍家へ御預け被レ成被二指置一候様なる物にて御座候、其預りの人民の中に理をまげられ候て、御上を御情なきと奉レ存候様のもの御座候ては、天道より御預け置候天道の御心にも御叶被レ遊間敷奉レ存候、其上下萬民御上を奉レ賴候は、外の事にては無二御座一候、唯理非を御立被レ下候様にと奉レ存候事計にて御座候間、爰の處は明らかに無二御座一候ては、下の思ひはなれ候ものに御座候に、才覺の者は何土民の五人や十人馬鹿理屈を申候事の譯に付不レ申とて、何程の事の可レ有二御座一など可レ申候得共、如何成輕き土民百姓か、人は人替り不レ申、大名高家も土民百姓も、天道より御覽被レ成候ては、御心は夫是との差別は御座有間敷、理を曲られ欝憤に存候は、百萬石の加賀守も、田地一反持不レ申候土民も同じ事にて、此所の理非を御立被レ下候は、只今日本國中に將軍家をとりのけ、其外に誰可レ有二御座一候哉、然る所ヶ様の被二仰渡一は、誠に御情なきと申候も理りに奉レ存候、ヶ様の事は是のみに限り不レ申、御代官御旗本領などには幾等も有レ之事のよし承及申候、下民は天道より將軍家へ御預け被レ成、又將軍家より御役人衆へ御預け被レ成被二指置一候事に御座候得ば、御役人衆は御上の御爲に御上の御心に成替り、萬民の理非を明

一　人々難儀と申内、理非の立不レ申候程悲しきものは無ニ御座一候、身體國天下を治め候と申は、萬民に理非を立遣し候事に御座候、惣て人の意地にて理を出られ候得ば、身體をつぶし一命を捨候ても、理を立度ものに御座候、夫故聖人の御代には、寃民と申て理を出られ、鬱憤を抱居申候ものゝ御座候事を殊の外耻としたまへ候事に御座候、文王と申聖王は「一夫不レ得ニ其所一、則思ニ於己推而納ニ諸溝壑一」とて、天下中に一人も理を出られ候て、鬱憤を抱居候者御座候得ば、ぬしの自親溝川へ推込たまひ候様に思召候と申事にて御座候、唯今に於て勿論御役人衆も才發にて、御捌も明白に、御無理は無ニ御座一候得共、殊之外御裁許隙取申候故、田舍の者は其間江戸に逗留仕居申候、其上訴訟人一人のみにて無ニ御座一、名主・五人組・親類・緣者まで證據人に召集られ、御裁許の相濟候まで長逗留仕申候間、入用多分失却仕惡く仕候得ば、一度の訴訟に身上をも潰し申候間、夫をいとひ申候て、大體の事は無理横領に逢候ても堪忍仕、御訴訟不ニ申出一候樣成故、豪强の者其所を見込、人の金子抔を借り候て拂不レ申、又は人の田地抔を横領仕我儘を申、律義の百姓共も難儀に相成申候もの毎々御座候、去々年中も備中の者とやらんに御座候、近所の者へ金子を貸し置、段々催促仕候得共返し不レ申、其上樣々惡口ども仕候故、腹立の餘御當地へ罷出御奉行所へ奉レ願候て、御理判頂戴仕罷歸、其者へ渡し申候處、其者豪惡の者にて御理判も違背仕、金子を返し不レ申候間、重て又江戸へ罷出、御差紙頂戴仕罷歸り相渡候處、御差紙も違背御役所へ罷出不レ申候間、金主又江戸へ罷出、追差紙を頂戴仕罷歸相渡申候得共、尚又違背仕江戸へも罷

御機嫌の克様と奉存候へば、たとへ御上へ下の事を思召候て御尋被遊候ても、御前の御役目に掛り合候者は不申及、其外の者も先は御機嫌の損じ不申候様にと奉存候、又は役人にも當り障りを相考へ、誰人も皆下は豐にくらし候て、上の御恩を難有がり候とならでは御返答不申上候、右樣御座候ては、下のものは御訴訟申上度うい難儀御座候ても、上へは遠く御威光は恐し、御訴訟も不申上、上へは下は常々無事安樂にくらすと計被思召候て、萬々一御政道の御無理なる事御座候ても、如何成明君も御氣付不申物に御座候、下のものは御威光奉恐候得ば、一度や二度二年や三年は、假令非道の御政道にも御違背は不申上候得共、五度も十度も、十年も二十年も御改不被成候得ば、後難儀につめられ御下知に違背申候事も出來仕候、左樣御座候節は、御上には御政道に無理はなきに、下として御下知に違背仕候は惡き奴と被思召、下の者はケ樣に難儀を仕候に御上に餘りに御情なきは御恐しきと奉存候樣に成行申候、是を上下隔斷すと申候て、土崩の勢と申物に罷成、天下一崩れに崩れ候物にて、天下大亂の甚此より大きなる事は無御座候、其譯を有德院樣には能御存被爲遊候て、訴訟箱を御出し被爲遊候より以來、下のうい難儀も上聞に達し、夫々に理非の相立候樣被仰付候、如何計難有がり、誰人も御仁政を不奉感者も無御座候、勿論只今において天下中に御上を奉怨候ものは一人も御座有間敷、御役人衆も皆々力を盡し心を盡し御奉公仕候得共、尚又末々田舍の事は御上に御聞被遊候事も可有御座かと、左に一二條申上候

にて御座候、下情にだに通じ申候得ば、天下はいつまでも太平なる者に御座候、下情が塞り申候と、天下は今日も相知れ不レ申物に御座候、其例し古にも幾等も有事に御座候、漢の文帝唐の太宗、周の世宗、宋の太宗抔は皆下の事を能御存被レ成候故、皆天下太平にて御座候、陳の後主、隋の煬帝、唐の玄宗抔は皆下の事を知り不レ申候故、皆天下を亡し申候、委敷事は大學頭などへ御尋被レ遊候得ば相知れ申候夫故右の聖君賢君は色々様々に致候て、下の事の知れ候様に致申候、大舜と申聖人下の事うい[illegible]せ候へば、拜をしたまへりと申、其外唐の太宗抔は、[illegible]を色々にして尋問たまひ候忠臣は又色々様々に仕候て下の事を上へ知らせ候様に仕候、周公旦と申聖人は、[illegible]と申民の難儀の事を記し候文を作り、又農業の苦勞の事を七月と申詩に作り、成王と申帝へ進め申候、眞德秀と申人は、大學衍義と申書を作り、丘濬と申人は衍義補と申書を作り、何れも萬民の苦勞の事を書記し候て君へ進め申候、其外忠臣賢者幾等も君へ民の難儀を申上候事、書物に載有レ之候事に御座候下の事を上へ御聞被レ遊候事は安き事の様に御座候得共、其だ難き事にて御座候、惣て賤き者の貴人へものを申候は、假令其事の申損じに付て、罪科に行るゝ事は無ニ御座一候ても、威光に抑れて十の物が五ッ六ッならでは得不レ申物にて御座候、まして下萬民の御上へ御訴訟申上候には、筋により重き御仕置被ニ仰付一候事も御座候得ば、百姓土民共難儀に及候事御座候て、御訴訟申上候とも、名主庄屋の前にては十が五ッも申候得ば、名主庄屋は御代官手代の前にて、十が四ならでは得不レ申候、夫より御代官御勘定奉行御老中と、御役人衆段段と傳へ申候ては、十が一も上へ相達し申候得ば大き成る事に御座候、又其内には少々依怙贔負も出來、又は御機嫌損じも可レ仕と奉レ存候ては指扣不ニ申上一候得ば、百の物一ッも御上へは聞へ不レ申ものにて御座候、扨又御役を相勤め、並御側近く御奉公申上候面々は、生れながら富貴に育ち申候者ゆゑ、下のうい難儀は一向不レ奉レ存、假令其内下の事を存候ものに御座候ても、何卒して今日目前御上の

御文德と申、御武威と申、恩威兼備り無二殘處一可二申上一方無二御座一候と申內、私儀方々遍參仕、萬民の存込候所を能く相考見候に、天下の人民御上の御事を難レ有と奉レ存心よりは、奉レ恐候心多候樣に奉レ存候、扨又御威光と申も、唯權高に打叩仕候計にて、正味の所感じ申候樣に、近頃私體愚痴無智の者の不レ奉二憚上一過言の至に奉レ存候得共、恐ながら減じ申候樣に奉レ存候、有德院樣には此譯よく御合點被レ爲レ在二御座一候故、樣々御仁政をも被二成下一、御武威も御勵し被レ爲レ遊候得共、日數もたち候へば、下下の者は又々騷立申候樣に成行申候、御代初の御仁政御武威被二仰出一候て、無二殘處一御政道恐入奉レ感候事に奉レ存候得共、君は下の事を御上には不圖御存知不レ被レ爲レ遊候ても可レ有二御座一かと愚なる了簡に奉レ存候間、萬分が一も御政道の御益にも相成可レ申においては、太平の御代に生れ逢申候て、御恩澤を蒙り申候御報恩の萬分が一にも相成可レ申やと、承及見及申候事を書付指上候事、左之通りに御座候、左に申上候內には、承違ひ覺違ひ可レ有二御座一候得共、不調法ものにて筆は廻り不レ申、過言無骨も可レ有二御座一候へども、其所は御赦免被レ遊、君の萬々一御用にも相達申事も御座候て、御取上も被レ下候はゞ、如何計難レ有奉レ存候

一　君は舟、民は水、水よく舟をうかべ、又よく舟をくつがへし、民能君をいたゞき、又能君を亡ぼすと申候、民の波風起り申候は、下情が塞り候故に御座候、夫故古より下情を通ずると申候事は、天下を治め申候第一の事に仕候、下情を通ずると申候は、下のうい難儀を御上によく御存被レ爲レ遊候事

さゝる爲にて御座候、扨又恩威と申二ッの物誠に車の兩輪の如く、一ッもかけ候ては成不レ申候中に、恩の内には自然と威籠り申候、威の内には恩は籠り不レ申物に御座候、夫は如何と申候に、御上より御恩德の御政道に御座候得ば、下萬民眞實より難レ有や忝や、此御恩には火の中へも飛入可レ申と奉レ存候心起り申候得ば、御威光は自然と强く相成申候、其上右の樣なる心萬民の心によく染入候てだに居申候得ば、假令天下の御武威に少々弱み御座候ても、少々謀叛人御座候ても、天下に少々騷御座候ても、少も御氣遣に成不レ申候、其證據は唐土にては漢の世、日本にては近く鎌倉北條氏を御覽被レ遊候はゞ相知れ申候、漢の高祖と申帝寬仁の德御座候故、天下萬民思ひ付候て天下を取たまひ候より、其後又文帝と申帝猶又仁政を施し、萬民をあはれみたまひ、相續代々民に德を施したまひ候故、十二代目に王莽と申者出候て天下を奪ひ申候得ども、萬民漢の德を難レ有と思ひ相居申候故、又光武皇帝と申帝出たまひ、直に天下を取返し、又十餘代續申候て、其後又曹操と申者天下を亂し申候て、漢の勢甚衰へ申候得共、萬民猶も漢の恩德難レ有と思候心拔不レ申候故、蜀の照烈皇帝と申帝又漢の天下を取立、二代迄持ち申候、前後高祖皇帝より五百年計相續き申候○北條時政は本源賴朝公の執權と申候て、御當家の御大老の樣なる者にて御座候所、泰時、時賴など申人出て、代々下へ恩澤を施し候故、天下の萬民北條氏におもひ付、却て將軍家はなき物の樣に相成、後には後鳥羽院を隱岐國へ流し奉り候成勢に相成申候、其後相摸入道高時と申大惡人出候て、又々天子へ敵對仕、後醍醐院をも隱岐國へ流し奉り、其外惡逆無道に候得共、猶も天下の人其下知に隨ひ候て、天子へ弓引官軍と合戰仕候、畢竟陪臣の身として九代まで天下の權威をとり、其上大名小名も大惡無道の高時が下知に隨ひ、萬乘の天子へ弓引候樣心得申候事、全く泰時、時賴の恩德萬民の心に染込居申候故に御座候　威と申物は、其威光さめして齊しく下は思ひ離れ候ものに御座候、加之小賢き豪傑の者其威光の透間をねらひ申ものに御座候、唐土にては楚王項羽、秦王符堅、日本にては織田信長、太閤秀吉などを御覽被レ遊候得ば相知れ申候、楚王項羽は大勇者の軍法上手にて、漢の高祖を數ケ度苦しめ、三年の間に天下を切従へ申候得共、仁德無ニ御坐一候故、下の者は思ひ離れ、又五年目に直に亡び申候、秦王符堅も同じく勇者にて智謀深く、數年の間に天下を切従へ申候、十萬の軍勢を引具し、晉の國へ攻掛り申候所、唯一夜の間に軍崩れ亡申候、織田信長、太閤秀吉は目前の事にて、誰も存被レ居候事にて申上候にも及不レ申候、畢竟四君共に武威計にて、仁德無ニ御坐一候故直に亡び失せ申候事にて御坐候　御當家の御政道權現樣以來、御代々御明君樣方

奉レ存候人眞實心より起り申候て、御上の御爲には、如何成火の中水の中にも飛入可レ申候と奉レ存候様なる所存に罷成申候、左様に御座候得ば、天下はいつまでも太平なるものに御座候、若萬々一無法もの御座候て、五人や三人御上へ對し、野心を挾み申候ものの御座候とも、少しも御氣遣に相成不レ申候、王者は天下に敵なしと古人の申は此事にて御座候、扨又威と申候は、權高詞高に切突打叩仕候事にては無二御座一候、天下御身體御潤澤にて、御譜代大名御旗本の面々器量才覺發明に有レ之、兵學武藝の達人多く、風儀律義に御上へ忠義を奉レ存、只今如何成大變御膝本へ起り候ても、五萬や三萬の精兵は半日の間にも相揃候御手當御座候て、日本國中の大名小名は不レ申及、假令唐天竺より事起り候とも、力づくにても、智惠づくにても、將軍家の萬分の一にも御敵對申候事は存も不レ寄儀と、皆人存候様に御武威有レ之事に御座候、左様に御座候得ば、天下に如何程豪强の者大器量の者御座候ても、其威光奉レ見候てはおそれおのゝき候て、相工み申候野心も其儘消に相成、手の前へも出得不レ申候、古人の「折二衝于千里之外一」と申、又「消二禍未然一」と申候は此事にて御座候、惣て天下の武備と申者は、武士の刀を指候と同じ事にて御座候、武士の嗜として腰物不二見苦一様に仕候て指候得ば、切剝强盜豪强理不盡の者も自然と恐れ候て近付得不レ申候故、一生人を切申候事は無二御座一候、又不嗜にて銹刀の作無と仕候を指申候得ば、得手して豪强理不盡者に見あなどられ、切剝强盜に付られて刃傷に及候事有レ之候ものにて御座候、夫故武士の腰物をみがき申候は、人を切り不レ申爲に御座候、天下の御武威を御みがき被レ遊候は、亂を興

栗山上書

柴野邦彦著

一　天下を御治め被遊候には、恩威と申二ツに越候儀は無御座候、權現樣天下を得られ候も、天の御助とは申ながら、畢竟此二ツ也、御德御備り被爲遊候故にて御座候、恩と申候は、文德の事にて、天下中の人民御恩德難有や忝やと奉存候樣に御政道被遊候事に御座候、威と申候は、武威の事にて、天下中の人民へ御上の威光を奉存奉憚候樣に御政道被遊候事に御座候、扨恩と申は、知行俸祿を被下置、御年貢納所を被遊候事計にては無御座候、惟天下中の人民、上は大名高家より下は乞食非人まで、誰彼との指別なく、利口のものも、鈍の者も、只一筋にむごや可愛や、何卒して無事安樂にくらせかしと御思召、御慈悲の御心にて御政道被遊候事に御座候、只今天下中の人民大名高家より乞食非人等に至る迄、天とも地とも、父とも母とも奉仰奉願候は、將軍家より外には無御座候なれば、御上に此御慈悲の御心無御座候ては、誰を賴み何國へ手寄可申哉、一日も生活仕事相成不申候、夫故御上にむごや可愛やも被爲思召候御心だに御座候得ば、下のもの其儘骨髓に徹し、難有や忝やと

栗山上書

柴野邦彦著

矣哉、君臣如此、其合禮也、鄙人何容喙於其間耶、夫三分天下有其二分、以服事於殷者、文王之德、儒者所稱也、並吞闔國、而守君臣之禮者、我國風之美、宇宙載籍之所未曾見也、誰可不欣服歌頌乎哉、昔在如南北兩朝、是國有二主焉、宜論向背、當今君委於臣而不疑、臣奉於君而不貳、向背何論之有、其他不多及、有禮經所謹守也、足下請勿復問統、惟亮察、時景金涼佇運、千萬保衛

九月三日

復

松宮俊仍頓首拜

大翰大貳山君足下文几

柳子新論終

得已一二不與時政者、粗述愚見以應來命如左、原夫本邦君臣之定分、猶天地之不可易也、人々尊皇胤之心、各具其性、故其勢應揚龍飛、得掌握海内者、不敢朶頤神器、是以開闢以來、至于今日、大號赫々、炫燿於四夷、何謂皇統如綫乎、如夫西域、雖聖王布德、而子孫不能永世有其位矣、性具之俗風有所不同也、是漢人之所不知焉耳、但時勢之不齊、聖君不世出、人材亦難獲、粃政來災、王綱解紐、四分五裂、蜂起鼎沸、王人不知武、不能統一之、威權漸移武將、自然得之、已而文官大妬士氣之盛、欲貶武威以復舊、而不自知量、謀破身死、而致天子巡狩之變、雖是出於武臣橫逆之甚、然天實不之與也、如無禮講之戲、足以觀其器識不堪成大事矣、其號則似憂君、其實則欲成己之私者也、天不之與、亦宜矣哉、當識文官執權、反不及武家之治術、觀平家之速亡可見焉、恭惟中世以還、至治之盛莫今日若也、然而比之聖人之政、以擧求全之毀、則何時乎得無所議、亦可小容忍也、夫權與利固小人之所爭、天下之權自移於武家後、爭奪攻伐總在于下、翡翠爲羽所殺、麝香爲臍隕命、戰勝功成、而堪成治之器者、乃就請封冊、豈非世世獲賓臣之道乎哉、足下所嗚咽呑聲者、獨祿利也耳、抑亦末矣、且也其於有宮殿營構、及非常大禮、則無不盡天下之力役以調貢焉、有何所不足乎、爾過爲之憂耶、僕所申眉路者、獨名敎也耳、方今雖女主之婥約、亦履天位而不危矣、豈非泰山之安乎哉、僕嘗潛傳聞、櫻町天皇、有東照神君鎭下仰上之功勳、永矢不諼之勅諭焉、嗚嘻曉時勢之明主

大知己主鈴菅君足下

復二山大貳一書

醫醫横地生袖二一小冊一來示、曰、是足下書庫之所レ藏也、僕受而卒レ業、有レ所二感發一、少加二愚評一、卷末繫二一語一、以示二醫生一、不レ料瀆二電矚一、特辱二諭教一、披レ緘懷慕懷々、以レ僕爲レ足レ可二討論一、而見レ質二高見一、病拙何敢當二其望一、第嶽レ不レ見レ鄙、敢不レ拜レ德 因再顧二新論一、作者晦二乎其名一、故愚潛嘆二其不一レ失二君子衛レ身之誠一、而今足下欲三直與レ僕論二當世之事一、戾二前修之用一レ心、而有レ似レ犯レ居二是邦一不レ非二大夫一之禮上者甲、何也、僕嘗聞、昔有二燔レ書坑一レ儒焉、雖三是固出二於秦之苛政、李斯之剛愎一、然儒者誇二己才能一、漫鼓二脣吻一以議中朝政之所上レ匿也耳、近日京師神學家竹内某、以二失言之罪一被レ逐、亦其類也、是以愚不三敢全置對一、假令被二婉曲爲一レ說之誚一、亦追二夫子禮一於沓一之躅上、則所レ不二敢辭一也、但爲レ承二勿レ所レ錄之懇一故、不

初、繼天立極以降、列聖相承、[illegible]疊之德、以能維持其風、而大布播其化者、幾乎二千載、景雲擊壤、民莫得而稱焉、可謂一定權衡、能推萬方之外者矣、至於叔世、此道漸衰、保平壽治之難、王綱解紐、鎌倉兇逆之餘燼、禮樂塗炭、遂釀成陪臣專權之禍根、當此之時、殺身成仁者、獨有楠公之忠耳、下及足利氏爲政、君臣失位、冠履倒置、傑豪梟帥割據四方、而天下之亂極矣、天朝之尊、猶且無所容趾、則徇欲懷利之賊、其孰不復窺覦者耶、嗚呼風俗之敗、一何至於如此也、足下謂之泰山之安、吾未知其何以也、動極而後靜、皇嗣幾存、才復其祀、尊則尊矣、如其奉則曾不若一大夫之祿、吾每聞之、輙至嗚咽吞聲也、且也足下所謂人臣官階之權、省中之事則吾不知也、在外多出武臣私議、而濫授非其人、名實相乖者、莫斯爲甚、若其出公議者、武弁之徒蔑視如徒役、雖不敬之至矣、無之能非者、權將何乎有哉、若夫不視租稅財貨之利、爲上謀則善矣、抑不復有兆民者乎、而與其事者、亦唯濫授非其人、則凍餒之患、加以苛刻之刑、民業爲之廢、地力爲之盡、苟反身而誠者、孰不爲疾首蹙頞乎哉、夫如是、而委之風俗與時勢乎、是豈異於所謂執刃殺人、而曰非我也兵也者哉、如之何得謂世有聖主發賢臣之德耶、及皇威下能合制諸侯、君子重其義、小人賴其利、雖然率多承軍國之制、而未復冠冕之政、以故名有未正者焉、言有未順者焉、是特有道之士、所爲不慊已、足下誠能投著聖賢之肺腑、則固自知之矣、何必待僕之辨哉、唯夫野人議乎朝政、爲有僭踰之罪、則想足下婉曲爲說者歟、僕特欲以公道論此

柳子新論附錄

與松主鈴書

久有泰斗之望、而未得一面識、非室之遠、豈相思之未深歟、屬與橫岡手周旋、愈益得聞高誼、价以修字於左右、勿罪不恭幸甚、僕嘗藏先人所獲新論者、居常謂願待同志論定、而後爲永世之珍、與橫子論文之餘、言偶及此、則其書爲足下所披閱、且見跋其後、而亦以深謀遠圖稱焉、是旣與僕所見者似矣、則得而討論者、非足下而誰也、夫是非之論以私則異矣、以公則不焉、僕唯欲以公道論也、不欲以私意矣、如兩都向背之論、足下謂有俗風有時勢、不可懸一定權衡以推萬方、僕則以爲不然也、何則俗風不可改者、蓋在下之言爾、苟陶鑄天下者、何所忌憚而拘拘乎茲哉、古曰移風易俗、又曰舊染汙俗咸與惟新、唯時勢則固不可若之何者也、然聖人亦因此、以爲敎其中、而姑處之以權、漸變之以令至於道也、不則禁何因乎止、令何因乎行哉、然則陶鑄天下之道、並時勢與風俗、共置之術中者也、夫道一而已矣、不得已而後權焉、若不然而諉曰時勢附風俗爾、則是爲人所化、而不能化人者、將何以能御天下哉、後世敎化之陵夷、風俗之頽敗、職此之由、足下以此爲漢儒偏見者、僕竊不取也、恭惟古者盤余天皇、龕定區宇之

柳子新論後序

瑰奇卓異之士、埋沒于世、而人莫識之者、以其被妬嫉讒害、而不能發其抱負也、柳子新論者、山縣昌貞之父、獲之於隴畝間石函、其書凡十三篇、論政體可否、雖未盡醇、慷慨激烈、切當時之弊矣、我邦自保元平治之亂、王綱解紐、禮樂壞廢、群雄割據、四分五裂、蔑如王室、擅柄權、臣殺其君、子殺其父者有之、至織田氏之時、醇樸溫厚之風、斷乎拂地矣、柳子豪傑、憤其如斯、攘臂於其間、鯪辨劇論、欲救當時之弊、故其所議未能無小疵、然其意在尊王室懲亂賊焉、嗚呼懷如斯瑰奇卓異之才、無所施其能、埋沒於世而莫識其姓名者、幸因昌貞之父獲之隴畝間、斯書得永存乎世、豈非千載之知己乎、余喜其志尊王室懲亂賊、而恨議政體之不醇焉

天保九年戊戌冬十有一月冬至日

江戸　芙山々人橘正秀撰

柳子新論跋

野人議ニ乎朝政一、爲レ有ニ僭踰之罪一、故君子愼焉、官吏晦ニ於治道一、不レ免ニ於尸位謗一、故哲人愧焉、是以學者之憂レ世者、有レ論ニ政事一則或託ニ言於異人一、或爲レ得ニ諸古塚石棺中一、蓋神レ之以取ニ信於人一、奇レ之以求レ加レ價者也、讀レ焉者有下自曉ニ其非一之益上、而議レ焉者無下被ニ罪於非ニ其任一之憂上、一不下以空中錫ニ特智一之天眷上、一無ニ以失ニ君子守レ身之慮一、可レ謂ニ一擧兩得レ之者一矣、適讀ニ斯書一深謀遠圖殆似矣、但惜至ニ於兩都向背之論一、有ニ大不レ然者一焉、蓋未ニ投ニ著於聖賢肺腑一、不レ察下有ニ俗風一有中時勢上、而不レ可レ懸ニ一定權衡一以推ニ萬方一、漢學儒風之偏見爲レ祟者耳、恭惟方今天朝之尊也、高坐ニ九重雲上一、掌ニ人臣官階之權一、而不レ管ニ租稅財貨之利一、世々有下聖主獲ニ賢臣一之德上、而逆賊梟帥斷下朶ニ頤神器一舐ニ糠大寶一之念上也、寶祚之愈長、益與ニ天壤一無レ窮、猶ニ泰山安一、天下有道之士、倶皷歔皷喜、誰不レ爲ニ頌賀一焉乎哉、乃其於レ所レ論、不ニ自揣一粗加ニ愚評於其上一、秘ニ之篋底一、以俟ニ識者之斷定一云

寶曆十三癸未初秋中澣　下毛野　松宮主鈴菅原俊仍識

柳子新論跋

吾日本上古之世、穆々乎道其至矣哉、以至二于寧平之間一、治無レ可二復比一也、自二保平之時一而降、覬覦之賊斯起、綱紀漸壞、政敎隨廢、乃穆々之道、覓爲二烏有一焉、及レ至二于勝國之時一、則亂不レ可二得而言一也、夫治亂天也、雖レ然當二斯之時一、若有三上奉レ君下憂レ民之人一、出而施二天誅一乎、賊忽斃矣、道再興矣、嗚呼三四百年間、奚獨亡二其人一耶、意者有レ之、亦不レ得二志於當時一、而湮滅終亡レ聞耶、是未レ可レ知也、柳子新論者、柳莊先生之先人、所三嘗獲二於隴畝中一之書、不レ知二撰者之時代一、先生蓋以爲レ在二織田氏之時一耶上、吾請而讀レ之、其所レ論專所三以繼二寧平之治一之術、而於二彼賊之罔レ極、深慷激憤發者、每事在焉、於レ是乎吾乃曰、其人果有焉、亦唯斯人不レ得二志於當時一、特以終レ立レ言耳、悲夫、吾於レ此雖レ欲レ無レ歎、而可レ得乎、斯書也吾思二其不レ可三以一日無二焉、因乃謄二寫一本一、而又題二微言於其後一者爾

寳曆甲申春三月　武藏山田穀識

民皆不從、而曰、君使鶴、今人君之所愛好、亦皆將然、夫如此而不自悟者、何也、聚歛之臣補之欲、貪戾之吏飾之非、使道義之言不得入耳、知力無所益、德性無所養也、古之人目短於自見、故以鏡觀面、智短於自知、故以道正己、人君之學、不在身脩六藝之文、不在口誦百家之言、苟知道之可信、斯足矣、知道之可信、則知道者至焉、至焉而信之、姦賊將何自而興、國無姦賊、則天下之難已矣

駒嶽之陽、鬴水之曲、吾家居之、六世焉、享保之初、數被水患、修築不及、因移其宅、故地種以菽麥、畝間偶獲一石凾、中藏錢刀、皆元明以上所鑄者、函底有一古書、題曰柳子新論、腐爛之餘、不便披閱、先人乃謄寫一本、凡十三篇、當時既有歷校定者云、後廿餘歲、先人歿矣、余得而讀之、其言論政體可否、間有可取者焉、亦多憤勵之語、意者中葉以降之作耶、觀其斥耶蘇幾何之類、蓋亦在織田氏時耶、按之國史傳記、勝國以上姓柳者不一而足、則亦未可定何人所爲也、余且惜衰亂之際、尙能有斯人、亦有斯文、而煙滅至于此也、但以先人手澤存焉、憚示諸外人、於是更繕寫一本爲副、北藏之巾笥、庶幾俟良友論定、以爲永世家藏也

寶曆己卯春二月

峽中山縣昌貞識

甚者逆折數歲之入、尙且不足、而取之大夫、大夫不足、而取之士、士不足、而取之妻孥、豈啻國非其國耶、一旦奪之爵、使其盡償其債乎、雖易子折骨、吾知不能給一飯也、夫如此、則何以能藩屛于王室、而固其封疆耶、是以其士日窮、其民日叛、忿怨激發、自不能無陵犯之心、然國因貧、兵因弱、不能屈彊自奮、屛息避之、則天下實似無容慮者矣、闇愚之主、乃以爲彼貧而我富、彼卑而我尊、則以盤石之固、居泰山之安、治平之術莫以尙焉、姦臣賊吏、聚歛附益、以悅其心、阿諛逢迎、以順其旨、甚則比之唐虞三代之治、爲雅爲頌、曾無有箴規之言、而使其自誇其智、自伐其德、無知事情、無知時勢、則闇者益闇、愚者益愚、而亡在旦夕、而不自知之也、夫大木之折、必由通蠹、大堤之壞、必由通隙、而不加之疾風暴雨、則不折不壞、然以無風雨、不危其蠹隙者愚之至也、且夫渴馬而馭之、非眞馭之也、得水草則益逸、饑虎而伏之、非眞伏之也、見肥肉則益猛、是不特馬之與虎也、鳥窮則啄、獸窮則攫、尺蠖之屈、以求伸也、龍蛇之蟄、以存身也、當是之時也、英雄豪傑、或殺身成仁、或率民徇義、忠信智勇之士、誘掖贊導、以扇動天下、則如饑者就食、渴者就飮、奮然而起、靡然而從、勢自有不可禦焉、洗冤雪恥之心、感恩圖報之志、奮勇勵義、則放伐之易、可謂通蠹之木、通隙之堤、加之以疾風暴雨者矣、至此始知嚮之所謂泰山之安、不特幕燕之危也、是其所以損益之理、蓋可見、而存亡之機關於此焉、故有國家者、不以無益害有益、則人君之事畢矣、昔衞公愛鶴、有乘軒者、及其有難也、

舟者、天下之至難者也、然上之所好、不令而爲之、無它、爲獲於人之難、而欲之之甚也、況其非至難者乎、苟能好之、重趾而至焉耳、不爲此而爲彼、要無心於興利也夫

富彊第十三

柳子曰、食足謂之富、兵足謂之彊、富且彊者、天下之大利也、食既足矣、兵既彊矣、而後國可以無虞也、是以先王不貴珠玉、而貴稻粱、不愛姬妾、而愛黎庶、不以無益害有益也、故盤石千里、不可謂富、衆人百萬、不可謂彊、盤石不生粟、衆人不拒敵也、地廣而乏食、民衆而不使、奚以異盤石與衆人哉、是不特天下爲然、諸侯之於國、大夫之於家、士之於妻孥、無不皆然也、故聖王不怖其寒、而能蔽民之寒、不厭其饑、而能救民之饑、所以非飲食、惡衣服、而人無間然也、易有之、損上益下、益之象爲然、損下益上、損之象爲然、天地之至理、自有如此者、闇君庸主、務弱其國、務貧其民、故有天下、則天下爲之怨、有一國、則一國爲之怨、怨則叛、叛則滅、如此而難不及者、未之有也、古稱國無九年之蓄曰貧、無六年之蓄曰窮、無三年蓄、曰國非其國、夫其蓄積豈特爲自養哉、亦將以救其民、備其難也、後世有國者、或無一年之食、

賢、不善知此道者、謂之不肖、善行此道者、謂之仁、不善行此道者、謂之不仁、故所謂仁者、亦謂能興其利、能除其害也、若夫世降國衰、上無聖賢之君、下無忠良之臣、則禮瀆樂淫、而刑罰不可勝用焉、徒知除害之道、而不知興利之道、徒知制變、而不知守常、徒知撥亂、而不知致治、又何仁之有、又何德之有、是奚爲能爲政哉、且夫刑罰者、豈特禁民之爲非而已耶、苟爲害乎天下者、雖國君必罰之、不克則擧兵討之、故湯之伐夏、武之伐殷、亦皆其大者也、**唯其出於天子、則爲有道、出於諸侯、則爲無道、況其出於群下者乎、故善用之則爲君、不善用之則爲賊**、向者使湯武、志徒在除其害、而無心於興其利乎、此亦爭奪利己耳、其何以爲仁也、是故湯武放伐、在無道之世、尙能爲有道之事、則此以爲君、彼以爲賊、假令其在群下、善用之以除其害、而志在興其利、則放伐亦且可以爲仁矣、無他、與民同志也、由是觀之、長天下國家者、有文而後武可言也、有禮樂而後刑罰可行也、不然徒刑之與罰之任、則非戕賊夫人而何也、哀哉、衰世之爲政者、無文無武、禮刑並廢、不止無心於興其利、又無心於除其害也、夫無心於興其利者、必以自利、無心於除其害者、必以害人、害人自利、虐孰大焉、是以亂國之君、力利其國、以害人國、大夫力利其家、以害人家、士力利其身、以害其僚友、甚則君亦自利其身、以害其民、大夫自利其身、以害其家、是之謂自屠其弱、必至滅身已、故我東方之政、壽治之後、吾無取也、聖人憂其如此、制禮作樂、立中道和、務興其利、務除其害、衆庶可保、比屋

其不繇貴賤者、食貨之政、所以不可無也

利害第十二

鞅子曰、爲政之要、不過務興其利、務除其害也、利也者、非利己之謂、使天下之人、咸被其德、由其利、而食足財富、無所憂患、無所疾苦、中和之敎、衆庶可安、仁孝之俗、比屋可封、是之謂大利、其反之則害、害不除則利不興、故古之善治國者、務興之、務除之、而後民由之、興之之道何如、曰、禮樂也、文物也、除之之道如何、曰、政令也、刑罰也、夫此二者、惟君自率、惟君自戒、而後民從之、不啻君自率、實奉天之職、昔者禹自率諸軍、以征有苗曰、非惟小子敢行稱亂、蠢玆有苗、用天之罰、湯旣克於桀、有其位、方其天大旱、則曰、萬方有罪、即當朕身、朕身有罪、無及萬方、不憚以身爲犧牲、是皆非以求其富貴、干其福祿、安其心志、樂其耳目也、務興天下之利、務除天下之害耳、古之聖君賢主、孰其不然哉、雖然、務興其利者、非其道則不興也、除其害者、非其道則不除也、可由之謂道、禮以敎中、樂以致和、中和之至、天地位焉、萬物育焉、豈非興利之道乎、惟民之蠢々、或失所其由、而過亂自取、則從而罪之、除其害之道也、夫然後懲其惡、勸其善、爲善者多、爲惡者寡、則天下之利興矣、禮樂文之具也、刑罰武之事也、文以守常、武以制變、文以致治、武以撥亂、是故文順、而武逆、順而興利、逆而除害、順逆互用、以能陶鑄天下、善任此道者、謂之德、不善任此道者、謂之不德、善知此道者、謂之

逸居終歲、奢侈過其分矣、是其害乎制令者五也、五者皆害乎天下之事、而財爲之不通、貨爲之不足、豈可不禁乎、敢望立公侯以下常制、聘幣有數、問遺以禮、却饕餮之族、移貪賺之俗、犯者刑之、蒞者罰之、則高貴者必廉、而卑賤者必直矣、夫然後公侯能守其社稷、卿大夫能保其祿位、士與庶人能安其身、以及其妻子、是誠天下之大利也、俗吏之計不出此、一切行打算費用法、汚朝浼士、妄與民爭利、上附勢利之人、下受制於賈竪、使天下之財日不通、食日不足、而身自窮者、可謂至愚矣、苟有議政事者曰、通財足食之道、既得聞命矣、敢不敬從、唯夫物之有貴賤、如不必由多寡然、古者米石二兩、尚且不以爲大貴焉、今也價不過其半、而饑乏倍之、民有菜色、野有餓莩、敢問其故何也、曰、是亦易知已、夫食貨之有軒輊、猶權與衡平、多則賤、寡則貴、理之所必然、而且反之者、抑亦有說焉、今年穀之不登、將倍於古、是以死者如亂麻、而錢貨之不通、亦且三倍於古、雖則食之不足、其數實多於貨、是非物重而權輕乃使然也、況乎吏之貪戾、力竊民之腴脂、强約國家之用、貴貨賤食、日畜積錢鈔、歲減鉅萬、則紅腐之米、徒爲富商驕傲之資、委積之財、曾不給窮民一朝之食、當此時也、雖有常平義倉之良法、何以得而行之哉、居然待其斃焉者、可歎可慨、莫斯爲甚矣、是豈特民爲然、士之受俸祿者、亦唯糶於賤、糴於貴、出入枉費、徒爲商賈之利、則一歲之入、卒爲他人之有矣、是豈天地之自然哉、財貨之不通、抑亦人爲之使然也、久之不變、至於聚斂云盡、則石不直一錢、亦猶以爲饑歲、是其不關豐儉者、是

其半矣、且地之肥瘠、如有常者、亦未必不由人力而加以水旱之災、則有古之所謂膏腴不若磽确之地者、況民力之所加、專於薄賦之田、而租稅之所增、偏在豊穰之地、則今之實田、上者直不如下者、乃其買之者、亦唯擇其下者、而不求其上者、夫田之有上下、以分其所入多少、而今或反之、吾未知其何故也、若今更正其溝洫、改定上下之等、因計數歲之入、以爲租調之法、令計吏不得逞私智、則民業必安、而農事必畢矣、是其足食通財之道爾、然則天下之大利、豈止此而已耶、曰否不然、今天下之士大夫、託請得官、納賂取貴、則饕餮之族、盤桓于廟堂之上、貪賺之俗、羅織于輦轂之下、故士庶人之贄、或破一家之產、卿大夫之贈、率傾一歲之俸、贈之者多、而酬之者寡、則貨皆聚威權之門矣、乃士大夫之欲立其身者、十室之邑、儋石之俸、奚足以養其妻孥哉、是以其志仕進者、唯欲其富、羨其利、貪慕之情一萌、而廉恥之心罷矣、其害乎敎化者一也、又其居權貴者、不必無慾、而贈之者、不必無辭、則不得已而受之、及數贈數受、則不能必無回護而薦之、擧之不必問其賢愚、是名稱選人、而實爲賣官者矣、其害乎政事者二也、且士大夫之在官者、已以賂得之、則其於人亦不能必不然也、故善賂者好之、不善賂者惡之、宦官宮妾、乘之以貪其利、以達其欲、忠信之士退、而貪戾之俗進矣、其害乎風俗者三也、求事者唯乘彼欲、啖之以濟己事、則權勢之家、轍跡不絕、而罷官之門、雀羅可設矣、是其害乎人情者四也、權勢之家、其臣妾之有寵者、固亡論已、至於僮僕奴婢之屬、亦皆受其私、而富其財、食肉衣帛、

歸之、夫然則天下之貨爲之不足、而財爲之不通矣、是以當世古錦之美者、方寸或値千金、刀鍬[illegible]

之精者、一枚或當萬石、故士之有秩祿者、終身不能服其美、而累世不能用[illegible]

器玩爲然哉、薪蒭魚鹽五土之利、至於鍛冶陶鑄百工之事、一爲商旅所占、[illegible]不可端

倪、而天下之弊、悉集于市鄽之間矣、故今之世公侯百里之國、不足恤其孤獨、卿相萬戶之封、不

足以憐其矜寡、大夫不足以治其家事、士不足以養其妻孥、農工皆不足以償其債、不足則假

之商賈、一歲之息、或倍徒其母、除衣與財、以及妻孥爲質者、天下之不利孰大焉、當此之時、俗吏

之爲政、群議終日、卒不能得一策、徒務聚斂附益、取此忘彼、忽々奔走于東西、曾不能制一

賈豎、亦何益於一朝之食哉、然則如之何、曰、商者天下之賤民也、天下之賤民、而居天下之豪富、

食肥衣輕、固非其所也、而縱廢居天下之財、出納天下之貨、罪不亦大乎、何不建其官、立其

法、使之與農共食、與工共居、凡百玩好、一切禁之、高閣重門、一切止之、不從者刑之、不

改者罰之、賣之者多、而買之者少、則所居者必廢、而所聚者必散、散者多則不售、不售則必減

其價、而後能辨其眞贋、能明其精粗、多利者征之、多畜者賦之、如此則物價自平、而貨財自通矣、

且其治農者、豈田必百畝、稅必什一、而後爲薄乎、叔世立之法、上石稅四斗、中石稅三斗五升、下

石稅三斗、率以爲常、若計豐儉而收之、其於今之時不爲甚厚焉、然如數十年來、窮民或不

給培養、而田蕪野荒、其所得什已減二三、而吏之所檢、剝扶幾盡焉、則比諸勝國之時、所損既過

黨、王道蕩々、無黨無偏、王道平々、治民之謂蕩、治國之謂平、豈非無偏無黨之謂耶、今之爲政者、其爲蕩々乎、其爲平々乎

通貨第十一

柳子曰、足食之道、莫先於勸農事、通貨之計、莫先於平物價、不厚稅斂則農勸矣、不縱商利則價平矣、古之時帝王能勸其農、故夏五十而貢、殷七十而助、周百畝而徹、制乎雖異、而實皆什一而已、後世乃有租調之法、率亦什稅一二、賢人君子尙且以不若古道也、其平價者、周官有司市質劑賈師泉府之職・鹽鐵茶馬之征、奕世莫不置議矣、輓近以來邦國之租、或什收五六、加以調與庸、則稼穡之力、卒不能償其費、是以田野日荒、農事日怠、怠斯窮、窮斯濫、濫斯軼、軼而不復、則年穀不登、而食不足矣、唯夫商賈則不然、價賤則居、價貴則廢、廢居在己、而利如掇矣、且大商之食人、動至千百、奴隸臧獲、衣帛食肉、徒手居肆、擧止亦何勞之有、況其所用、凡百器玩、鏤金彫玉、無貳無雙者、實府充庫、娥眉皓齒、有容有姿者、滿座盈席、其餘金帛藏而不發、納而不出、倚疊如山、委積如丘、買地買宅、一夫或私千戶、賣房賃舍、一人或占鉅萬、居之者不厭、而置之者無損、故一商廢居、輒傾一國之入、狡猾之才、揣摩之術、無禁無制、唯其所欲、則其富幾與封君相抗、故天下之異樹珍禽、絕世奇怪之物皆歸之、錦繡綺縠、華美輕輭之物皆歸之、珠玉歸之、金鐵歸之、膏粱肥肉歸之、美果旨酒歸之、巫醫工匠歸之、俳優雜伎百爾技藝者亦

果レ趾、積レ糈如レ山、賽錢如レ土、居レ之者不レ貢、賣レ之者不レ征、異服之不レ譏、異言之不レ察、市纒ニ波斯之槪一、府積ニ金帛之美一、茶肆酒肆接レ簷、地無ニ青艸一者、方數十里、是以天下之民、去レ鄕去レ國、競而歸レ之者、猶ニ蟻之著一レ羶、日不レ知ニ其數一、則人益多而土益狹、城闕之外、率步不レ容ニ一人一、是皆逐レ末倖レ利之徒、至ニ耕織務本之民一、則掃然無レ聞矣、是故都下之給ニ衣食一、日盡ニ鉅萬一、養レ金薪レ玉、猶且以爲レ慊焉、乃闕外四野之民、輸運千里、盡レ力竭レ財、行役數歲、田蕪野荒、夫廢ニ其鋤一、婦能ニ其機一、唯末之逐、唯利之求、亦何暇恤ニ其妻孥一哉、古人有レ言曰、一夫不レ耕、則天下有下受ニ其饑一者上、一婦不レ織、則天下有下受ニ其寒一者上、乃窮民之無聊者、或挾ニ異術一、眩ニ惑愚人一、或憤怒激發、劫ニ掠正長一、甚則有下踰レ壘登レ城、逼ニ訴其主一者上、亦皆爲レ之則得、不レ爲則失故耳、如ニ今之俗吏一、生在ニ輦轂之下一、唯見ニ此富足一、而未レ知ニ彼窮乏一、輙曰、古今之盛世也、天下之美士也、殊不レ知下陰陽泰否、變易不レ居、益ニ乎此一、則損ニ乎彼一、天地之至理上爾、一旦有ニ不測之難一、旌旗掩レ目、金鼓駭レ耳、矛戟當レ前、矢石接レ後、騎卒並奮、而水火乘レ之乎、不レ知ニ其將下出ニ何謀一也、拒レ之者吏士、禦レ之者卒徒、亦皆群聚瓦合之兵、進退唯見ニ厥利一、則揮レ鞭而走、負レ旗而遁、固可ニ以前知一也、況士人之所レ使、奴隷輿夫之賤者、亡命無賴、無レ勇無レ義、或出ニ刀鋸之餘一、傭力糊口、寄寓爲レ生者、尙何望三其爲ニ出制一哉、以レ此爲ニ緩急可レ使者一、不ニ亦愚之甚一耶、是皆見ニ一時之小利一、不レ慮ニ後患一、人窮民憂、而培ニ養禍根一者爾、故古之治ニ天下一者、務平ニ其利一、務贍ニ其窮一、廣及ニ四國一、推達ニ四表一、而後民安ニ其土一、人專ニ其業一、是以世長清平、而國日富庶、書曰、無レ偏無

若以彼可安、易此不安、則必不然也、安之之道何如、曰、今之爲政者、概皆聚歛附益之徒、蒙其禍者、獨農爲甚、若能用循廉之吏、無奪農桑之利、則天下食足矣、天下食足、而後民安其業也、又用循廉之吏、無縱商賈之利、則天下財足矣、天下財足、而後士安其職也、士安則國强、民安則國富、國强且富、天下之福也、夫然後禮樂可興也、賞罰可明也、是之謂安民之道、是之謂長久之策

守業第十

柳子曰、夫民之居業也、父子相承、世々不變、各安其土、各治其事者、先王之治也、是以上古之民、能知其道、而力其業、食以此足、器以此堅、財以此通、用之者無損、爲之者不乏、季世則不然、士之祿不如農之利、農之利、不如工商之富、工商不如巫毉、巫毉不如浮屠、而俳優倡伎、別得一封疆、幾何外道、更開一乾坤、卽民之汲々乎、孰能脩其業、而守其事者、逐利而走、隨欲而變、昨荷耒耟、今則販鬻、朝執鑪錘、夕則呪咀、鶡冠之士忽羨倡優之態、息心之侶、或奉耶蘇之敎、彼其庸夫、固不知是非之辨、亦奚遑問其邪正哉、居此則危、入彼則安、爲此則窮、爲彼則達、見利而進、見害而退、衆人之情也、卽今之俗吏、何以能禁焉、且也如大邑通都、邸第官舍、連甍繞城、飛閣接天、卿相居焉、侯伯朝焉、結駟連騎、絡繹不斷、轂擊肩摩、襟袂爲幕、自俳優雜劇舞伎侲子之屬、至使熊狙工支離盲聾之徒、視者如堵墻、巫覡符章、浮屠念誦、乞者接踵、求者

而赴溝壑者、避不可免之患也、敗軍之將、引刀而自決者、愧不可雪之恥也、以此觀之、安危苦樂之切於身、甚於死生也、今天下之諸侯國不同其政、人不同其俗、而不學無術之徒、徇目前之近利、而忘經久之遠圖、賦斂不省、刑獄不措、法令無常、賞罰失中、則民之不遑寧處、去此就彼、出彼入此、恟々唯其免之求、是以四方之國、亡命滅跡者不少、而土著之風變、群聚之俗興矣、仲尼之言曰、道之以德、齊之以禮、有恥且格、道之以政、齊之以刑、民免無恥、又曰、君子懷德、小人懷土、君子懷刑、小人懷惠、苟有愛民之心、亦盍爲之處耶、嗟夫今之用刑、雖不由先王之法、而其處事論罪、不必爲不當也、至如磔梟火刑、則蠻夷之所爲、加之以族滅、而酷極矣、故燔一家、則身既灰、殺一禽則族頓赤、彼若盜長陵一抔之土、吾未知其以何加之也、雖然、死一而已、日減其口、月損其戶、而國受其弊則已、若夫放逐削跡籍沒滅死一等、則似寬而實太酷、是唯承割據之遺、而立苟且之策者、要非統一之制也、即重罪過惡者、逐於左、入於右、放於前、居於後、雖則懲之乎、無產無業、不可如其身何、則竊盜劫掠、一出于不得已、是奚在除其禍哉、假令其禁錮無所處身、則不若絞斬即死之如忘矣、夫然則窮者日多、而仁不及、賊者日衆、而刑不及、既不安其可安、又不懼其可懼、必至有窺窬之徒矣、且今天下之士與民、固非不愛其君也、又非不懷其土也、然苟不安其職、則旁爲奇邪之行、不安其業、則變爲末利之計、彼皆厭此不安、而見彼可安、譬諸火就燥、水就濕、其曷可拒乎、

唯是冀北之群、未三曾遇二伯樂一顧一、則慷慨悲歌、徒憤二死于巖穴草莽之中一者、亦幾許人也、昔燕王聽二郭隗之言一、而能信三駿骨値二千金一、則天下之賢士無レ不レ應二其徵一矣、可レ見三好レ賢之至驗、疾二於影響一焉、雖二今之時一、苟有下能好レ之如二燕王一者上、士亦豈不レ願レ造二其門一哉、唯夫科擧之無レ法、而使下能者屈而不レ伸、不能者强爲中不レ欲之事上、而責以レ無二其人一者何耶、是特揚下無レ益二于國家一者上、而抑下有レ用二于天下一者上、曷以爲二勸レ士之道一、亦曷以爲二安レ民之道一也

安民第九

柳子曰、魚之在レ池也、無レ不レ思二淵藪一、鳥之在二樊籠一也、無レ不レ思二山林一、無レ它、皆其所二自安一也、即民之於二天下一、豈不二亦然一乎、先王知二其必然一、視レ之如レ子、愛レ之如二手足一、故爲二其可一レ安、而民安レ之、爲二其可一レ樂、而民樂レ之、其既安矣、又既樂矣、是以民之視二先王一、亦猶レ視二其父母一、孰不レ歸二其仁一者也、詩云、愷悌君子、民之父母、今夫浮屠之爲レ敎也、曰、生爲レ善者、死入二樂地一、百福並臻、其爲レ惡者、則墮二地獄一、苦惱無レ窮、苟聽二其說一者、無レ不三駸々乎勸二其善一矣、無レ不三愀々乎懲二其惡一矣、是亦無レ它、欲二其所一レ安也、夫天堂與二地獄一者非二親見處一、而非二必到地一也、尙且聞二其安樂一、則喜レ之、聞二其苦惱一、則懼レ之、徒喜二懼之一已哉、甚焉則棄二妻子一、舍二貨財一、不レ患二饑寒一、不レ怖二斧鑕一、視レ死如レ歸、唯其不レ避之愛、是亦無レ它、生不レ如レ此、則死不レ安也、以下不二必可一レ得之安上、斷二不レ可レ忍之欲一、比三諸魚鳥之思二淵林一、豈不二亦甚一乎、且人有下不レ可レ免之患、與中不レ可レ雪之恥上、則必曰不レ若レ死也、凶年饑歲、走

其容、勤學其伎、習其[illegible]至於朝廷祭祀[illegible]之[illegible]
美善盡于此也、觀[illegible]音也、無節無制、[illegible]不[illegible]、宮商無序、非和非應、相喚相叫、曾
鳥啼猿嘯之不若也、[illegible]則不文不武、進退無法、周旋無度、歌則侏離鴃舌、無興無趣、無景無
情、託夢託妖、亦何意義之有、若其絲竹可和者、則緊手數節、靡々褻慢、中冓之言、尚可聞也、斯
言之鄙、不可聞也、亦唯上之所好、下必有甚焉者、則其移風易俗、疾於置郵傳命、諸如此之
類、可恥而不愧、可惡而不憎、士氣之衰窮矣、夫士非忠信、則不可以與政、非廉恥、則不可
以處事、此四者、志以固之、氣以達之、若志氣兩衰、則皮之不存、毛將何附、果如此耶、假令其
有才有藝、文以衣冠、而唯是優孟耳、何以爲君子、何以爲士大夫、是豈非編伍無法、而雜于猾良
之弊耶、唯如巫醫百工、與藝苑衆技之流、則有異焉者、何則以其爲國家之用也、夫人之於技
藝、有好惡、斯有能不、其好而能焉、則妙年或稱奇異、不好而能焉、則童習白粉、奚可以誣乎、故
先王之立教、有師有官、選而舉之、登而庸之、而後天下無有遺才矣、叔世則不然、凡名一
才一藝者、幸一蒙擢拔、則無問能與不能、子孫奕葉、相嗣爲一家之業、欲已而不能、是以强治
其事、則不以此爲桎梏者、盖鮮矣、亦奚得能窮其蘊、而成其名者乎哉、後世官家忽々乎無出

所管、下有所由、綱擧目張、不容掛漏之謗、而後土著之俗成、刑措之化行矣、其於治國之道、庶乎可以爲一變也

勸士第八

柳子曰、農工商賈之謂民之良、所謂良者、利用厚生、相輔相養、以有益於國家者也、故先王立師以敎之、立官以治之、愛之親之、視之如子、編伍有制、使役有法、推以與士相齒、謂之四民、所以爲良也、若夫倡優戲子、則由人之利、受人之財、以悅人耳目、徒養其口腹、不能爲人衣食、存之無益於國家、不存無害於國家、故先王斥之、不與四民伍、戶籍相別、婚姻不通、是其視民、愛有等、親有差、類分群聚、使之各專其業、以遂其生者、仁之道在焉、後世則不然、薰蕕同器、淄澠一流、良雜相混、戚族無分、編戶之法壞矣、先王之政歇矣、甚焉則倡優或受士祿、無功而富、無德而貴、卒至有變其業立服官政者、原其所由、無非佞幸嬖寵之祟者、汲々乎求之、戚々乎去之、故其行也、逞私智以欺王公、縱利欲以虐庶民、讒慝諂諛、暴戾誣罔、適賊夫良家之子、豈可不悲乎、且士之輕薄者、每與倡伎之徒居、數入雜戲之場、日見其冶容、而聞其婉言、則謂人材無彼若者、歆羨欽慕、遂失廉潔之心、便佞口給、唯優之傚、壯强者爲比老、幼弱者爲燕支、久而化之、則士氣爲之萎薾、鄙俚猥雜以釀成乎宣淫之俗矣、況優伎之操音、非淫哇則殺伐、奪人心志、盪人情性、其傷中和之德、不特鴆與斧斤乎、即今之士大夫、亦不徒聽其音、視

閭之中者、豈不亦悲乎、僻邑寒郷之俗、猶或存古質之風、怖官長法、則尚未為甚矣、至于都下群衆之民、則輕蔑王公、威侮士人、視之如嬰兒、以竊其貨財、以掠其妻孥、詿誤以稱智、剝略以稱勇、為徒為黨、以至于自樹名號焉、官所不能制、法所不能罰、還假之力、追捕佗盜賊、用之謀、制佗暴逆、則彼自誇其為官、愈益侵侮天下之民者、奚知其非借賊兵、齎盜糧之比哉、可歎之甚矣、又有名稱處士、僑居乎市井之間、以技為生、以財自售、而棄其身者、又有名稱浮屠、假廓開場、貸房設席、誘導鰥寡、以治其生者、又有名稱巫祝、搆屋為祠、設壇代廟、咒咀納賽、賣卜求精、以成其家者、此數者、治世必有之人、而郷里所崇、小民所尚、固不為無益也、然彼自處其身、一以為士、一以為僧、為巫祝、出無受令長之教、處無列編戸之籍、則陋戾庸愚、亡命無頼之徒、濫吹其間、而挾奇邪之術、欺人誣民、放蕩縱恣、大開賭場、竊匿罪人、誑誘子弟、眩惑良民者、蓋居其半矣、且也近世之處刑、其罪不至死者、或黥、或羌、或加笞杖、而後籍沒其財、放逐其身、則星散無所歸者、不可勝計焉、而其暴惡、罔非刑所能懲、則不能或自改其過、以就其業、是以欲寄親戚、則擯而斥之、欲託僚友、則禁而錮之、使之無衣食之計、無容身之地、則窮困莫甚焉、小人窮斯濫矣、況其性之所固有、死灰寧不復燃乎、遂群聚郷黨閭里之間、竊盜攘奪、以妨人途、剪徑騙局、以害人生、如此者、亦不為少、是皆蠹賊蒼生、禍及國家者、不可見以為常態也、宜復編五之制、明戸籍之法、令載毛含齒之屬、上有

是無它、官無其制也、故今之民、身日勞、財日空、是以斷然乃謂耕無益於食、織無益於衣、士亦曰、學無益於身、業無益於家、乃廢其事、而奇邪之從、譸張之務、於乎世之逐末者、何其多、而務本者何其寡耶、古者有言曰、上之所好、下有甚焉者、先王察其如此、故貴德賤財、以禁民邪慝、所以教令明於上、而風俗美於下也、今且須置官立職、抑末復本、奪商賈之權、與農工之業、而後士氣漸復、各樂其所為生、則四民得其處、而天下居安矣

編民第七

柳子曰、古者治民之法、有編伍、編伍無法、則民不安土、民不安土、則國多亡命、國多亡命、則盜賊並起、治民之害、莫大於盜賊、近世承喪亂之後、編伍失法、戶籍不明、十室之邑、尚有不相識者、況通邑大都、無賴之民、亡命破家者、歲以千數、然去此居彼、則不知也、故潛匿在都下者、或終身免追捕、還為安逸之人、僥倖起業、能致千金者、亦不為不多、而一旦編列其籍、則與鄉豪士著之民、終無相別焉、若乃窮民不能為生者、奔走乞食道路、至於轉死于溝瀆者、曾不為隣里所憐、或薙髮為僧尼、糊口四方、或竊盜傷人、受刑佗邦、患難不救、疾苦不問、無貴賤、無親疎、唯其冷煖之察、則名同門井、而實不啻仇視、囂々乎豕交於里巷之間、嗷々乎狗爭於閭

計、奴婢千數、居廬器用、錦繡珠玉、皆我所不足、而彼則有餘、是以封君俛首、敬如父兄、先王之所命、爵位安在哉、德義之敎輟矣、是無它、官無其制也、夫農者能播百穀、春耕秋穫、草處露宿、手足胼胝、作役以奉上、餘力以養父母及妻子、亹々不怠者、農夫之事也、夫人無食、則不生、貴爲王公、富有四海、而爲司命者非農乎、故先王命司農之職、勸男稼穡、敎女紡績、薄稅歛以富之、省力役以安之、親之愛之、鰥寡咸被其德、後世則不然、磽确之地、斥鹵之田、日竭其力、月加其功、才得儋石、則姦吏爭其利、所稅什六七、與調庸併收、不盡不已、偶有肥壤、所入可以當食者、則盡而計之、校而正之、與課役並賦、不竭不措、窮乏至死、曾無回顧、夫如此則土無肥瘠、歲無豊儉、凍餒相依、遂廢其業、計盡術窮、則有販鬻逐末者、有奔走乞食者、有散轉溝壑者、有亡命竊盜者、有刼略相殺者、人愈少、而地愈荒矣、負郭二頃之田、所收不過斗筲、加以水旱之災、則有束手而俟斃者矣、故民之在閭巷、善鬻者富、善耕者饑、視之先王之典、豈不異乎、且其爲吏者、不學無術、唯知錢貨可貴、而見利廢義、則商賈之權、上侮王公、下凌朝士、使工如奴隸、視農如臧獲、厚生之道亡矣、是無它、官無其制也、若夫工者、能製器物、以利天下之用者也、而亦皆與商賈爭利、錐刀是競、則材皆麁惡、器皆窪窳、不日而成、不時而毀、唯欲其易售、不欲其堅緻也、要非不能爲也、爲此則富、爲彼則貧故也、況在官局者、多養奴隸、稱爲弟子、彫琢刻鏤、一出佗人之手、而已不能正一規矩、服美食旨、亢顏自稱大匠、實是

柳子曰、古昔所謂天民者、其數四焉、曰士、曰農、曰工、曰商、士善服官政、以勸天下之義、農善務稼穡、以足天下之食、工善制器物、以濟天下之用、商善爲貿易、以通天下之財、此四者、上奉天職、下濟人事、相憂相養、相輔相成、不可以一日相無者也、先王視民、如視其子、民視先王、如視其父母、父母善教子、子善養父母、而道存其中焉、是以上下和睦、無有怨惡、國以治、人以安、猶且有所憂慮、立官命職、禮樂以導之、號令以教之、秩祿以富之、爵位以貴之、衣冠以文之、干戈以威之、量之以才、命之以事、率之以義、使之以時、賞罰有信、黜陟有典、而後兆民懐之、四國化之、是故士者、長四民、共天職者也、士者奉君命、令天下者也、士者行仁義、輔庶政者也、士者體忠信、布德教者也、當今之時、士氣大衰、內無廉恥之心、外無匡救之功、上廢天職、下誤人事、蚩々與商賈爭利、妨農傷工、殘害以稱威、飽食・煖衣・逸居以稱德、日食其粟、日用其器、不知所以報之、驕奢成俗、身貧家乏、秩祿不贍、而取給商賈、假而不還、爭論並起、賈豎之黠於利、少或如故、習慣如自然、先爲不可勝、而待敵之可勝、彈唇鼓舌、智巧百出、烏獲爲之怯、莫邪爲之鈍、況彼固是、而此固非、雖欲勝其可得乎、且大商之於富也、居貨萬

楯鈇鉞、故爲其人也、威猛精烈、習以爲性、大之則將帥、小之則騎卒、蓋其當也、假令其結纓垂紳、行俎豆之事、亦焉見游夏之容哉、是其不可相攝也、可以見已、今也天下之爲士者、列位已廣、冗員倍多、亦唯便宜執事、非文非武、彼將以何爲任乎、籩豆之事、則不知也、軍旅之事、能出其謀者、蓋鮮矣、甚者終身不執一兵、而手如柔荑、顏如舜花、俟駕而後行、俟茵而後坐、假使其騎駿執良、任折衝之事、則股已不勝鞍、而指亦不勝弦矣、若其兵士、則或能取長短之兵、數經險難之地者、間亦有之、然其爲長爲正者、素不聞韜鈐之數、而管轄無制、調練無法、則鼓不進、金不退、旗幟之不辨、號令之不聽、以此當敵乎、弄知其適取敗之道也、奚見夫所謂節制者乎哉、勝國以降、其能不然者、僅々可指數已、昔者將門劄據于關東、純友救應于南海、強僭尊號、暴逆傾數州、秀鄉奮然率師、則兇賊遁逃、叛臣授首、惡路稱王、劫略東夷、窺窬及神器、坂君提兵、遽然向東海、則群盜伏竄、頑寇失魂、夫此二人者、生在山野海島之間、日養其勇、月長其智、完聚得其道、指麾由其法、故能制大敵、功無比於海內、千歲稱威猛、百世稱驍勇、是古之能任武者也、況當此二人之時、尚武之俗未起、如軍團諸將、上奉兵部之制、下承郡國之令、尚且勇悍精銳、有紀律、有節制、使之赴征伐之事、則一擧而如振枯矣、豈非以其有文事者、必有武備、禮樂之敎、強禦無當耶、由是觀之、今之所謂尚武者、亦特虛語妄說耳、文武之不可以相無也、不其然乎、不其然乎、仲尼之言曰、道之以政、齊之以刑、民免而無恥、而今之於天

不稱德也、詩云、濟々多士、文王以寧、文王所以爲文也、糾々武夫、公侯干城、武王所以爲武也、若夫有武王之武、而無文王之文、則何以見夫郁々乎哉、有文王之文、而無武王之武、則何以見夫赫々乎哉、文武之不可以偏廢、豈不昭々乎、即今之人、生不執一經者、寐思寤思、焉知其然哉、不知而言之、非妄則狂、固不足掛齒牙也、雖然、天下之民、懵々不勝其鄙、惘々不勝其刻者、吾奚忍坐而視之哉、殺身成仁、君子之所不辭也、今夫文之昭々者、禮樂無斯爲盛、而輓近鄙陋之俗、乃謂不近人情也、冠昏喪祭、或不知其目、琴瑟竽笙、或不見其器、國無養老之禮、鄉無飲酒之法、綴旒舞佾、且不知其爲何物、則先王之衣冠文物、亦曷知其爲何設哉、蒙昧至此、再復艸莽、唯人不可無別、亦不可無儀也、則私智妄作、不能不以此易彼、而夷禮於是乎起矣、橫臂脅肩、驕敖之容、以跛屣乎朝廷之間、婬娃殺伐靡嫚之伎、以踊躍乎廟堂之上、彼所謂婬樂瀆禮、不容於先王之朝者、公然爲天下之經矣、即小民生其間、而目不知一丁者、以此爲美觀、固不足怪已、若夫稍知事情、而與國家之議者、宛然見其如此乎、爲恥莫甚焉、不尙文之弊、寧至于此哉、且其爲尙武者、吾又未爲然也、夫官之分文武、以其不可相兼也、譬如牛與馬也、馬能致遠、牛能任重、性蓋爲爾、若使馬也任重、牛也致遠乎、皆其所不堪也、今夫任文者、所學詩書禮樂、故其爲人也、溫柔敦厚、慣以爲德、大之則卿相、小之則府吏、蓋其能也、假令其被堅執銳、在師旅之間、亦焉見賁育之功哉、若其任武者、所執矛

而人不勝其誣罔矣、且士之志於青雲也、亡論才不才、善賂者得之、不善賄者失之、得失之際、憂懼交至、是以日走權貴之門、屑々乎唯幸之求、甚者至於破其產、傾其家、俸祿不給、而鬻妻孥、罪惡自買其禍者、何其不智耶、如是之輩、固不知經藝之一端、奚足以擧治安之策哉、縱使其得居一官、所志不過財利、以財利之人、執財利之權、財利財利何時已、是皆其害大且可見者、而無一人知其非也、豈非愚之甚耶、董仲舒曰、爲政之用、譬之琴瑟不調、甚必解絃、而更張之、乃可皷也、今也天下之琴瑟不調亦甚矣、是宜更張之秋也、機且不可失也、擢士爲相、拔卒爲將、則無不可也、不若以義與禮、以禮制人、擧賢良之士、誅諂諛之徒、塞賄賂之途、開廉恥之端、而後始可謂治也、而後始可語道也、是之謂天下之大政

文武第五

柳子曰、政之移于關東也、鄙人奪其威、陪臣專其權、爾來五百有餘年矣、人唯知尚武、不知尚文、不尚文之弊、禮樂並壞、士不勝其鄙俗、尚武之弊、刑罰孤行、民不勝其苛刻、俗吏乃謂、用文之迂、不如任武之急、爲禮之難、不如爲刑之易、古何足以稽、道何足以學也、是特蠻夷之言耳、殊不知有文備者、必有武備、禮樂之教、强禦無當、率古之簡、而由道之易也、且夫文武譬猶權衡也、一昂一低、治亂乃知、一重一輕、盛衰乃見、奚可以偏廢哉、是故文武之於天下也、一張一弛、剛柔迭擧、一動一靜、强弱並行、而後能平均四海、民樂其樂、利其利、人到于今、無

其謀、不能自發其慮、率因循先世之事、無問可與不可、輙曰、故事爾、故事爾、無如事之不可窮何也、夫故事可因者、先王之所立、賢者之所定、而歷世無害於政教、行有益於事者、而後爲可矣、不可則觀其意、察其情、考之古而無悖、試之今而無戾、方可以施有政、何必拘々唯故之由哉、假令先世有如桀紂者、猶能不亡其國、而其子其孫相嗣王于天下也、亦皆一切因循其事、刑必炮烙、樂必靡嫚、酒池肉林、以開長夜之宴、而後爲能爲政乎、苟有愛民之心者、雖五尺童子、必不爲也、是其害之大其可見故也、以其害之小不可見、而依然居之、豈不闇乎、且事有可行諸古、而不可行諸今者、有可施諸前、而不可施諸後者、故仲尼之言曰、殷因夏禮、所損益可知也、周因殷禮、所損益可知也、禹湯古之聖人也、夏殷古之聖世也、猶且一切因之、則有所不行也、損益存其可、然後制作、有可由觀焉者、況今之世、承戰亂之後、距制作之時、千有餘年、世非其世也、國非其國也、無禮可因、無法可襲者乎、然則其所謂故事者、唯是割據之遺俗、戎蠻之餘風、以此御天下之民、非其敗事害物者幾希矣、偶有知其不可而改之、亦唯苟且之韙、見一事之利、而不圖後害、則朝之是、而夕之非、昨則得、而今則失、飜覆如波瀾、變態者風雨、群聚議事、雜駁立論、曾一事之不能決、依違從之、荏苒過時、取譏群小者、滔々皆然、是以從其事者、見利而進、見害而退、唯欲免其罪、而不欲致其身、讒諛窺其間、便嬖乘其虛、出財成事、賣貨求私、賄賂之俗、公行于朝野矣、故貧者之萬善、不能勝富人之一非、

乎、將以爲衰亂之俗乎、事以爲中國之敎乎、將以爲夷狄之風乎、吾未知其何以處之也、且金元之入寇趙宋也、以漸而天下爲蒙古之有、然猶能不易其俗、而衣冠有法、官職有制、先王之道、未掃地矣、明帝勃興、匈賊伏誅、則一洗盡復其舊矣、兆民到今無左袵被髮者也、卽知吾邦之俗、縱令有聖賢之君、行古禮、奏古樂、官政率舊、衣冠再擧、亦惟斷髮之俗、裸跣之習、非馴致之久、奚能似中士之人哉、士必不勝桎梏、而民心不勝鬱冒矣、是其不可如之何者、澆季之弊、一至于此哉、雖欲無長歎、不可得也

大體第四

柳子曰、治天下國家者、先治其大者、小者從之、故大利不可不興也、大害不可不除也、何謂大利、何謂大害、君仁臣賢、而善人爲政、天下之大利也、君暴臣愚、而小人用事、天下之大害也、大利興、則大害止、善人擧、則小人伏、古語有之曰、權衡誠縣、不可欺以輕重、繩墨誠陳不可誣以曲直、規矩誠設、不可罔以方圓、夫聖人之道、權衡也、繩墨也、規矩也、縣之以正輕重、陳之以正曲直、設之以正方圓、何利不興、何害不除、故舜選諸衆、而擧皐陶、則不仁者遠矣、湯選諸衆、而擧伊尹、則不仁者遠矣、是之謂能治其大者、是之謂能興其利、是之謂能除其害、乃是之謂治國之道也、若夫衰世則不然、見其在位、孰能有其德者、見其在職、孰能有其才者、或叢脞敗事、或倉卒失擧、道將何所從、法將何所由、乃國之不及亡者幸已、夫既然則今之從政者、不能自出

制一、文非二其文一、貴賤無レ等、尊卑無レ分、唯其有無之由耳、故當三其在二道路一也、鹵簿之美、車徒之衆、人見而知二其爲レ富爲一レ貴矣、及二其入レ廷升一レ堂也、其衣其裳、裁制無レ異、文采隨レ意、何以能知三其爲レ公・爲レ侯・爲レ伯、爲レ卿・爲二大夫一哉、若乃士庶人所レ服、亦唯有無之由、則富者以レ帛、貧者以レ布、富者常美、貧者常惡、貴賤於レ是乎亂矣、衣二敝縕袍一、與下衣二狐貉一者上、立而不レ恥、後世無レ有也爾、恥レ之之至求レ之、求レ之不レ止、則祿不レ足、而俸不レ給、士民於レ是乎貧矣、富固不レ屬二皮毛一、即人之辨レ之、唯衣是察、服美則敬レ之、服惡則侮レ之、禦侮之意、競求二其美一、驕奢於レ是乎長矣、豈徒爲レ然哉、貴賤失二其等一、而禮俗壞矣、士民患二其貧一、而德義廢矣、驕奢縱二其欲一、而禍亂興矣、凡如レ此之類、其害不レ可二勝計一、是皆衣冠無レ制、而文物不レ足故爾、且也今之卿大夫、當二祭祀典禮之時一、或尙能冠二其冠一、服二其服一、而騶從輿隷之屬、褰レ裳揭レ衣、臀腰不レ掩、大掉二其手一、高踏二其足一、疾走示レ威、狂呼裝レ行、慣爲レ風、狃爲レ俗、我見二其如一レ此也、夏畦不レ足レ愧也、於乎足利氏之於二天下一也、末世已有二斷髮之俗一、亦猶二武人戰士之徒僅々隨一レ便耳、至二其一變一、則官任二公卿一、職補二將相一、亦皆斬レ髮露レ頂、方髻月額、加レ之以二無制之服一、則所レ謂衣冠之風、化二成戎蠻之俗一矣、醜不二亦甚一乎、昔者漢高平二治天下一、登二庸賢良一、命作二朝儀一、始用二之事一、天子乃知二其尊一矣、夫人之欲二其富一者、以レ有二其財一也、人之欲二其貴一者、以三其有二威儀一也、若其財之不レ存、何以爲レ富哉、即威儀之無レ有、亦何以爲レ貴哉、以二今之人一、着二今之服一、立二今之朝一、行二今之政一、其無二威儀一者固也、亦奚知下夫陶二鑄天下一之道上哉、夫如レ此也、寧以爲二治平之術一

衣レ之、敎二之稼穡一、敎二之紡織一、利レ用厚レ生、無レ所レ不レ至焉、則人之歸レ之、如三衆星之拱二北辰一矣、亦猶嗷々唯食之謀、唯利之嚮、則何以知三其貴賤與二親疎一哉、故名以分レ之、爲二君臣一、爲二父子一、爲二夫婦一、爲二長幼一、才以分レ之、爲二智愚一、爲二賢不肖一、業以分レ之、爲二農工商賈一、而後强不レ凌レ弱、剛不レ侮レ柔、而相害相傷、相虐相殺、攘奪刧掠之俗已矣、因制二其禮一、而差等分矣、因命二其職一、而官制立矣、因作二其服一、而衣冠成矣、作レ之者謂二之聖一、述レ之者謂二之賢一、率レ之者謂二之君一、從レ之者、謂二之公卿大夫一、由レ之者謂二之士一、化レ之者謂二之民一、故上自二天子一、下至二庶人一、無レ不レ有レ冠、無レ不レ有レ衣、而不下與二鳥獸一爲上レ群、是其天性無レ有レ所レ分、而有下待二夫制一者上也、故服者身之章也、冠者首之飾也、身無レ章、首無レ飾、謂二之蠻夷之俗一、以別二聖人之民一、今夫日月之所レ照、舟車之所レ通、無レ不レ有二斯人一、而唯其風化之所レ及、同二斯文一、同二斯章一、而後能承二其制一、能被二其德一也、故衣冠者、非三特拒二其寒一、爲レ恥下乎裸且跣、與二禽獸一無上レ別也、制レ冠以掩二其首一、制レ衣以掩二其身一、裳以掩二其脛一、履以掩二其足一、禮有レ之曰、不レ濟不レ揭、非二敬事一不二敢袒裼一、君子死不レ免レ冠、豈皆非レ爲レ恥二乎其醜一耶、且夫衣冠者、豈特爲レ恥二乎其醜一哉、亦豈特文二其身首一哉、位官職事、由レ此分焉、禮樂刑罰、由レ此行焉、風俗由レ此移焉、政令由レ此布焉、國家由レ此治焉、四夷由レ此服焉、而後謂二之仁一、而後謂二之道一、聖王之陶二鑄天下一、實如レ此耳、故曰堯舜垂二衣裳一、而天下治、不二其然一乎、若夫無道之君、則不レ然、以二衣冠一爲二桎梏一、以二禮樂一爲二虛文一、是以其爲レ政也、唯刑與レ法之任、遂結二搆亂階一、豈不二亦異一乎、或承二衰亂之後一、不レ及レ稽レ古、則雖二服之存一乎、制非二其

義、無不有欲、君子徇其義、小人徇其欲、故當衰亂之時、飄然高擧、避世於巖穴之中、縱意於山林之外者君子也、依然自安、屈志於臺閣之上、終身於市朝之間者小人也、昔者黃憲之儕、見隱於漁者、携手論當世之事、乃曰、君子在野、齊其不久乎、彼唯見一君子之不得志、猶且知其政之衰也、若使其望此境乎、必將振衣而去、又奚得踏其地哉、方此時也、雖聖人復起、無若之何耳、爲國計者、亦惟不如復官制以正其名、興禮樂以示其實、君臣無貳、權勢歸一、令行禁止、而後君子在位、小人有所歸也、是之謂得一之道（評曰、此天得一之論是矣、而未知東西兩都爲一體、故其所論、皆不當理矣、昔如南北兩朝其國有二王焉、乃論所以向背而可矣、今也唯君此臣、何向背之論、夫三分天下、保其二、而服事於殷者、文王之美也、并呑海內而稱臣者、我國風之美、實宇宙無比倫、非儒風所知、異學之徒勿妄鼓口吻、失言之罪、尺一高懸、君子所恐也）（又曰、禮者君子之所好、富者小人之所貪、今也天朝獨掌官階而不管財利、有君子所好之禮而無小人所貪之利焉、其所以世々聖主獲賢臣之道也、富而好禮者之所踏、不其然乎）

人文第三

柳子曰、人生而裸者、天之性也、無貴無賤、蠢々唯食之求、唯欲之遂、與禽獸無以異焉、惟鳥之與獸、飛走以異其能、羽毛以殊其文、大小以分其類、乃至鱗介諸蟲、亦各有其分、譬如草木之區以別焉、人則不然、無飛走之異、無羽毛之殊、鼻口同其體、手足同其形、言語同其文、聲色同其欲、夫然、則無等無差、貴賤何別、故强凌弱、剛侮柔、相害相傷、相虐相殺、攘奪劫掠、固親疎之不論、亦何少長之問、是以穴居草處、與禽獸共死、與草木並朽者、鴻荒之時乃爾、惟人萬物之靈、靈則神、群聚之中、必有傑然者、能自遂其生、以及人生、能自養其身、以及人身、作食食之、作衣

得一第二

柳子曰、夫天得一以清、地得一以寧、王侯得一以爲天下之貞、豈特天地之與王侯爲然哉、大夫非得一、則不可以治其家、士非得一、則不可以養其妻孥、庶人非得一、則不可以安其身、父不可以敎其子、子不可以事其父、故天無二日、民無二王、忠臣不事二君、烈女不更二夫、弟子請曰、願聞其詳、曰今夫衰亂之國、君臣二其志、祿位二其本、故好名者從彼、好利者從是、名利不相屬、而情欲分矣、即我徒將安依、須富者不貴、賓貴者不富、富貴不相得、而威權別矣、即我徒亦將安依、於此則爲君、於彼則爲臣、故出謀者、依違不能定其是非、臨事者、首鼠不能決其進退、茫乎如在中野、洋乎如在中流、仁何由乎施、忠何由乎致、公侯皆然、士庶皆然、即我徒亦將安依、苟且之議定、姑息之令出、一以爲是、一以爲非、民之言曰、令行一日、禁止三日、朝暮相變、旦夕相戻、即我徒亦將安依、夫獸有比肩、鳥有比翼、兩々相依、飛走始得、若其相離則病矣、是其爲性也、奚若夫燕雀與犬羊哉、且人見此二物、則必怪曰、支離矣、人而如此、將謂之何哉、今如夫二物、支離則固矣、然彼自有相依之性、飛走得其處、以食其身、而上無可事之君長、下無可使之臣民、是以自足遂其生則已、人之有道、奚其能然乎、貳於事上、則不義、先王有常刑焉、貳於使下、則不仁、兆民不得從焉、且也今之人、聞婦有二心、則必曰淫矣、臣而有二心、其如之何、夫誠如此耶、婦而貞者則多矣、士而忠者、吾知其必無有也、況夫人情無不有

仕・致等之言語別成一家、文字別生一義、乃搢紳諸士之間、日用通意、亦未知其何義、事々皆爾、物々皆爾、豈非可笑可歎之甚耶、(許曰、萬國以本語爲正、儒者唯以西土爲本、故斥本語爲顛倒、似忘其身爲和人也、聖人正名亦豈欲言語名物、爲萬國同一流乎、夫子說見此邦則必有不改舊習而行道略也)雖然今之人生長其間、慣以爲常、則相唱相和、似無不行者、若夫施之實事、則罣礙窒塞不相通、於是更立一家之法、亦且顛倒侏離之習、薰蕕無別、精粗無分、簡髮而櫛、數米而炊、椎魯無文者、動靜云爲、唯口是命、勦說雷同、復何條理之有、今夫草木之有區別也、以物以名、無不有條理者、人事而如此、嗚呼曾謂不如草木乎、孔夫子嘗謂、名不正則言不順、言不順則事不成、事不成則禮樂不興、禮樂不興、則刑罰不中、刑罰不中、則民無所措手足、彼其衞國如此其甚矣哉、設使夫子寓目於此間乎、未知其謂之何也、政之末墮于地、蓋二千有餘年、可謂久矣、是以其化之被及于海內、可謂廣矣、其德之浹洽于民心、可謂深矣、及其衰也、白龍失水、受制小魚、跋涉千里、暴露冒雨、亦可謂難矣、當此之時也、獲一二忠臣之力、或能復其位、亦且富不若小國之君也、雖然如此尚能保其宗廟、百世不廢、到今四百有餘年矣、權乎雖下移矣、道其不在于斯乎、先王之大經大法、自有律令可見焉、若能有憂民之心、名其不可正乎、禮樂其不可興乎、刑罰其不可措乎、哀哉天下無有其人也、既不能盡復其古、亦不能盡變其舊、其有所不盡者何也、豈爲其知尚物而不知尚名、知爲己而不知爲天下乎、抑亦學政不行、而術智有所不及也(許曰、爲己者利也、爲天下者仁義也、覇者假之、王者體之、治道之盡善矣、盡美矣、在於位而不在于智術也、論之其極歸於智術者末也)

（評曰、何謂皇統綿存耶）遠乎數世之後、豪傑交起、各據一方、龍驤虎奔、相奪相害、無有窮已、姦賊謀事、戎蠻是簒、首無巾帽、衣無領袖、驕傲稱德、暴逆伐功、當此之時也、一二或愛其民者、亦惟承戰國之弊、苟且之政、荏苒送日、奚知名教所由乎哉、即民之蚩々者、將焉守其土、又將焉安其身、今且舉其大者、官制為特甚焉、夫文以守常、武以處變者、古今通途、而天下達道也、如今官無文武之別、則以處變者守常、固非其所也、（評曰、文武殊職者、非古制也、出將入相、不易其人、鄙人何知處變者守常當否乎哉、皮相之妄議、恐戾君子戒失言之意矣）且夫諸侯者、國君也、各受方土、世襲其爵、有社稷焉、有民人焉、尚且以將校自處、專出無文之令、乃至如計吏宰官之類、終身不與武事者、亦皆以兵士自任、一致苛刻之政、其害乎治道者一也、且今之諸侯與士大夫、凡居五品以上者、咸受國守之號、若任八省諸官、亦皆有名無實、（評曰、國守之號、有名而無實、誠似不經、然而亦是小國張皇朝威、以鎮制四夷之權道、不可以常理論焉者有矣、蓋時王之妙策也、）至六品以下、則闕乎無之、或聞、吾不知其何故也、況承制於彼、從事於此、則雖欲無貳、其可得乎、是其無義無制者二也、將相為君、納言為臣、五品之屬、有四品之貴、非尾大不掉、則冠履倒置、唯權凌之、唯威乘之、是其失尊卑之序者三也、且也古之人相呼必以名字、或稱兄弟之行、輓近以來、卿大夫士稱其官、不問其名、乃至士庶人無職者、亦皆妄犯內外官號、兵衞・衞門・助・丞之類、自農工商賈奚奴輿隷之卑、及戲子雜戶丐兒非人之賤、每々必於是、夫律之有法也、私官犯官者、皆罪無赦、若今以法糾之、天下幾乎無遺民矣、是其淆亂、不可如之何者四也、凡如此之類、成俗成風、固非一朝一夕之故也、殿・樣・御・候・

柳子新論

峽中山縣昌貞著

正名第一

柳子曰、物無レ形而有レ名者有矣、有レ形而無レ名者未二之有一也、名之不レ可二以已一也、聖人由レ之以寓二教其中一焉、昔者周公、正二名百官一、而萬國服二其仁一、仲尼正二名禮樂一、而天下稱二其德一、老聃乃謂二有名萬物之母一、莊周亦曰、名實之賓、儒家之所レ修、法家之所レ習、不二一而足一焉、我東方之爲レ國也、神皇肇レ基、緝熙穆々、力作二利用厚生之道一、明明其德、光二被于四表一者、一千有餘年、立二衣冠之制一、設二禮樂之敎一、有レ若二周召一、有レ若二伊傅一、民到二于今一、無レ不レ被二其化一矣、自レ此厥後、昭宣忠仁諸公、繼二武于聰王之制一、從二事于大寶之令一、綿々洪祉、日盛月隆、郁々文物、幾二乎不レ讓二於三代之時一、至二于保平之後一、朝政漸衰、壽治之亂、遂移二東夷一、萬機之事、一切武斷、陪臣專レ權、廢立出二其私一、當二此時一也、先王之禮樂、蔑焉掃レ地矣、室町氏繼興、武威益盛、名稱二將相一、實僭二南面之位一、雖レ然先王之明德、深浹二洽乎民心一、則强暴之臣、尙不レ能レ無二忌憚一、是以神器不レ移、皇統綫存、（評曰、神器不レ移者是國風之所レ然、非二儒者所一レ知也、君臣之分如二天地一、爵位正朔、海內奉レ之、

柳子新論編目

編目終

柳子新論

山縣昌貞著

蒲生君平著述

筒井西司校合幷藏板

文久三癸亥年八月

江戸書物問屋

日本橋通北十軒店
播磨屋勝五郎發行

者、莫不必由庠序之敎也、夫庠序之敎、豈必人誦詩書、家論道德、薦選鄕老之有善行、人之所尊信者、立爲三老五更、制之禮、定之訓、暇之日輒在庠序、長幼使衆坐尙齒、口能說前言往行、諄諄然以勸孝弟忠信之義、使民自然化於其所敎、是古之所謂、民可使由者、詩書之言、道德之蘊、固非其不使知、必人誦而家論、雖堯舜不猶病之乎、雖然、人子皆孝、人弟皆弟、而人各皆忠信、樂其可樂、憂其可憂、不苟去義、不苟就利、農桑工商、能務其業、鰥寡孤獨、得免飢寒、豐年不敢驕奢、水旱有蓄藏、不虞盜、路無餓莩貧竄、鬻奸爲不如死、臭聲少聞、如撻於市、夫若是可以爲堯舜之民者邪、所謂庠序之制、不必壯麗其堂宇、山藻其節稅、苟堂上容數十人、可以揖讓昇降則足矣、乃若此制、已無土木之勞、金穀之費、自國都以及於閭巷村落、可以無不行矣、嗟夫世之從政者、多是因循苟且以曠日、動輒藉口於祖宗之法、終無所建明焉、況於庠序之敎、孝弟忠信之義、但言雖好、事不可行於今也者、間或有、其志如將有爲者、亦惟不過於考之古制、欲以壯麗其堂宇、山藻其節稅、嗚呼其不行也宜哉

今書終

人服二其義一、仰二望其祀一也、咸獻二其力一、以供二給其禮一、所在祀二其社一、祀二其祖一、旅二于山川一、不三敢違二其窆一也、還顧二墳墓一、不レ忍レ去二父母之邦一也、不レ諂レ非二其鬼一、鬼神非二其族類一、不レ歆二其祀一、彼淫祠無レ福、孰能與二其黨一、而費二其財一、妖人奸民卒無レ所レ爲矣、所レ謂知二其說一者之於二天下一、其如レ示二諸掌一者、於レ是乎有焉（魯氏順民之經、在下明二鬼神一、祗二山川一、敬二宗廟一、恭中祖舊上、不レ明二鬼神一、則陋民不レ悟、不レ祗二山川一、則不レ威、不レ敬二宗廟一、則民乃上校、不レ恭二祖舊一、則孝弟不レ備、即亦此意也）蓋宗廟惟以三其有二盛德丕烈一、而所レ置（若二伊勢賀茂一是也）置二不世々一也、故其祭レ之就二山陵一、古曰二山陵一猶二宗廟一也、苟無レ有レ之、則臣子何所レ仰、臣愚者遊二於京畿一、而尋二問於累聖山陵之所在一、數百年喪亂之餘、莫レ不三咸就二荒穢一也、臣愚不レ堪レ憤、要認二其眞一、乃數月奔走、卒有レ所レ考、不三敢顧二固陋一、編二草其書一、命曰二山陵志一、冀以少補二闕典一也、萬一有レ見レ采、死亦何朽也

政教

士不レ仕則已、仕而居二其位一、欲下以二其君一爲二堯舜之君一、其民爲中堯舜之民上、夫欲下以二其君一爲中堯舜之君上者、必先格二君心之非一、補二其闕一、勉二其所不レ能、遊宴田獵、爲レ之有二毫所荒、則是有レ憂二於民一、如三己勸而誘二之於淫樂一也、而與レ之行二其道於朝一、布二其德於天下一、使二一民無下不レ得二其所一、而一民猶有下不レ得二其所一者上、如三己推而陷二之於溝壑一也、是欲下以二其民一爲中堯舜之民上者也、今夫有二其志一者、可レ無二其術一哉、所レ謂術者無二他故一、必先自修二己身一而已矣、苟不三自修二己身一、則不レ能下進二賢才一、退二奸邪一、以聰二君之聽一、而明中君之視上、然後正中君之政上也、尙何能化レ民、使レ知二孝弟忠信之義一哉、能化レ民使レ知二孝忠信之義一

言、莫不必信聽、此衆人之性、自古莫不皆然也、古人太質、而太尙鬼、太質者固陋、而不可以諭、又太尙鬼者、於是無畏慕也、夫不可以諭、則聖人莫奈之何、而無復畏慕、何以能制其不善之心、雖聖人盡其至誠、以誘民乎善、苟不至不善、亦莫不因其俗而爲治、則其跡蕩蕩、民不知其所然、故其說神奇妖亂、民之所熒惑、有時乎作矣、雖史官所錄、至其採於衆人之口碑、則有所可怪、（神代卷無論、神武崇神神功紀亦然也）而怪也惟衆人之所畏慕、是以邪徒傅會之妄說、無不市、苟妄說之市、乃邪蘇與山法師、與常世之蟲、凡所以欺罔百姓、今果而無有之邪、果其有之也、夫淫聲美色、固能惑人、然其所以能惑人、孰不知之、左道之惑人也、世俗皆一心、敬信以祈福祥、不憚其勞也、雖其鄙吝無恥之人、不惜其財也、夫群盜蜂起、所在嘯聚山林、侵掠州郡、固爲國家患、不淺々也、然嘯聚山林、恃其險阻、則可圍而持久、必窘於飢矣、侵掠州郡、雖其暴如虎狼、出奇謀、設機阱、而要其不虞、亦莫不顧死就虜、而左道之惑人也、人不惜其財、則精足以食衆保久、人不憚其勞、則勢可以死戰、其甚者曰、爲法而死無悔、背君又何有、嗟是已雖以飢窘、亦必不肯顧死就虜矣、其爲惑也、浮於淫聲美色、而爲其患也、群盜不啻也、臣考之往時、即若參河一向宗、此卽其驗也、山法師之類、彼恃爲國家世讎、不懲于此、亦何以爲然、其所以治之者、固非鹵莽因循苟且之所能去也、夫然則何如、曰宜反其本矣、法先王、考舊章、修郊社之禮、可以昭敬矣、修宗廟之禮、可以昭孝矣、而號令刑賞正出於誠、使天下能知祀之與政、其致維一也、則

費、令三七道諸國、建國分二寺、造作之費、各用其國正税、於是天下之費、十分而五而北遷以還、其費彌廣、加之以帝都新造、其極宮室之華麗莊嚴、固所無論也、又閨閣房寢之盛飾、遊宴歌舞之玩好、靡々與時樣相移、其無所窮極同上至于桓武天皇、遷都長岡、製作既畢、更營上都、再作太極殿、新構豐樂院、又其宮殿樓閣、百官曹廨親王公主嬪御之宮館、皆究土木之巧、盡租調庸之用、於是天下之費、五分而三、仁明天皇即位、尤好奢靡、彫文刻鏤、錦繡綺組、傷農事、害女工者、朝制夕改、月變日悛、後房内寢之飾、飲宴歌樂之儲、麗靡煥爛、冠絕古今、府帑由是空虛、賦斂爲之滋起、於是天下之費、二分而一而梵宇之彫鏤文章、以招耀湖山寺延暦亦莫不與之相競高也、則其費當十倍於古矣、府帑竭、賦斂增、其病民蠱國不少、況及乎貞觀、以頻遇災厄、又其費惟古之二十倍哉同上貞觀年中、應天門及太極殿、頻有災火、儻依太政大臣昭宣公匪躬之誠、具瞻之力、庶民子來、萬邦儷至、修復此宇、期年而成、然而天下之費、亦一分之半、然則當今之時、曾非往世十分之三、世俗於今論治道、必曰延喜之政、至其末年、飢饉窮困、勢正難支、乃天子寒宵惻怛、脫其御衣、以慰天下凍餓之民、亦已不及矣、而陵遲卒令政綱不復振、天地宗廟陵寢、無能祭、但若山法師、奉神輿、以兵入京、往々穢青史、嗚呼彼雖名奉佛、又何異於常世之蟲也、不幸當時以無一河勝能絕其亂根、故邪徒蔓延、致其然、數百年而皇天震怒、假手於織田氏、使以殘滅幾盡也、天下之妖、不必山法師、匿其情而易其名、愚人莫知也、近世天草之盜起、亦不惟其苛政之不堪也、即其地群不逞逋逃之集窟、其徒一旦觀時釁、因俗之尙鬼、唱邪蘇、以迷惑其衆者、是亦常世之蟲復生也、幸當時復有河勝之智、織田氏之武、而亂以遄止、邪蘇自此爲天下嚴禁、至於今不弭、然天下之妖、不必邪蘇、匿其情而易其名、愚人不知也、蓋衆人之爲性多怯、故幼時諳鬼則怖、闇則如見鬼、雖其壯而常習於不善、無畏慕者、至有所病於其心、則畏慕於鬼、尙可安慰之、雖尫巫跛覡庸妄之

以男女爲群、烝享歌舞於其中、則問有神語、曰必授爾福、能使貧者富老者壯、衆由是愈益求媚、不知其紀極、所奉幣帛酒肉及庶羞、縱横陳於路、或相叫呼曰、福至矣、於是施及都鄙、莫不染汙、索其家、廢其業、將供給於其所惑、乃至鬻田園飢妻子、尙何念其祖、問神祇禮典之爲、是而不禁也、幾何其不置於祀、而害於政哉、幸當時有忠智之臣、曰秦造河勝、河勝能察其禍端、而戮多一人、以懲其餘黨、故能止於其未亂、然天下之妖、不必常世之蟲、匿其情、而易其名、愚人莫知也、乃降於中古、若山法師與奈良法師、據戟伺、互爲猖狂、不亦然乎、既能以三寶之尊、藉歷朝之寵、其誕妄足以得衆、其伽藍足以爲城、其横暴威虐、足以傾天下之形勢、當此時、而世之靡弊貧弱、亦職是之由、然其所由來、蓋非一朝也、初佛法之行、當時見其教、能授誡、勸人善、說幽怪、談因果報應、痛懲其不善之心、以爲、可資治濟世、以故施之于中國、然其弊惟汲々、求福無饜也、乃王公以下、閭閻之小民、其欲供養於佛、誰敢憚其勞、而惜其身與貨、好度子女爲僧尼、靡家產財用、以造浮屠、而田宅奴婢、盡施入於寺、家不爲此、則不齒於鄉、妖人奸民以妄言、僥倖其間、以享利欲、逞淫欲、不織而煖衣、不稼而飽食、不德而名勢、誣天下欺後世、而其徒徧於海內、當倍官吏而半農夫也、在奈良朝廷最甚、爲之屈天子之尊、以奴自居、聖武帝三寶奴傾州郡之調庸正稅、所在創寺塔、土木荐興作、而天下之費、既已倍於古、延喜中三善淸行上異見、其序云、欽明天皇之時、佛法初傳本朝、推古天皇以後此教盛行、上自群公卿士、下至諸國黎民、無建寺塔者、不列人數、故傾盡資產、興造浮居、競捨田園、以爲佛地、多買良民、以爲寺奴、以降及□平、彌以尊重、遂傾田園、多建大寺、其堂宇之崇、佛像之大、工巧之妙、莊嚴之奇、有如鬼神之製、似非人力之

以其能興雲致雨、以利此民、及古之聖神、以其有功烈於世、所在爲之社、社之人祭祀同福、死喪同恤、禍災共之、人與人相疇、家與相疇、古學先祀者、各合其氏姓之親而享焉、故謂之氏神、而其中有宗子、宗子者、其宗所同長、故謂之氏長、且國社亦必多用其神子孫爲祭主、假如大和三輪社、即以大神氏、河內經津主之祠即以中矢作氏、上據姓氏錄、二氏各其所祀之後也、武藏有出雲社焉、蓋亦同其國造之先所由出、其餘率是類也其男女效績、敢淫其心、而舍其力哉、故古之有天下者、必能得其壽、必能久其祚、神武帝在位七十年、百三十七歲、其後王經二十餘世、亦以上年終于其祚者多有之、不可一一枚舉也、是天命之所佑歟此臣之所以區々好古、敢望於當今者也、夫當今之時、非不祀、非無政、然覩其所爲、一能若前所云哉、郊祀且不行、而宗廟陵寢、已多就荒、其祀以爲社哉、往往巫覡浮屠氏之所衣食、而其說神奇妖亂、民之所熒惑、首之者、國有常刑、當殺無赦也、然世俗之所爲政、其務惟在刀筆筐々而治之、大體曾莫之察、是以家日財匱矣、然不知糈之費於淫祀、鄉曰人減矣、然不知黨之聚於左道、可謂舉男女之調而囊土之、中國之民而夷狄之、誠如此則祀之與政、安在其致維一哉、故其誠不至、誠不至、故其爲不篤、爲不篤、是以雖有祀、而非所以爲孝敬、雖有政、而非所以成教化、民益愚且惑、而鬼神之崇時至、世益降且澆、而禮樂之文末流、莫之憂則已、苟憂則悲憤慷慨、夜以忘其寢、且以忘其起、飲食之時、以忘其正味、何者是禍之根柢、妖人奸民之所爲亂階、自古其然也、所謂祀常世之蟲、何世而無之、天常世之蟲者、常產於橘樹、而其貌蠶術、如蠶綠、且有黑點、固非有靈異、昔皇極之世、有妖人、曰大生部多々、實能寵神、是蟲而誑其里人、曰常世之神也、能致福、始起於不盡河邊、既而巫覡交黨相唱和、競欺罔百世、所在迎是神、設几筵、羅供帳、

屯倉、備荒歉、年穀於是乎不熟、而生無不養、以時少錢貨、工賈非穀、無以通器用、耕稼於是乎不勸而勤、游民盜賊於是乎無所資也、國家艾安、民樂其業、故先王之民、舉天下仰望其祀、無不咸獻其力、以供給其禮、於是乎以順長幼之序、班男女之調、調男以其財（此謂弓端調）所以常習之弓矢、馳逐而收之、毛羽皮角、備之軍實物采也、調女因其手、（此謂手末調）所以常敎之絲麻、紝織而篚之、布帛玄黃、供之禮幣恩賚也

崇峻帝之時、校人民、序長幼、就男女之功、而調其餘、曰弓端、曰手末、是既能敦禮神祇、而柔服荒俗、因祀徵其調、故古語拾遺云、今神祇之祀、用熊皮甲及布帛等、即此之緣也、又云、卷向之朝、始用刀及弓矢、祭神祇、蓋亦調物也、御鎭座本紀、以弓端調、爲大刀・小刀・弓矢・牟盾・猪鹿皮角・忌鍬・忌鋤之類、手末調爲麻桶・綿柱・荒衣・利衣之類、此可以徵已、神祇令、須大祓者、每郡出刀一口・皮一張・鍬一口・及雜物等、戶別麻一條、明是其遺事也、且今此文所言、是不惟崇神之世爲然、自神武郊祀于鵄山、以至仁德之致治、其間世々躬仁儉、能勤國而所成、因以爲、非飲食而致孝乎鬼神、卑宮室而盡力乎溝洫、皆參考之史書、而得之則知、其不獨專美於夏禹、又別有參、故此不一一說

夫如是則能有威于征、而有財於守、有信於民矣、蓋古之爲政而寓諸祀、莫不如此、其理也、則其下之人、其誰敢不戰々兢々以事神明、又各恭承其先祀、糾合其宗族、莫不相親睦、凡國土山川

興先北幸、可以據比叡之險、籍僧徒之强、千種氏名和氏之勇、供警衛、北畠氏結城氏之衆爲聲援、菊池氏兒島氏土居氏得能氏之兵還賊尾、於是正成自南擧義旗、義貞以東軍逞忠策、以包賊於京師賊衆數十萬、素不齎糧京師、米粟不日而竭、當飢而降、何待善戰、足利昆季豺狼之性、縱其忍也、窘既如此、命亦極矣、必憂死於幕內、不暇授首、嗚呼雄圖勝算、一不聽於楠氏、由是所在狼狽、機會皆失、終致京北之幽辱、畿南之偏安、適足以爲千載之戒矣、悲夫、然則其勢之去、惟名不可恃以守耶、曰不然、自古好義者寡、好利者衆、苟好義、莫不必順名、苟好利、莫不必就勢、名之重者勢奚名哉、乃其不能勝者、惟在乎所好之衆寡、雖然、以利易義、非君子之道也、忠憤慷慨之士、何時無之、苟有其人、寡可敵衆、身在貧賤、義重公侯、所謂三軍之帥可奪、匹夫志不可奪者是也、夫名之重於勢、勢所以時勝於名者、可以見也

祀政

臣聞、祀之與政、其致維一（正統記、按、魯語節政之所成也、夫祀國之大節也、故慎制祀以爲國典、蓋亦謂此也、）是以先王、以郊社之禮、能致其敬、以宗廟之禮、能致其孝、孝敬之誠、感鬼神、化人民、而綱紀邦國、夫然後天下可南面垂拱而治矣、故先王與其大臣大連、所以燮理陰陽、而經緯天地、固無論、苟務民之義、將有爲于天下者、必先告於廟、請於上下神祇、莫不以致其誠焉、夫惟誠、是以盡力乎溝洫、不以爲厲民、爲民紀農也、講武乎農隙、不以爲好田、爲田除害也、卑宮室、惡衣食、租稅於是乎不厚、而用無不豐、設

所由、安得而知之

若然者、今姑置之、固非一言之所悉也、惟其以平氏之富强、不守京師、天子之輿蟄白、竄西陬、天子雖貴、又誰屬望、是以船不納於筑紫、見陷於播磨、而其所恃叛于阿波、擧族沒海、化爲海魚、元弘帝之英武、一誤廟謨、奉神璽之劍鏡、蒙塵南山、神璽雖貴、何足飯嚮、足利反賊、猶擁皇族、以稱帝於京師、則衆惟仰魏闕、無辨眞僞、尙何問順逆哉、南風不競、職是之由、徒使天下後世爲歎惜焉、嗚呼是皆失其勢於地、不可以復也、若能使平氏以其順死守京師、以其精鋭之士、兵甲之衆、備賴朝于吾嬬、圍義仲于比叡、則義仲所據、比叡僧徒雖富豪、非有豫蓄之糧、安得支數月、所率戰卒雖精强、多是烏合耳、彼其勇壯氣鋭不必居、待其糧盡其師老、則勵將士、電走而下、叱咤血戰飛霹靂、則平氏之上下亦怯乎、坐廟堂能定謀略、觀時勢之安危、察衆心之背嚮、有若知盛、當以爲相、雄志慷慨、尤工騎射、臨敵奮戰、所在制勝、有若敎經、當以爲將、乃調兵整軍、兼西土南海之衆、而其先士卒爭死戰、知有平氏、不知有其身者、有若兼康・盛嗣・忠光・貞能之屬、制之兵、決之機、鬪智必不敗績、鬪力可交死傷、夫若是雖義仲之勇、豈莫疲乎、北陸之兵或可潰、又雖賴朝英武弘度、豈得安乎、關東不悉皆附焉、當此時、平氏之守愈堅固、則其於東北二源之讐、未可孰成敗也、況復阿波筑紫、雖敢乘弊而反側其附哉、元弘帝之聰不蔽、聽楠正成、正成不以兵之所忌、死於賊鋒、新田義貞不以師之所弊、敗于勁敵、敵入京師、則乘

其終及爭亂、後醍醐帝初卽位、與其二三搢紳所親信、陰謀討承久之賊、以恢復王室、元弘初事泄、爲高時所栖於笠置、及行宮不守、遂遷隱岐、然有河內人楠正成、據金剛之孤墉、挫鎌倉之賊鋒、凶徒爲之膽落魄消、而四方勤王豪傑蜂起、千種源中將忠顯、奉天子潛出隱岐、伯耆人名和長年迎之保船上、既而忠顯爲元帥、與足利尊氏・赤松圓心・結城親光・兒島高德等諸將、同收復京師、克北條氏所置六波羅鎭、上野人新田義貞起兵伐鎌倉、國郡響應、兵數十萬、不日而高時擧族爲焦土、於是乎中興之業就

元弘帝業中途不遂、降至戰國、塗炭方極、然天下之豪傑、欲以起義兵禁暴亂、莫不必名綸旨、欲以安邦國收衆心、莫不必承官爵、欲以行朝賀授民時、莫不必奉正朔、（大內義興、毛利元就、織田信長以下、比々皆然）自非名守其器、曷如此乎、雖然、一旦有源賴朝者出、以其英俊之器、震主之烈、名假忠義、欺罔朝廷、擧天下之兵馬、與其衆心、皆以爲私有矣、則王室之失勢、自是而始、區區虛名亦奚勝焉史、大江廣元勸賴朝、奏請於後白河法皇、國司置守護、莊園補地頭、以時屬澆季、世多奸賊、治莊公所不能治、然後兵馬之權東矣、按、賴朝滅平氏也、其弟義經之功居多、其材武謀略、諸將皆籍籍、稱譽不置、既留衞京師、則賴朝有覇心、將欲竊朝柄、而擧朝固無人、所忌非義經而誰、故使其奔亡、然後廣元實國之言得行矣、世徒譏兄弟不協、嗚呼豈徒兄弟之不協、不知其

王室愈弱、則慨然有恢復之志、既頼朝卒、其二子代立、皆爲其宰臣北條義時所弑、於是源氏三世而絕、藉源氏之業、據鎌倉之强自若也、猶以藤攝政之家、有孝葭之親於源氏、乃請之、奉襁褓之兒、以爲鎌倉帥、欲蔽其惡也、然威福由己、橫肆尤甚、則帝之切齒於鎌倉可知矣、帝既傳位於子土御門帝、及之其弟順德帝、而其子八條帝方受禪、寔改元曰承久、於是有三上皇、以本中新、各稱其所居院、本院將舉兵討鎌倉、中院諫以時未可、而不聽、新院贊成之、故及

王師敗績、義時命其子泰時、遷本院於隱岐、新院於佐渡、而中院亦尋遷之阿波、與謀者文武之官悉死

刑、廢八條帝、立高倉帝之孫、是爲後堀河帝、即本院後鳥羽帝之兄弟也、後堀河帝崩、子四條帝立、幼而崩無嗣、泰時以順德帝之有深怨於己、恐其子入立終爲不利焉、排朝廷衆議、專立土御門帝之子、是爲後嵯峨帝、帝亦常嫉北條氏之專、而勢未可討、既傳位於子後深草、以其柔不堪於討賊、使及之其弟龜山帝、且專屬意於龜山、欲其世膺圖籙、而後深草之胤、不復可立者、於是乎分定、不可以移動者也、此時泰時之孫時頼、實奉其遺詔矣、而時頼之子時宗乃違之、遂岐皇統有二流、迭天位於十年、蓋其意以爲、使朝廷窈々乎爾内禪、勢不得不必藉己爲重也、尙何暇能報承久之讐乎、其奸謀自固之術、盍可惡、是其孫高時一旦離後醍醐帝之逆鱗、所以赤族也、後醍醐帝是龜山帝之孫、而後宇多帝之子也、時宗强以後深草之子伏見帝、爲後宇多之嗣、使傳位於其子後伏見帝、然後承其統者、後宇多皇子、後二條又承其統者、後伏見皇弟花園、又承

史、金村者建議率群臣、迎耶末登彥於丹波、則見其儀衞兵仗、懼而逃、故更迎彥大於近江三國、是爲繼體帝、是應神五世孫、彥主人之子也

終守臣職、長安社稷、自非名定其分、曷如此乎、前之崇峻遇弒、賊蘇擄朝、威福由己、革命將在朝夕、然猶豫傳三世、不敢簒立、終斃天誅、無暇於悔

史、崇峻帝姨大臣蘇我馬子之專、一日出怨言、馬子聞之懼遂行弒、立其易制之女子、是爲推古帝、是敏達皇后、自是蘇我氏愈橫肆、馬子生蝦夷、蝦夷生入鹿、藉世家之富、其驕僭無所不至、第宅視宮闕、儀衞擬乘輿、跋扈跳梁、殆頤神器、當此時、歷推古帝舒明帝、立舒明皇后、是爲皇極、其所生天智帝時葛城皇子、天資英明睿武、常慨然有意於討賊、然職居子弟、而奉女主九五、慮樞機易泄、不得已、乃擇賢智之人、得大中臣鎌子於下位、協心合謀、手刄入鹿于軸座之側、而蝦夷亦伏誅、母帝將傳位、則先讓之其兄孝德、身乃居儲宮、輔朝政、竟能就中興之業、後世號曰中宗者以此也

後之王室微弱、政刑不行、承久之三皇播越、然鎌倉之弱鎮、日帶朝爵、遙玩國命、廢立在手、尙不自取、至其子孫、族于王師

史、自後白河法皇、任鎌倉源賴朝天下總追捕使、而朝權遂爲之所奪、後鳥羽帝是法皇之孫、而高倉帝之子、安德帝之庶弟也、以幼冲爲法皇所擁立、踐祚於安德西幸、源平戰爭之際、及長常見

名勢

人心背嚮、但何在哉、名之與レ勢、實能使レ之而已、夫名一正、而言必信、君臣之禮不レ越、上下之分不レ違、植二遺腹一、朝二委裘一、而天下不レ亂、蓋其所二嘗使一レ然、在二大初一、有二神人一、受二天命一、王二天下一、創二鴻業一、垂二皇統一、而使下以可レ繼二子孫帝王萬世無窮一、於レ是乎先有二如レ此之盛德先烈一、而爲二之勢一也、及二勢已去一、乃名亦虛、以二夫神璽之重、宗廟之尊一、而受二制於私門一、至二於無一レ可二奈何一、是亦時哉、然猶有レ可レ言焉、古者神功以二未亡之寡一、奉二遺腹之孤一、二孽作レ難、窺二望天位一、然武內爲二大臣一、有レ謀二於內一、兵士無レ貳二於外一、不レ日能殲二僞陵之賊一、定二眞主之位一

史、仲哀帝八年、與二神功皇后一征二熊襲一、明年帝崩二于筑紫行宮一、皇后與二大臣武內一謀、秘不レ發レ喪、潛使下之奉二梓宮一、葬中于穴門上、以二軍國多一レ務而不レ果、乃殯二于豐浦宮一、遂從二皇后一、西征二服三韓一、還至二筑紫一、而皇后方レ生二遺腹子一、而立レ之、是爲二應神帝一、將下從二海路一歸中京師上、會麛孽皇子麛坂、與二弟忍熊一謀曰、今皇后生レ子、群臣必皆從而奉レ之、吾何顏敢以レ兄臣二事幼冲之弟一乎、遂作レ亂、名託レ營二先帝山陵一、往二播磨一、多造二舟梁一、稱レ運レ石、以絕二海路赤石淡路之間一、既而麛坂暴二死于猛獸一、忍熊心懼二其變一、引レ兵而退、皇后遣二武內及武振熊一、追敗二之京師一而殲

然後君不下以二其孤寡一而侮中於臣上、臣不下以二其功績一而驕中於君上、自レ非二名制之禮一、曷如レ此乎、武烈無道、民之所レ悲、崩而無レ嗣、將二誰適從一、然大伴金村位二大連一、躬握二朝權一、不二敢窺覦一、求二皇胤於草莽一、奉而君

枝、竊位私官、不擧他人、而物蘇伴秦舊姓之家、陵遲失序、降爲皂隸、不能復居貴仕寵祿、其存於後世者、匯匯數十氏、亦惟巳微弱、而譜落牒闕、至此欲奉所謂氏上、不可復得、雖然、源平將帥之家迭興、枝葉之蔓、分宗立長、割據國郡、其長者猶古之氏上、而爲之族人者、稱曰家子郎黨、常致之股肱、或爲死生、籍如和田氏之亂、擧族殲焉、新田氏之義擧、亦擧族赴之、保平以還、天下雖亂、宗族相保、如此其競、是以滅者興、讐者報、艱難之間、常賴其力、信義不渝、可謂古之遺風、今夫一旦有事、欲宗族相保如此、而浮薄之極、擧世皆以財賄、取其後他族、不知顧親戚、自滅人鬼之紀、無悔焉、又何得相保如此乎哉、吁作斯俑、在何時、而屬何人、蓋奸雄取人國之術歟、乃如織田氏之於北畠、此其顯然者、自是而後、習以成風、蓋儷堅氷、自履霜、然萬一因權所致、不覺將易天子姓、革天子之命、而其大臣左右以財賄、取其後他族、自處若彼、又何怪焉、然而天下之廣、人卒之衆、有公議焉、有忠憤焉、即其一時苟且之圖、惡知非激亂於他日、而貽患於後世哉、今君子者、有志王道、則當先設敎明倫、正宗族立氏上、正宗族、立氏上、必非行而有難焉、獨其族之不多、姓之不知、是不可係屬、又不可附籍者也、然族之不多、遠推其系譜、得其所由出、則雖親疎相遠數十世、亦可以係屬、而姓之不知、近求其骨肉、冒姓者復本、變姓者復舊、則莫不可附籍矣、係屬附籍已定矣、又從之以禮、而絕天下之非望、上不絕帝統、下不疏宗族、可使人人樂其樂、而無憾焉、王道之始也

澆人官由[illegible]終不知文行與家而無[illegible]心、嗚呼今士君子家、不必皆無俊傑之生、而人材若此、其不振者、是非盡才罪、即其風習之使然也、取其後他族而其幣財自供於養老、則其爲父子、以貌相持、其情不得相親愛慈孝、而其弊終使天下因冒姓之在他族、反遠其天性之親不顧、或有親、尚爲再從、而不相往來、未嘗識其面、夫又安得其祭祀合族、而死喪相恤、燕享同飽哉、其所以終使天下之族如此無頼者、無他故、坐其不能以禮親親、立宗子號爲氏上、使其族人相率而尊之、嗟此道終不能復、則使人人樂其樂、安能得之哉、王道之闕、孰甚焉、夫王道之闕、自古能以時補之、不一而足、允恭之世、天下之族姓、紛々乎散亂、而不相屬、是以家誣其祖、人僞其氏、詐冒相欺、而親疏不辨、人鬼之紀无定、乃詔正氏族、令妄亂之族、於祖之鬼神、以探其曲直於湯、孝德之朝、亦其詔云、拙弱臣連伴造國造、苟冒人之姓、而妄其先所自出、於是神名王號以爲賄、庶民賤種從亂族、嗚呼當時既已治之矣、然自蘇我氏之亂天下、圖籍委灰燼、而姓氏失譜、嫡庶爭長、雖能辨宗族、以尊世繫、自非宗子爲之糾率、則不得久保、故以天智之聖朝至仁、也、爲制定氏上、而天武因之、令諸氏上之未定者、盡皆定之、使其告於理官、若其族多者、分宗立之也、凡應在乎存閥閲、欲令有功子孫有復興焉、所謂臣連宿禰伴造國造、凡此名族、以其世官而職有弊、不可復用、別制新官、建冠位、則名族之姓、分爲八品、且有登降、使若爵命、故謂之氏之寵號也、自氏之寵號定、而弘仁姓氏錄、尚載舊姓、有千百餘氏焉、自諸蕃專朝蔓本

謂臣連宿禰伴造國造、凡此名族、皆以官有世功、而賜姓命氏、蓋自垂仁始、其姓有登降、以此爲氏之寵號、乃從天武始、夫自官而姓、自姓而氏、氏之寵號凡三變、然以官姓之、又以爲氏之寵號、使有功之後、能念先祖、纘舊服、於是乎宗族之禮成矣、臣竊謂、夫姓生也、父子相生、以皮毛骨肉、故謂之皮骨、夫吾與吾族、其皮骨同吾祖宗皮骨也、君子者、欲其族姓之不相亂、是以能以禮親々、立宗子、號爲氏上、使其族人相率而尊之、以得其祭祀合族、而死喪相恤、燕享同飽也、人之不幸无子者、必繼之以其同宗之子、則其爲後者、亦莫不同吾祖宗皮骨也、夫如是、然後其繼其繼也、其絕其絕也、繼絕之間、能處其命、不敢欺天、不敢誣祖、昔時士君子家、莫不皆然、故其世家譜牒、無或差忒、意者惟細人不得其然、夫細人或父他人子、他人以其族之不多、姓之不知、而不苟若是、懼老而不養、死而不埋也、懼老而不養、死而不埋、而苟亂族姓、不敢顧憚、固細人之事也、後世風俗日以壞、恩愛日以薄、雖士君子家、乃其父吝分其子室、而兄難與其弟財、習見於細人所爲、而使其苟之、乃亂族姓、不敢顧憚、爭問人後、莫復愧於其心、故天下餘子、率多以男嫁人、冒姓其婦家、而世之無子、將養人子爲後者、必先議其幣多少、雖其同宗有子、幣財不多、不敢成其議、取其他族而其幣財、自供於養老、是其繼非其繼也、絕非其絕也、非其繼爲繼、非其絕爲絕、夫既違命欺天誣祖、人鬼之紀幾乎滅矣、且天下餘子、率多以男嫁人、冒姓其婦家、則自幼而養其身態、脂韋游滑、取容於世俗、卒昔之志、止于爲人後、而

貴賤一、其低昂無レ常、而收斂惟錢是準、則雖二其賦無一レ有レ增二減於舊一也、民之所レ輸、多寡懸隔、其爲レ弊也古今一焉、及二豐家制一レ賦、其給二田祿一、始就二生穀之數一、改二幾貫幾百一、爲二幾百千萬石一、要在二乎欲一レ使下其民免二於税錢一、而忘レ遊二市肆一、因二土之利一、而知上レ樂二農圃一、大抵舊所レ謂一貫、乃當二今十石一、十石之田、十而税レ四、税乃四石、以二今價一言レ之、率當二銀五兩一、五兩之銀、彼一貫之入也、昔時以二錢貴一如レ此也、**自二永錢之久一、以二其稍多且輕一、蓋一貫定當二一兩一、及二今錢已鑄而多且輕一、雖二永錢已廢一、尚假二其名一、昔一當レ四、而乃今以二其六七一當レ之、苟以レ錢爲レ賦、雖二其賦無一レ有レ增二減於舊一、終得レ無レ弊哉、爲レ政者、其**宜二親レ弊治一レ之而已矣、凡田税今猶以レ永稱レ之、則永錢爲レ賦、其來久矣、嗚呼以レ錢爲レ賦者、非二王政一也、欲下勸二力田一抑中末業上、安其可レ得乎、世俗之人不二之思一、頑然羨二商賈之富一、爭二財貨之利一、乃謂、金銀不二甚多一、錢幣難レ得、謂、豪民財利藏而無レ泄、謂、官家務斂積而不レ恤、不レ病レ所レ病也、不レ知レ所レ治也

姓族

父母在、宗族多、而子孫相繼無レ絕、天子之樂也、夫王者之道、在レ使下天下人々樂二其樂一、然後其祭祀合族、而死喪相恤、燕享同飽上也、人々樂二其樂一、命也、不レ可二必得一、然有レ禮能置二天下於此一、則於二得之爲一、可レ無レ憾矣、古之時、草木榛々、鹿豕狉々、民之初生、亦無レ異二於物一、知二其有一レ母、不レ知二其有一レ父、尚何辨二宗族一哉、宗族之辨、始レ自レ有レ姓、古者天皇受レ命建レ極、然後文武官司、供二其職業一、所

金穀、皆無天眷、有德邦國將治、慶長六年自石見、十一年自伊豆、十三年自奥之南部、其生金銀及銅鐵之類、如覆蟻壤也、其他名山、逐年競時、而生貨來貢、不可勝量也、就中、如佐渡金山、其二百年間、不知歲生幾千萬斤也、自豐家聚斂天下之金、創大判小判、方今政府因其制、所改鑄大判小判、其類之多也、既利於官、而富於民矣、其初鑄金鑄銀、而銅猶莫鑄、其鑄銅造錢、萠自天正中、而文祿慶長元和寬永、相尋不息、元祿十三年、廢永錢當四之法、蓋以鑄錢多且輕也、自寬永錢大流布、而後其餘所鑄、尙仍其文、乃若明和鑄當四錢、亦復因之、莫敢改矣、有當四錢、而後錢益多且輕、嗚呼古幣不用錢、但有金銀、自銅錢一爲幣、靡々而皆從薄爲便、如今日、雖鉛鐵砂土、淆雜爲錢、猶以爲幣、莫敢怪且賤、是以其錢益多且輕、凡百物由是增益其價、而價猶賤、賤價之不利於民、殆使不安其生也、夫當今賦厚役重、病農已多矣、斯錢又泣農夫曰、錢之所爲賦、幾時四貫當一兩、今之六貫七貫難遽爲當、雖辭闤闠之產、蠶織之物、斯錢不足充其賦也、雖其賦無有增減於舊、猶病農至此極矣、乃窮小民、苦工商、使天下嗟其不利、何限、近歲幸而不有大水旱、故閭里雖已窮涸、米粟太賤矣、足以响濡矣、以此觀之、穀不可少、惟金不可多且輕也、且聞之、古者田祿號町段、自鎌倉氏之季、終足利將軍十餘世、更因地子之名、曰幾貫幾百、蓋田有腴瘠、所穫不一、故定稅額、不可以町段也、然錢者官之所布、而非地之所生也、田之科率、不主米粟、而錢爲定額、此可以稱私租之花利、而不可復施公上之正供、且物有

荐熟、粟斛銀錢一、民以殷富、蓋貨有五品、金爲最貴、而銀次之、銅及鉛鐵、皆以其賤也、古幣不用、錢有銀錢、以此常行、則金錢蓋毋作之歟、今夫粟斛銀錢一、如其斗升、何以貿易哉、有絲麻布帛、可以易粟、有陶冶、可以易粟、有斧斤之功、可以易粟、苟有可以易粟、則雖少財貨、民用無匱、雖寡商賈、物可通焉、以此觀之、可無金、寧可無穀乎、後世天下之俗薄、而人心日渝、官非利、無能御其世、民非富、無能樂其樂、於是天生寶貨資國用、使其治成於所務、俗安於所尙、寶貨之生、錢幣之鑄、古史莫紀、不可得而詳焉、貢銀對州、載于白鳳、當是時也、新羅所貢、有金銀及銅鐵、始鑄銅錢、銅錢自是行於世、而貢銅武州、載于和同、貢金奥州、載于天平感寶、則天生寶貨、資國用、於是爲盛、既而銀錢以當銅錢十、金錢以當銀錢十、使其治成於所務、俗安於所尙、自奠皇都于平安、而延曆弘仁承和嘉祥貞觀寬平之間、其鑄錢也、不爲不多、延及天德、尋而行此、自茲以降、皇運將日衰、世道將日汚矣、名山不出金、外國無來貢、古錢已耗、而新錢不能鑄、公私匱乏、世莫聊生、建武之初、初用楮幣、及鑄銅錢、楮幣不久而廢、四百五十年來、不能鑄錢、至此所鑄、蓋亦無幾、會朱明國鑄錢、仍僞年號、曰永樂通寶、所謂永錢者是也、迄于足利將軍之時、與彼通好也、其行李來往相尋、而永錢通來、充國用多年矣、天文永祿之間、永錢一即當古錢四、夫錢幣荒耗、纔以通用、遂衰運靡靡推移、將天有醜當世耶、何其寶貨之不生、國用之不資也、終不使其治成於所務、俗安於所尙、以此觀之、無

猨緣二于木一、鷩浴二于池一、若危レ之、而禁二其遊一、不二肯止一、則當三先示二之他玩弄之可一レ慰、今欲下勸二力田一而抑中末業上、狃二於利一之人、豈敢從二其令一、忍レ去二市井之樂一哉、亦當下先緩二農之賦役一、使中之有上レ所レ歸焉、而禁二其奇巧一、制二其詐欺一、責下其無二職事一者之身上、效二周法夫家之征一而收レ稅、不レ得下以二僥倖一自免上、則一時之間、怨謗之言滿レ市、猶知二耕稼之可一レ業、必相卒而從二事於本一、其可三以開二墾田疇一矣、此二之術也、然其威力者、多二財貨一者、勢必能占二良田一、役二小民一、此兼并之所二由起一、而君子爲二民父母一、亦當レ思レ之也、今將レ禦二其患一、莫レ善レ於レ限二民名田一（此劉漢董仲舒之法也、雖レ未レ有二行者一、先儒有識之士、皆以爲二至言一矣）夫名田、廣者無レ過二若干町一、率限レ之、以二其口之多寡一、雖二富强之家一、不レ得レ盡レ地多墾開一、而貧弱之民、猶可下以將二其妻子一、而耕中其段畝上、宜下先正二經界一、平二租稅一、嚴二其法禁一、毋中以有上レ犯、犯者沒二入官一、臣以謂、是非レ如二班田之煩且易一レ壞、此三之術也、三術者、所三以均二民也、而以レ智加焉、漸々以安レ民制レ產、數十年之際、其事應レ成也、苟如レ是、可下罷二兩稅一而復中租庸調之法上、其致二仁政一者、奚惟古之大化哉、若不レ然、坐視二農之病一、曾亂世之不レ若也、今夫以二二百年之治平一、而莫二之能救一、臣竊深惜レ之、臣竊深耻レ之

金穀

年不二凶歲一、地非二石田一、農桑之功、穀帛必得、夫穀帛人耕而飽、家蠶而給、民俗淳朴、而侈靡之風不レ萌、則商賈之富無レ所レ羨、而財貨之利無レ所レ爭也、古之聖人思二天下之治一、察二天下之心一、知下其惑二於所一レ羨、而亂中於所上レ爭、是以多二商賈一、不三以爲二邦國之富一、多二財貨一、不三以爲二天下之利一、古顯宗之世、年穀

其不可堪、欲鬻其田不得、欲與於人不得、卒逃其鄉、而商販於其所苟安、故市多游惰文作之民、以其固無事乎田、而終身不復知尺寸之賦役、然今市鷄鳴而起、孳々爭絲毛、莫不相競、求壟斷、罔市利、而欲其易售、極奇巧、務詐欺、已以其類之衆多、所往皆無日易為生也、由此而觀之、豈惟獨農之病哉、即勞苦嗟歎之聲、亦常在乎市、一旦不幸遇水旱、則其徒激于飢寒、陷于盜賊、固勢也、嗚呼君而不之憂、不仁也、臣而不之謀、不忠也、然則為君者為臣者、將何以圖治安**之計哉、夫物極則反、數窮則變、此理之常也、今之時可謂窮極矣、乘其機而有為、可以反而變**之、不難也、故臣欲驅冗兵與**閑民、而入之於田、無游手、無曠土、增益其所獲、以緩農之賦**役也、蓋富人之子、其平居所養太過、怕寒暑、避風日、是其身所以不健、而口之所甘、無不輒飽、惟其口之所甘、而輒飽、是其身所以致疾、有人告之、以其所以不健而致疾、使少減所養、必不為其子所喜、今兵亦如此、其生于治世、未嘗觀干戈之事、身養於世祿、未嘗知稼穡之艱難也、故其懊弱、若婦人孺子然、然則緩急其可為用哉、而今遽驅之、使入於田、不惟不從之、必有離叛之心、然十室之邑、不必無忠信之人、況今兵身養於世祿、長於士卿、遊君子禮義之域、固非如市井小人之徒、誠能喩之、以農病田廢、使思其君所以為憂、則其必有慷慨奮勵、將其子弟而力耕於田者、不惟自富其家、亦使人羨而從焉、雖其百石之微祿、可以修甲兵、可以畜馬乘、雖無事之日、於其為不為、可以觀忠不忠矣、此一之術也、群兒嬉戲、惟其氣之所觸、

昔者後三條方王道之將熄、實愛懷永圖、恤民隱、親聽政於記錄所、所先在乎罷莊園抑兼幷之奸、（愚管抄　正統記）而其後朝廷、與其卿相之家、且不自爲便、雖名爲奉行、實與之相背、是以其令不復行、（中右記長承中、知足院關白將置莊園于山道、云云、此去後三條延久之世、纔五六十年、而朝廷大臣所爲猶如此、又諸書所錄、如上皇所奉莊園、號院御領、皆上之人自違其所令也、）而後醍醐於中興之初、慨然有志於復古、其將營大內、行朝憲、徵諸國之租、以二十一、然諸國之租、闕然其不納於官久矣、遽而其令下、則守護地頭、固驕戾橫暴難制、卒以此怨望、天下復大亂、（太平記）二帝者誠中世英特之人主也、不能遂其所欲、則王道其終不可行歟、意蓋亦未得術也、不惟其術之未得、即其時亦未也、夫苟能得其術乎、惟今時爲然、今夫城府多冗兵、坐費其許多祿俸、而國君城主、與其家老從政之臣、已不堪其費、不能優給其祿俸、又不能復指麾其人、如曩時、是以其於農、賦不得不厚、役不得不重、祿俸不優給、而兵士懷怨私屬、彼一旦有急、安肯死其長上哉、必爭先而潰、賦不得不厚、役不得不重、則是驅農夫、使其棄田畝、而趣於工賈之利也、夫田產人之所宜欲、而曩時父祖之所兼幷、今其子孫、或還爲其賦役所困也、蓋方農事之可樂、雖破產之氓遷徙之客、猶不肯遺耒耟、莫不求贖其典田、得其所耕也、雖以其妻子質錢、爲人奴婢者、亦莫不隷農家、莫不俟其限年而復農民也、今其賦役之厚重、兼幷之族且苦、小民尙何堪、等爲厠役者、歸於富商大賈之家矣、故兼幷之族、不能多使人、不得不躬力耕也、即躬力耕也、地有餘而人力不足、傭作者輙貴其直、客耕者相謀、乃復其田、以要省其貸租、俯仰誠其不可堪、惟

有、當此時、屬世之澆季、叛亂不殄、雖身鎭關東、而諸道非以豪氏有兵者爲戍、則不能制之、故以此國衙置守護、莊園置地頭、(東鑑　文治初、頼朝欲捕其叔父行家弟義經、而不得、用大江廣元之議、乃奏請所在置守護地頭、使以擒獲之也)然賦者、惟其有田者、納於官、而役者惟其有田者、勤於軍也已、且時以軍興爲辭、而常賦之外、兵粮每段課五升、遂因以爲例、其每軍興、爲辭而增賦、則多取於爲役之民而不足、尙何納於官、官之用是以不給、而搢紳貴族遂從、而彫悴矣、(東鑑　頼朝令五畿及山陰山陽南海西海二十六國段別課米五升、以充兵粮、此蓋一時之宜耳、豈知其弊終至於此哉)國司徒充員、而軍政專於守護、莊園掠於地頭、其主莫之能制也、(承久記　後鳥羽上皇賜寵姬莊園、而其地頭以婦人之所有、輕侮之、不輸租稅、姬訴之上皇、上皇怒、乃命鎌倉宰北條義時、褫其地頭、義時不奉旨、其餘大概是類也)嗟夫大化中興之澤何在哉、所謂租庸調之法、於是皆斷然而無存也、而豪強兼幷之族、所在盤據其邑土、掌握其兵權、雖無一命之封爵、而其門地嚴然、諸侯自處、其家子郎黨爲臣禮、供給於左右、而佃客編戶、作之下民、有田者、與其兼幷之族、又相尋起于其間、其所以供上之令者、從便爲兩稅、惟有田者有賦、有賦者有役、而其弊之極、終有如今日者矣

兩稅者、因地之廣狹脊腴、而制賦、因賦之多少、而制役、是以戶無常賦、視地以爲賦、人無常役、視賦以爲役、如此則其自官視之、如太便宜、然、然其所由起、必出不獲已、則不可謂善法也、通鑑德宗紀、玄宗之末、版籍浸廢、多非其實、及至德宗兵起、所在賦斂迫趣、取辨無常準、吏因緣蠶食、旬輸月送、不勝困弊、至是楊炎建議作兩稅、其制雖不悉皆如今法、大抵亦一揆也已

納之心、夫公家所以給口分田者、爲收調庸擧正稅也、而今已奸其田、終闕其貢、收宰懷無用之田籍、豪富彌收兼并之地利、非惟公損之深、亦成吏治之妨

其始蓋於區々之莊、樹數畝之園、終以假其名、雖有千百之町段、猶謂之莊園、謂其宰之者爲莊司

野宮藤納言定基之說是也、其言莊園者、非先王之制、今所謂知行所之所由起也、其初蓋非人所讓、即其所私占、既非賜田、又非位職封地之邑、假如后妃湯沐之料、讓諸外家、功田至子孫、施入於寺之類、猶可依舊稱者乎、惟其不可名、故強號曰莊園也、莊園素以其所私有、所在不限之、以郡里鄉村舊名爲之變、其主人已滅或替、而其莊號獨存

莊司之所宰已廣、而國司之所治無幾存、所以委任於目代、而不肯就府也、目代一作眼代、代國司爲其眼目之謂也、非守介掾目之目　此時學校廢、禮制壞、而天下無政、臻於此極、其勢無可奈之何、既而源平將帥之家遞強盛、其爵位雖未高于朝廷、而威名已能震天下矣、而所在豪强兼并之族、亦莫不以兵爲之麾下部曲、智者効其謀、勇者効其死、其心在武功、不復知順逆之理、將之所爲、雖有大奸不義、而無所違拒假如源氏、自頼義義家陸奧之役、而諸國兵士多屬焉、朝廷下詔禁止之、不得、卒及義朝之弒父危社稷、而其麾下無有一人怪之者　夫其勢如是、則眼中固已輕視朝廷、故至平氏、緣亂離、建奇功、極人臣之位、專天下之權、雖其所自封、在天下之大半、而朝廷恨々然、誰與制之、及源頼朝起、欲其誅專權之賊、而復之於舊、而其所請無不許、然頼朝遂由此成覇業、海內爲其

田大功世々不レ絶、上功傳二三世一、中功傳二二世一、下功傳レ子、子別勅賜二人田一者、名二賜田一也、諸國公田、皆國司隨二郷土估價一賃租、其價送二太政官一、以充二雜用一、凡賃二租田一者、各限二一年一、園任賃租及賣、皆須下經二所部官司一申牒然後聽上、公私田荒廢三年以上、有二能借レ田者一、經二官司判一借レ之、雖二隔絕一亦聽、私田三年還レ主、公田六年還レ官、官人於二所部界內一、有二空閑地一、願レ佃者、任聽二營種一、替解之日還レ官、義解謂、位田賜田、及口分田墾田等類、是爲二私田一、自餘者、皆爲二公田一也、賃租者、凡剩田限二一年一賣、春時取レ直者爲レ賃也、與レ人令レ佃、至レ秋輸レ稻者爲レ租、即今所謂地子者是也、今以レ此觀レ之、奸之所レ生、豈無レ故乎、夫賃租借賣之事、於レ令已有レ之、及二朝政之衰一、乃不レ能レ率二由舊章一、是以上之人、不下以二其位田職田一爲上レ足、已私占レ田、以供二無饜之欲一、而國郡豪民効二其尤一、又何願二王制一乎哉、此班田之所二以廢一、而兼幷之所二由起一也、據二延曆三年詔一而觀レ之、其憂已有レ之、曰比日國司、其政多レ僻、不レ愧二無道乖方一、惟恐浸潰未レ巧、廣占二林野一、奪二蒼生之便要一、多營二田園一、妨二黔首之產業一、百姓雕弊、職是之由、宜下加二制禁一懲中革貪濁上、夫勵治雖二固如一レ此、弊亦日至矣、是故天長中、藤原衞上表陳二四條一、其一曰、交替已畢、未レ得二解由一、五位之徒、寄レ言格旨、留二任營內一、常妨二農商一、侵二漁獵一、百姓巧爲二奸利之謀一、未レ覩二塡納之物一、望請交替已畢、早從入レ京、延喜中三善淸行上二異見十二事一、其一曰、諸大帳所レ載百姓、大半以上此無レ身者也、國司偏隨二計帳一、給二口分田一、乃令下有二其身一者、幾耕二件田一、傾進中租調上、而無二其身一者、私沽二件田一、曾不二躬耕一、至二于租稅庸調一、遂無二輸

戶一石二斗、中上戶一石、中々戶八斗、中下戶六斗、下上戶四斗、下中戶二斗、下々戶一斗、若稻二斗、大麥一斗五升、小麥二斗、大豆二斗、小豆一斗、各當粟一斗、皆與田租同時收畢、義解謂、分富賑貧、其情合義、故曰義倉、慶雲三年詔曰、准令一位以下、及百姓雜色等、皆取戶粟以爲義倉、是義倉爲養貧民也、今取貧戶之物、還給富家之人、於理爲不安、自今以後、取中中戶以上粟、以爲義倉、必給貧之用、不得他用

夫如是、則其平治天下之本、固已立矣、此仁政之所以能致乎天下、而奈何獨無復行於後世、不知、其何以靡弊、而至於壞耶、蓋延喜天曆以降、天下安於無事之久也、恬々然、而其勢皆有荒怠之心、夫天子養余一人之尊、以怠乎德也、公卿大夫士、各恃其世家之富、以怠乎職也、庶民趨乎多幸之地、以怠乎手足也、相將橫於上、無諫者、鰥寡窮於下、無恤者、上下之情不達、貧富之勢懸隔、政綱日弛解、遂靡々而無振也、於是班田最先廢、而兼幷遊惰之奸尋起、上自朝廷之大臣、既已占田園、營私門、况乎下焉者、誰不肯效其尤哉、源平將帥之家、固無論、乃守宰以此據國、秩滿而不歸、國郡豪民、以此持隣里之利柄、吞貧弱之生產、貧者無立錐之地、而富者連阡陌、以勢相役、收其貨租、猶以其二十一納於官、而蓄其餘貨、則可以豪橫於鄉黨、而小民非附之不能耕、畏之甚於望官府、兢惟從指揮之不暇、又何及於調庸哉

田令、凡位田五位以上、職分田大納言以上、及在外諸司、目史生郡領主政主帳以上、各有差、又功

三十日以前、計帳至付民部、主計計庸多少、充衛士仕丁采女女丁等食、以外皆支配役民雇直及食、義解謂、其收庸者、須隨郷土所出、不可以布爲一例也、戸令、凡男女三歳以下爲黄、十六以下爲少、二十以下爲中、其男二十一爲丁、六十一爲老、六十六爲耆、無夫者、爲寡妻妾、蓋其當正役者、惟丁而已、餘皆不課役、不收庸、所養老恤幼、力憐無所告者也、天平寶字元年夏四月、詔曰、天下之百姓、成童之歳、則入輕徭、既冠之年、使當正役、愍其勞苦、用**軫於懷、昔日先皇亦嘗有之、猶未施行、自今以後、宜以十八爲中男、二十二以上爲正丁、**

於是天下無兼幷之族、無僥倖之民、所在無不均與乎賦役、夫賦如此、其均且薄、役如此、其均且輕、然後官之所斂、無不廣、民之所養、無不給、國富人安、令行禁止、風俗淳美、隣里和輯、猶懼其陷乎邪僻、設學校之官、以敷之敎化、

學令、凡博士助敎、皆取明經堪爲師者、大學生取五位以上子孫、及東西史部子爲之、若八位以上子、情願者聽、國學生取郡司子弟爲之、大學生式部補、國學生國司補、國郡司有解經義者、即令兼加敎授、若訓導有成、即宜進考、職員令、大國五十人、小國二十人、如此先育人才、然後試之朝、以任官敍爵、苟不然、安得化民成俗哉

猶懼其艱乎水旱、有義倉之蓄、以爲之賑救、

賦役令、凡一位以下、及百姓雜色人等、皆取戸粟、以爲義倉、上々戸二石、上中戸一石六斗、上下

之升法、不知其所從來也、僧家相傳、鉢所容受、用唐量、弘安時、以當時升法計之、唐一升當六合五勺、古王制倣唐、即令所載、度量權衡、與六典全同、弘安時、當是古制、而其言如此、因疑、其時升法、當是粟法、以六五歸唐升、則弘安一升、又當今六合四勺有奇、以此觀之、米粟法度轉相仍、量遂致轉大者審矣、田令又曰、凡給口分田者、男二段、女減三分之一、五年以下不給、其地有寬狹者、從鄉土法、易田倍給、給訖、具錄町段及四至、凡田六年一班、若以身死應退田者、每至班年、即從收授、夫如是、則人生五年以上、尙給其口分之田、嬰兒固不能躬力耕、必其父母之所因以爲利、多子者田亦多給、而不堪其力、則須借人收債租、以俟其子成長也、烏患家累、而墮胎溺子哉、身死即退田、則必不賦於無人、易田者、其地薄脊、隔歲耕種也、應給二段者、即給四段、然則田有善惡、而人無利不利、可見矣、六年班田之遺制、今猶在陸奧白河郡村落間、其村正掌收授之法、十年一繩、正經界、交易田地、謂之繩易也民爲便

調者、戶之所當輸、任其土之宜、據戶使以調布帛、（調絹絁絲綿布、並隨鄉土所出、正丁一人、絹絁八尺五寸、六丁成疋、長五丈一尺、廣二尺二寸、絲八兩、綿一斤、布二丈六尺、二丁成約屯端、端長五丈二尺、廣二尺四寸、又其他鹽鐵魚藻等、雜物並調）庸者、丁之所當役、男子年自二十一至六十爲丁、丁歲役十日、而不役者、出其力之所直、以爲役之庸

賦役令、凡正丁歲役十日、若須收庸者、布二丈六尺、一日二尺六寸、須留役者、滿三十日、租調俱免、役日少者、計見役日折免、通正役並不得過四十日、次丁二人、同一正丁、每年八月

税額所減、尾張及西三川、北伊勢之際、都合八九萬石、然秀次不毫介其意、秀次且如此、故知、當時愛士臣、惟民物、非今日姑息之所能及、太閤以其翌年之秋、克小田原、平關東、遂北巡遊陸奥出羽、而凱旋京師、是歳陸奥諸郡田地先大量、而文祿之際、相尋及諸道、蓋其制田、隨地寬狹、有三程、三百步爲大步、百五十步爲中步、百步爲下步、見其不能百步、捨而不稅、謂之見捨、且其定田界、林木叢植處、則北起其所不露滴、南至於所不庇蔭、而所賦取十四、謂之四公六民、及至今時、貪官汚吏、務以壞制、所謂見捨之田、且不肯貸、林蔭露滴、皆入田籍、其誅求巧貪、歲以苛急、大率皆五公五民、而甚者六公四民、七公三民、民之所養能幾耶

臣謂、知古之聖人致仁政、必先在均民也、是故較賦役、取於民有制、如所謂租調庸之法者、觀於大化之中興、大寶之新令、可見矣、故令不傳、故擧新令言之 夫租者、田之所當出、度地以居民、計口以班田、田不過二段、而租不過二十一、以六年一班、使奸民不得私占田也

孝德帝大化二年春正月、改新之詔曰、初造戶籍計帳、班田收授之法、凡五十戶爲里、里置長一人、掌按檢戶口、課殖農桑、禁察非違、催驅賦役、凡田長三十步、廣十二步爲段、十段爲町、段租稻二束二把、町租稻二十二束、田令並同焉、義解謂、段地獲稻五十束、束稻舂得米五升、然則於段者、須得二石五斗、而租纔一斗一升、是二十一而弱、可謂至薄矣、獨怪於是者、雖以今之一段三百步得一石爲率、而二石五斗、是如太多然、豈非以量之小大、古今不同乎、按、今

方北條氏康之有關東也、宗族家老、相聚於治廳、議大量田畝、氏康曰、不可、老子曰、治國如烹小鮮也、是以其善爲政者、不敢擾百姓、夫用兵之道、所以禁暴靖亂也、苟肆其私欲、事攻伐、貪土地、非天之所祐、早雲之定賦法、大率十而取五者、除其一、令納其四、而此外役一切不課、今夫天下之賦、皆如此、則民生必裕、國家必寧、故常禱之鬼神、以求加護也、但恨其願之不早、夫氏康之心術如此、故至於今、民每思其治蹟、傷時苛政、猶不怨其地頭、而反辱於秀吉、爲太閤變替古制、短段畝、而所取於民、不減于舊、則固非無罪於天下後世也、然、豈悉如彼之所譏哉、太閤記有之、太閤之封佐々成政於肥後、其教書以不厲百姓爲治要、三年內不得大量田畝、此類可見矣、且秀次初班其家士田祿也、其地善惡相混、故爭訟交起、而僚友不和、於是將遣使巡檢封地、乃選吏之淸廉堪事務、及工書算者充之、一郡各三人、且建五箇條令、曰、凡鄉里隣界、應依舊貫、曰、所往毋擾動百姓、曰、薪蒭外一切用費、皆自給、而不貪於民、曰、家士田祿班給、宜當其分、曰、舊雖曰田畝已所水損、毋入稅額、時以天正十七年八月、載自西三川、以大量田畝、比及尾張智多郡、其稅額頗有減于舊、吏之到此者、皆不安、相議以聞之、秀次曰、增減惟當以其實、何嫌哉、已而吏錄其減數、則有一萬石、以其減數之多、更相議、因近臣吉田某、以私白其狀、秀次但言、莫多說之、所班給田祿、苟無憾於衆可也、某以書告之、群吏皆愧曰、不意、君之爲君也、臣等妄以小人心度之、於是事已畢、則

力作云爾、且那波長年聞天子蒙塵于其地、乃率家兵奉迎之、遂據舟上山、募士民使搬儲蓄、其餘火之、其焦粒遺粟、今猶存焉、此事雖在於戰國百餘年前、大抵兵士之有儲蓄、亦從可知也而其農不爲兵、亦必以死傷戰鬪之患、一能勉身於稼穡、致力於溝洫、習性於寒苦、不外慕敢徙而易業也、豈市多游惰文作之民、以其固無事乎田、而終身不復知尺寸之賦役、如今日者哉、且其每軍興、爲辭而增賦者、及兵休、遂不爲除去、則其爲賦、當益厚、而漕運營築之事、時或驅使焉、則役亦已重矣、猶比之今日、則必亦有所綏矣、何者當時四隣、結讐搆兵、固無朝聘之奉供、方物之貢獻、則不復如今日郵驛之屬人馬、而貪吏之恃治世、愚小民、而無不爲也、自鎌倉以降、天下無文治久矣、所在守護地頭之臨民、一切以武斷、徒知收斂其租稅、斬捕其奸盜而已、即民間流離死喪、已缺其人、不敢除其賦、擧鄉當其責焉、而山獸之所至、河之所浸食、或捐其田、猶仍舊、而不毫貸之、則其民之悒々者、此獨無以異於今日矣、夫世態既已如是、而海內擾々、版圖不歸一、孰能救之哉、惟及于豐臣氏之勃興、爾白天子之大政、始發令出使、巡邦國、正經界、平租稅、爲先務也、古者、段三百六十步、即裁以爲三百步、積其餘、以補其田之所損、又不賦於其無人、夫若是、雖姑可慰其民之悒々者、而方今帥府、因其法制、致二百年之治平、卒所以賦益厚役益重、而天下惟病農者、蓋當時未得均民之術故也

北條五代記、論豐太閤云、秀吉厚萬民之賦、肆一身之欲、而大量天下田畝、長使病斯農、顧

賦役

自王道之衰、班田廢、制民不均、惟其有田者有賦、有賦者有役、而今也其賦徒責於人、而不知其田之幾何也、役徒課於賦、而不知其人堪否也、是故田有荊棘荒穢、而不堪耕、就其人賦之、人有孤寡老疾、而不可用、因其賦役之、而又其輕重厚薄、所在不一定、假如其所役、彼終歲閑暇、而此常驅使於府、奔走於驛、無息也、然太抵民之所咨嗟怨望而私語、賦能索農產、役能奪農時、未有如今日之極者也、然而天下城府多冗兵、坐費其許多祿俸、而市多游惰文作之民、以其固無事乎田、終身不復知尺寸之賦役也、然則天下之所以困苦者、獨集於農也已矣、夫人苟親之、孰不肯捨其所勞而趨其所逸、以爲、與其區々守耒耜、以窮死於田畝也、寧陷乎博奕無職之徒猶可矣、夫今而如是、數十年之後、將不勝其弊、昔者戰國爭亂之際、所在營城堡、收兵糧、則其農之困苦何如哉、然當是之時、兵尙出於農、其無事故、則力耕而積穀、不惟以自贍養、而又有以儲蓄虞變、豈城府多冗兵、坐費其許多祿俸、如今日者哉

按、鎌倉以降、兵農已分久矣、然其迄於戰國、所居猶不異、所業亦混焉、惟其名姓之爲主人者、不躬握耒耜、至於如所謂家子郎黨、則所食田祿微少、安得不躬力耕哉、據當時小說所載、出於農而兵、則甲斐高虎坂綱、相摸岩井兵庫之類也、兵而尙兼農、則三川近藤某輩是也、其仕德川家、雖有田祿、家貧躬耕、其耕也、植棒於田畔、繩繫其兩刀、被之以笠蓑、而從農夫、伺

輙少ㇾ費、江戸偏詐之市、奚不ニ緣而衰一矣、驕奢之風、奚不ニ從而止一矣、百姓必賤ㇾ末而貴ㇾ本、工賈之輩轉入ニ農業一、則天下之田園、當ニ期ㇾ日而治一矣、倉廩當ニ期月而盈一矣、廉恥當ニ期ㇾ時而行一矣、兵陣當ニ期ㇾ歲而練一矣、諸侯日富、百姓終安、舉ニ天下一皆戴ニ其更生之德一者、不ㇾ惟賴朝約ニ三年番役之勞一而已上、由ㇾ是得ニ人心一、致ニ富强一、水旱有ㇾ儲、武事有ㇾ備、盜賊不ㇾ起、而外寇無ㇾ所ㇾ乘、是其所ニ以爲ニ長久之治一也、然而其舉ニ諸侯一、靡ニ其國用一、以家ニ于江戸一者、是其所ニ嘗爲一ㇾ利、而利在ㇾ乎使ニ兵强ニ於內一、而無中所ㇾ虞ニ於外一、今也兵不ㇾ强ニ於內一、而非ㇾ無ㇾ所ㇾ虞ニ於外一、則其利將ㇾ不ㇾ盡耶、害將ㇾ不ㇾ萌邪、然猶不ㇾ能ㇾ若ニ臣所ㇾ言者、徒有ㇾ懲ニ於戰國之難一ㇾ制也已、昔者、方ニ足利將軍之末塗一也、令不ㇾ行ニ於天下一、所在群雄割據、迭爲ニ戰國一、衆暴ㇾ寡、强凌ㇾ弱、其亂虐無道、亦可ㇾ勝ㇾ嘆哉、當ニ此時一、兵尚出ニ於農一、武將戰卒、所在悉土着、故其伐ㇾ之、暫破而復聚、芟ㇾ之未ㇾ盡而更萌、滅者乃易ㇾ興、服者不ㇾ難ㇾ叛、構ㇾ兵報ㇾ讐、爭亂無ニ時得ㇾ息、迄ニ於豐太閤之時一、深懲ニ其如ㇾ是、欲ㇾ盡ニ拔其根一、鋤ニ其柢一、而不ㇾ復萌ㇾ焉、讐敵屠ニ其城一、降兵易ニ其地一、封ニ其功臣一、質ニ其室人一、舉ニ諸侯一而家ニ於浪華一、攝ニ四海一而運ニ於掌握之內一、其遠志雄圖、可ㇾ謂能杜ニ爭亂之源一、而得ニ時措之宜一、東照之克ニ浪華一、不ㇾ定天下一、亦既因ニ其法制一、以便ニ一時之安一、豈敢爲ニ數世之可ニ長用一也、若夫苟恃以爲ニ牢固不拔一乎、浪華獨何以亡滅、況其治之靡弊如ニ今日一者、不ㇾ革安可ニ以長久一哉、臣竊譬ㇾ之、刀劍之鏽者、不ㇾ礪不ㇾ可ニ以利一也、衣服之汚者、不ㇾ浣不ㇾ可ニ以衣一也、竊謂朝廷所ニ衰弱一者、弊而不ㇾ革、固其所也、嗚呼此豈惟衰弱、朝廷之謂而已哉

輓重漕遠、固多脚錢、或時破船以致費者、不知其幾何也、尺布寸帛、固不取於其民、即欲求之、必先易其穀於金、其價之貴賤、惟市人之所占、逞其射利、其餘薪蒭朝夕之用、不采于野、而擇于市、爨桂炊玉、自不可已、以致費者、不知其幾何也、工賈之肆惟務、雕鏤纖巧、品物粲然、眩人目睫、則婦人女子、冶游少年、無貴賤、輙以時樣相競高、不問其苦窳、朝成夕毀、務以相新、以致費者、不知其幾何也、嗟夫若此將何以堪、苟自非巧言乞哀於富商人賈、而有所稱貸、則不得不横斂於其下民也、下民其有何罪、而遇如此之殃也、其墳墓廬舍、桑麻菜蔬、士馬耒耜、皆爲子孫百年之計者苟顧之、寧不重遷哉、而尚猶捨之、以離去於四方者、歲不知其幾人、此豈其人之情、不獲已也、由是田園荒蕪、戸口減少、鹿猪入市、而人不能制也、幸其不失農業者、亦雖有豐年、而猶無蓄積、即不幸有方百里之水旱、則天下何以相救矣、弱者轉於溝壑、而强者聚爲盗賊、剽掠攻擊者、四面並起、而邊境乘之、有寇國郡尋陷、則安危之機不可測也、天下兵士、臣隷於麾下者、既已若彼、烏在其爲干城、諸侯之家、既已若此、烏在其爲藩屏、古人有言、曰、天下有治平之名、而無治平之實、有可憂之勢、而無可憂之形、嗚呼當今之時、不亦然乎、可以長大息矣、昔者、國造弱、而朝廷以爲天下之患、方今諸侯之貧、師府獨無此之省、而自憂者耶、抑狙於苟安、而不欲有所搖撼者也、此亦大惑矣、今夫欲長久之治、宜先使諸侯及麾下之有邑者、就其藩歸其土、更制述職之禮、選擧之法、使以時奉朝請補官吏焉、俗必復朴、財

レ爲然、其俗獨狃ニ於太平一、習ニ於浮華一、兵革無レ不ニ朽鈍一、倉廩無レ不ニ空匱一、其[illegible]

旨因レ之以ニ水旱一、加レ之以ニ盜賊一、則天下之安危何如哉、今臣竊以爲、其弊之所ニ[illegible]諸侯一

浚ニ其國用一、以家ニ于江戸上焉、夫江戸自下東照之開ニ師府一鎭ニ海內一、致中治安業上、已二百年、於レ是天下淸靜、

無レ所レ梗、來ニ遠近之氓一、致ニ山海之珍一、蟻群已爲ニ大都會之地一、使下其方四里之間、所在成ニ劇市一極中富庶上、

莫レ不ニ人肩摩車轂擊、奇巧末技、商販浮食之徒、俳優娼妓之類、囂囂然交ニ錯於其間一、固亦能蕩ニ人心

志一、能蠱ニ人金穀一、此諸侯及天下兵士、所ニ以家貧而人弱一也、天下兵士、臣ニ隷於麾下一者、自ニ秩不レ滿ニ

萬石一以下、至ニ百石數十石一、不レ問下食ニ采邑一與中仰上レ廩、稍不レ問下有ニ職事一與上レ否、總ニ其衆一、號ニ之八萬一、

夫八萬之衆、各皆世ニ其祿俸一、畜ニ其妻孥臣僕一、與ニ諸侯鉅麗之第宅一、比ニ其屋一、對ニ其門一、以觸ニ其耳目一、則勢

莫レ不ニ侈靡相競一矣、是以往々富者多破ニ其貲蓄一、而貧者恥ニ於不一レ若、以爭ニ於姦利一而不レ饜、在レ家熱中

而在レ官汚名矣、尙何顧ニ平生所一レ養、欲下以備ニ緩急一報中萬一上、而修ニ甲兵一審ニ堅利一、習中身體於騎射擊刺上

哉、即所レ習騎射擊刺、亦惟華法兒戲、而其人心志浮薄、筋力疲憊、恂恂然不レ知ニ其所一レ用、況其於ニ旗

鼓之令、陣營之制一乎、巧若レ彼者、固亦不レ足レ道也、其提封萬石以上、若數十萬石、小大凡三百諸侯、

各皆營ニ築其數區第宅一、自ニ其君及夫人一、以至ニ吏胥徒卒之賤夫婦一、汎々然寄ニ居於其中一、則大抵其衆、居ニ其

藩之十一一、而金穀之費、居ニ其藩之十七一、此在レ邸之所レ用、幾九ニ倍于其藩人一矣、何者其所レ賦ニ於民一、自ニ

[illegible]

卿等不レ知乎、昔者兵人、以二三年大番一適二京師一、必其從者之衆、行裝之觀、自以爲、一世大盛事者、竟爲レ之費二許多財用一、及二役休一、則所レ餘笠簑僅被、徒步歸レ國、夫三年大番、所三以能破二人蓄一、費既已若レ是、誠可レ憫也、我故殿爲レ之約二其役一、以二六月一交代、由レ是省二用費一、忘二憂苦一、以蒙二恩澤一、夫人苟有二人心一、可レ不レ思二之報一乎、將士聞レ之、皆感泣、遂西伐二王師一而敗レ之、按、三年大番、即衞士、自二中世一、邊海無レ所レ虞、而防人之役自息、惟其衞士、加レ役爲二三年一、以名二大番一也

此兵人所レ可レ憂、而擧朝曾無二之恤一、泰然使下之負二弓矢一陪中鹵簿之列上、而以頤二指輿輦之側一、奴二視門牆之隅一、嗟夫孰肯甘心、即非二慷慨不屈之士一、亦可レ無レ有二惋憤鬱結、以傲二睨時政一哉、此朝廷所レ可レ憂、而猶不レ憂、因循維持、惟其陳跡之踐、弊已至レ此、莫二敢革者一、而陵遲降二於保元平治一、則頽然紀綱盡弛、天下擾亂、亦不レ可二如レ之何一、此天下之大勢、所下以一二變於源賴朝一而不上レ復也、賴朝拖二英傑之姿一、唱二敵愾之義一、以驅二一時勇武一、則夫異時習二其黨於兵馬一、欲下以窺二變故一建中奇功上、而有二惋憤鬱結、以傲二睨時政一者、孰不下爭出二於其麾下一而自効上哉、而賴朝因以成二霸業一、其視二朝廷之不レ足レ治二天下一、猶二昔時朝廷之視二國造之不一レ足レ治二其國一也、於レ是國衞莊園、補二守護與二地頭一、大擧二其才一、而任二其能一、以專二天下之權於己一、三年番役之勞、約以二半歳一、省二其用費一、而便二于衆一、以攬二天下之心於己一、然後天下靡然、無二天子之民一矣、弊而不レ革、固其所也、嗚呼亦誰之尤、方今海內治安、內無二執政之憂一、外無二諸侯之虞一、然則其果無レ所レ弊邪、曰否、上之諸侯盡弱、下之百姓咸窮、上下嗷々、唯財用之不レ給、是憂是號、殆無レ所

賦絲竹之伎、治苟且記問之學、衣青紫、佩印綬、縱横赫奕、誇其榮花、恬然無復憂天下之志也、故其於布衣韋帶之士、未嘗置之於人數、其中雖有超羣之才、亦未嘗薦而任其能、則終不得出身而求貴也、貴不可得而至矣、則將惟富之求、夫如是、則國郡豪民、孰不安肆於兼幷之欲、皆爭占田園、（所謂莊園也、）蓄奴隷、習其黨於兵馬、欲以窺變故建奇功、所在多私將帥之家、豈復畏天子之法、而願天子之恩哉、此其勢然、（正統記、鳥羽帝之時、屢詔諸道、禁兵士私屬源平二氏、遂不能止之）古之制、其差兵充衛士防人、皆撰於農夫之中、惟其有功、授之勳階、以顯其名於朝、罷役、計其役年、以免其課於國

軍防令、軍團大毅小毅、通取部内散位勳位、及庶人武藝可稱者充、其校尉以下、取庶人便於弓馬者為之、所謂庶人是農夫、簡點為軍士、使以團練者可見矣、又曰、兵士上番者、向京一年、向防一年、向京者名衛士、向防者名防人、其還鄉、並免國内上番、義解謂、假如經一年者、免一年徭役、經二年者、免二年徭役之類也、又曰、大將出征、克捷以後、諸軍未散之前、即須對衆詳定勳位、令有勳階、自一等至十二等、所謂武散官者、是也

是以三年上番非不久、然民以為便、莫敢為憂也、而今此豪民者、不復曩時尋常之農、乃其平居自處甚倨、宮室壯麗、衣食豐溢、誠素封之富也、及其赴役於京師、必曜行色、靡財用、固已無論、而人情慕都雅、習繁華、居之三年、即不驕奢、亦能無破產哉

承久記、鎌倉平夫人聞天子將舉兵討己、乃會將士於簾下、親勵之、使以抗王師、其言略曰、

謂、國造者國司也云者、猶唐時所謂今之太守古諸侯、但言其臨國治民之職相似耳、豈敢爲一哉、先儒以爲、廢國造置國司、如秦滅諸侯郡縣天下者、昉於孝德之朝、此豈不觀於憲法、而妄說之、蓋有所見也、當時帝之用心於治也、周問於大臣及諸大夫、然後任東方國司、在大化元年、維新之秋也、然則其任東方國司者、蓋始置國司、選才任職也、但西方近畿、王風之所易化、其國司既已置久矣、其置猶未悉々變舊制者、即以爲、此時也已、又二年詔曰、拙弱臣連伴造國造、自冒人之姓、而其先之所自出、神名王號以爲賄、庶民賤種、從亂族、因知、當時衰弊之所致、華胄名族、蟲忝其所生、不惟國造爲然也、國造後世皆絕滅、而載籍多缺、其故無得而傳焉、獨其後之存者、僅々如將晨之星、僻在西陬出雲國、然其家所習、先世遺致餘俗、亦惟巫覡卜祝之事耳、蓋其昔時所以失國政者歟、乃後而推之、其餘國造亦或然、若然者、不可與共天下也、宜哉、其罷之

然後天下皆會於一、海內斐然、莫不嚮化、卒能致勝殘去殺之治、五百餘年矣、然延喜天曆之後、其習於無事之久、不得不弊也、乃其弊在乎任官牽制於淸濁之選、而爲政姑息於仁柔之治、夫牽制於淸濁之選、則官不能擧其才、姑息於仁柔之治、則爲政無威、苟爲政無威、則民必輕其令、犯其禁、而官不能擧其才、則其刑賞與奪、皆不得其當也、然其所以令然者、亦無他、當時公卿巨室、皆世其祿、竊位私官、所獎用、多出於子弟親黨、而其立於本朝、蒞國郡者、率皆講辭

今書

下野　蒲生秀實著

革弊

天下之治、何無弊也、其弊之所由起、必在乎其所嘗爲利、惟其利未盡、而革之、使其害不萌者、可以長久其治也、而治之與時變遷、循々焉、猶裘葛之於冬夏、不得不易也、而尚不易、非寒則暑、幾何其不中於疾哉、昔者封建之制、胙土分疆、號爲國造、小大相維、以藩王畿、奉其方職者、一百四十有四焉、而後世皆絶滅、其故何在也、蓋先王之奉神道、其能事天地、所以敎敬也、事宗廟、所以敎孝也、故曰祀之與政、其致維一、然其弊之極、擧天下、皆不知其所以爲敎、惟鬼神之說是惑、而齋盟是瀆、乃若彼國造、亦惟爲其巫風所扇、狎神誣民、自卑其封爵、遂微弱不能復振、當孝德朝、乃以爲、天下之患也、是以變舊制、廢國造、而選之守宰、置治府、而施其政敎

按、推古帝時、上宮太子著十七憲法、其中既有國司國造並稱、則國司國造自別可見、而職原抄所

然無ニ此才一無ニ此位一、而尙不レ已、故欲下刻ニ此書一以普示ニ天下一、使中其所レ務詳審上、上總土豪江澤述明篤學之士也、聞ニ余此言一、乃曰、善子其行レ之、吾其助レ費、乃上ニ之梓一、亦豈得レ已哉、雖レ然、萬缺ニ其人一、余與ニ蒲生氏一慨矣

安政五年歲次戊午春二月　筒井明俊識

余聞、蒲生氏著ニ此書一未レ經ニ考訂一而沒、以レ此乎、往々不レ能レ無レ疑ニ於章句間一、然所ニ內充而外發一、讀レ之歟、覺下主意極徹底、無上レ害ニ於其議論一、故校ニ異本一、增ニ減一二字一而已、不ニ敢及ニ一章一句一、纔存ニ舊之意、學者其勿下以ニ章句一視中蒲生氏上也

筒井明俊再識

今書目次

怠、我見觀也、難矣、其無間、且夫、自古治平之久、弊必有、今也、變革雖不惰、治平三百年、難矣、其無弊、無弊或間、無間或弊、不一免其無有、難哉、其無後患、豈不備而可哉、方今策士、誰不謂嚴守禦、惜未也、夫不可懲、不足以守、不可撫、不足以懲、則欲嚴守禦、其實不可闕、威德即是矣、然變革不是務、必將不勝其弊、自古治平之弊多矣、然概之國貧兵弱、不過此二端也、夫苟國貧兵弱、威乃不能烈、德乃不能大、而唯守禦是嚴、蓋雖天祖、不保其無間、況下此者、區々之虛名亦奚勝、故雖古先務之、備之道、豈啻嚴守禦、是務之而已、則雖今亦轉貧爲富、弱爲强、不可不先務、欲轉貧乎、田可均也、欲轉弱乎、祀可崇也、夫祀崇矣、民無不誠、田均矣、民無不給、給、以此用足、誠、以此知義、知義則兵强、用足則國富、二者得矣、威於是乎烈、德於是乎大、而嚴守禦、則雖欲有間得乎、雖欲有弊得乎、雖欲有患可得乎、夫如此、假令醜虜狡猾多智、無得而施其技焉、況有否者乎、嗚呼是天祖養之敎之保之之法、而東照宮所以致三百年之治、亦是而已、無事固不可不務、況今乎、而爲之不特絶其侵凌、又不特懲撫其蠢忘、四夷八蠻自是陸續矣、然則威德益光、天祖之意乃終、豈不一大快事哉、蒲生氏蓋有見于此、故其所著、概出此而今書其魁、分篇七、曰革弊、曰賦役、曰金穀、是養也、曰姓族、曰名勢、曰祀政、曰政敎、是敎也、保之則寓其中、而賦役祀政、於均田崇祀、魁之尤者、苟欲務懲撫之實、以絶其侵凌、以光其威德、以終其天意者、安得不讀此書、余有此志也、

レ爲二痛哭流涕長大息一也、予特怪焉、讀至二於景帝一、則始服二其先見一矣、今也、治蹟休明、過二漢文一遠矣、雖レ然、蒲生氏而視レ之、則亦有二不レ然者一歟、而酉司之見、抑賢レ予者歟、嗚呼予又安知二此書之終無レ可レ用哉、乃序レ之

安政五年戊午春二月

備中　原田業廣識

刻今書序

嗚呼大矣、天祖之德乎、嗚呼烈矣、天祖之威乎、有二衣食一、以救二其飢寒一、有二彝倫一、以別二其華夷一、德不二亦大一乎、有レ兵、以除二其害一、威不二亦烈一乎、而更有レ甚焉、其祝詞曰、神明之所二照臨一、窮天極地、狹者俾レ廣、險者俾レ平、遠者如下以二八十綱一牽上之、蓋天意以所レ布二於我一、亦將レ施二萬方一、豈不レ甚哉、宜矣、自三任那一貢二於我一、諸番至レ今綿延、而未三嘗爲二其所一レ侵也、誠宜二四夷八蠻無一レ有レ遺、而方今醜虜、敢妄欲レ侵レ我、其意蓋以、治平日久、爲二間之可一レ乘耶、余知レ不レ爲二其所一レ侵矣、若威若德以レ之、雖レ然、及レ今無レ備レ之、安保三其無二後患一、夫覘レ人者、常無レ間、見レ覦二於人一者、間或有、今也、守禦雖レ不

刻今書序

余一日讀漢書矣、筒井酉司來曰、子豈記賈生傳乎、生反覆周詳、極陳當時之弊矣、天下至今稱之、今世又有賈生其人而不得少試以沒、予畏其湮滅也、故欲刻其書以見用於世、子盍序之、因示一書予受讀之、乃我蒲生氏所著今書者也、其篇七、曰革弊、曰賦役、曰金穀、曰姓族、曰名勢、曰祀政、曰政教、皎皎乎古是求、議論精切、慷慨激昂、眞歟賈生其人、宜矣、酉司之刻之也、雖然、人而無疾、藥石雖良、不可施之也、國而無患、議論雖切、不可施之也、方今之世、予未知此書之可用也、諸侯奢矣、藩屛於是乎衰焉、救之之術、在於儉使用、而今則非不儉歟、庶民窮矣、國基於是乎毀焉、救之之術、在於節用度、而今則非不節歟、農商濫矣、金穀不可以無制、詐冒甚矣、姓族不可以不正、而今則非無制歟、非不正歟、順逆之不辨、梗命之所以起、歸向之不定、民心之所以惑、風習之不善、民俗之所以惡、而今則名勢非不重歟、祀政非不崇歟、政教非不治歟、此數者予未見其可議矣、然則當今固不待蒲生氏之言也、而子不察、又上之梓、予不取也、含而不序數日、既而又以爲、當漢文之時也、使用非不儉、賦役非不節、金穀制焉、姓族正焉、而名勢也、祀政也、政教也、未有可患者矣、而誼則曰、可

今書

蒲生秀實著

京師書肆　著屋勘兵衛刊行

計較一、豈有下爲二士之心一也、爲二庶人之學一者、或農或醫、生業之勤、暇日讀二小學書一、修二其孝弟一而足矣）然許衡之意、不レ論二其業之賤不賤、其力之堪不堪一、直以二學者食足一爲レ主、故於二生計多端之中一、愛二其豐者一、惜二其約者一、縱令人或曰下許衡不レ留二情於豐約之間一、而予強中之上、亦予謂許衡未丁嘗知丙教學與レ作レ宜、所乙以爲二古人之意一者、如二前所甲レ云、則其言何能免二無稽之譏一乎、嗚呼許衡素信二程朱一之人、而其意見之偏大率如レ此、我人所レ宜レ戒也

享保戊申歲暮日

天木時中識

爲貧說 終

是也、孟子豈虛語哉、若曰爲貧而仕、古人無有、則予亦未敢聞命也）朱子亦以教學與作官爲學者生計（文集答任行甫書曰、官卑祿薄、雖不快意、然比之一介寒士、區區教學、仰食於人者、則已爲泰矣）而近世三宅尚齋先生又推其說、深抑賤業、懇懇爲諸生講之（愼術說曰、出處之義、君子守身之大端、利害得喪、固所不計也、而死生亦大、君子不遭値于時、不可無生業、然其術豈可不知所擇哉、因謂古昔聖王之立法、人生八歲、自天子至庶人之子弟、皆入於小學、教之以人家日用彝倫之規、農工商賈者、營產之暇、往來於左右塾、而受教於里中長老矣、十五而入於大學者、庶人則俊秀而已、既入於大學、則其志在修己治人之尙也爾、（受食於公、而其生亦無可慮者）豈用心於稼圃百工之賤哉、若或察於稼圃者、其亦農庶焉耳、非大人之事矣、（朱子所謂、士又不當爲農工商賈之業、當字可見）後世道衰法亡、孰任分智愚辨大小之職、惟有父與師而已、其子弟之智也、教之以志大人之學、爲去聖繼絕學、爲萬世開太平、其愚也、教之以爲小子之學、守庶民之職而已、不志大人之學則已矣、既志於此也、當尙其志、豈拘拘屑屑於耕穫糞灌之微、參蒔補瀉之細哉、古之聖賢、所以其貧至于空匱、不肯爲貨殖也、後世憂貧、踰於憂道之徒、不知於此、諉以不營生則餓死、而未至於含糗編草之急、既計百年後、八九分役心於生計、纔用一二分之力於滅裂之學、以是欲得聖賢大學之道、其亦可哀哉、若夫餓死、則似可慮然祿仕抱關、教學仰食、何死之有、人但深懼寒餓、是以生業藉口、所謂多方求餘、遂生萬般

三代教法不行於上、而一世之士慨然傳、相授[illegible]於下、尊心一力、非面講則書諭、往復切磋不已、欲其闢異端排俗學、而守三代教法之舊也、故後生之於先輩、貴富者厚幣帛、而邀致之、貧賤者執束脩、而往學之、則先覺者得不必別營衣食、而納之以自資、專意於教學、常以扶植斯道為己任也（白虎通義曰、私相見有贄何、所以相尊敬長和睦也、朋友之際、五常之道、有通財之義、賑窮救急之意、中心好之、欲飲食之、故財幣者所以副至意）抑業稼圃商賈等之可慮者、非特賤耳、學者於其事、預無講習、臨急欲遽創其業者、固非力所任也、其力所任者、唯教學而已、其他無如作官、孟子既曰為貧而仕、而楊龜山又為陳子安言之切矣（文集答陳子安書曰、向恃朋友之愛、不量可否、妄以書勉公為祿仕、重承錄示高文、開諭丁寧、徒用慙悚、所謂君子之為貧、蓋多術矣、誠如所論也、然某竊謂、古之為貧者、豈特耕稼陶漁而已乎、膠鬲起於魚鹽、百里奚起於市、苟不失義、雖賈儈可為也、然君子亦任其力之所能堪、不強其力之所不能任、今使吾徒耕稼能之乎、不能也、使之陶漁能之乎、不能也、使與市人交易、逐什一於錐刀之末能之乎、不能也、使是數者不能、則是將坐待為溝中瘠耳、而可乎、不然則未免求於人、如墦間之為也、與其屈己以求人、孰若以義受祿於吾君為安乎、前書招為祿仕者、殆為此也、子安之學、究極聖賢之蘊、其所以自謀必審矣、苟能任其力之所能堪、而不失理義之歸、亦何必仕哉、然君子之仕、有時而為貧、古人有之、簡兮之詩

然未敢遽言、我當以他事使汝侍食、因從容道吾意、彬叔侍食、如所戒試啓之、先生曰、某與乃翁道義交、故不遠而來、奚以是爲、詰朝遂歸、韓謂彬叔曰、我不敢面言、致謂此爾、再三謝過而別（外書）

○呂汲公以百縑遺子、子辭之、時子族兄公孫在旁、謂子曰、勿爲已甚、姑受之、子曰、公之所以遺頤者、以頤貧也、公位宰相、能進天下之賢、隨才而任之、則天下受其賜也、何獨頤貧也、天下貧者亦衆、公帛固多、恐公不能周也（遺書）

○朱子與趙帥書曰、熹衰病之餘、災患踵至、殊不自堪、伏蒙問愼、良以爲感、又蒙軫其乏絶、割清俸以周之、仰認眷存、尤切愧荷、但窮巷書生、蔬食菜羹、自其常分、不知後生輩以爲創見、便爾傳說、致誤台慈以爲深憂、亟加救接、至於如此、在熹之義、豈當復有辭避、實以近日偶復粗可支吾、未敢虛辱厚意、謹已復授來使、且以歸納、萬一他日窘急、有甚於今、當別稟請以卒承嘉惠也、人參附子、則已敬拜賜矣（文集）

或曰、學者之爲貧、吾子以敎學與作官爲當然、與許衡之論相反、（魯齋全書曰、爲學者、治生最爲先務、苟生理不足、則於爲學之道有所妨、彼旁求妄進、及作官嗜利者、殆亦窘于生理所致也、士君子當以務農爲生、商賈雖爲逐末、亦有可爲者、果處之不失義理、或以姑濟一時、亦無不可、若以敎學與作官、規圖生計、恐非古人之意也）請子辨之、曰、自

子列子笑謂之曰、君非自知我也、以人之言而遺我粟、至其罪我也、又且以人之言、此吾所以不受也（列子）

○朱子因說貧曰、朋友若以錢相惠、不害道理者可受、分明說其交也以道、接也以禮、斯孔子受之、若以不法事相委却、以錢相惠、此則斷然不可（語類）

○杜甫在成都、劍南節度使裴冕、爲卜西郭浣花谿、作草堂居焉（唐書）

○康節先生未嘗有求於人、或餽之以禮者、亦不苟辭、洛人爲買宅、丞相富公爲買園以居之（伊洛淵源錄○按事文類聚、洛人即王拱辰也）

○范文正公在睢陽、遣堯夫到姑蘇、取麥五百斛、堯夫時尚少、既還、舟次丹陽、見石曼卿、問寄之久何如、曼卿曰、兩月矣、三喪在淺土、欲葬之而北歸、無可與謀者、堯夫以所載麥舟付之、單騎自長蘆捷徑而去、到家拜起、侍立良久、公曰、東吳見故舊乎、曰、曼卿爲三喪未舉、方留滯丹陽、時無郭元振、莫可告者、公曰、何不以麥舟與之、堯夫曰、已付之矣（名臣言行錄）

○張子以爲、教之必能養之、然後信、故雖貧不能自給、苟門人之無貲者、雖糲蔬亦共之（伊洛淵源錄）

○伊川與韓持國善、嘗約候韓年八十、一往見之、間正月一日、因弟子賀正、乃曰、某今年有一債未還、春中須當暫往潁昌見韓持國、蓋韓八十也、春中往造焉、久留潁昌、韓早晚伴食、體貌加敬、一日韓密謂子彬叔曰、先生遠來、無以爲意、我有黃金藥楪一重二十兩、似可爲先生壽、

責其施之厚、是二行者、誠難得而兼矣、足下又欲使光取之於他人、是尤不可之大者、微生高乞醯於隣人、以應求、孔子以爲不直、況己不能施、而斂之於人、以爲己惠、豈不害於恕乎、足下之命、既不克承、又費辭以釋之、其爲罪尤甚深、足下亮之而已

○朱子曰、自王介甫更新法、慮天下士大夫議論不合、欲一切彈擊罷黜、又恐駭物論、於是創爲宮觀祠祿、以待新法異議之人、然亦難得、惟監司郡守以上、眷禮優渥者方得之、自郡守以下、則盡送部中、與監當差遣、後來漸輕、今則又輕、皆可以得之矣（類語）

○答詹元善書曰、若夫祠官無事之祿、本非義理所安、前輩蓋非辭尊辭富則莫之肯爲、熹之不肯、固不足言、然居此官最久、前後三請、亦皆有故、非辭難就逸而爲之也（文集下同）

○答汪尚書書曰、熹亦非必欲祠祿、若荒僻無士人處教官、少公事處縣令之屬、似亦可以藏拙養親、但恐無見闕耳、窮空已甚、若有數月之闕、即不可待、又不若且作祠官之爲便也

○與劉子澄書曰、熹又三四日、祠祿便滿、前日因便、已託尤延之爲再請、勢必得之、食貧不得已、復爲此擧、甚不滿人意

○子列子窮、容貌有飢色、客有言之鄭子陽者曰、列禦寇蓋有道之士也、居君之國而窮、君無乃爲不好士乎、鄭子陽即令官遺之粟、子列子出見使者、再拜而辭、使者去、子列子入、其妻望之而拊心曰、妾聞爲有道者之妻子、皆得佚樂、今有飢色、君過而遺先生食、先生不受、豈不命也哉、

之齪齪者、既不足以語之、磊落奇偉之人、又不能鷮焉、則信乎命之窮也）又好悅人以銘誌而受其金、觀其文知其智、其汲汲於富貴、戚戚於貧賤如此、彼又烏知顏子之所爲哉、夫歲寒然後知松栢之後凋、士貧賤然後見其志、此固哲人之所難、故孔子稱之、而韓子以爲細事、韓子能之乎（温公傳家集下同）

○答劉賢良書曰、今者足下、忽以親之無以養、兄之無以葬、弟妹嫂姪之無以恤、策馬裁書、千里渡河、指光以爲歸、且曰、以鬻一下婢之資五十萬、畀之足以周事、何足下見期待之厚、**而不相知之深也、光得不駭且疑乎、方今豪傑之士、內則充朝廷、外則布郡縣、力有餘而仁可仰者、爲不少矣、**足下奚之取、乃獨左顧、而抵於不肖、豈非見期待之厚哉、光雖竊託迹於侍從之臣、月俸不過數萬、爨桂炊玉、晦朔不相續、居京師已十年、囊褚舊物皆竭、安所取五十萬以佐從者之蔑積乎、夫君子雖樂施予、亦必己有餘、然後能及人、就其有餘、亦當先親而後踈先舊而後新、光得侍足下、纔周歲、得見不過四五、而遽以五十萬奉之、其餘親戚故舊、不可勝數、將何以待之乎、光家居、食不敢常有肉、衣不敢純衣帛、何敢以五十萬市一婢乎、而足下忽以此責之、豈非不相知之深哉、光視地然後敢行、頓足然後敢立、足下一旦待以爲陳孟公・杜季良之徒、光能無駭乎、足下服儒衣、談孔顏之道、啜菽飲水、足以盡歡於親、簞食瓢飲、足以致樂於身、而遑遑焉以貧乏有求於人、光能無疑乎、光自結髮以來、雖行能無所長、然實不敢錙銖妄取於人、此衆人所知也、取之也廉、則施之人也靳、亦其理宜也、若既求其取之廉、又

盧來、談話終日夕、觴至輒傾盃、情欣新知歡、言詠遂賦詩、感子漂母惠、愧我非韓才、銜戢知何謝、冥報以相貽（淵明集）

○司馬溫公顏樂亭頌自叙曰、子瞻論韓子以在隱約而平寬、爲哲人之細事、以爲君子之於人、必於其小焉觀之、光謂韓子以三書抵宰相求官、與于襄陽書、謂先達後進之士、互爲前後、以相推援、如市賈然、以求朝夕芻米僕賃之資（韓退之與于襄陽書曰、士之能享大名顯當世者、莫不有先達之士、負天下之望者、爲之前焉、士之能垂休光、照後世者、莫不有後進之士、負天下之望者、爲之後焉、莫爲之前、雖美而不彰、莫爲之後、雖盛而不傳、是二人者未始不相須也、然而千百載、乃一相遇焉、豈上之人無可援、下之人無可推歟、何其相須之殷、而相遇之疎也、以故在下之人負其能、不肯諂其上、上之人負其位、不肯顧其下、故高材多戚戚之窮、盛位無赫赫之光、是二人者之所爲皆過也、未嘗干之、不可謂上無其人、未嘗求之、不可謂下無其人、愈之誦此言久矣、未嘗敢以聞於人、側聞閣下抱不出世之才、特立而獨行、道方而事實、卷舒不隨乎時、文武惟其所用、豈愈所謂其人哉、未聞後進之士、有遇知於左右、獲禮於門下者、豈求之而未得邪、何其宜聞而久不聞也、愈雖不才、其自處不敢後於恒人、閣下將求之而未得歟、古人有言、請自隗始、愈今者惟朝夕芻米僕賃之資是急、不過廢閣下一朝之享而足也、如曰吾志存乎立功、而事專乎報主、雖遇其人、未暇禮焉、則非愈之所敢知也、世

正宜決山林終老之計、結茅靜處、讀書養志、以益求其所未至、加之三數十年之功、則病未必不痊、學未必無成、天下萬物、如吾所樂何哉、顧不出此、而從事應擧覓官、以爲我姑試之、如或不可、欲退則退、誰復絆我、初不知今時與古時大異、我朝與中朝不同、士忘去就、禮廢致仕、虛名之累、愈久愈甚、求退之路、轉行轉險、至於今日、進退兩難、謗議如山、危慮極矣（自省錄）

○伍子胥橐載而出昭關、夜行晝伏、至於陵水、無以餬其口、膝行蒲伏、稽首肉袒、鼓腹吹篪、乞食於吳市、卒興吳國、闔閭爲伯（史記）

○范文正公在睢陽掌學、有孫秀才者、索遊上謁、文正賜錢一千、明年孫生復道睢陽謁文正、又賜一千、因問何爲汲汲於道路、孫生戚然動色曰、母老無以養、若日得百錢、則甘旨足矣、文正曰、吾觀子辭氣非乞客也、二年僕僕、所得幾何、而廢學多矣、吾今補子學職、月可得三千以供養、子能安於學乎、孫生大喜、於是授以春秋、而孫生篤學、不舍晝夜、明年文正去睢陽、孫亦辭歸、後十年聞泰山下、有孫明復先生、以春秋教授學者、道德高邁、朝廷召至、乃昔日索遊孫秀才也（名臣言行錄）

○和靜處士尹焞、緣叛臣劉豫父子、迫以僞命、焞經涉大河、投身山谷、自長安徒步趨蜀、崎嶇千餘里、乞食問路、僅得生全（伊洛淵源錄）

○陶淵明乞食詩曰、饑來驅我去、不去覓何之、行行至斯里、叩門拙言辭、主人解余意、遺贈豈

實、因指其門閾云、但此等事如在門限裏、一動著脚便在此門限外矣、緣先以利存心、做時雖本爲衣食不足、後見利入稍優、便多方求餘、遂生萬般計較、做出礙理事來、須思量止爲衣食爲仰事俯育耳、此計稍足、便須收斂莫令出元所思、則粗可救過（語類）

○答呂伯恭書曰、婺人番開精義事、不知如何、此近傳聞、稍的云、是義烏人、說者以爲、移書禁止、亦有故事、鄙意甚不欲爲之、又以爲此費用稍廣、出於衆力、今粗流行、而遽有此患、非獨熹不便也、試煩早爲問故、以一言止之、渠必相聽、如其不然即有一狀煩、封至沈丈處、唯速爲佳、蓋及其費用未多之時止之、則彼此無所傷耳、熹亦欲作沈丈書、又以頃辭免未獲、不欲數通都下書、只煩書中爲道此意、此擧殊覺可笑、然爲貧謀食、不免至此、意亦可諒（文集）

○張欽夫答朱子書曰、比聞刊小書板以自助、得來諭及敢信、想是用度大段逼迫、某初聞之、覺亦不妨、已而思之、則恐有未安者、來問之及、不敢以隱、今日此道孤立、信向者鮮、若刊此等文字、取其贏以自助、切恐見聞者別作思惟、愈無靈驗矣、雖是自家心安、不恤他說、要是於事理終有未順耳、爲貧乏故、事別作小生事、不妨、此事某心殊未穩、不識如何（南軒集）

○朱子與林擇之書曰、欽夫頗以刊書爲不然、却云別爲小小生計却無害、此殊不可曉、別營生計、顧恐益猥下耳（別集）

○李退溪答奇明彥書曰、滉少嘗有志於學、而無師友之導、未少有得、而身病已深矣、當是時、

○朱子狀胡籍溪行曰、先生學易於涪陵處士譙公天授、久未有得、天授曰、是固當然、蓋心爲物漬、故不能有見、唯學乃可明耳、先生於是喟然歎曰、所謂學者非克己功夫也耶、自是一意下學、不求人知、一旦揖諸生、歸隱于故山、非其道義、一毫不取於人、力田賣藥、以奉其親、文定公稱其有隱君子之操、而鄉人士子慕從之遊、日以益衆 文集○朱子語類曰、籍溪舊開藥店、胡居士熟藥正鋪、並諸藥牌猶存

○嚴君平卜筮於成都市、以爲卜筮賤業、而可以惠衆人、有邪惡非正之問、則依蓍龜爲言、與人子言依於孝、與人弟言依於順、與人臣言依於忠、各因勢導之以善、從吾言者已過半矣、日閱數人、得百錢、足自養、則閉戸下簾、而授老子 前漢書

○張子曰、古人耕且學則能之、後人耕且學則爲奔迫、反動其心、何者古人安分、至一簞食一豆羹易衣而出、只如此其分也、後人多欲、故難能、然此事均是人情之難、故以爲貴 經學理窟

○黃勉齋曰、貧而爲農圃之事、亦未爲過者、樊遲之志、豈亦有許行之說者、而慕之歟、故夫子以大人之事告之 論語大全

○李退溪答鄭子中書曰、窮而買田、本非甚害理、計直高下之際、約濫從平、亦理所不免、但一有利己剋人之心、便是舜蹠所由分處、於此須緊著精采、以義利二字剖判、才免爲小人、即是爲君子、不必以不買爲高也 自省錄

○問、吾輩之貧者、令不學子弟經營、莫不妨否、朱子曰、止經營衣食亦無甚害、陸家亦作舖買

○程子曰、先公以二年七十一乞二致仕一、家貧口衆、仰レ祿以生、據レ禮引レ年、略不下以二生事一爲中慮、人皆服二公勇決一、頤時未レ仕、闔門皇皇、不レ知レ所三以爲二生、公不二以爲一レ憂〈文集〉

○問、聖人有下爲レ貧而仕者上否、曰、孔子爲二乘田委吏一是也、因言近戀有レ人以レ此相勉、某答云、待下飢餓不レ能レ出二門戶一時上、當二別相度一〈遺書〉

○朱子曰、學者當下常以二志士不一レ忘レ在二溝壑一爲中念、則道義重而計二較死生一之心輕矣、況衣食至微末事、不レ得未二必死一、亦何用下犯レ義犯レ分、役レ心役レ志、營營以求上レ之耶、某觀二今人一、因レ不レ能レ咬二菜根一、而至三於違二其本心一者衆矣、可レ不レ戒哉〈語類下同〉

○友仁問二邦畿千里惟民所一レ止、曰、此是大率言三物各有二所一レ止之處一、且如レ公其心雖二止得是一、其迹則未レ在、心迹須レ令レ爲レ一方可、豈有下學二聖人之道一、服二非法之服一、享二非禮之祀一者上、程先生謂下文中子書二心迹之判一、便是亂說上者此也、友仁曰、舍レ此則無二資レ身之策一、曰、君子謀レ道、不レ謀レ食、豈有下爲レ人而憂レ此者上

○李延平栝軒詩曰、耕桑本是吾儒事、不レ免二饑寒一智者非、出處自然皆有レ據、不レ應三感念泣二牛衣一〈深洛風雅〉

○韓康字伯林覇陵人、采二藥名山一、賣二於長安市口一、不レ二レ價三十餘年、時有二女子一、從レ康買レ藥、康守レ價不レ移、女子怒曰、公是韓伯休、那乃不レ二レ價乎、康歎曰、我本欲レ避レ名、今小女子皆知レ我、何用レ藥爲、遁二入山中一〈後漢書〉

必莫嫌於賴老氏以爲生也、然朱子以爲無事之祿、本非義理所安、又以爲非[illegible]以爲祠祿爲再請、不滿人意、則亦足以見其意矣、或又問、貧乏受朋友賚給如何、曰、據孟子在其土地、則其君雖不從吾言、而周之則受、不如列禦寇之爲也、況朋友有通財之義、而交游之情亦切、豈有不受其惠者乎、但其辭受之際、不可不審者、朱子丁寧諭之、夫杜工部浣花谿草堂、賚裘冕之力也、邵康節天津橋宅、受王拱辰富鄭公之惠也、范堯夫以麥舟付石曼卿、張子與諸生共榮羨、皆救之也仁、得之也義、可謂兩得矣、程子不受韓持國黃金藥揲者、以負來訪之意也、辭呂汲公百縑者、警戒之也、朱子不納趙如愚分與俸祿者、以其可支吾也、亦足以見不傷廉之意矣、抑人將惠、而先請之、則固辭謝之可也、此不請於病者、而後饋之意也、予近有意於爲貧、因竊書鄙見、將傳之四方學者相與講焉

享保丁未十一月十三日　　天木時中識

右所引諸說、多摘其要、而不舉全文、恐讀者或有不便、因條列本說如左

膠西王聞董仲舒大儒善待之、仲舒恐久獲辠病免、及去位歸居、不問家產業、以修學著書爲事（前漢書）

○郭泰字林宗、太原界休人也、家世貧賤、早孤、毋欲使給事縣庭、林宗曰、大丈夫焉能處斗筲之役乎、遂辭、就成皋屈伯彥學、三年業畢（後漢

賤業是其常分故耳、若爲貧乏作鄙賤之事又一說、而無妨於守其常分也、范氏曰、古之聖賢未遇之時、鄙賤之事、不恥爲之、如百里奚爲人養牛、無足怪也、此可謂左驗明白矣、若醫卜、則韓伯休隱於賣藥、而其志終不在乎醫藥也、胡籍溪亦然嚴君平隱於賣卜、而其志終不在乎卜筮也、然賣藥亦不二價、其賣卜亦語忠孝、古人作小生事、亦存心於守己利人、而不苟之微意可見、耕稼則張子議古人安分、後人動心之異、黃勉齋發孔子以樊遲爲小人之意、賣買則李退溪於人買田、以舜跖之分論之、朱子於陸家作鋪、以門限內外譬喩義利之辨、身自印賣論孟精義、張南軒雖以是爲未安、勸別營生計、然朱子不肯云、別營生計、顧恐益猥下耳、至於祿仕、則於學者事固當、然昧於時義、則有後日之悔者、李退溪答奇明彥書詳說之、是亦學者所當慮也、唯講雜書者、害其學術、而壞人才也甚矣、雖至餓死、而莫之爲可也、或問、古人之乞食請祠者、無害於義否、曰、乞食者如伍子胥・孫明復・尹和靖、不自食其力、而求助於人、以甚害理、而有大志者、不必拘小節、況其人不爲終身之事、而一時經歷艱阻之間姑爲之、猶孔子微服過宋也、陶淵明得一食、冥報以相貽之言、比之三子則陋矣、司馬溫公譏韓退之與于襄陽書、求朝夕芻米僕賃之資是也、又不聽劉賢良求錢五十萬者、惡其不義也、其求於人之不可爲常法亦如此、請祠則宮觀多奉老氏、君子以衞正拒邪爲任者、似不當請之、當時事體、想是與今日所論別、王安石更新法、創爲祠祿、以待異議之人、自是士大夫有退閑之志者、請以爲常、

爲貧說

天木時中著

天下之學者夥矣、但觀之之法、視其精神之所在、義利如何耳、今志於道、而不絕意富貴、其胸中交戰、而處己不明、有主醫術而雜儒業者、有講雜書而兼經學者、是皆假名聖賢、以濟私意、同跡伊呂、以撅利心、其心術回互、固可惡矣、設使其心術無少回互、然無故因循其間、不能棄賤役、濯舊習、而專意於學、則其精神之所在、局於生業、而終不免小人懷士之譏焉、董仲舒去位歸居、不問家產業、以脩學著書爲事、郭林宗家貧、不從縣庭之役、遂就屈彥宗學、程子家貧不仕、闔門遑遑、不知所以爲生、又答人勸祿仕云、待飢餓不能出門時、當別相度、朱子云、衣食至微末事不得、未必死、又譏友仁服非法之服、享非禮之祀、以爲資身之策、古人專意於學、而不顧於外者可見、然延平李子有詩云、耕桑本是吾儒事、不免飢寒知者非、由是觀之、唯生業之務、苟患失之者、固鄙夫也、若曰區區形骸之計、不若餓死之爲潔、又一時矯激之言、不可遽爲格論矣、死生亦係學之成否、而非甚細事、敎授仰食、固衰世寒儒之所當爲也、而萬一有迫餓死、則祿仕耕稼、醫卜賣買、以接其衣食、亦無害於義、雖是躬執賤役、而其精神全在於學、則其志之尙自若也、夫聖賢以爲有大人小人之事者、特以士任公卿大夫之責、而不當留意於

有レ志之士、宜ニ矜式一焉、且其所レ期大而遠矣、將レ有下以始ニ乎爲一レ士、終ニ乎爲ニ聖人一、窮則獨善ニ其身一、達則推善ニ天下上、是非ノ實有ニ朝聞レ道夕死可矣之志一、咬ニ得菜根一以養レ身有レ爲者上弗レ能矣、如夫貧富窮達命也、君子行レ法以俟レ命、其他非レ所ニ復計一也、又讀レ此者、所レ宜レ察也、因並書ニ諸篇端一、以示ニ同志一云爾

天明三年癸卯孟夏

正三位　藤原定福書

静齋山田先生

爲貧說序

天木子豪傑哉、能憂道不憂貧、慨然以聖學爲己任、嘗悼寒士操術、或失其正、欲述往事覺來者論著秦漢以降、君子尚志爲貧之說、以成一篇、題號爲貧說、予竊讀此、嘆稱久之、敢不自量、聊嘗論之、夫道者、以中庸爲至、而士君子之所與適從也、然此篇獨取爲貧者、亦所以爲士謀、示其中行也、是故凡士法此、則能不以貧富動心、而可以養身有爲矣、盖此篇之所由述也、又尙論古之人、以覩歲寒何如、其規爲亦有如此者、高尙其事、閔天越民、不憚劬勞、而欲大有爲也、故以爲天立心、爲民立道、講學脩德、成己成物爲務、俛焉日有孶孶、斃而后已、至若貧富窮達、則其視之蔑如、雖然、其於爲貧、則躬執鄙事、不以爲辱者、乃君子時措之宜爲然、如孟子所論是也、而今如此篇所載、則又皆學之者也、其人雖或有未必中繩墨、然能淸介自守、而不爲利回、則亦爲一世高士矣、而況至于程朱、則其能時中者、復猶古之人也、故今並稱述之、以立寒士之火侯焉、此其所以示中行也、若過之者、傷於迫切而不洪、或有慼慨殺身、如齊餓者是也、不及之者、淪於汙賤而不耻、或有曲學阿世、如公孫子是也、此皆不知古人之法、而妄爲之、雖有大過不及、然失其正一也、然則此篇之功、不亦盛乎、

爲貧說

天木時中著

大正四年十月

瀧本誠一

解題終

ものと見え、編者が數種の異本に依て推察するに、江戸は勿論京・大阪地方に於ても、少しく大なる商店を有し、多數の奉公人等を使用し居る所にては、何れも之を重寶として、廣く傳寫したるものなるべし、現に編者が一見したる異本には、呉服物に關する文字は、總て之を改作して、他の多くの職工を使用しつゝある製作工場の奉公人を、訓戒する手本としたるかと思はれたるものあり、何れにしても、當時水戸の例に倣つて、之を借り用ゐたるものは、少からざりしならん、故に編者は本書の他の異本中には、往々白木屋とは、商賣違の如き文字あるに拘らず、本書の著作者は、矢張白木屋の管店(番頭)にて、原本は白木屋より出でたるものと推定して、差支なしと思惟す、因に記す、本書中に現在白木屋の本業たる呉服の事のみならず、袋物を始め、紙類・多葉粉、其外云々等の言語あるを見れば、同店が「九尺店の小間物問屋にて、煙管など多く仕込み居たり」と云へる、曳尾庵の記事時代より、漸次呉服專門の大商店と發達したる狀況を推察するに足るべし

右に付き本書の底本とせる、不分卷四册本の外に、編者が別に收藏せる、他の一本（二册本）を取て對照すれば、其れには本書五百頁九行目に、「深く敬ひ奉られべき事に候」と云ふ迄を第一册とし、其の終りに「寛政四壬子歳初秋」とあり、又其の以下を更に三篇に分ちて、各〻寛政六年・七年及八年の記入あり、全く本書を四篇に分けて、此の四年度（寛政五年は脱す）に渉りて、訓示したるものゝ如く思はるゝなり、元來本書は比較的立派の意見にして、水戸侯の云はるる如く、啻だ町人のみならず、士分の人々之を見るも、決して惡しからざる程のものにて、白木屋の番頭の手に成れるものとしては、如何あらんと疑ふ者あるべきも、其は編者の見る所にては、少しも怪しむべき廉なしと信ず、其の故は白木屋は、恰も此頃は、有名なる儒者三輪執齋先生の第二子及嫡孫が、引續き養子となりて、家名を嗣ぎ居たる時代なれば、其の番頭に斯の如き文事の嗜みありし立派の人物が居たる事は、强ち想像せられざるにあらざるべし又本書は水戸侯の注意を引きたる位にて、一時は餘程世上に持て囃されたる

如きものありて、それには慥に白木屋番頭の著作なることを記しありたり、

卽ち其の文は左の如し

天保九年戌七月十九日、水府にて御町奉行樣へ、御直書御下げ被遊候御書の內、白木屋番頭にて認め候書、町人の心得は勿論、諸士にて見候ても不惡程の書に候故、上下町（編者案ずるに水戶の上町及下町を指すならん）相應の町人共へ、爲心得遣はし、寫させ可申、御尊慮被爲在候

右の書寫（編者案ずるに、此の書寫と云ふは本書の事ならん）是は水府町人の寫置き候を、其の儘に爲寫候者也

而して此の本卽晉廟文庫本の舊藏書は、安政四丁巳四月求之、積小館主と、奧書に附記しありて、此の積小館主なる者は、如何なる人か詳かならざれども、兎に角前記水府公の添へ書は、此の人が臆斷にて、出鱈目に記したるものにあらざるは明白なり、然らば本書は、全く白木屋の番頭が、其の部下の奉公人に訓示したるものなるが如し

んや、本書獨愼俗話と、全く其の內容を同くし、唯字句の間に、多少の相違あるも、大體は同一書なることを發見したり、即ち試に其の白木屋管店書の冐頭の一節を揭ぐれば

拙者儀自幼年之節不思議の御緣を以、御店へ御目見得に罷越、誠に東西も辨ざる愚なる者を、御召遣ひ被下候に付、累代の支配役衆中を始頭役中に至迄、只々御奉公大切に相勤候樣仰下されたればこそ、少々づゝ耳にとゞまり、數年來の御厚恩を蒙り奉り候へ共、己一人の働を以成人いたし候樣に存じ、又は我賢して御役儀等も結構に被仰付候とのみ相心得、天道の御罰を恐れずして、今更恥入奉る所なり云々

とあるが如く、少しづゝ文字の增減等は之れあるも、全文略此の如くにして、全然同一書たることは、固より疑ひを容るゝの餘地なきなり、而して昔廟文庫本の白木屋管店書には、安政四年三月に、伊藤節なる人が、識したる序文あり、又其の次ぎに何人が添へ書きしたるものか、水戶藩の牛公文書の

見下し候儀在之物に付、思はずして會釋方も麁抹に相成候事も是あるべきやに候、萬事之儀我身に引請ず候ては相知れざるものに候、先銘々調物いたし候節、外方へ參り候ても餘分の買もの致候時は、鼻の程うごめかし候氣味合にて、かさだかにて無理成直切等もいたし候へ共、少分の調物いたし候節は自ら卑下致候心持にて、先方の仕向まかせに相成申物に候、然れども會釋方挨拶の善悪は歸宅之上にて批判いたす事に候、其のごとく他所より御買物に御出被下候御方迚も、御心持に何れ御替り是なきもの候へば、是非此方の取扱方とても、善悪につけ御風聽に預り申ものに候ゆへ、兎角世間之御評判宜やうに仕向差上度事に候云々

（注意）本書は遺憾ながら、前記の如く、著者不明なれども、編者が曾て大坂天滿菅廟文庫に就て、經濟書類の搜索を爲したる際、同文庫中に、白木屋管店書と題する一寫本あるを發見し、一見頗る注目に價ひするものあるが如く思ひたれば、直に社司滋岡氏に請ひ、借寫し來りて、之を熟讀すれば、豈圖ら

先づ第一に自分が不肖の身を以て、段々と主家の御恩顧に預り、遂に現在結構なる重役に擧げられたる難有き顚末を述べ、それより諄々と說き起して、奉公人一同の心得方に及ぼし、內は相互に親睦して、主家の爲めに忠勤を盡し、外は顧客に對して、粗忽無禮の言動なく、商人は商人だけの分際を守つて、只管お店大事に勤めざる可からざる事を、親切丁寧に說き諭し、或は和漢歷史上の事蹟を引き、或は聖經の言語を揭出して、聊も忠孝仁義の道に違背するなからん事を訓戒するなど、誠に能く其の旨を得たるものと云ふべし、殊に商人の心得として、最も注目すべきは、左の一言なり

商內之儀は多少を撰ざる事に候得ども、餘分の商內は自然と精も入、會釋方も氣を付候に付、取はづしも無之ものに候へども、兎角少分之商內をば麁略にいたし、身にしみ申さざるものにて候得ば、商人の第一は少分の商ひを大切にいたし候儀肝要と被存候、兎角人は差當り候所のみに目を付候ものゆへ、第一商內の少分なるを侮り、第二には御使の女中衆子供衆とのみ

世營錄

本書の題名は、何くに基きたるものなるや知らざれども、內容は主として、歷代我國に於ける天災饑飢の慘狀を述べ、同時に金銀幣制の沿革を論じ、米價の高低等を考へたるものにして、最後には重に奢侈の害等を論じ、其の論旨頗る雜駁、行文亦甚拙劣にして、往々難解の廉なきにあらざるも、事實は多少參考とするに足るべきを以て、此に之を收錄せり、著者の自序は、天明七年と記しあり、固より同年の作なるべきも、著者藤井直次郎の傳は之を知るに由なし

獨愼俗話 一名白木屋管店書

本書は何人の著作なるや、判明せざれども、或る大商店の首席番頭らしき者が、其の部下の奉公人一同に對し、店勤めの心得方を諭示したるものなり、

治國譜及治國譜考證

本書治國譜は、前記治國大本の著者朝日丹波の著す所にして、其の主意は、著者が自ら雲藩の執政たりし時に、施設したる政績の要概を記して、其の子孫に貽したるものにて、大體は治國大本に云へる意見を實行したる顚末を、略述したるものなり、之を題して治國譜としたるは、同藩の儒者桃源藏にして、其の理由及本書の性質は、同人の序文を見れば自ら明かなるべし、又考證は、同藩の郡奉行兼御勝手方なりし森文四郎なる者の著す所にして、其の主意は著者の自序に云へる如く、「時移り世變り、相公(朝日丹波を指す)の政績傳らざらん事」を恐れて、治國譜の本文に詳細なる考證を付したるものなり、本書の治國譜及其の考證の自序には、共に安永四年二月の日付あるを見れば、此の兩書は正に同時の著作なるが如し

考證の著者森文四郎は、其の傳詳ならず

著者朝日丹波、名は鄉保、雲州の人なり、家世々藩主に仕へ、上大夫となる、鄉保幼にして父の後を嗣ぎ、食邑千石を受け、長じて頻に累進して忽執政となる、其の國事に參畫するや、屢々藩主の旨に適ひ、幾何もなく食邑五百石を加增せられて、大に厚遇せらる、天明三年、年七十九にして松江の自邸に歿す、鄉保夙に經濟の術に長じ、其の藩政の局に當るに及び、主として財政の窮乏を充實し、士大夫の貧困を救濟せんことを勉め、之が爲めに拮据經營すること一二に止らざりしが、就中最も著明なるものは、大坂に於ける藩の債主に對して、債務辨償の道を立てたるが如き、又藩の祿制に於て、百石の實收四十五石なりしもの、段々減殺して、實際僅三十石に過ぎさりしを、改めて舊制に復し、闔藩之が爲めに、愁眉を開くに至りたるが如きは、皆其の重もなるものなり

本書は舊出雲藩主松平伯爵家の所藏本を、特に借寫して此に收錄せり

全く別本の如くにして、現に農務局纂訂の農事參考書及解題などには「農喩」と合考して、大に感情ありと記しあれども、此の「農民懲誡篇」なるものは、編者の收藏本(寫本)に就て見れば、全く本書即ち「農喩」を其の儘竊み取つて、此所彼所少しづゝ、文字を改作し、而かも極めて悪文に改作したるものに過ぎざるが如し、知らず編者の收藏本と異なりたる「農民懲誡篇」なるものが、尙他に存在するものなるや

治國大本

本書は著者が出雲藩の執政たりし實驗に徴して、治國の大本は、金銀米穀を府庫に充實するに在つて存することを證明し、不貸不借の政策を取り、以て府庫の財を守らざる可からざるの要を述べたるものなり、片々たる短篇なれども、下記の治國譜及同考證と併せ見て、大に參考に資するに足るものあらん

本書は目次の如く、總て十項に分類して、饑饉の恐るべき事、及び之に對する平生の心掛け等を、親切に記述して、大に警戒したるものなり、中に天明の饑饉の後に、高山彦九郎が、奥州へ赴き、或る山間の人家に入つて、餓死者慘狀を目擊したる實話を揭げ、又伊豫松山の正山と云ふ老僧が、享保年度の饑饉の折、或る處に、衣類其の他腰の物に至るまで、善美を盡したる一人の紳士が、餓死して居たるを發見し、能く〳〵見屆くれば、其の人は大枚百兩の大金を、首に掛けたるまゝ、數日一飯を求め得ずして悲慘の最後を遂げたる顚末を、彼の老僧が親しく實見し來りたりとて、著者に話したる昔物語などを記したるは、中々面白き事實なり、著者鈴木武助の小傳は本書の序文に就て見るべし

本書は文政八年に、水戶の人、秋山盛恭なる人が、曩に文化八年に、長坂某氏が出板したる原本に依り、再板したるものを、底本としたるなり、又本書には「農民懲誡篇」と題する疑似本あり、著者は小宮次郎右衞門と署名しあつて、

及ばざる所なり、本書田制沿革總論中に、武家專橫にして、租庸調の舊制を破壞し、隨て王室の式微を來し、上下の困窮を招きたる慘狀を述ぶるが如きは、實に志士仁人をして、再讀に堪へざらしむるものなきにあらず

國郡管轄考は、本朝中古以後の國郡管轄の沿革を述べ、朝權武門に移りたる來歷を論じ、守護地頭職の職務を說き、其れより地頭・總地頭・探題・代官・莊司・大名小名・家ノ子・若黨・中間等に至る諸職に付き、各細かに其の性質を解釋したるものにして、大に初學の參考に資するに足るべし、本書は著者の鄕人中村中倧の問に應じて、執筆したるものにして、文化九年の作に係る

著者名は常富、字は伯有、葛山は其の號、信州高遠藩の人にして、藩主內藤侯の爲めに大に重用せられ、郡代等諸職を經て、遂に側用人兼侍讀となる、文化九年、江戶の藩邸に歿す、年僅に四十

農　喩

くは赤子壓殺の悪弊あることを痛嘆し、其の結果、人口衰退して、古田畑の日に益〻荒廢することを述べて、此等の悪弊を一掃するの急務を說きたるものなり、文中大和に於ける三封疆の說、及淺艸眞乳山の解、幷に民を貯と稱する說明の如きは、著者得意の發見說なるべきも、殆ど滑稽に類するの感なきにあらず

田制沿革考 及國郡管轄考

本書は上古田制之事・上古田租の事・上古租庸調の差ありし事・公田私田の差ありし事・良家奴婢の差ありし事・鄉里庄園の事・町錢石の差別の事・近代田制租賦の事・當代田制租賦の事・田制沿革總論の事の十項に分けて、本朝の田制を、支那の其れに對照して、最も詳に論述したるものなり、著者星野葛山は、學問該博にして、和漢の史書・軍法・律令等、悉く通曉せざるなく、就中經濟に長じ、田制租賦の事に至りては、著者の最も得意とする所にして、尋常儒者の遠く

のあらざるが如し、且く記して識者の示教を仰ぐ

經國本義

本書は前記井田附言の著者、三木廣隆、之を口授して、門人山田勝理なる者に筆記せしめたるものなり、先づ最初に「撿見法」の根本的主意を明にして、其の定免に勝る所以を述べ、例の如く牽強附會の故實を說明して、結局百姓は活さず殺さずと云ふ古諺を引證して、租稅の輕重、其の宜しきに適せざる可からざる事を論じ、次ぎには「葭畑・栩畑・萩畑等の租法」を記して、終りに江戶町方には、七分金なる上納金あるも、京・大坂・奈良・堺・伏見其の外諸國城下の町人は、夫の明智光秀が京・大津の地子を免除せし以來の政策を踏襲して、無地子なる事を非なりとし、相當の課稅を爲すべしと述べ、其れより「諸夫役割合之法」を論じ、最後に「移民勸農之法」と稱する項目の下に於て、各地人口の配當の均平ならざる可からざる事を論じ、且關東諸國に於て往々墮胎、若

の價値なしと云ふ可からず、乃ち此に收めて參考に資す

著者三木量平、名は廣隆、甲斐の人なり、吉田門下の神道學者にして、文化文政年間に生存し、日本の田制に通曉するを以て知らるゝ者なり、今其傳詳ならずと雖も、大略の行狀は、本書の末文に掲げある事歷に依て、自ら明なるべし

(注意) 本書の題名「井田附言」とあるを見れば、本書は別に他に何等かの著作ありて、之に添付せるものなるが如し、現に本書三百四十一頁阡陌溝洫を述べたる所に「精は傳と圖解とに明也」とあり、又末文に大和葛下郡大田村に於て「遂田圖」を作れることを述べあるが如き事實に徵すれば、本書は、全く單行の著作にあらずして、他の傳とか圖とか云へるものゝ附言なる事は、自ら明白ならん、然れども本書の最終に於ては、「其の傳たるや三代聖王之秘法、本朝天皇之神秘成を以て故に附言に載せず」と云つて、此の附言より、所謂傳(秘傳の意か)なるものを、除外したりとせば、更に外に完書として、存在するも

日本の中井竹山・履軒兄弟を評して、盲蛇物を怖れざるの徒なりと嘲笑し、遂に賀茂眞淵・本居宣長などを引き出して、古を知らず、今を解せず、徒らに附會の説を唱へて、世人の耳目を迷はし、其の餘殃千歳の後に及ぶと痛斥せり、然れども著者の論ずる所、果して其の正鵠を得たるや否、編者は大に之を疑はざるを得ず、著者が日本の井田法は、神武天皇の經劃せられし所にして、其の遺制、今猶大和に現存すと云ひ、又其の時に天皇の用ゐ給へるは、夏尺なりしと云ひ、又弘仁中に至り、李唐に倣つて、遂に天皇の古法を失へるなりと云ふが如きは、其の事實、果して如何なるべきか、吾人の固より知る能はざる所なりと雖も、此等の史實を證するが爲め、日本紀の本文を引き、之を隱語なりとて、冗長に其の解釋を試み（本書にあり）眞淵・宣長の輩、國學を唱へながら、之を知らずと云ふに至りては、著者の説も、亦却て甚しき附會にあらざる歟、所謂國學なるもの丶素養に乏しき編者は、本書を讀んで、殆んど絶倒に禁へざるの感なきにあらざるも、是れ又一の奇説として、熟讀

に附記して、其の好意を謝す

井田附言

本書は德川時代に有りふれたる漢儒の井田論とは、大に其の撰を異にし、頗る奇怪の說多くして、一々信ずるに足らざるべしと雖も、亦全く一概に排斥すべきにあらず、廣く諸說の異同を參考し、周く事實の有無を搜索せんとする者は、固より一讀せざる可からざるものなり、著者は先づ初めに、自ら東漢の僞作とせる王制を引き、日本に傳來すると云へる夏尺・漢尺等を以て、尺寸畝步の異同を述べて、漢儒の說の悉く附會にして、取るに足らざる事を說破し、結局三代の田法を知りたる者は、孟子の外に之れなしと斷じ、大體は孟子の說を紹述するもの丶如し、而して著者は唯だ漢儒の說を排擊するのみならず、近くは淸人王士禎が、漢の銅尺と、司馬文正の布帛尺とを得て、發明したりと云ふ、得意の說を罵倒して、右の二尺を贋物ならんと推斷し、又

は其の自序に於て、曾て自ら和漢の兵制を取調べたる事あり、其の折に取調の要領を、備忘の爲め片紙に記し置きたるものを材料として、本書を著作したるが如く云へるも、本書中には、殆ど全く日本の事實を引證說明したる形跡なく、僅に「六鄕每家人數幷賦役」と題する項下の細注に「皇國近世戰國以來の兵賦、此に本けり、別に詳に論レ之」の數言を付しありて、本書に於ては、全然日本の事實に論及せず、儒者の井田論の通弊を襲蹈して、單に一編の空談議に過ぎざるが如し

著者平榮實は、何處の人なるや詳ならず、本書の自序中、「命二侍臣一」云々の語あるを見れば、其の貴人たること固より明白なりとす、而して當時貴人中に斯る學識ある者は、其の數甚だ多からざるべければ、其の何人なるや、直に判明すべき筈なるに、編者の淺學なる、未だ之を判明すること能はざるは、甚遺憾とする所なり

本書の原本は、嘗て文學士遠藤左々喜氏が、編者に寄贈せられし所なり、此

なり、片々たる短篇に過ぎざるも、其の說く所、概ね切實にして、前記富强六略と併せ見て、著者の誠心のある所を洞察するに足らん

徹法考

本書は主として周の田法及兵賦の說を考證したるものなれども、夏・殷の田法、即ち貢・助の二法をも併せ研究して、餘蘊を遺さず、此の種の著作中、最も詳細なるもの丶一なり、夏后氏の田法を貢法と云ひ、殷人の田法を助法と云ひ、周室の田法を徹法といふ、徹とは通徹の意にて、周の世には、國中を都鄙鄉遂に分けて、都鄙の都に遠き所には、殷の助法を用ゐ、鄉遂の都に近き所には、夏の貢法を用ゐ、二代の法を通用したる故に、之を徹法と稱す、本書は則ち此の徹法を「王畿幷九服」以下總て三十三項に分ちて、最も詳に論述し、殊に附圖一卷を添へて、本文と一々對照する事を得せしめたるは、此の複雜なる問題を研究するに於て、非常に便利なりと云ふべし、只恨むらくは著者

曰く「桔槹咿軋稻粱新、日々江村曝〻背人、贏〻得淸時徭役少〻、莫〻將〻農事〻談〻酸辛〻」翠軒此の詩を評して、「勸農之吏宜〻書〻此詩數百篇〻貼〻民間屋壁〻」と、以て著者の腐儒にあらざるを知るべし

文體に依れば、本書は藩侯へ上りたる建言なるが如し

籠田の水

本書も亦藩主へ上りたる意見書なり、主意は藩政の局に當る者が、財政の匱乏を救はんとて、頻に商人に依賴するの不可なることを論じ、商人は融通をきかし、帳面の上には立派にヤッテのける樣に見ゆるも、上の御勝手向は、一向に直らず、下は年々益〻困窮に陷るは、節儉を守り、長久の制度を立てざるに歸因するものにして、斯くては限ある國用を以て、限なき人欲に徇ふの類にて、金山・銅山・水運の利、いかほど成就すとも、所謂籠田に水を入るゝが如く、上下の困窮は、決して直らずと云ふことを、痛切に苦諫したるもの

みならず、國君の藏入も、亦隨て減少することを免かれざるに至る、今著者は之を患ひ、此等の惡弊を矯正するの一手段として、斷然從來の檢見法を改めて、定免にせんことを主張したるが如きは、就中最も見るべきの説なり、其の他遊民の增殖を惡み、商人の數の尠からん事を望み、僧侶・禰宜・山伏・博徒の類を退治し、勸農の實を擧げんことを企圖し、又郡奉行の手代過多にして、種々の弊害を生ずることを述べ、彼等が都下に居住して、村方に役所をも構へず、隨て庄屋・組頭共の往來に、無用の失費を要するのみならず、之が爲め事務の澁滯を來すの患あることを痛論したるが如きは、又一讀の價値あるものなり

著者高野昌碩、一の名は世龍、通稱は文助(一に丈助とあり)水戶の人にして吏務に通じ、詩を善くす、小宮山楓軒・立原翠軒等と交りて、頗る令聞あれども、其の傳詳ならず、(牧民の職にありし事は、下記「籠田の水」の自序に見ゆ)翠軒の編輯せる諸子雜稿なるものに、其の詩數首を載す、中に農事忙あり、

富強六略

本書は節儉・開荒・禁遊・省役・育子・愼終の六項目に就きて、著者の意見を述べたるものなり、玆に略と云ふは、簡略省略の略にあらず、通志二十略の如く、策略政略等の意義に於ける略にして、取も直さず、著者の論策を記したるものに外ならず、而して其の論議する所、頗る痛切にして、吾人の參考に資すべきもの甚尠しと爲さず、元來德川時代に於ては、例の檢見法の通弊として、豐饒なる上等の田地は、其の負擔過重なるが爲めに、斯る上田の所有者は、之を辛苦耕作しても、一向の利得なく、隨て其の所有者は、皆爭つて之を貧民に讓與し、甚しきは只遣ると云つても、更に貰ひ手なく、遂に止むを得ず、若干の金子を添へて、强ひて貧民に受取つて貰ふと云ふの奇觀を呈すること、各地往々目擊する所なりしが、著者の在所、水戶地方に在りては、此の弊殊に最も甚しくして、之が爲め可惜上田は盡く荒地となり、啻だ百姓の難儀の

常に忘る可からざるの言なり
本書の著者は詳ならず、諸家著述目錄には、山田慥齋の著作となしあるも、本書原本の奧書には、慥齋校字と附記しあつて、(此の附記の文字は本叢書印刷の際之を誤脫せり)此の人の著作にもあらざるが如く見えたり、且その原書の表題は、慥齋叢書とあり、如何にも他人の著作を慥齋が校正して、己れの叢書に、收載出板したらしく思はるれども、或は又自己の著作なるを、忌み憚る所あつて、故らに斯く曖昧にしたるもるなるやも知る可からず、山田慥齋、名は聯、字は思叔、通稱は綱三郎と云ひ、京都の儒者にして、(爲貧說の序文を撰みたる靜齋の子なり)文化頃に生存し居たる人にて、其の著書には、經世叢論など云へるものもあり、當時所謂經濟有用の學に志したる者なれば、或は此人の自著にあらずとも、斷言すること能はざるなり、姑く記して後證を待つ

本書は岡崎侯へ上りたるものゝ由なるが、大體の主意は、正德・利用・厚生の三事を說き、間、禮記・尙書などを引きて、國君の天職等を說明したるものなり、終りに漢文にて、己を知り人を知るは、治國の要道たる事を附記せり

經濟隨筆

本書の主意は、精里の說と同じく、經濟の成否は、君主が其の志を立つと、立てざるとに在ることより說き起して、經濟上種々の心得べきことを、談片的に書き集めたるものにて、中には往々注意すべき點なきにあらず、曰く、財は天下公共の物なり、富む者一人私せんと欲するも得べきにあらず、曰く、財を通ずるの大道は、人を倒すことを嗜まずとの一言なり、曰く、新田開發に心付く人は、其の地が田に成るか、成らぬかと云ふ事ばかり謀て、他の害に心付く事淺き也、爰に欲する事あれば、心片寄て他の事は見え難し、鹿を逐ふ獵師は山を見ずと云へる諺の如しなど、皆尋常平凡の語なれども、亦

濟の事・互市の事等、少しづゝ散見するのみ、偶語は間大に取るべきの文字あり、「經濟之本在於立志、志未立則事物搖奪、而事不成矣、志者何、一實而已矣……崇節儉去奢華、生於心發於政者、皆欲無一毫之不實」云々と云ふが如きは、實に經濟の大本と云ふべし

本書は內閣文庫に收めある精里全書中より借寫したるものなり

詢芻邇言

著者古屋昦は肥後熊本の人なり、通稱は十二郎、公欵と字し、昔陽又柴溟と號す、鼎(愛日齋と號す)の弟なり、江戸に住して、儒學を修め、學術言行、並び大に稱せられしも、世儒の浮華を惡みて、濫に著述を公にして、其の名を衒はざりし故、世上之を知る者鮮し、文化三年歿す、年七十二、著書は本書の外に、古今學變考六卷・祭禮通考一卷・稷饋儀略一卷・答問錄一卷・紫陽漫筆數卷、其他詩文稿數卷あり

の到るや、奥羽の某地方などは、羽書往來、驛傳旁午、織るが如くにして、甚しきは一夕に使者五十回の多きに及び、之が爲め沿道の下民は、其の都度、驅使に疲れて、力を本業に專にすること能はず、田疇荒棄、滿目蒼然たるの慘狀を呈じたる事を記するが如きは、經濟史上の好資料なり

本書は何年代の作なるや、詳ならざれども、按ふに文化年間、露人北邊に來寇したる頃に執筆したるものならん、而して本書は、題して封事とあるも、果して當時幕府へ呈じたるものなるや明ならず、又或る解題書には、本書を古賀煜(侗庵と云ふ、精里の子なり)の著作とせり、恐らくは誤りならん

經濟文錄　附軟莎偶語

本書は經濟文錄と、軟莎偶語との二編を合したるものにして、末文に著者の嗣子煜(侗庵)の附記ありて、本書の由來を述べたり、文錄は其の名稱經濟の二字を冠するも、矢張今の經濟說として見るべきものなし、唯〻處々に小民救

跋文は其の儘此に附載せり

極論時事封事

本書も亦前記十事解の如く、時事に關する論策を十項目に分けて、極論したるものにて、其の內容は專北虜、即ち露西亞の侵略に備ふるの必要を述べたるなり、而して中には當時の意見としては、大に聞くべきの卓說あり、例へば從來我國の武士は、主として刀槍弓馬を重んじ、火器即ち大小銃砲の如きは、之を度外視し、皆步吏下士の職として、顧みざるの弊あることを慨嘆し、今後進士を取るには、宜しく火術の精粗を以てすべしと云ふが如き、又造船の術を勵まして、大船艦を製造するの急務を說き、其れには蘭人を誘致して、其の製法を取るべしと論じたるが如きは、先見の明ありと云ふべし、但し本書は直接經濟說に觸るゝ點は、(第六)「省冗員以贍國用」と、(第七)「愛百姓以絕怨萠」の二項に過ぎざるも、其の記事中一二甚面白き事實あり、一時北警

福井小車(宋學派)の門に入り、後ち西依成齋に師事して、崎門學派の流を汲み、又去つて大坂に赴き、當時の大儒、尾藤二洲・賴春水等と交を訂し、相與に切磋講究して、大に得る所あり、遂に全く舊學を舍てゝ、專朱學に歸し、名聲頗る揚る、藩侯之を聞き、召して國に還へし、俄に拔擢して、機務に參與せしめ、事大小となく、悉く之に諮らざるなし、精里其の知遇に感じ、胸襟を披き、誠信を竭して參劃し、歲儉にして民饑ゑんとすれば、則ち直に上言して、之を賑恤するの策を施すが如き事あり、上下共に信任尊重したりと云ふ、寬政三年、幕府の召に應じて、昌平校の儒員となり、栗山・二洲二人と力を戮せて、學政を振飭し、朱學鼓吹の三大家を以て稱せらるゝに至る、文化十四年、六十八(諸家著述目錄は六十一とせり)にして歿す、遺著少からざるも、世上に板行するものは、精里初・二・三集十卷、其の他經書の注釋本數卷あるのみ、精里全書二十卷、其の他多くは皆寫本にて傳はる

本書は藤森弘庵の出板せる、如不及齋叢書本を以て底本とせり、故に弘庵の

著す所甚多からず、本書の外には、國鑑二十卷・雜字類編七卷・栗山堂文集三卷・同詩集四卷、其の他二三部あるのみ

十事解

本書は程子の十事略に倣ひ、師傅・六官・經界・鄕黨・貢士・兵役・民食・四民・山澤・分數の十目に就きて、當世の事務を論述したるものにて、中には今日の所謂經濟には、何等の關係を有せざるが如き事柄あるも、貧農には漸次に田地を持たすの必要を說き、貯蓄を勸め、奢侈を戒め、山林の濫伐を非とし、新田の開發の不利なる事を說き、最後に分數と稱する項目には、四民それ〴〵皆其の地位に相當の差格を定め、其の格を目當として、嚴重に節儉を行はざる可からざる事を論じたるなどは、兎に角著者が經濟說の一斑を見るに足るものなり

著者古賀樸、字は淳風、精里と號す、佐賀藩の人なり、壯歲京師に出でゝ、

著者柴野邦彥、通稱は彥輔、栗山又古愚軒と號す、讃州高松の人なり、初め後藤芝山に從て學び、後ち東遊して昌平校に入り、業を中村蘭林に受く、學成りて數年、阿波侯の儒員となる、天明八年、幕府學政を改革し、百度維れ新なるも、學官其の人を得ず、風教頽敗し、儒學亦振はざりしかば、乃ち栗山を召して、奉朝請儒員となし、岡田寒泉等と與に大に改新の實を擧げしめ、都下の學風此に於てか大に振ふ、蓋栗山の學造詣頗る深しと雖も、專朱子學に心醉し、加ふるに人と爲り狹隘にして、博く異說を容るゝの度量なくして、一時學界の物議を招きたるも、儒學復興の業與りて大に力ありと云ふべし、當時幕府の執政等、皆栗山を尊重して、時々政事上の問題に付きても、諮詢する所あり、栗山亦其の言の容れらるゝを喜び、常に謂て曰く、「四十年來讀書の功、此の時に施さゞれば、更に何れの時を待んや」と、依て屢〻書疏を上りて、時事を論陳せりと云ふ、想ふに本書は其の時に上りしものゝ一なるべし、栗山は元文元年、高松に生れ、文化四年、江戸駿臺の自邸に歿す、年七十二、

本書は著者が幕府へ上りたる意見書にして、初めに政道の要は、恩威並び行はれざる可からざることを論じて、民に仁政を施すの必要を述べ、是迄下情上に達せず、儘〻悪弊の行はれたる事實を擧げて之を警戒し、且農民の寔に憐むべき狀態を詳述して「農人と申す物は、殊の外せつなき物にて、人のいやがり申候物にて御座候故、上より隨分緩く御あしらひ被成、農人安樂に御座候樣、御政道無御座候ては、萬民農を樂み不申」云々と曰つて、當局の慈悲心に訴へ、其れより譜代大名と、旗本の貧乏を說き及ぼして、斯くては萬一有事の際に於ては、何等の用にも立たざるべきを痛論し、次ぎに又大名の貧乏は(第一)彼等が甚しき奢侈に流るゝ事(第二)米直段の下直なる事(第三)國替の屢〻なる事(第四)賄賂受授の盛なる事(第五)大勢の供を召連れる事の五個條に原因するものなりと斷言し、一々面白き事實を例證して、大に當局の注意を促したるなど、就中最も見るべきの要點なり、但し本書は何時の頃、奉呈したるものなるや、詳ならざれども、多分寛政年間頃の事なるべしと云へり

し、之を我家土中の石函中に獲たりと稱して、畧其の懷抱を洩らす、寶曆十二年、江戶八丁堀に卜居し、帷を下して兵書を講ず、諸侯其の名を聞き、幣を厚くして之を徵せんとする者多し、時に京師の人藤井直明・竹內式部等、昌貞の門に出入して、相與に兵學を講じ、時事を論ず、談偶幕府の嫌疑に觸る所あり、遂に羅織せられて、死刑に處せらる、時に年四十三、明和四年八月二十一日なり

（注意）本書の本文中にある「評曰」の細注は、松宮觀山（名は俊仍）の評語なり、此の評語は原本には觀山の跋文に云へる如く、頭書となしあるも、印刷の便宜の爲め、止むことを得ず、本文中へ挿入して、原本の眞面目を改めたるは、編者の遺憾とする所なり

本書の校正は總て宮崎幸麿氏收藏の原本に據る

栗山上書

の俗を興すの必要を述べ、安民は法令常なく、賞罰中らざるの弊を除き、四民をして各〻其の業に安ぜしめざれば、富强の期圖し難きことを明にし、守業は人々各〻其の父祖の遺業を守り、末を逐ひ利に走るの不可なることを詳にし、通貨は農事を勸めて食を足し、物價を平かにして貨を通ずるの策を講じ、利害は天下の利を興し、その害を除くの要を述べ、富强は「食足謂二之富一、兵足謂之强、富且强者、天下之利也」と云ふ事を、詳論したるものなれども、其の分類、往々明晰ならずして、彼此混同を免かれざる所あり、然れども著者は兵學者にして、慷慨氣節を尊び、議論動もすれば常軌を逸して、人の意表に出づる所なきにあらず、是寧著者の本色を暴露するものと云ふべし

山縣昌貞は通稱大貳、字は士明、柳莊と號す、甲斐の人なり、少時加々美櫻塢（三宅重固の門人にて名は光章、別に霞沼と號す、甲府の人なり）に從つて、儒學を修む、天資穎敏にして博識該通、和漢諸子百家の學、概ね渉獵せざるなし、常に王室の式微を嘆じ、慨然として復古の志を抱き、嘗て竊に本書を著

白川郷に類似の遺制の存することを聞き、著者誤つて陸奥の白河と思ひ違ひたるにはあらざるか、姑く記して博識の是正を待つ

柳子新論

本書は正名・得一・人文・大體・文武・天民・編民・勸士・安民・守業・通貨・利害・富強の十三篇を、前記今書の如く、漢文にて最も痛切に論述したるものなり、正名は字のごとく、名を正くして、大義名分の紊る可からざるを論じ、得一は「天無二二日一、民無二二王一、忠臣不レ事二二君一、烈女不レ更二二夫一」等の義を明にして、一を得るの要を述べ、人文は禮制の正さゞる可からざるを云ひ、大體は爲政の要は、大本に着眼するに在ることを論じ、文武は双び立つて、偏廢すべからざる事を說き、天民は士農工商を云ひ、此の四ッの者は、各〻其の天職を奉じて、天下の用を濟さゞる可からざるを論じ、編民は戶籍を明にし、編伍の法を設けて、流浪の取締を爲さゞる可からざるを說き、勸士は士風を振作して、忠信廉恥

到らざる所なきに至りしを痛嘆し、(革幣)又天下の諸侯が奢侈に長じ、浮華に流れて、倉廩皆空乏を免れざるは、其の原因、江戸參勤の弊に外ならざることを斷言し、(同上)續きて經界正しからず、租税平ならず、賦益〻厚く、役益〻重くして、百姓之に堪へざるの狀を述べ、(賦役)且北條五代記の誤を指摘して、豐臣氏の政は、百姓の爲めに、却て大に寬仁なりし事實を擧げて、暗に大に當代を非議し、(同上)又守護地頭の驕戾橫暴を論じて、後三條及後醍醐兩帝の壯圖の行はれざりしを憤慨し、(同上)又物品交換の利を說きて、財貨(金銀貨を指す)の多き、商賈の盛なるは、必しも喜ぶべきことにあらざることを詳述したるが如きは、(金穀殊に一讀の價値あるものなり、其の他所々注目すべき警句あり、例へば「每軍興爲辭而增賦者、及兵休遂不爲除去」と云つて、戰時税の繼續を罵るなどは、恰も百年前に於て今日の事を豫言せるが如し、但本書賦役の篇中「六年班田之遺制、今猶在陸奥白河郡村落間」云々とあるも、陸奥の白河に班田の遺制ありとは、編者の聞き及ばざる所なり、或は飛驒の

招き見れば、何ぞ圖らん君平なり、乃ち大に驚きて、其の故を問へば、唯々曰く、生計に窮するのみと、於此兩人臂を把て舊を話し、遂に談笑夜を徹して去る、又曾て一僧あり、君平を訪ふ、君平柱に倚て愁然たり、僧之を問へば曰く、朝來一粒の米なし、終日未だ食せずと、僧之を聞き、直ちに出でゝ、米菜を購ひ歸て君平に與ふ、君平之を炊ぎつゝ、談外患の事に及び、議論風發、遂に飯の焦るを知らざりきと云ふ、蓋君平の如きは、實に前記爲貧說中の人物なる歟、爲貧說、程子の言を引き、「待飢餓不能出門時、當別相度」と君平柱に依つて愁然たるの時、此の僥倖なかりせば、果して何の妙計ありしぞ、爲貧說を辯護する者、思はざる可からざるなり

本書は賈誼の新書に擬して作りたるものならん、全篇を革幣・賦役・金穀・姓族・名勢・祀政及政教の七篇に分け、一々國史に據つて、如上の題目を痛論し、就中初めの三篇に於ては、王朝の官制・制度の頹廢し、租庸調三法の紊れたるを說き、其れより遂に群雄割據して、衆は寡を暴し、强は弱を凌ぎ、亂虐無道

今書

本書は蒲生君平の著す所なり、君平名は秀實、字は夷吾、通稱は伊三郎、修靜庵と號す、下野の人なり、本と福田氏なりしも、其の祖蒲生氏鄉の後裔なるを以て、自ら改めて蒲生とせり、君平少くして學を好み、江戸に出で、山本北山の門に入り、刻苦書を讀むと雖も、而かも章句の末に齷齪たらず、常に慨然として、經世の志を抱き、壯年四方に周游し、足跡殆ど天下に遍しと云ふ、明和五年生れ、文化十年七月七日、江戸の寓居に歿す、年四十六、君平は平生忠孝の志に厚く、高山彥九郎・林子平等と並び稱せられて、奇行多きは世人の知る所なり、然れども其の學殖、頗る該博切實を極め、徒らに慷慨自ら任じて、大言壯語する者にあらざる事は、本書を始め職官志・山陵志及不恤緯等の著書を閱讀すれば、自ら瞭然たらん、君平江戸に在る日、貧甚しくして、按摩を業とす、一夜笛を鳴らして、舊知宮本某の門前を過ぐ、某之を

て讀書を好み、夙に闇齋學派三傑の一人なる三宅重固の門（崎門學派系譜に據る、然れども他書には佐藤直方門とせり）に入つて儒學を修め、後ち勢州増山侯に仕へ、居ること五年、遂に辭して京師に至り、帷を下して生徒に教授し、元文元年、年四十（崎門學派系譜には四十一とす）にして歿す、時中人と爲り、朴實にして浮華を嫌ひ、剛直にして節義を重んじ、其の人に接する、親切溫厚にして誠を盡し、其の學に於ける、精勤倦まず、殆ど寢食を忘るゝに至れりといふ、著者の學問に忠實なるは、本書を一讀する者の必首肯する所ならん

本書は享保十三年に成れるものなれども、其の後五十餘年を經、天明三年に至り、始めて山田靜齋の序文を附して、之を出板したるものなり、亦頗る珍とするに足る、刊本寫本ともに、流布極めて稀なり

（注意）諸家著述目錄には、三宅重固の著述中にも、同名の書を記しあり、是恐らくは誤なるべし

解題

爲貧說

本書は士君子たる者は、平生志を高尚にし、貧富を以て、其の心を動す可からざることを論じ、山田靜齋の序文に曰へる如く、「以爲天立心、爲民立道、講學修德、成己成物爲務、俛焉日有孳々、斃而後已、至若貧富窮達、則其視之蔑如」と云ふの主意を漢の董仲舒以下諸大儒の所說を引證して、詳に說明したるものにして、其の說、固より經濟の學理に背馳するの甚しきものなれども、斯くの如き思想は、偏狹なる朱子學派中に、一般に行はれたる最も有力の學說にして、本書は實に此の學說を皷吹する代表的の著作なり、依つて參考の爲め、玆に之を收載せり

著者天木時中は、通稱善六と云ふ、尾張の人なり、(一說には唐津の人)幼にし

目次終

日本經濟叢書卷十七目次

日本經濟叢書

卷十七

日本經濟叢書刊行會